鹿児島県

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（198）

下原遺跡

二〇一九年三月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（198）

主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

下原（しもはら）遺跡

（志布志市有明町）

２０１９年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



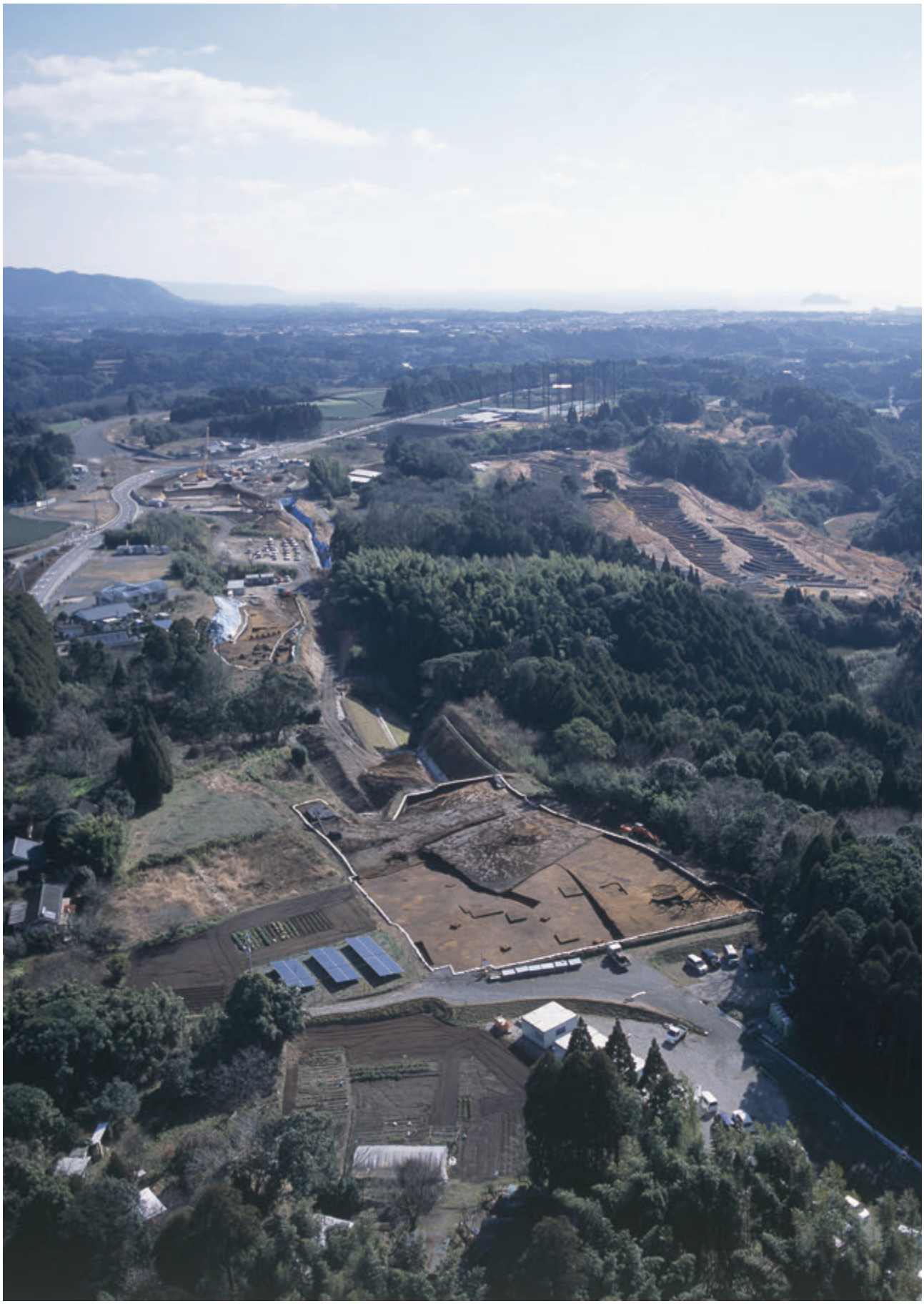


① 集合・巻頭





② 集合・巻頭





③　集合・巻頭

序　　文

この報告書は，主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築事業に伴って，平成 24 年度から平成 27 年度に実施した，志布志市有明町伊﨑田に所在する下原遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は，３地点に区分される調査区からなり，旧石器時代から近代までの幅広い時期の遺構・遺物が確認されました。

特に縄文時代早期・後期では竪穴住居跡と集石・土坑，弥生時代は竪穴住居跡と高床式建物跡など生活の痕跡を示す遺構が検出され，これに伴う多様な遺物が出土しました。

また，近世・近代の包含層からは道路状遺構，溝状遺構，帯状硬化面などに加えて，地域で「フィケド」と呼ばれ，使用の記憶が語られる古道の痕跡も確認されました。

このように，旧石器時代から現代に至るまで，当地域において人々の生活が綿々と営まれてきたことがわかりました。

本報告書は，県民をはじめ多くの方々に御覧いただき，地域に所在する埋蔵文化財の持つ多様な価値を御理解いただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にあたり御協力をいただいた県土木部道路建設課，志布志市教育委員会，並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成 31 年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　堂 込 秀 人

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもはらいせき（しもはらいせきちょうさくいち・しもはらいせきちょうさくに・しもはらいせきちょうさくさん）
書名	下原遺跡（下原遺跡調査区１・下原遺跡調査区２・下原遺跡調査区３）
副書名	主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	198
編集者名	池田　裕一郎　　山崎　克之
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　　TEL 0995-48-5811
発行年月日	2019年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	調査面積 (㎡)	発掘起因
しもはらいせきちょうさく 下原遺跡調査区１	鹿児島県 志布志市 有明町 伊崎田	46221	508	31° 30′ 26″	131° 02′ 34″	2012.4.23 ～ 2013.2.26 2013.10.7 ～ 2014.2.26 2014.9.8 ～ 2015.2.25 2015.5.7 ～ 2015.8.7	21,200	「主要地方道」志布志福山道路線道路改築に伴う記録保存調査
しもはらいせきちょうさく 下原遺跡調査区２	〃		508	31° 31′ 39″	131° 03′ 19″	2015.8.10 ～ 2016.3.25	6,800	
しもはらいせきちょうさく 下原遺跡調査区３	〃		508	31° 31′ 15″	131° 04′ 11″	2014.1.9 ～ 2014.3.26 2015.10.19 ～ 2016.3.18	3,340	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下原遺跡調査区１	散布地	旧石器時代	礫群３基	細石刃核，細石刃，スクレイパー，剥片	調査区の北側に遺構と遺物が集中して出土した。
	散布地	縄文時代早期	竪穴住居跡３軒 土坑９基 集石17基 埋設土器遺構１基	前平式土器，加栗山式土器，吉田式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，苦浜式土器，打製石鏃，打製石斧，磨石，敲石，石皿	
	散布地	縄文時代前期 縄文時代中期		曽畑式土器， 凹線文土器	
	散布地	縄文時代後・晩期		中岳Ⅱ式土器 精製・粗製土器，打製石鏃，打製石斧，磨石，敲石，石皿	
	散布地	弥生時代	掘立柱建物跡２軒	早期・前期土器，山ノ口式土器	
	散布地	近世・近代	道路状遺構13条，道跡１条，溝状遺構４条，帯状硬化面１条	薩摩焼・陶磁器類	
下原遺跡調査区２	散布地	縄文時代早期	集石17基 土器集中	前平式土器，吉田式土器，倉園Ｂ式土器，押型文土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，貝殻条痕文土器，打製石鏃，磨製石鏃，打製石斧，磨製石斧，磨石，敲石	縄文時代後期の竪穴住居跡２軒と弥生時代の竪穴住居跡を３軒検出した。
	散布地	縄文時代後・晩期	竪穴住居跡２軒 埋設土器遺構２基 集石・土坑１基 溝状遺構７条，硬化面１面	中岳Ⅱ式土器，入佐式，黒川式，突帯文土器，打製石鏃，打製石斧，磨石，敲石，石刀 刻目突帯文土器，山ノ口式土器，磨製石鏃，磨製石斧，磨石，砥石	
	散布地	弥生時代	竪穴住居跡３軒	早期・前期土器，山ノ口式土器	
下原遺跡調査区３	散布地	縄文時代早期	集石３基，ピット９基	吉田式土器，倉園Ｂ式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，塞ノ神Ａ式，貝殻条痕文土器，打製石鏃，磨石，敲石	高床式建物跡を構成すると考えられるピットを４基検出した。
	散布地	縄文時代前期		野久尾式土器	
	散布地	縄文時代後・晩期	溝状遺構２条，土坑２基 土器集中域，炭化物集中域	中岳Ⅱ式土器，晩期土器，石鏃，打製石斧，磨石，敲石	
	散布地	弥生時代	竪穴住居跡２軒 高床式建物跡１軒 ピット２基	中期末～後期土器	
	散布地	近代	帯状硬化面２条		

遺跡の概要

下原遺跡調査区１は，縄文時代早期の前平式土器，加栗山式土器と石坂式土器が出土したが，遺物は北域に偏在しており，調査範囲全域への広がりは見られなかった。遺構では，縄文時代早期の土坑９基，竪穴住居跡遺構を３軒検出した。その他の遺物としては，貝殻条痕文系土器や長さが５㎝程の局部磨製石鏃も出土した。また，近世から近代のものと考えられる道路状遺構13条と，時期不明の帯状硬化面１条を検出した。

下原遺跡調査区２は，縄文時代早期から弥生時代までの遺跡である。特に，縄文時代早期では，17基の集石を検出した。遺物では，倉園Ｂ式土器が多数出土した。縄文時代後期では，竪穴住居跡２軒，土器埋設遺構２基，集石・土坑各１基を検出した。住居跡からは，中岳Ⅱ式土器片や多数のチップが出土した。また，弥生時代では，竪穴住居跡３軒を検出した。遺物は，山ノ口式土器，ハマグリ歯形磨製石斧が出土した。

下原遺跡調査区３は，縄文時代早期の遺構は，集石が３基検出された。遺物は，貝殻条痕文系土器が出土した。弥生時代の調査では，竪穴住居跡２軒，高床式建物跡１軒，遺物は山ノ口式土器が出土した。その他，近代以降と考えられる帯状硬化面が２条検出された。


下原遺跡
志布志市
鹿児島県
0 200km
0 1000km
0 (1:25000) 1km

例　言

1　本報告書は，県道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は，県土木部道路建設課の依頼を受けて，鹿児島県教育委員会鹿児島県立埋蔵文化財センターが主体となって，平成 24 ～平成 27 年度に調査を実施した。

3　報告書作成事業は，平成 28 ～ 30 年度に実施した。

4　下原遺跡は，調査区域が隣接する３区域で構成される。これを東側から，調査区１，３，２とした。調査区別に報告を行っているが，第１章１の(1)「調査に至るまでの経緯」，第１章２の「遺跡の位置と環境」，第１章３の「発掘調査の方法と成果」の (3)「層序」までは全調査区に共通する内容として，調査区１にまとめて記載した。

なお，特に調査区名を明記していないものについては，調査区１～３に共通するものとする。

5　挿図番号・表番号は調査区１～３の通し番号とし，遺物番号については，調査区毎の通し番号とし，本文・挿図・図版の番号は一致する。

6　下原遺跡の遺物注記の略号は「SMH」である。

7　挿図の縮尺は，各図面に示した。

8　報告書中のレベル数値はすべて海抜高である。

9　発掘調査における遺構等の実測の一部は，（有）ジパング・サーベイに委託した。

10　発掘調査における写真の撮影は，調査担当者が行い，空中写真撮影は，株式会社フジタに委託した。

11　発掘調査における自然科学分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社・株式会社パレオ・ラボに委託した。

12　遺物復元・実測・製図等の整理作業は，整理担当者及び鹿児島県立埋蔵文化財センター整理作業員が携わった。

13　本報告書の編集･執筆･写真撮影は調査区１・３を山崎克之，調査区２を池田裕一郎が担当した。

なお遺物について，調査区１・２の縄文時代後晩期の土器を中村和美，弥生時代の土器を黒木梨絵，旧石器時代・縄文時代後晩期の石器を堂込秀人が執筆した。

14　遺物は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用する予定である。

目　　次

巻頭カラー
序文
報告書抄録
下原遺跡　位置図
例言
本文目次
第１章　調査区１　発掘調査の方法と成果
１　発掘調査の経過
(1)　調査に至るまでの経緯 …… 1
(2)　事前調査 …… 1
(3)　本調査 …… 2
(4)　調査の経過 …… 2
(5)　整理・報告書作成事業 …… 9
２　遺跡の位置と環境
(1)　地理的環境 …… 11
(2)　歴史的環境 …… 11
３　発掘調査の方法と成果
(1)　調査の方法 …… 16
(2)　出土遺物の分類 …… 18
(3)　層序 …… 19
(4)　調査の成果 …… 27
ア　調査の概要…… 27
イ　旧石器時代…… 27
ウ　縄文時代早期…… 33
エ　縄文時代前期～晩期…… 74
オ　弥生時代…… 83
カ　近世・近代…… 88
第２章　調査区１　自然科学分析…… 90
第３章　調査区２　発掘調査の方法と成果
１　出土遺物の分類……110
２　調査の成果
(1)　調査の概要 ……115
(2)　調査の成果 ……115
ア　縄文時代早期……115
イ　縄文時代後期・晩期……152
ウ　弥生時代……177
第４章　調査区２　自然科学分析……189
第５章　調査区３　発掘調査の方法と成果
１　出土遺物の分類……213
２　発掘調査の成果……218
(1) 調査の概要……218
(2) 調査の成果……218
ア　縄文時代早期……218
イ　縄文時代前期末～中期……227
ウ　縄文時代後期……228
エ　縄文時代晩期……239
オ　弥生時代……243
カ　近世……254
第６章　調査区３　自然科学分析……255
第７章　総　括……260

写真図版（調査区１・２・３）

挿図目次【調査区１】

第１図　下原遺跡周辺遺跡位置図…… 14
第２図　下原遺跡調査区１　調査範囲図…… 17
第３図　基本層序図…… 19
第４図　土層断面図（1）…… 20
第５図　土層断面図（2）…… 21
第６図　土層断面図（3）…… 22
第７図　土層断面図（4）…… 23
第８図　土層断面図（5）…… 24
第９図　土層断面図（6）…… 25
第10図　土層断面図（7）…… 26
第11図　旧石器時代の遺構配置…… 27
遺物出土状況図
第12図　旧石器時代礫群１～３…… 28
第13図　旧石器時代遺物（1）…… 30
第14図　旧石器時代遺物（2）…… 31
第15図　縄文時代早期の遺構配置・遺物出土状況図 … 32
第16図　縄文時代早期　竪穴住居跡１…… 33
第17図　縄文時代早期　竪穴住居跡２…… 34
第18図　縄文時代早期　竪穴住居跡３…… 35
遺構内遺物
第19図　埋設土器出土状況図…… 36
第20図　埋設土器遺構内遺物…… 36
第21図　縄文時代早期　集石（1）…… 38
第22図　縄文時代早期　集石（2）…… 39
第23図　縄文時代早期　集石（3）及び遺構内遺物　40
第24図　縄文時代早期　集石（4）…… 41
第25図　縄文時代早期　土坑１及び遺構内遺物…… 43
第26図　縄文時代早期　土坑２～４及び遺構内遺物 … 44
第27図　縄文時代早期　土坑５～７及び遺構内遺物 … 45
第28図　縄文時代早期　土坑８・９…… 46
第29図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（1）…… 49
第30図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（2）…… 50
第31図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（3）…… 51
第32図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（4）…… 52
第33図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（5）…… 53
第34図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（6）…… 54
第35図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（7）…… 55
第36図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（8）…… 56
第37図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（9）…… 57
第38図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（10） …… 58

第39図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（11）…… 59
第40図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器，その他の土器（12）… 60
第41図　縄文時代早期　石器（1）…… 67
第42図　縄文時代早期　石器（2）…… 68
第43図　縄文時代早期　石器（3）…… 69
第44図　縄文時代早期　石器（4）…… 70
第45図　縄文時代早期　石器（5）…… 71
第46図　縄文時代早期　石器（6）…… 72
第47図　縄文時代前期～晩期の遺構配置…… 75
　　遺物出土状況図
第48図　縄文時代前期末～晩期　土器（1）…… 76
第49図　縄文時代前期末～晩期　土器（2）…… 77
第50図　縄文時代前期末～晩期　土器（3）…… 78
第51図　縄文時代後・晩期　石器（1）…… 80
第52図　縄文時代後・晩期　石器（2）…… 81
第53図　縄文時代後・晩期　石器（3）…… 82
第54図　弥生時代の遺構配置・遺物出土状況図…… 83
第55図　弥生時代　掘立柱建物跡１・２…… 84
第56図　弥生時代　土器…… 86
第57図　近世　大型道路状遺構　埋土断面図…… 88
第58図　近世・近代　大型道路状遺構等位置図…… 89

挿図目次【調査区２】

第59図　下原遺跡調査区２　位置図……111
第60図　下原遺跡調査区２　調査範囲図……111
第61図　土層断面図（1）……112
第62図　土層断面図（2）……113
第63図　土層断面図（3）……114
第64図　縄文時代早期の遺構配置状況……115
　　・遺物出土状況図
第65図　縄文時代早期集石(1) ……118
第66図　縄文時代早期集石(2) ……119
第67図　縄文時代早期集石(3) ……120
第68図　縄文時代早期集石(4) ……121
第69図　縄文時代早期集石(5) ……122
第70図　縄文時代早期集石(6) ……123
第71図　縄文時代早期集石(7) ……124
第72図　土器集中遺物出土状況図……125
第73図　土器集中出土遺物……125
第74図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(1) ……129
第75図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(2) ……130
第76図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(3) ……131
第77図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(4) ……132
第78図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(5) ……133
第79図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(6) ……134
第80図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(7) ……135
第81図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(8) ……136
第82図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(9) ……137
第83図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(10)……138
第84図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(11)……139
第85図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器(12)……140
第86図　縄文時代早期　石器(1) ……146
第87図　縄文時代早期　石器(2) ……147
第88図　縄文時代早期　石器(3) ……148
第89図　縄文時代早期　石器(4) ……149
第90図　縄文時代早期　石器(5)……150
第91図　縄文時代後・晩期の遺物検出・遺物出土状況図…152
第92図　縄文時代後・晩期土坑１遺構内遺物 ……154
第93図　縄文時代後・晩期竪穴住居跡１ ……156
第94図　縄文時代後・晩期　竪穴住居跡１遺構内遺物 (1)…157
第95図　縄文時代後・晩期　竪穴住居跡１遺構内遺物 (2)…158
第96図　縄文時代後・晩期　竪穴住居跡２遺構内遺物…159
第97図　縄文時代後・晩期　集石 ……160
第98図　縄文時代後・晩期　溝状遺構(1)……161
第99図　縄文時代後・晩期　溝状遺構(2)……162
第100図　縄文時代後・晩期　溝状遺構(3)……163
第101図　縄文時代後・晩期　溝状遺構(4)……164
第102図　硬化面，埋設土器 ……165
第103図　埋設土器遺構，埋設土器 ……166
第104図　縄文時代後期　土器(1)……168
第105図　縄文時代後期　土器(2)……169
第106図　縄文時代後期　土器(3)……170
第107図　縄文時代後期　土器(4)……171
第108図　縄文時代後期　石器 ……174
第109図　縄文時代晩期　土器 ……175
第110図　弥生時代　遺構配置・遺物出土状況図 …177
第111図　弥生時代　竪穴住居跡１ ……180
第112図　竪穴住居跡１ピット１～４，焼土跡 ……181
第113図　弥生時代　竪穴住居跡１　遺構内遺物(1)　182
第114図　弥生時代　竪穴住居跡１　遺構内遺物(2)　183
第115図　弥生時代　竪穴住居跡２ ……184
第116図　弥生時代　竪穴住居跡２遺構内遺物 ……185
第117図　弥生時代　竪穴住居跡３遺構内遺物 ……186
第118図　弥生時代土器 ……187
第119図　表採・攪乱層出土の石器 ……188

挿図目次【調査区3】

第120図　下原遺跡調査区3　位置図 ……214
第121図　下原遺跡調査区3　調査範囲図 ……214
第122図　土層断面図（1） ……215
第123図　土層断面図（2） ……216
第124図　土層断面図（3） ……217
第125図　縄文時代早期の遺構配置・遺物出土状況図 …218
第126図　縄文時代早期　集石1 ……219
第127図　集石1遺構内遺物 ……220
第128図　縄文時代早期　集石2・3 ……220
第129図　縄文時代早期　ピット（1）……221
第130図　縄文時代早期　ピット（2）・土坑1 ……222
第131図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器（1）……223
第132図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器（2）……224
第133図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器（3）……225
第134図　縄文時代早期　石器……226
第135図　縄文時代前期末～中期の土器 ……227
第136図　縄文時代後期の遺構配置 ……228
　　遺物出土状況図
第137図　溝状遺構1・2 ……230
第138図　土器集中域，土器集中域内出土遺物 ……231
第139図　炭化物集中域 ……231
第140図　縄文時代後期　土坑1・2 ……232
第141図　縄文時代後期　土器（1）……233
第142図　縄文時代後期　土器（2）……234
第143図　縄文時代後期　石器（1）……235
第144図　縄文時代後期　石器（2）……236
第145図　縄文時代後期　石器（3）……237
第146図　縄文時代晩期　土器（1）……239
第147図　縄文時代晩期　土器（2）……240
第148図　縄文時代晩期　土器（3）……241
第149図　弥生時代の遺構配置・遺物出土状況図 …243
第150図　弥生時代　竪穴住居跡1 ……244
第151図　弥生時代　竪穴住居跡1遺構内遺物 ……245
第152図　弥生時代　竪穴住居跡2 ……246
第153図　弥生時代　竪穴住居跡2内 ……247
　　土坑1ピット1・2，出土遺物
第154図　弥生時代　竪穴住居跡2・土坑2 ……248
　　出土遺物（1）
第155図　弥生時代　竪穴住居跡2出土遺物（2）……249
第156図　弥生時代　竪穴住居跡2出土遺物（3）……250
第157図　弥生時代　高床式建物跡……252
第158図　弥生時代　ピット1・2 ……253
第159図　弥生時代　土器……253
第160図　近世　帯状硬化面位置図……254

表目次【調査区1】

表1　下原遺跡周辺遺跡一覧表 …… 15
表2　旧石器時代遺物観察表 …… 31
表3　縄文時代早期遺構内遺物観察表（1） …… 36
表4　縄文時代早期遺構内遺物観察表（2） …… 46
表5　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（1） …… 61
表6　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（2） …… 62
表7　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（3） …… 63
表8　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（4） …… 64
表9　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器，その他の土器観察表（5）… 65
表10　縄文時代早期石器観察表 …… 73
表11　縄文時代前期末～晩期土器観察表 …… 79
表12　縄文時代後期～晩期石器観察表 …… 82
表13　弥生時代掘立柱状建物跡観察表 …… 85
表14　弥生時代土器観察表 …… 87

表目次【調査区2】

表15　縄文時代早期遺構内遺物観察表 ……125
表16　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器観察表（1）……141
表17　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器観察表（2）……142
表18　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器観察表（3）……143
表19　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器，その他の土器観察表（4）…144
表20　縄文時代早期出土石器観察表 ……151
表21　縄文時代後期～晩期　遺構内遺物土器観察表 …155
表22　縄文時代後期～晩期　遺構内遺物石器観察表 …155
表23　縄文時代後期～晩期　埋設土器観察表 ……167
表24　縄文時代後期土器観察表 ……172
表25　縄文時代後期～晩期石器観察表 ……173
表26　縄文時代晩期土器観察表 ……176
表27　竪穴住居跡1ピット1～4　焼土跡観察表 ……181
表28　弥生時代竪穴住居跡1遺構内遺物観察表 ……182
表29　弥生時代竪穴住居跡2土坑観察表 ……184
表30　弥生時代竪穴住居跡2遺構内遺物観察表 ……185
表31　弥生時代竪穴住居跡3遺構内遺物観察表 ……186
表32　弥生時代土器観察表 ……187
表33　表採，攪乱層出土石器観察表 ……188

表目次【調査区3】

表34　集石１出土遺物観察表……220
表35　ピット・土坑1埋土観察表 ……222
表36　縄文時代早期Ⅰ～Ⅵ類土器観察表（1）……225
表37　縄文時代早期Ⅰ～Ⅵ類土器観察表（2）……226
表38　縄文時代早期石器観察表……226
表39　縄文時代前期～中期土器観察表……227
表40　縄文時代後期　土器集中域出土遺物観察表…232
表41　縄文時代後期　土器観察表……238
表42　縄文時代後期　石器観察表……238
表43　縄文時代晩期　土器観察表……242
表44　弥生時代　竪穴住居跡１　埋土観察表……244
表45　弥生時代　竪穴住居跡１出土（土器）観察表…245
表46　弥生時代　竪穴住居跡１出土（石器）観察表…245
表47　弥生時代　竪穴住居跡２埋土観察表……247
表48　弥生時代　竪穴住居跡２出土(土器)観察表…251
表49　弥生時代　竪穴住居跡２出土（石器）観察表…251
表50　弥生時代　高床式建物跡観察表……252
表51　弥生時代　高床式建物跡ピット埋土観察表…252
表52　弥生時代　ピット埋土観察表……253
表53　弥生時代　土器観察表……253

写真図版目次【調査区1】

図版１　発掘調査（1）……263
図版２　発掘調査（2）……264
図版３　発掘調査（3）……265
図版４　発掘調査（4）……266
図版５　発掘調査（5）……267
図版６　発掘調査（6）……268
図版７　発掘調査（7）……269
図版８　発掘調査（8）……270
図版９　旧石器時代早期石器……271
図版10　縄文時代早期土器　Ⅳ・Ⅴ類土器……272
図版11　縄文時代早期Ⅰ類土器……273
図版12　縄文時代早期Ⅰ～Ⅲ類土器……274
図版13　縄文時代早期Ⅳ－１～３類土器……275
図版14　縄文時代早期Ⅳ－４・５類土器……276
図版15　縄文時代早期Ⅴ類，その他の土器……277
図版16　縄文時代早期石器……278
図版17　縄文時代前期～後期土器……279
図版18　縄文時代後期土器……280
図版19　縄文時代晩期土器……281
図版20　縄文時代後・晩期石器……282
図版21　弥生時代土器 ……283

写真図版目次【調査区2】

図版22　発掘調査（1）……284
図版23　発掘調査（2）……285
図版24　発掘調査（3）……286
図版25　発掘調査（4）……287
図版26　発掘調査（5）……288
図版27　発掘調査（6）……289
図版28　発掘調査（7）……290
図版29　縄文時代早期Ⅰ・Ⅱ類土器……291
図版30　縄文時代早期Ⅱ－２・３類土器……292
図版31　縄文時代早期Ⅲ－４～９類土器……293
図版32　縄文時代早期Ⅲ－11，Ⅳ類土器……294
図版33　縄文時代早期Ⅴ～Ⅶ類，その他の土器……295
図版34　縄文時代早期石器……296
図版35　縄文時代後期竪穴住居跡１遺構内遺物……297
図版36　縄文時代後期竪穴住居跡２遺構内遺物……298
図版37　縄文時代後期石器・遺構内遺物石器……299
図版38　縄文時代後期土器……300
図版39　縄文時代晩期土器……301
図版40　弥生時代遺構内遺物土器……302
図版41　弥生時代遺構内遺物石器……303
図版42　弥生時代土器・表採石器……304

写真図版目次【調査区3】

図版43　発掘調査（1）……305
図版44　発掘調査（2）……306
図版45　発掘調査（3）……307
図版46　発掘調査（4）……308
図版47　縄文時代早期Ⅰ～Ⅵ類土器（1）……309
図版48　縄文時代早期Ⅰ～Ⅵ類土器（2）……310
図版49　縄文時代早期石器・前期末～中期末土器…311
図版50　縄文時代後期遺構内遺物……312
図版51　縄文時代後期土器……313
図版52　縄文時代後期石器……314
図版53　縄文時代晩期土器……315
図版54　弥生時代遺構内遺物（1）……316
図版55　弥生時代遺構内遺物（2）……317

第１章　調査区１　発掘調査の方法と成果

１　発掘調査の経過

(1)　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

鹿児島県土木部道路建設課（以下，道路建設課）は，主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築事業に先立って対象地域内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，県文化財課）に照会した。これを受けて，県文化財課が平成18年度に分布調査を実施したところ，事業区域内に船迫遺跡・高吉B遺跡・宇都上遺跡・稲荷迫遺跡・下原遺跡が所在することが判明した。

この結果をもとに，道路建設課・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の３者で協議した結果，対象区域内の遺跡の有無，範囲と性格を把握するために当該地域において確認調査を実施することとした。

下原遺跡の確認調査は，平成23年７月21日と平成24年３月５日から７日までの２回に分けて埋文センターが実施した。確認調査対象面積は3,500㎡で，計９か所に確認トレンチを設定し，縄文時代の調査対象面積を4,000㎡，弥生時代遺構の調査対象面積を8,000㎡，合計12,000㎡とした。

そこで，道路建設課・県文化財課・埋文センターは再度協議を行い，記録保存のための本調査を行うこととなった。本調査は埋文センターが担当し，平成24年度から平成27年度の４ヵ年にわたり本調査を実施することとなった。

平成24年度の調査は，平成24年４月23日（月）から平成25年２月26日（火）まで（実働143日），平成25年度は平成25年10月７日（月）から平成26年３月６日（木）まで（実働77日），平成26年度は平成26年10月６日（月）から平成27年２月25日（水），平成27年度は，調査区１・２が平成27年５月７日（木）から平成28年３月25日（金）（実働153日），調査区３は，平成27年11月４日（水）から平成28年３月24日（木）（実労71日）であった。

報告書作成作業は，埋文センターが担当し，平成25年度に一部の水洗い・注記等の基礎整理を行い，平成26年度から本格的に実施した。

(2)　事前調査

１　分布調査（平成18年度）

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	県文化財課	
調査統括	県文化財課	
	課長	中尾　理
調査企画	県文化財課	
	課長補佐	前原　浩一
	主任文化財主事兼	
	埋蔵文化財係長	青﨑　和憲
調査担当	県文化財課	
	文化財主事	堂込　秀人
	県立埋蔵文化財センター	
	文化財主事	日高　勝博
調査協力	志布志町教育委員会	小村　美義

２　試掘調査（平成23年度　平成23年7月21日）

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込　秀人
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長兼	
	南の縄文調査室長補佐	東　和幸
調査担当	文化財主事	上床　真
調査事務	総務係長	大園　祥子
	主事	下堂園晴美

３　確認調査（平成23年度　平成24年３月５～７日）

調査体制

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
調査統括	県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中　明成
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込　秀人
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長兼	
	南の縄文調査室長補佐	東　和幸
調査担当	文化財主事	井口　俊二
調査事務	総務係長	大園　祥子
	主事	下堂園晴美

(3) 本調査

平成24年度（平成24年４月～平成25年２月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	寺田　仁志
調査企画	次長兼総務課長	新小田　穣
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	調査第一課長	堂込　秀人
	主任文化財主事兼	
	調査第一課第一調査係長	東　　和幸
調査担当	文化財主事	長﨑慎太郎
	文化財主事	富山　孝一
	文化財主事	楸田　岳志
	文化財主事	辻　　明啓
事務担当	主幹兼総務係長	大園　祥子
	主　　査	下堂薗晴美
調査指導	鹿児島大学教授	森脇　　広

平成25年度（平成25年10月～平成26年２月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井ノ上秀文
調査企画	次長兼総務課長	新小田　穣
	調査課長兼	
	南の縄文調査室長	堂込　秀人
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	東　　和幸
調査担当	文化財主事	武安　雅之
	文化財主事	楸田　岳志
事務担当	主幹兼総務係長	有馬　博文
	主事	池之上勝太
調査指導	志布志市文化財保護審議委員会	
	会長	那加野久廣

平成26年度（平成26年９月～平成27年２月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井ノ上秀文
調査企画	次長兼総務課長	中島　　修
	調査課長兼	
	南の縄文調査室長	前迫　亮一
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	大久保浩二
調査担当	文化財主事	岡本　貢一
	文化財主事	吉元　輝幸
	文化財研究員	眞邉　　彩
事務担当	主幹兼総務係長	有馬　博文

平成27年度（平成27年５月～平成28年３月）

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	福山　徳治
調査企画	次長兼調査課長	前迫　亮一
	総務課長	有馬　博文
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	大久保浩二
調査担当	文化財主事	岡本　貢一
	文化財主事	池田裕一郎
事務担当	総務係長	脇野　幸一

(4) 調査の経過

調査の経過については，日誌抄を年度毎及び月ごとに集約して記載する。

平成24年度

４月

16日発掘調査事前準備，伊崎田小・伊崎田中・志布志市教委･建設課（市道関係）挨拶。重機による表土剥ぎ，ミニトレンチ掘り下げ，グリッド杭打。23日機材・物品搬入･環境整備。（MM～QQ-2～4区）街道跡（フィケド）凹み部の調査，フィケド西壁掘り下げ。

５月

（MM～QQ-2～4区）フィケド掘り下げ・硬化面検出，フィケド断面トレンチB･C掘り下げ，波板状凸凹面検出，遺跡範囲図作成（GG～LL-3～6区）フィケド掘り下げ，トレンチⅥ～Ⅶ層掘り下げ，道路状遺構硬化面検出（0～Z-9～19区）調査範囲光波測量，１T土層断面実測・写真撮影（S～U-10･11区）表層掘り下げ，Ⅳ～Ⅴ層掘り下げ。22日志布志市文化財保護審議委員来跡，29日伊崎田小教員3名児童28名遺跡見学・ケーブルテレビ取材。

６月

（LL～QQ-2～4区）フィケド掘り下げ，硬化面･波板状凸凹面検出（GG～LL-3～6区）フィケド掘り下げ,道路

状遺構硬化面検出，トレンチⅥ～Ⅶ層掘り下げ（Q･R-11～15区）表層掘り下げ，Ⅱａ～Ⅱb層掘り下げ，遺物取り上げ（S～U-10･11区）溝状遺構実測，Ⅴ～Ⅵ層掘り下げ，土坑検出，調査範囲図作成，遺物取り上げ，Ⅴ層コンタ図作成。

７月

（GG～LL-3～6区）フィケド掘り下げ，火山灰サンプル採取，道路状遺構硬化面検出，光波測量（杉並木），（S～U-10･11区）Ⅳ～Ⅵb層掘り下げ，Ⅲ層上面コンタ図作成，Ⅶ層上面コンタ図作成，（Q･R-11～15区）Ⅱａ～Ⅲ層掘り下げ，掘立柱建物跡（１間×１間）検出，溝状遺構検出，遺物取り上げ，（R･S-15～17区）Ⅱb層掘り下げ，（T-12･13区）Ⅲ～Ⅵb層掘り下げ，Ⅲ層上面遺構検出，ピット検出。２日志布志市文化財愛護会（30名）遺跡見学，９･10日フィケドの桜島火山灰を含む埋土断面の剥ぎ取り，20日大隅地域振興局との現地協議。

８月

（Q･R-11～15区）Ⅳ層掘り下げ，古道跡（硬化面）検出，遺物取り上げ，（Q～S-15～17区）Ⅵa･Ⅵb層掘り下げ，（S～U-10･11区）下層確認トレンチ掘り下げ，（R-12～15区）Ⅰｂ～Ⅱｂ層掘り下げ，硬化面検出，磨製石鏃出土，（Q･R-11～13区）古道跡（硬化面）２条･溝状遺構検出，Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ，（O～S-17～19区）表土剥ぎ，フィケド北端部断面検出，フィケド北端部床面検出，遺物取り上げ，火山灰層下から蹄鉄出土，（X～BB-７～10区）立ち木伐採（大隅地域振興局）。６日ベルトコンベアケーブル盗難，９日霧島市文化財少年団(22名)遺跡見学・発掘体験，17日志布志市本村子ども会(21名）遺跡見学・発掘体験，21日志布志市立通山小学校職員（８名）職員研修

９月

（O～S-17～19区）

フィケド北端部東側斜面・硬化面（路盤）・断面検出，(Q･R-14･15区）Ⅶ層掘り下げ･遺物取り上げ，集石１号･３号検出，下層確認トレンチ掘り下げ，(Q･R-11～13区）Ⅴ～Ⅶ層掘り下げ，遺構検出（散礫状の集石），遺物取り上げ，Ⅶ層掘り下げ・下層確認トレンチ掘り下げ，集石４号検出，（Z～FF-６～11区）表土剥ぎ，道路状遺構検出，Ｐ１堆積状況検出。20日志布志市教育委員研修視察（８名），24日高吉B遺跡調査終了につき，調査員・作業員の合流。

10月

４日大隅地域振興局との現地協議

（Z～FF-６～11区）Ⅵa～Ⅵb層掘り下げ，遺物取り上げ，下層確認トレンチⅥa層掘り下げ，道路状遺構検出，竪穴状遺構１号検出，(Q･R-15区）Ⅰ～Ⅱ層掘り下げ，重機によるⅢ～Ⅴ層掘り下げ（畑かん），(Q･R-11～13区）Ⅵｂ層掘り下げ，土坑１号･２号検出，遺物取り上げ，下層確認トレンチ掘り下げ，（AA～DD-７～10区）Ⅶ層掘り下げ，道路状遺構硬化面検出，（S～U-11～15区）表土～Ⅱ層掘り下げ，Ⅲ～Ⅴ層掘り下げ，Ⅵa～Ⅵｂ層掘り下げ，古道跡硬化面検出，遺物取り上げ，掘立柱建物跡検出，コンタ図作成実測（Q･R-14･15区）Ⅶ層掘り下げ。11日成人式用のビデオ撮影（志布志市教委），24日大正火山灰剥ぎ取り事前調査（県立博物館），26日都城志布志道路安全協議会。

11月

（S～U-11～15区）

Ⅱ層掘り下げ・Ⅲ～Ⅵ層剥ぎ取り，Ⅵa～Ⅵb層掘り下げ，遺物取り上げ，硬化面検出，光波測量，竪穴状遺構２号検出，土坑２・３号検出，下層確認トレンチ掘り下げ，（U･V-11～14区）　古道跡硬化面検出，溝状遺構検出，硬化面検出，Ⅱ層掘り下げ，遺物取り上げ，（BB～DD-６～９区）Ⅶ層上面コンタ図作成，重機による埋め戻し（AA～DD-７～10区）道路状遺構硬化面検出，溝状遺構検出，断面実測，硬化面検出，集石５号検出，Ⅵ層掘り下げ，（Z～AA-９～10区）重機によるⅢ～Ⅴ層剥ぎ，竪穴状遺構１号スライス，Ⅵ層掘り下げ，土坑７号検出。８日空中写真撮影，19日大隅地域振興局との現地協議，28日大正火山灰地層剥ぎ取り（県立博物館鈴木敏之学芸主事）。

12月

（S～U-11～15区）Ⅵa～Ⅵb層掘り下げ，遺物取り上げ，集石６号・７号検出，土層断面実測，土坑検出，竪穴住居跡２号スライス，（U･V-11～14区）Ⅱ層遺物取り上げ，Ⅲ層コンタ図作成，重機によるⅢ～Ⅴ層掘り下げ，Ⅵa層掘り下げ，古道跡硬化面・溝状遺構検出。

６日夜間巡回パトロールの連絡（志布志警察署肥後屋氏），19日大隅地域振興局との現地協議。

１月

（S～V-11～15区）Ⅵb層掘り下げ，土坑検出，遺物取り上げ，石匙出土，土層断面実測，（S・T-15・16区）下層確認トレンチ掘り下げ，剥片出土（U・V-12・13区）Ⅵ層掘り下げ，下層確認トレンチ掘り下げ，旧石器遺物取り上げ，（U～W-13・14区）Ⅵa層～Ⅵb層掘り下げ，遺物取り上げ，土坑検出，集石８号検出，（S～V-13・14区）下層確認トレンチ15T.16T.17T.18T.19T.20T.21T.22T掘り下げ。

地形測量（委託ジパング・サーベイ），23日大隅地域振興局との現地協議，火山灰標本採取(縄文の森 内山事業課長)。

２月

（S・T-13～15区）Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ，（U～W-12～14区）Ⅵb層掘り下げ

15T.19T.20T.22T掘り下げ，集石６号・７号検出，地形測量（ジパング・サーベイ），（U-15区）土層断面実測，

集石10号実測（ジパング・サーベイ），(U-13・14区，V-12区）Ⅸ層掘り下げ,集石11号検出。７日現地指導（鹿児島大学 森脇広教授），26日大隅地域振興局との現地協議。27日現場終了・撤収。

平成25年度

10月

7日環境整備，荷受け。15日Ⅸ層掘り下げ，県道沿道跡実測。16日溝状遺構１実測。集石取り上げ。18日Ⅱ層掘り下げ，Ⅶ層剥ぎ取り，旧石器調査準備，Ⅲ層上面硬化面実測。22日Ⅲ層上面コンタ図作成。
28日Ⅱ・Ⅲ層遺物出土状況写真撮影及び遺物取り上げ。

11月

1日古い県道表土剥ぎ取り，Ⅳ層Ⅴ層重機により剥ぎ取り。5日Ⅸ・Ⅹ層調査，Ⅳ・Ⅴ層重機での剥ぎ取り，Ⅵ層調査。Ⅺ層コンタ図作成。12日土層断面用に古道跡南側掘削。13日旧石器トレンチ調査2次シラスまで2か所，14日Ⅵ層調査，旧石器トレンチ調査，写真撮影，土層断面作成，北側古道調査。18日Ⅶ層上面コンタ図作成，北側古道調査，Ⅷ層調査。21日Ⅷ層調査，古道北側写真撮影，実測。22日Ⅷ層調査，古道中央部・北側横堤状部分調査。26日古道南端土層断面写真撮影，古道北側横堤状部分調査。27日古道北側横堤状部分調査Ⅵ層，古道内溝状遺構実測。

12月

S ～ W-13 ～ 15区古道北側堤状部分調査Ⅵ層X ～ Z-11 ～ 13区古道中央部撮影，Z-10～11区市道部分調査準備。3日S ～ W-13 ～ 15区古道北側横堤状部分調査Ⅵ層，遺物取り上げ，実測，X・Y-11・12区古道中央部堤状部分調査Ⅱ・Ⅲ層，Y・Z-10・11区市道部分調査準備。9日X・Y-11・12区古道中央部横調査Ⅵ層，U ～ W-13 ～ 15区古道北側横調査Ⅸ層，Y・Z-10・11区市道横調査準備Ⅴ層まで剥ぎ取り。Z ～ BB-10・11区古道横調査準備Ⅴ層まで剥ぎ取り。11日X・Y-11・12区古道中央部横調査Ⅵ層，U～W-13・15区古県道北側横調査Ⅺ層。12日X・Y-11・12区古道中央部横調査コンタ図作成。U ～ W-13 ～ 15区古道北側調査Ⅺ層。16日V ～ X-12 ～ 14区古県道中央横調査Ⅳ・Ⅹ層，Y・Z-10・11区市道横調査Ⅵ層。Z ～ BB-10・11区古道南側横調査Ⅵ層。18日Z ～ BB-10・11区古道南側横調査Ⅵ層，V ～ X-12 ～ 14区，T-15区古道北側中央部枝調査Ⅹ層，市道横，古道南側横コンタ図作成。19日T ～ X-12 ～ 15区古道北側,中央部横調査Ⅹ・Ⅺ層調査，遺物取り上げ，コンタ図作成。20日T ～ V-14・15区古道北側，中央部横調査Ⅹ・Ⅺ層。24日T ～ W-13 ～ 16区古道北側補東調査Ⅹ層

1月

9日トレンチ調査，写真撮影。15日トレンチ調査Ⅱ・Ⅵ層，18トレンチ写真撮影。16日U・V-25 ～ 28区Ⅲ層遺物取り上げ。遺物出土状況写真撮影16T・17T。20日西側調査区Ⅲ層調査16T遺物取り上げ，M ～ O-37 ～ 39区西側調査区Ⅲ層調査，16T遺物取り上げ。24日西側調査区遺構写真撮影，16T・17T土層断面実測，17T拡張部分Ⅲ層調査。28日L ～ O-36 ～ 38区西側調査区Ⅱ・Ⅲ層調査，N・O-33 ～ 35区17T拡張部Ⅱ・Ⅲ層調査，遺物取り上げ，遺物出土状況写真撮影，遺構調査。

2月

3日U・V-25 ～ 28区Ⅵ層調，N-36区遺構調査。4日N-36区，L・M-36・37区遺構調査，N・O-33～35区Ⅲ層調査。T ～ V-26 ～ 29区Ⅵ層調査，L-37区19トレンチ調査。
10日N-36区遺構実測。T ～ V-26 ～ 29区遺物取り上げ。14日N-36区・L・M-36・37区遺構調査，T ～ V-26 ～ 29区遺物取り上げ，V-28区集石実測。20日T ～ V-26 ～ 29区竪穴式住居２内遺物取り上げ，L ～ O-35 ～ 38区調査区３平板実測，V-27区集石遺構検出状況写真撮影，M・N-36区20T断面実測,写真撮影。N・O-33 ～ 35区Ⅲ層調査，T ～ V-26 ～ 29区・N ～ O-33 ～ 35区遺物取り上げ,V-27区集石遺構実測。24日N-36区遺構調査，L・M-36・37区遺構調査，SH2貼り床上面検出写真撮影。T ～ V-26 ～ 29区Ⅵ層調査，コンタ図作成，遺物取り上げ，V-28区集石遺構実測，埋め戻し。25日SH1完掘写真撮影。T ～ V-26 ～ 29区薩摩上面検出状況写真撮影，M ～ O-34 ～ 36区Ⅲ層調査，コンタ図作成，埋め戻し。26日環境整備，プレハブ撤収，埋め戻し。

平成26年度

９月

表土剥ぎ，志布志警察署等挨拶回り，側道工事業者との打ち合わせ。８日オリエンテーション，環境整備。９日BB・CC-13・14区Ⅱ層掘り下げ。10日AA・BB-13 ～ 17区Ⅲ層掘り下げ。11日V－19・20区Ⅱ層掘り下げ。Ⅲ層上面コンタ図作成。12日Z ～ CC-13 ～ 16区Ⅲ層上面完掘状況写真撮影，遺物取り上げ，コンタ図作成。BB-18・19区Ⅱ層掘り下げ，U・V-18・19区Ⅵa層掘り下げ。16日AA・BB-18区Ⅱｂ層掘り下げ,U・V-17 ～ 19区Ⅵa層掘り下げ，Y～BB-13～15区重機によるⅢ層～Ⅴ層剥ぎ取り。17日AA・BB-18区Ⅱｂ層掘り下げ，Ⅱa・Ⅱｂ層遺物取り上げ，U・V-18・19区Ⅵa層掘り下げ。Y ～ BB-13～15区重機によるⅢ～Ⅴ層剥ぎ取り。18日V～X-12～14区Ⅵa層掘り下げ，Y・Z-14・15区Ⅵa層掘り下げ。25日AA・BB-17・18区Ⅱ層掘り下げ，U・V-17 ～ 19区Ⅵa層掘り下げ。26日AA・BB-17・18区Ⅱ層掘り下げ，U・V-17 ～ 19区Ⅵ層掘り下げ，Y・Z-14・15区Ⅵ層掘り下げ。V-19区集石201号検出。

10月

６日１ＴⅡa,Ⅱb層掘り下げ，２ＴⅥa，Ⅵb層掘り下げ，３ＴⅢ層下部～Ⅴ層掘り下げ，集石201号実測。
７日４ＴⅥa，Ⅵb層掘り下げ。１Ｔコンタ図作成。８日５ＴⅥa層，Ⅵb層掘り下げ。８ＴⅥa，Ⅵb層掘り下げ。９日８ＴⅥ層完掘でコンタ図作成。10日５Ｔ，６Ｔ薩摩

上面コンタ図作成。14日２ＴⅦ層上面コンタ図作成，４ＴⅧ層掘り下げ。５ＴⅦ層上面コンタ図作成。６Ｔ，７ＴⅧ層掘り下げ。15日４ＴⅨ・Ｘ層掘り下げ。５ＴⅨ層掘り下げ。６ＴⅨ，Ｘ層掘り下げ。７ＴⅦ層上面コンタ図。Ⅵ層掘り下げ。４ＴⅫ層上面完掘写真，８ＴⅪ層掘り下げ。17日４ＴⅫ層上面コンタ図。５ＴⅪ層掘り下げ。６ＴＸ・Ⅺ層掘り下げ，７ＴⅨ，Ｘ層掘り下げ。９ＴⅫ層上面コンタ図作成。20日２ＴⅢ層上面まで掘り下げ，５ＴⅪ，Ⅻ層を掘り下げ，６Ｔシラス上面コンタ図作成，７ＴⅨ，Ｘ層掘り下げ，礫群201号検出，９ＴⅨ層掘り下げ。21日２ＴⅡ層下部まで重機で掘り下げ，５Ｔコンタ図，土層断面図作成，６ＴＸ層掘り下げ，９ＴⅫ層まで掘り下げ，４Ｔ南壁土層断面図作成。22日V～X-17・18区表土剥ぎ，８Ｔ土層断面図作成。23日V～X-17・18区Ⅱｂ層掘り下げ，W～Z-18・19区Ⅲ層上面掘り下げ，６ＴⅨ，Ｘ層掘り下げ。24日W ～ Z-18・19区Ⅲ層上面掘り下げ。７ＴⅨ，Ｘ層掘り下げ，W～Z-18・19区御池上面コンタ図作成。27日BB-18区礫群202・203号写真撮影Ｘ層検出，V ～ Y-16・17区Ⅵ層掘り下げ，W～Y-19・20区重機による表土剥ぎ。28日V ～ Y-16・17区Ⅵ層掘り下げ，W～Y-19･20区重機による表土剥ぎ，礫群203号実測。

11月

４日W～Z-19区Ⅱ層掘り下げ，U～Y-16 ～ 18区撹乱部位置図平板作成。５日W～Z-19区Ⅱ層掘り下げ，遺物取り上げ，W ～ Y-17区Ⅵ層掘り下げ，AA-18区礫群202,203号実測。６日W～X-16・17区Ⅵ層掘り下げ，Y･Z-19区Ⅱ，Ⅲ層上面掘り下げ及び遺物取り上げ，７ＴＸ層掘り下げ。７日V～Y-16・17区Ⅵ層遺物出土状況写真撮影，W～Z-18・19区Ⅲ層上面コンタ図作成。Y・Z-19区Ⅱｂ，Ⅲ層上面遺物取り上げ。10日V～Y-16・17区Ⅵ層掘り下げ，遺物取り上げ，7ＴⅥｂ層掘り下げ，W～Z-18・19区Ⅲ～Ⅴ層重機による掘り下げ。11日V ～ Y-16・17区Ⅵ層掘り下げ，遺物取り上げ，7ＴⅪｂ層掘り下げ，W1 ～ Z-18・19区Ⅲ層～Ⅴ層重機による掘り下げ，V-17区Ⅵ層検出，土器埋設遺構実測。12日W ～ Z-18・19区Ⅲ層～Ⅴ層重機による掘り下げ。V ～ Y-16・17区Ⅵ層掘り下げ，Ⅵ層遺物取り上げ。7ＴⅪｂ層掘り下げ。13日W ～ Z-18・19区Ⅴ層下部掘り下げ，V･W-17･18区Ⅵ層下部横転位置確認，V ～ Y-16・17区Ⅵ層遺物取り上げ。14日W ～ Z-18・19区Ⅵ層掘り下げ，AA・BB-18・19区７ＴⅫ層完掘写真撮影，Ⅻ層上面コンタ図作成。V ～ Y-16・17区Ⅵ層遺物取り上げ。17日図面整理。18日V ～ Y-18・19区Ⅵ層掘り下げ。10ＴⅤ層下部掘り下げ。19日V ～ Y-18・19区Ⅵ層掘り下げ，10ＴⅥ層掘り下げ，AA・BB-19区西壁土層断面実測。20日V ～ Y-18・19区Ⅵ層掘り下げ，10ＴⅥ・Ⅶ層掘り下げ。21日V ～ Y-18・19区Ⅵ層掘り下げ，10ＴⅦ層掘り下げ。26日10ＴⅦ層掘り下げ。27日V ～ X-18・19区Ⅵ層掘り下げ。

12月

1日Y-18・19Ⅵ・Ⅶ層上面掘り下げ。U～W-17～19区Ⅵ層掘り下げ。２日W～Z-18・19区Ⅵ層遺物出土状況写真撮影。10ＴⅧ層上面コンタ図作成。U～W-17･18区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。3日V・W-17 ～ 19区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，V・W-17・18区遺物取り上げ。5日V・W-17 ～ 19区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。V・W-17・18区Ⅵ・Ⅶ層遺物取り上げ。8日V・W-17 ～ 19区Ⅶ層掘り下げ，X-16・17区Ⅵ層掘り下げ。9日V・W-18・19区Ⅶ層掘り下げ，W ～ Y-16・17区Ⅵ層掘り下げ，Z-18・19区重機による表土剥ぎ。10日W-16～19区Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ，X・Y-16・17区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ。11日W-17・18区Ⅶ層掘り下げ，X・Y-16・17区Ⅶ層掘り下げ。12日X・Y-16～18区Ⅶ層掘り下げ，Z-18･19区Ⅱｂ層掘り下げ，遺物取り上げ。15日X・Z-18・19区Ⅶ層掘り下げ，Z-18・19区Ⅱｂ層掘り下げ，遺物取り上げ。17日Y・Z-18・19区Ⅶ層掘り下げ，Z-18区Ⅱｂ層掘り下げ，遺物取り上げ，Z-18・19区Ⅲ層上面コンタ図作成。18日U ～ Z-17 ～ 19区Ⅷ層上面写真撮影,V･W-16 ～ 19区Ⅷ層上面コンタ図作成。19日X･Y-16 ～ 18Ⅷ層上面コンタ図作成，U・V-17～19区重機によるⅧ層剥ぎ取り。22日U ～ W-17～19区重機によるⅧ層剥ぎ取り。24日X・Y-16・17区重機によるⅧ層剥ぎ取り，V・W-17～19区Ⅸ層上面精査。

１月

６日旧石器時代調査区設定。７日U ～ W-17・18区Ⅸ層掘り下げ。8日U ～ W-17・18区Ⅸ・Ⅹ層掘り下げ。9日U ～ W-17・18区Ⅸ・Ⅹ層掘り下げ。13日V ～ X-16区Ⅸ層掘り下げ，W・X-17区Ⅸ層掘り下げ，V・W-17区Ⅸ層掘り下げ。14日V ～ X-16・17区Ⅸ層掘り下げ。15日W・X-17区Ⅸ・Ⅹ層掘り下げ。W-17区Ⅸ層掘り下げ，U・V－18区X層掘り下げ,X-16区Ⅹ層掘り下げ。19日V ～ X－16 ～ 18区Ⅹ層掘り下げ，W-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ，W-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ。21日W ～ Y-17・18区Ⅹ層まで掘り下げ，U-18・19区Ⅹ層まで掘り下げ。22日U ～ X-17・18区Ⅹ層まで掘り下げ，W-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ，X-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ，U-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ。23日U ～ X-17 ～ 19区Ⅹ層まで掘り下げ，W-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ，X-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ，U-18・19区トレンチ内Ⅹ層まで掘り下げ。27日V-19区下層確認トレンチⅨ･Ⅹ層掘り下げ，X・Y-18区Ⅹ層掘り下げ，W-17・18区Ⅸ・Ⅹ層掘り下げ。28日V-19区下層確認トレンチⅪ層上面コンタ図作成，Ⅺ層掘り下げ。X・Y-18区Ⅹ層掘り下げ，XY-18区Ⅹ層掘り下げ。W-17・18区Ⅸ・Ⅹ層掘り下げ。W-17区礫写真撮影。29日Z-18・19区，Y-16・17区Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層，重機による掘り下げ。

２月

２日Y-16 ～ 18区，Z-17 ～ 19区Ⅵ層掘り下げ，W-17・

18区Ｘ層掘り下げ。３日Y-16～18,Z-17～19区Ⅵ層掘り下げ，W-17・18区Ｘ層掘り下げ，U～X-17・18区コンタ図作成。４日Y-16～18区，Z-17・19区Ⅵ層掘り下げ，W-17・18Ｘ層掘り下げ，U～X-17・18区コンタ図作成。5日Y-16～18区，Z-17・19区Ⅵ層掘り下げ。W-17・18区Ｘ層掘り下げ。V～X-18区コンタ図作成，W-18区，コンタ図作成。W-18，V-19区下層確認トレンチ掘り下げ。６日Y-16・17区Ⅵb層掘り下げ，V-19区・W-18区下層確認トレンチ，写真撮影，土層断面実測，コンタ図作成。９日Z-17～19区・Y-16・17区Ⅷ層上面精査及びコンタ図作成，X-17区下層確認トレンチⅨ・Ｘ層掘り下げ，Z-18区南壁科学分析の為Ⅲ～Ⅴ層剥ぎ取り。13日調査区南壁土層断面実測。17日Z-18・19Ⅱｂ層掘り下げ，遺物取り上げ，Y・Z-18区・X-17区下層確認トレンチ設定。18日Z-18･19区Ⅲ層上面完掘状況写真撮影，Ⅵ層掘り下げ，Y･Z-18区及びX-17区トレンチ内コンタ図作成。20日Z-18・19区Ⅵ層掘り下げ，Y・Z-18区トレンチ内コンタ図作成，完掘状況写真撮影，U-18・19区北側壁面実測及び写真撮影。23日重機による埋め戻し。25日撤収作業荷出し。

平成27年度

（調査区１・２）

５月

調査区１，７日調査開始。調査開始に伴う作業員オリエンテーション。環境整備。W～Z－15・16区Ⅵ層掘り下げ。W～Y－15・16区Ⅵ層掘り下げ。Y～AA－12・13区Ⅵ層掘り下げ。W・X－15・16区Ⅵ層掘り下げ。W～Y－15・16区Ⅵ層掘り下げ。AA－12・13区Ⅵ層掘り下げ。W～Y－15・16区Ⅵ層精査。Z～AA－12・13区Ⅵ層掘り下げ。W～Y－14～16区遺物取り上げ状況写真撮影，及び遺物取り上げ。Z～BB－12・13区Ⅵ層掘り下げ。W～Z－14～16区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ及び，遺物取り上げ。X～AA－12～14区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。W～Z－13～16区Ⅵ層の横転位置図作成。W～Z－15・16区Ⅶ層掘り下げ。W～Y－13～16区Ⅶ層掘り下げ，Ⅵ層遺物取り上げ。W･X－14～16区Ⅶ層掘り下げ。Y・Z－13・14区Ⅵ層掘り下げ。W・X－14・15区Ⅵ・Ⅶ層遺物取り上げ。X－14区横転位置図実測。W－16区ＳＫ302号調査，及び検出写真撮影。W～Y－14・15区Ⅶ層掘り下げ，及びⅥ・Ⅶ層遺物取り上げ。Y－13区，Z－12～14区Ⅵ層掘り下げ。W－16区ＳＫ302号調査，及び実測。W・X－14～16区Ⅶ層掘り下げ。Y・Z－13・14区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，及びⅥ層遺物取り上げ。

６月

Y～BB－12～14区Ⅶ層掘り下げ，及びⅥ・Ⅶ層遺物取り上げ。土坑302号実測。大久保係長現地調査。W～Y－14～16区Ⅷ層上面コンタ図作成。Y～AA－12・13区，Y・Z－14区ＳＩ５号検出状況写真撮影及び調査。

７月

W～Z－12～14区フィケド調査，断面実測,写真撮影。AA－12・13区下層確認トレンチⅧ層掘り下げ。W～Z－12～14区フィケド調査,完掘写真撮影，平面実測。X～AA－12・13区Ⅵ層掘り下げ。AA－12・13区下層確認Ⅺ層掘り下げ。Y～BB－12～14区Ⅷ層上面コンタ図作成。Y･Z－14区ＳＩ５号ベルト断面実測，写真撮影。X～AA－12・13区Ⅶ層掘り下げ。W～Z－14～16区Ⅷ層上面写真撮影。Z－12・13区下層確認トレンチ24・25Ⅸ・Ｘ層掘り下げ。W・X－14～16区Ⅸ・Ｘ層掘り下げ。ＳＫ303号調査。ＳＩ５号，ＳＫ303号完掘写真撮影。下層確認トレンチ21～23西壁断面実測。W－15区ＳX301号調査。

８月

W・X－14～16区Ⅸ・Ｘ層掘り下げ。下原調査区２環境整備。下原遺跡現地協議。21～25トレンチⅫ層上面コンタ図作成。W・X－14～16区精査及び写真撮影。荷出し。下原遺跡調査区２表土剥ぎ。プレハブ等設置確認。ベルコン移動確認。荷物の搬入。E～G－47・48区Ⅱ層掘り下げ。D－54区下層確認トレンチ調査。E～G－47・48区Ⅱ層掘り下げ。台風養生。C･D－47･48区表土剥ぎ。C～G－47･48区Ⅱ層掘り下げ。C･D－54･55区表土剥ぎ。C～G－47～50区Ⅱ層掘り下げ。E－53・54区表土剥ぎ。C～G－47～50区ⅡB層精査，写真撮影，遺物取り上げ。

９月

C・D－52区表土剥ぎ。C～F－53・54区Ⅱ層掘り下げ。E～G－48・49区溝状遺構３・４精査。C～E－53・54区ＳＩ６号・ＳＩ７号検出写真撮影。E～G－48・49区溝状遺構３号・５号実測，完掘写真撮影。C・D－48・49区Ⅱ層掘り下げ。B～D－46・47区表土剥ぎ。C・D－54区Ⅱ層掘り下げ。C～E－53・54区ＳＩ６号・ＳＩ７号平面実測，調査。B・C－48・49区表土剥ぎ。C・D－46・47区Ⅱ層掘り下げ。C～E－46～49区Ⅱ層掘り下げ。E・F－48・49区溝状遺構断面実測，写真撮影。D－48区ＳＫ404調査。E－48区ＳＫ405調査。前迫次長現地指導。E・F－ 48・49区溝状遺構完掘，写真撮影。B・C－48区Ⅱ層掘り下げ。E－47・48区Ⅱ層掘り下げ。C・D－54区Ⅱ層掘り下げ。E・F－48・49区溝状遺構実測。D－55区ＳＫ506実測。B～E－48･49区遺物取り上げ，Ⅱ層掘り下げ。D・E－52区表土剥ぎ。D－54区ＳＫ509調査。C－54区Ⅱ層掘り下げ。D・E－48・49区Ⅱ層掘り下げ，遺物取り上げ。D－53区ＳＩ７号調査。B～G－48・49区Ⅲ層上面精査及び，Ⅱ層調査終了写真撮影。C～E－52区Ⅱ層掘り下げ。E－52区下層確認トレンチⅥ層掘り下げ。B～G－48・49Ⅲ層コンタ図作成。ＳＩ７号埋土断面写真撮影。E－52区下層確認トレンチⅥ・Ⅶ層掘り下げ。ＳＫ511調査，実測。B･C－48･49区Ⅲ～Ⅴ層重機による掘り下げ。

10月

D・E－47～49区Ⅲ～Ⅴ層重機による掘り下げ。ＳＩ７号ベルト断面実測。F－49区埋設土器１号検出状況写真撮影。A－51・52区下層確認トレンチⅦ層掘り下げ，

遺物出土状況写真撮影，遺物取り上げ。E－52区下層確認トレンチⅥ・Ⅶ層遺物取り上げ。D・E－53・54区Ⅱc層遺物取り上げ。E・F－52区下層確認トレンチⅨ層掘り下げ。C・D－48・49区Ⅵ層掘り下げ。B～D－48・49区Ⅰ層～Ⅴ層土層断面写真撮影，実測。F－49区埋設土器１／４カット断面写真撮影，実測。F－49区埋設土器土層断面調査，写真撮影。E－48区Ⅶ層遺物取り上げ。
B～E－47～49区Ⅶ層掘り下げ。ア～A－52区ＳＳ402号集石検出状況写真撮影。１トレンチⅪ層完掘写真撮影。B～E－47～49区Ⅶ層掘り下げ。A－51・52区ＳＳ402号実測。B～G－48～50区Ⅲ～Ⅴ層重機による剥ぎ取り。
11月
B～G－47～50区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。ＳＳ403号写真撮影。ＳＩ６号・ＳＩ７号完掘写真撮影。A～D－47～49区Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ。ＳＳ402号遺物取り上げ。E～G－47～49区Ⅵ層掘り下げ，遺物取り上げ。A～D－47～49区Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ。D－54区埋設土器写真撮影。ＳＳ403号実測。土器埋設遺構２号実測。B～E－47～50区Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ。F～G－47～50区Ⅵ層掘り下げ，遺物取り上げ。B～G－47～50区Ⅵ・Ⅶ層遺物取り上げ。A－51・52区下層確認トレンチ精査。C－52区下層確認トレンチ重機によるⅤ層掘り下げ。B・C－47～49区北壁Ⅳ層～Ⅻ層土層断面実測。D～F－47～50区Ⅵ・Ⅶ層遺物取り上げ。D・E－47～50区Ⅶ層掘り下げ。F・G－47～50区Ⅵ層掘り下げ。ＳＳ404・ＳＳ405実測。D～F－48・49区Ⅵ・Ⅶ層遺物取り上げ。C－52区下層確認トレンチⅥ・Ⅶ層掘り下げ。C－54区Ⅱ層掘り下げ。E～G－47～50区Ⅶ層掘り下げ。A・B－52～54区重機によるⅠa・Ⅰb層剥ぎ取り。E・F－48・49区Ⅶ層掘り下げ。A・B－52～54区Ⅱ層掘り下げ。B～E－47～49区コンタ図作成。D・E－48・49区Ⅶ層掘り下げ。B～E－47・49区Ⅷ層上面完掘状況写真撮影。E－49区Ⅶ層掘り下げ。A～C－52～54区遺物取り上げ。F・G－48～50区南側土層断面実測。A～C－49・50区重機による表土剥ぎ。
12月
A・B－49・50区Ⅱ層掘り下げ。D－53・54区ＳＩ８号調査。A・B－52～54区Ⅲ～Ⅴ層重機による剥ぎ取り。
A・B－52～54区Ⅵ層掘り下げ。C－52～54区Ⅵ層掘り下げ。B－49・50区溝状遺構写真撮影，断面実測。A・B－49・50区Ⅱ層掘り下げ。D－54区ＳＩ９号調査。A～C－52～54区Ⅵ層掘り下げ，遺物出土状況，作業風景写真撮影。B・C－50区遺物取り上げ。B・C-50区溝状遺構写真撮影。自主安全点検。E－54・55区重機による表土剥ぎ。E～G－47～50区Ⅶ層完掘写真撮影，コンタ図作成。ＳＩ８号遺物出土状況写真撮影，実測。D・E－52～55区Ⅵ層掘り下げ。A・B－49・50区溝状遺構６号・７号実測。F・G－48～50区土層断面実測。C－52区Ⅵ層ＳＳ406号検出状況写真撮影。A～C－52～54区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。A～C－52～54区Ⅵ層遺物取り上げ。B－53区Ⅵ層ＳＳ407号検出状況写真撮影。C－52区Ⅵ層ＳＳ408号検出状況写真撮影。D・E－54・55区Ⅱ層ＳＩ９号検出状況写真撮影，調査。C－53区Ⅶ層ＳＳ409号検出状況写真撮影。C－53区Ⅶ層ＳＳ410号検出状況写真撮影。C－53区Ⅶ層ＳＳ411号検出状況写真撮影。ア～B－51～53区Ⅰ～Ⅴ層重機による剥ぎ取り。ア～C－51～54区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，精査，遺物出土状況写真撮影。
１月
A～D－51～54区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。C－52区下層確認トレンチⅨ層掘り下げ。C－53区ＳＳ409号実測。A・B－49・50区Ⅲ～Ⅴ層重機による掘り下げ。D－53・54区ＳＩ８号ベルト断面写真撮影，ベルト断面実測。大久保係長現地調査。新東氏調査指導。A～C－49・50区Ⅲ～Ⅴ層重機による剥ぎ取り。ＳＩ８・ＳＩ９号調査。A～C－51～54区Ⅶ層掘り下げ。B－52区ＳＳ412写真撮影。A～C－49～53区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ。C－52区下層確認トレンチⅪb・Ⅻ層掘り下げ。A－52区下層確認トレンチⅪb・Ⅻ層掘り下げ。A～D－51～54区Ⅷ層上面精査。空撮。D・E－52～55区コンタ図作成。A～D－52～54区Ⅷ層上面コンタ図作成。C・D－50・51区重機による表土剥ぎ取り。
２月
C・D－50・51区Ⅵ・Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ。埋め戻し。ＳＩ６・ＳＩ８・ＳＩ９号完掘セット写真撮影。実測委託。ＳＩ９号炉の半裁写真撮影。ＳＩ８号炉の完掘写真撮影。A～C－49・50区Ⅷ層上面コンタ図作成。C～E－52～55区Ⅲ～Ⅴ層重機による剥ぎ取り。D－55区遺構精査。D－54区ＳＩ10号調査，実測。A～C－50・51区Ⅷ層上面コンタ図作成。D・E－52・53区Ⅶ層掘り下げ。D～F－50・51区重機による掘り下げ。C・D－50・51区Ⅷ層上面コンタ図作成。C～F－50～55区Ⅵ層掘り下げ。D－54区ＳＩ10号ベルト断面実測，写真撮影。D－51区ＳＳ417号検出状況写真撮影。C～E－52～55区Ⅵ層遺物出土状況写真撮影。D～F－50・51区Ⅵ層掘り下げ。C～E－53・54区Ⅵ層遺物取り上げ，掘り下げ。D・E－50・51区Ⅶ層掘り下げ。C～F－50～54区Ⅶ層掘り下げ，遺物取り上げ。ＳＩ10号完掘状況写真撮影，実測。D－54・55区Ⅲ～Ⅴ層重機による掘り下げ。

（調査区３）
10月
19日盛土除去，表土剥ぎ。
11月
9日Ⅰ～K-36・37区Ⅰｄ層掘り下げ，事前調査２Ｔ掘り下げ。K-36区Ⅰｄ層一括遺物取り上げ。11日K・L-35区Ⅰｄ層掘り下げ，Ⅰ・J-37区Ⅱa・Ⅱｂ層掘り下げ。K-35区一部Ⅱa層掘り下げ。16日Ⅰ～K-36・37区Ⅰｄ層，Ⅱa層掘り下げ，L・M-34・35区Ⅰｄ層，Ⅱa層上部掘り下げ,K-36区硬化面検出。J･K-36･37区Ⅱa層掘り下げ,L･M-34・35区Ⅰｄ層Ⅱa層掘り下げ，L-34・35区，M-34区遺物取り上げ,K-36区遺物出土状況写真撮影。J･K-37区，L-34・35区，M-34区遺物取り上げ。
12月
１日K～M-35区Ⅱa層掘り下げ，土坑１基検出，L・M-33・34区Ⅱa層掘り下げ，L-35区Ⅰｄ層一括遺物取り上げ。２日K・L-35区Ⅱa層掘り下げ，L・M-33～35区Ⅱa層掘り下げ，土坑１基検出。４日L-34区パミス集中区写真撮影，J・K-35・36区・K～M-33～35区Ⅱa層掘り下げ。８日K・L-35区帯状硬化面検出状況写真撮影，K-34・35区土坑１・２号検出状況写真撮影。J～L-35区Ⅱa層平板による遺物取り上げ，硬化面を平板に記録。K～M-33～35区Ⅱa層平板による遺物取り上げ，K-34・35区土坑１・２号半裁写真撮影。K・L-35区帯状硬化面写真撮影及び実測，K・L-35区軽石製品検出状況写真撮影。11日K-34区土坑１号完掘。K～M-33～36区Ⅱｂ層掘り下げ。14日Ⅰ～L-36区土層断面図作成用深掘り，I･J-37区，K-36・37区Ⅱa層遺物取り上げ，L-34区土坑１号完掘状況写真撮影，平断面図作成，L-35区土坑２号半裁状況写真撮影，J・K-36・37区Ⅱa層遺物出土状況・溝状遺構１号検出状況写真撮影。15日K～M-32～35区Ⅱｂ層掘り下げ，Ⅰ・J-37区,K-36・37区Ⅱｂ層掘り下げ，L-35区土坑２号完掘・平断面図作成，L-35区ピット１・２半裁，J・K-36・37区溝状遺構１号掘り下げ。16日K～M-34・35区Ⅱｂ層掘り下げ，遺物出土状況写真撮影，L-35区土坑２号完掘写真撮影平面図追記，L-35区ピット１・２半裁状況写真撮影・平断面図実測，J・K-36・37区溝状遺構１号断面図実測･完掘･断面写真撮影。17日J･K-36・37区溝状遺構36・37区溝状遺構１号完掘状況写真撮影･実測。I-37区溝状遺構２号検出･完掘状況写真撮影･実測，J～L-35・36区Ⅱｂ層遺物出土状況写真撮影。18日J・K-36・37区Ⅲ層検出遺構精査，L-35区ピット２完掘状況写真撮影，L-36区ピット３検出状況写真撮影・半裁。21日I～K-35～37区Ⅲ層上面コンタ図作成。L-35区ピット１平面下端実測,L-35区ピット３完掘樹痕と判断，K-36区ピット４検出状況写真撮影半裁，K～M-33～35区Ⅱｂ層遺物取り上げ，M-34区ピット５～９検出状況写真撮影・半裁・ピット８欠番，L-35区遺物集中域写真撮影，L-34区Ⅱｂ層中火山灰サンプリング。22日K～M-32～35区Ⅲ層上面コンタ図作成,K-36区ピット４半裁写真撮影，平断面実測J～M-36・37区Ⅲ層上面完掘状況写真撮影。
１月
５日Ⅰ～L-36・37区Ⅵ層上面精査，J～L-35・36区Ⅲ～Ⅴ層を重機で除去，M-34区ピット５・６・７・９箱掘り部分掘削，K～M-33～35区Ⅲ層上面遺構精査，L-35区遺物集中区落ち込み平面図作成，掘り下げ。12日区Ⅵ層掘り下げ，K～M-33～35区Ⅲ層掘り下げ，L-35区土器集中区実測。14日Ⅰ～L-36区･I･J-37区Ⅵ層掘り下げ，K-36区ピット10・11・13・15検出状況写真撮影，J-35区ピット14検出状況写真撮影，ピット10・14半裁，15日ピット10・11・14半裁・平断面実測,L-34・35区遺物取り上げ。18日Ⅰ～K-36区Ⅵ層掘り下げ，K-36区ピット10半裁状況写真撮影，ピット11平断面図作成・半裁状況写真撮影，ピット15掘り下げ・平面図作成，J-36区ピット14半裁状況写真撮影，L-35区遺物集中区炭化物出土状況実測，M-33区ピット５・６・７・９断面図作成。19日L-35区遺物集中区平断面図実測，K・L-34区先行トレンチⅥ層上面掘り下げ，M-33区ピット５・６・７・９掘り下げ。20日J-35・36区Ⅵ層上位遺物出土状況写真撮影・遺物取り上げ，K-36区ピット11・J-36ピット15半裁，M-33区ピット５・６・７・９掘り下げ(1/4),M-33区ピット９(1/4)埋土状況写真撮影。21日L-35区遺物集中区完掘状況写真撮影，J-36区Ⅵ層上位遺物取り上げ，22日Ⅰ・J-36区Ⅵ層遺物出土状況写真撮影・遺物取り上げ，J・K-35区Ⅵ層掘り下げ，I-37区Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ層火山灰サンプリング，M-34区ピット５・６・７(1/4)半裁状況写真撮影，ピット５・６・７・９掘り下げ（残り1/4部分)。26日Ⅰ・J-36・37区Ⅵ層掘り下げ，K・L-34・35区Ⅵ層掘り下げ，K-35区ピット16検出状況写真撮影，27日J-35～37区Ⅵ層掘り下げ，遺物取り上げ，K・L-34・35区Ⅵ層Ⅵ層掘り下げ，M-34区ピット５・６・７・９完掘，K-34区不明遺構検出，L-34区シミ状のシラス検出，L-34区アカホヤ直下遺物出土。28日K～M-34･35区Ⅵ層掘り下げ，K～M-34･35区Ⅵ層掘り下げ，J-35･36区遺物取り上げ，L-34区Ⅵ層遺物取り上げ，M-34区ピット５・６・７・９俯瞰・I-37区集石１号検出状況写真撮影。
２月
２日Ⅰ・K-36・37区Ⅵ層掘り下げ，I-36区集石１号検出状況写真撮影，L・M-33・34ピット検出状況平板実測，Ⅰ～K-36・37区Ⅵ層出土遺物取り上げ，ピット10・11半裁，平断面図作成。３日Ⅰ～K-36・37区Ⅵ層掘り下げ，I-36区集石１号平面図作成，J-36区集石２号検出状況写真撮影，M-33区ピット17～21検出，ピット17検出・半裁状況写真撮影，ピット17・19平面図作成。４日Ⅰ～K-36･37区Ⅵ層掘り下げ，I-36区集石１号平断面図作成，M-33区ピット17～21半裁，平面図作成，完掘，半裁・完掘状況写真撮影，L・M-33・34区Ⅲ層上面を重機により掘り下げ。５日I-36区集石１号断面図作成，J-36区集

石２号平面図作成，J・K-36・37区Ⅵ層出土遺物取り上げ，K-36区ピット10完掘状況写真撮影，K-36区ピット15号半裁状況写真撮影，断面図作成。８日I-37区集石１号断面実測，M-34区炭化物集中区平面実測，K-36区ピット11半裁完掘状況写真撮影。M-34区炭化物集中区サンプリング，K-36区ピット11平断面実測，J-36区集石２号断面実測。９日K-36区ピット13半裁状況写真撮影。10日Ⅰ～L-36・37区Ⅶ層上面精査，K-36区ピット13完掘・ピット14半裁状況写真撮影，Ⅰ・J-37区集石１・２号断面実測，M-34区炭化物集中区半裁状況写真撮影，L-34区シラスシミ状域断面確認のため掘り下げ，L-35区集石３号検出，J-36区集石２号実測。15日I-37区集石１号平断面実測，Ⅰ・J-37区Ⅵ・Ⅶ層土層断面実測L-36区集石３号検出状況・M-35区シラスシミ状域断面(1/4)・J-35区土坑３号検出状況写真撮影。16日M-35区シラスシミ状域断面(1/2)・K-35区ピット22検出状況写真撮影，Ⅰ・J-37区土層断面実測用ベルト掘り下げ，Ⅰ～L-36・37区遺物取り上げ。17日Ⅰ・J-37区土断実測用ベルト掘り下げ，J-36区遺物取り上げ，K～M-34・35区Ⅵ層掘り下げ，K-35区ピット22半裁・L-34区ピット23検出状況写真撮影，L-34区集石３号平断面実測，L-34区ピット23平面実測。18日K～M-34・35区Ⅵ層掘り下げ，M-34区ピット24検出状況写真撮影。19日L-34区ピット26・M-34区ピット25検出状況・L-34区ピット23半裁・Ⅰ～K-37区Ⅵ層完掘状況写真撮影。24日M-34区ピット24・25・26・27号掘り下げ，K～M-34・35区Ⅵ層掘り下げ，M-34区ピット24・25・26半裁状況写真撮影・平断面図作成，M-33・34区旧石器下層確認トレンチ掘り下げ。25日M-34区ピット24・25・26・27完掘状況写真撮影・平面図作成。L-34区ピット28検出・半裁。M-33・34区・K-36区旧石器確認下層確認トレンチ掘り下げ，Ⅰ・L-36・37区Ⅶ層上面コンタ図作成。

３月

L-34区ピット23・28平断面実測，K-35区ピット29平面実測，L-34区ピット23・28完掘，K-35区ピット29検出。２日K～M-34区Ⅵ層掘り下げ，M-34区炭化物集中区掘り下げ。３日K～M-34・35区Ⅵ層遺物出土状況写真撮影。M-34区炭化物集中区掘り下げ，フローテーション。４日Ⅰ～K-36区Ⅶ層上面完掘状況写真撮影，炭化物集中区写真撮影。７日K～M-34・35区Ⅵ層残存部掘り下げ，J・K-36区旧石器確認トレンチ完掘状況写真撮影。８日K～M-34・35区完掘状況写真撮影，M-34区炭化物集中域完掘状況写真撮影,K～M-34･35区Ⅷ層上面地形測量。10日K･L-34・35区北壁土層断面図作成，L-33・34区旧石器確認トレンチ北壁土層断面図作成，J～L-36・37区切り株下Ⅱ層中遺物精査。11日遺物搬出，調査区周辺清掃。14日Ⅰ～K-36・37区切り株除去，K-37区調査区壁面Ⅱ層掘り下げ，K-35区切り株下のⅥ層掘り下げ。Ⅰ～K-35～37区Ⅰｂ層からⅧ層まで土層断面実測，写真整理，写真台帳づくり。18日Ⅰ～K-36区Ⅸ・Ⅹ層掘り下げ，旧石器がないことを確認，礫の整理，写真の整理，写真の整理，Ⅰ～K－36・37区旧石器時代確認，調査終了。

(5)　整理・報告書作成事業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成25年４月から平成31年３月にかけて行った。

出土遺物の水洗い，注記，遺構内遺物と包含層遺物の仕分け，石器や一般礫の仕分け等をはじめ，土器・石器実測の委託，遺構・遺物の実測，拓本，トレース，レイアウト等や原稿執筆等の編集作業を行った。

平成25年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井ノ上秀文
調査企画	次長兼総務課長	新小田　穣
	調査課長兼	
	南の縄文調査室長	堂込　秀人
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	東　　和幸
作成担当	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	東　　和幸
	文化財主事	長﨑慎太郎
事務担当	主幹兼総務係長	有馬　博文
	主事	池之上勝太
調査指導	南九州縄文文化研究会	
	会長	新東　晃一

平成26年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	井ノ上秀文
調査企画	次長兼総務課長	中島　　修
	調査課長兼	
	南の縄文調査室長	前迫　亮一
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	大久保浩二
作成担当	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	大久保浩二
	文化財主事	福永　修一
	文化財研究員	眞邉　　彩
事務担当	主幹兼総務係長	有馬　博文

平成27年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	福山　德治
調査企画	次長兼調査課長	前迫　亮一
	総務課長	有馬　博文
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	大久保浩二
作成担当	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	大久保浩二
	文化財主事	岡本　貢一
	文化財主事	池田裕一郎
事務担当	総務係長	脇野　幸一

平成28年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	福山　德治
調査企画	次長兼調査課長	前迫　亮一
	総務課長	髙田　　浩
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	大久保浩二
作成担当	文化財主事	池田裕一郎
	文化財主事	山崎　克之
事務担当	総務係長	脇野　幸一
遺物指導		新東　晃一

平成29年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	堂込　秀人
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	髙田　　浩
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	中村　和美
作成担当	文化財主事	池田裕一郎
	文化財主事	山崎　克之
事務担当	総務係長	草水美穂子

平成30年度

事業主体	鹿児島県土木部道路建設課	
	大隅地域振興局建設部土木建築課	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所長	堂込　秀人
調査企画	次長兼調査課長	大久保浩二
	総務課長	髙田　　浩
	調査課主任文化財主事	
	兼第一調査係長	中村　和美
作成担当	文化財主事	山崎　克之
事務担当	総務係長	草水美穂子
報告書作成指導委員会		平成30年６月６日
		大久保次長ほか７名
		平成30年８月６日
		大久保次長ほか７名
		平成30年10月２日
		大久保次長ほか７名
報告書作成検討委員会		平成30年11月21日
		堂込所長ほか６名

2　遺跡の位置と環境

(1)　地理的環境

志布志市は鹿児島県の最東部で，大隅半島の東海岸（北緯31度38分，東経131度11分30秒）に位置し，北東から東側を宮崎県都城市及び串間市と接し県境をなしている。平成18年１月１日に志布志町・有明町・松山町の３町が市町村合併をした市である。北は曽於市，南西は大崎町と接し，南は太平洋に向け湾口を開く志布志湾に面している。

人間の生活に大きな影響を与える気温は，年平均16.5℃で温暖な気候である。ただし，海岸部と山間部では降霜状況を調べてみると差があることがわかる。降水量は比較的多く，年間2500㎜を測る多雨地帯である。また，志布志湾に浮かぶ枇榔島は，海流の影響を受け，熱帯，亜熱帯植物が繁茂している。

地形は，東から志布志湾に向かって緩やかに傾斜し，海岸近くで急崖となり，わずかな沖積平野を経て海岸線となる。この海岸線は，西側に砂丘海岸が続くのに対し，東側は日南層群で構成される岩礁海岸となる。市の北東部には，御在所岳（530.4m），笠祇岳（444.2m），陣岳（349.3m）の山々が連なり，東側の海岸線近くまで延びている。その西側には入戸火砕流が広く分布し，いわゆるシラス台地を形成し，志布志市の主体をしている。『原（ばる）』と呼ばれる比較的平坦な台地であるシラス台地は，南流する前川，安楽川，菱田川など大小河川による活発な浸食活動による深い浸食谷『迫（さこ）』が樹枝状に走り，大小いくつかの台地に分断されている。

また，海岸線に沿ったシラス台地の崖下には砂丘が広がっており，この砂丘上に志布志市街地が立地している。

前述の河川の流域には高位・中位・低位の三段の段丘が認められ，段丘崖下からの自然湧水によって低・中位段丘では集落が形成されてきた。一方，高位段丘では地下水位が深いため集落形成が難しく，近～現代に開かれるまでは畑地として利用されるにとどまっていた。

下原遺跡は，鹿児島県志布志市有明町伊崎田に所在し，標高約100mの舌状台地上に位置する。東西は菱田川の支流である本村川と高下谷川に開析され，北側には弥生時代中期のものとされる花弁型住居跡を検出した本村遺跡，南側には縄文時代後期の遺物が多く出土した中原（曲瀬遺跡）が所在する。

なだらかな斜面であることや近くに河川が流れていることなど地理的な条件に恵まれていることから，旧石器・縄文時代早期・前期から後晩期，弥生時代中期の遺構・遺物を検出・出土し，長期間に渡ってこの地が利用されていたことがわかる。

(2)　歴史的環境

この地域は中世において，日向国，諸方郡救仁院救仁郷とされ，志布志の名が史料で確かめられるのは，正和５（1316）年のことで，「日向方島津御庄志布志津大沢水宝満寺敷地…」（『沙弥蓮正打渡状案』）とあり，万寿３（1026）年平季基が開いた島津庄・日向諸県郡一帯の港であったと考えられている。

室町時代以降も国内外航路の要衝として栄え，1562年に著された中国の海防・地理書「籌海図編」の倭国事略に，薩摩・大隅の主要港の一つとしてあげられている「審孛署」は志布志のこととされる。

このように要衝の地であった志布志を巡って中世から戦国時代にかけ，楡井氏・畠山氏・肝付氏・島津氏と支配勢力はめまぐるしく変わり，最終的に島津氏の勢力下となり江戸時代をむかえる。

江戸期も藩境の要地で，番所・辺路番所が設置されている。志布志湊は南大隅および日向所県群の蔵米の集積地で，琉球・大坂方面などへの物資の中継地として栄えた。

近世中期には志布志千軒町といわれるほど賑わいをみせた。海運業で栄えた者の中には密貿易に従事していた者も多くいたと考えられている。

明治４年の廃藩置県により鹿児島県諸県郡志布志郷となり，同年11月には新設の都城県に，同６年には宮崎県に移管され，同９年再び鹿児島県の所管となり，同16年宮崎県再設置の際は鹿児島県にとどめられ，同県南諸県郡に属した。したがって，この地域の歴史や文化を考える上で薩摩・大隅だけでなく，日向地方の影響も考慮する必要がある。

志布志市の考古学史をみると，戦前から瀬之口伝九郎，梅原末治，島戸貞義，寺師見国氏らの多くの調査研究があり，戦後は海老原行秀，鏡山猛，小田富士雄，河口貞徳，瀬戸口望，諏訪昭千代，上村俊雄，酒匂義明氏等の諸先学の調査研究がある。これらの方々の熱心な調査・研究により，学史上重要な遺跡が多い。

なかでも『縄文銀座』と称されるほど縄文時代の遺跡が多い地域であるが，近年では主に有明町において農道整備に伴う発掘調査が行われ，弥生・古墳時代の様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

中須Ｂ遺跡・蕨野Ｂ遺跡から剥片尖頭器・角錐状石器等が，道重遺跡・和田上遺跡から細石刃等が出土しているが，調査事例は少ない。

縄文時代草創期

東黒土田遺跡・鎌石橋遺跡から隆帯文土器が出土している。特に，東黒土田遺跡では，舟形石組遺構や貯蔵穴など遺構の検出があり，この貯蔵穴より落葉性のコナラ属と思われる木の実が出土し，IntCal09による較正年代で13,400calＢＰ頃であることがわかっている。

鎌石橋遺跡でも，薩摩火山灰直下から隆帯文土器が出土している。

縄文時代早期

倉園Ｂ遺跡から前平式土器・吉田式土器・石坂式土器など早期を代表する土器をはじめ，住居跡，連穴土坑，集石などが検出されている。出口Ｂ遺跡では，前平式土器・塞ノ神式土器が出土している。この出口遺跡では，故海老原行秀氏が昭和の初期に異形石器（双角石器または独鈷石）を発見している。

また，連穴土坑の断ち割り調査を行い「シミ状痕跡」を初めて検出した下堀遺跡，耳栓が出土した稲荷上遺跡など，遺跡数が多い。

縄文時代前期

野久尾遺跡から前期を代表する曽畑式土器が出土している。撚糸文土器から須恵器まで幅広い時代にわたる遺物も野久尾遺跡では出土しているが，約5,000点の遺物のうち約80％は条痕文土器であり，志布志市の前期末から中期初頭を代表する遺物として，近年，野久尾式土器として型式認定された。

そのほか，鎌石橋遺跡，別府遺跡で曽畑式土器，轟式土器が出土している。

縄文時代中期

春日式期の竪穴建物が見つかった前谷遺跡のほか，野久尾遺跡では，突帯を口縁部に巡らせたり，波状や縦位に貼付するもので,その突帯がいわゆる「みみずばれ状」となり,底部が尖底になる野久尾式土器が出土している。形状から縄文時代中期を代表する深浦式土器との関連が考えられる。

また，京之峯遺跡でも後半に位置づけられる春日式土器が出土している。

縄文時代後期

代表する遺跡として中原遺跡と片野洞穴遺跡がある。中原遺跡では，縄文時代中期終末から後期前半にかけての土器である，南福寺式土器や阿高系の類似土器，磨消縄文土器，擬似縄文土器，指宿式土器などが多量に出土した。

特に，磨消縄文系土器で，瀬戸内地方の福田ＫⅡ式の完形に近い土器は，形態や技法は瀬戸内系であるが，胎土は地元のものであり，この時期における文化の伝播や交流を考える上で貴重な資料である。また石錘が400個を超えて出土し，これだけまとまった量の出土例は県内でも例を見ない。この遺跡のすぐ下は安楽川と尾野見川が合流する地点であり関連があると思われる。また，土器の破片を利用した土製加工品のいわゆるメンコも多量に出土している。

片野洞穴遺跡では,西平式～御領式期の動物骨や貝殻,骨針や骨鏃等の骨角器が出土している。

稲荷迫遺跡では中岳Ⅱ式の埋設土器が見つかっている。これまで全形がわかる資料がなかった中岳Ⅱ式において重要な資料が加わった。

縄文時代晩期

井手上Ａ遺跡や上苑遺跡では入佐式深鉢の埋設土器が見つかっている。特に，井手上Ａ遺跡資料は横位状態のもので類例が少ない。

小迫遺跡，飛渡遺跡では，黒川式土器とともに孔列文土器が出土している。

弥生時代

稲荷迫遺跡では，中期前～中葉の入来Ⅰ・Ⅱ式期の土坑墓が見つかるとともに，刻目突帯文土器の良好な資料が認められている。京ノ峯遺跡では，中期後半の円形・方形周溝墓が見つかっており，近畿・瀬戸内地方の影響が考えられる。

高吉Ｂ遺跡から見つかった土器により閉塞された横穴を持つ土坑に形状が近い石閉塞の土坑も見つかっている。柳町遺跡・長田遺跡・前谷Ｂ遺跡では，弥生時代中期の竪穴住居跡などが検出され，住居内からは山ノ口土器が出土している。

今回，船迫遺跡及び高吉Ｂ遺跡では，弥生時代中期の集落跡が残りのよい状態で検出されていることから，この地方の弥生時代の人々の暮らしを考察する上で重要になると考えられる。

このほか，夏井土光遺跡では前期末～中期初頭の柱状片刃石斧が出土している。また。県内で唯一の発見例である中広銅鉾が土橋遺跡で見つかっている。

古墳時代

集落遺跡は有明町において調査事例が多く，仕明遺跡では中津野～東原式期，屋部当遺跡では辻堂原～笹貫式期,長田遺跡では笹貫式期の竪穴建物が見つかっている。また，志布志町でも稲荷迫遺跡で笹貫式期の竪穴建物が見つかっている。

飯盛山古墳は志布志町夏井字牟田地内のダグリ岬で,標高約50.2ｍの丘陵の頂に残存している。日本考古学協会員故瀬戸口望氏によると,石室は後円部の頂上にあり,長さ約180㎝，幅約90㎝，高さ約90㎝の竪穴式石室だったとされる。墳端があまり広がらない，ほぼ長方形に延びた形が予想されており，墳形は柄鏡式の前方後円墳と想定されているが，昭和38年の国民宿舎建設工事により原形をとどめていない。

平成10年の調査で，古墳の外表施設である葺石を検出し，赤色顔料が塗布されている，壺形埴輪，器台形埴輪，円筒形埴輪が出土している。時期決定の指標となる須恵器や成川式土器等が出土していないため明確な年代を特定することはできないが，壺形埴輪の長胴化，円筒形埴輪が存在することから，壺形埴輪の最終段階である，4世紀末から5世紀初頭であるとまとめられている。

小牧古墳は，志布志町安楽字小牧地内の標高約51ｍの小牧台地に所在している。全長約40ｍの前方後円墳と想定されている。墳丘上では葺石の一部と見られる自然礫，軽石，土師器，須恵器等の遺物が表面採取されている。昭和59年1月10日に町指定された。

六月坂横穴墓からは，横穴墓とともに7世紀代の須恵器が出土している。志布志町内では，古墳時代に該当す遺跡の数が非常に少ないが，耕作等による撹乱や古くから生活した場所として数少ない平地を利用していたことが原因と考えられる。

古代

宝満寺跡は，志布志湾に流れ込む前川のほとり，河口からほど近い場所に所在している。宝満寺は,近世の「三国名勝図絵」にも様子が描かれ，廃仏毀釈により明治２年に廃寺となるまで，西海の華と称されるほどの寺院であった。昭和42年3月31日に県指定されている。

中世

中近世を代表する遺跡としては，国指定史跡である志布志城跡がある。志布志城は前川の河口付近，シラス台地の先端部に存在する。前川の西に北東から南西に延びた細長い丘陵の先端部に内城が存在する。

内城の西側に松尾城，高城二の丸が続き，その南に高城と新城が存在する。文治５（1189）年頃の救仁院氏の居城に始まって以来，肝付氏・島津氏など数々の領主に移り変わっており，中世の約400年間に武士興亡の歴史が繰り広げられた場所であった。

市内にはこの他，建久（1190 ～ 1198）年間に地頭弁済使安楽平九郎為成の居城とされる安楽城跡，文治４（1188）年に平重頼によって築かれたとされる松山城跡，南北朝期に救仁郷氏の居城とされる蓬原城跡などが存在する。

その他，安楽遺跡では中世前期の備前焼・常滑焼等の国産陶磁器や白磁・龍泉窯系青磁等の輸入陶磁器が見つかっている。

近世

現在の志布志小学校には地頭仮屋がおかれ，その周辺には武家屋敷が建ち並ぶ「麓」を形成していた。藩米等の集積・積出港であった前川河口には津口番所がおかれていた。

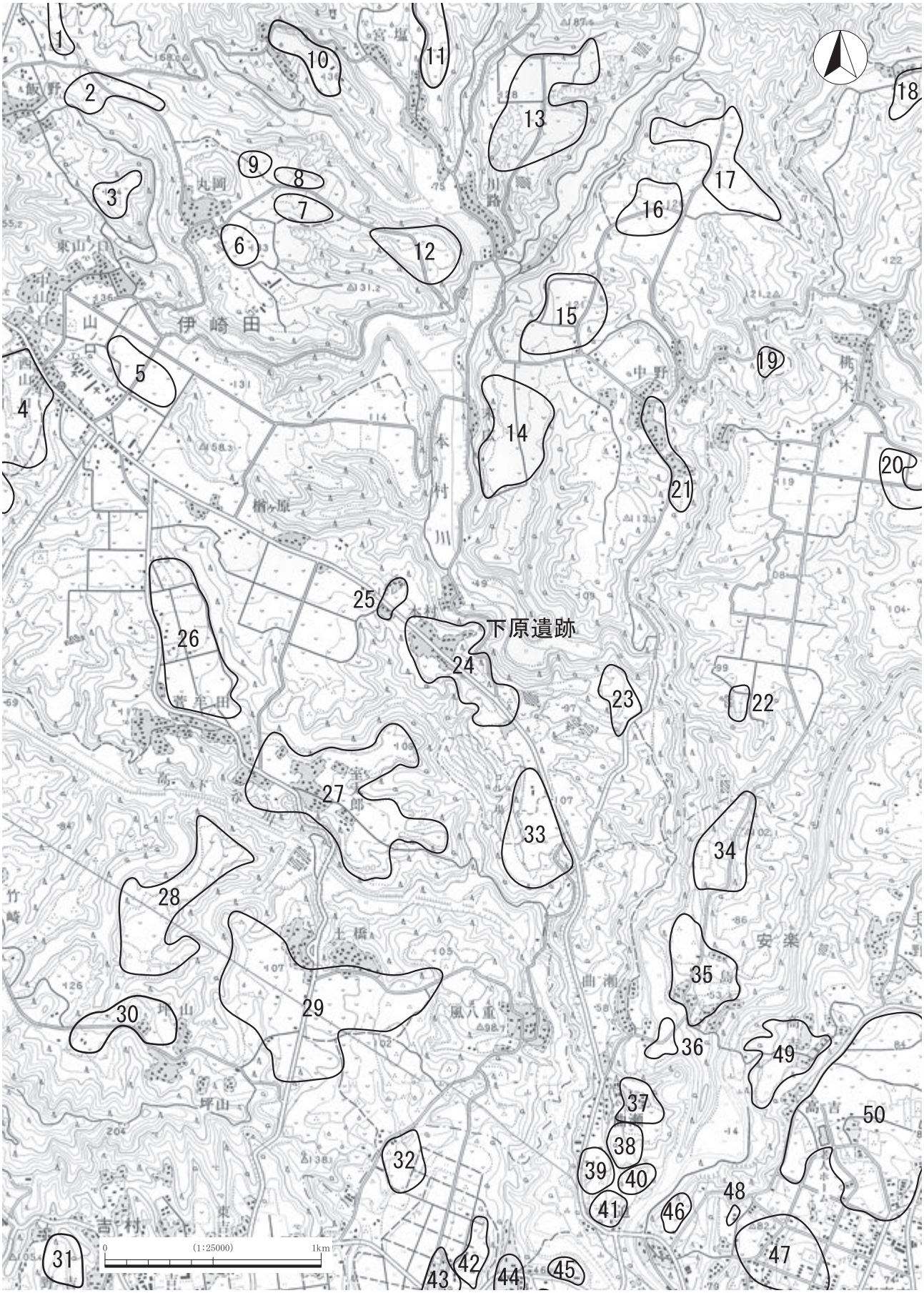
藩政末期には琉球を通して密貿易が行われ，その商人であった中山宗五郎屋敷は密貿易屋敷と呼ばれていた。これらの地頭仮屋跡・津口番所跡・密貿易屋敷跡は発掘調査が行われ，陶磁器類が出土している。

また，海岸沿いでは砂鉄が採取でき，それを用いた製鉄が行われていた。現在でも浜砂鉄が薄く堆積している状態である。

安楽川，前川などの中小河川ぞいに製鉄関連遺跡が多く確認されていることから，これらの河川を利用していたことが考えられる。

参考文献

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012『稲荷迫遺跡』
鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(169)
志布志市教育委員会　2012 『安良遺跡』
志布志市埋蔵文化財発掘調査報告書（７）
工藤雄一郎 2011『東黒土田遺跡の堅果類と縄文時代草創期土器群の年代に関する考察』
鹿児島県考古学会 1972『鹿児島考古第6号』
鹿児島県考古学会 1980『鹿児島考古第14号』
鹿児島県考古学会 1982『鹿児島考古第16号』
志布志町 1972『志布志町誌』



第１図　下原遺跡周辺遺跡　位置図

第１表　下原遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	地形	時代	遺物等
1	飯野Ｂ	伊崎田字宝永・飯野	台地	縄文	
2	飯野	伊崎田字飯野・丸岡・力石	台地	縄文（晩期）	
3	飯野Ａ	伊崎田字飯野	台地	縄文（早期・前期）	吉田式，前平式，黒川式，古道
4	山ノ口	伊崎田字馬場ヶ迫･中田･山ノ口前･檜ヶ迫	台地	縄文	石皿，石斧
5	段	伊崎田字段・檜ヶ原	台地	縄文（中期・後期）	
6	丸岡Ｂ	伊崎田字丸岡	台地	弥生	
7	東段Ｂ	伊崎田字東段	台地	古墳	
8	東段Ａ	伊崎田字東段	台地	弥生	
9	丸岡Ａ	野神字丸岡・中ノ丸	台地	古墳	
10	塩水流	伊崎田字塩水流・前谷	台地	古墳	土師器，青磁
11	石割迫	伊崎田字石割迫・関松・弓場ヶ迫	台地	古墳	
12	向江原	伊崎田字向江原	台地	縄文（晩期）	剝片石器
13	上ノ原Ａ	伊崎田字上ノ原・池田	台地	縄文（早期），中世	
14	小迫	伊崎田字小迫・鹿藤	台地	縄文，古墳	
15	鹿藤	伊崎田字鹿藤・二反田	台地	縄文	
16	札元	伊崎田字札元・山原	台地	縄文（後期・晩期），古墳	
17	山原	伊崎田字山原・宮谷	台地	縄文（晩期）	
18	大崎	尾野見字黒石・大崎	丘陵	縄文（後期・晩期）	
19	宮谷	伊崎田 7600-1		縄文	
20	鳩窪	尾野見字鳩窪	台地	弥生（中期）	
21	中野	伊崎田字中野・下原	台地	弥生	
22	大段	尾野見字大段	台地	縄文	
23	川原田	伊崎田字川原田・後迫・大道	台地	古墳	
24	下原	伊崎田字下原・後迫	台地	縄文（早期～晩期），弥生，近世，近代	
25	本村	伊崎田字本村・下原	台地	縄文・弥生	貝殻条痕文，深浦式，山ノ口式，集石，竪穴住居跡
26	見返段	伊崎田字見返段・前迫・中尾	台地	縄文・弥生	
27	立山	伊崎田字立山・上ノ園・平・室太郎	台地	古墳	
28	榎	野井倉字榎・一合田	台地	縄文・古墳	
29	土橋	野井倉字土橋・下原・土原	台地	縄文（後期）・弥生（中期）	銅矛（伝，大正 5 年発見）
30	草場	野井倉字草場・坪山・前畑	台地	弥生（後期）	
31	吉村	野井倉字吉村・野吉	台地	縄文（後期）・弥生	
32	渡迫	安楽字渡迫	台地	古代	
33	下原Ｂ	伊崎田字下原	台地	縄文（早期・晩期），弥生	
34	稲荷上	安楽字稲荷上	台地	縄文（早期・晩期），弥生，古墳	
35	稲荷迫	安楽字稲荷迫・牧	台地	縄文～古墳	
36	小迫下	安楽字小迫下	台地	縄文（早期・後期・晩期）	
37	西迫	安楽字西伯	台地	縄文（晩期）	
38	中原	安楽字中原・西伯・中渡	台地	旧石器，縄文（後期），弥生	
39	中原(曲瀬)	安楽 1106-1，字宮脇・岩下	河岸段丘	縄文（中期・後期・晩期），古墳，奈良，平安	
40	小瀬Ａ	安楽字中原	台地	縄文（後期）	
41	小瀬Ｂ	安楽字小瀬	台地	縄文（後期），弥生	
42	上原	安楽字上原	台地	弥生	
43	大久保Ｃ	安楽字大久保	台地	弥生	
44	山角Ｂ	安楽字山角	河岸段丘	縄文（後期・晩期），弥生，古墳	
45	山角Ａ	安楽字山角	河岸段丘	縄文（後期）	
46	大渡	安楽字大渡	台地	縄文，弥生	
47	船迫	安楽字船迫・大渡	台地	弥生（中期），古墳	
48	大渡Ｂ	安楽字大渡	丘陵	縄文（早期・後期）	
49	宇都上	安楽字宇都上・高吉	河岸段丘	古墳	
50	高吉Ｂ	安楽字高吉・茶馬場・雨堤	台地	弥生	

3　発掘調査の方法と成果

(1)　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理・報告書作成作業の方法について，調査区１～３をまとめて簡潔に述べていくこととする。

なお，「(2)　出土遺物の分類」については調査区で遺物の分類が異なるため，調査区別に記載した。

1　発掘調査の方法（方針）

下原遺跡調査区１～３の本調査は，平成22～27年度にかけて，表面積2,000㎡，延べ面積は，調査区１は21,200㎡，調査区２は6,800㎡，調査区３は3,340㎡を対象として実施された。

発掘調査を進めるにあたり，県道志布志福山線（有明道路）改変事業に伴う道路建設予定地の工事用基準杭「U-18区～ V-18区」を結ぶ直線を基に10m×10mのグリッドを設定し，東から西へ１・２・３・４・・・，北から南へA・B・C・・・列と呼称した。(第２図)。

調査に際しての座標は，国土座標A（X＝-164030, Y＝6480)及びB（X＝-164030, Y＝6470)である。なお，Aは，調査用グリッドのB-51区（410，170），Bは同グリッドのB-52区（410，160）にそれぞれ該当する。これを基準に10m間隔に遺跡の北から南へA，B，C･･･，東から西へ1，2，3・・・と調査区割りを設定した。

調査は，基本的には人力（主に山鍬・鋤鎌を使用）で掘り下げを行い，表土剥ぎ，無遺構・無遺物層，火山灰層等は重機を使用した。地形測量は,縄文後期及び縄文早期が主体となることからⅢ層（御池火山灰）上面及びⅧ層（サツマ火山灰）上面で行った。

遺物包含層が残存している場合は，小破片は先に設定した調査区毎に一括して取り上げ，それ以外の遺物に関しては必要に応じて写真撮影を実施した後に平板とトータルステーションを用いて取り上げた。

なお，遺構実測や遺物取り上げは調査担当者と発掘作業員で実施したが，一部，遺構実測を業務委託業者で実施した。

2　遺構の設定と検出方法

下原遺跡調査区１～３において，主な遺構・遺物は近世に相当するⅡ層，弥生時代，縄文時代後期・晩期に相当するⅢ層・Ⅳ層上面，縄文時代早期に相当するⅦ層上面にて検出・出土した。

検出された遺構は年度毎に番号を付与し，遺構の種類の略号と組み合わせたものを遺構の名称とした。例として，概ね２m四方以上のものを竪穴住居跡と認定し，検出された順にＳＩの略記号を用いた。２mに満たないものは土坑として取り扱い，検出された順にＳＫの略記号を用いた。集石は,検出した順にＳＳの略記号を用いた。

遺構の調査は，検出状況の写真撮影・実測後に，土坑は半裁，溝状遺構・帯状硬化面については埋土観察用のベルトを設定して掘り下げを行い，埋土観察後，完掘を行った。

その際，その都度写真撮影・実測により，形状や埋土の状況を記録した。共伴遺物については遺構内及び周辺のものを一括して取り上げた。

遺構の認定は，調査時に検出面や埋土の状況，規模等を総合的に判断して行った。

時期の判断については，上記の事項に加えて共伴遺物との整合性を基準に行った。

上記の点を踏まえ遺構ではないと判断したものについては欠番とした。

3　整理・報告書作業の方法（方針）

下原遺跡１～３の整理・報告書作成作業は，平成27～30年度に県立埋蔵文化財センターにて実施した。１～３について共通する事項については，この章にて一括して記載した。

(1)　平成27年度

水洗い・注記・分類・接合・遺跡周辺地形図のデジタルトレース・遺物ドット図作成のためのデータ処理，写真データの作成等を実施した。

遺物の水洗いについては，発掘現場でも行われたが，未洗いや洗いが不十分な遺物について再度行った。

注記はこれまで刊行された遺跡との重複がないように，データ管理をしている「南の縄文調査室」と連携を図り，「SMH」とした。

遺物の分類・接合は，石器については剥片石器と礫石器に大別し，石鏃・石匙・削器・石斧・磨石・石皿等に分類した。

土器については，出土区，出土層，検出遺構との共伴関係を基準に時期別・型式別に分類した。

遺物ドット図作成のためのデータ処理は，平板実測とトータルステーションで遺物を取り上げたため，データを統合する必要があった。トータルステーションで設定した測量座標を用いて平板で取り上げた遺物は出土状況図からデジタイザーを使用してデータ化してまとめた。

遺構の認定・分類は，発掘調査時に行われたことを基準に，実測図や写真等を用いて検出面，埋土の状況，完掘状況等から種類や時期を検討して確定した。

(2)　平成28年度

報告書刊行に向けて作業を進めた。土器は，未洗い分の水洗い・注記を行い，前年度までの実施分と併せて接合・実測・拓本・トレースを行った。これを文様・胎土・器形等を基準に編年分類を行い，文章・観察表・図版により特徴を記録した。

石器は，時期別・器種別に分類し実測・トレースを行い，文章・観察表・図版により特徴を記録した。



第２図　下原遺跡調査区１　調査範囲図

遺構は，前年度までに認定・分類したものを実測図や写真等を用いて検出面・埋土の状況等から再度検討・認定した後，トレースした。

これらを調査図面の所見を参考にして，時期ごとに文章・観察表・図版にまとめて特徴を記録した。

(3) 平成29年度

遺物は，前年度同様，実測・拓本・トレース・計量を継続して行い報告書掲載の体裁を整えた。これらを型式別に分類し，観察表作成・文章執筆を行った。

遺構は，トレースした図版を時期別にまとめて，観察表作成・文章執筆を行った。

(4) 平成30年度

昨年度までに実施済みの文章の加筆修正，各種図面・観察表等の修正，遺構配置図・遺物出土状況図，写真図版の作成を行い，本報告書の刊行作業を行った。

(2) 出土遺物の分類

下原遺跡調査区１では，旧石器時代，縄文時代早期・前期末中期・後期・晩期，弥生時代を中心に遺物が出土した。そこで，当該時期の遺物を，遺構内遺物も含めて時期別に分類して表記することとした。

なお，縄文時代後・晩期は同一層になり，出土状況に大差が見られないことから，遺物の時期区分が困難な面があった。このため土器は型式により後・晩期の時期を区分してあるが，石器に関しては後期の章にまとめて掲載した。

特に縄文時代早期の土器は数種の型式に及んでいるため，Ⅰ～Ⅷ類に区分して掲載し，これに準じて説明，観察表を作成した。この類別の特徴は下記のとおりである。

縄文時代前期末～後期の遺物に関しては数量が少ないため，型式による分類はせず，時期別に章を設け，口縁部から底部に至る部位順に実測図を掲載し，これに順じて説明，観察表を作成した。各類の器形・文様の特徴については本文を参照されたい。

(1) 土　　器

縄文時代

早　期

Ⅰ類＝前平式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，口縁部に横位の明瞭な貝殻腹縁部による刺突文を巡らせ，胴部には貝殻腹縁部による条痕文を施す。

Ⅱ類＝加栗山式

口縁上部には貝殻腹縁部による斜位の刺突が施され，下部には貝殻条痕による横位の調整痕が地文として残り，楔形突帯文が縦位に貼付される。

Ⅲ類＝吉田式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，口縁部に横位の明瞭な貝殻腹縁部による刺突文を巡らせ，胴部には貝殻腹縁部による押し引き文を施す。

Ⅳ類＝石坂式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，胴部に貝殻腹縁部による綾杉状の条痕文を巡らせている。

Ⅴ類＝下剥峯式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，貝殻腹縁部による刺突文が鋸歯状に施文されている。

Ⅵ類＝桑ノ丸式

３～４条の沈線を鋸歯状に施文している土器である。

Ⅶ類＝押型文土器

器面に，円形・楕円形・山形等の連続する文様を施文する土器群である。

Ⅷ類＝苦浜式

口縁部の楔状の瘤に貝殻腹縁部による縦位の刺突文が施文されている。

その他の土器

細片もしくは個体数が少量のため，分類できなかったものを一括した。

前　期

曽畑式

中　期

凹線文が施される土器群として一括した。

後　期

磨消縄文系土器

松山式

外反気味に立ち上がり，口縁は断面三角形状である。口縁部外面は２条の貝殻刺突連点文の間に凹線と刺突が施される。

中岳Ⅱ式

口縁は外反し，端部に１条の沈線が巡る。胴部最大径部分に２条の沈線が巡り，その間に凹点が施文される。

晩　期

型式による分類はせず一括して掲載した。

弥生時代

早期・前期

中期（山ノ口Ⅱ式相当）

(2) 石　器

旧石器時代

剥片石器と礫石器に大別した。剥片石器は細石刃，細石刃核，作業面再生剥片・調整剥片・使用痕剥片，削器・尖頭器，剥片としてまとめて記載した。

縄文時代　早期～晩期

剥片石器と礫石器に大別した。早期の石鏃は基部の形状，製法の相違基準にした（本文参照）。その他の石器は用途の別を基準に分類した。

ただし，後期・晩期の石器は，少量の器種については細かな分類はしなかった。

なお，遺構内遺物は包含層遺物とは別に各遺構の説明とともに記載した。

(3) 層序

下原遺跡１～３の基本土層・遺物包含層は，以下のように整理した。排水施設の埋設や畑作による削平，また場所によっては起伏や傾斜などにより基本層序と一致しない地点もあった（層序は調査区１のみに掲載した）。



Ⅰa層　現耕作土（一部P1を含む）

Ⅰb層　旧耕作土

Ⅱa層　黒色土

Ⅱb層　黒褐色土
（縄文後・晩期，弥生時代遺物包含層）

Ⅱc層　暗褐色土
（縄文後期・晩期遺物包含層）

Ⅲ層　黄褐色火山灰土(御池火山灰)

Ⅳ層　暗黄茶褐色土（池田降下軽石含む）

Ⅴ層　暗橙褐色火山灰(アカホヤ火山灰)

Ⅵ層　黒色硬質土
（縄文時代早期遺物包含層）

Ⅶ層　黒褐色硬質土
（縄文時代早期遺物包含層）

Ⅷ層　明黄褐色土層(薩摩火山灰層，
桜島噴出物P14)

Ⅸ層　暗褐色粘質土
（旧石器時代遺物包含層）

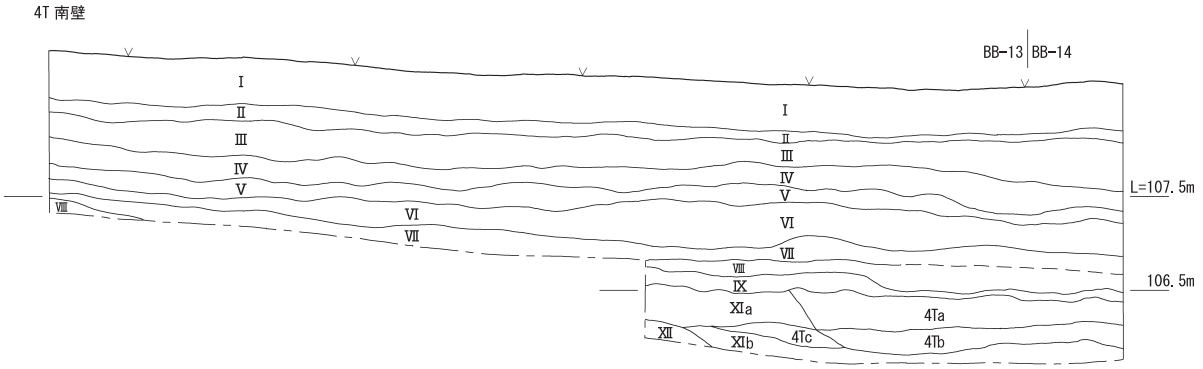
Ⅹ層　黒色粘質土
（旧石器時代遺物包含層）

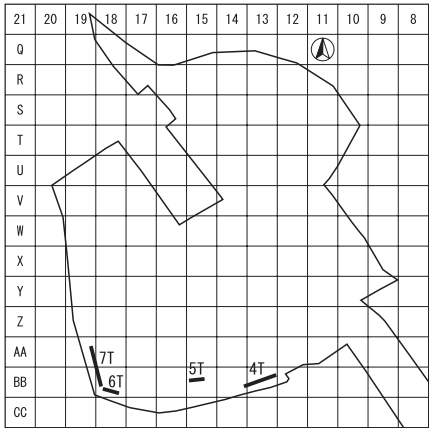
XIa層　黄褐色土

XIb層　黄褐色土
（黒色硬質ブロック含）

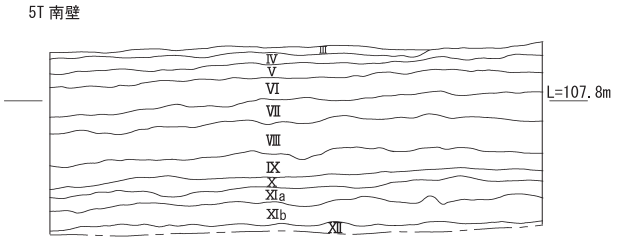
XII層　黄褐色軽石混土
（シラス層）

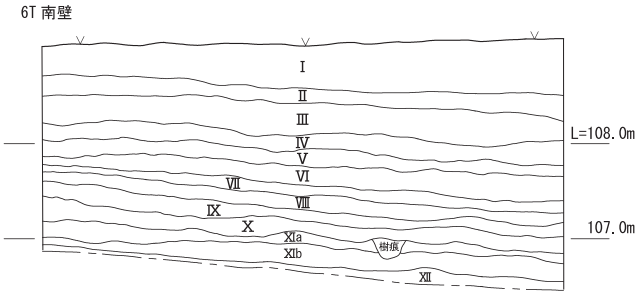
第３図　基本層序図

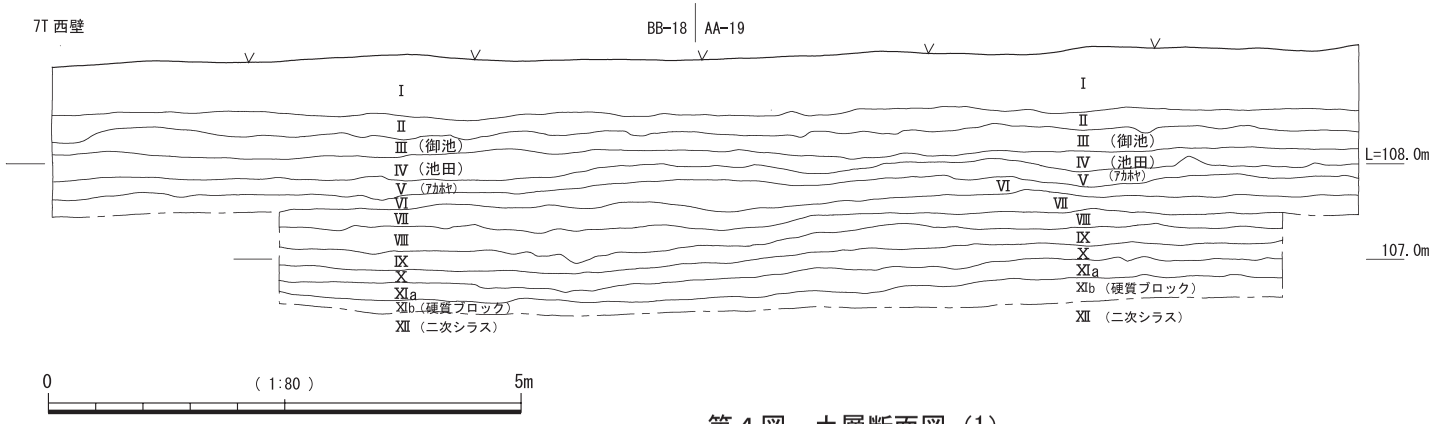




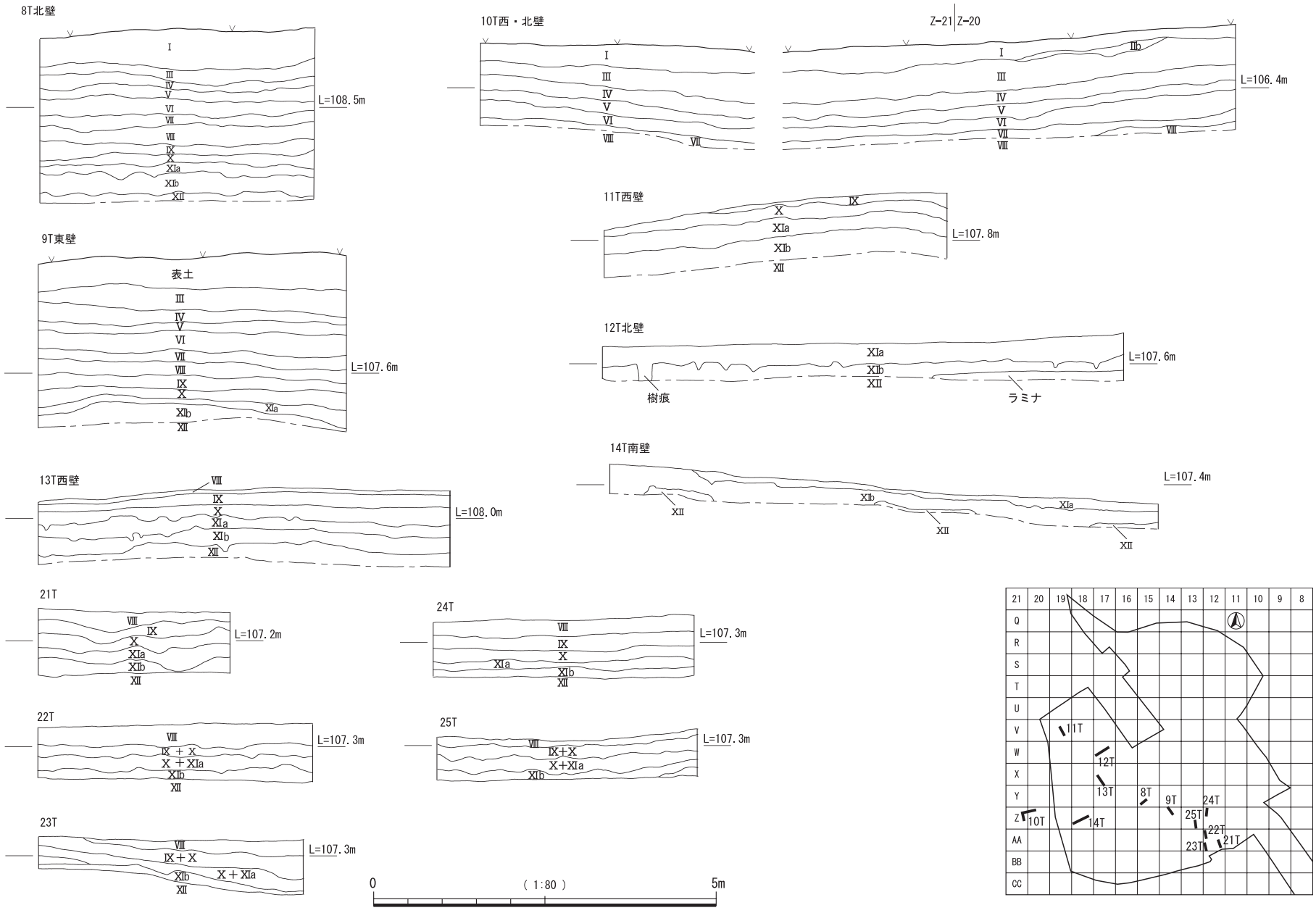
第４図　土層断面位置図





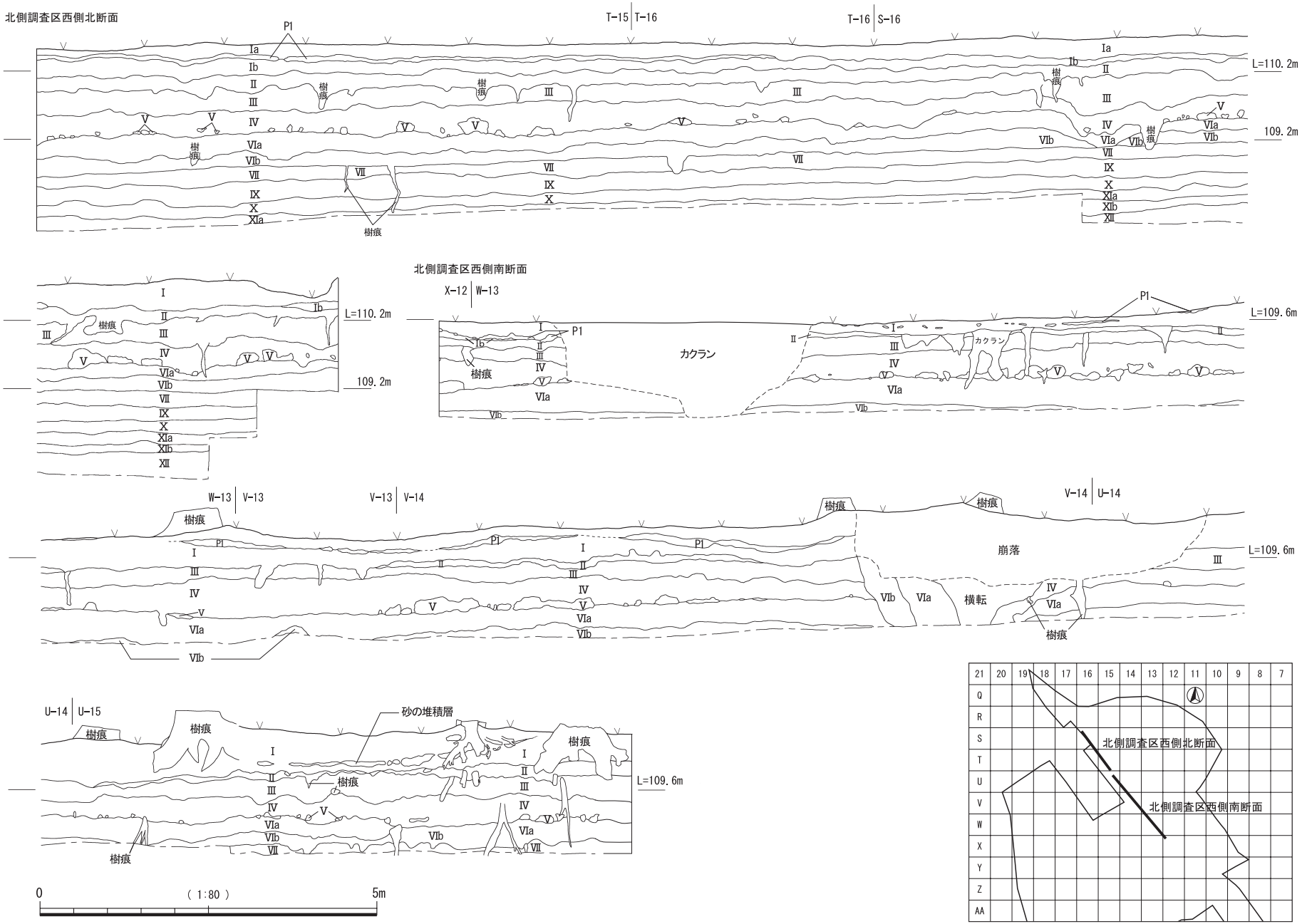


第４図　土層断面図（1）



第５図　土層断面図（2）

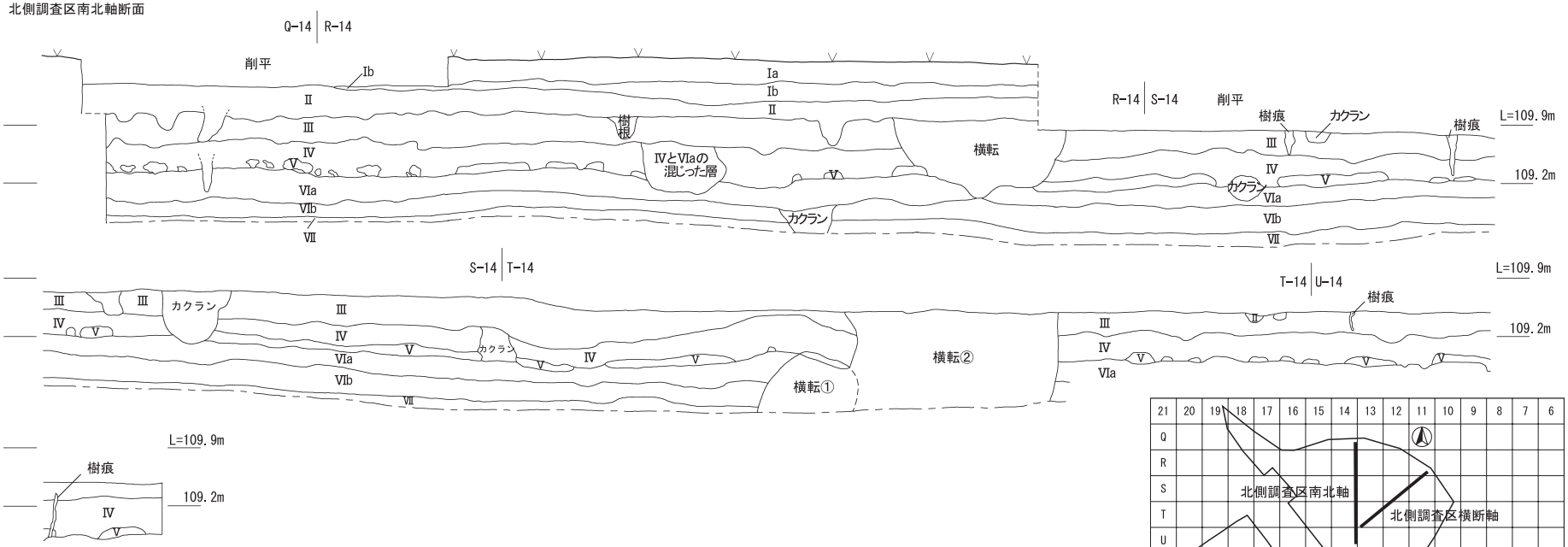
第５図　土層断面位置図



第６図　土層断面図（3）

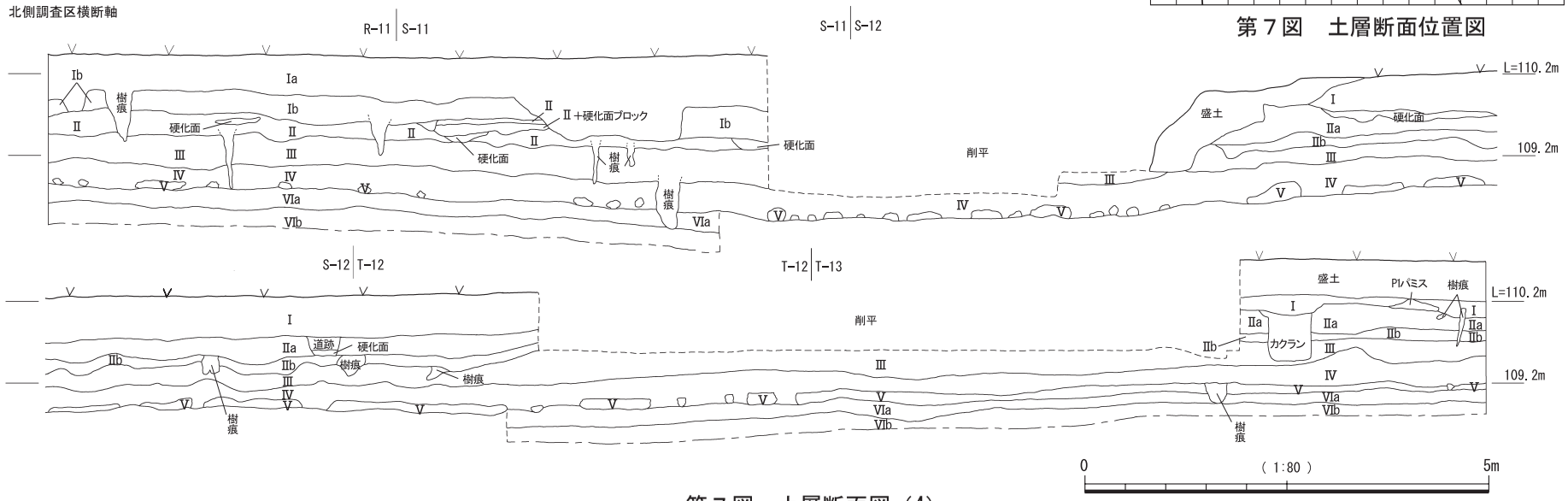
第６図　土層断面位置図

北側調査区南北軸断面

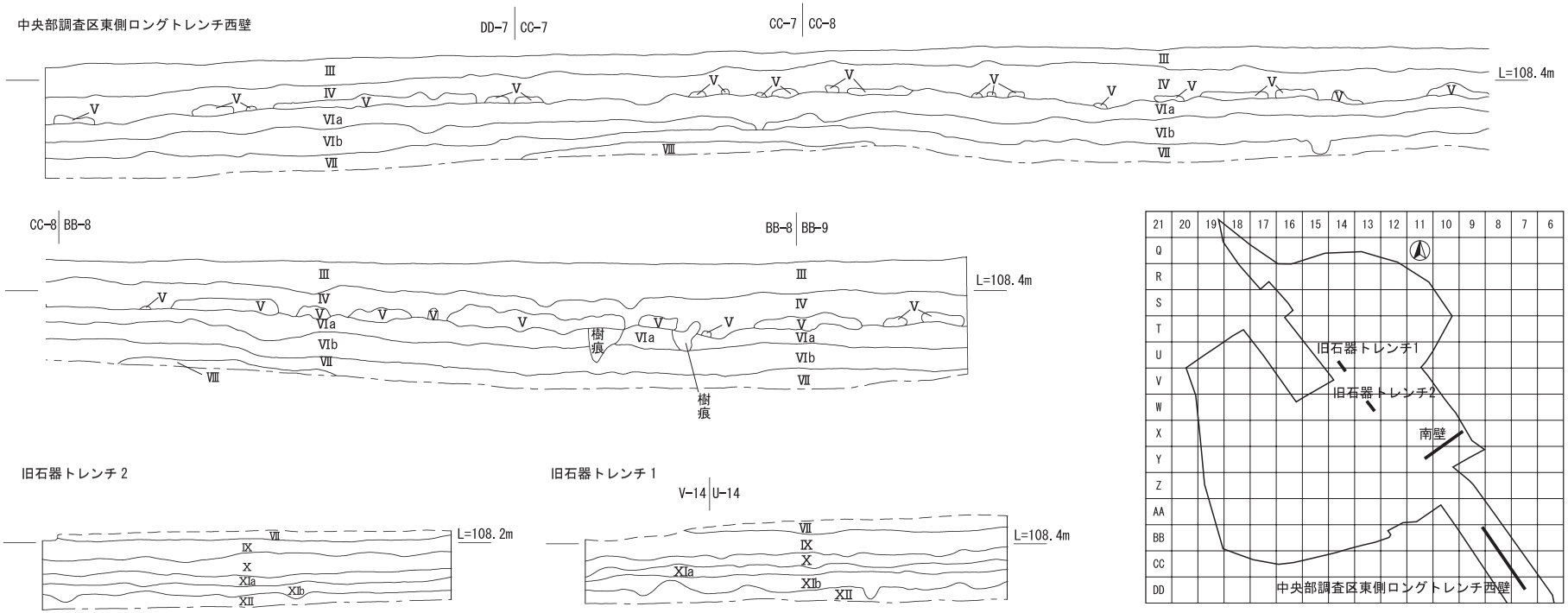


第７図　土層断面位置図

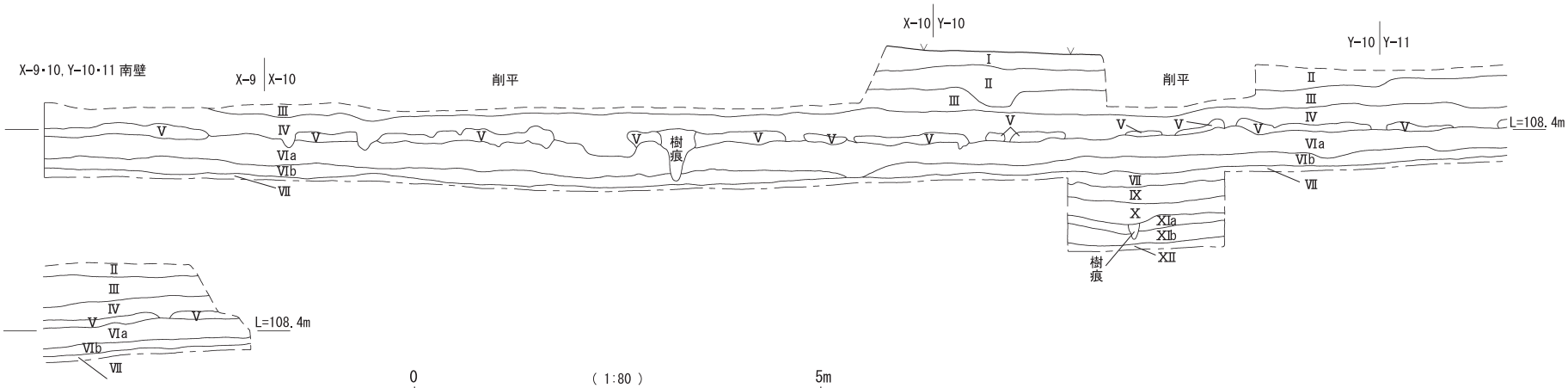
北側調査区横断軸



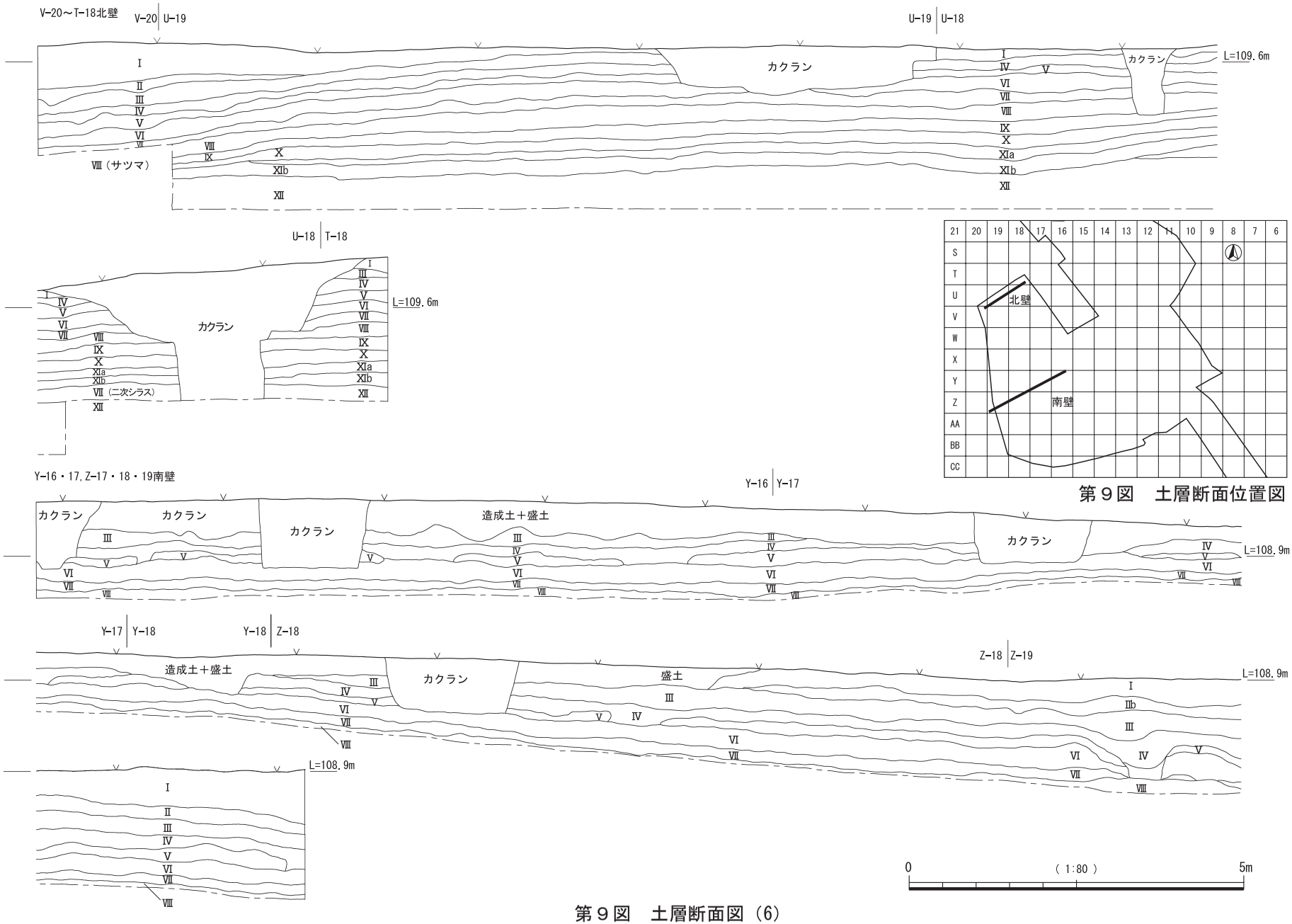
第７図　土層断面図（4）



第８図　土層断面位置図

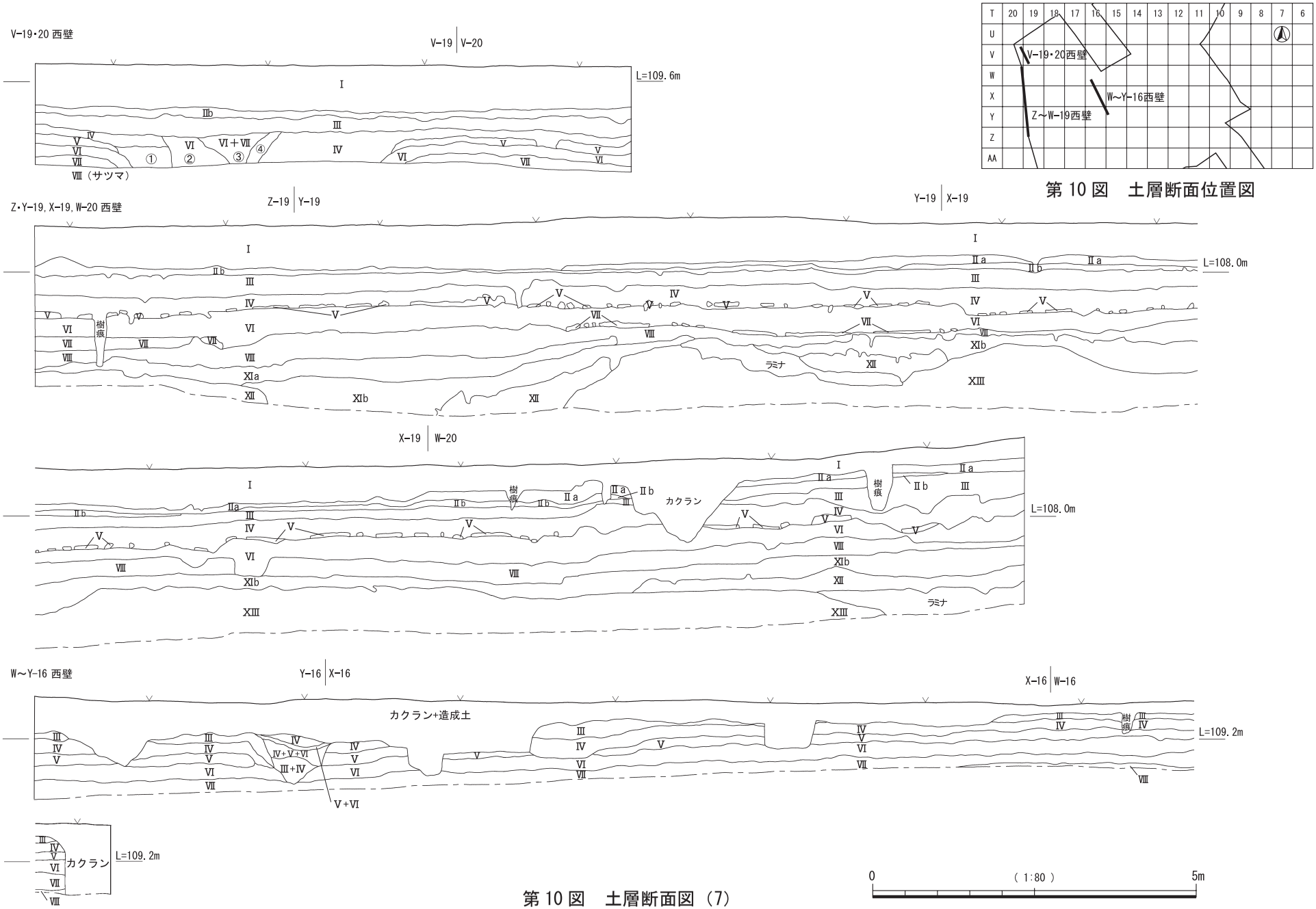


第８図　土層断面図（5）



第９図　土層断面位置図

第９図　土層断面図（6）



第 10 図　土層断面位置図

第 10 図　土層断面図（7）

(4)　調査の成果

ア　調査の概要

確認調査の結果，Ⅱｂ・Ⅲ層と，Ⅴ層（アカホヤ火山灰）とⅧ層（薩摩火山灰　P14:桜島起源）に挟まれたⅥ・Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ層において包含層が確認された。

本調査では，Ⅰ層は旧耕作土のため重機により掘削し，Ⅱ・Ⅲ層は人力で掘り下げ，Ⅲ層下面（御池火山灰に相当）～Ⅴ層（アカホヤ火山灰に相当）を重機により掘削したのち，包含層であるⅥ・Ⅶ，Ⅸ・Ⅹ層を人力で掘り下げた。

その結果，出土した遺物により，Ⅱ・Ⅲ層は弥生時代～縄文晩期・後期，Ⅵ・Ⅶ層は早期，Ⅸ・Ⅹ層は旧石器時代の包含層とした。

各時代・時期の遺構・遺物については各項にて詳述する。

イ　旧石器時代

（ア）　調査の概要

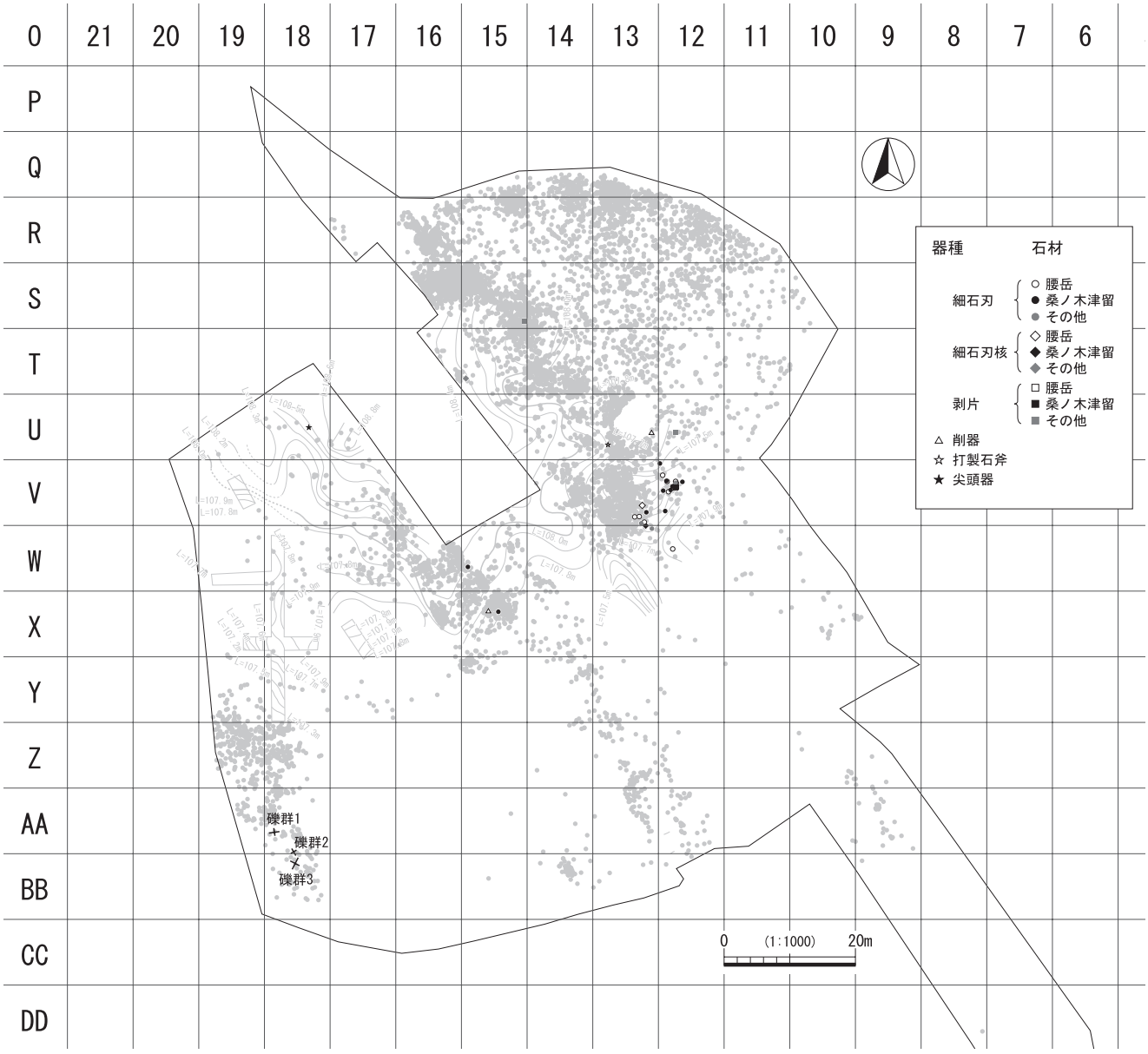
遺構・遺物ともに少量であるが，遺跡西側のⅨ・Ⅹ層で礫群や細石刃核，細石刃，スクレイパー，剥片が数点出土している。遺物・遺構の出土検出状況図は，その範囲のみを掲載した。

（イ）　遺　　構

礫群１（第12図）

AA-18区，Ⅹ層で検出された。３～10cm以内の小礫が24点散逸した状態で検出した。

焼土や明確な掘り込みは見られない。検出地点周辺に礫が広がっていたことから，本来中央部に集まっていた礫が，経年により散逸したと考えられる。



第 11 図　旧石器時代の遺構配置　遺物出土状況図

礫群２（第12図）

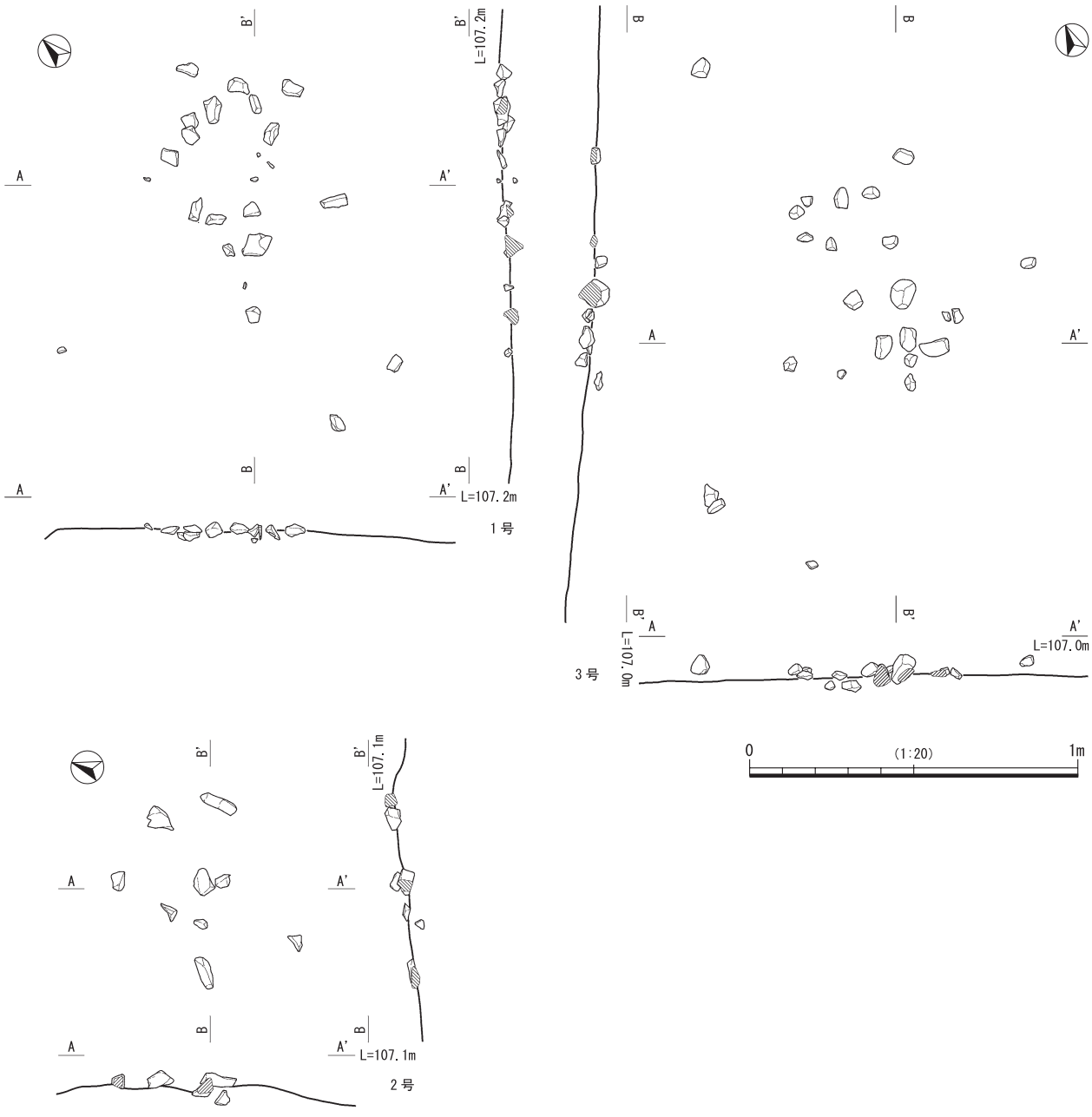
AA-18区，Ｘ層で検出した。３～10cm以内の小礫が９点散逸した状態で検出した。数点を除き礫は破砕によるヒビが入っていた。明確な掘り込みは見られない。

隣接する礫群３よりわずかに高いレベルで検出された。検出面は礫群３に向かって緩やかに傾斜していくため，本来は高所にあった礫が経年により下方へ散逸したことも考えられる。礫群３に比して角礫が多い。

礫群３（第12図）

BB－18区，Ｘ層で検出した。３～10cm以内の小礫が24点，1.4×1.0m四方の範囲に散逸した状態で検出した。明確な掘り込みは見られない。

北側50cm辺りのわずかに高いレベルで礫群２が検出されている。このことから礫群２が主体部で，礫群３は傾斜により散逸した礫の一部とも考えられる。



第 12 図　旧石器時代礫群１～３

（ウ） 遺　物

少量ではあるが，Ⅸ・Ｘ層にて細石刃核2点，細石刃23点，石核２点，スクレイパーが出土している。出土区はU-14 ～ Ⅴ－12区の範囲に収まっている。

細石刃（第13図　１～ 23）

23点出土している。内訳は完形品５点，頭部７点，中間部９点，尾部２点である。最大長0.６～ 1.5cm，最大幅0.35 ～ 0.8cm，最大厚0.１～ 0.25cm以内で全体的に小型である。１～５は剥片として頭部から端部までのもの，６～９は頭部(打点)のみ，10 ～ 23は頭部や尾部などが折断され細石刃として使用されたと考えられるものである。

石材は，４，13，14，15，16，18，19，22は，不純物の少ない良質の黒曜石で，不透明の黒曜石である。

２，３，６，７，８，９，11，12，17，20，21，23は，やや気泡を含むが不純物を含まない飴色の透明な黒曜石で，桑ノ木津留産の黒曜石のものと思われる。１，５は上記の２種と異なる黒曜石，10はチャートである。

細石刃として使用されたもののうち，使用痕等が顕著なものについて述べる。

１は両側縁に微細な刃こぼれがあり，腹面全体に線状痕が顕著である。２は腹面左側縁に微細な剥離が，５は腹面の両側縁に微細な剥離がある。

10は幅広で側縁がかなり不規則な形の細石刃を使い，中央部を植刃としたもので，背面の右側縁微細な刃こぼれがある。腹面の基部側にはリングの膨らみに沿って磨りガラス状になった摩滅痕がある。

11は細石刃の基部を折りとり，中部と末端を植刃している。背面の左側縁に微細な刃こぼれがあり，その内側には側縁と平行した線状痕が多く残る。

13は腹面の全体に側縁と平行に顕著な線状痕が多く残る。14は背面右側縁に剥離と，側縁に直行する線状痕があり，腹面は左側縁の微細な刃こぼれと腹面全面に線状痕が残る。背面からみて右側が装着部分だったためかと考えられる。15は背面左側縁に微細な剥離がある。17は摩耗のためか全体が鈍く光り，背面左側に微細剥離，腹面全面に側縁と平行に線状痕がある。18は背面左側縁に微細剥離，右側下につぶれたような跡がある。19は腹面左側縁に微細剥離がみられる。これらの微細な剥離や線状痕は，骨製穂先への装着と使用に関係する痕跡の可能性がある。このように考えると，これらの細石刃は使用されたもので，差し替えられたものを多く含むものと考えられる。

細石刃核（第13図　24・25）

U－14，Ⅴ－12区のⅨ・Ｘ層で出土している。24は，剥片素材で折断面を打面として，作業面側にのみにわずかに打面調整剥離がみられる。また，作業面と反対側の稜に剥離があり，作業面の下側からの剥離もあり，両極打法が用いられた可能性があり，併せて固定具を使用した可能性がある。25は礫素材の細石刃核で，作業面から打面調整剥離がみられる。底面には礫面が残る。石材はいずれも黒曜石であるが，24は不純物が少なく良質で光りにかざすと赤色が入る不透明の黒曜石で，前述の前者の不透明の細石刃の石材と同じと考えられ，25はやや気泡を含むが，不純物の少ない飴色の透明の桑ノ木津留産である。これは透明の細石刃と石材が共通すると考えられる。この分布状況については第11図にある。

作業面再生剥片・調整剥片・使用痕剥片（第13図　26 ～ 29）

26は，背面には横方向からの剥離痕があり，下縁調整痕もわずかに見られることから，作業面を形成する際に剥離された調整剥片である。これは25の細石刃核の調整剥片の可能性がある。

27は，背面の上半には細石刃剥離の痕跡が残り，末端側に両面調整ブランク製作時の稜が残る。両面調整素材の細石核，または両面から下縁調整が施された細石刃核の作業面再生剥片である。25の細石刃核と同一の石材であるが，この細石刃核には下縁は礫皮があり調整が見られず，同じ石材の別の石核のものであろう。

28は，断面形が三角形になる石核調整剥片である。稜の片側に礫面が残されるが，もう一方は丁寧な剥離が入る。片側が礫面のままで，両面調整ブランクの稜部とは考えにくいが，礫面が残る形で石核整形したブランクであれば，スポールの可能性もある。29は縦長剥片の折れたもので，桑ノ木津留産の黒曜石である。

削器・尖頭器・掻器（第13・14図　30 ～ 32）

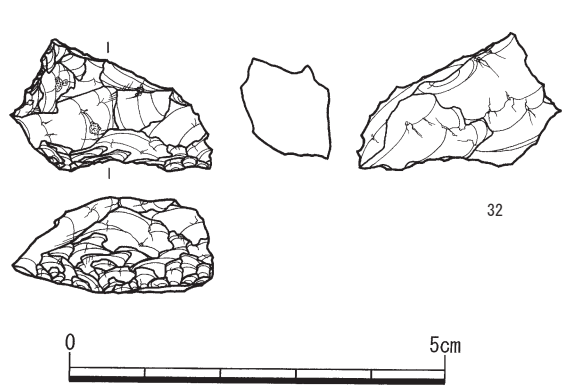
30は削器である。剥片の折れ面のエッジを使い，直線的な側縁に平坦剥離による鋭い刃縁をもつ。腰岳産の黒曜石。31は，先端を欠くが，横剥ぎ剥片の周縁を整形した尖頭器と思われる。石材はチャートである。32は横剥ぎの剥片で，腹面から剥離して掻器として使用した。不純物・気泡の多い黒曜石であり，三船産の黒曜石と思われる。

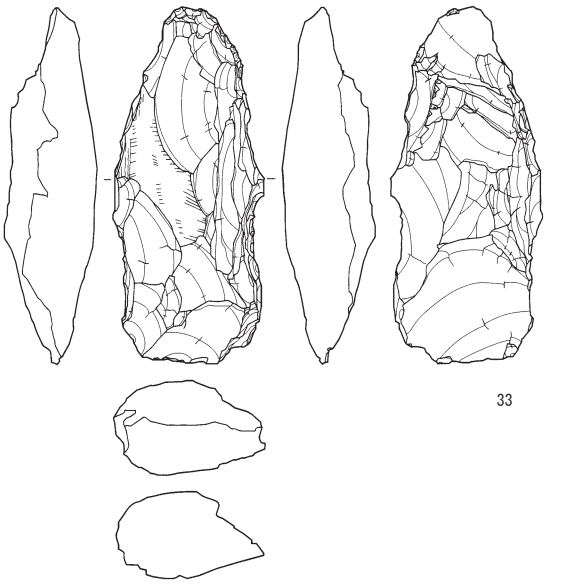
打製石斧（第14図33）

33は胴部に研磨面を残すことから，もともと伐採斧である。破損後に再整形して利用使用としたものであろうか。黒色頁岩である。



第 13 図　旧石器時代遺物（1）



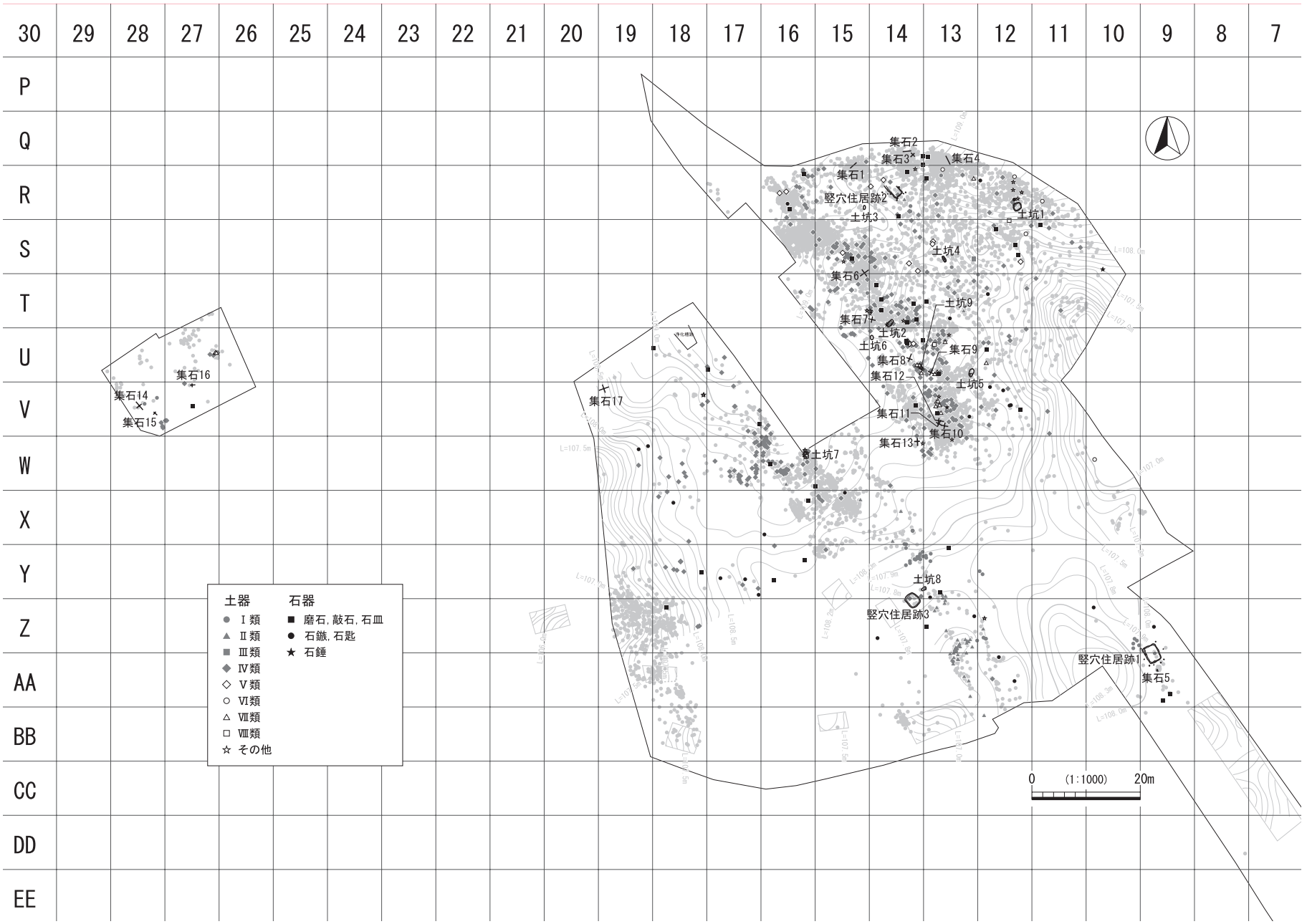


第 14 図　旧石器時代遺物（2）



表２　旧石器時代　遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（ｇ）
13	1	W－13	Ⅸ	8135	細石刃	黒曜石	1.2	0.6	0.15	0.1
	2	W－15	Ⅸ	19156	細石刃	黒曜石	1.3	0.4	0.18	0.05
	3	V－12	Ⅹ	8264	細石刃	黒曜石	1.45	0.75	0.25	0.22
	4	V－12	Ⅸ	8154	細石刃	黒曜石	0.85	0.4	0.2	0.07
	5	V－13	Ⅸ	8140	細石刃	黒曜石	1.08	0.5	0.18	0.07
	6	V－12	Ⅸ	5195	細石刃	黒曜石	0.75	0.75	0.15	0.08
	7	V－12	Ⅸ	5186	細石刃	黒曜石	0.75	0.6	0.1	0.04
	8	V－12	Ⅸ	5189	細石刃	黒曜石	0.65	0.55	0.1	0.04
	9	V－12	Ⅸ	5196	細石刃	黒曜石	0.7	0.55	0.15	0.03
	10	V－12	Ⅸ	5190	細石刃	チャート	1.55	0.8	0.3	0.22
	11	X－15	Ⅹ	19186	細石刃	黒曜石	1.4	0.5	0.3	0.12
	12	V－13	Ⅸ	8146	細石刃	黒曜石	1.5	0.7	0.2	0.14
	13	V－12	Ⅹ	5205	細石刃	黒曜石	1	0.45	0.18	0.11
	14	V－13	Ⅸ	8142	細石刃	黒曜石	1.05	0.5	0.2	0.1
	15	V－12	Ⅸ	5192	細石刃	黒曜石	1.1	0.53	0.2	0.07
	16	W－12	Ⅸ	8131	細石刃	黒曜石	0.7	0.35	0.16	0.03
	17	V－12	Ⅸ	8153	細石刃	黒曜石	1.2	0.55	0.25	0.16
	18	V－13	Ⅸ	8149	細石刃	黒曜石	0.7	0.4	0.1	0.04
	19	V－13	Ⅸ	8147	細石刃	黒曜石	0.57	0.55	0.15	0.05
	20	V－12	Ⅹ	5202	細石刃	黒曜石	1.5	0.7	0.15	0.12
	21	V－12	Ⅸ	8155	細石刃	黒曜石	0.8	0.75	0.25	0.17
	22	V－12	Ⅸ	8260	細石刃	黒曜石	0.75	0.55	0.15	0.04
	23	V－12	Ⅹ	5203	細石刃	黒曜石	0.75	0.7	0.13	0.05
	24	V－13	Ⅹ	8162	細石刃核	黒曜石	1.8	1.18	1.9	3.16
	25	W－13	Ⅸ	8137	細石刃核	黒曜石	1.7	1.2	1.75	3.16
	26	V－12	Ⅸ	5200	細石刃核調整剥片	黒曜石	2.28	0.65	0.55	0.59
	27	U－12	Ⅸ	8259	作業再生剥片	黒曜石	3.6	1.2	1.1	2.95
	28	V－12	Ⅸ	5199	スポール	黒曜石	1.45	3.9	0.8	3.36
	29	S－15	Ⅸ	7432	使用痕剥片	黒曜石	1.75	2.25	0.35	1.01
	30	U－13	Ⅸ	8256	削器	黒曜石	3.1	1.5	0.72	2.54
	31	U－18	Ⅹ	16695	尖頭器	チャート	2.8	1.03	0.67	2.72
14	32	X－15	Ⅹ	19184	掻器	黒曜石	2.7	1.75	1.3	4.15
	33	U－13	Ⅸ	8247	打製石斧	黒色頁岩	9.4	4.02	2.4	90.57



第15図　縄文時代早期の遺構配置・遺物出土状況図

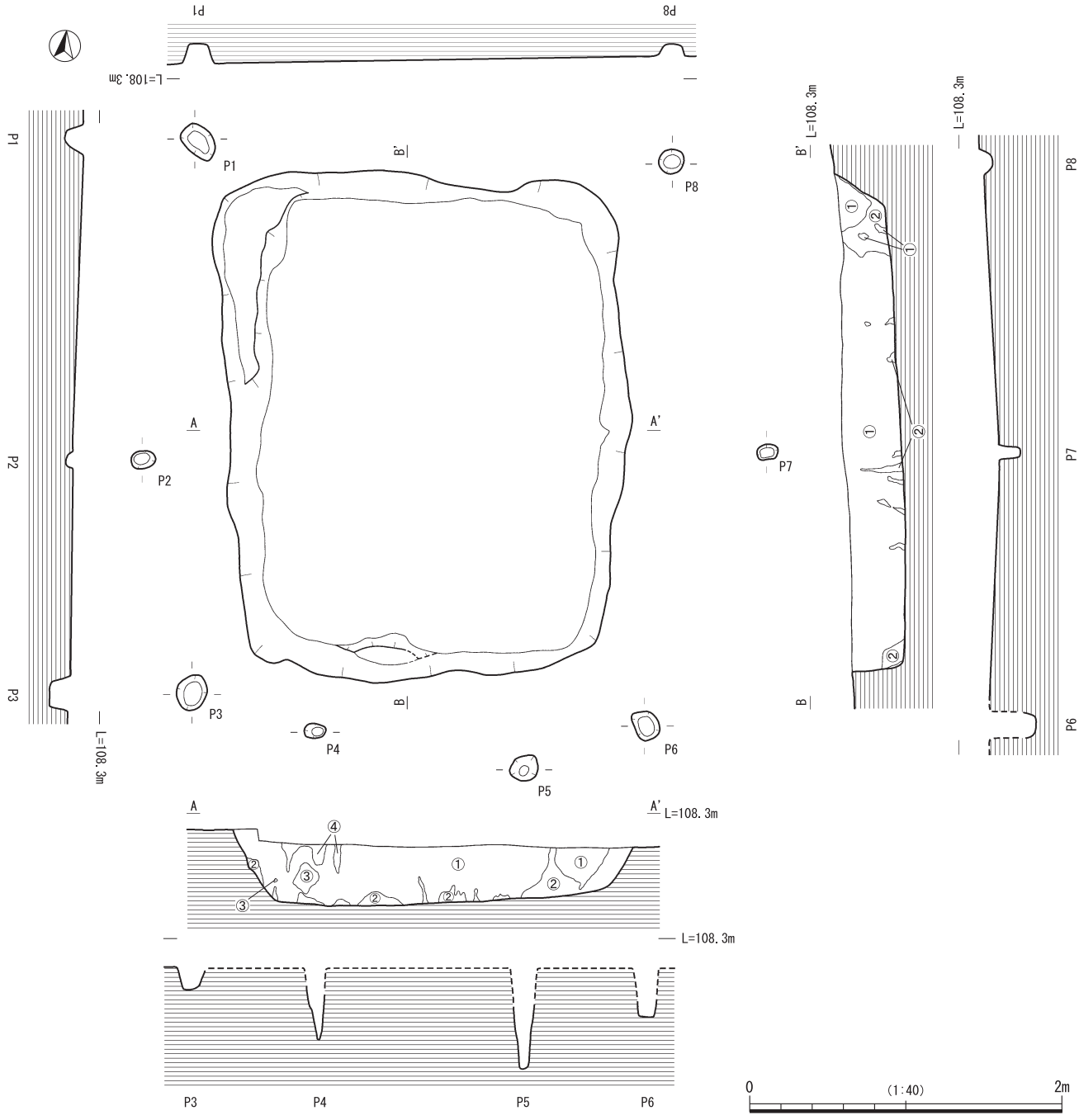
ウ　縄文時代早期

（ア）調査の概要

本調査区の主体となる時期である。遺構・遺物ともに多く，Ⅵ～Ⅷ層にかけて，集中がみられるのがR ～ AA－13・14区である。土器は早期の時期全体に及ぶ形式が出土している。石器は，剥片石器に比して磨石・石皿などの礫石器が多くみられた。

遺構の検出状況は，Q・R－13 ～ 15区で，竪穴住居跡に近いエリアで集石が４基,土坑が１基検出されている。ここから２グリッド南のT・U・V・W－13・14区では，集石が７基，土坑が4基検出されている。遺物の出土も多くみられる区域である。

また，Z・AA－９区では竪穴住居跡と集石，土坑が各１基検出されている。



第 16 図　縄文時代早期　竪穴住居跡１

（イ）遺　　構

竪穴住居跡１（第16図）

Z・AA－９区，Ⅶ層上面で検出された。長軸324cm，短軸260cmを測り，形状は隅丸方形を呈する。調査時の検出はⅦ層上面であるが，埋土の黄橙色パミスを含む土が上層の黒褐色土に混在することが認められたので，本来の掘り込みはⅥ層と考えられる。図中のP3～６上面は調査中の掘削により削平を受けていたため，破線により想定の掘り込み面を提示した。検出面上面，壁面で土器小片が1点ずつ出土している。

南端部の床面近くでは少量の炭化物が検出された。床面はほぼ平らになっているが，炭化物の集中やピット等は検出されなかった。10m以内で集石5が検出されている。

埋土①は黒褐色土で２～5㎜の橙色パミスを多く含む。②は暗褐色土でやや粘性，パミスは含まない。③はにぶい黄褐色土で，橙色パミスを含む。境界ははっきりせず薄いブロック状になる。④は黒褐色土で，①より明るい色調である。パミスは含むが①より少ない。

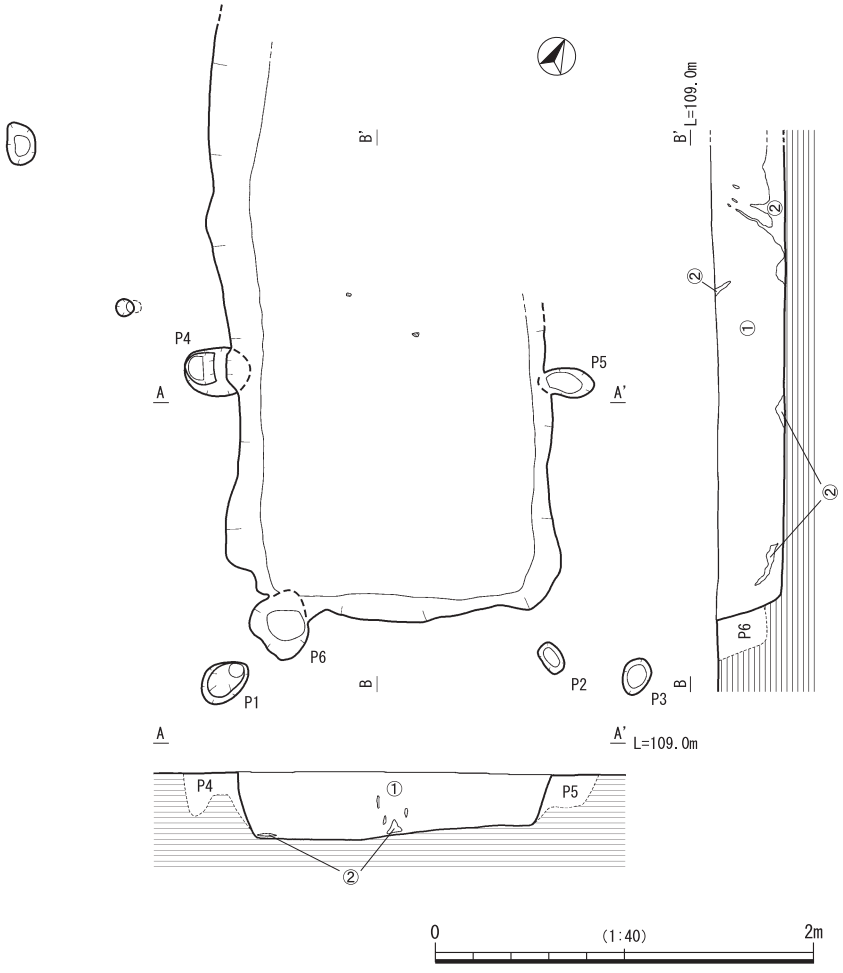
竪穴住居跡２（第17図）

R－14区，Ⅶ層上面で検出された。埋土は，黄橙色パミスを含む黒褐色土が大半を占め，これに樹痕由来と考えられるやわらかい暗褐色土が混在していた。共伴遺物は土器片，チャート剥片各1点と，床面及び床面直上で炭化物が確認された。床面でピットは検出されなかったが，周辺から４基のピットが検出された。（紙幅の都合により２基のみ掲載した）

Ｐ１は竪穴部分と同一の埋土で形状がしっかりとしていた。Ｐ４・５も埋土は竪穴部分と同一である。

Ｐ６は埋土にⅦ層が多く含まれる他のピットよりも，埋土が若干やわらかく，樹痕もしくは調査時に掘り込み過ぎたことも考えられる。周囲10m以内で集石４基，土坑１基が検出されている。

埋土①は黒褐色土で黄橙色パミスを含む。②は暗褐色土で，やわらかく樹痕に由来するものと考えられる。



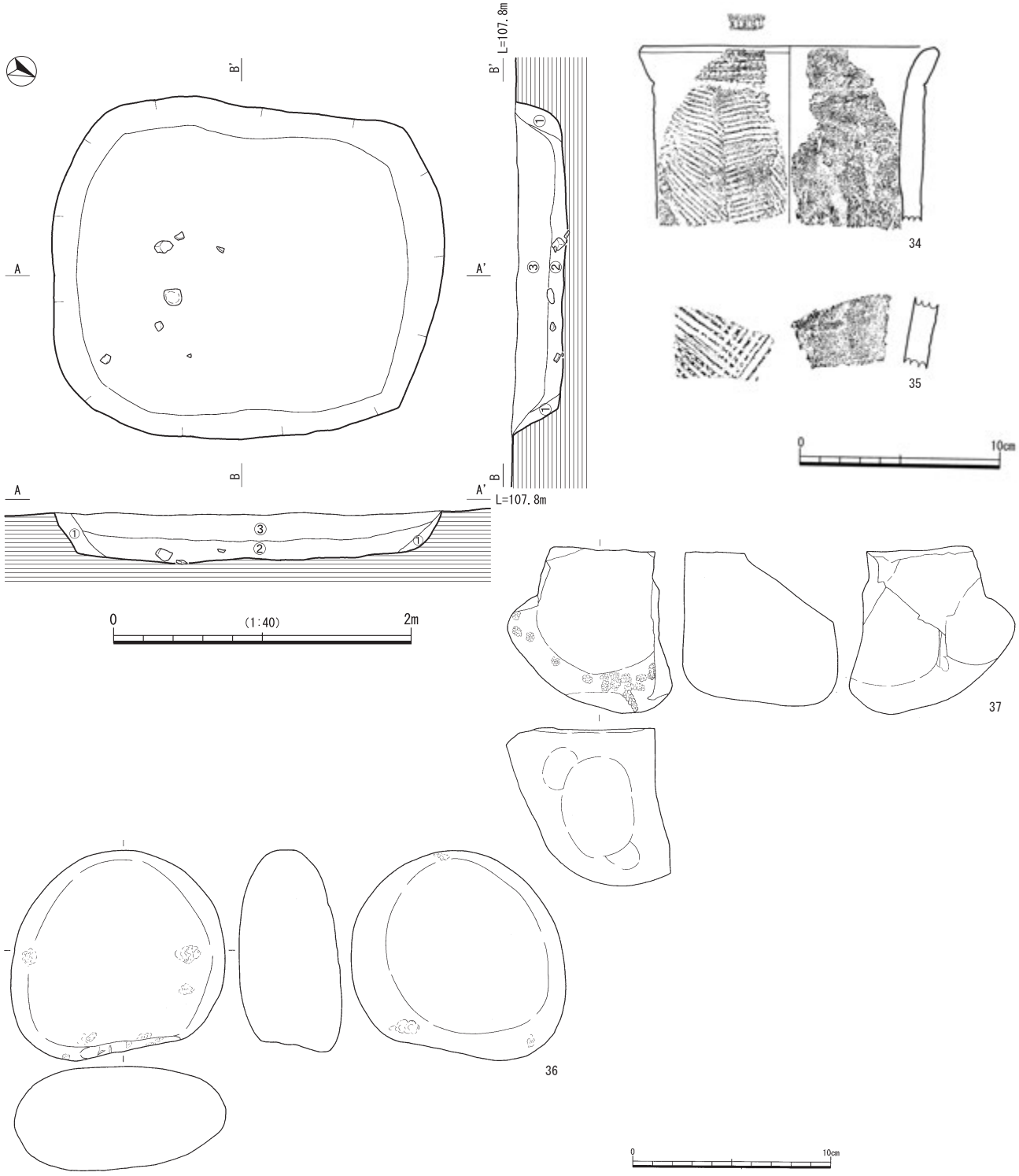
第 17 図　縄文時代早期　竪穴住居跡２

竪穴住居跡３（第18図　34 ～ 37）

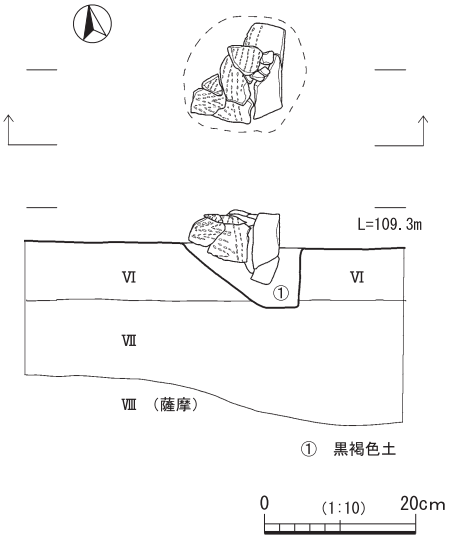
Y・Z－14区で検出された。平面形は，長軸264cm，短軸228cmでほぼ隅丸方形である。検出面からの掘り込みの深度は平均的に30cmになり，床面は水平になっている。

埋土は３分層され，パミスの色調は黄橙色で共通していた。遺物が７点共伴していた。（うち６点図化）

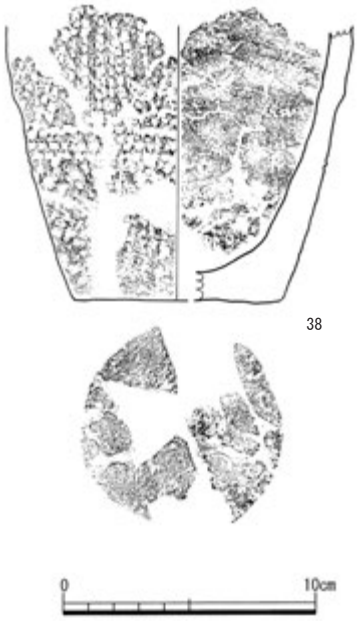
34は口縁部から胴部である。口唇部に刻みが施され，口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が横位に巡り，以下には貝殻条痕文が綾杉状に施文されている。35は胴部で貝殻条痕文が綾杉状に施文されている。36，37は磨石である。埋土①は褐色土でパミスをあまり含まない。②は暗褐色土でφ２～５㎜のパミスを少量含む。③は暗褐色土でパミスを多量に含む。



第 18 図　縄文時代早期　竪穴住居跡３・遺構内遺物



第 19 図　埋設土器出土状況図



第 20 図　埋設土器遺構内遺物

埋設土器（第19・20図　38）

V-17区，Ⅶ層上面で土器が横位に倒れた状態で検出した。検出面で土器を埋設するための掘り込みを確認したが検出できなかった。土器を取り上げた後，スタンプを残して再度土層の観察を行ったところ，掘り込み面と考えられるラインを確認できた。埋土は単一でⅥｂ層に類似している。１～３㎜の黄色パミスが多く混じる。検出はⅦ層だが，それよりも上層で掘り込みが成されていたと考えられる。

38は出土時の土器の状態が自然な破砕ではなく，横位に倒置されたものと考えられることから人為的に土坑に埋設した土器と判断した。本遺跡のＶ類に分類される土器である。施文は貝殻腹縁部による縦位や斜位の刺突文がみられるが，胴部下半にはこれと交差した状態で横位の貝殻腹縁部による刺突文が巡らされている。底部から胴部への立ち上がり部分はナデ調整より施文はみられない。

表３　縄文時代早期遺構内遺物観察表（1）

竪穴住居跡３　出土遺物

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器　種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色調	
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外　面	内　面
18	34	3 4 5	SI-３	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅳ	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					黄橙 10YR8/6	褐灰 10YR4/1
	35	6	SI-３	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻条痕	ナデ	ナデ	○					黄橙 10YR8/6	褐灰 10YR4/1

竪穴住居跡３　出土遺物

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（ｇ）
18	36	SI3 ①	19190	磨石	安山岩	10.5	10.8	5.2	793
	37	SI3 ⑦	19196	磨石	安山岩	7.9	8.3	7.9	613

埋設土器

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器　種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色調	
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外　面	内　面
20	38	ﾏｲｾﾂ 1	V-17	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅴ	胴部～底部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○		○	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4

集　　石

集　石１（第21図）

Q・R－15区で検出された。長軸100cm，短軸80cm内に，礫数は25点である。４cmから10cm程度の大きさで，まとまりに欠け中心部も不明瞭である。

集　石２（第21図）

Q－14区で検出された。長軸110cm，短軸70cm内に礫数は28点，小型でまとまりに欠け，中心部が不明瞭である。至近で集石3が検出されている。

集　石３（第21図）

Q－14区で検出された。長軸80cm，短軸60cm内に，礫数21点である。中心部とみられる部分はあるが周辺に礫の散逸は無く，掘り込みもみられない。

集　石４（第21図）

Q－13区で検出された。長径・短径80cm以内の範囲に，構成礫は10cm程度のものが多く，レベル差もなく密集している。礫の集中は東側半分に偏った状態である。礫の検出面と同レベルで，円形で深度10cm程度の平坦な掘り込みがみられる。

集　石５（第22図）

AA－９区，１号住居に近い地点で検出された。長軸31cm，短軸32cm住居周辺の遺物とほぼ同じレベルで検出しているので，住居と同時期の遺構と考えられる。まとまりはみられるが礫数は６点しかなく，掘り込みもみられない。

集　石６（第22図）

S・T－15区で検出された。長軸145cm，短軸63cm掘り込みがみられるが，平面プランは狭小な楕円形，断面形が浅いレンズ状を呈する。この掘り込み部分に礫の大半が密集しているため，中心部と考えられる。北～北東側には小礫が散逸している。

集　石７（第22図）

T－14区で検出された。長軸87cm，短軸62cmで，10cm程度の浅い掘り込みがみられる。平面プランは狭小で楕円形，断面形がレンズ状を呈する。掘り込みの規模・形状は集石6と類似している。礫はこの掘り込みに集中しており少量だがまとまりはある。

集　石８（第22図）

U－14区で検出された。長軸118cm，短軸105cmで，浅い掘り込みがみられる。平面プランは楕円形，断面形がレンズ状を呈する。小礫が多く，掘り込み内から検出されているが散逸した状態のため中心部は不明瞭である。

集　石９（第22図）

U－13区で検出された。長軸90cm，短軸45cm内に10cm以内の小型な礫が14点しか残存していない。中心部も明確ではなく，掘り込みもみられない。

集　石10（第23図）

V－13区，集石11・12と隣接して検出された。長軸90cm，短軸62cmで，前記の集石が平面的に重複する様相を見せるのに対して，やや離れた位置で検出されている。10cm以内の小型な礫が13個しかなく少量でまとまりに欠ける。掘り込みはみられない。

集　石11（第23図）

V－13区,集石10･12と隣接して検出された。長軸84cm，短軸54cmで，円形の浅い掘り込みがみられる。平面プランは楕円形，断面形がレンズ状を呈する。礫は大半がこの掘り込みで検出された。礫数は少量だがまとまりはある。集石11と12は平面的には一部が重複するため同一の遺構に見えるが，検出レベル，断面状況は異なる。

集　石12（第23図）

V－13区,集石10･11と隣接して検出された。長軸129cm，短軸93cmで，楕円形で浅い掘り込みはみられるが，隣接する３基の中では，小礫ではあるが比較的密集した状態である。掘り込みの埋土は黒色の単一層で，２mm前後の炭化物を少量含む。

集　石13（第23図　39）

W－14区，Ⅵｂ層で検出された。長軸117cm，短軸98cmで，礫の形状は径約100cm内で３～10cm程度である。礫の検出地点の高低差には最大20cm強の差異があり，礫の広がりは低い位置に向かう傾向が見られた。図中の39の土器は口縁部である。口唇部に貝殻腹縁部による刺突文がなされ，口縁部には同様の刺突文が縦位に巡らされている。内面には粘土の貼付部分がみとめられる。本遺跡のⅣ－２類式土器に分類される。掘り込み面は見られなかった。集石周辺では多数の礫が散逸していたが，西側は上層面のフィケドが土層を削平していることや，杉の根や，杉の切り株があったことから，礫の広がりは不明である。

集　石14（第24図）

V－28区，Ⅵa層で検出された。長軸110cm，短軸90cmの範囲に礫数33点が散逸しており，中心部は不明瞭である。周辺でも多くの礫が散逸した状態で検出された。

集　石15（第24図）

V－28区,Ⅵ層で集石14･16と比較的至近で検出された。中心部に礫がまとまっているが，長軸60cm，短軸50cm内

に礫数は15点しかなく，大きさも３～10cm程度と小さい。

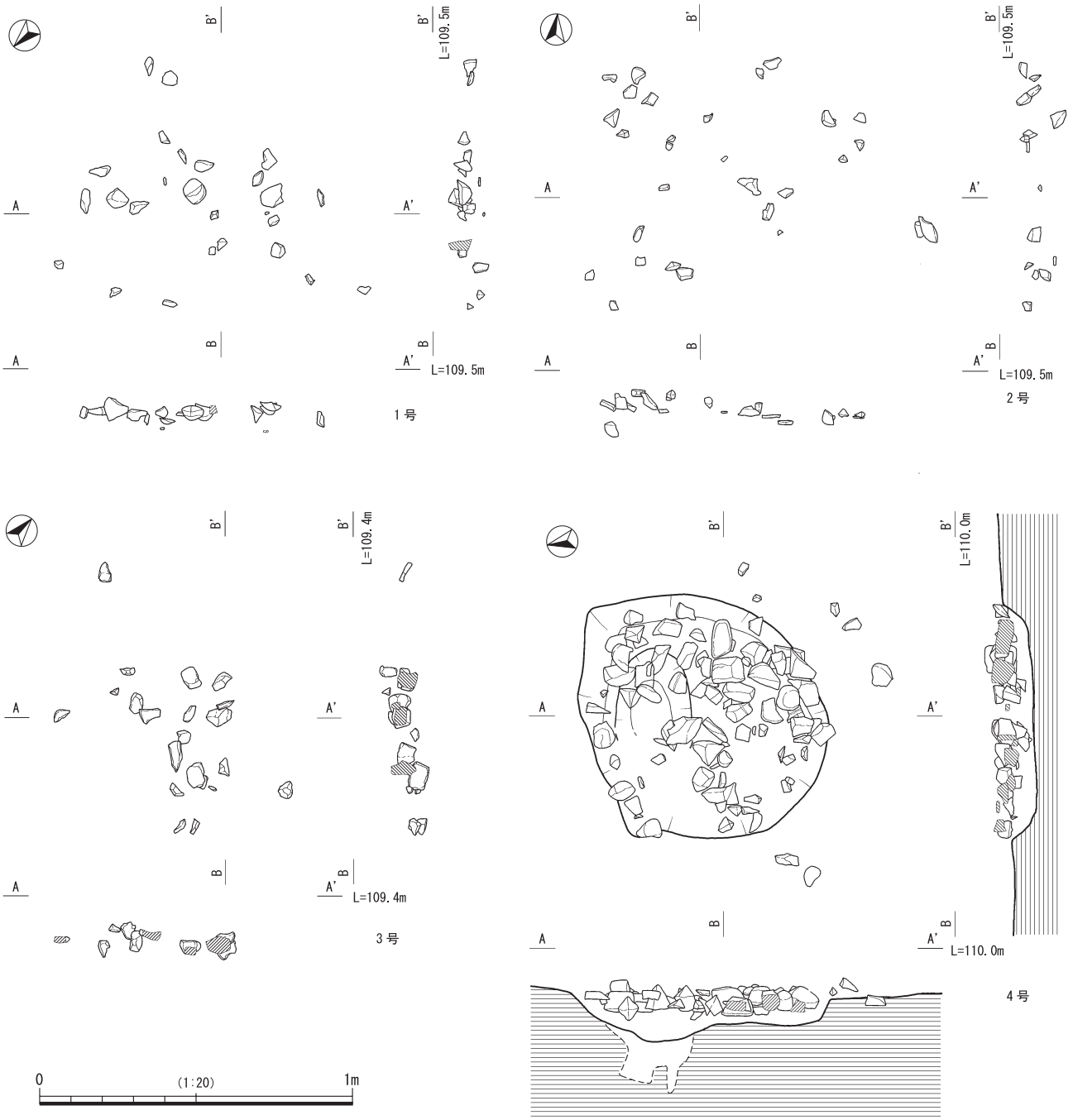
集　石16（第24図）

Ⅴ－27区，Ⅵ層で検出された。長軸・短軸75cmの範囲に収まる形状である。多くの礫が破砕していた。

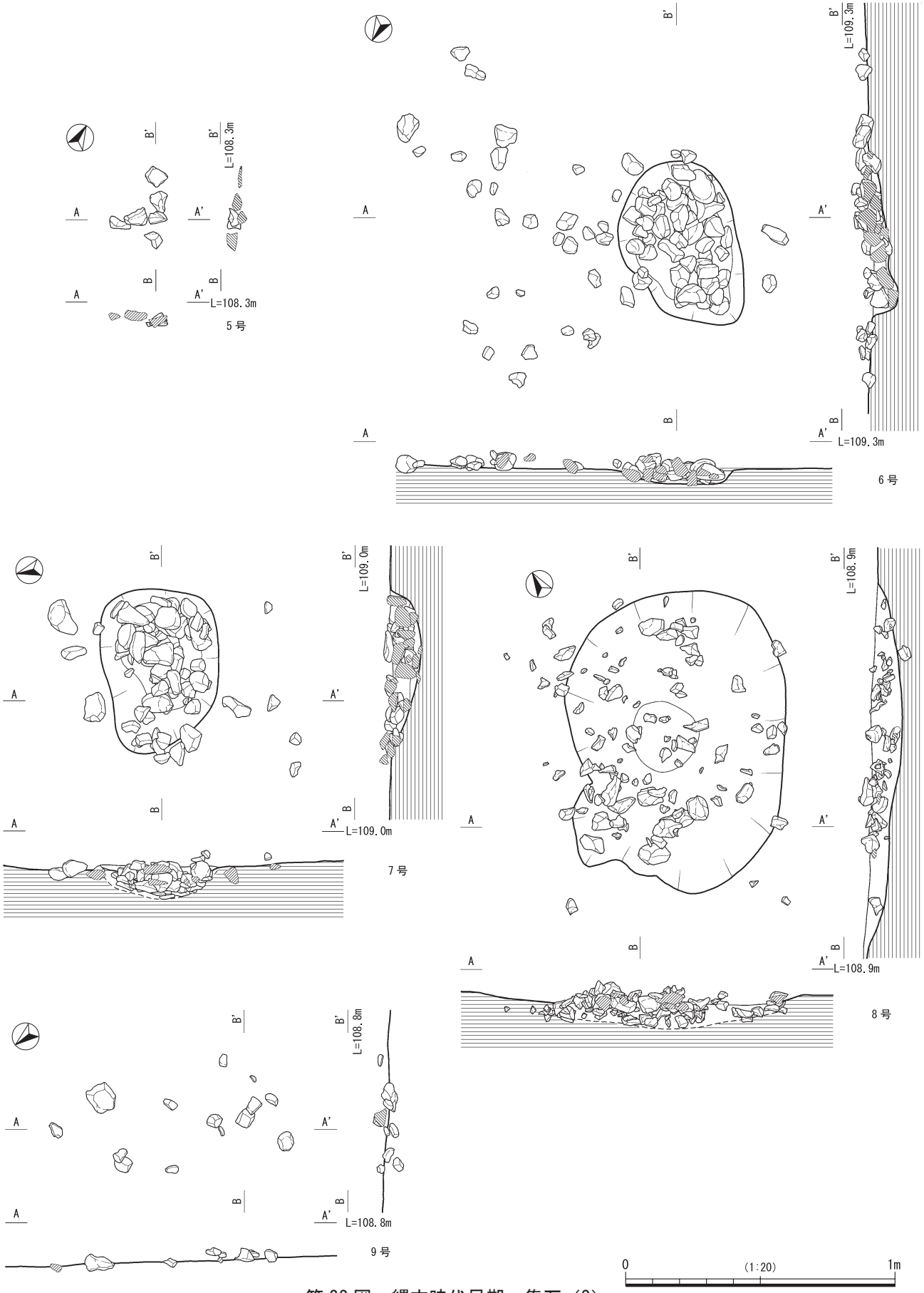
他の遺物や炭化物，掘り込みは見られなかった。周辺では多数の散逸した礫が出土している。

集　石17（第24図）

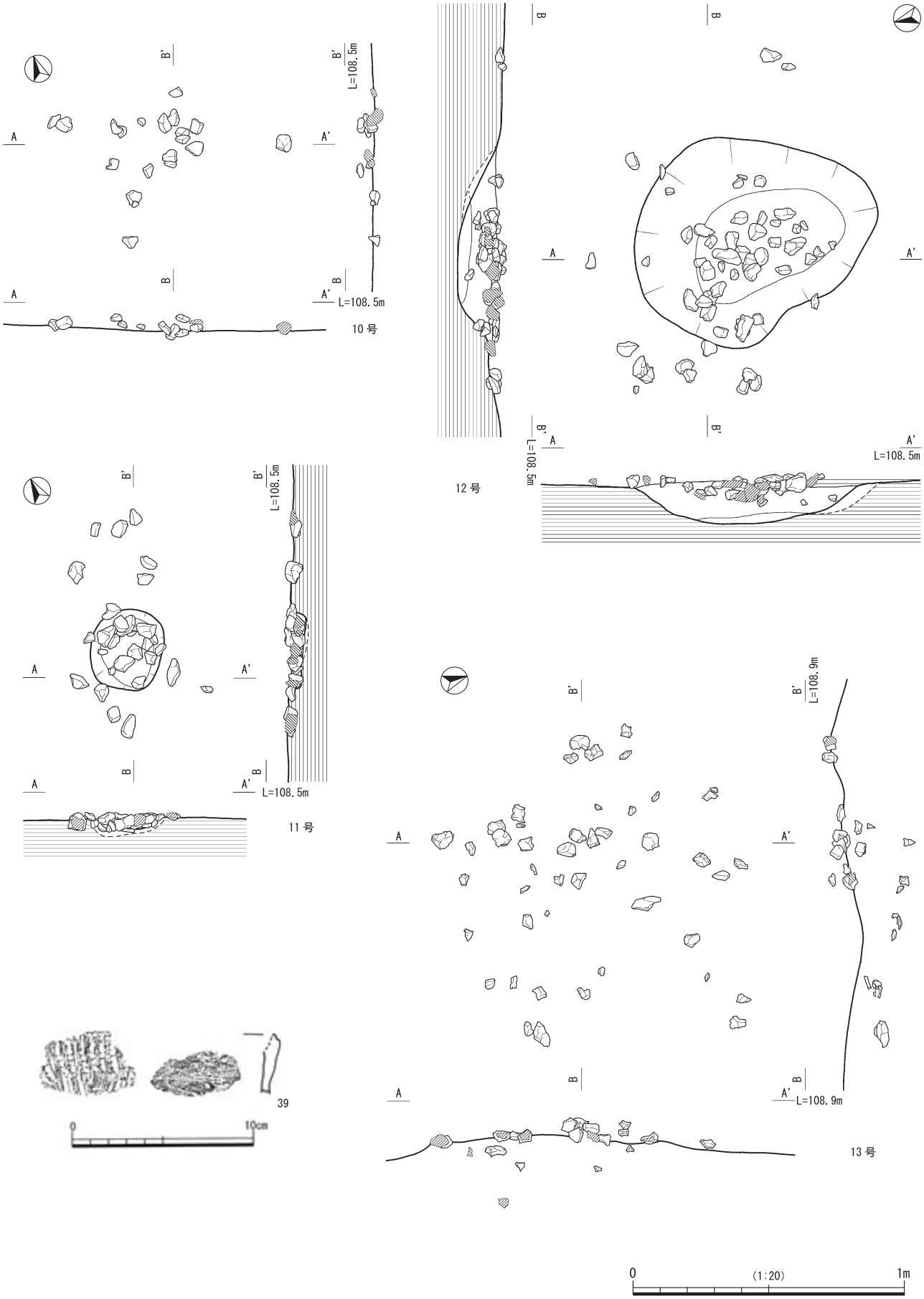
Ⅴ－19区，Ⅵa層で検出された。長軸150cm，短軸110cm内に礫数68点が検出されており，主体部は比較的明瞭な状態である。ほぼ全ての礫が破砕，もしくはひび割れしており，一部は黒変した礫も見られる。



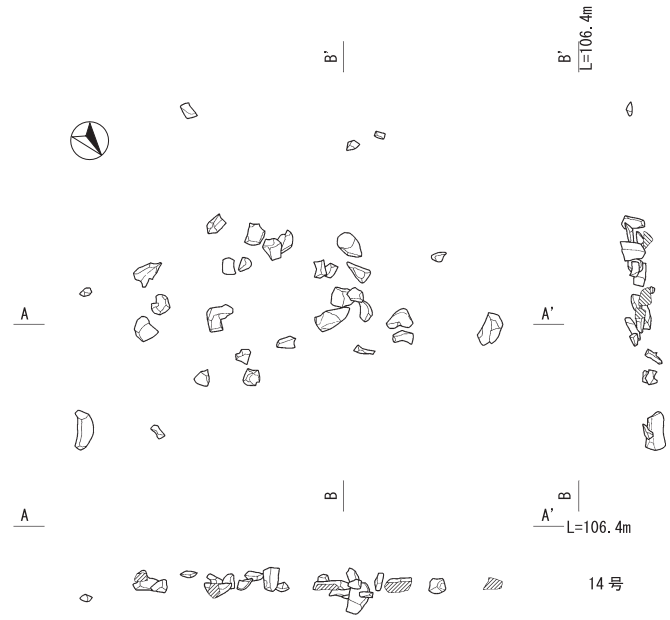
第 21 図　縄文時代早期　集石（1）

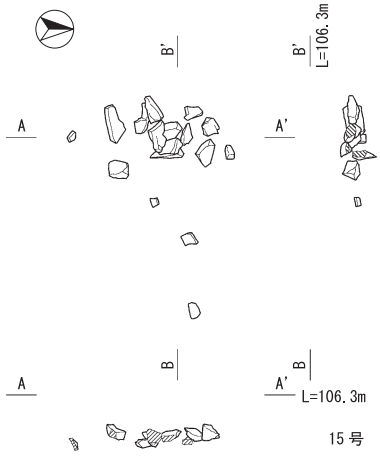


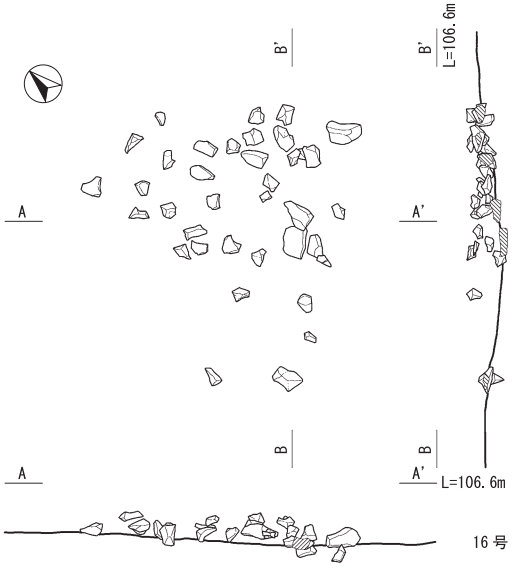
第 22 図　縄文時代早期　集石（2）

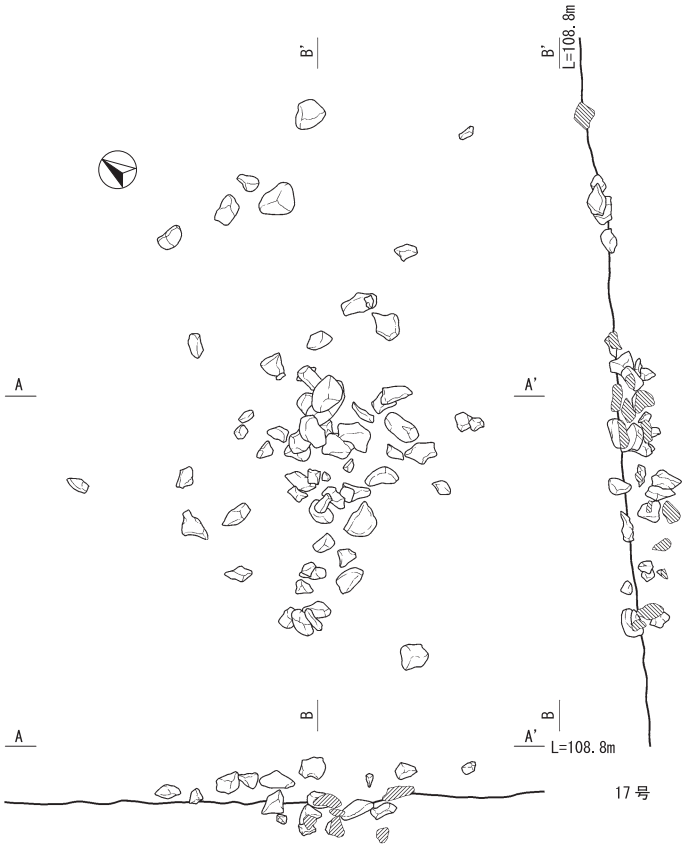


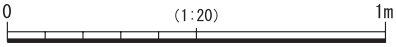
第 23 図　縄文時代早期　集石（3）及び遺構内遺物











第 24 図　縄文時代早期　集石（4）

土　　坑

土坑１（第25図　40）

R－12区，薩摩火山灰層上面で検出したが，これより上層の黒褐色土から黄橙色パミスの混在する土が認められたので，実際の掘り込みは検出面よりも上層と考えられる。

平面プランは，長径160㎝，短径143㎝のほぼ円形で，掘り込みは逆台形である。

埋土は黄橙色パミス,まれに黄色パミスを含んでいる。色調は黒褐色一色であるが，やや暗く硬い部分とやや明るい部分とが不規則に混ざっている。床面近くでは少量の炭化物が検出されたが，集中域やピットの検出はなかった。埋土上面と壁面から出土した40は口縁部である。口唇部に刻みが施されている。口縁部には貝殻条痕文が斜位に施文されたのち，上部には貝殻腹縁部による押引文が横位に２条巡り，間隔を空けて再度下部に貝殻腹縁部による押引文が横位に巡らされている。本遺跡ではⅢ類に分類される土器である。

土坑２（第26図　41）

T－14区，Ⅶ層上面で検出した。Ⅵｂ層では不明瞭なラインであったので，Ⅶ層まで掘り下げて平面プランを確認した。そのため掘り込みの開始面はⅥ層になると考えられる。平面プランは，長径154㎝，短径75㎝の長楕円形である。底部は平坦である。

埋土はレンズ状に堆積している。埋土①は，暗褐色硬質土である。②は暗茶褐色粘質土でⅥｂ層とⅨ層の混在した土であった。①②ともに炭化物が多かった。型式不明の土器と礫が出土している。41は磨石である。

土坑３（第26図）

R－15区，Ⅶ層で検出した。平面プランは，長径74㎝，短径38㎝の長楕円形だが，断面は段堀状を呈する。埋土は①が黄橙色パミスを含む黒褐色土，②は黄橙色パミスを若干含む暗褐色土である。③は黄橙色パミスを含む暗褐色土である。

５ｍ程東側では竪穴住居跡２を検出しており，埋土も類似しているので関連する遺構とも考えられる。遺物や炭化物，硬化面はなかった。

土坑４（第26図）

Ｓ－13区，Ⅶ層上面で検出した。平面プランは，長径113㎝，短径47㎝の長楕円形である。断面は逆台形で床面は平坦である。埋土は単一層でⅥａ層とⅥｂ層の中間くらいの色調の黒色土で，土中に３～10㎜程の黄色パミスが混ざる。これは本遺跡の縄文早期の遺構の埋土に共通している。共伴する遺物はない。

土坑５（第27図　42）

U－13区，Ⅶ層上面で検出した。平面プランは，長径153㎝，短径83㎝の長楕円形である。

上の面で土器が数点出土したので，掘り込みの有無を確認しながら精査をした。当初は明確な掘り込みが確認出来なかったため，土器をステージ状に残して周辺を掘り下げたところ南側に明確なプランを確認した。南側２/３は明確な立ち上がりと床面を確認できた。埋土はブロック状に入っているので掘り下げ後に埋めたと考えられる。

北側はプランが不明瞭だったためA－B軸の東側からの半裁を試みた。埋土の状況が違うことやプランが不定形なため後世の撹乱を受けたと考えられる。

土器との関連があるものと考えられるが，土坑の性格を明確に把握することはできなかった。

遺構内遺物の42は，平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁端部がやや外反する器形である。外面全体に貝殻条痕文を縦位に,その後格子状に施文している。口縁部には，貝殻腹縁部による刺突文を横位に６条巡らせている。本遺跡ではⅤ類に分類される土器である。

埋土は，①は黒褐色硬質土でP13と考えられるパミスが多く混ざる。②は暗褐色土でⅥa・b層の混じりでⅥｂ層の色調に近いオレンジパミスが部分的に混ざる。③は暗褐色粘質土でⅨとⅥｂの混在した土である。④は黒褐色硬質土でⅥa・b層の混じりでⅥｂ層の色調に近い。

土坑６（第27図）

U－14区，Ⅶ層で検出した。平面プランは長径82㎝,短径57㎝の楕円形,断面は半円形である。共伴する遺物・炭化物はない。

埋土は，①は黄橙色パミスを密に含む黒褐色土，②は黒褐色土で①ほどパミスを密に含まない，③は暗褐色土で①②よりやわらかく，パミスはほとんど含まない。④はやや粘質があり，にぶい黄褐色土のブロックを含んでいた。

土坑７（第27図）

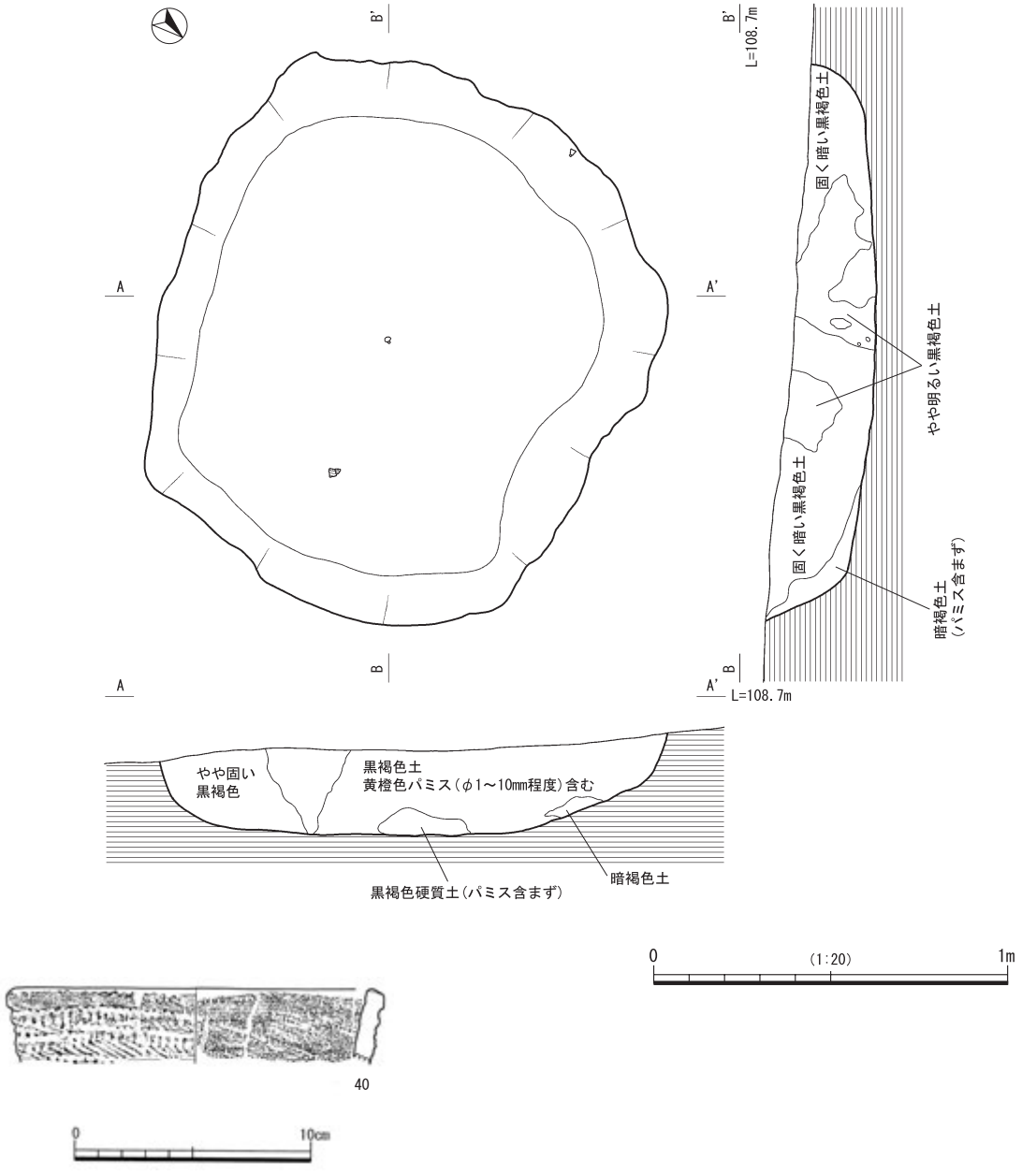
W―16区のⅧ層で検出したが，本来の上面は20㎝程度上のⅥないしⅦ層と考えられる。平面形は，長径127㎝，短径62㎝の長楕円形を呈する。埋土は３分層され，全体的にかなり締まった感触であった。①は，パミスを殆ど含まない。しまりは弱く，粘性は中程度。10YR ２/ ３黒褐色土である。②は，φ２～３㎜大のパミスをまばらに含む。しまりは中程度，弱粘性。黒褐色土。③は，しまりは中程度，粘性は弱い。φ３～４㎜大のオレンジ・白パミスを②より多く含む。周辺にはⅤ類土器や礫が多く散在していた。

土坑８（第28図）

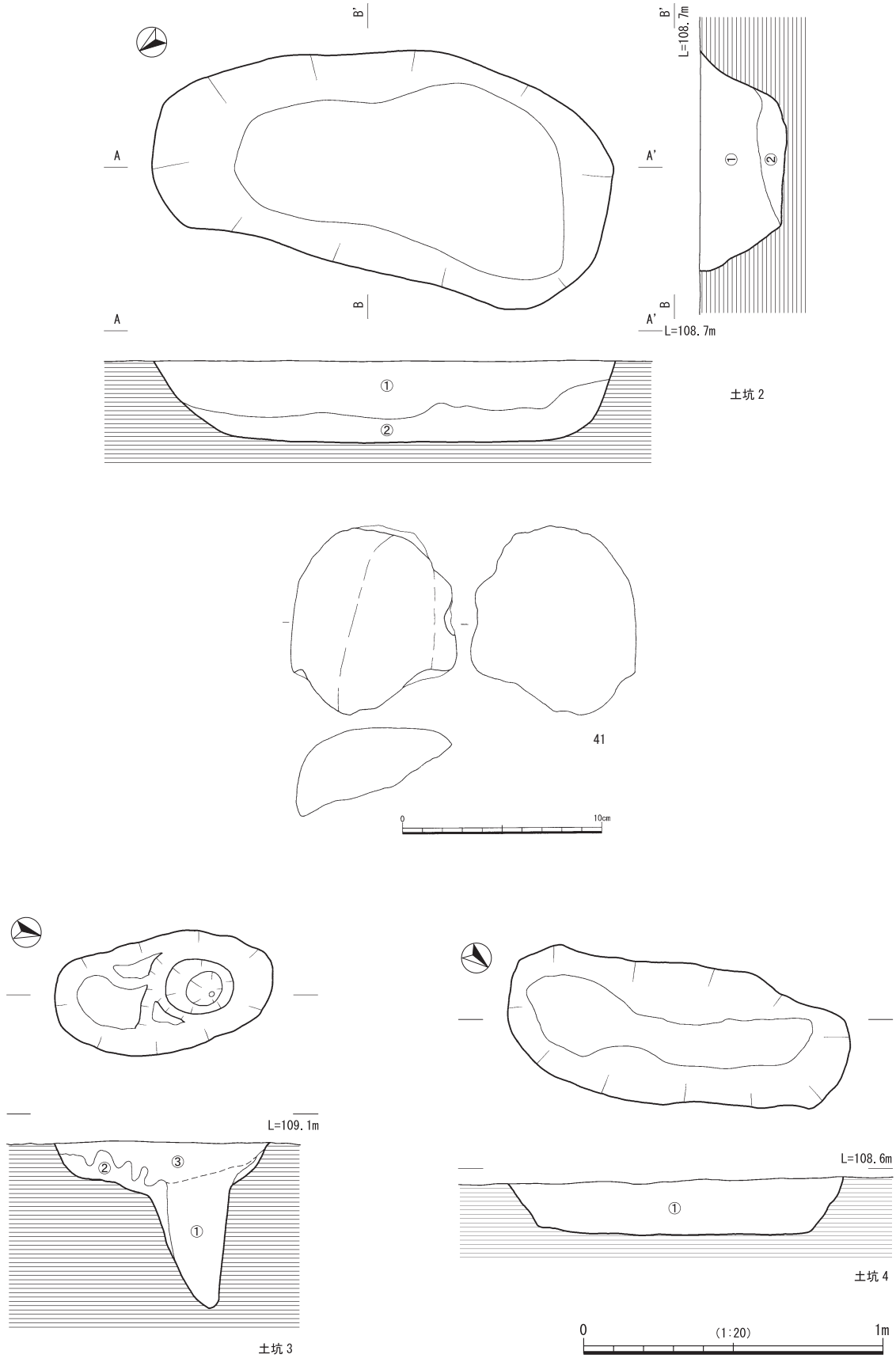
Y－13・14区，Ⅷ層上面で検出した。平面形は，長径94cm，短径52cmの長楕円形を呈する。掘り込みの断面は縦・横とも逆台形状を呈する。埋土は４分層される。①は，黒褐色土で１～３㎜大の白・オレンジパミスをまだらに含む。しまりが強く弱粘性である。②は,褐色土で，２～５㎜の白・オレンジパミスをまだらに含む（①より密度は低い)。しまりは①よりやや弱いが，粘性は強い。③は，にぶい黄褐色土。しまり・粘性はない。樹痕の影響と考えられる。④は，褐色土で②に類似するがやや明るく，オレンジパミスの量は②より少ない。

土坑９（第28図）

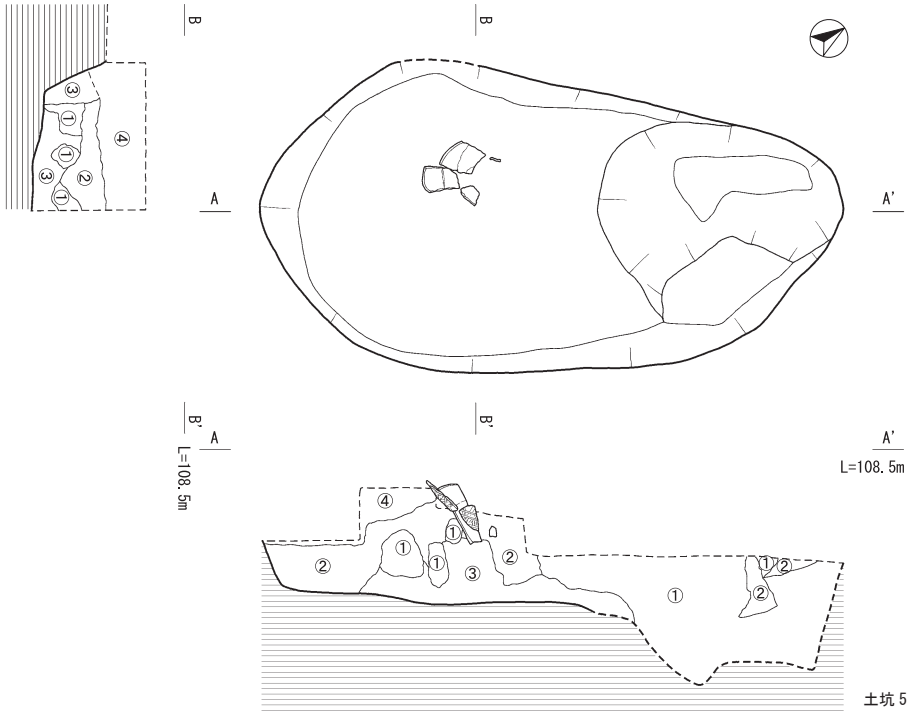
U－13・14区，Ⅶ層で検出した。下層トレンチ設定の際に検出したために一部は削平してしまったが，推定も含めた平面プランは楕円形で，長径86cm，短径46cmである。埋土は単一で黒色土に黄色パミス混じりである。これは，本遺跡の縄文早期の遺構の埋土と同一のものと考えられる。埋土中から遺物は確認されなかった。

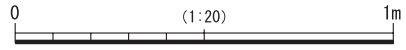


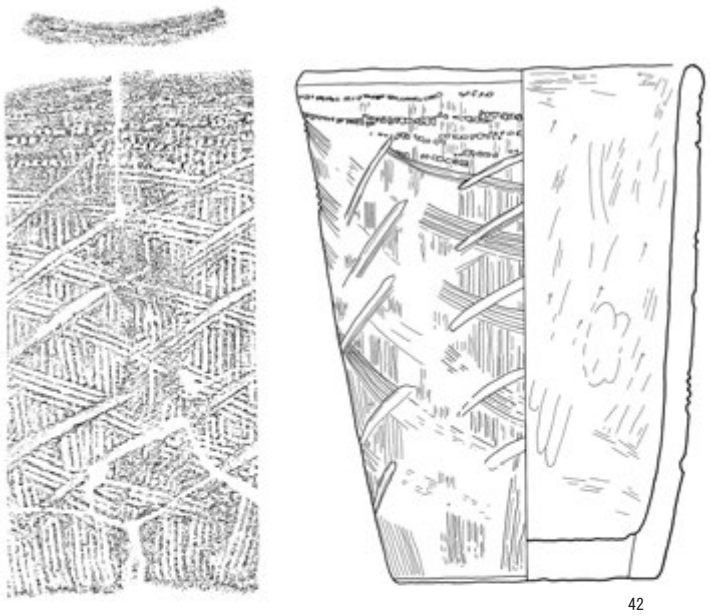
第 25 図　縄文時代早期　土坑１及び遺構内遺物



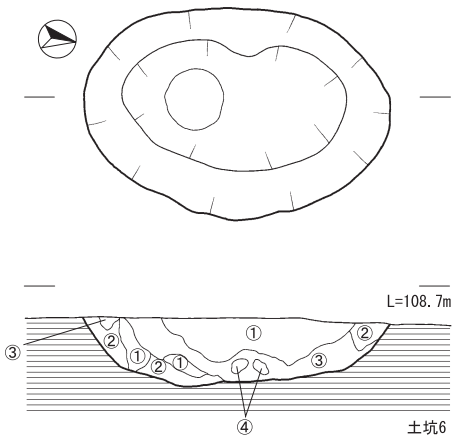
第 26 図　縄文時代早期　土坑２～４及び遺構内遺物





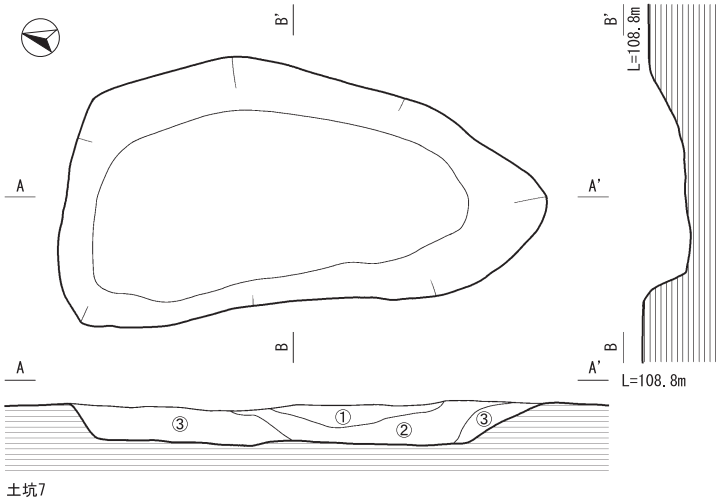


42

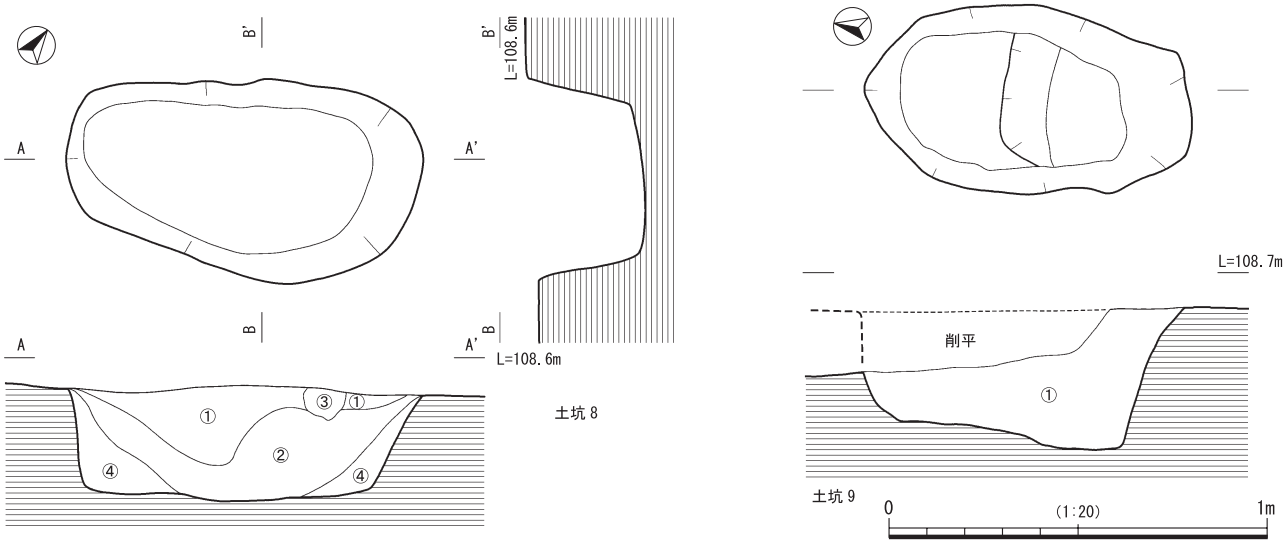








第 27 図　縄文時代早期　土坑５～７及び遺構内遺物



第 28 図　縄文時代早期　土坑８・９

表４　縄文時代早期　遺構内遺物観察表 (2)

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器　種	分類	部位	文様	器面調整		胎　　土					色　　調	
									外面	内面	石英・長石		角閃石・輝石		雲母	外面	内面
23	39	集石 13	W-14	Ⅷ	円筒形深鉢	Ⅳ -2	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3
25	40	2154	S-12	Ⅵ a	円筒形深鉢	Ⅲ	口縁部	刻み・貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					橙 7.5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4
		土坑 - 1	R-12	Ⅷ													
27	42	土坑 -5	U-13		円筒形深鉢	Ⅴ	口縁部～底部	貝殻腹縁刺突・条痕文	ナデ	ナデ						橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	器　種	石　材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
26	41	T-14	11	磨石	砂岩	9.3	8.3	4.3	312

（ウ）遺　物

土　器

Ⅰ類土器（第29図　43 ～ 55）

平底の底部から，やや丸みを帯びた状態で胴部が立ち上がる器形の円筒形深鉢土器である。

43 ～ 45は，口唇部が平坦でヘラ状工具による刻み目が施され，口縁内部にも斜位のヘラ刻みが残っている。口縁上部には縦位と斜位のヘラ刻みが巡る。

下部から胴部・底部にかけては横位に貝殻腹縁部による条痕が巡らされている。

46 ～ 49は，口唇部と口縁端部にヘラ刻みが施され，口縁部下部から胴部にかけて条痕文が横位，または斜位に巡らされている。50は胴部である。横位の条痕文が巡らされている。51 ～ 53は胴部～底部である。横位の条痕文が巡らされ,底部は丁寧にナデ整形が成されている。54，55は胴部から底部である。器面には貝殻条痕文による施文がなされている。

Ⅱ－１類（第30図　56 ～ 68）

56 ～ 59は口縁部である。56は口唇部が平坦でヘラ状工具による刻み目が施されている。口縁上部には貝殻腹縁部による斜位の刺突文が施され，下部には貝殻条痕文による横位の調整痕が地文として残り，楔形突帯文が縦位に３段貼付される。57，58は口縁端部がやや内湾する器形である。口唇部は平坦でヘラ状工具による刻み目が施されている。口縁部には貝殻腹縁部による横位の刺突文，胴部は貝殻条痕文の地文に縦位の貝殻腹縁部による刺突文が施されている。59は，口唇部に貝殻腹縁部による刺突文，口縁部下部から胴部にかけて縦位の貝殻条痕文が施文されている。

60 ～ 68は胴部である。地文が縦位もしくは斜位の貝殻条痕文による縦位の刺突文が施されている。62は縦位の貝殻腹縁部による刺突文に斜位の貝殻条痕文が施されている。

Ⅱ－２類（第30図　69 ～ 82）

69 ～ 73は口唇部を面取りし，ヘラ状工具による刻み目を施している。口縁部には貝殻腹縁部による刺突文を横位に巡らしている。

74，75は口縁部下半から胴部にあたる。楔方の突帯を縦位に２段貼り付けている。突帯間には貝殻腹縁部による刺突文を縦位に３列施文している。

76は，縦位の貝殻腹縁部による刺突文が施され，楔形突帯が貼付されている。内面にわずかながら屈曲部がみとめられることから角筒形深鉢土器の口縁部下半と考えられる。

77 ～ 81は胴部で貝殻腹縁部による刺突文を縦位に４列単位で施文している。82は貝殻腹縁部による刺突文を縦位に３列単位で施文している。

Ⅲ類（第31図　83）

83は口唇部が平坦で，口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が横位に施されている。胴部には貝殻腹縁部による押引文が横位に施されている。口縁部の形状が波状を呈する。

Ⅳ類土器

平底の底部から直線的に立ち上がった胴部がわずかに内湾し，口縁部がやや外反する器形である。口縁部に貝殻腹縁部による刺突文が巡り，胴部に条痕文が綾杉状もしくは縦・横位に施文される土器群である。施文の差違により５類に細分した。

Ⅳ－１類（第31 ～ 33図　84 ～ 102）

口縁部に貝殻刺突文を羽状に右から左，もしくは左から右に向かって開く状態で横位に施す。胴部全体には貝殻条痕文を綾杉状に施す。

84は口径29㎝，底径18.2㎝，器高31.1㎝を測る。口縁部から胴部を経て底部に至る円筒形土器である。外面は，口唇部にヘラ刻み，底部には貝殻条痕文を横位に施し最下部にはヘラ刻みを縦位に施している。内面は全体に指ナデ，ナデ調整がなされている。85 ～ 102は口縁部，もしくは口縁部から胴部にあたる。97，98以外は口縁部がやや外反する。

Ⅳ－２類（第34・35図　103 ～ 118）

口唇部に貝殻腹縁部による刺突文が施され，口縁部に貝殻刺突文が斜位に巡り，胴部には貝殻条痕文が綾杉状に施文される土器群である。

103は，口径26㎝を測る。口縁部から胴部下部にあたる。口唇部に貝殻刺突文が施されている。口縁部には貝殻刺突文が斜位に巡り，胴部との境に貝殻刺突文が横位に1条巡る。胴部は貝殻条痕文が綾杉状に施されている。

104 ～ 118は口縁部もしくは口縁部から胴部にあたる。116 ～ 118は口縁部が直線的である。

Ⅳ－３類（第35 ～ 38図　119 ～ 159）

口縁部に貝殻刺突文が横位に巡り，胴部には貝殻条痕文が綾杉状に施文される土器群である。

119は，口径26.4㎝，底径15.0㎝を測る。口縁部から胴部を経て底部に至る円筒形土器である。

120は，胴部立ち上がり部分はヘラケズリによる調整がなされ，底部は丁寧なナデ調整が行われている。

121 ～ 126は口縁部がやや外反する。127 ～ 132は口縁部が直線的である。133は口縁下半部にあたる。

134，135は胴部が貝殻腹縁部による条痕文が綾杉状に施文されているが，摩耗により不明瞭な部分が多い。

136 ～ 144は胴部である。貝殻条痕文が綾杉状に施文されている。144は突帯下半の残存部分があり，口縁部

下部にあたる部分かと考えられる。

145 ～ 155は胴部から底部である。器面には貝殻条痕文による施文がなされている。146，149，150は底部立ち上がり部分に縦位の刻みが施されている。

156 ～ 159は平底で直線的に胴部へと立ち上がっている。

Ⅳ- ４類（第38図　160 ～ 164）

器面の外面に細めの条痕文が縦位に残る土器群である。

160 ～ 162は口縁部である。口唇部は丁寧に平らに面取りされている。内面はケズリ調整がみられる。163，164は胴部である。

Ⅳ- ５類（第39図　165 ～ 176）

口縁部から胴部にかけて直線的な器形で，器面の外面に細めの条痕文を格子状に施文している土器群である。格子間は無文の部分があるため，器面全体をナデ調整したあとに沈線を施文したと考えられる。

165，166，169は口縁部である。166は摩耗により口縁部の文様が不鮮明である。167，168，170は胴部である。171は胴部下半から底部である。底部には沈線がわずかにみとめられる。172，173，174，175は胴部である。上記の土器群よりも格子の間隔が広いが,同じ文様として,この類にまとめた。176は上記のⅣ- １～４類とは異なり，沈線による施文のためこの類にまとめた。器形は口唇部が僅かに丸みを帯びる。口縁部には羽状の短沈線が間隔を空けて横位に施文されている。

Ⅴ類土器（第39図　177 ～ 182）

177は口縁部が波状を呈する。口縁上部と下部に貝殻腹縁部による刺突文を横位に３条巡らせ，その間に斜位の刺突文を施している。178は口縁部である。178，179は貝殻腹縁部による刺突文を縦位もしくは斜位に施文している。数列的な単位はみとめられない。180 ～ 182は貝殻腹縁部による刺突文が羽状に施文されている。182は胴部で外面に貝殻条痕文による調整がみられる。摩耗により文様が不鮮明である。

Ⅵ類土器（第40図　183 ～ 186）

外面に短沈線数条を単位として施文される土器群である。183は口縁部で，長さ1.5㎝程度の短沈線が縦位に４条施文されている。184，185は胴部である。外面が丁寧にナデ調整され，長さ1.5㎝程度の短沈線が縦位に４条並行に施文されている。186は太めの沈線が羽状に施文されている。

Ⅶ類土器（第40図　187 ～ 200）

器面に押型文が施文される円筒形深鉢型の土器群である。187，188は胴部である。横位の山形押型文が施文されている。187は器壁が厚く，188は薄手である。

189 ～ 195は胴部及び底部で，明瞭な楕円押型文が施文される。196 ～ 199は胴部及び底部にあたる。前記の土器よりも不明瞭ではあるが楕円押型文が施文されている。

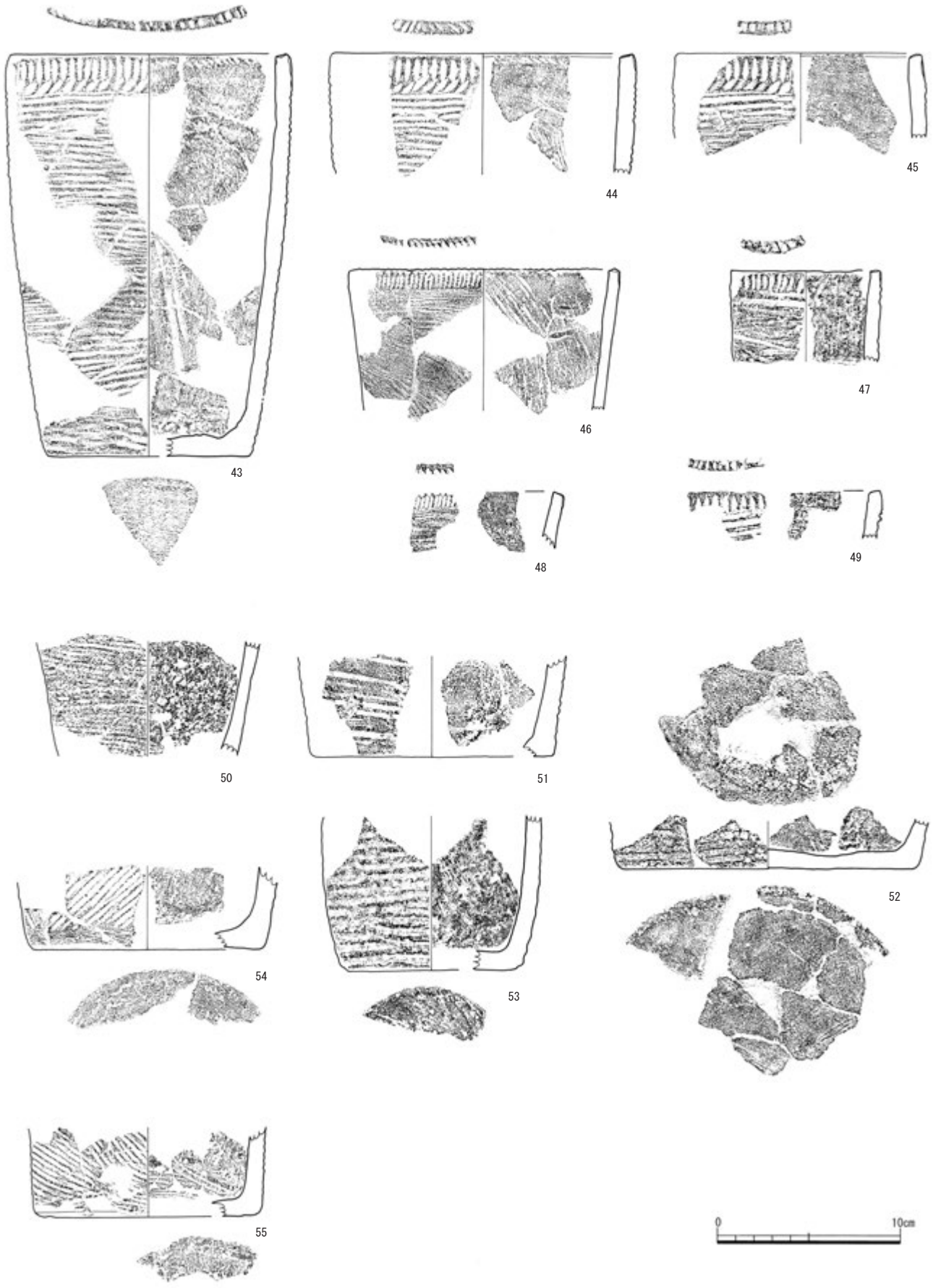
200は胴部下半から底部である。剥落が激しく，文様や器面の調整確認が困難だが，胎土の質や色調が同一のため，この土器群に含めた。

Ⅷ類土器（第40図　201・202）

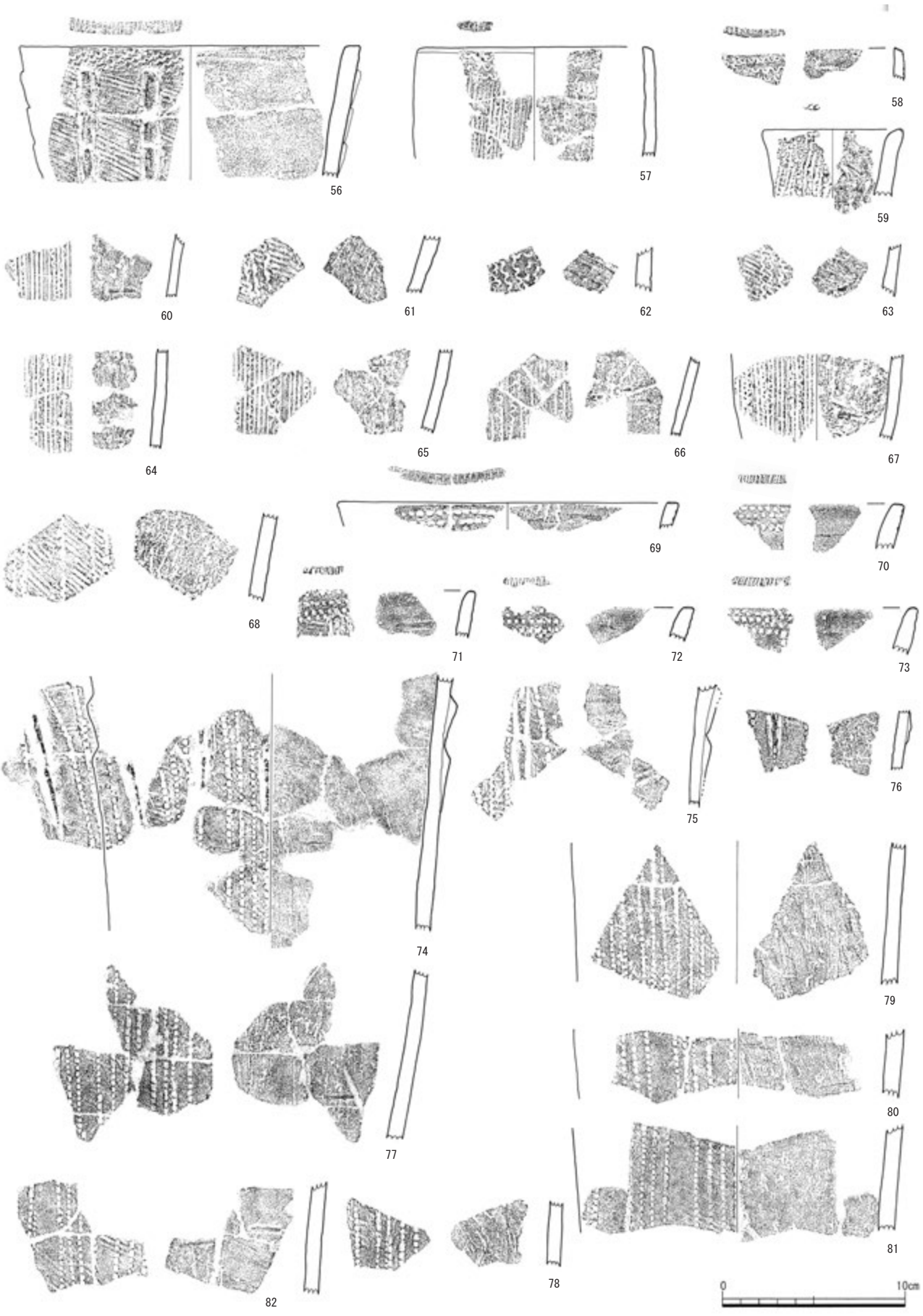
201は口縁部の楔状の瘤に貝殻腹縁部による縦位の刺突文が施文されている。202は口縁部の楔状の下端部にあたる。楔部分の貼り付け痕がみとめられる。内外面ともナデ調整がなされている。

その他の土器（第40図　203 ～ 212）

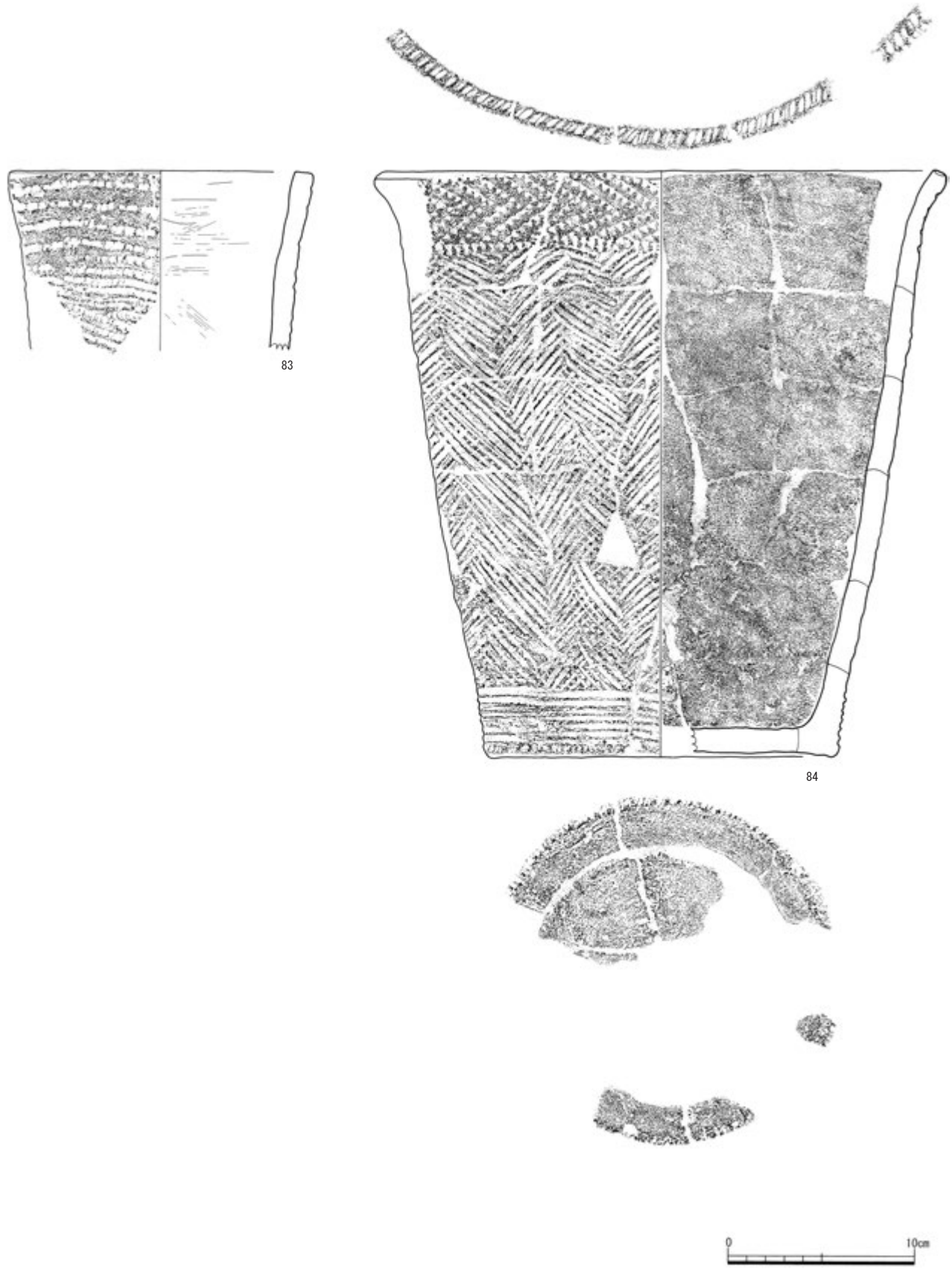
細片もしくは個体数がわずかで，土器群に分類できなかった一群である。203は口唇部に貝殻腹縁部による刺突文が施文され，口縁部は調整痕が残る。204は胴部である。内外面に条痕文が施文され，外面には微隆起突帯文が施されている。205は直線的な形状で，口唇部に斜位の刻み，口縁上部には横位の沈線，下部には縦沈線を施文している。206は内面に条痕文による調整痕がみられる。207は口縁部で上部に刻み，下部に刺突文が施文されている。208は口縁部の瘤状の部分で，口唇部はナデ調整し，貝殻腹縁部による刺突文を縦位に施文している。209，210は施文がみられないが内外面にケズリ調整がみとめられる。211，212は底部である。平底の底部から直線的な胴部が立ち上がっている。211は内外面ともナデ調整がなされているが，212は摩耗しており文様は不明である。



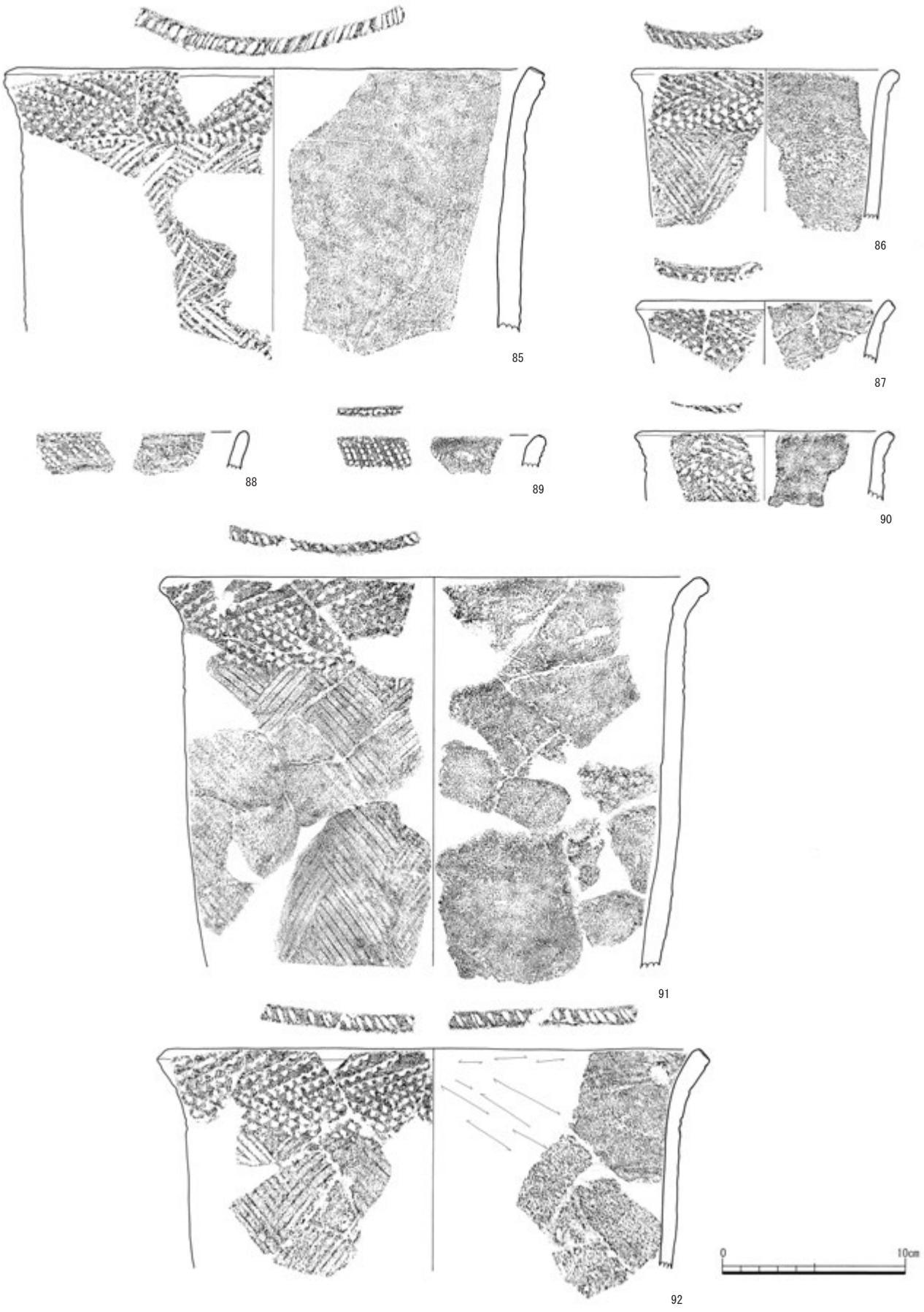
第 29 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（1）



第 30 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（2）



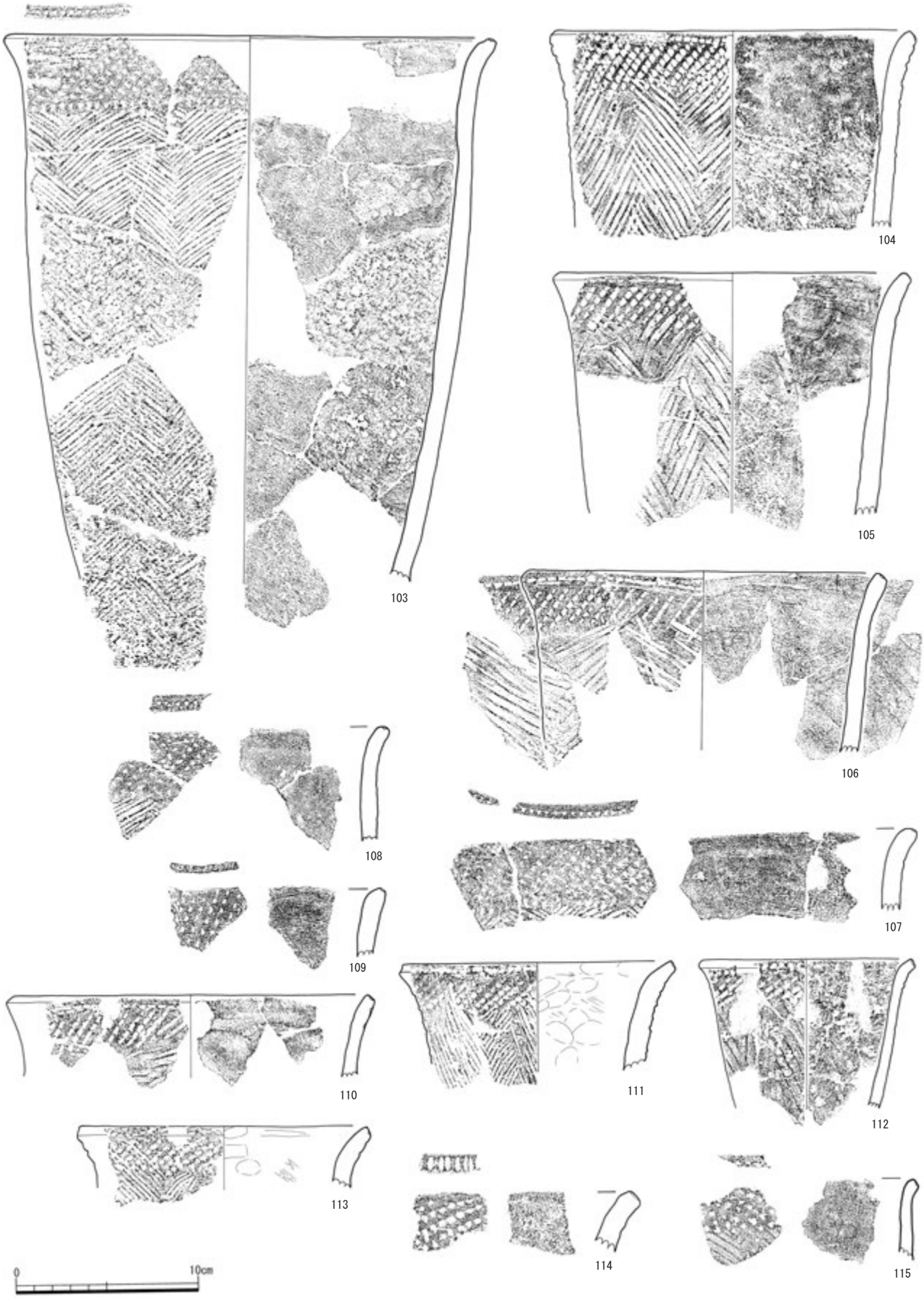
第 31 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（3）



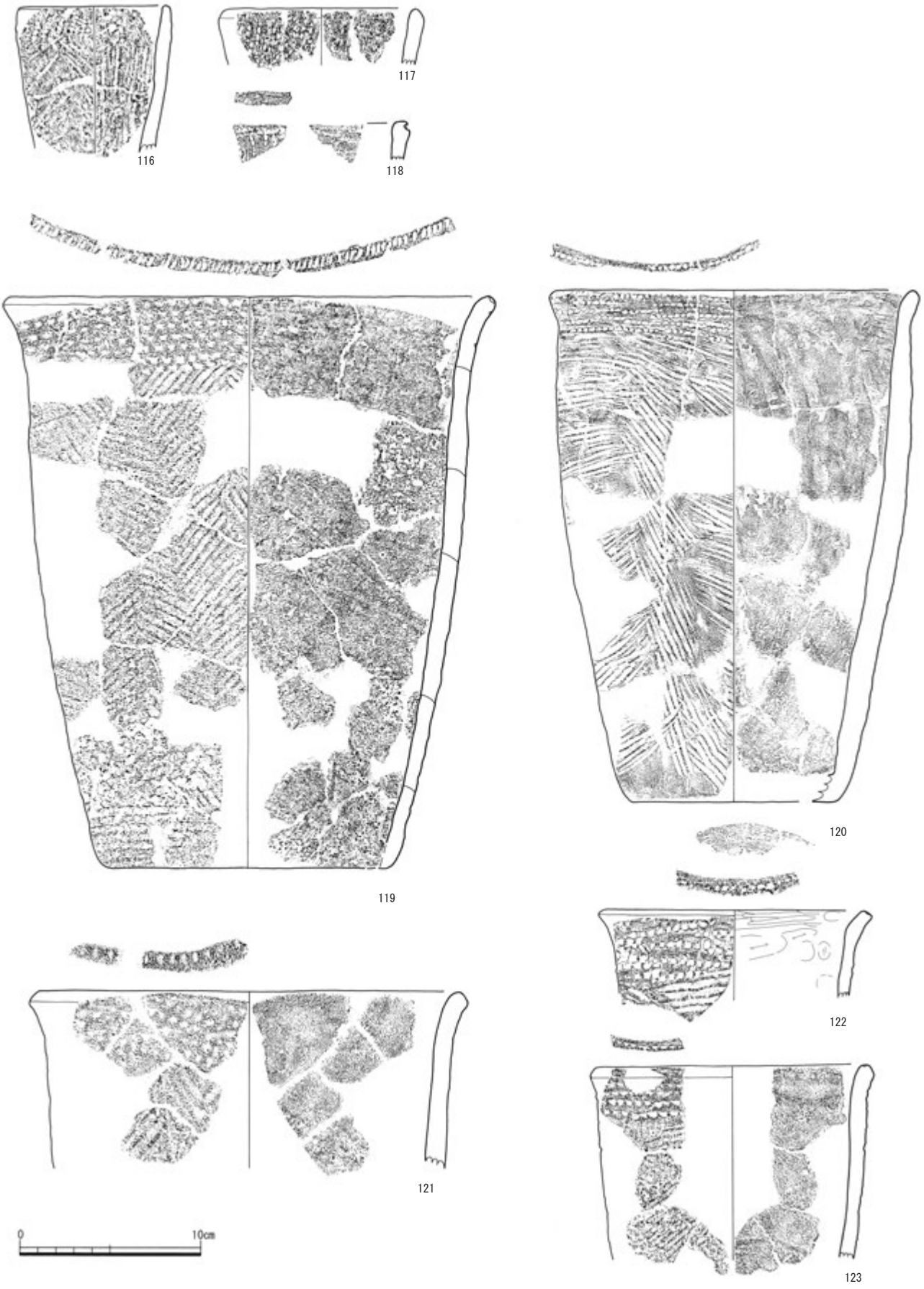
第 32 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（4）



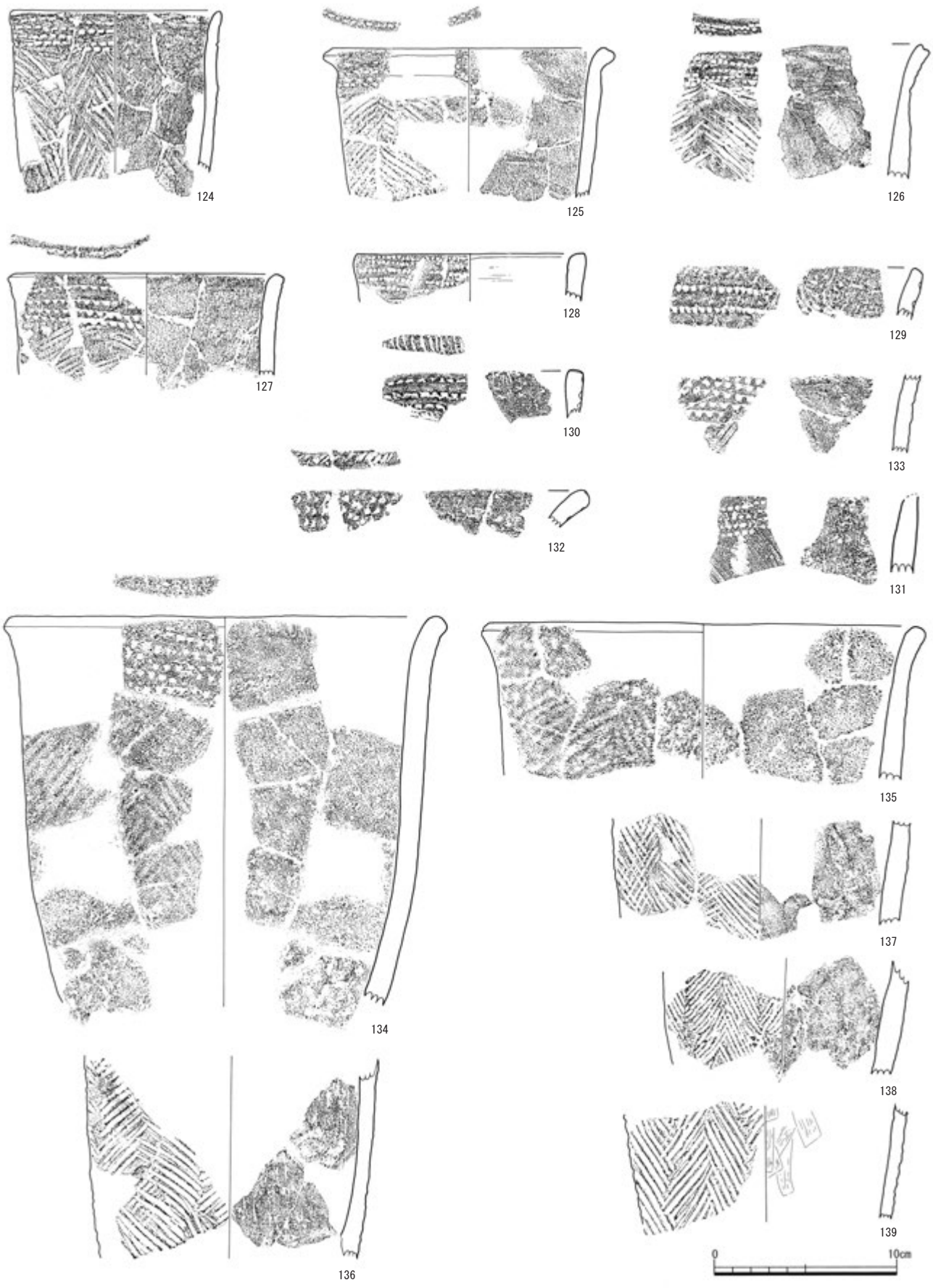
第 33 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（5）



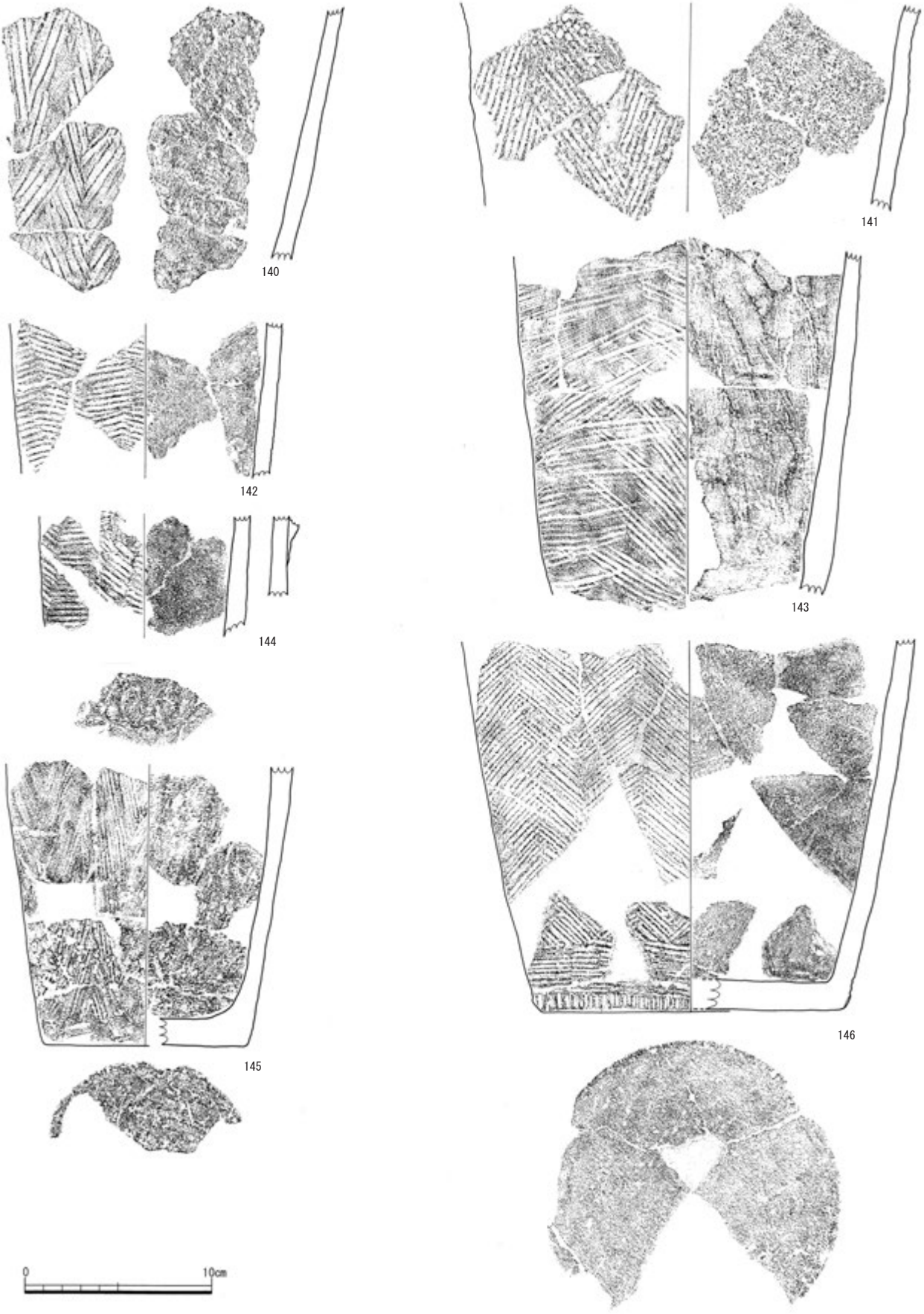
第 34 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（6）



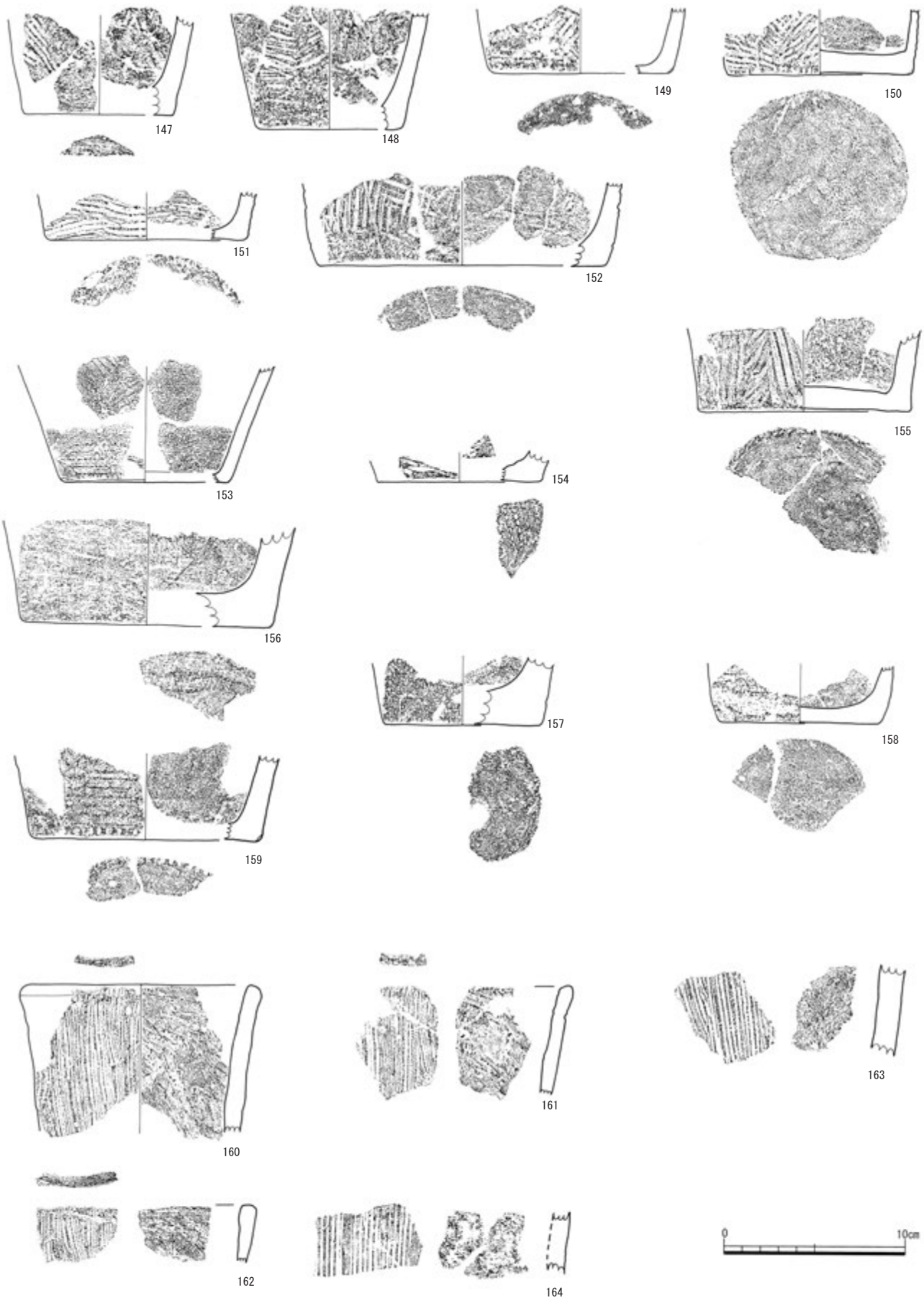
第 35 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（7）



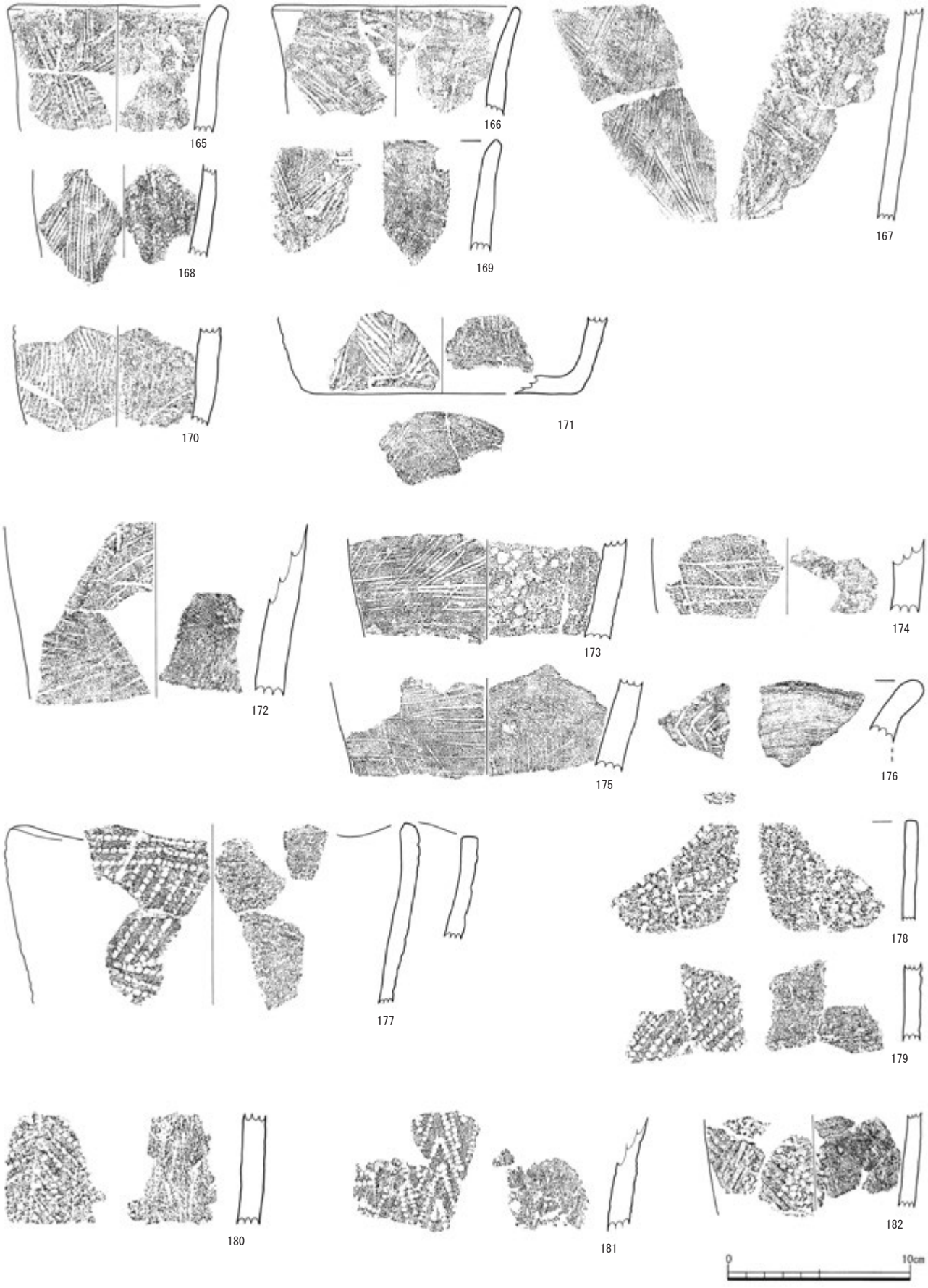
第 36 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（8）



第 37 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（9）



第 38 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（10）



第 39 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器（11）



第 40 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅷ類土器，その他の土器（12）

表５　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
29	43	18951	Y-14	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅰ	口縁部～底部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			浅黄橙 10YR8/4	にぶい橙 5YR6/4
		18910	Y-13	Ⅵ													
		18948	Y-14	Ⅶ													
		19146	Y-12	Ⅵ													
		18898	X-14	Ⅵ													
		18904	Y-14	Ⅵ													
		19099	Y-14	Ⅵ													
		18949	Y-14	Ⅵ													
		19103	Y-14	Ⅵ													
		18945	X-14	Ⅶ													
		18946	Y-14	Ⅵ													
		18947	Y-14	Ⅶ													
		18906	Y-14	Ⅵ													
		19100	Y-14	Ⅵ													
		19146	Y-12	Ⅵ													
		19147	Y-12	Ⅵ													
		18908	Y-14	Ⅵ													
		18905	Y-14	Ⅵ													
		18903	Y-14	Ⅵ													
		18909	Y-13	Ⅵ													
	44	18952	Y-13	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅰ	口縁部～胴部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR4/2
		18953	Y-13	Ⅵ													
	45	18960	Y-14	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅰ	口縁部～胴部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 7.5YR6/4
	46	19026	Z-12	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅰ	口縁部～胴部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	灰黄褐 10YR6/2
		19027	Z-12	Ⅵ													
		19028	Z-13	Ⅷ													
		19091	Z-12	Ⅷ													
	47	12591	U-27	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅰ	口縁部～胴部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2
	48	19070	AA-13	Ⅷ	円筒形深鉢	Ⅰ	口縁部～胴部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	灰褐 7.5YR4/2
	49	10965	V-28	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅰ	口縁部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○					黒褐 10YR 3/ 1	黒褐 10YR 3/ 1
		12791	V-28	Ⅵ													
	50	1472	Z-10	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅰ	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4
		1475	AA-9	Ⅵa													
		2354	Z-10	Ⅵa													
		2356	Z-10	Ⅵb													
		2352	Z-10	Ⅵa													
		2355	Z-10	Ⅵb													
	51	342	R-15	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅰ	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3
	52	1080	R-13	Ⅵa		Ⅰ	底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR7/4
		1825	K-14	Ⅵb													
		3753	T-12	Ⅵb													
		3816	S-13	Ⅵb													
		3981	T-15	Ⅵb													
		4565	R-14	Ⅵb													
		4687	S-15	Ⅵb													
		6136	V-14	Ⅵb													
	53	11028	V-28	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅰ	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	54	14938	W-16	Ⅵ		Ⅰ	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○					橙 7.5YR6/6	にぶい橙 10YR6/4
		15065	W-16	Ⅵ													
		18409	W-16	Ⅵ													
	55	18798	X-14	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅰ	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○					明黄褐 7.5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/3
		18889	X-14	Ⅵ													
		18891	X-14	Ⅵ													
30	56	4538	T-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅱ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突 条痕・楔型貼付突帯	条痕	ケズリ，ナデ	○		○			明赤褐 5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6
		5074	U-13	Ⅵb													
	57	19094	Y-13	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	口縁部～胴部	刻み目 貝殻腹縁刺突 条痕	条痕	ナデ	○		○			にぶい橙 7.5YR6/4	明赤褐 5YR5/6
		18923	Z-13	Ⅵ													
		18924	Z-13	Ⅵ													
	58	18921	Y-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	口縁部	貝殻腹縁刺突・刻み	ナデ	ナデ	○		○			明褐 7.5YR5/8	明赤褐 5YR5/6
	59	7138	T-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅱ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR4/2
	60	18920	Y-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6
	61	18382	W-16	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR6/4	橙 5YR6/6
	62	1823	R-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3
	63	18017	X-15	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6
	64	19034	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			橙 5YR7/6	橙 5YR7/8
		19036	Z-13	Ⅶ													
		一括	Y-12	Ⅶ													
	65	19030	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6
		19037	Z-13	Ⅶ													
	66	19032	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	明赤褐 5YR5/6
		19035	Z-13	Ⅶ													
	67	19042	Z-12	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4
	68	18884	X-14	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅱ-1	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	69	18956	Z-13	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突・刻み	ナデ	ナデ	○		○			赤褐 5YR4/8	にぶい橙 7.5YR6/4
		18968	Z-13	Ⅵ													
	70	19123	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・刻み	ナデ	ナデ	○		○			にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	71	18878	X-14	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・刻み	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	橙 5YR7/6
	72	19051	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突・刻み	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	明茶褐 10YR6/6
	73	18977	AA-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突・刻み	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/4
	74	19001	BB-12	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突 楔型貼付突帯	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4
		19069	AA-13	Ⅶ													
		19061	Z-13	Ⅶ													
		19000	AA-13	Ⅶ													
		19068	AA-13	Ⅶ													
		19064	Z-13	Ⅶ													
		19057	Z-13	Ⅶ													
		19050	Z-13	Ⅶ													
	75	18999	AA-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突 楔型貼付突帯	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6
		19052	Z-13	Ⅶ													
		19138	Z-13	Ⅶ													
	76	19029	AA-13	Ⅶ	角筒形深鉢	Ⅱ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突 楔型貼付突帯	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	77	18981	AA-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6
		18988	AA-13	Ⅶ													
		18998	AA-13	Ⅶ													
		19065	Z-13	Ⅶ													
		19117	Z-13	Ⅶ													
		19136	Z-13	Ⅶ													
	78	19121	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			黄橙 10YR8/6	にぶい黄橙 7.5YR7/4
	79	19063	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			浅黄橙 10YR8/3	にぶい黄橙 10YR7/4
		19114	AA-13	Ⅶ													
	80	19044	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4
		19108	Y-13	Ⅵ													
	81	19116	Z-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6
		19125	AA-13	Ⅶ													
	82	18985	AA-13	Ⅶ	円筒形深鉢	Ⅱ-2	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/2	黄褐 10YR5/6
		19119	Z-13	Ⅶ													
		19139	Z-13	Ⅶ													
		一括	Z-13, A-13	Ⅶ													

表６　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色	調
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外　面	内　面
31	83	4546	S-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅲ	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4
		4715	S-15	Ⅵb													
		4786	S-13	Ⅵb													
	84	408	R-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～底部	貝殻腹縁刺突・刻み条痕	ナデ	ナデ	○		○			浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4
		594	R-16	Ⅵb													
		2607	T-14	Ⅵa													
		2936	T-14	Ⅵb													
		2966	T-14	Ⅵb													
		2990	T-14	Ⅵb													
		2992	T-14	Ⅵa													
		2994	T-14	Ⅵa													
		3012	T-14	Ⅵb													
		3013	T-14	Ⅵb													
		3015	T-14	Ⅵb													
		3016	T-14	Ⅵb													
		3072	S-14	Ⅵa													
		3077	S-14	Ⅵb													
		3087	R-14	Ⅵb													
		3582	U-14	Ⅵb													
		3597	T-14	Ⅵb													
		3644	T-14	Ⅵb													
		3796	T-13	Ⅵb													
		3805	T-13	Ⅵb													
		4445	T-14	Ⅵb													
		4543	T-13	Ⅵb													
		4566	R-14	Ⅵb													
		4729	S-15	Ⅵb													
		4922	U-12	Ⅵb													
		5011	T-11	Ⅵb													
		5129	U-13	Ⅵb													
		5185	T-12	Ⅵb													
		5486	U-14	Ⅵb													
		5547	U-14	Ⅵb													
		5558	U-14	Ⅵb													
		5566	U-14	Ⅵb													
		6272	U-14	Ⅵb													
		6805	U-14	Ⅵb													
		6806	U-14	Ⅵb													
		6838	U-14	Ⅵb													
		7177	V-13	Ⅵb													
		15709	Y-19	Ⅵ													
		15941	V-17	Ⅵ													
		16258	W-17	Ⅵ													
		18255	W-15	Ⅵ													
		18634	Y-15	Ⅵ													
		19106	Y-14	Ⅵ													
32	85	5530	U-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ケズリ，指押え	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		表採一括	W-15														
	86	12485	U-27	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3
		表採一括	W-15														
	87	5833	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			明赤褐 5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/3
		6817	U-13	Ⅵb													
	88	18115	X-15	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○			○		灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄褐 10YR5/3
	89	15473	W-18	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○			○		にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR5/2
	90	12148	U-27	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	91	14581	W-17	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○			○		にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4
		14914	W-17	Ⅵ													
		14916	W-17	Ⅵ													
		14921	W-17	Ⅵ													
		15106	W-17	Ⅵ													
		15107	W-17	Ⅵ													
		15424	W-17	Ⅵ													
		15425	W-17	Ⅵ													
		15599	W-17	Ⅵ													
		16015	W-17	Ⅵ													
		16016	W-17	Ⅵ													
		16478	W-17	Ⅵ													
	92	2682	S-15	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		2683	S-15	Ⅵa													
		3082	S-14	Ⅵa													
		3177	S-15	Ⅵa													
		3504	T-15	Ⅵb													
		3696	S-15	Ⅵb													
		4002	S-15	Ⅵb													
		4707	S-15	Ⅵb													
33	93	表採一括	W-15	表採一括	深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・貝殻条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	明黄褐 10YR7/6
	94	630	R-16	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		631	R-16	Ⅵa													
		3208	S-15	Ⅵb													
		3209	S-15	Ⅵb													
		3530	T-15	Ⅵb													
		3532	T-15	Ⅵb													
		3863	T-15	Ⅵb													
		4705	S-15	Ⅵb													
		4852	S-15	Ⅵb													
	95	2764	S-16	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○			○		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3
		5995	U-14	Ⅵb													
		8381	U-15	Ⅵa													
		8608	V-14	Ⅵb													
		8627	U-15	Ⅵb													
		8740	U-15	Ⅵb													
		15429	Y-16	Ⅵ													
		15940	V-17	Ⅵ													
		18726	W-16	Ⅵ													
	96	8635	U-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			明黄褐 10YR7/6	浅黄 2.5Y7/4
		5063	U-13	Ⅵb													
		18340	W-16	Ⅵ													
	97	5121	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○			○		にぶい黄褐 10YR5/3	暗黄灰 2.5YR4/2
		5214	U-13	Ⅵb													
		5234	T-14	Ⅵb													
		6298	V-13	Ⅵb													
		7175	V-13	Ⅵb													
		8440	V-14	Ⅵa													
	98	5217	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2
	99	5103	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○			○		にぶい黄褐 10YR5/3	黄灰 2.5Y4/1
		5118	U-13	Ⅵb													
	100	6032	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○			○		灰黄褐 10YR4/2	灰褐 7.5YR4/2
	101	105	S-11	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3
	102	102	S-11	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-1	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3

表７　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
34	103	2557	S-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・刻み条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4
		3150	S-14	Ⅵb													
		3200	S-15	Ⅵb													
		3932	S-14	Ⅵb													
		4193	S-14	Ⅵb													
		4195	S-14	Ⅵb													
		4399	S-15	Ⅵb													
		4417	S-15	Ⅵb													
		4429	S-14	Ⅵb													
		4717	S-15	Ⅵb													
		9313	V-28	Ⅵa													
		10042	V-27	Ⅵa													
		18163	X-15	Ⅵa													
	104	8317	T-16	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ケズリ，ナデ	○			○		にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄 2.5YR6/3
	105	5373	V-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○	○		にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR5/3
		6013	U-13	Ⅵb													
		7025	V-13	Ⅵb													
		18337	W-16	Ⅵ													
	106	4944	U-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○	○		黒褐 10YR4/4	にぶい黄褐 10YR5/3
		6535	U-13	Ⅵb													
		表採一括	X-16														
	107	7063	V-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○			○		にぶい黄橙 10YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3
		14766	V-16	Ⅵ													
	108	3001	T-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ケズリ，ナデ	○			○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
		4284	S-14	Ⅵb													
	109	1817	R-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突，刻み	ナデ	ナデ	○		○				
	110	3852	T-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ				○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		3964	S-15	Ⅵb													
		3966	S-15	Ⅵb													
	111	2387	T-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4
		3607	T-14	Ⅵb													
		4970	V-12	Ⅵb													
		15860	V-17	Ⅵ													
	112	5281	U-13	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6
		5315	U-14	Ⅵb													
		5453	R-13	Ⅵb													
		5528	U-14	Ⅵb													
		5954	U-14	Ⅵb													
		5955	U-14	Ⅵb													
		5960	U-14	Ⅵb													
		6472	U-14	Ⅵb													
		6475	U-14	Ⅵb													
		6739	U-14	Ⅵb													
	113	6789	V-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4
	114	14920	W-17	Ⅵ	円筒形浅鉢	Ⅳ-2	口縁部	刻み・貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	浅黄 2.5YR7/4
	115	6578	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ケズリ，ナデ			○			橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/3
35	116	347	R-16	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	黒褐 2.5YR3/2
		402	R-15	Ⅵa		Ⅳ-2											
	117	2891	T-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		2901	T-14	Ⅵa		Ⅳ-2											
	118	6871	V-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-2	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR5/3
	119	2902	T-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-3	口縁部～底部	貝殻腹縁刺突・刻み条痕	ナデ	ナデ・ケズリ	○		○			灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3
		4913	U-14	Ⅵb													
		4916	U-12	Ⅵb													
		4953	U-12	Ⅵb													
		5181	U-12	Ⅵb													
		5367	V-14	Ⅵb													
		5370	V-13	Ⅵb													
		5570	V-14	Ⅵb													
		5577	U-13	Ⅵb													
		5655	U-13	Ⅵb													
		5657	U-13	Ⅵb													
		5693	V-13	Ⅵb													
		5713	V-13	Ⅵb													
		5831	V-13	Ⅵb													
		5841	U-13	Ⅵb													
		5900	V-12	Ⅵb													
		5903	V-12	Ⅵb													
		6035	U-14	Ⅵb													
		6036	U-14	Ⅵb													
		6038	U-14	Ⅵb													
		6155	U-15	Ⅵb													
		6299	V-13	Ⅵb													
		6618	V-13	Ⅵb													
		6619	V-13	Ⅵb													
		6620	V-13	Ⅵb													
		6621	V-13	Ⅵb													
		6624	V-13	Ⅵb													
		6630	V-13	Ⅵb													
		6686	U-14	Ⅵb													
		6792	V-13	Ⅵb													
		6794	V-13	Ⅵb													
		6804	U-14	Ⅵb													
		6895	V-13	Ⅵb													
		6964	V-13	Ⅵb													
		6970	V-13	Ⅵb													
		6977	V-13	Ⅵb													
		6993	V-13	Ⅵb													
		7048	V-13	Ⅵb													
		7116	V-13	Ⅵb													
		7199	V-13	Ⅵb													
		7305	U-13	Ⅵb													
		7476	U-13	Ⅵb													
		7555	U-13	Ⅵb													
		7607	U-14	Ⅵb													
		7655	V-13	Ⅵb													
	120	18398	W-16	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-3	口縁部～底部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3
		18396	W-16	Ⅵ													
		15066	W-16	Ⅵ													
		18528	W-16	Ⅵ													
		18410	W-16	Ⅵ													
		18399	W-16	Ⅵ													
		16193	W-16	Ⅵ													
		18394	W-16	Ⅵ													
		18532	W-16	Ⅵ													
		18400	W-16	Ⅵ													
		18537	W-16	Ⅵ													
		18402	W-16	Ⅵ													
		18345	W-16	Ⅵ													
		16243	W-17	Ⅵ													

表８　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器観察表（4）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色	調
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外　面	内　面
35	121	15331	W-16	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6
		15990	W-16	Ⅵ													
		15956	W-16	Ⅵ													
		15959	W-16	Ⅵ													
		16246	W-16	Ⅵ													
	122	3646	T-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					橙 5YR6/6	にぶい黄褐 10YR5/3
	123	16841	Z-18	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 2.5YR6/6	浅黄 2.5Y7/3
		16842	Z-18	Ⅵ													
36	124	15495	W-18	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	黄褐 2.5YR5/4
		15471	W-18	Ⅵ													
		15742	W-19	Ⅵ													
		15754	X-18	Ⅵ													
		15761	X-18	Ⅵ													
		16344	W-17	Ⅵ													
		16480	W-18	Ⅵ													
	125	14587	W-17	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4
		14927	W-17	Ⅵ													
		15414	W-17	Ⅵ													
		15596	W-17	Ⅵ													
		15418	W-17	Ⅵ													
		18146	X-15	Ⅵ													
		18357	W-16	Ⅵ													
	126	18393	W-16	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					にぶい黄褐 10YR4/3	にぶい黄 2.5YR6/3
		18534	W-16	Ⅵ		Ⅳ－３											
	127	15821	Y-18	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄 2.5YR6/3
		15802	Y-18	Ⅵ													
		15803	Y-18	Ⅵ													
		15808	Y-18	Ⅵ													
		15835	Y-18	Ⅷ													
		15851	Y-18	Ⅵ		Ⅳ－３											
	128	3096	T-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR4/2
		5219	U-12	Ⅵb													
	129	2110	R-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y6/2
	130	514	Q-15	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部	刻み・貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					黒褐 2.5YR3/1	褐灰 10YR4/1
	131	2203	S-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	132	6511	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部	貝殻腹縁刺突，刻み	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		7626	U-13	Ⅵb													
	133	4274	T-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4
		4436	T-15	Ⅵb													
	134	15969	W-16	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4
		15970	W-16	Ⅵ													
		15961	W-16	Ⅵ													
		16113	W-16	Ⅵ													
		15952	W-16	Ⅵ													
		15993	W-16	Ⅵ													
		16245	W-16	Ⅵ													
		16223	W-16	Ⅵ													
		15968	W-16	Ⅵ													
		15976	W-16	Ⅵ													
		15210	W-16	Ⅵ													
	135	14959	W-16	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○		○			浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4
		15091	W-16	Ⅵ													
		15593	W-17	Ⅵ													
		16058	W-17	Ⅵ													
		16107	W-17	Ⅵ													
		16130	W-17	Ⅵ													
	136	1346	R-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	条痕	ナデ	ナデ，指ナデ	○					にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4
		2160	R-13	Ⅵb													
		3766	T-12	Ⅵb													
	137	1281	R-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	条痕	ナデ	ケズリ，指ナデ	○					にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3
		1386	R-11	Ⅵa													
	138	8404	V-14	Ⅵa	深鉢	Ⅳ－３	胴部	貝殻条痕	ナデ	ケズリ	○		○			明赤褐 5YR5/6	黒褐 2.5YR3/1
		8691	T-15	Ⅵa													
		16362	W-18	Ⅵ													
	139	3771	T-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	条痕	ナデ	ナデ，ヘラナデ	○					にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3
37	140	4440	T-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	条痕	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○	○		にぶい黄橙 10YR6/3	暗黄灰 2.5Y5/2
		8323	T-16	Ⅵa													
		8604	V-14	Ⅵb													
	141	4930	V-11	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○			○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		8277	V-11	Ⅵa													
	142	4200	T-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	条痕	ナデ	ナデ，ヘラナデ	○		○			橙 5YR6/6	黒褐 10YR3/1
		5078	U-13	Ⅵb													
		6549	U-13	Ⅵb													
		18148	X-15	Ⅵ													
	143	14621	V-16	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	条痕	条痕	ナデ	○		○			にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4
		16206	W-16	Ⅵ													
		18276	W-16	Ⅵ													
		18728	W-16	Ⅵ													
	144	8484	W-13	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○					橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4
		8577	W-14	Ⅵb													
		8731	W-14	Ⅵb													
	145	4052	S-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部～底部	条痕	ナデ	ケズリ，指ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/3
		5444	R-13	Ⅵb													
		6795	V-13	Ⅵb													
		7050	V-13	Ⅵb													
		8450	V-13	Ⅵa													
		8670	T-16	Ⅵb													
		14578	W-17	Ⅵb													
		一括	U-18														
	146	3168	S-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部～底部	条痕・刻み	条痕	ナデ	○		○			橙 5YR7/6	にぶい黄橙 7.5YR7/4
		3736	S-13	Ⅵa													
		3745	S-14	Ⅵb													
		4409	S-15	Ⅵb													
		4806	R-16	Ⅵb													
		4861	S-15	Ⅵa													
		5004	S-12	Ⅵa													
		7351	T-15	Ⅵb													
		7423	T-14	Ⅵa													
		3588	T-14	Ⅵb													
		5070	S-14	Ⅵb													
		18853	W-14	Ⅵa													
		10048	V-28	Ⅵa													
		10041	V-27	Ⅵa													
		9314	V-28	Ⅵa													
38	147	8624	U-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○					暗黄灰 2.5YR5/2	浅黄 2.5Y7/4
		8625	U-15	Ⅵb													
	148	175	S-11	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ－３	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4
		422	R-16	Ⅵa													
		583	R-16	Ⅵb													
		695	R-16	Ⅵa													
		2801	S-16	Ⅵa													

表９　縄文時代早期Ⅰ～Ⅷ類土器，その他の土器観察表（5）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
38	149	11670	U-27	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/8	にぶい橙 7.5YR6/4
		12157	U-27	Ⅵ													
	150	6444	W-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		8470	W-13	Ⅵa													
		8561	W-13	Ⅵb													
		8566	W-13	Ⅵb													
	151	17046	y-17	Ⅷ	円筒形深鉢	Ⅳ-3	底部	条痕	ナデ	ナデ	○					橙 7.5YR6/6	灰黄褐 10YR5/2
		19007	AA-12	Ⅷ													
	152	1297	R-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4
		2195	R-12	Ⅵb													
	153	5516	U-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○					にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR5/3
		6515	U-13	Ⅵb													
		6526	U-13	Ⅵb													
		6649	V-13	Ⅵb													
	154	19151	Y-14	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-3	底部	貝殻腹縁刺突・条痕	ナデ	ナデ	○					にぶい黄 2.5Y6/3	橙 7.5YR6/6
	155	3580	U-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○					にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
		6664	V-13	Ⅵb													
		15798	Y-18	Ⅵ													
	156	15134	V-17	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部		ナデ	ナデ	○		○			橙 2.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/3
	157	15402	W-16	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部		ナデ	ナデ	○		○			橙 2.5YR6/6	にぶい黄 2.5Y6/4
	158	14725	V-17	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部		ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/2
		15541	V-17	Ⅵ													
	159	4003	S-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-3	胴部～底部	刻み・条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	黒 10YR2/1
		4006	S-15	Ⅵb													
	160	14206	U-17	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-4	口縁部～胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	オリーブ褐 2.5YR4/4
	161	14204	U-17	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-4	口縁部～胴部	条痕	ナデ	ナデ，指押え	○		○			橙 7.5YR6/6	オリーブ褐 2.5YR4/4
	162	15771	X-18	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-4	口縁部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR6/2
	163	918	R-14	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-4	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	灰黄 2.5YR6/2
	164	11809	V-27	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-4	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			灰黄褐 10YR6/2	にぶい橙 7.5YR6/4
39	165	4424	S-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-5	口縁部～胴部	条痕	ナデ	ナデ	○					にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		4722	S-15	Ⅵb													
		7262	S-15	Ⅵb													
	166	337	R-15	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-5	口縁部～胴部	条痕	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3
		425	R-16	Ⅵb													
		581	R-16	Ⅵb													
		584	R-16	Ⅵb													
		615	R-16	Ⅵb													
	167	1404	S-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
		1412	R-12														
	168	8679	T-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○					灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/2
	169	4416	S-15	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-5	口縁部～胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	黒褐 2.5YR3/1
	170	15127	V-18	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部	条痕	ナデ	ナデ，指押え	○		○			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		16152	V-18	Ⅵ													
	171	14682	V-17	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○					明黄褐 10YR7/6	黒褐 10YR3/1
		14754	V-16	Ⅵ													
		15921	V-17	Ⅵ													
	172	4482	V-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4
		7584	T-14	－													
	173	1255	R-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			橙 5YR6/6	浅黄 2.5Y7/4
		4209	R-14	Ⅵb													
		15472	W-18	Ⅵ													
	174	6382	V-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○					橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4
	175	14209	U-17	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅳ-5	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			褐灰 10YR4/1	浅黄橙 10YR8/4
	176	16891	Y-17	Ⅵ	円筒形深鉢	Ⅳ-5	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○					暗灰褐 2.5YR5/2	灰黄褐 2.5YR5/4
	177	1802	R-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅴ	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			浅黄 2.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3
		3112	S-14	Ⅵb													
		3121	S-14	Ⅵb													
	178	4560	S-13	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅴ	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					にぶい黄 2.5Y6/3	にぶい黄 2.5Y6/3
		4869	S-13	Ⅵb													
	179	1518	R-16	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅴ	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ﾍﾗﾅﾃﾞ，ナデ	○					にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄 2.5Y6/3
		1522	R-16	Ⅵa													
	180	5008	S-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅴ	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	暗黄灰 2.5Y5/2
	181	913	R-14	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅴ	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○				○	にぶい橙 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR4/3
		4780	S-15	Ⅵb													
		5945	U-14	Ⅵb													
		5515	U-14	Ⅵa													
	182	5527	U-14	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅴ	胴部	貝殻腹縁刺突	条痕，ナデ	ナデ	○		○			明赤褐 5YR5/6	にぶい黄褐 10YR4/3
40	183	8286	W-10	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅵ	口縁部～胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○			にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい橙 5YR6/4
	184	868	R-11	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅵ	胴部	沈線	ナデ	ナデ				○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3
		2303	S-12	Ⅵb													
	185	1978	R-13	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅵ	胴部	沈線	ナデ	ミガキ				○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3
	186	981	R-12	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅵ	胴部	沈線	ナデ	ナデ				○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3
	187	5081	U-13	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	山形押型文	ナデ	ナデ	○					にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4
	188	770	R-13	Ⅵa	深鉢	Ⅷ	胴部	山形押型文	ナデ	ナデ					○	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	189	6685	U-14	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ケズリ	○				○	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		6688	U-14	Ⅵb													
		6747	U-14	Ⅵb													
	190	4960	U-12	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ケズリ	○		○			にぶい赤褐 5YR5/4	灰褐 7.5YR4/2
	191	6749	U-14	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3
	192	6002	U-14	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ケズリ	○					にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい赤褐 5YR4/3
	193	5615	U-13	Ⅵa	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ナデ	○					にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい黄褐 10YR4/3
	194	7487	U-13	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ケズリ	○		○			にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	195	6940	V-13	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	丁寧なナデ	○		○		○	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	196	6899	V-13	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ナデ	○				○	にぶい黄橙 10YR5/3	にぶい黄橙 10YR6/3
	197	6296	V-13	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部	楕円押型文	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3
	198	5732	V-13	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	底部	楕円押型文	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3
		6939	V-13	Ⅵb													
	199	5567	U-14	Ⅵb	深鉢	Ⅷ	胴部～底部	楕円押型文	ナデ	ケズリ，ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/3
	200	12487	U-27	Ⅵ	深鉢	Ⅷ	胴部～底部	不明	不明	ナデ，指ナデ	○					明褐色５YR ５/ ６	黒褐 7.5YR ３/ １
		12586	U-27	Ⅵ		Ⅷ											
		12587	U-27	Ⅵ		Ⅷ											
	201	5290	U-13	Ⅵa	円筒形深鉢	Ⅷ	口縁部，瘤状突起	貝殻腹縁刺突	ナデ		○		○			橙 7.5YR6/6	黒褐 10YR3/1
	202	2211	S-12	Ⅵb	円筒形深鉢	Ⅷ	口縁部，瘤状突起		ナデ	ナデ	○		○			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	203	3211	S-15	Ⅵa	円筒形深鉢	その他	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			にぶい赤褐 5YR5/4	灰黄褐 10YR4/2
	204	2631	T-14	Ⅵa	深鉢	その他	胴部	微隆起突帯	条痕	条痕	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		2632	T-14	Ⅵa													
		2889	T-15	Ⅵa													
	205	4261	T-14	Ⅵb	円筒形深鉢	その他	口縁部～胴部	条痕・沈線	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR5/2
		5372	V-13	Ⅵb													
		6449	W-13	Ⅵb													
	206	14543	V-18	Ⅵ	円筒形深鉢	その他	口縁部		ナデ	条痕	○		○			明黄褐 10YR6/6	にぶい黄褐 10YR5/4
		15132	V-18	Ⅵ													
	207	5076	U-13	Ⅵb	円筒形深鉢	その他	口縁部	刻み・貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○					にぶい黄橙 10YR6/3	暗灰黄 2.5YR4/2
	208	8726	W-14	Ⅵb	円筒形深鉢	その他	口縁部（瘤状突起）	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○		○			褐灰 10YR4/1	にぶい褐 7.5YR5/4
	209	820	R-12	Ⅵa	浅鉢	その他	口縁部～胴部		ケズリ，ナデ	ケズリ，ナデ	○					にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄 2.5Y6/3
		938	R-14	Ⅵb													
		966	R-12	Ⅵa													
	210	811	R-12	Ⅵa	浅鉢	その他	口縁部～胴部		ケズリ，ナデ	ケズリ，ナデ	○					にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄 2.5Y6/3
		1309	R-12	Ⅵa													
	211	19093	Z-12	Ⅷ	円筒形深鉢	その他	胴部～底部		ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	212	2986	T-14	Ⅵa	円筒形深鉢	その他	胴部～底部		ナデ	ナデ	○		○			にぶい橙 7.5YR7/4	黄褐 2.5YR5/3
		18283	W-16	Ⅵ													
		18526	W-16	Ⅵ													
		18725	W-16	Ⅵ													
		19189	W-16	Ⅵ													

石　器

Ⅵb・Ⅶ・Ⅸ・Ⅹ層から打製石鏃22点，磨製石鏃1点，石匙１点，石錘２点，石皿７点，磨石・敲石が出土している。石材は，剥片石器では黒曜石が半数を占め，礫石器では磨石・敲石が主体となっている。

剥片石器

石　鏃（第41・42図　213 ～ 235）

平面形状は二等辺三角形状を呈するもので占められているため，基部の形状，製法の相違を基準にⅠ～Ⅳに分類した。

Ⅰ類＝基部が平基の打製石鏃

213，214，215は打製石鏃で石材が黒曜石である。214は下端部が欠損している。

Ⅱ類＝基部がやや弧状，または浅い抉りになる打製石鏃

216 ～ 224は基部がやや弧状になる形状である。216，220，222，223は左側縁が鋸歯状になる。218は微細な調整がなされている。

Ⅱ類＝基部の抉りが鋭い打製石鏃

225 ～ 227は脚部端部が方形を呈する。228 ～ 230は脚部端部が円形を呈する。225は表面に剥離面を残している。228は両側辺が丸みを帯び，脚部端部がやや鋭角的になる229は両側縁が弧状になり，脚部端部が鋭角的になる。230は両側辺が直線的で，脚部端部が鋭角的になる。

Ⅲ類＝長軸・短軸比が３：１，２：１になる打製石鏃

231，232は基部の抉りが浅い形状である。233，234は基部の抉りが鋭い形状である。いずれも上端部が鋭利な形状である。

Ⅳ類＝磨製石鏃

235の石材はチャートである。基部と側辺部は剥離調整が成されているが，身部が研磨されているため磨製石鏃とした。上端部が欠損している。

石　匙（第42図　236）

236の石材は，頁岩のホルンフェルス化したもので，横剥ぎの素材剥片に，おもに腹面側から剥離して，背面に刃部を形成している。背面中央部は節理面がある。

礫石器（第42 ～ 46図　237 ～ 280）

237は，玉随を石材として，全面研磨でつるつるしており，ペットストーンと思われる。

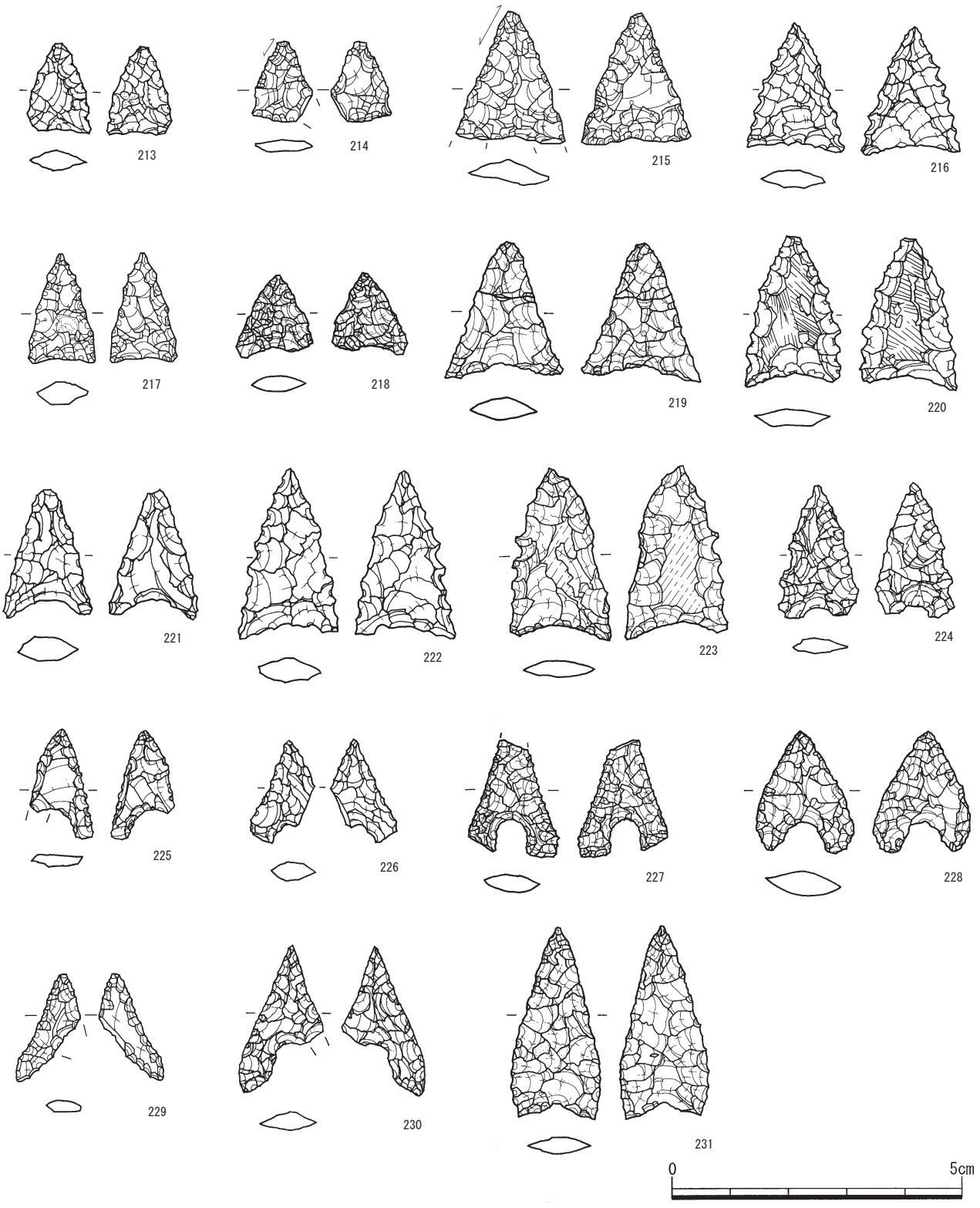
238は敲打により，線状に溝を形作る。石錘である。239は砂岩の大きな礫を割取り，厚さを調整して後，上下端部を打ち欠いている。石錘であるが，重く大きい。

240，241は石皿である。240は，表面は全て滑面で，裏面は節理で割れたものである。241は板状の礫で表裏両面ともに平滑である。242は磨石で，両面に擦痕がある。243は敲石で，両端部を敲打により使用している。244は磨・敲石で，両面に磨面があり，周縁部に敲打痕がある。表面が被熱により赤化している。245は粗粒の砂岩で，磨・敲・凹石である。両端部を敲打により使用している。246は磨・敲石で，平坦面は磨られて平滑で擦痕があり，両端部は敲打で使用されている。247も磨・敲石で，両平坦面は平滑で擦痕があり，一端部に打痕がある。ハンマーストーンの可能性がある。248は磨・敲石で，平坦面が磨面で，周縁に敲打痕がある。249は磨石で表裏平坦面が磨面である。

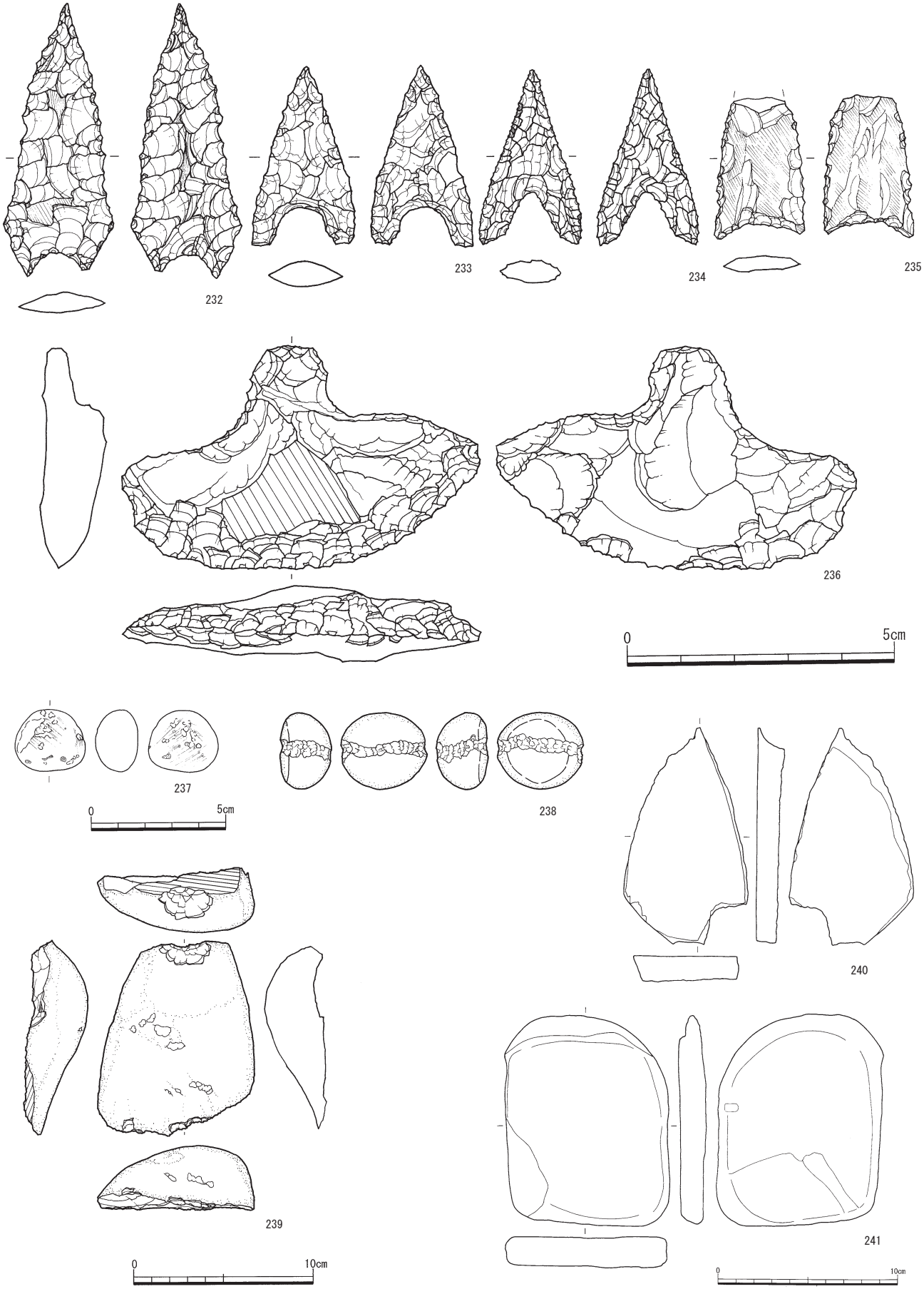
250は磨石で，表裏平坦面が磨面であるが，裏面は被熱で大きく破砕している。251は磨石で，表裏平坦面は平滑で下面の一部に敲痕が見られる。252，253は小さな磨石である。254は石皿の破損品である。やや軟質な砂岩で，きめが細かい。表裏ともに滑面。255は磨・敲・凹石で，上半部が被熱によりはじけたものと考えられる。256はわずかに敲打痕があるが磨石としたい。257は磨石で，表裏面に擦痕が顕著である。 258は全面研磨されている。表裏面に擦痕が顕著であり，表面は凹面をなす。敲打による整形と考えられる痕跡が周縁にみられ，方形を意識的に作り出したものと考えられる。ペットストーンの可能性がある。259は全面研磨で，表裏の平坦面に擦痕がある。260はホルンフェルス化した砂岩で，光沢を有し，ペットストーンの可能性がある。261は表裏両面に擦痕があり，周縁の一部に敲打痕が，表面の中央に凹みがある。磨・敲・凹石である。262は磨・敲石で，特に表面は光沢が出るほどである。周縁ほぼ全周に敲打痕がある。263は片側に敲打痕が集中し，小ぶりなハンマーストーンの可能性がある。264は磨石で，表面平坦面に擦痕がみられる。265はやや軟質の砂岩である。磨石を転じてハンマーとして利用したものではないだろうか。266は磨石である。267は表面中央部に円形の凹みがある。３分割したものを接合したもので，それぞれが被熱している。268は浅い敲打痕が見られるものの全周が磨られてほぼ平滑になっている。269は磨石であるが，表面２か所に被熱によるはじけがみられる。270は磨・敲石で表裏平坦面に擦痕があり，全周に細かな敲打痕がみられる。被熱されており，熱によるはじけがある。271は全周が磨られており，これも方形で258と同様にペットストーンの可能性がある。272は表裏面に擦痕が顕著で，表面は光沢が見られるほどである。全周に細かな敲打痕がある。273は磨石で表裏面に擦痕がある。274は板状の石皿で，平坦面が平滑である。275は表裏面が逆（裏面がおもな使用面）と思われるが，縦方向や斜め方向の擦痕が顕著である。周縁の敲打痕は細かい。

276は磨石の一部である。277は磨・敲石の欠損品で，表裏面に擦痕がある。278は棒状の石皿で，中央で折断している。表裏ともに平滑で擦痕がある。

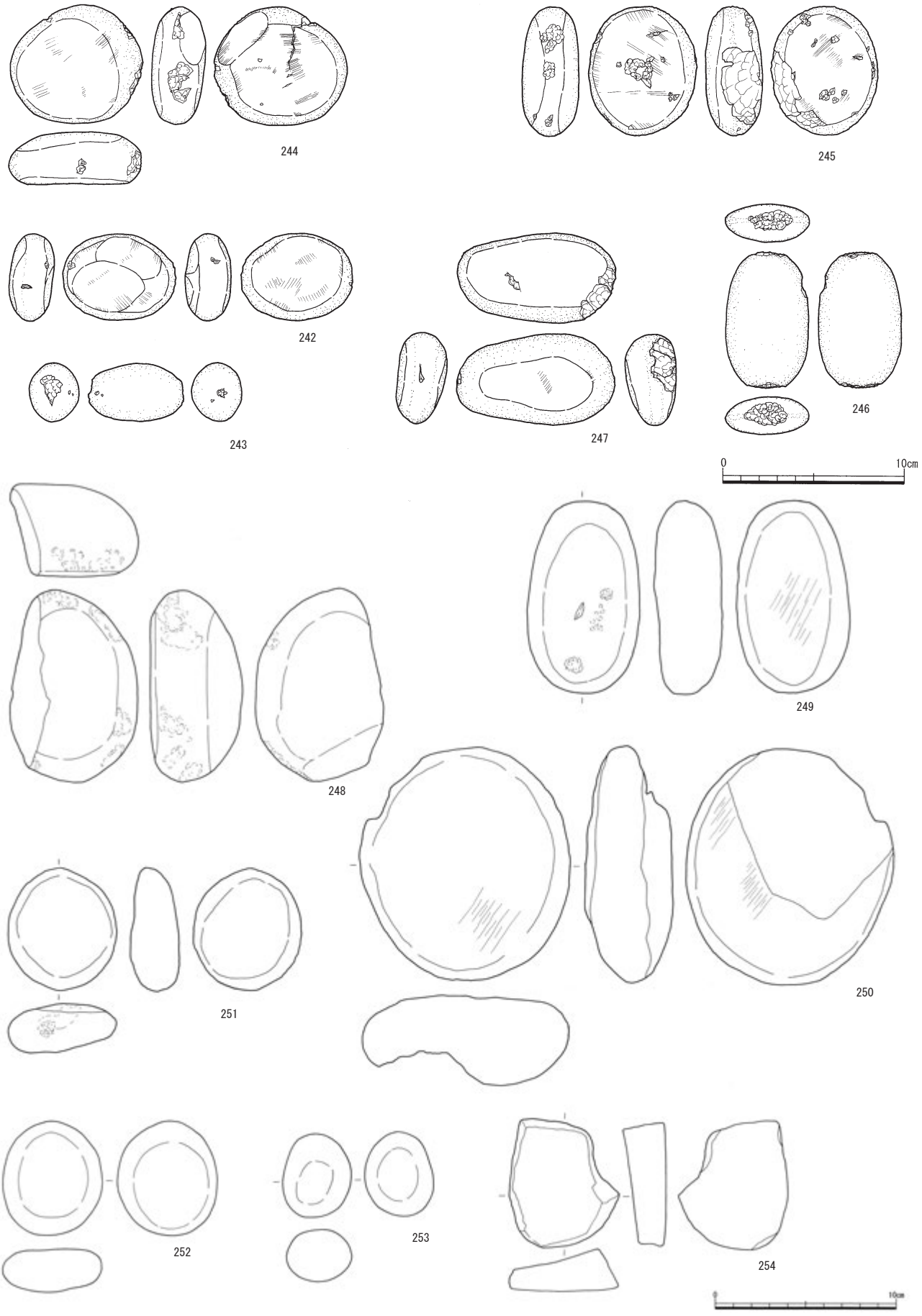
279は他の石皿とは，石材が異なる石皿で，裏面は節理により剥離している。280は板状の楕円形の石皿で，表面には線状の擦痕が顕著である。裏面上半は節理により剥離している。



第 41 図　縄文時代早期　石器（1）



第 42 図　縄文時代早期　石器（2）



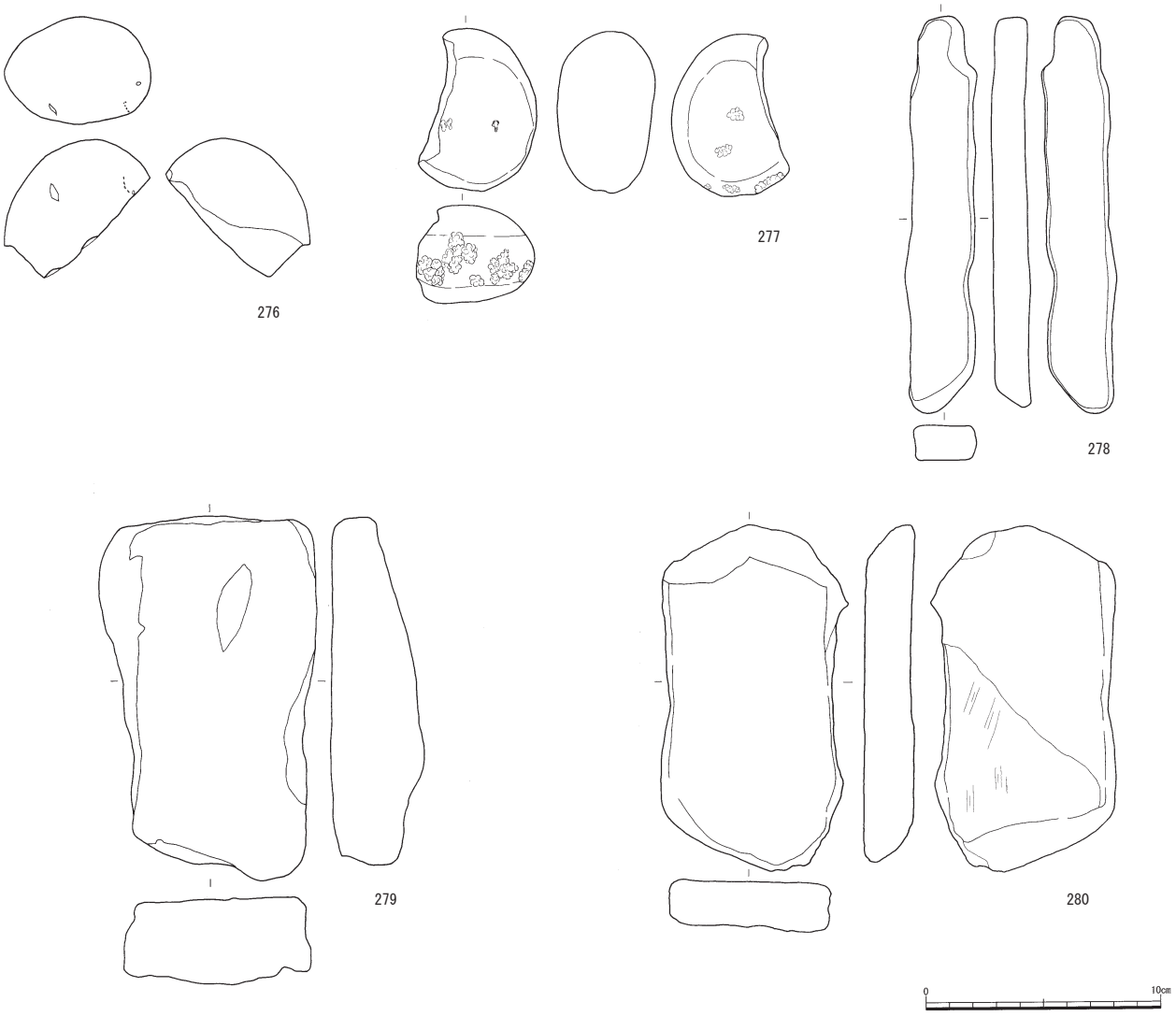
第 43 図　縄文時代早期　石器（3）



第 44 図　縄文時代早期　石器（4）



第 45 図　縄文時代早期　石器（5）



第 46 図　縄文時代早期　石器（6）

表 10　縄文時代早期石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
41	213	V－12	Ⅵb	4478	打製石鏃	黒曜石	1.55	1.1	0.4	0.51
	214	Z－10	Ⅵb	8748	打製石鏃	黒曜石	1.41	1	0.19	0.22
	215	R－16	Ⅵb	1658	打製石鏃	黒曜石	2.18	1.8	0.35	1.04
	216	T－12	Ⅵb	5020	打製石鏃	頁岩	2.3	1.7	0.3	0.99
	217	V－13	Ⅶ	8161	打製石鏃	黒曜石	1.82	1.05	0.4	0.61
	218	Y－17	Ⅵ	17111	打製石鏃	黒曜石	1.5	1.3	0.3	0.42
	219	W－19	Ⅵ	15846 15848	打製石鏃	黒曜石	2.3	2.1	0.35	0.98
	220	V－12	Ⅵb	5183	打製石鏃	黒色安山岩	2.65	1.7	0.35	1.42
	221	R－12	Ⅵa	841	打製石鏃	安山岩	2.3	1.5	0.4	1.02
	222	V－12	Ⅵb	4488	打製石鏃	頁岩	2.9	1.7	0.4	1.86
	223	Y－17	Ⅵ	15845	打製石鏃	安山岩	3	1.75	0.3	1.58
	224	Z－9	Ⅵb	1470	打製石鏃	頁岩	2.4	1.4	0.3	0.8
	225	AA－12	Ⅶ	19017	打製石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.2	0.38
	226	R－12	Ⅵa	957	打製石鏃	黒曜石	-1.8	-1.1	0.35	0.43
	227	Z－14	Ⅵb	14180	打製石鏃	チャート	2	1.7	0.3	0.78
	228	Y－17	Ⅵ	16827	打製石鏃	黒曜石	2	1.3	0.5	1.14
	229	V－12	Ⅵb	4479	打製石鏃	黒色安山岩	1.93	0.9	0.17	0.28
	230	Z－13	Ⅶ	18930	打製石鏃	黒曜石	2.6	1.2	0.29	0.77
	231	X－18	Ⅵ	15760	打製石鏃	玉髄	3.25	1.9	0.3	1.42
42	232	Y－13	Ⅶ	19111	打製石鏃	黒色安山岩	5.1	2.05	0.37	3.33
	233	X－16	Ⅵ	15057	打製石鏃	黒曜石	3.35	1.9	0.5	2.41
	234	AA－12	Ⅶ	19011	打製石鏃	チャート	3.25	1.9	0.4	1.71
	235	X－15	Ⅶ	19145	磨製石鏃	チャート	2.62	1.61	0.48	1.87
	236	T－13	Ⅵb	5208	石匙	頁岩	4.2	6.7	1.25	28.18
	237	Y－13	Ⅵ	18918	ペットストーン	玉髄	2.3	2.6	1.6	13
	238	V－13	Ⅵb	6302	石錘	砂岩	4.2	4.8	2.9	80.14
	239	S－10	Ⅵb	4	石錘	砂岩	10.2	8.7	3.5	336.5
	240	U－18	Ⅵa	14215	石皿	砂岩	12.5	6.9	1.5	154
	241	Z－13	Ⅶ	18969	石皿	砂岩	11.5	11	1.8	321
43	242	Q－13	Ⅵa	1922	磨石	砂岩	4.8	6.15	2.45	109
	243	Q－14	Ⅵb	1920	敲石	砂岩	5.3	3.2	2.7	60
	244	V－14	Ⅵb	5364	磨石・敲石	砂岩	6.5	7.3	2.95	195
	245	R－13	Ⅵb	2219	磨石・敲石・凹石	砂岩	7.1	5.9	3.1	170
	246	S－12	Ⅵb	2243	磨石・敲石	砂岩	7.5	4.55	2.1	110
	247	V－13	Ⅵb	6290	磨石・敲石	砂岩	8.5	4.85	2.7	155
	248	V－27	Ⅵ	9589	磨石・敲石	砂岩	10.5	7	5.1	450
	249	U－17	Ⅵa	14208	磨石	砂岩	10.5	6.2	3.8	370
	250	W－16	Ⅵ	14936	磨石	砂岩	12.8	11.5	4.8	794
	251	V－17	Ⅵ	15028	磨石	砂岩	6.7	5.9	2.6	134
	252	Z－18	Ⅵ	15691	磨石	砂岩	6.25	5.5	2.35	109
	253	Y－16	Ⅵ	16825	磨石	砂岩	4.7	3.8	2.8	61
	254	Y－16	Ⅵ	16943	石皿	砂岩	6.8	6	2.4	118
44	255	X－16	Ⅵ	18424	磨石	砂岩	9.2	7.9	2.85	230
	256	Y－13	Ⅶ	19150	磨石	砂岩	6.5	5.5	3.9	189
	257	W－15	Ⅹ	19163	磨石	砂岩	12.5	9.5	4	751
	258	Y－18	Ⅵ	16633	磨石	砂岩	6	4.4	2.1	100
	259	U－12	Ⅵb	4958	磨石	砂岩	5.4	5.9	4	187
	260	T－14	Ⅵa	3019	磨石	砂岩	5.25	4.4	2.6	86
	261	T－13	Ⅵb	3602	磨石　敲石　凹石	砂岩	7.5	5.9	3.1	181
	262	S－12	Ⅵb	2280	磨石　敲石	砂岩	9.9	8.2	4.55	485
	263	U－14	Ⅵb	5947	ﾊﾝﾏｰｽﾄｰﾝ	砂岩	4.2	3.7	2.7	56
	264	R－14	Ⅵb	3737	磨石	砂岩	6.4	5.6	2.6	133
	265	V－12	Ⅵb	4929	磨石	砂岩	7.8	6.8	5.1	355
45	266	T－14	Ⅵb	4267	磨石	砂岩	3.8	3	2	30
	267	U－14	Ⅵb	5943 5522 5262	磨石　敲石	砂岩	6.2	5.7	3	142
	268	U－13	Ⅵb	6767	敲石	砂岩	7.1	5.2	4.2	205
	269	S－15	Ⅵb	4408	磨石	砂岩	7.5	6.7	4.6	268
	270	R－14	Ⅵa	671	磨石　敲石	砂岩	6.9	5.2	4.2	205
	271	R－16	Ⅵb	585	ペットストーン	砂岩	4.6	3.6	2.6	80
	272	T－14	Ⅵa	2940	磨石　敲石	砂岩	13.5	10	6.5	1024
	273	S－11	Ⅵb	174	磨石	砂岩	12.5	10.4	8	1410
	274	S－12	Ⅵb	2306	石皿	砂岩	11	4.5	2.5	188
	275	T－14	Ⅵb	7407	磨石　敲石	砂岩	17.4	5.3	3.1	480
46	276	T－14	Ⅵb	2870	磨石	砂岩	5.8	6.2	4.5	144
	277	T－14	Ⅵb	7422	磨石　敲石	砂岩	16.4	3.1	1.5	170
	278	AA－9	Ⅵa	2365 2366	石皿	砂岩	16.9	3.1	1.5	136
	279	R－16	Ⅵa	1596	石皿		15.5	9.2	3.9	540
	280	Q－14	Ⅵa	1846	石皿	砂岩	14.4	7.8	2.2	404

エ　縄文時代前期～晩期

（ア）調査の概要

Ⅱ・Ⅲ層において前期から晩期に至る時期の遺物が出土した。前期の遺物は少量で，比較的後期の遺物の分量が多かった。各時期の遺物の出土区は異なる傾向がみられた。

（イ）遺物

土　器

前期相当の土器（第48図　281 ～ 285）

281 ～ 285は深鉢の胴部で同一個体と思われる。外面に沈線で施文する。内面はナデ調整である。胎土には石英，角閃石が含まれる。二次焼成によるものかやや赤色を帯びる。曽畑式土器である。道跡から一括取り上げであり，原位置は留めていないと思われる。

中期相当の土器（第48図　286 ～ 289）

凹線文が施される土器である。道跡で一括取り上げされたものと，Ｗ－11区，Ｘ－10区で出土した数点である。

286，287は深鉢で，同一個体と思われる。やや外反気味に立ち上がる口縁部である。口唇部は平坦でナデ調整を施す。外面には１㎝程度の幅広の凹線が横方向に施される。内面は横方向のナデ調整である。胎土には石英や白い砂粒が含まれる。

288は深鉢の胴部で，外面に５㎜程度の凹線が横方向に曲線を描きながら施される。内面は丁寧なナデ調整である。茶褐色をおび，胎土には金雲母が顕著である。

289は深鉢の胴部である。外面に５㎜弱の凹線が鍵状に施される。内面は横方向の貝殻条痕である。器壁がやや厚い感がある。

後期相当の土器（第48 ～ 50図　290 ～ 310）

290と291は道跡で一括取り上げしたものである。290は深鉢の口縁部で磨消縄文系の土器である。波状口縁で，頂部付近は棒状工具で５か所刻みが施されている。外面は凹線の間に縄文が施され，頂部下に刺突がみられる。内面はナデである。

291は松山式の深鉢で，口縁部から胴部である。外反気味に立ち上がり，口縁は断面三角形状である。口縁部外面は２条の貝殻刺突連点文の間に凹線と刺突が施される。胴部外面は貝殻条痕が施されるが，不明瞭である。煤が付着している。内面は貝殻条痕であるが，口唇はナデである。胎土は金雲母と白い砂粒が顕著である。

292 ～ 310は中岳Ⅱ式に該当する一群である。AA－18区，Ｚ－19区に集中出土する。

292は口縁部から胴部にあたる。口縁は外反し，端部に１条の沈線が巡る。胴部最大径部分に２条の沈線が巡り，その間に凹点が施文される。外面は丁寧なナデ調整がなされている。

293 ～ 295は外反する口縁部で，口唇は平坦で，内部はくぼみがあり，外部は１条の沈線が巡る。

296は胴部で，最大径付近で屈曲しその上部に２条の沈線が巡る。297は小形であるが，これも屈曲部の上に２条の沈線が巡る。

298は，口縁部から胴部である。胴部で鋭角的に屈曲し，口縁は真っ直ぐ立ち上がり，端部で外反し，肥厚する。施文はない。

299，300は口縁部である。外面に沈線が２条巡らされている。299は端部が平坦であるが，300は尖っており，内面を凹ませる。

301は外面に１条の沈線が巡るもので，端部が鋭角的なものである。

302は無紋で端部が鋭角的なものである。303 ～ 306も無紋であるが端部が平坦になるもので，肥厚帯が認められるものである。307，308は端部が丸く肥厚する口縁部で無紋である。

309，310は断面三角形の口縁部で，外面に斜方向の刺突が連続する。端部はやや平坦で，内面は凹ませる。茶褐色を呈する。

晩期相当の土器（第50図　311 ～ 321）

出土状況はＲ－16区，Ｓ－16区付近に集中するが，まばらである。

311は胴部である。粗製の深鉢で，内外面に貝殻条痕が施され，器壁がやや薄い。

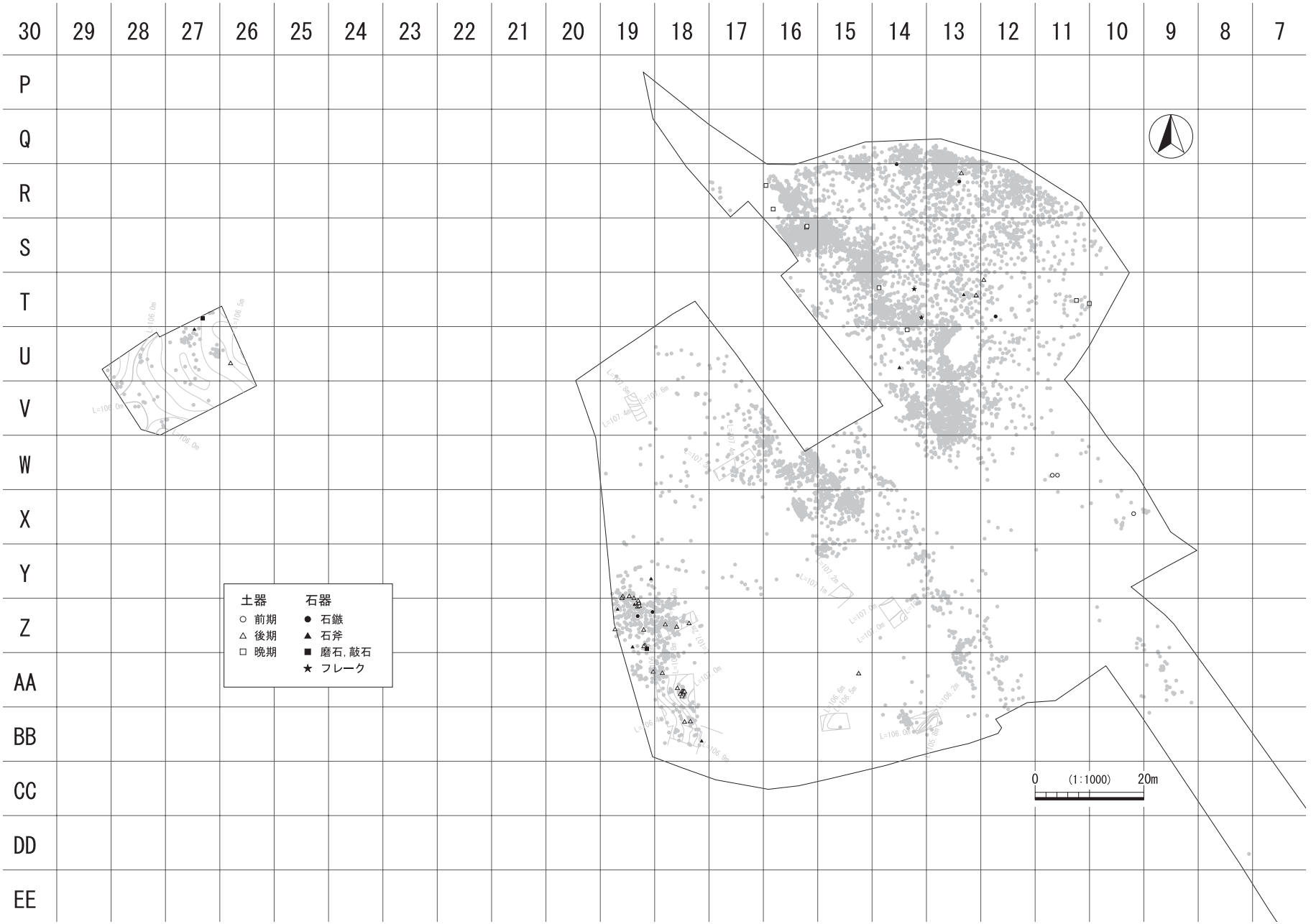
312 ～ 315は鉢の口縁部である。312は内外とも粗い調整である。313は外面が粗く内面はミガキを施す。314，315は内外ともミガキを施す。315の外面は黒褐色を呈し，煤が付着する。

316，317，318も鉢の口縁部で器壁が薄く，断面四角形を呈する。内外ともミガキを施す。

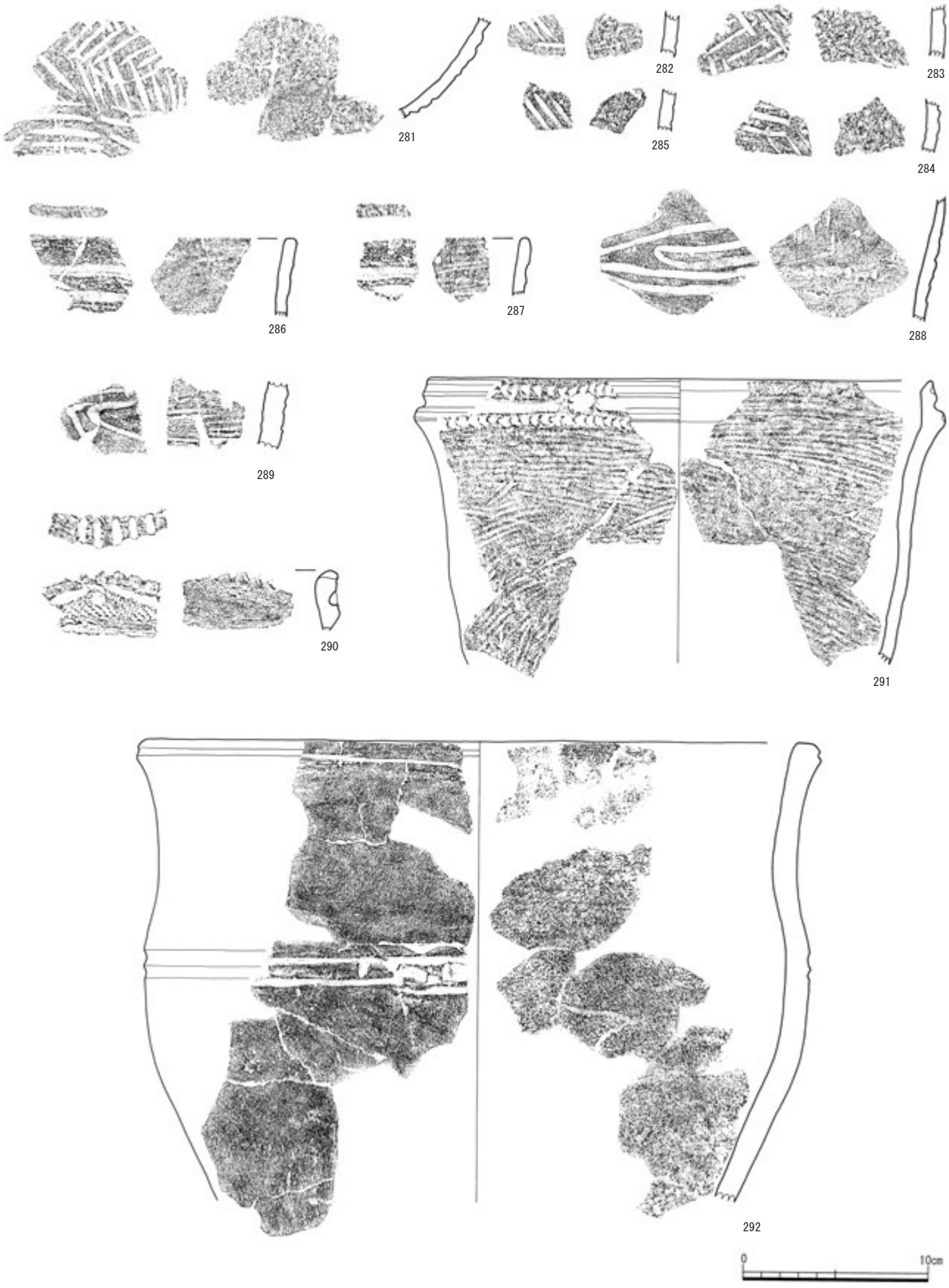
319は口縁が欠損しているが，外面に連点文が見られるもので，孔列文の可能性がある。

320は深鉢の底部である。打ち欠かれており，残存はよくない。

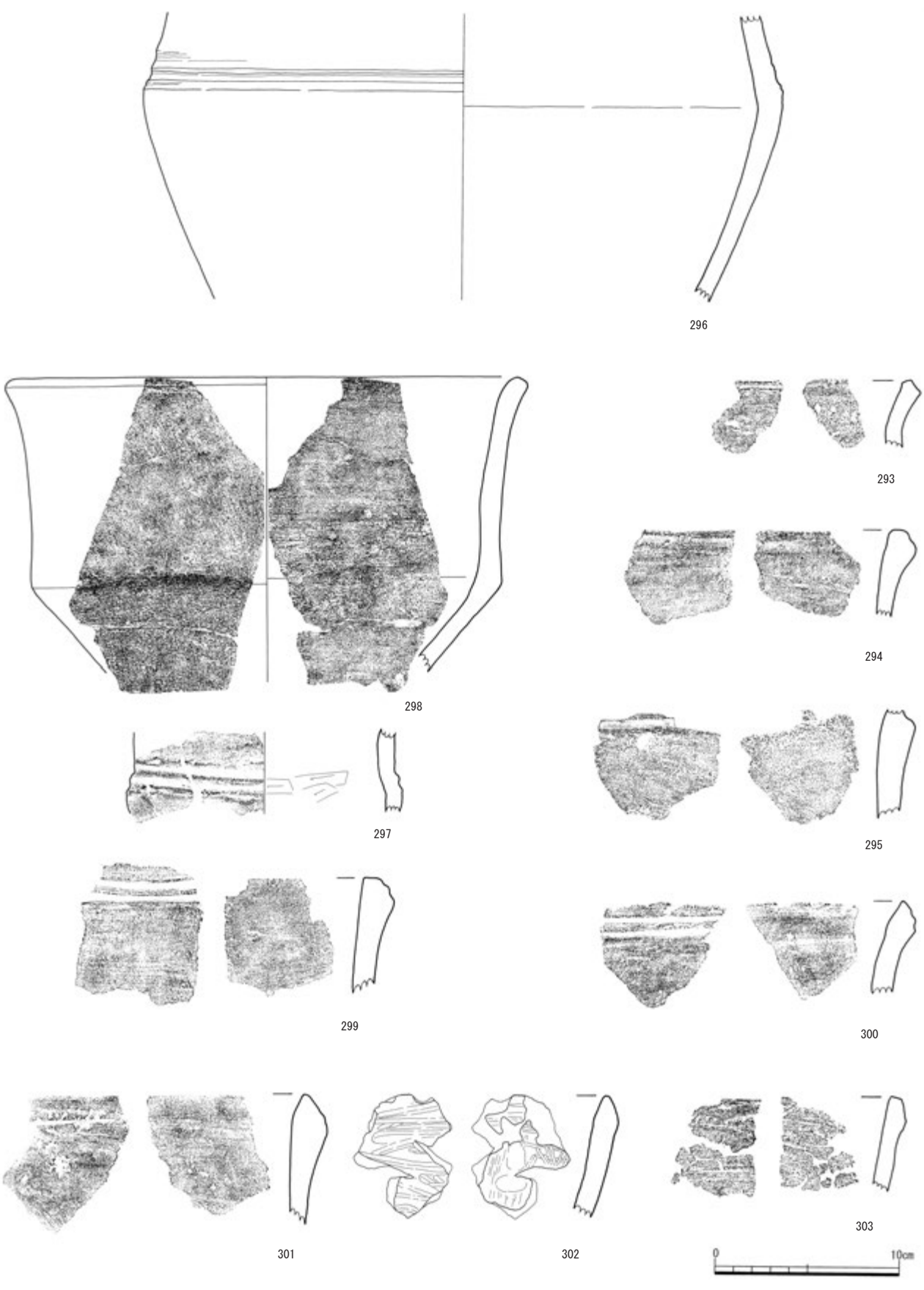
321は浅鉢の口縁付近である。薄く内外ともに丁寧に磨かれる。入佐式に該当するものと思われる。



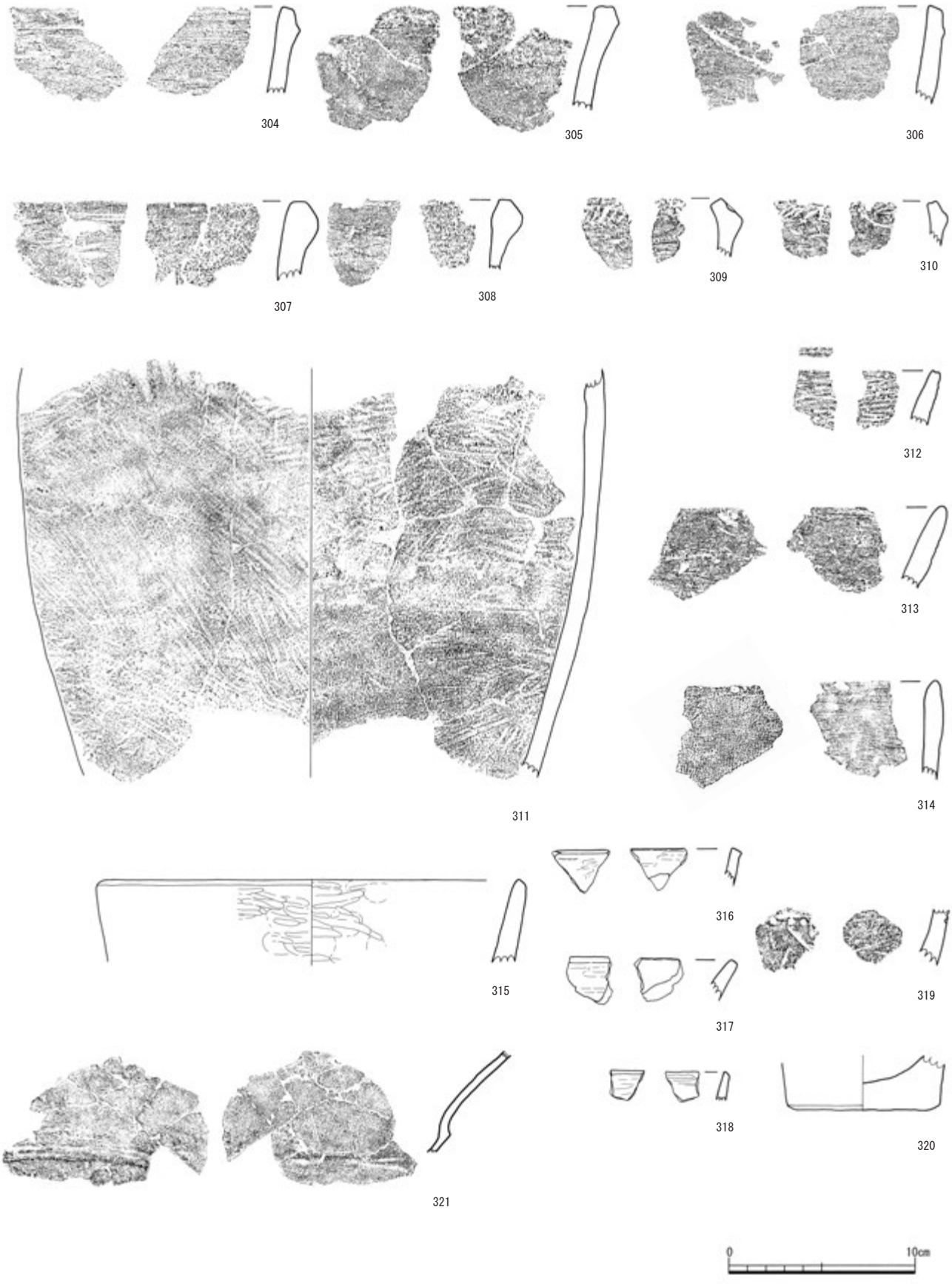
第 47 図　縄文時代前期～晩期の遺構配置・遺物出土状況図



第 48 図　縄文時代前期末～晩期　土器（1）



第 49 図　縄文時代前期末～晩期　土器（2）



第 50 図　縄文時代前期末～晩期　土器（3）

表 11　縄文時代前期末～晩期土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色	調
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外　面	内　面
48	281	一括	SF－２	Ⅱ	深鉢	曽畑	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4
			S-13														
	282	一括	SF－２	Ⅱ～Ⅲ	深鉢		胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○			にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	283	一括	SF－２		深鉢		胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4
	284	一括	I～ⅩⅠ-6～11	Ⅲ	深鉢	曽畑	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○			灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/4
	285	一括	I～ⅩⅠ-6～11	Ⅲ	深鉢	曽畑	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○	○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	286	一括	SF-2		深鉢		口縁部	凹線	ナデ	ナデ	○					橙 5YR6/6	橙 5YR6/6
	287	一括	SF-2		深鉢		口縁部	凹線	ナデ	ナデ	○					橙 5YR6/6	橙 5YR6/6
	288	8178	X-10	Ⅲ	深鉢		胴部	凹線	ナデ	ナデ	○				○	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6
	289	8217	W-11	Ⅲ	深鉢	宮之迫	胴部	凹線	ナデ	貝殻条痕	○					にぶい褐 7.5YR5/4	橙 7.5YR6/6
		8218															
	290	一括	SF-2	Ⅱ～Ⅲ	深鉢	磨消縄文	口縁部	刻目突帯 磨消縄文，凹線	ナデ	ナデ	○				○	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR4/2
	291	一括	I～ⅩⅠ-6～11	Ⅲ	深鉢	松山	口縁部～胴部	刺突・条痕等	ナデ	貝殻条痕			○		○	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6
	292	14391	Z-19	Ⅲ	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部～胴部	沈線・凹点	ナデ	ナデ	○		○			黒褐 5YR3/1	にぶい赤褐 5YR4/4
		14322	Z-19	Ⅱb													
		14381	Z-19	Ⅲ													
		14524	Z-19	Ⅱb													
		14441	Y-19	Ⅱb													
		14371	Z-19	Ⅱb													
		14502	Y-19	Ⅱb													
		14175	AA-18	Ⅱb													
		14440	Y-19	Ⅱb													
		14455	Y-19	Ⅱb													
		14429	Z-19	Ⅱb													
49	293	16604	Z-18	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○					にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	294	撹乱一括	Y-17		深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 7.5YR4/1
	295	16677	Z-18	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部	沈線	ミガキ	ナデ	○		○			赤褐 5YR4/6	にぶい赤褐 5YR4/4
	296	14058	AA-18	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	胴部	凹線	ナデ・ミガキ	ナデ	○		○			黒褐５YR2/1	赤褐 5YR4/6
		14063	AA-18														
		14064	AA-18														
		14069	AA-18														
		14107	BB-18														
		14113	BB-18														
		14131	AA-18														
		14076	AA-18														
	297	一括	Z～D	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	胴部	凹線	ミガキ	ナデ・ミガキ	○		○			明赤褐 5YR5/6	黒褐 10YR3/1
		一括	D-6～11	Ⅱb													
	298	14070	AA-18	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部～胴部		ナデ・ミガキ	ナデ	○		○			褐 7.5YR4/3	黒褐 10YR3/1
		14142															
		14068															
	299	16551	Z-19	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○					黒 10YR2/1	黒褐 10YR3/1
	300	14357	Z-19	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	301	14066	AA-18	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部		ナデ	ミガキ	○					にぶい赤褐 5YR4/3	にぶい赤褐 5YR4/4
	302	2585	T-12	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部		ミガキ	ミガキ	○		○			暗褐 7.5YR3/3	黒褐 7.5YR3/1
		2592	T-13	Ⅱb													
		2593	T-13	Ⅱb													
	303	撹乱一括	Y-17		深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部		ミガキ	ナデ	○		○			黒 10YR2/1	黒褐 7.5YR2/2
50	304	16572	Z-19	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部		ナデ	ナデ	○		○			赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6
	305	9311	U-26	Ⅵa	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部～胴部		ナデ	ナデ	○					にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4
	306	16664	Z-18	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部		ナデ	ナデ	○					黒 10YR2/1	黒 10YR2/1
	307	16550	Z-19	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部		ミガキ	ナデ	○					黒 10YR2/1	黒褐 10YR3/1
		16628															
	308	14162	AA-19	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部		ミガキ	ナデ	○					黒褐 10YR3/1	褐 7.5YR4/4
	309	一括	S-15	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部	刺突	ナデ	ナデ	○					にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	310	48	R-13	Ⅱb	深鉢	中岳Ⅱ式	口縁部	刺突	ヘラナデ	ヘラナデ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	311	14053	AA-15	Ⅱ	深鉢	晩期	胴部		工具ナデ	工具ナデ	○		○			黒褐 7.5YR3/2	にぶい褐 7.5YR5/4
	312	一括	I・ⅩⅠ-6～11		深鉢	晩期	口縁部	—	条痕	条痕	○					明赤褐 5YR5/6	灰褐５YR4/2
	313	1445	R-16	Ⅱ	深鉢	晩期	口縁部	—	ナデ	ミガキ	○				○	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR5/2
	314	1435	R-16	Ⅱ	深鉢	晩期	口縁部	—	ミガキ	ミガキ	○		○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	315	2375	S-16	Ⅱb	深鉢	晩期	口縁部	—	ミガキ	ミガキ	○		○			黒褐 2.5YR3/1	明赤褐 5YR5/6
		2376															
	316	2085	T-11	Ⅱ	浅鉢	晩期	口縁部	—	ミガキ	ミガキ	○					灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR4/3
	317	2312	T-14	Ⅱ	浅鉢	晩期	口縁部	—	ミガキ	ミガキ	○					黒 10YR2/1	にぶい褐 7.5YR5/4
	318	2091	T-11	Ⅱ	浅鉢	晩期	口縁部	—	ミガキ	ミガキ	○					黒 10YR2/1	黒 10YR2/1
	319	2323	U-14	Ⅱ	浅鉢	晩期	口縁部近く	連点文	ナデ	ナデ	○				○	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	320	160	R-11	Ⅱb	深鉢	晩期	底部	—	ケズリ・ナデ	ケズリ・ナデ	○					橙 5YR6/6	黄灰 2.5YR4/1
	321	一括	16T	Ⅱ・Ⅲ	浅鉢	入佐式	胴部	—	ミガキ	ミガキ	○		○			黒褐５YR2/2	赤褐５YR4/6

石　器

剥片石器等（第51図　322 ～ 328）

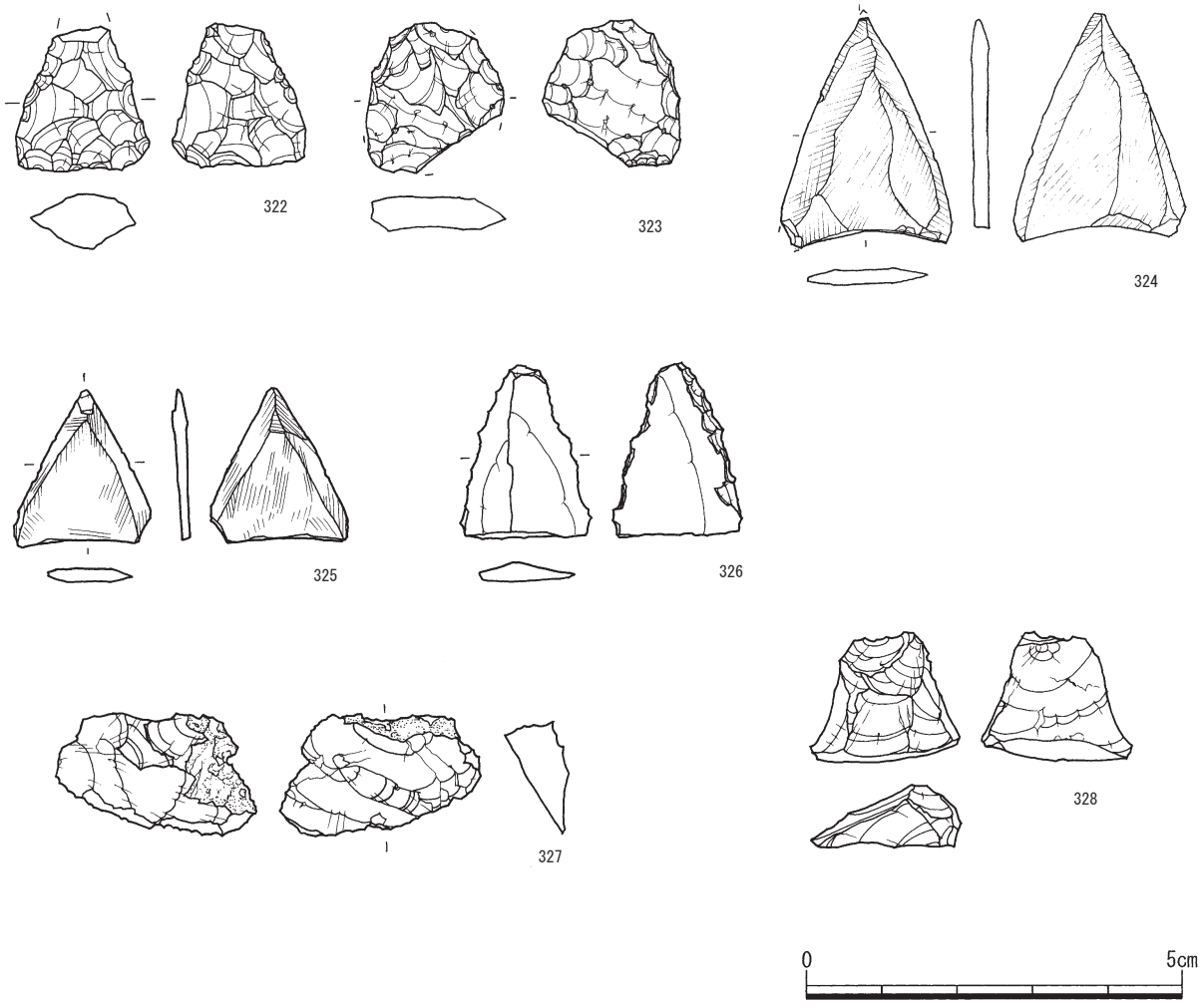
322は，黒色安山岩の石鏃の未製品と思われる。腹面の剥離が生きているとすれば，横剥ぎ素材剥片から周縁調整して，まだ厚みがあり抉りも入らないことから未製品と考えた。323は気泡・不純物の多い半透明の黒曜石で，両縁辺が残ることから石鏃と思われる。324は頁岩製の磨製石鏃で，片側の脚を少し欠く。よく研磨され低く稜を形成する。325も頁岩製の磨製石鏃で，324と同じく片側の端部を欠く。326は，頁岩の剥片で，周縁調整がみられ，磨製石鏃の未製品の可能性がある。327は光りが鈍い不純物を含む黒曜石の幅広の剥片で，328は不純物を含まない良質の黒曜石の縦長剥片が折れたものである。

打製石斧等（第52・53図　329 ～ 340）

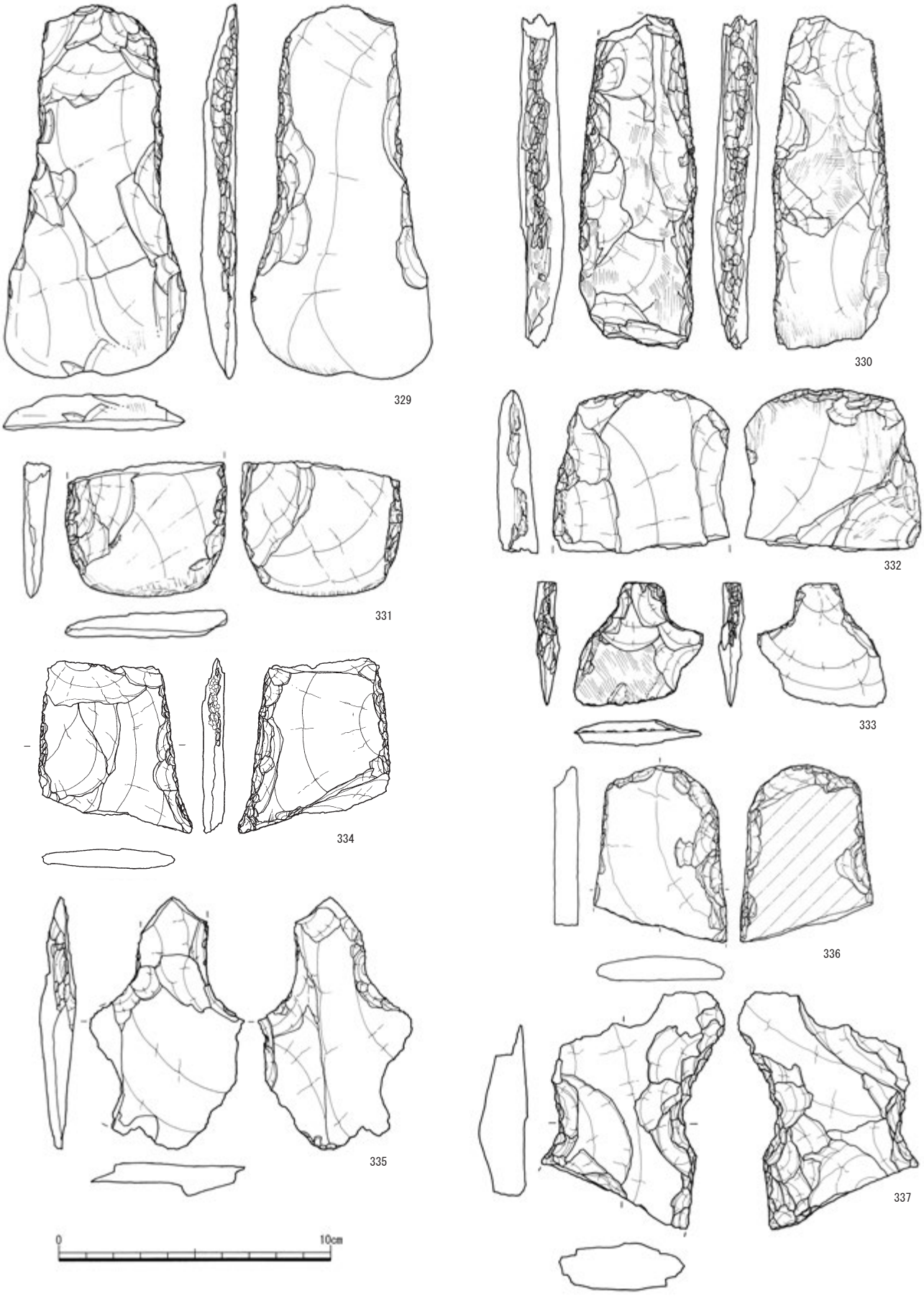
329 ～ 338は，打製石斧である。ほとんどが硬質の頁岩を石材として，整形剥離して，装着部の入念な加工をなす。

刃部は摩耗しており使用の結果と考えられる。出土品の多くが破損品である。329は，横剥ぎの素材剥片で周縁を整形剥離し，刃部は摩耗している。

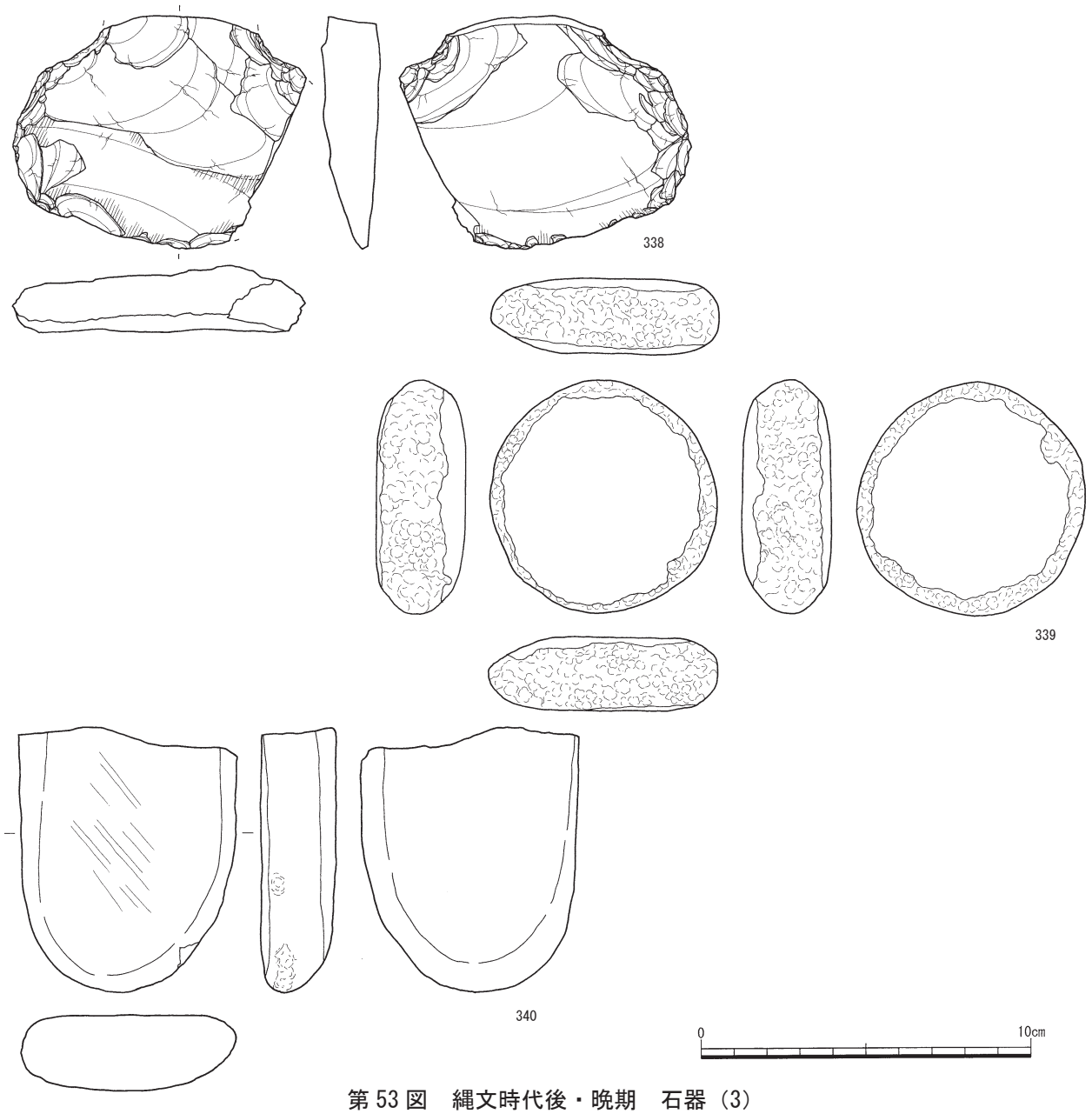
330は短冊形で，これのみが粘板岩で，ぼろぼろと板状剥離する。おそらく横剥ぎの素材剥片と考えられる。331は刃部で，使用痕がある。素材剥片は横剥ぎの剥片である。332は基部で，これも素材剥片は横剥ぎの剥片である。333は下部に使用痕跡が伺われることから，やや寸の短い撥状の打製石斧である。縦剥ぎの素材剥片を用いている。334は上下欠損の装着部付近の破片で，横剥ぎの素材剥片である。335も上下欠損の装着部付近の破片。336は基部で，一面は節理で剥離している。338は撥型のものと考えられ，縦長の素材剥片である。339は磨・敲石で，平坦面は線状の擦痕が顕著で，全周に敲打痕がある。340は軟質な石材であり，平坦面に擦痕があり，先端部に敲打痕がある。



第 51 図　縄文時代後・晩期　石器（1）



第 52 図　縄文時代後・晩期　石器（2）



第 53 図　縄文時代後・晩期　石器（3）

表 12　縄文時代後期～晩期石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
51	322	Z-19	Ⅱb	14474	打製石鏃	黒色安山岩	1.96	1.82	0.72	2.1
	323	Z-19	Ⅱb	14310	打製石鏃	黒曜石	1.69	1.98	0.46	2
	324	R-13	Ⅱ	475	磨製石鏃	頁岩	3.15	2.4	0.2	1.79
	325	R-14	Ⅱb	22	磨製石鏃	頁岩	2.1	1.8	0.2	0.91
	326	T-12	Ⅱb	2426	磨製石鏃	頁岩	2.3	1.75	0.25	1.28
	327	T-14	Ⅱ	2326	フレーク	黒曜石	1.7	2.7	0.9	2.36
	328	T-14	Ⅱ	2329	フレーク	黒曜石	1.8	2	0.8	2.01
52	329	V-19	表採	一括	打製石斧	頁岩	13.85	6.7	1.3	134
	330	Y-19	Ⅲ	14375	打製石斧	粘板岩	12.25	4.4	1.7	104
	331	U-27	Ⅱ	8880	打製石斧	頁岩	5	5.9	1	39.3
	332	Z-19	Ⅱb	14501	打製石斧	頁岩	6	6.5	1.5	73
	333	BB-18	Ⅱb	14124	打製石斧	頁岩	4.7	4.6	1	15.4
	334	Z-19	Ⅱb	14521	打製石斧	頁岩	6.45	5.6	0.85	38
	335	Z-19	Ⅲ	14380	打製石斧	頁岩	9.3	5.7	1.3	42
	336	U-14	Ⅱa	4913	打製石斧	頁岩	6.6	4.9	0.9	47.04
	337	T-13	Ⅱb	2371	打製石斧	頁岩	8.8	6.7	1.75	85.06
53	338	Z-19	Ⅱb	16597	打製石斧	頁岩	8.95	7.05	1.8	141.3
	339	T-27	Ⅱ	8876	磨・敲石	砂岩	7	6.9	2.2	210
	340	Z-19	Ⅱb	16555	磨石	砂岩	8	6.65	2.3	201

オ　弥生時代

（ア）調査の概要

遺構は掘立柱建物跡を２軒検出した。遺物は少量ではあるが,早期から中期にかけての土器が出土しているが,特に甕の比率が高い。R・S-12，R-13 ～ 15区が遺物の出土量が多い傾向にある。

（イ）遺　構

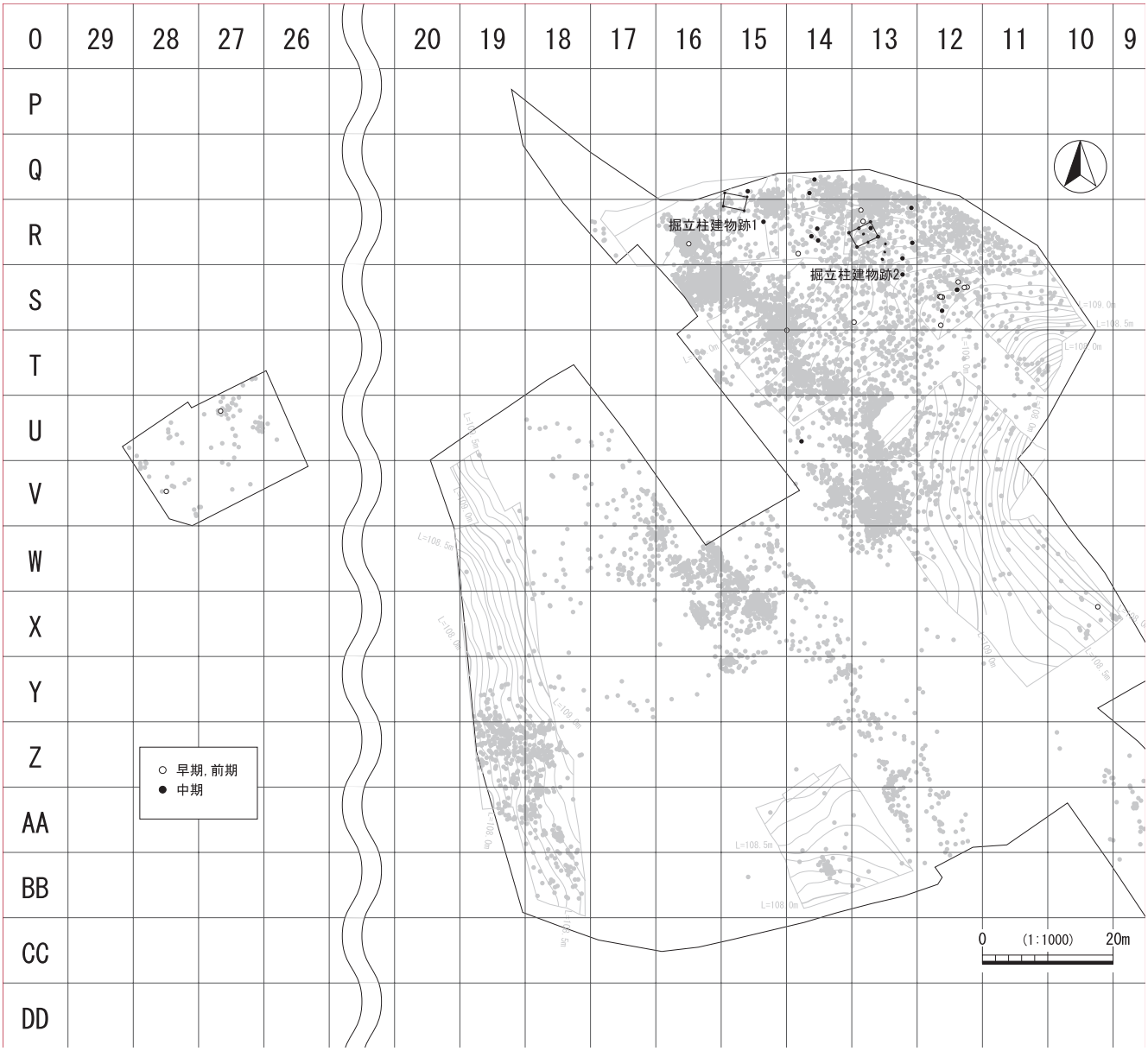
掘立柱建物跡１

Q・R－15区，Ⅲ層で検出された。立地面はほぼ平坦な地形である。平面形は１間×１間の長方形を呈する。長軸352cm，短軸183cmを測る。4基のピットの形状は，P1が楕円形，Ｐ２～４は円形で，径平均は22cm，平均深度は38cmである。

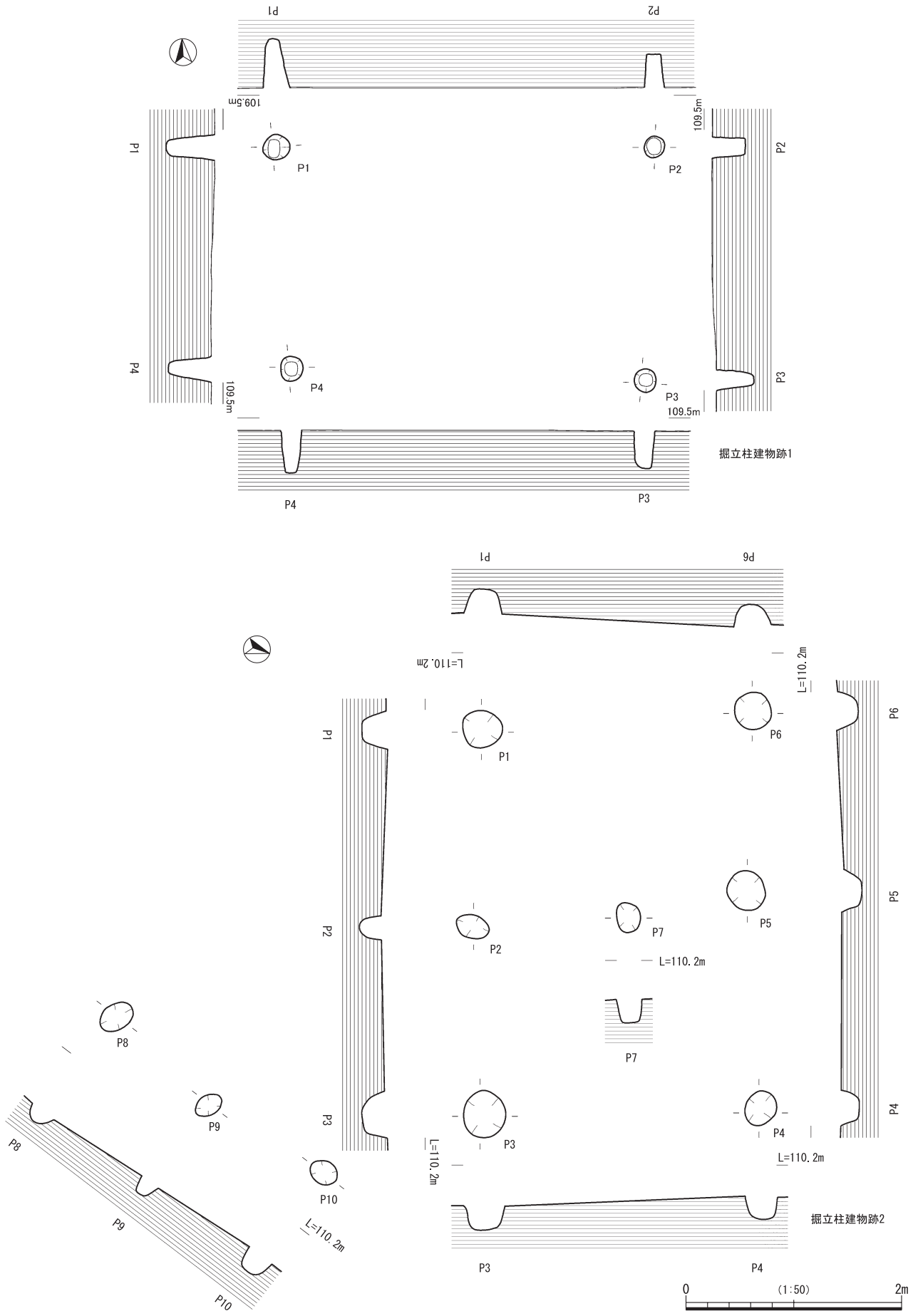
埋土はⅡ層に相当する黒色土であり，分層はできなかった。Ⅱ・Ⅲ層は色調の識別が困難なため，Ⅱ層からの掘り込み開始も考えられる。遺構の時期を確定する遺物は共伴していない。

掘立柱建物跡２

R-13・14区，Ⅲ層で検出された。立地面はほぼ平坦な地形である。平面形は１間×２間の長方形を呈し，中央に棟持ち柱と考えられるピットも検出された。長軸370cm，短軸260cmを測る。検出面が黒色土で埋土の確認が困難なため，正確な掘り込み面は検出面よりも上面と考えられる。７基のピットの形状は，Ｐ５・６が円形，P1 ～ 4・７は楕円形で，径平均は27cm，平均深度は19cmである。



第 54 図　弥生時代の遺構配置・遺物出土状況図



第 55 図　弥生時代　掘立柱建物跡１・２

表 13　弥生時代掘立柱建物跡観察表

1 間	梁間柱間（cm）	梁間間（cm）	主軸方位	1 間	桁行柱間（cm）	桁行間（cm）	主軸方位	ピット番号	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）	ピット掘り方	埋土色調	床面積（㎡）	備　考
P1–P4	205	183	南北	P1–P2	352	327	東西	1	45	25	25	楕円形	黒色		
P2–P3	218	196		P3–P4	328	307		2	32	20	18	円形	黒色	7.2	共伴遺物なし
								3	35	20	20	円形	黒色		
								4	40	23	20	円形	黒色		
	211.5	189.5			340	317	平均		38	22	20.75				

1 間	梁間柱間（cm）	梁間間（cm）	主軸方位	2 間	桁行柱間（cm）	桁行間（cm）	主軸方位	ピット番号	深さ（cm）	長径（cm）	短径（cm）	ピット掘り方	埋土色調	床面積（㎡）	備　考
P1–P6	252	215	南北	P1–P2	185	152	東西	1	22	38	35	楕円形	黒色		
P3–P4	256	218		P2–P3	176	140		2	20	32	22	楕円形	黒色		
				P4–P5	202	166		3	22	42	39	楕円形	黒色		
				P5–P6	168	130		4	19	32	27	楕円形	黒色	9.62	
								5	17	36	33	円形			
								6	20	33	33	円形			
								7	21	28	22	楕円形			
								8	12	33	20	楕円形			
								9	14	28	19	楕円形			
								10	19	25	20	楕円形			
	254	216.5			182.75	147	平均		18.6	32.7	27				

（ウ）遺　物

土器（第56図　341 ～ 371）

341 ～ 350は弥生時代早・前期の土器である。341 ～ 347は甕である。341 ～ 344は刻目突帯文で口縁部・口縁部下位に１条ないし２条の突帯を巡らす。341，343は２条突帯に細かな刻目が浅く入る。342は内面を横方向のミガキで調整し，胎土には金雲母が目立つ。344は表面の摩滅が激しいが，内面は横方向の貝殻条痕で器面調整されている。345，346は刻目を持たない突帯文の甕である。345は外面をミガキで器面調整されており，胎土には角閃石を多く含む。346も角閃石を多く含む胎土で，口縁部直下に煤が帯状に付着する。347は屈曲甕の胴部で屈曲部には直接刻目がつき，内面上面には煤は付着している。

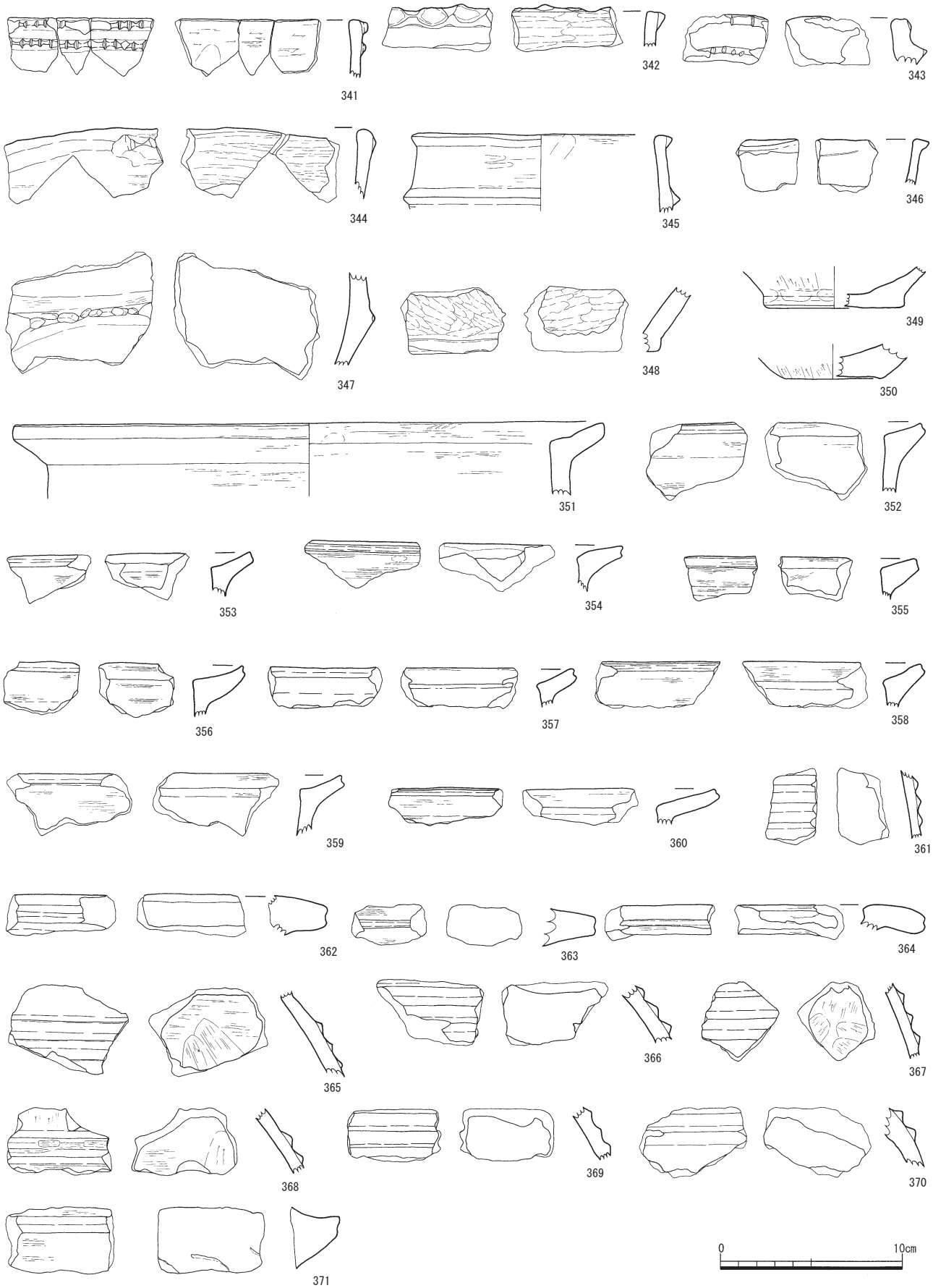
348は高杯である。くびれ部に三角突帯が付き，内外面ともにミガキで調整されている。なお，外面は黒塗である。

349，350は，壺の底部である。349は円盤貼り付けの底部であり，内外面ともにナデで器面調整されている。350は外面に薄く赤塗が施され，ミガキで器面調整されている。

351 ～ 371は弥生時代中期土器（山ノ口Ⅱ式相当）である。

351 ～ 361は甕である。351 ～ 360は口縁部で上面は僅かに凹み，口唇部は浅く凹ませM字状になり，口縁部内面端部を強いヨコナデで胴部内面との境の稜（端部）を明瞭にする特徴がみられる。351，353，355，359は口縁部下位に煤が付着している。いずれも胎土にはφ1㎜程度の白色鉱物と金雲母を多く含む。361は甕の胴部であり，３条の突帯がつく。

362 ～ 371は壺である。362，363，364の口縁部で口唇部は僅かに凹ませる。362，363の口縁部上面は平坦で断面が台形状だが，364は上面が僅かに膨らみやや丸味を帯びる。器面調整はいずれもヨコナデである。365 ～ 370は胴部で，３ないし２条の三角突帯がつく。突帯は強いヨコナデで貼り付け痕を残さず丁寧に仕上げている。371は胴部の突帯である。突帯端部から下部の摩滅が激しい。胎土には金雲母のほか，φ１～３㎜大の石英が目立つ。


341
342
343
344
345
346
347
348
349
350
351
352
353
354
355
356
357
358
359
360
361
362
363
364
365
366
367
368
369
370
371
0
10cm

第 56 図　弥生時代　土器

表 14　弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色	調
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外　面	内　面
56	341	1758 1769 1788	S-12	Ⅱ	甕	早期・前期	口縁部	突帯・刻み	ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4
	342	8193	X-10	Ⅲ	甕	早期・前期	口縁部	突帯・凹点・刻み	ナデ	ミガキ	○				○	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6
	343	187	R-14	Ⅱb	甕	早期・前期	口縁部	突帯・刻み	ナデ	ナデ	○				○	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6
	344	54 143	R-13 R-13	Ⅱb	甕	早期・前期	口縁部	貼付突帯・刻み	ナデ	貝殻条痕	○		○			灰黄褐 10YR4/2	にぶい橙 7.5YR6/4
	345	1772 1783 1911	S-12	Ⅱ	甕	早期・前期	口縁部～胴部	突帯	ナデ・ミガキ	ナデ	○		○			黒 10YR2/1	にぶい黄橙 10YR6/4
	346	1709	S-12	Ⅱ	甕	早期・前期	口縁部	突帯	ナデ	ナデ			○			にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3
	347	8893	U-27	Ⅱ	甕	早期・前期	胴部	突帯	ナデ	ナデ	○					橙 5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	348	8918	V-28	Ⅱ	高坏	早期・前期	胴部～底部		ナデ・ミガキ	ナデ・ミガキ	○		○			にぶい赤褐 5YR4/4	赤褐 5YR4/6
	349	1906	S-12	Ⅱ	壺	早期・前期	底部		ミガキ・ナデ	ミガキ・ナデ	○		○			にぶい黄 2.5YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4
	350	2331	S-13	Ⅱ	壺	早期・前期	底部		ミガキ	ケズリ・ナデ	○					赤褐 5YR4/6	灰黄褐 10YR4/2
	351	試掘			甕	中期	口縁部		ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	352		S～U 12～16	Ⅰb	甕	中期	口縁部		ナデ	ナデ	○				○	にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	353	一括	S～U-12～16	Ⅰb	甕	中期	口縁部	突帯	ナデ	ナデ	○				○	にぶい褐 7.5YR5/3	明赤褐 5YR5/6
	354	136	R-14	Ⅱb	甕	中期	口縁部	突帯・沈線	ナデ・指ナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR5/4	橙 7.5YR6/6
	355	4905	U-14	Ⅱa	甕	中期	口縁部	突帯	ナデ	ナデ	○				○	橙 5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4
	356	147	Q-14	Ⅱb	甕	中期	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		○	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6
	357	481	R-13	Ⅱ	甕	中期	口縁部		ナデ・ケズリ	ナデ・ケズリ	○				○	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6
	358		S～U 12～16	Ⅰb	甕	中期	口縁部		ナデ・指頭圧痕	ナデ	○				○	にぶい褐 7.5YR5/4	橙 5YR6/6
	359	149	Q-14	Ⅱb	甕	中期	口縁部		ナデ・ケズリ	ナデ	○		○		○	黒褐 10YR 3/ 1	赤褐 5YR4/6
	360	133	R-14	Ⅱb	甕	中期	口縁部		ナデ	ナデ	○				○	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6
	361	1775	S-12	Ⅱ	甕	中期	胴部	多条突帯	ナデ	ナデ	○				○	明褐 7.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	362	11	R-13	Ⅱb	壺	中期	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		○	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6
	363	2309	T-14	Ⅱ	大型壺	中期	口縁部	沈線	ナデ	ナデ					○	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	364	130	R-14	Ⅱb	壺	中期	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		○	明赤褐 5YR5/6	にぶい赤褐 5YR4/4
	365	表土一括	V-14		壺	中期	胴部	多条突帯	ナデ	ナデ・指ナデ	○				○	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4
	366	1716	R-13	Ⅱ	壺	中期	胴部	多条突帯	ナデ	ナデ	○				○	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4
	367	1727	S-13	Ⅱ	壺	中期	胴部	多条突帯	ナデ	ナデ・指ナデ	○		○			黒 2.5Y2/ 1	にぶい褐 7.5YR5/4
	368	1765 1787	S-12	Ⅱ	壺	中期	胴部	多条突帯	ナデ	ナデ	○				○	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6
	369	492	R-13	Ⅱ	壺	中期	胴部	多条突帯	ナデ	ナデ	○				○	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	370	30	R-15	Ⅱb	壺	中期	胴部	多条突帯	ナデ	ナデ	○		○			明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	371	27	Q-15	Ⅱb	壺	中期	胴部		ナデ	ナデ	○		○		○	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6

カ　近世・近代

（ア）調査の概要

現在の県道に並行する300mを超える古道を始め，多様な複数の道跡や硬化面が検出された。複数の道跡が重複・交叉している例もみられ，この地域が近世から交通路として利用されていたことがうかがえる。

本報告書では，主として各遺構の検出位置を提示し，主要な遺構に関しては，検出状況を記載することでその様相を捉えることとした。

（イ）近　世

硬化面（第58図）

R－13，S－14区のⅡ層で２条検出された。検出面周辺から薩摩焼が数点出土しているので近世の遺構とした。硬化面の厚みはほぼなく，長さも２m以下の短いもので，この２条に連続性はみられなかった。これ以外にR－13～15～T－13・14区においても３条検出されている。

（ウ）近　代

大型道路状遺構（第58図）

地域で「フィケド」といわれる道跡１条，箱掘状の溝状遺構３条，埋土中にP１が堆積する土坑２基が検出された。全長約300mを測り，略北西から略南東方向へ下り，Q-18区からKK-５区へ直線的に緩やかに東側に屈曲している。前述のとおり，近世の道路状遺構をY-12区で切り，JJ-５区ではその西側部分を削っている。

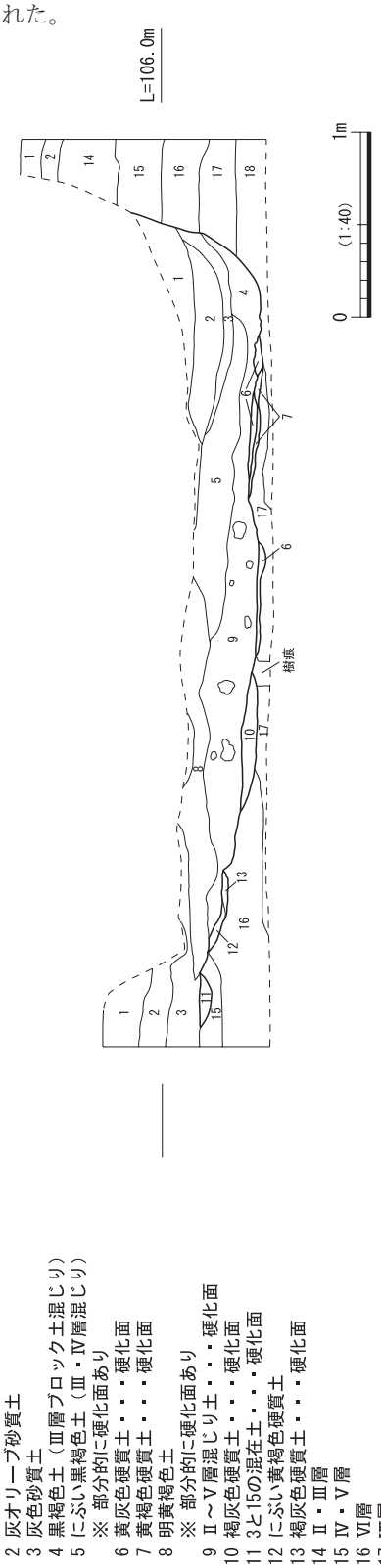
掘り込みは箱掘りで，掘り込み面からの深さは1.5～3.5mを測り，北側へ行くほど深くなる傾向がみられた。勾配は２％である。最終掘り込み面は，最南端のPP-２区のⅣｂ層の黒色土層で，北に進むほど下位の層に達し，最北端のQ-18区では，シラス層まで掘り込んである。路線形は，直線的で原地形にかまわず掘り切っている。

掘り込み面の幅約７m，床面の幅は約3.2mを測る。床面の構造は全面硬化面であり，堅く締められた路面は複数の層を形成し，また最終掘り込み面である路盤も堅く締められていた。硬化面上に一部浅い溝状を呈する箇所もあったが，下位の層まで貫くものはなかった。ただし，PP-２区には，道路の進行方向に並ぶ４条の波板上凹凸面がみられた。この場所は湿ると柔らかくなりやすいⅥb層と，湿っても硬質なⅦ層（薩摩火山灰）の境目にあたる。

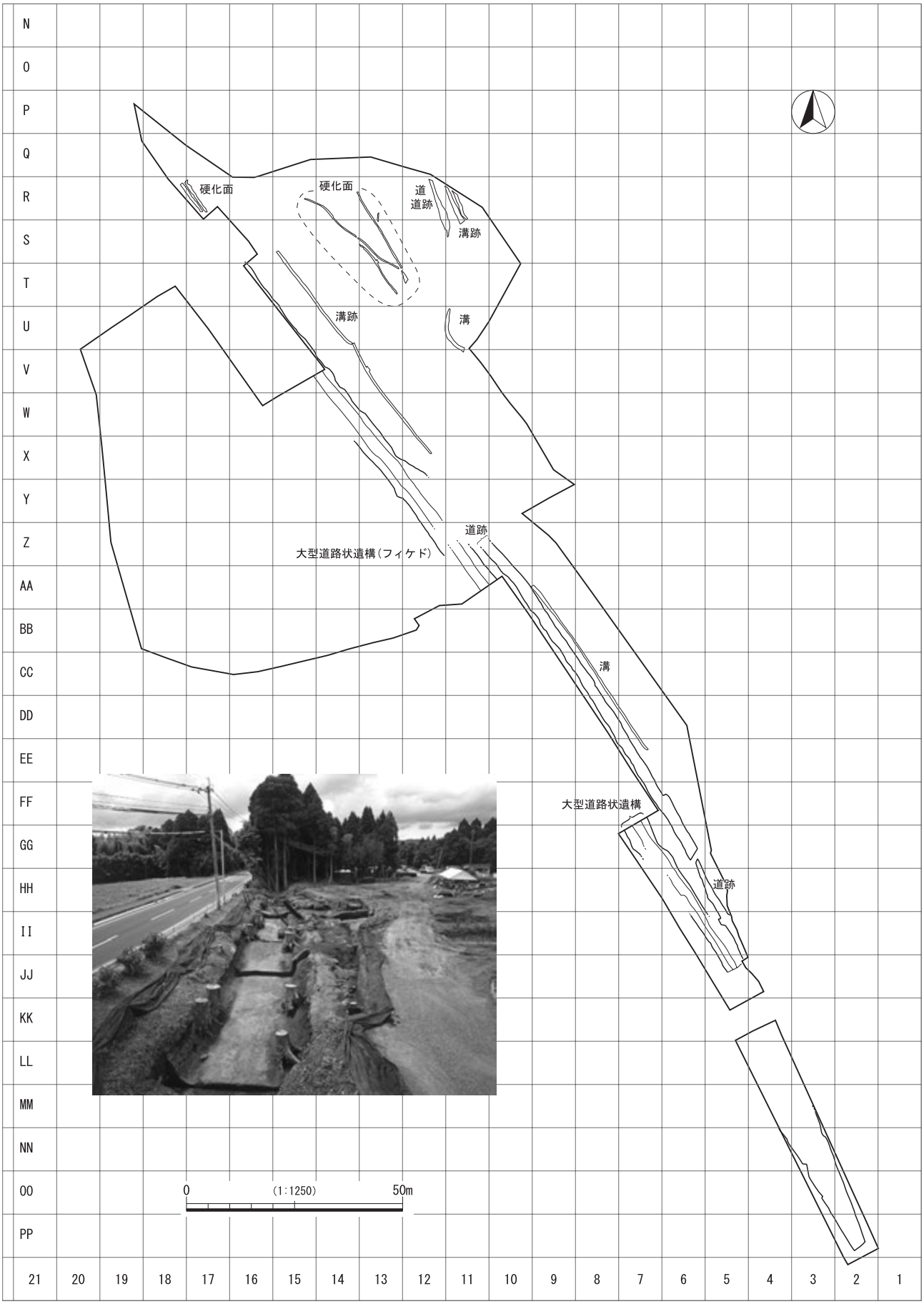
埋土については，堅く締められた路床の上位には，旧耕作土に類似した褐色土が堆積しており，その上位にP１一次堆積層が存在し，上には再び褐色土が堆積している。

道　跡（第58図）

X－14～Z－12区で検出された。明治時代の道跡と考えられる。長さ約34m，平均幅80cmの直線である現在の県道63号線にほぼ並行する状況であった。床面はⅩⅠａ層で非常に硬く硬化している。両側部も硬化している部分がみられた。



第57図　近世　大型道路状遺構　埋土断面図



第 58 図　近世・近代　大型道路状遺構等位置図

第２章　調査区１　自然科学分析

下原遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）および炭素・窒素安定同位体分析

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

下原遺跡は，鹿児島県志布志市有明町伊崎田に所在し，標高約100mの舌状台地上に位置する。測定対象試料は，土器付着炭化物６点である（表１）。No.１～４，6は土器の外面，No.5は内面からそれぞれ採取した。

推定年代は，No.1，2が縄文時代後期・晩期・弥生時代，No.3，5が縄文時代早期，No.4，6が弥生時代である。

２　化学処理工程

(1)　メスを使い，土器片に付着した炭化物を採取する。

(2)　酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常１mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表１に記載する。AAA処理された試料を２つに分け，一方を年代測定用，他方を安定同位体等分析用の試料とする。

(3)　試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

(4)　真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5)　精製した二酸化炭素を，鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

(6)　グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　年代測定試料の測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　炭素・窒素安定同位体比及び含有量測定試料の化学処理工程と測定方法

２　(1)，(2)の処理を行う。

(3)　試料をEA（元素分析装置）で燃焼し，N_2とCO_2を分離・定量する（表４）。

(4)　分離したN_2とCO_2は，インターフェースを通して質量分析計に導入し，炭素の安定同位体比（$\delta^{13}C$）と窒素の安定同位体比（$\delta^{15}N$）を測定する。

これらの処理，測定には，元素分析計-安定同位体比質量分析計システム（EA-IRMS：Thermo Fisher Scientific社 製Flash EA1112- DELTA V ADVANTAGE ConFlo Ⅳ System）を使用する。$\delta^{13}C$の測定ではIAEAのC6を，$\delta^{15}N$の測定ではN1を標準試料とする。

５　算出方法

(1)　$\delta^{13}C$ は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料（PDB）からのずれを示した値である。$\delta^{15}N$は，試料窒素の^{15}N濃度（$^{15}N/^{14}N$）を測定し，基準試料（大気中の窒素ガス）からのずれを示した値である。いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰）で表される。$\delta^{13}C$はAMS装置と質量分析計で測定され，AMS装置による値は表中に（AMS）と注記し（表1），質量分析計による値は表中に（MASS）と注記する（表4）。$\delta^{15}N$は質量分析計による値で，表中に（MASS）と注記する（表4）。

(2)　^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代は$\delta^{13}C$によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表２，３に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3)　pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も$\delta^{13}C$によって補正する必要があるため，補正した値を表１に，補正していない値を参考値として表２，３に示した。

(4)　暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2

%）あるいは2標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.3較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表2，3に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表され，ここでは前者を表２，図版１に，後者を表３，図版２に示した。

６　測定結果

測定結果を表１～４,図版１～４に示す。較正年代は，cal BPとcal BC/ADの２通りで算出したが，以下の説明では，縄文時代早期とされる試料についてはcal BP（表２，図版１），それ以外の試料についてはcal BC/ADの値で記載し（表３,図版２),推定年代が古い順に説明する。

縄文時代早期と推定されるNo.３，５の^{14}C年代は，No.３が8920±30yrBP，No.５が3010±20yrBP，暦年較正年代（1σ）は，No.３が10175 ～ 9942cal BPの間に３つの範囲，No.５が3228 ～ 3165cal BP（1279 ～ 1216cal BC）の範囲で示される。No.３は縄文時代早期前半頃に相当し（小林編 2008），推定年代の範囲に含まれる。No.３が出土したVI層の上層にあたるV層のアカホヤ火山灰と下層にあたるVII層の薩摩火山灰の降下年代とも整合的である。No.５は縄文時代後期末葉から晩期初頭頃に相当し（小林編 2008），推定年代より明らかに新しい値となった。後述するNo.１とほぼ同年代で，黒色磨研土器の事例と対比させると,三万田式より新しく天城式の測定事例に近い。ただし，御領式の事例は確認できていない。

縄文時代後期・晩期から弥生時代と推定されるNo.１，２の^{14}C年代は，No.１が3010±20yrBP，No.２が2110±20yrBP，暦年較正年代（1σ）は，No.１が1285 ～ 1214cal BCの範囲，No.２が176 ～ 96cal BCの範囲で示される。No.１が縄文時代後期末葉から晩期初頭頃に相当し（小林編 2008），No.５と同様に天城式に近い年代を示す。No.２が弥生中期後半頃に相当し（藤尾 2009），いずれも推定年代と一致する。

弥生時代と推定されるNo.４，６の^{14}C年代は，No.４が2410±20yrBP,No.６が2430±20yrBP,暦年較正年代（1σ）は，No.４が489 ～ 409cal BC，No.６が540 ～ 415cal BCの範囲で示される。いずれも弥生時代前期後半頃に相当し（藤尾 2009），推定年代と一致する。

試料の炭素含有量は,，No.１～４，６が44.9%（No.３）～ 56.6%（No.１）のおおむね適正な値であるのに対し，No.５は28.9%と通常よりも低い値となった。No.５については，土の混入が確認されたが，十分に除去できなかった。このため,No.５の炭素の由来には若干注意を要する。ただし，少量の土の混入が，この試料の測定結果と推定年代との間にある明らかな年代差の原因になるほど，年代値に強く影響したとは考えにくい。

6点の土器付着炭化物は，土器の外面，内面に付着していた。内面の付着物については，調理に伴って残存した食物に由来する可能性が高い。外面の付着物については，煤と吹きこぼれの可能性がある。試料の炭素・窒素安定同位体比を日本列島の食料資源に関するデータと比較し，横軸にδ^{13}C，縦軸にδ^{15}Nを取ったグラフ（Yoneda et al. 2004に基づいて作成，図版３）と，横軸にδ^{13}C，縦軸にC/Nモル比を取ったグラフ（吉田2006に基づいて作成，図版４）に示した。

炭素安定同位体比δ^{13}Cは，-27.4‰（No.２）から-25.0‰（No.３）で，おおむねC3植物やそれを食べる草食動物の範囲に含まれる。窒素安定同位体比δ^{15}Nは，最も低いNo.５が1.98‰とC3植物等の範囲に含まれる。これに対し，No.５を除くNo.１～４，６の５点は，10.2‰（No.３）から12.9‰（No.１）で，C3植物や草食動物の範囲よりは明らかに高い範囲に分布しており，No.５と他の５点の２群に分かれている。

炭素・窒素含有量に基づいてC/N比を算出すると，モル比でNo.５が14.4，他の５点では21.6（No.２）から24.4（No.６）の範囲である。C/Nモル比については，ドングリ等デンプンを主成分とする植物は30 ～ 50，それらを除くC3植物は７～ 20，草食動物もこの範囲に含まれ，海生生物はこれらと一部重なりながら若干低い値となることが報告されている（吉田2006)。最も値の低いNo.５は，C3植物及び哺乳類の範囲に位置する。他の５点は，C3植物及び哺乳類とC3植物の堅果類の範囲の中間に集中して位置し，測定した土器付着炭化物に両者が含まれている可能性がある。ただし，No.５の本来のC/N比も，他の試料と変わらない値である可能性が考えられる。その理由として以下の問題が挙げられる。

試料の炭素含有量は，上述の通りNo.５を除く５点がおおむね適正な値であるのに対し，No.５は土を完全に除去できず,通常より低い28.9%という値となった。一方で，No.５の窒素含有量は他の5点とおおむね変わらない。このことから，今回測定されたNo.５のC/N比は，土の混入によって本来より低い値を示していると推測される。

土器付着炭化物の由来は単一とは限らず，複数の種類の食物等の残滓が含まれる可能性がある。このため，グ

ラフ上に１点として示される各試料の内容も，複数の食物の混合物である可能性を考慮して検討する必要がある。今回測定された試料には，δ^{13}CがC3植物やそれを食べる草食動物の範囲に含まれるのに対し，δ^{15}Nがそれらよりも高い範囲にあるものが多いという傾向が見られる。これについては，C3植物や草食動物に加えて，淡水魚，海生生物等に由来するものが試料に含まれること，あるいはδ^{15}Nが食物連鎖の上位に向かって濃縮されることを踏まえ，陸生の雑食もしくは肉食動物由来のものが試料に含まれることなどの可能性が考えられる（赤澤ほか1993，吉田2006)。遺跡の立地を踏まえると，海生生物の利用があった可能性があり，その場合には海洋由来の炭素が試料に含まれることになるため，海洋リザーバー効果によって試料の年代値が実際より古く見積もられている可能性がある。ただし，今回測定された6点の試料のδ^{13}Cの値は，C3植物の範囲に相当する値を示しており，明らかな海洋生物の利用を示す値とは言えない。

文献

赤澤威，米田穣，吉田邦夫 1993 北村縄文人骨の同位体食性分析，中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11　―明科町内―　北村遺跡　本文編（(財)長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14），長野県教育委員会，(財）長野県埋蔵文化財センター，445-468

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり　第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，9-54

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

吉田邦夫　2006　煮炊きして出来た炭化物の同位体分析，新潟県立歴史博物館研究紀要，7，51-58

Yoneda, M. et al. 2004 Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan, Journal of Archaeological Science, 31, 97-107

表１　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-170376	No.1	Z-19　IIb 層　16620	土器付着炭化物	AaA	-24.58 ± 0.17	3,010 ± 20	68.74 ± 0.21
IAAA-170377	No.2	R-15　IIb 層　64	土器付着炭化物	AaA	-27.52 ± 0.15	2,110 ± 20	76.90 ± 0.22
IAAA-170378	No.3	R-12　VIa 層　1230	土器付着炭化物	AaA	-24.75 ± 0.14	8,920 ± 30	32.95 ± 0.13
IAAA-170379	No.4	SH2　床 12862	土器付着炭化物	AaA	-24.18 ± 0.19	2,410 ± 20	74.11 ± 0.20
IAAA-170380	No.5	L-35　VI 層　32047	土器付着炭化物	AaA	-22.87 ± 0.14	3,010 ± 20	68.75 ± 0.19
IAAA-170381	No.6	N-36　IIb 層　9292	土器付着炭化物	AaA	-26.36 ± 0.14	2,430 ± 20	73.88 ± 0.20

[IAA 登録番号：#8571]

表 2　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値，暦年較正用 ^{14}C 年代，較正年代 cal BP）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170376	3,000 ± 20	68.80 ± 0.21	3,011 ± 24	3234calBP - 3163calBP (68.2%)	3330calBP - 3293calBP (9.4%) 3255calBP - 3140calBP (81.7%) 3127calBP - 3112calBP (1.8%) 3093calBP - 3080calBP (2.4%)
IAAA-170377	2,150 ± 20	76.50 ± 0.21	2,110 ± 22	2125calBP - 2045calBP (68.2%)	2146calBP - 2035calBP (85.1%) 2029calBP - 2004calBP (10.3%)
IAAA-170378	8,910 ± 30	32.97 ± 0.13	8,918 ± 31	10175calBP - 10128calBP (21.1%) 10063calBP - 10008calBP (23.3%) 9993calBP - 9942calBP (23.8%)	10186calBP - 10112calBP (28.8%) 10095calBP - 9917calBP (66.6%)
IAAA-170379	2,390 ± 20	74.24 ± 0.20	2,406 ± 21	2438calBP - 2358calBP (68.2%)	2675calBP - 2669calBP (0.8%) 2653calBP - 2644calBP (1.3%) 2490calBP - 2351calBP (93.4%)
IAAA-170380	2,970 ± 20	69.05 ± 0.19	3,009 ± 22	3228calBP - 3165calBP (68.2%)	3326calBP - 3298calBP (6.7%) 3253calBP - 3141calBP (85.0%) 3125calBP - 3114calBP (1.4%) 3093calBP - 3081calBP (2.3%)
IAAA-170381	2,450 ± 20	73.67 ± 0.20	2,431 ± 22	2489calBP - 2364calBP (68.2%)	2693calBP - 2636calBP (17.7%) 2614calBP - 2594calBP (4.9%) 2500calBP - 2356calBP (72.8%)

［参考値］

表 3　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値，暦年較正用 ^{14}C 年代，較正年代 cal BC/AD）（1）

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170376	3,000 ± 20	68.80 ± 0.21	3,011 ± 24	1285calBC - 1214calBC (68.2%)	1381calBC - 1344calBC (9.4%) 1306calBC - 1191calBC (81.7%) 1178calBC - 1163calBC (1.8%) 1144calBC - 1131calBC (2.4%)
IAAA-170377	2,150 ± 20	76.50 ± 0.21	2,110 ± 22	176calBC - 96calBC (68.2%)	197calBC - 86calBC (85.1%) 80calBC - 55calBC (10.3%)
IAAA-170378	8,910 ± 30	32.97 ± 0.13	8,918 ± 31	8226calBC - 8179calBC (21.1%) 8114calBC - 8059calBC (23.3%) 8044calBC - 7993calBC (23.8%)	8237calBC - 8163calBC (28.8%) 8146calBC - 7968calBC (66.6%)

表 3　放射性炭素年代測定結果（δ ^{13}C 未補正値，暦年較正用 ^{14}C 年代，較正年代 cal BC/AD）(2)

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC (%)			
IAAA-170379	2,390 ± 20	74.24 ± 0.20	2,406 ± 21	489calBC - 409calBC (68.2%)	726calBC - 720calBC (0.8%) 704calBC - 695calBC (1.3%) 541calBC - 402calBC (93.4%)
IAAA-170380	2,970 ± 20	69.05 ± 0.19	3,009 ± 22	1279calBC - 1216calBC (68.2%)	1377calBC - 1349calBC (6.7%) 1304calBC - 1192calBC (85.0%) 1176calBC - 1165calBC (1.4%) 1144calBC - 1132calBC (2.3%)
IAAA-170381	2,450 ± 20	73.67 ± 0.20	2,431 ± 22	540calBC - 415calBC (68.2%)	744calBC - 687calBC (17.7%) 665calBC - 645calBC (4.9%) 551calBC - 407calBC (72.8%)

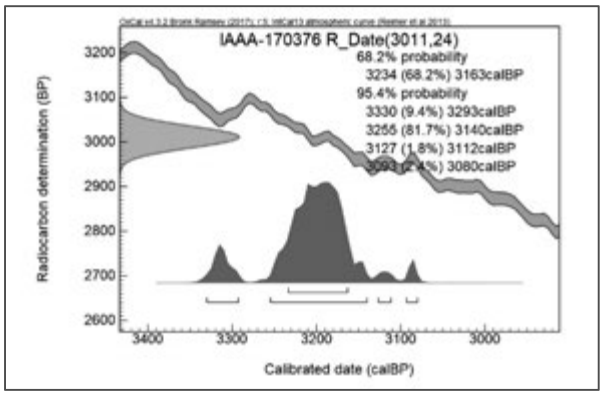
［参考値］

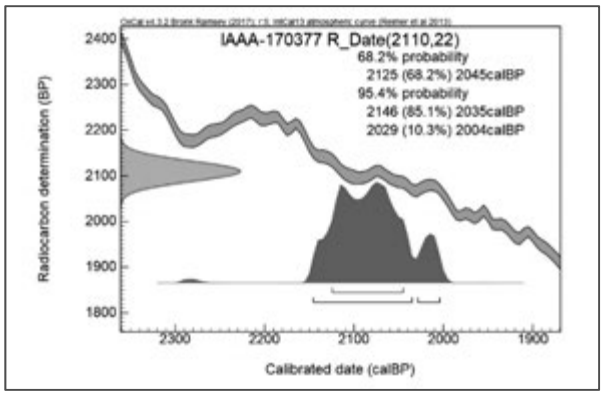
表 4　炭素・窒素安定同位体比及び含有量

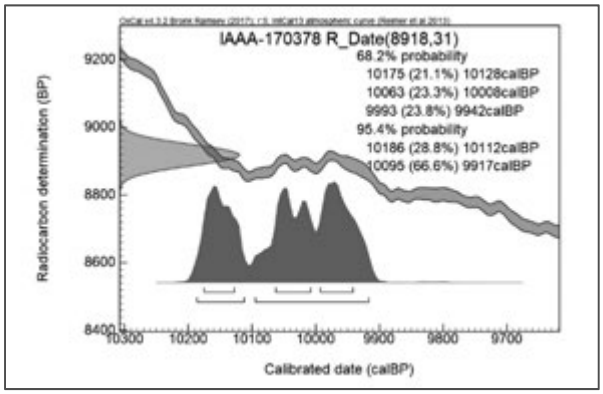
試料名	δ ^{13}C (‰) (MASS)	δ ^{15} N (‰) (MASS)	C 含有量 (%)	N 含有量 (%)	C/N 重量比	C/N モル比
No. 1	-26.1	12.9	56.6	2.8	20.2	23.6
No. 2	-27.4	11.0	55.6	3.0	18.5	21.6
No. 3	-25.0	10.2	44.9	2.3	19.2	22.4
No. 4*	-26.4	12.8	48.8	2.5	19.7	22.9
No. 5	-26.6	1.98	28.9	2.3	12.4	14.4
No. 6	-26.5	12.5	54.3	2.6	20.9	24.4

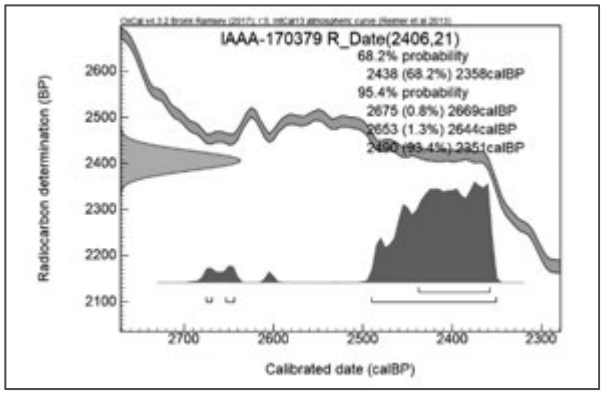
＊δ ^{15}N について，サンプルの窒素含有量が少なく，適正出力が得られなかったため，通常よりバラつきが大きくなっている事が予想される。

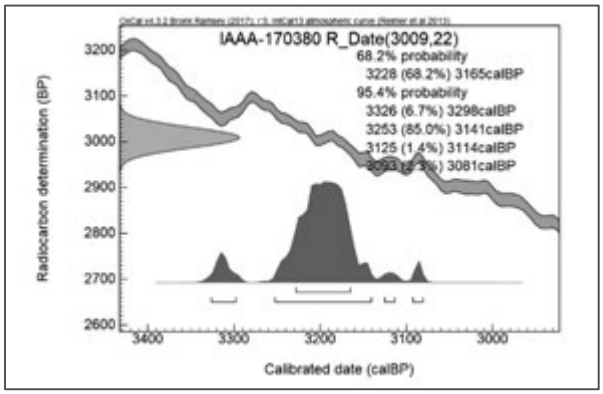
なお，表 4 に結果を示した炭素と窒素の安定同位体比および含有量の測定は，昭光サイエンス株式会社の協力を得て行った。

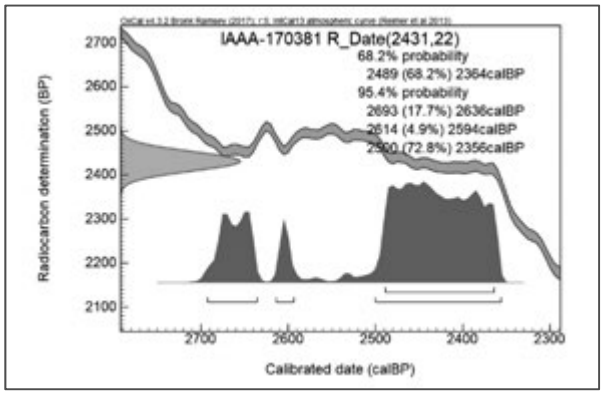




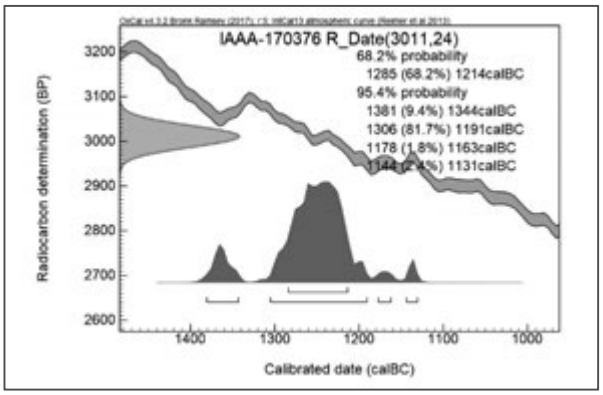


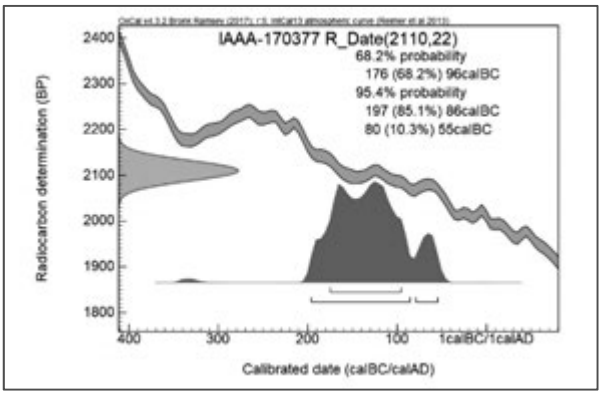


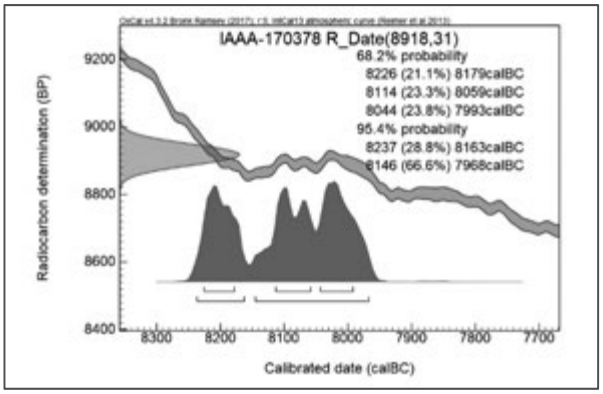


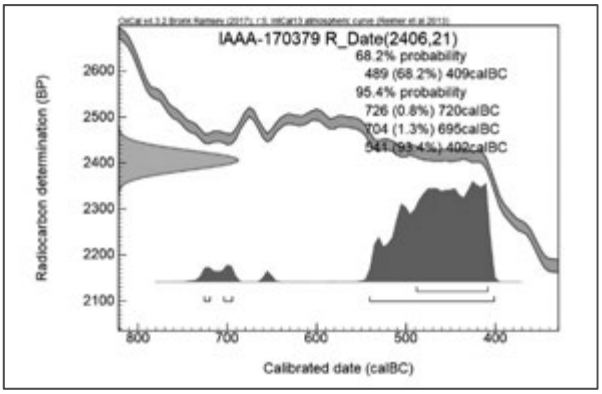


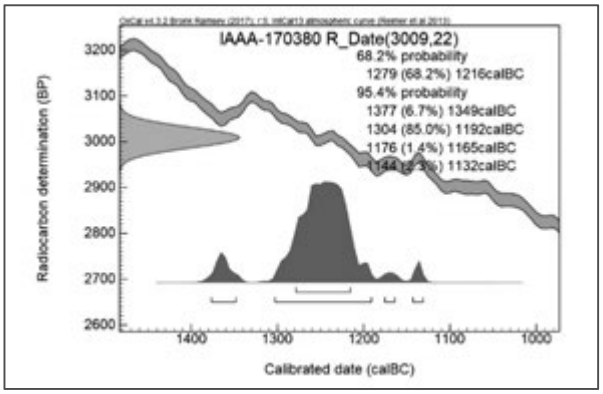
[図版 1] 暦年較正年代グラフ（cal BP, 参考）

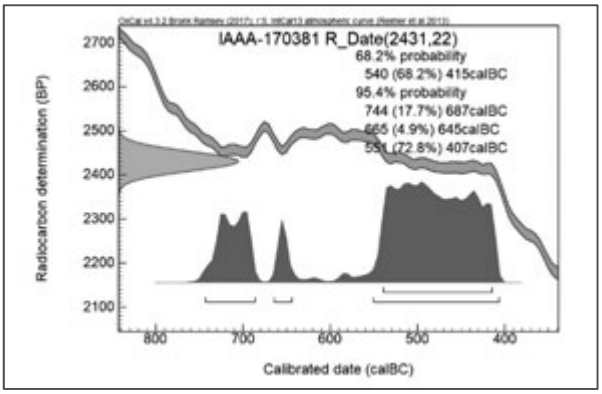




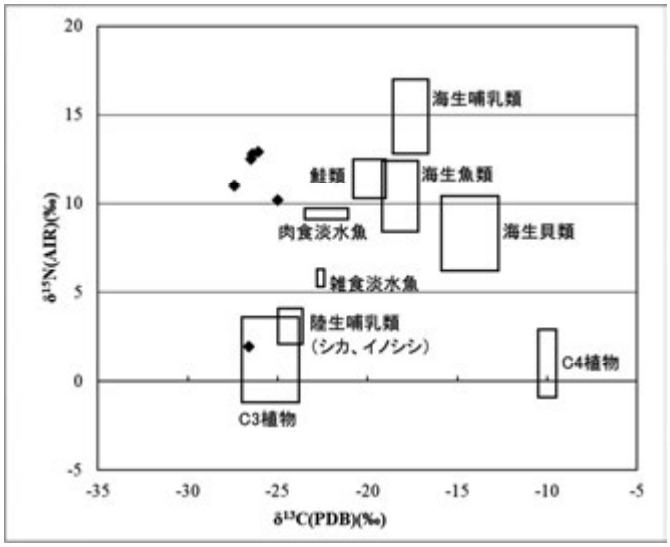






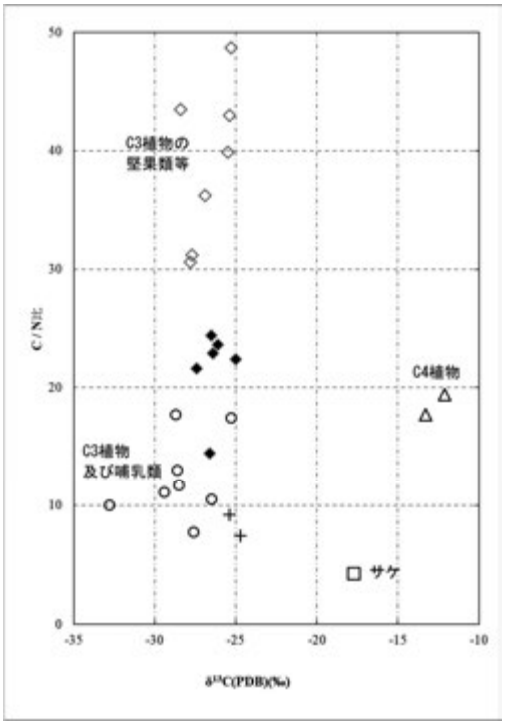


[図版 2] 暦年較正年代グラフ（cal BC/AD, 参考）



[図版 3] 炭素・窒素安定同位体比グラフ（参考）

◆は測定試料。散布図上に表示した枠は，食料資源の同位体比の分布範囲を示す。Yoneda et al. 2004 に基づき作成した。



[図版 4] 炭素安定同位体比・C/N 比グラフ（参考）

グラフの C/N 比はモル比。◆は測定試料，その他は現生動植物の炭化試料。現生動植物試料のデータは吉田 2006 による。また吉田 2006，國木田ほか 2010 を参考に食料資源の大別を示した。◇は C3 植物の堅果類等，○は堅果類以外の C3 植物，＋は C3 植物を食べる哺乳類，□はサケ，△は C4 植物。
なお，吉田 2006 によると，C3 植物の堅果類等（測定データはトチ，同（木灰），ミズナラ，ドングリ，同（粉），カチグリ，ヤマユリ，ジャガイモ，以下他の食料資源も同様に示す）の C/N 比は 30 ～ 50，他の C3 植物（エゴマ，アズキ，サトイモ，ヤマイモ，ナガイモ，ノビル，マムシグサ，クワイ）及び哺乳類（タヌキ，クマ）は 7 ～ 20，C4 植物（アワ）も堅果類以外の C3 植物と同程度とされる。また，サケは海産魚類の範囲に属するものとして示されている。

下原遺跡におけるテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

志布志市に所在する下原遺跡は，非溶結の流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩いわゆるシラス(鹿児島県地質図編集委員会,1990)からなる台地上に位置する。台地上面の標高は約100mとされ，周辺は開析が進んでいる。発掘調査では，旧石器時代や縄文時代の遺物・遺構が確認されている。

本報告では，調査区を埋積する火山灰土層中に含まれる火山砕屑物，特に斑晶鉱物と火山ガラスを抽出し，その鉱物組成や形態の特徴，さらには屈折率を捉えることによって，それらの火山砕屑物の由来するテフラを同定し，各層位の形成年代に関わる資料を作成する。

１．試料

旧石器調査区南壁の土層断面上部における褐色火山灰土層は，発掘調査所見により上位よりⅢ層からⅥ層まで分層されている。Ⅲ層には軽石の混在が認められており，霧島火山の御池テフラ(Kr-M:町田・新井,2003)に由来する可能性があるとの所見が示されている。さらに，Ⅳ層は池田湖テフラ(Ik:町田・新井,2003)，Ⅴ層は鬼界アカホヤテフラ(K-Ah:町田・新井,1978)の堆積層とされている。

試料は，土層断面のⅢ層中部からⅣ層上部にかけて採取された１点(サンプル①)とⅣ層下部から採取された１点(サンプル②)の計２点の火山灰土である。サンプル①は層位方向の長さ約30cm，幅約10cmの柱状ブロックとして採取され，径１～２mm程度の黄橙色の軽石が一様に散在するという外観を呈する。軽石はすべて粘土化しており，指で容易につぶせる状態である。サンプル②は層位方向の長さ約15cm，幅約10cmの柱状ブロックであり，径１～４mmの黄橙色の軽石が一様に散在し，また細粒の火山ガラスの散在も認められる。軽石の状態は，サンプル①と同様である。

２．分析方法

試料は，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。

水洗後に乾燥させた後，篩別して，得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分を，ポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を，偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型，中間型，軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象とする。屈折率の測定は，古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

３．結果

(1)　テフラ組成分析

分析結果を表1，図1に示す。以下に各試料の重鉱物組成および火山ガラス比を述べる。

表1.　テフラ組成分析結果

試料名	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑レン石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
サンプル①（Ⅲ～Ⅳ層）	132	31	0	0	0	86	1	250	7	2	27	214	250
サンプル②（Ⅳ層）	126	32	4	1	1	86	0	250	40	6	57	147	250

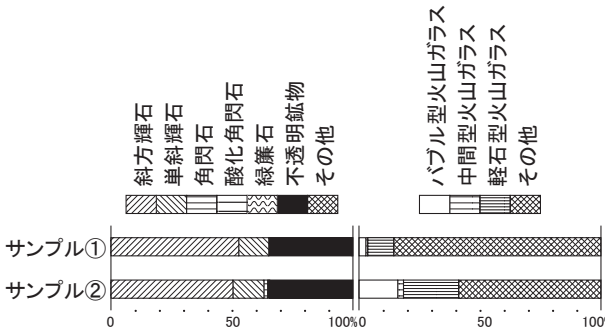


図1.　重鉱物組成および火山ガラス比

・サンプル①

重鉱物組成は，斜方輝石が最も多く，50%程度を占め，次いで不透明鉱物が25%ほどで多く含まれ，単斜輝石が約10%で少量含まれる。火山ガラス比では，少量の軽石型火山ガラスと微量のバブル型火山ガラスが含まれる。バブル型火山ガラスの中には褐色を帯びたものも認められる。

・サンプル②

重鉱物組成は，サンプル①とほぼ同様であるが，微量の角閃石が含まれることがサンプル①との違いとして指摘できる。火山ガラス比では,それぞれ少量ではあるが，バブル型と軽石型が同量程度含まれ，中間型も微量含ま

れる。バブル型火山ガラスの中には褐色を帯びたものも認められる。

(2)　屈折率測定(図２)

1)火山ガラス

２点の試料は，ほぼ同様のレンジとモードを示す。レンジはn1.508-1.515であり,モードはn1.513-1.514である。

2)斜方輝石

２点の試料は，ほぼ同様のレンジとモードを示す。レンジは，γ1.705-1.713であり，モードはγ1.711である。また，２点の試料ともに，γ1.728-1.730という高屈折率の斜方輝石が微量混在する。

４．考察

サンプル②で検出された火山ガラスは，バブル型が比較的多いこととその中に褐色を帯びたものがあること，およびその屈折率のレンジとモードの値から，下位のV層に堆積するK-Ahに由来すると考えられる。また，斜方輝石の屈折率の主たるレンジとモードの値もK-Ahのそれとほぼ一致しており，K-Ahに由来する砕屑物がⅣ層までかなりの量が拡散して含まれていることが考えられる。そのような中で，重鉱物組成に微量ながらも角閃石が検出されたことは，Ⅳ層中にIkに由来する砕屑物も混在している可能性のあることを示唆している。なお，高屈折率の斜方輝石は，その値から，基盤のシラスに由来する砕屑物であると考えられる。

サンプル①の火山ガラスも，褐色を帯びたものが含まれることや屈折率の状況がサンプル②とほぼ同様であることと斜方輝石の屈折率の主たるレンジとモードから，その多くはK-Ahに由来すると考えられる。ただし，バブル型火山ガラスの量比がサンプル①に比べて低いことを考慮すると，K-Ahと屈折率のほぼ重なるKr-M由来の火山ガラスも混在している可能性がある。また，高屈折率の斜方輝石は，上述したように基盤のシラスに由来すると考えられるが，その中にはKr-Mに由来するものも含まれている可能性がある。

今回の分析では，下位のK-Ahに由来する砕屑物の撹乱と再堆積による砕屑物が上位の火山灰土層中にも多量に含まれていることが確認され，発掘調査所見により示された各層のテフラの堆積を明瞭に示すことはできなかった。しかし,重鉱物組成によりⅣ層のIkの混在が示され,火山ガラス比によってKr-Mの混在の可能性が示されたことは，分析による成果であると言える。今後も火山灰土中のテフラの確認には分析による検証が有効であると考えられる。

引用文献

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.

鹿児島県地質図編集委員会,1990,鹿児島県地質図　縮尺10万分の1.鹿児島県.

町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143-163.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

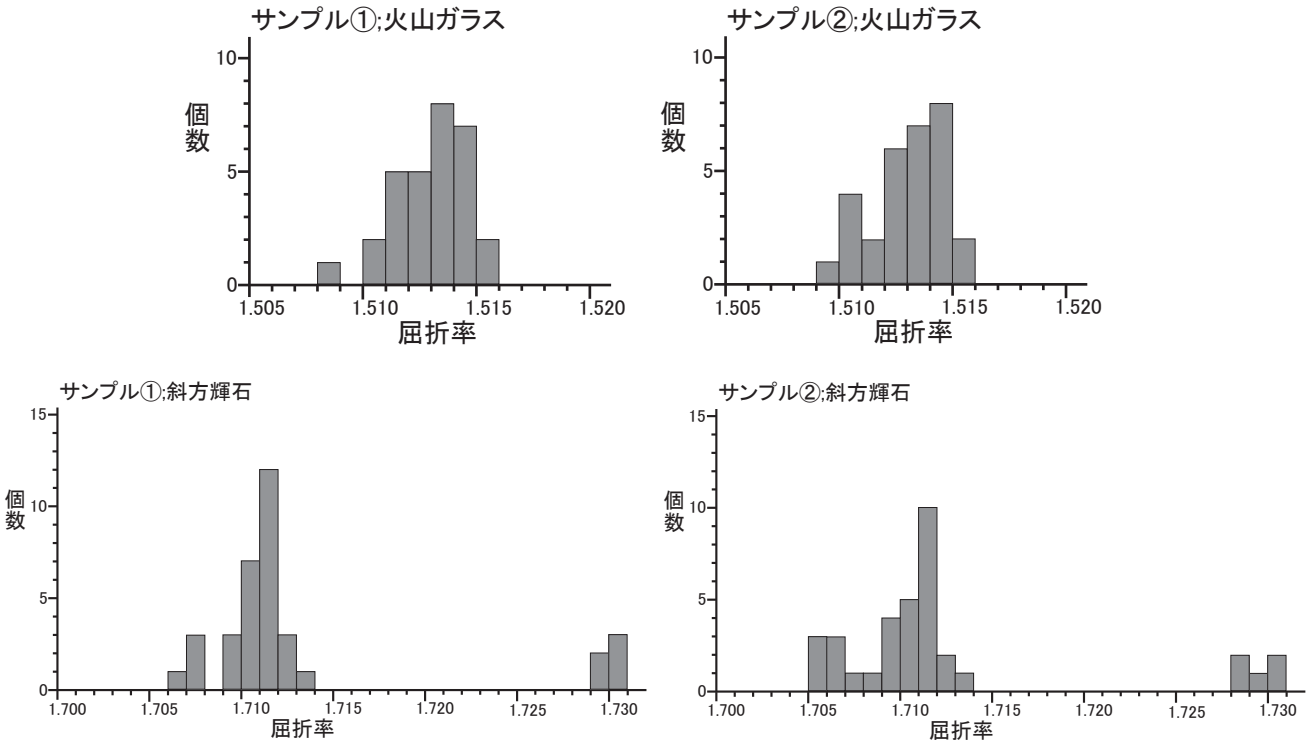
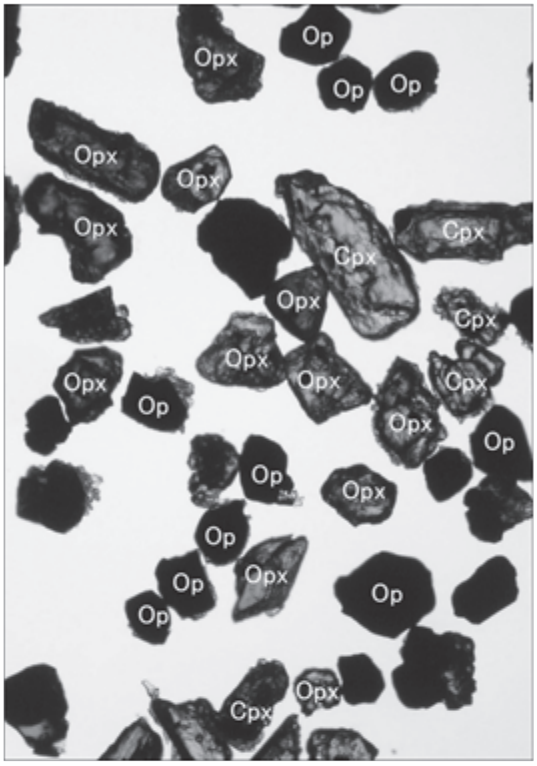
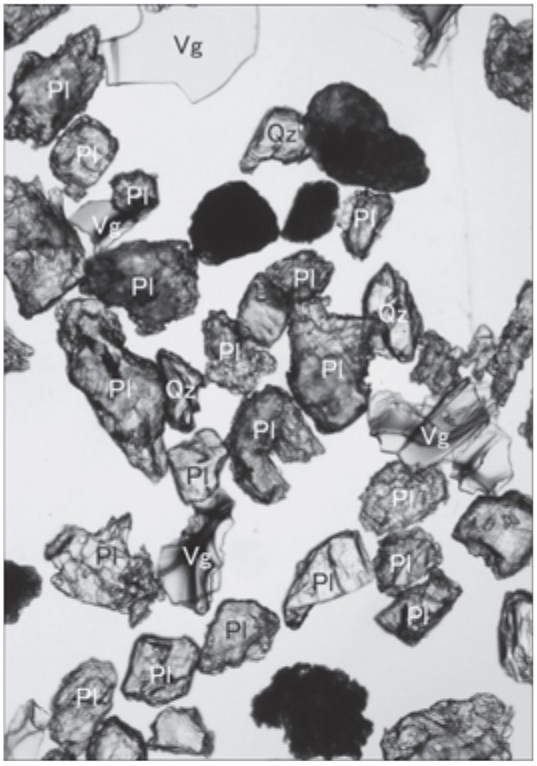


図２．　屈折率測定結果

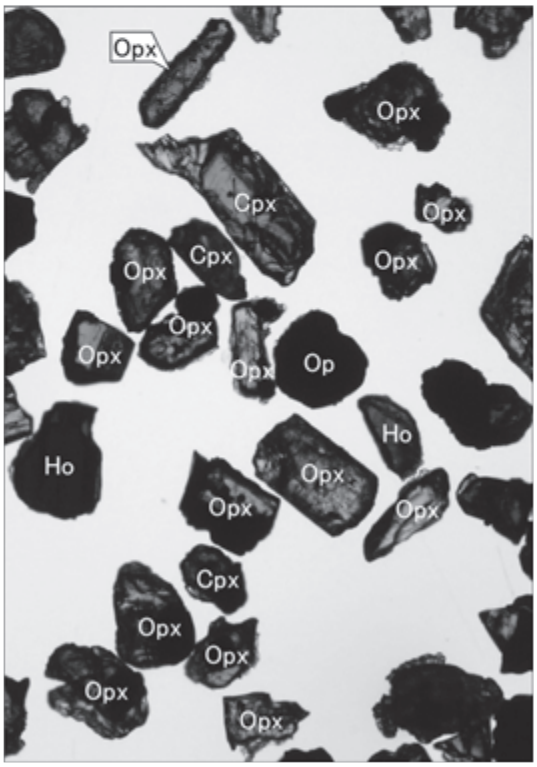
図版1　重鉱物・軽鉱物



1.重鉱物(Z-18区南壁Ⅲ-Ⅳ層;サンプル①)



2.軽鉱物(Z-18区南壁Ⅲ-Ⅳ層;サンプル①)



3.重鉱物(Z-18区南壁Ⅳ層;サンプル②)



4.軽鉱物(Z-18区南壁Ⅳ層;サンプル②)

0.5mm

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Ho:角閃石. Op:不透明鉱物. Vg:火山ガラス.
Qz:石英. Pl:斜長石.

下原遺跡のテフラ分析

中村賢太郎・藤根久（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鹿児島県志布志市に所在する下原遺跡は，非溶結の流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩いわゆるシラス(鹿児島県地質図編集委員会，1990)からなる台地上に位置する。台地上面の標高は約100mとされ,周辺は開析が進んでいる。発掘調査では，縄文時代とされる竪穴住居跡などの遺構や土器などの遺物が確認されている。

ここでは，竪穴住居跡5号の埋土中に含まれるテフラの同定を行った。

２．試料と方法

試料は，Y・Z-14区で検出された竪穴住居跡３号の埋土から採取された軽石を含む土壌１点である。試料は，黒褐色を呈するシルト質の火山灰土であり，径２～６㎜程度の黄橙色軽石が少量散在している。軽石粒は，ほとんどが粘土化しており，指で容易につぶれる状態であった。

発掘調査所見によれば，埋土内のテフラは縄文時代早期に桜島より噴出した，桜島12（Sz-12）あるいは桜島13（Sz-13）のいずれかのテフラ(小林，1986；町田・新井，2003)に該当する可能性があるとされている。

試料より約40gを採取し，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16㎜より小さい粒子を除去する。乾燥させた後，篩別して，得られた粒径1/4㎜-1/8㎜の砂分を，ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを不透明鉱物とする。不透明鉱物以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒はその他とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を，偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型，中間型，軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象として，古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

３．結果

(1)　軽鉱物と重鉱物の組成

分析結果を表1，図1に示す。

火山ガラス比では，少量の軽石型が含まれ，極めて微量のバブル型火山ガラスも含まれる。

重鉱物組成は，斜方輝石が最も多く，約55％を占め，次いで単斜輝石と不透明鉱物がそれぞれ20％程度あり，極めて微量の角閃石も含まれる。

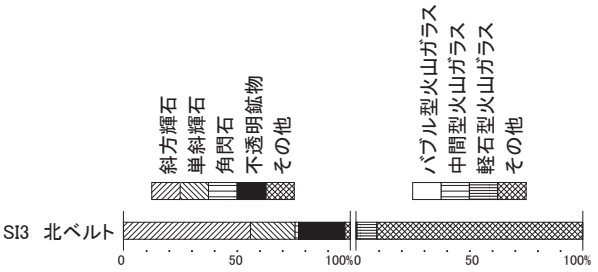


図１.　重鉱物組成および火山ガラス比

(2)　屈折率測定

測定結果を図2に示す。

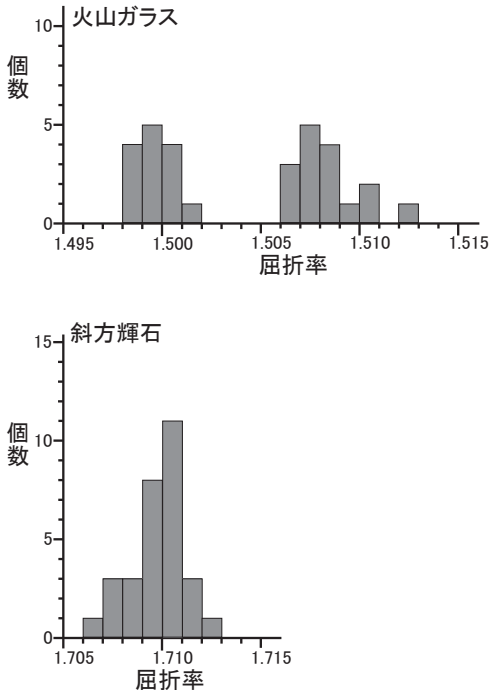


図２.　屈折率測定結果

表１　軽鉱物と重鉱物の組成

分類群 / 試料名	軽鉱物				軽鉱物の合計	重鉱物					重鉱物の合計
	火山ガラス			その他		斜方輝石 (Opx)	単斜輝石 (Cpx)	角閃石 (Ho)	不透明鉱物	その他	
	バブル型	中間型	軽石型								
SI3　北ベルト	1	0	22	227	250	140	49	4	51	6	250

火山ガラスの屈折率は，n1.498-1.501という低い値のレンジとn1.506-1.512という高い値のレンジに分かれる。低い値のレンジのモードはn1.499であり，高い値のレンジのモードはn1.507-1.508である。

斜方輝石の屈折率は，γ1.706-1.712のレンジを示し，モードはγ1.709-1.710である。

４．考察

火山ガラスの屈折率測定結果により，試料中には由来の異なる火山ガラスが混在していることが推定される。n1.499付近にモードのある低屈折率の火山ガラスは，その値から，桜島火山の噴出物に由来するものではなく，遺跡の立地する台地を構成している入戸火砕流(シラス)を噴出した姶良カルデラの噴出物に由来すると考えられる。おそらく台地上の火山灰土の形成過程において，土壌の母材として混入したものであろう。

高屈折率のレンジを構成する火山ガラスは，その値から，鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah：町田・新井，1978)に由来する可能性がある。斜方輝石の屈折率もK-Ahのそれに概ね一致している。住居の廃絶後にK-Ahの降下堆積があったことと，周囲からK-Ahの火山ガラスを含んだ火山灰土の流れ込みによって埋積が進行することにより，埋土中に比較的多くのK-Ah由来の火山ガラスが包含されていると考えられる。

発掘調査所見により示された桜島のテフラについては，火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率のレンジがK-Ahのそれらと多くの範囲で重複するために，今回の分析結果から識別することは難しい。指摘できることとしては，火山ガラスの形態組成において軽石型が圧倒的に多いことがあげられる。おそらく，屈折率を測定した火山ガラスの中には，K-Ah以外のテフラすなわちこの場合は桜島のテフラに由来する火山ガラスも含まれている可能性がある。特に火山ガラスの屈折率においてn1.510以上のものはその可能性が考えられる。遺構の年代を考慮すれば，発掘調査所見でも示されているように，縄文時代早期の約10600年前に噴出したSz-13かあるいは約9000年前に噴出したSz-12のいずれか(噴出年代は奥野(2002)による)に相当する可能性がある。

ここで，町田・新井（2003）に示された火山ガラスの屈折率の値を参照すると，Sz-13はn1.513-1.516，Sz-12はn1.510-1.514である。今回の結果のみから判断すれば，高屈折率の火山ガラスの中にはSz-12が混在している可能性が考えられる。埋土中の軽石は，Sz-12に対比される可能性がある。

しかし，これまでの周辺域における調査事例では，Sz-12の分布軸は桜島から東方であり（森脇，1994)，Sz-13の分布軸は桜島の東方および南東の２つが存在するとされている（小林・江崎，1997)。これらの記載に従えば，桜島から南東方向に位置する田原迫ノ上遺跡では，Sz-13が降下堆積している可能性があり，今回の遺構埋土中のテフラもSz-13である可能性もある。

現時点では，Sz-12とSz-13の識別には，決め手を欠くと言わざるを得ない。今後は周辺域における両テフラの分布状況を確認すると同時に，各地での分析値（特に火山ガラスの屈折率）も蓄積し，比較検討する必要があると考えられる。

引用・参考文献

古澤明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123-133.

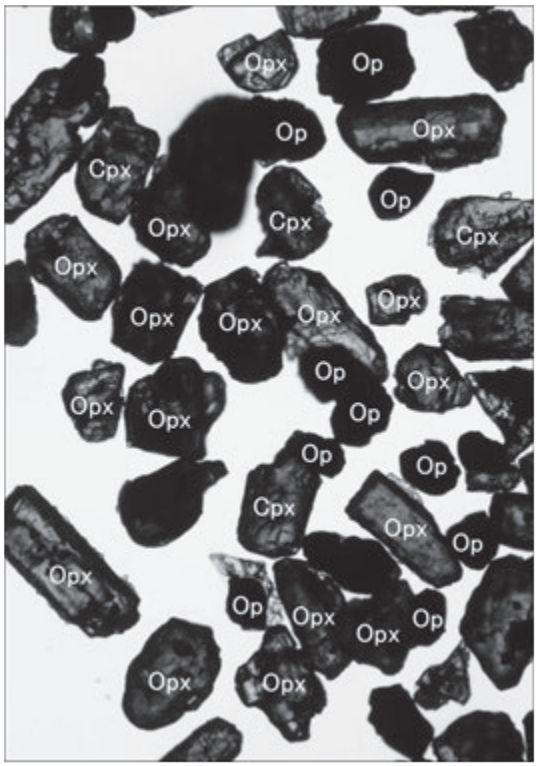
鹿児島県地質図編集委員会（1990）鹿児島県地質図　縮尺10万分の1．鹿児島県.

小林哲夫（1986）桜島火山の形成史と火砕流．文部省科学研究費自然災害特別研究　計画研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害」(代表者荒牧重雄)報告書，137-163.

町田洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰．第四紀研究，17，143-163.

町田洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス．336p，東京大学出版会.

奥野充（2002）南九州に分布する最近約3万年間のテフラの年代．第四紀研究，41，225-236.



1. 重鉱物(SI3　北ベルト)



2. 火山ガラス(SI3　北ベルト)

0.5mm

Opx：斜方輝石．Cpx：単斜輝石．Op：不透明鉱物．Vg：火山ガラス．Qz：石英．
Pl：斜長石．

図版１．　重鉱物・火山ガラス

下原遺跡のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

志布志市に所在する下原遺跡は，非溶結の流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩いわゆるシラス(鹿児島県地質図編集委員会,1990)からなる台地上に位置する。台地上面の標高は約100mとされ，周辺は開析が進んでいる。発掘調査では，旧石器時代の細石刃，縄文時代早期とされる遺構や遺物と弥生時代の遺物包含層，さらには近世および近代とされる大型道路状遺構が確認されている。

本報告では，調査区内で検出された遺構の埋土中に含まれる火山砕屑物,特に斑晶鉱物と火山ガラスを抽出し，その鉱物組成や形態の特徴，さらには屈折率を捉えることによって，それらの火山砕屑物の由来するテフラを同定し，各層位の形成年代に関わる資料を作成する。

１．試料

試料は，調査区内で採取された軽石や軽石を含む土壌などの計5点である。試料には試料番号１～５までが付されている。

試料番号１は杉並木の切株直下から採取された，径１～７㎜程度の軽石からなる堆積物であり,試料番号２は,大正時代の桜島大噴火による火山灰層中より出土した長径30cmほどの軽石，試料番号３は黒色土混じりの径１～5㎜程度の軽石からなる堆積物，試料番号４と５は，径１～２㎜の黄色軽石が散在する褐～暗褐色の火山灰土である。なお，試料番号４と５に含まれる軽石粒は，ほとんどが粘土化しており，指で容易につぶれる状態であった。試料の一覧を表1に示す。

調査区では，発掘調査所見により，現耕作土のⅠa層，旧耕作土のⅠb層から順に下位に向かってⅩⅣ層までの分層がなされている。これらのうち，Ⅱ層は弥生時代遺物包含層，Ⅳa層とⅣb層は縄文時代早期遺物包含層，Ⅸ層とⅩ層は旧石器時代細石刃包含層とされている。また，Ⅲ層には御池火山灰，Ⅳ層には池田降下軽石，Ⅴ層にアカホヤ火山灰(K-Ah:町田・新井,1978)，Ⅶ層には薩摩火山灰(Sz-S:小林,1986)の各テフラが堆積あるいは包含されている。

２．分析方法

試料より約40gを採取し(試料番号2の軽石については一部を切断した後に粉砕して)，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16㎜より小さい粒子を除去する。乾燥させた後，篩別して，得られた粒径1/4㎜-1/8㎜の砂分を，ポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を，偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型，中間型，軽石型の3つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象として，古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

３．結果

(1)　テフラ組成分析

分析結果を表２，図１に示す。重鉱物組成は，全点ともに斜方輝石が最も多く，試料番号２以外の4点は概ね60%を占める。これらは，斜方輝石に次いで不透明鉱物が多く，不透明鉱物よりやや少量の単斜輝石を含む。試料番号2は，不透明鉱物が斜方輝石と同量程度に多く，単斜輝石は微量である。

火山ガラス比では，試料番号2以外の4点では少量の軽石型が含まれ，バブル型火山ガラスと中間型火山ガラスが微量混在する。試料番号2では，軽石を粉砕した粒が軽石型火山ガラスとして計数されている。

(2)　屈折率測定

各試料の火山ガラスの屈折率測定結果を図２に示し，斜方輝石の屈折率測定結果を図3に示す。なお，試料番号１と試料番号３については，実際には処理後も新鮮な軽石粒が残ったことから，特に軽石を抽出してこれを粉砕し，屈折率の測定に供した。試料番号２の軽石型火山ガラスは，前述したように軽石を粉砕したものである。以下に火山ガラスと斜方輝石に分けて，各試料の屈折率の状況を述べる。

１）　火山ガラス

・試料番号1・試料番号3

試料番号1はn1.508-1.514，試料番号3はn1.509-1.514というほぼ同様のレンジを示す。モードは概ねn1.510-1.513の範囲にある。

・試料番号2

n1.498-1.501という狭いレンジを示し，特にn1.499-1.500に集中する。

・試料番号4・試料番号5

n1.498-1.514という広いレンジを示す。ただし，

n1.498-1.499の低屈折率のレンジとn1.504-1.509の中程度の屈折率のレンジおよびn1.513-1.514程度の高屈折率のレンジとに3分される傾向が見出だせる。

２） 斜方輝石

・試料番号1・試料番号3・試料番号4

試料番号1はγ1.707-1.712，試料番号3はγ1.706-1.713，試料番号４はγ1.707-1.714という互いにほぼ同様のレンジを示す。モードは概ねγ1.709-1.710の範囲にある。

・試料番号2

γ1.728-1.734という高い屈折率を示し，モードはγ1.733付近にある。

・試料番号5

γ1.704-1.712というレンジを示し，モードはγ1.702-1.703付近にある。上記の試料番号１，３，４の３点に比べると有意に低いレンジである。

４．考察

試料番号1と試料番号３の比較的新鮮な軽石は，その外観が類似し，またその屈折率もほぼ同様のレンジを示すことから，同一のテフラ層であると考えられる。また，下原遺跡の地理的位置と火山灰の検出された層位を考慮すれば，桜島火山を給源とするテフラに対比される。ここで，試料番号３が採取された層位が，近世または近代とされる道路状遺構の埋土であることから，該当する桜島のテフラ(小林,1986;町田・新井,2003,以下桜島テフラについては同様の引用)は，江戸時代の安永年間(1779年)に噴出したSz-2(安永テフラ)かあるいは大正時代(1914年)に噴出したSz-1(大正テフラ)のいずれかである。町田・新井(2003)による記載によれば，軽石の屈折率は両者ともにほぼn1.511-1.515の範囲で区別はできない。試料番号１と３の軽石の屈折率も，若干レンジは広いが，ほぼ重なる値としてよい。一方，両テフラの斜方輝石の屈折率をみると，Sz-1はγ1.703-1.711，Sz-2は1.708-1.713とされ，Sz-1の方が，若干低い値の方にレンジが広い。試料番号１と３の斜方輝石の屈折率は，どちらかと言えば，Sz-2の方に近い。したがって，本分析では，試料番号１と試料番号３の軽石は，安永軽石のSz-2に対比される可能性があると考えられる。

試料番号２とされた軽石は，n1.500付近に集中する軽石の屈折率とγ1.730を超える高い斜方輝石の屈折率とから，桜島火山の噴出物ではなく，入戸火砕流を噴出した姶良カルデラの噴出物に由来すると考えられる。おそらく入戸火砕流中に包含されていた軽石粒かあるいは入戸火砕流の噴出に先立って噴出した大隅降下軽石などに由来すると考えられる。調査区内では桜島の大正テフラ層中より出土したという所見であるが，遺跡の立地するシラスから混入した可能性がある。

試料番号４と５に含まれるテフラは，縄文時代早期とされた遺構の埋土に含まれるテフラであることから，層位的にはSz-Sよりも上位，K-Ahよりも下位のテフラに対比される可能性がある。Sz-SとK-Ahの両テフラの噴出の間の時期に下原遺跡付近に降下した桜島起源のテフラは，Sz-13，Sz-12，Sz-11のいずれかであると考えられる。これらのうち，Sz-11については，桜島から東北東の末吉方面に分布軸を持ち，K-Ahとの間にはほとんど土壌が形成されていないとの記載(森脇,1994)から，埋土中のテフラに対比される可能性は低い。一方，Sz-12の分布軸は桜島から東方(森脇,1994)，Sz-13の分布軸は桜島の東方および南東の２つが存在する(小林・江崎,1997)とされていることから，埋土中のテフラは，これらのうちのいずれかに対比されると考えられる。

試料番号４と試料番号５の火山ガラスの屈折率は,低,中，高に３つのレンジに分かれる傾向が指摘された。これらのうち，低屈折率は入戸火砕流由来の火山ガラスによるものと考えられ，中屈折率はその値から，K-Ahからの混入を示している可能性がある。したがって，高屈折率の火山ガラスが，埋土中の桜島起源のテフラに由来する可能性がある。高屈折率のレンジは，試料番号４の結果を見ると,n1.514がレンジの下限である傾向が窺える。その場合，町田・新井(2003)に掲載された値との比較から，埋土中に含まれるテフラの火山ガラスの屈折率は,Sz-12よりもSz-13に近いと判断される。したがって，埋土中の軽石は，Sz-13に対比される可能性が高い。なお,斜方輝石の屈折率は，桜島テフラ間でもK-Ahともほぼ近似したレンジであり，区別は難しい。

引用文献

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.
地質学雑誌,101,123-133.

鹿児島県地質図編集委員会,1990,鹿児島県地質図　縮尺10万分の1.鹿児島県.

小林哲夫,1986,桜島火山の形成史と火砕流.文部省科学研究費自然災害特別研究,計画研究
「火山噴火に伴う乾燥粉体流(火砕流等)の特質と災害」(代表者荒牧重雄)報告書,137-163.

小林哲夫･江崎真美子,1997,桜島火山，噴火史の再検討.月刊地球19，227-231.

町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143-163.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

森脇　広,1994,桜島テフラー層序・分布と細粒火山灰層の層位ー.文部省科学研究費(一般研究C)
研究成果報告書「鹿児島湾周辺における第四紀後期の細粒火山灰層に関する古環境学的研究」,1-20.

表１．テフラ組成分析試料一覧

試料番号	試料名	採取層位	状態
1	NN-3 区	杉並木の切株直下	径１～７㎜の比較的新鮮な黄色軽石堆積物。
2	II-5 区	大正火山灰層の中	長径約 30cm、短径約 15cm、厚さ約 10cm の灰色軽石。
3	SX1 埋土 (II-6 区)	大型道路状遺構埋土	黒色土の混じる径１～５㎜の比較的新鮮な黄色軽石堆積物。
4	竪穴住居跡 2 埋土 (R-14 区)	縄文時代早期 竪穴住居跡埋土	径１～２㎜の粘土化した黄色軽石散在。
5	土坑 5 埋土 (U-13 区)	縄文時代早期 土坑埋土	径２㎜前後の粘土化した黄色～橙色軽石散在。

表２．テフラ組成分析結果

試料番号	試料名	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	NN-3 区	0	160	35	54	1	250	1	3	9	237	250
2	II-5 区	1	98	8	86	0	193	0	0	72	178	250
3	SX1 埋土 (II-6 区)	0	156	42	52	0	250	0	2	15	233	250
4	竪穴住居跡 2 埋土 (R-14 区)	0	176	32	42	0	250	1	1	9	239	250
5	土坑 5 埋土 (U-13 区)	0	161	19	70	0	250	3	4	6	237	250

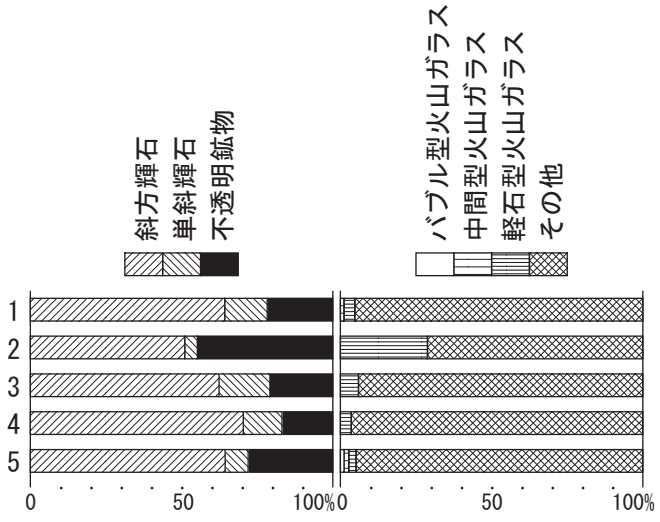


図１．　重鉱物組成および火山ガラス比

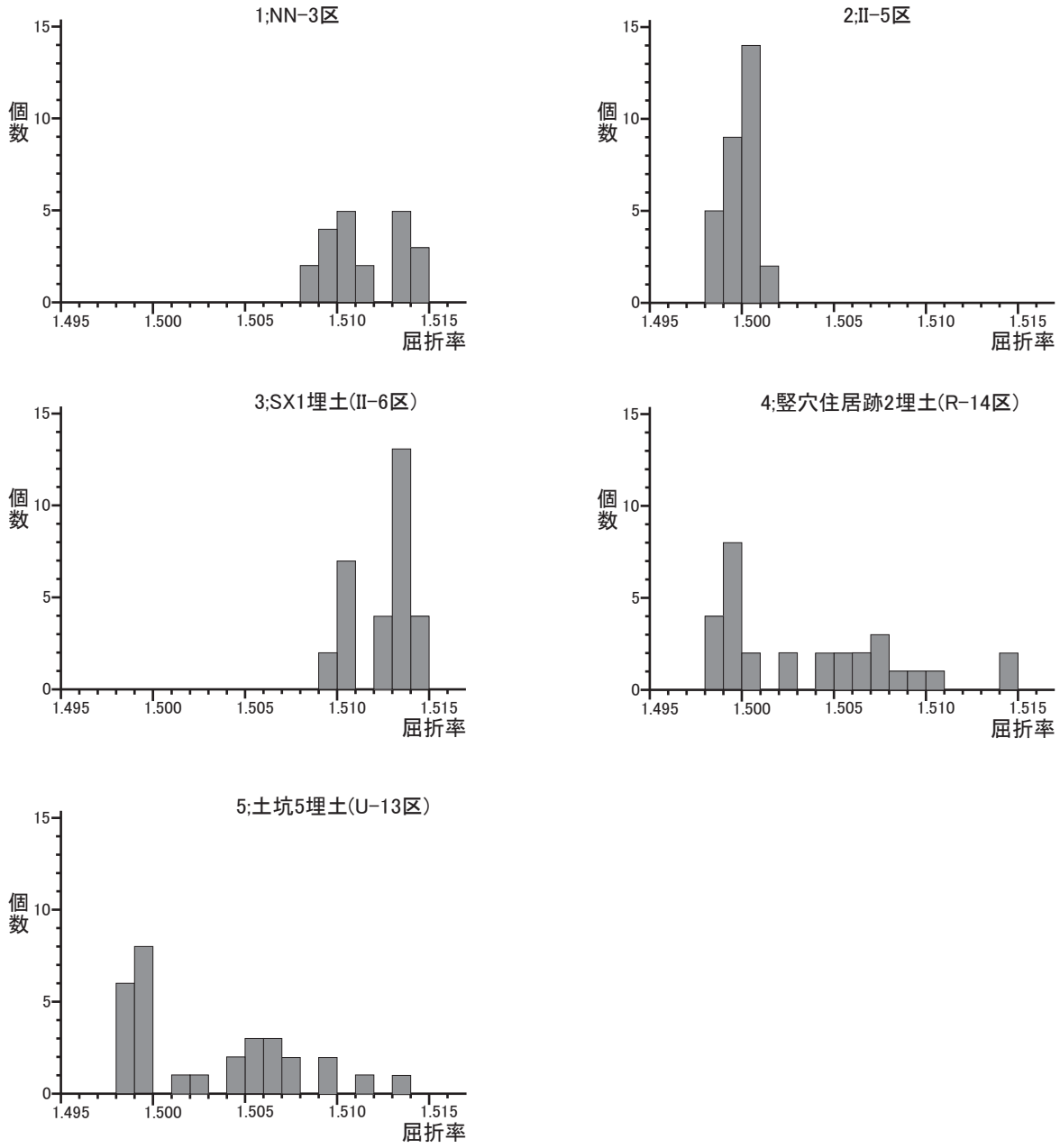


図２．　軽石および火山ガラスの屈折率測定結果

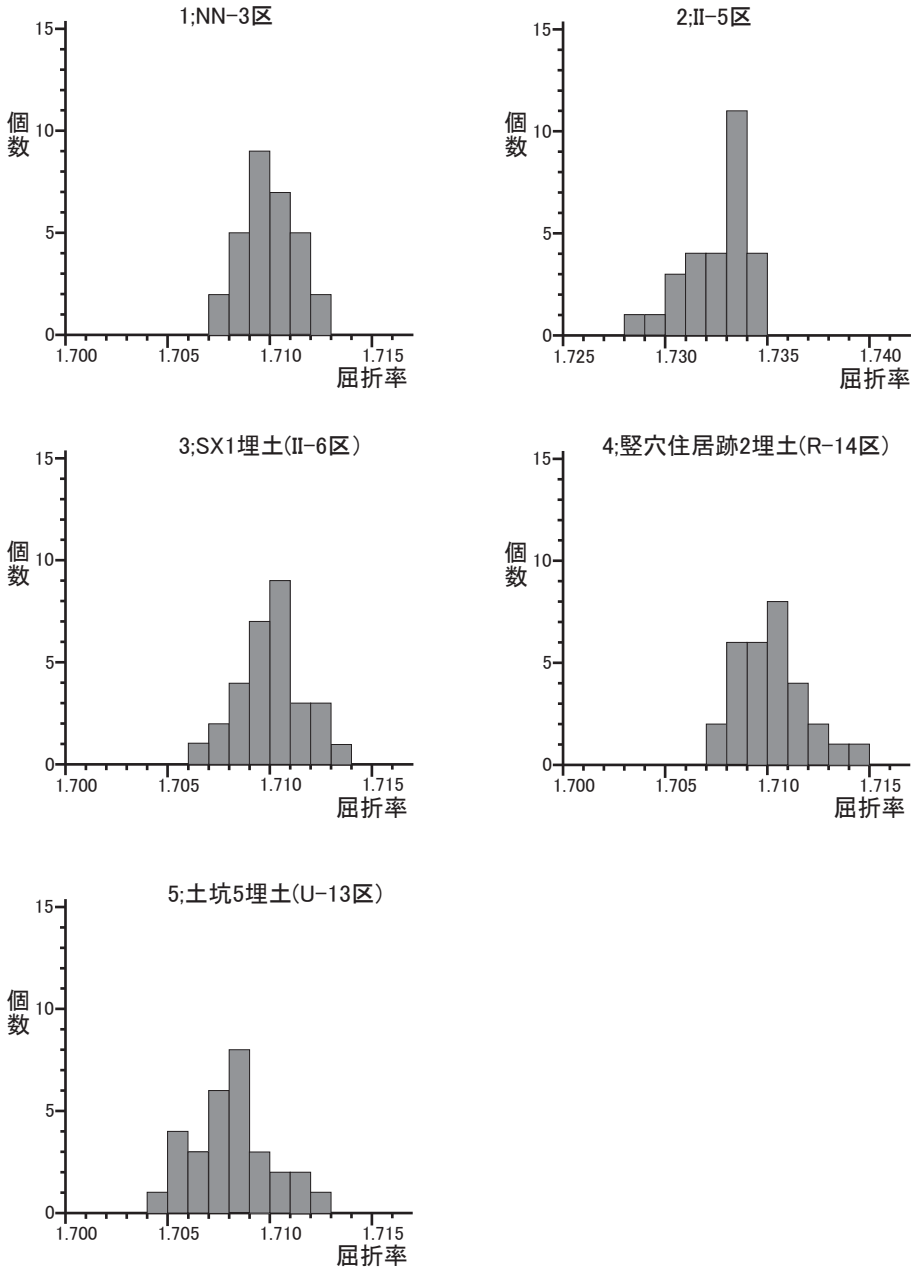
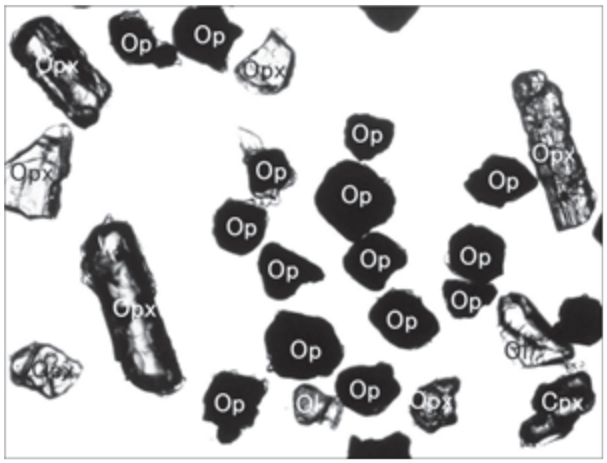
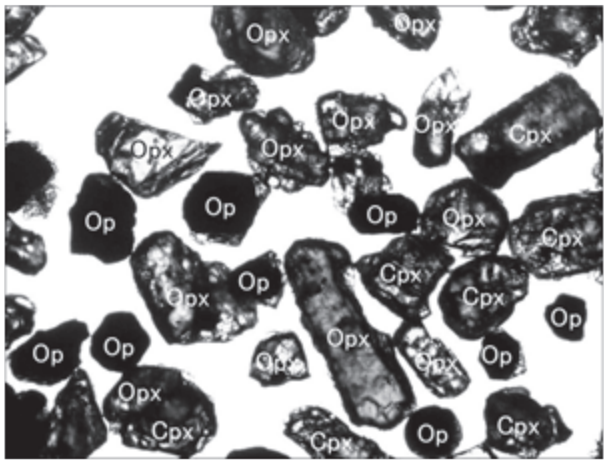


図３．斜方輝石の屈折率測定結果

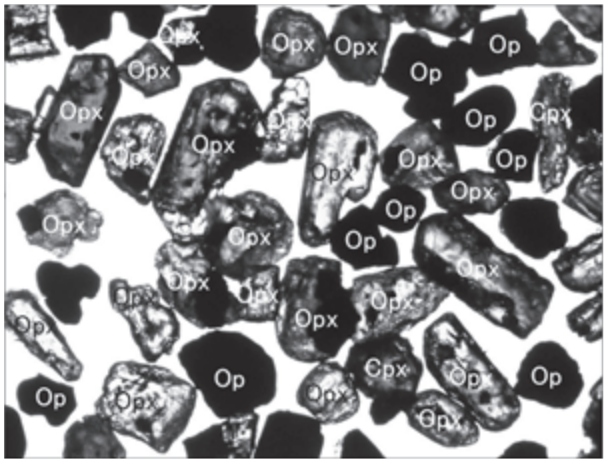
図版1　重鉱物・火山ガラス



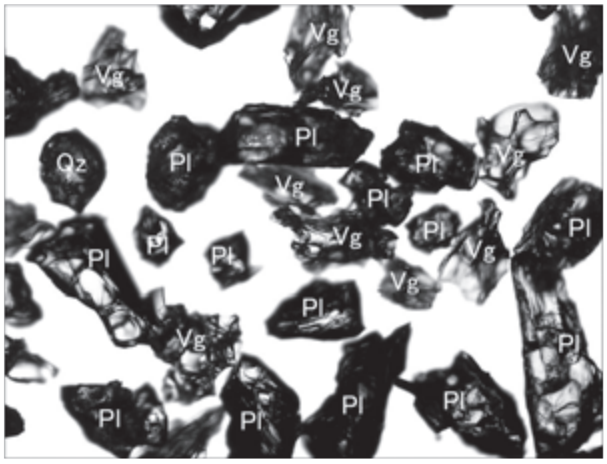
1.重鉱物(試料番号2　NN-3区)



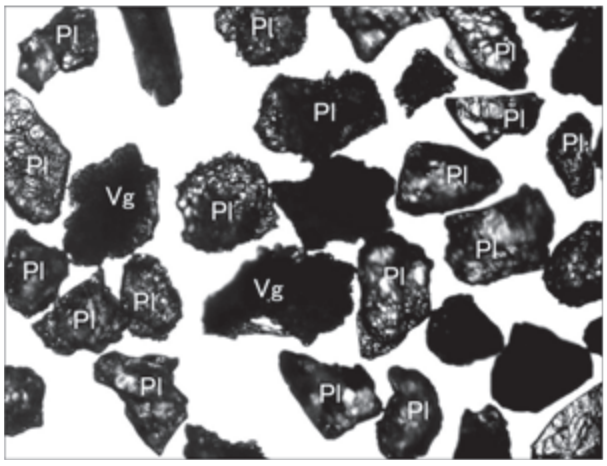
2.重鉱物(試料番号3　SX1埋土(II-6区))



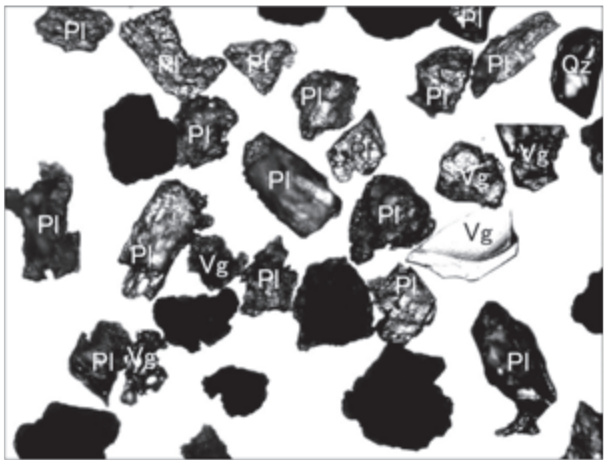
3.重鉱物(試料番号5　SK13埋土(U-13区))



4.軽鉱物(試料番号2　NN-3区)



5.軽鉱物(試料番号3　SX1埋土(II-6区))



6.軽鉱物(試料番号5　SK13埋土(U-13区))

Ol:カンラン石. Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Op:不透明鉱物. Vg:火山ガラス. Qz:石英. Pl:斜長石.

0.5mm

第３章　　調査区２発掘発掘調査の方法と成果

１　出土遺物の分類

従来本章の第１・２節では「発掘調査の方法と成果」「層序」について記載するが，調査区１に詳細を示したので，本章での記載は省略し，「出土遺物の分類」のみを記載する。

下原遺跡調査区２では，縄文時代早期・後期・晩期，弥生時代を中心に遺物が出土した。そこで，当該時期の遺物を，遺構内遺物も含めて時期別に分類して表記することとした。

なお，縄文時代後・晩期は同一層になり，出土状況に大差が見られないことから，遺物の時期区分が困難な面があった。このため土器は型式により後・晩期の時期を区分してあるが，石器に関しては後期の章にまとめて掲載した。

縄文時代早期の土器は数種の型式に及んでいるため，Ⅰ～Ⅶ類に区分した。なおⅢ類土器は文様の違いによりⅢ－１～11類と細分して表記した。これに準じて各類の説明，観察表を作成した。この類別の特徴は下記のとおりである。

縄文時代後期・晩期は遺物量が早期に比して少量のため，時期別にまとめて記載した。その際，後期は一型式にまとめ，晩期は土器型式を分類できるものに関しては分類した。いずれの時期も，口縁部から底部に至る部位順に実測図を掲載し，これに順じて説明，観察表を作成した。

石器は，縄文時代早期・後期・晩期ともに，器種・形状による分類をおこなった。ただし，後期・晩期は包含層の区別が困難なため，後期の項にまとめて記載した。弥生時代の石器は遺構内遺物のため，各遺構の説明に実測図も併せて記載した。

(1)　土　　器

縄文時代

早　期

Ⅰ類＝前平式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，口縁部に横位の明瞭な貝殻腹縁部による刺突文を巡らせ，胴部には貝殻腹縁部による条痕文を施す。

Ⅱ類＝吉田式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，口縁部に横位の明瞭な貝殻腹縁部による刺突文を巡らせ，胴部には貝殻腹縁部による押引文を施す。

Ⅲ類＝倉園B式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，胴部に貝殻腹縁部による横位の条痕文を巡らせている。

Ⅲ類＝石坂式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，胴部に貝殻腹縁部による綾杉状の条痕文を巡らせている。

Ⅳ類＝下剥峯式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，貝殻腹縁部による刺突文が鋸歯状に施文されている。

Ⅴ類＝桑ノ丸式

３～４条の沈線を鋸歯状に施文している土器である。

Ⅵ類＝押型文土器

器面に，円形・楕円形・山形等の連続する文様を施文する土器群である。

Ⅶ類＝塞ノ神A式

口縁部が頸部を境にラッパ状に外反し，胴部ややふくらみをもつ。文様は，頸部以下に沈線で区画した内部に網目状撚糸文が施文されるタイプである。

その他の土器

上記の分類に該当せず，出土が少量の土器としてまとめた。

後　期

中岳式

平底もしくは尖底の底部からやや丸みを帯びて立ち上がり，胴部最大径部で屈曲し頸部から口縁部にかけて外反する器形である。胴部最大径部に沈線や凹点による施文がみられるものや，無文のものがある。

晩　期

入佐式，黒川式，突帯文相当の土器が出土した。当該期の土器として一括して記載した。

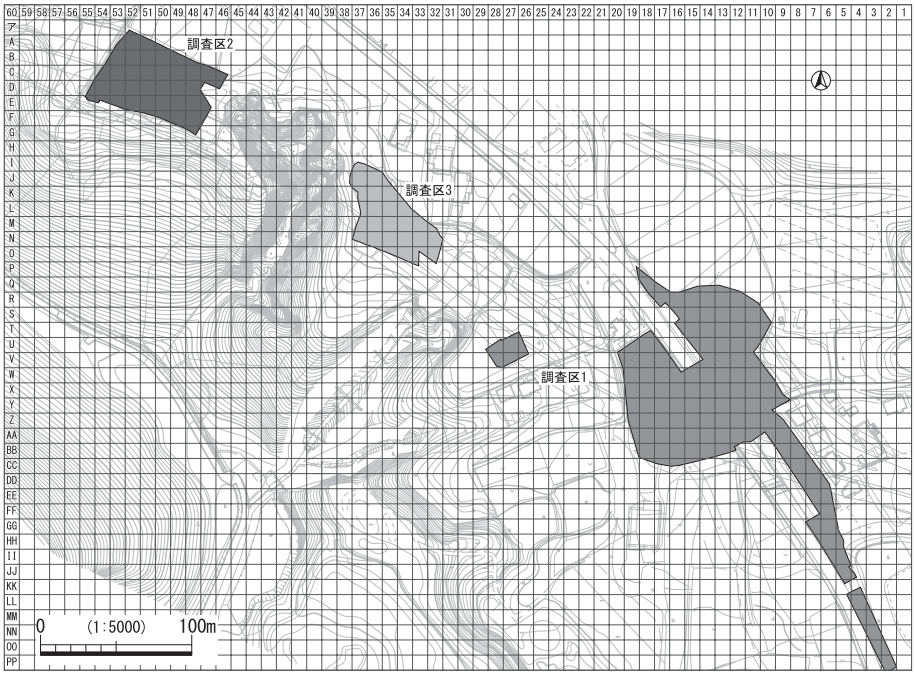
弥生時代

早期・前期相当の土器，中期の山ノ口Ⅱ式相当の土器が出土した。分量が少ないため時期別にはせず，当該期の土器として一括して掲載した。

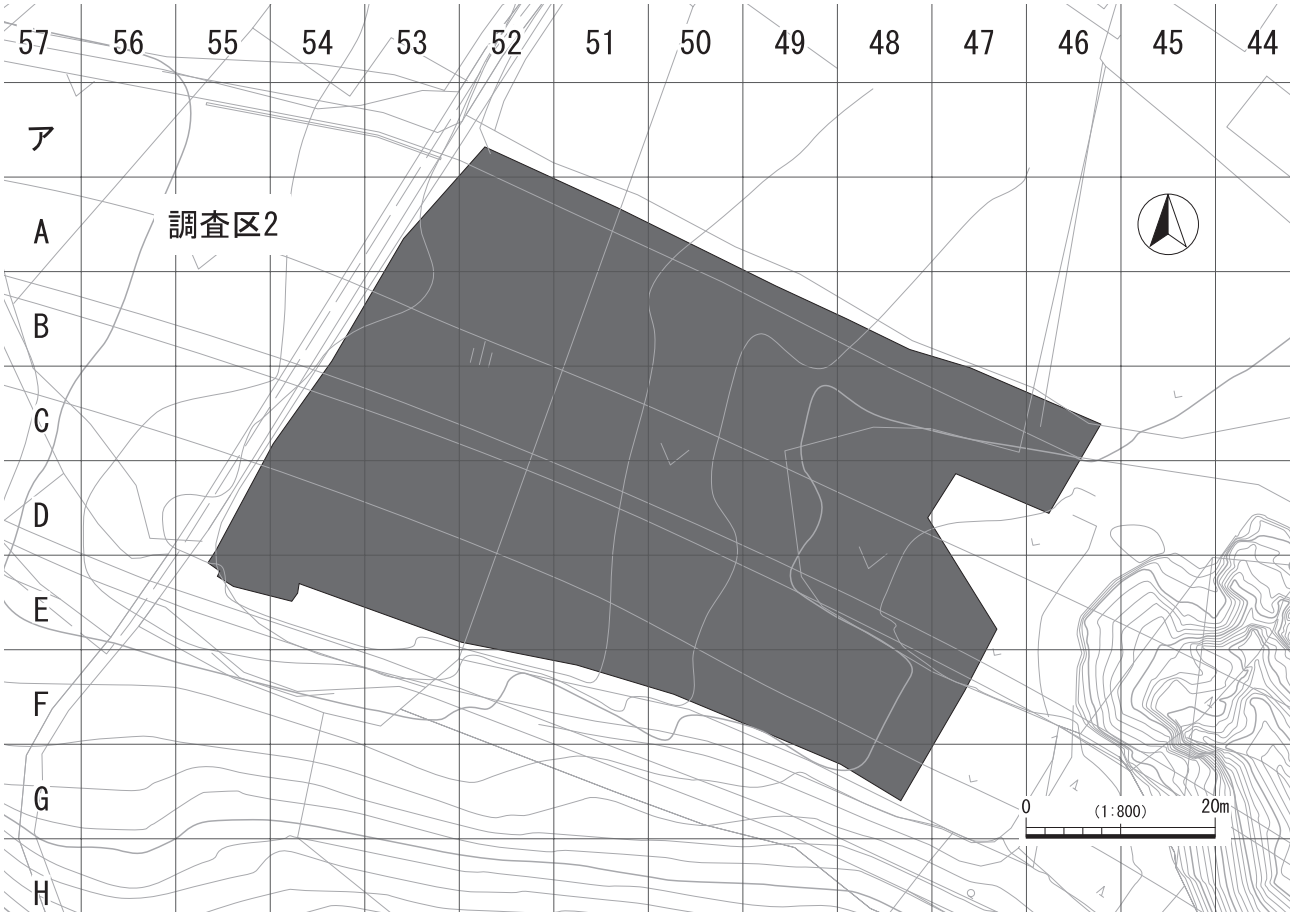
(2)　石　　器

石器は，縄文時代早期・後期・晩期ともに，器種・形状による分類をおこなった。

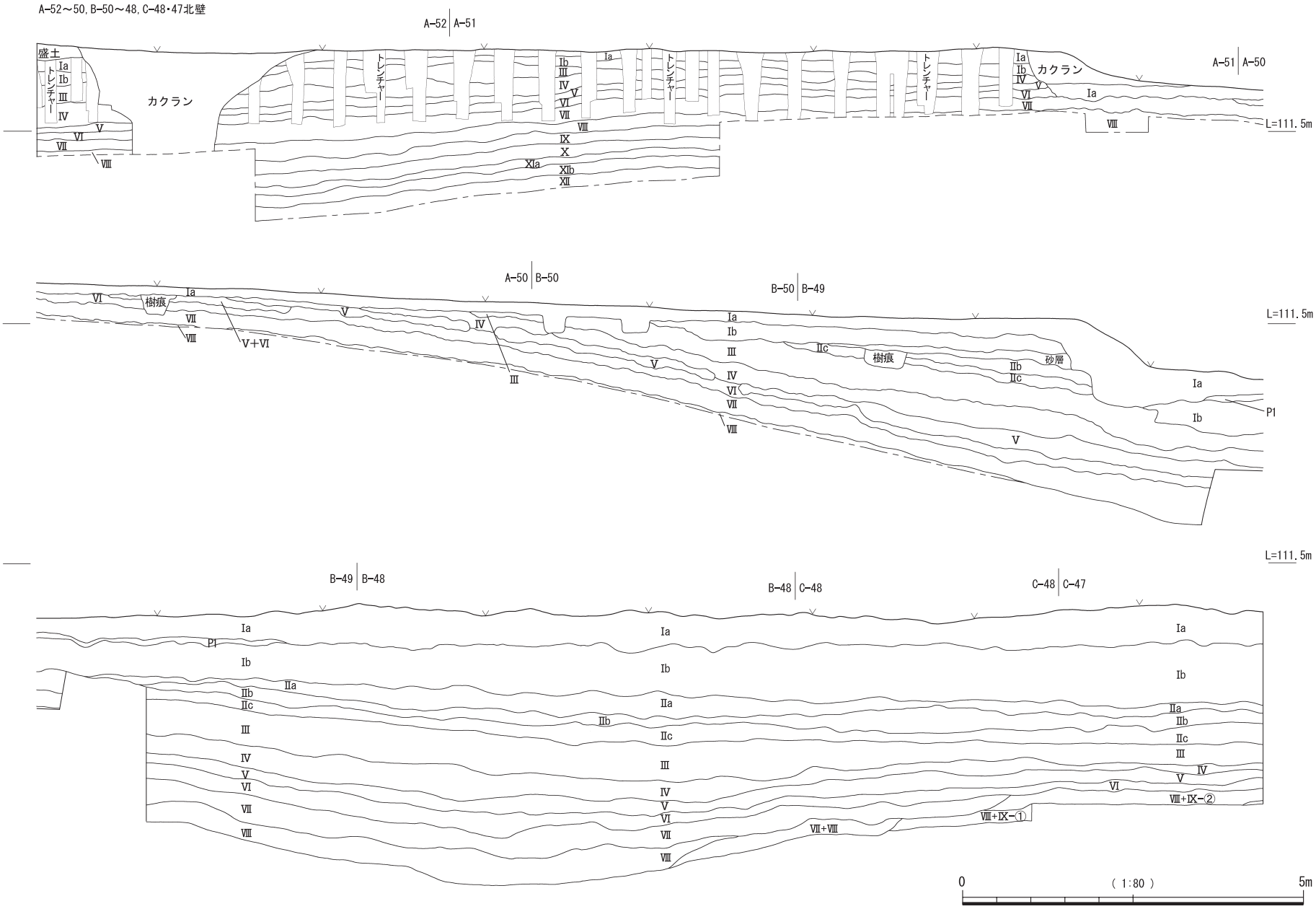
詳細は本文記載にある基準を参照されたい。



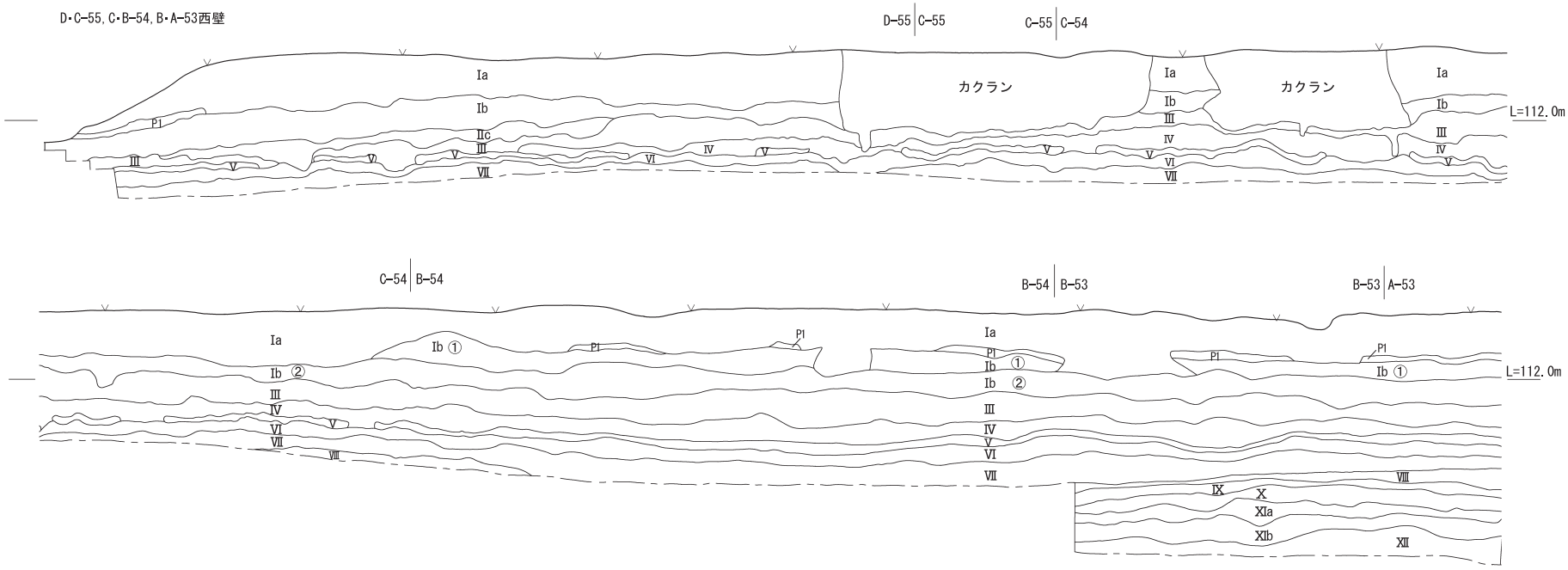
第 59 図　下原遺跡調査区２　位置図



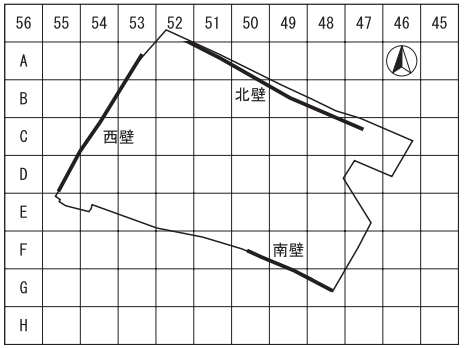
第 60 図　下原遺跡調査区２　調査範囲図

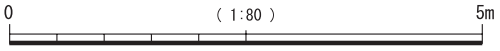

A-52～50, B-50～48, C-48・47北壁
A-52 | A-51
A-51 | A-50
A-50 | B-50
B-50 | B-49
B-49 | B-48
B-48 | C-48
C-48 | C-47
盛土
トレンチャー
カクラン
樹痕
砂層
P1
V+VI
VIII+IX-①
VII+VIII
VIII+IX-②
L=111.5m
0
(1:80)
5m

第 61 図　土層断面図（1）

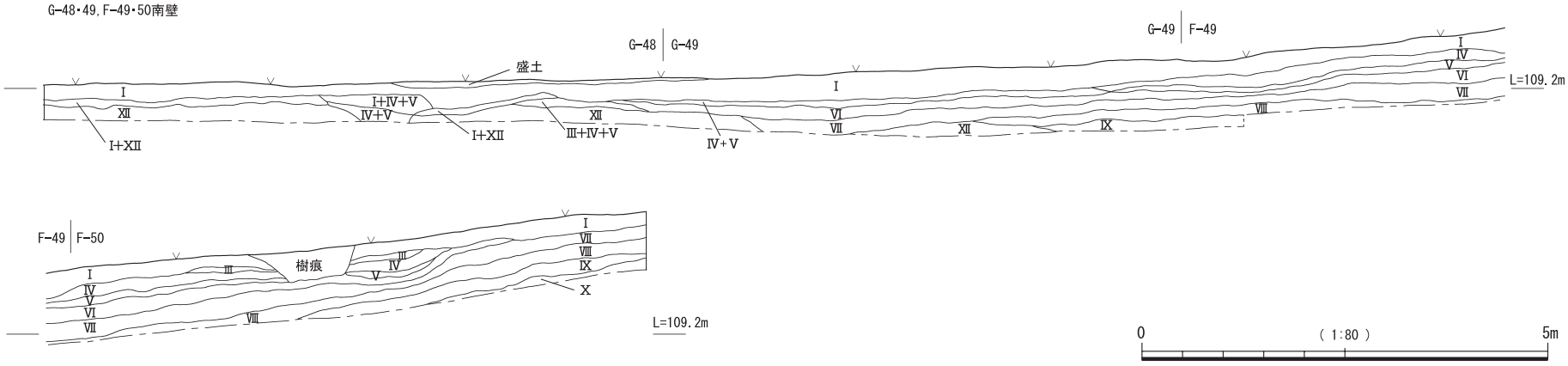


土層位置図





第 62 図　土層断面図（2）


G-48・49, F-49・50南壁
G-48
G-49
F-49
盛土
I
XII
I+XII
I+IV+V
IV+V
III+IV+V
IV+V
VI
VII
IX
VIII
L=109.2m
F-50
樹痕
III
IV
V
X
0
(1:80)
5m

第 63 図　土層断面図 (3)

2 調査の成果

(1) 調査の概要

確認調査の結果，Ⅱｂ・Ⅲ層と，Ⅴ層（アカホヤ火山灰）とⅧ層（薩摩火山灰　P14:桜島起源）に挟まれたⅥ・Ⅶ層において包含層が確認された。

本調査では，Ⅰ層は旧耕作土のため重機により掘削し，Ⅱ・Ⅲ層は人力で掘り下げ，Ⅲ層（御池火山灰に相当）～Ⅴ層（アカホヤ火山灰に相当）を重機により掘削したのち，包含層であるⅥ層・Ⅶ層を人力で掘り下げた。

その結果，出土した遺物により，Ⅱ・Ⅲ層は弥生時代～縄文晩期・後期，Ⅵ・Ⅶ層は早期の包含層とした。

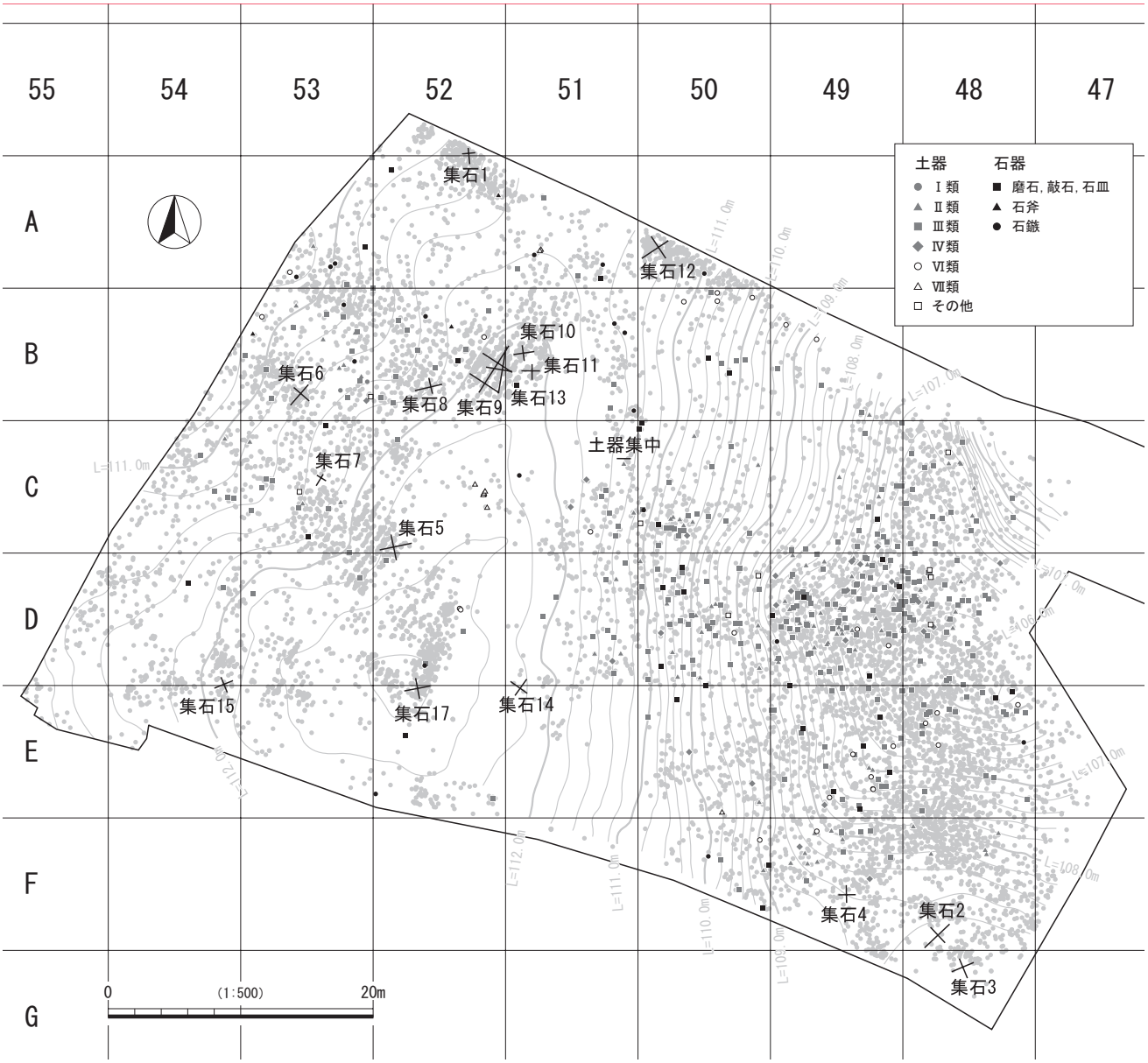
出土遺物は，トランシットで取り上げた。遺構は，検出状況の記録写真を個々に撮影した後，各遺構の主軸にあわせてベルトを設定し，実測を行った。

各時代・時期の遺構・遺物については各項にて詳述する

(2) 調査の成果

ア 縄文時代早期

遺構・遺物とも本遺跡の中心を成す包含層である。遺構には，17基の集石がある。また，集石に伴い膨大な数の被熱破砕礫も出土した。遺物は早期前半にあたる土器が多数出土しており，これをⅠ～Ⅶ類に分類した。その他の遺物と併せて以下に記す。



第 64 図　縄文時代早期の遺構配置状況・遺物出土状況図

（ア） 遺　構

集　石

調査区２で検出された集石遺構は17基である。検出層はⅥ層・Ⅶ層上面である。検出エリアは，調査区の北西部・南東部にあたるA ～ D－50 ～ 53区に集中する傾向がみられる。検出された17基中の９基は，後年の耕作により削平されていた。

集石の形状は，礫が中心部に集中しているもの，礫が散逸し中心部が不明なもの等，多様であった。

１号（第65図）

ア・A-52区で検出された。明確な掘り込みは確認できなかった。礫は約100㎝×90㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は41点で，その内訳は，砂岩が24点，安山岩が15点，泥岩が２点であった。礫の平均の重さは58ｇで，100ｇ以下の礫の割合は90％を占める。100ｇ以下の角礫が多いが，円礫だったものが被熱破砕により，角張っているものである。炭化物が少量確認できた。

２号（第65図）

F-48区で検出された。明確な掘り込みは確認できなかった。検出面をⅥ層としているが，傾斜地であることから，堆積状況が良好ではなく，集石周辺を少し削ると二次シラス層が確認できる。しかし周辺から早期の土器も出土していることから，この時期の集石と判断した。

礫は，約210㎝×140㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は98点で，その内訳は，砂岩が67点，安山岩が22点，泥岩が９点であった。礫の平均の重さは106ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は54％を占める。

炭化物の多い箇所もあった。炭化物を自然科学分析に出した結果，推定時期は縄文時代早期であったが，測定結果は推定時期よりも新しい年代の縄文時代後期に相当するということであった。土壌がしっかりと堆積することがなかったということから，縄文時代早期の炭化物が何らかの原因で流入したと考えられる。（詳細は資料編分析結果参照）

３号（第65図）

G-48区で検出された。この地点は傾斜部のため，Ⅴ層のアカホヤを掘削すると，Ⅵ層以下の堆積は良好ではなく，非常に薄い。サツマ火山灰以下の土層もほとんど堆積しておらず，Ⅵ層～Ⅻ層までが20 ～ 30㎝ほどしかない。堆積する前に傾斜に沿って下方に流れていったものと考えられる。明確な掘り込みは確認できなかった。

礫は，約160㎝×110㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は48点で，その内訳は，砂岩28点，安山岩12点，泥岩７点，黒曜石１点であった。礫の平均の重さは93ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は52％を占める。

４号（第66図）

Ｆ-49区で検出された。礫は，約80㎝×70㎝の範囲に広がっていた。明確な掘り込みや炭化物等は確認できなかった。

構成礫数は22点で，その内訳は，砂岩が15点，安山岩が６点，泥岩が１点であった。礫の平均の重さは136ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は50％を占める。角礫が多いが，円礫だったものが被熱破砕により，角張ったものと考えられる。

５号（第66図）

C-52区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。明確な掘り込みは確認できなかった。

礫は，約250㎝×140㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は128点で，その内訳は安山岩が56点，砂岩が66点，泥岩が６点であった。礫の平均の重さは130ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は46％を占める。被熱により，少し黒変している礫が６点，黒変している礫が１点，石器の可能性のある礫が１点あった。被熱によりひびや割れの礫が目立つ。２点ほど,煤の付着している礫もあった。

６号（第67図）

B-53区で検出された。明確な掘り込みは確認できなかった。礫は，約180㎝×120㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は51点で，その内訳は砂岩が33点，安山岩が18点であった。礫の重さの平均は96ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は54％を占める。被熱により黒変している礫が８点あったが，煤が付着したものは確認できなかった。遺構内から土器片が１点出土した。

７号（第67図）

C-53区で検出された。明確な掘り込みはなかったが，直径が１㎜～２㎜の炭化物がわずかに見られた。礫は，約60㎝×40㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は12点で，その内訳は安山岩が７点，砂岩が３点，泥岩が２点であった。ほとんどが円礫であり，石器からの転用品と考えられるものも１点あった。煤が付着しているものが１点，白化しているものが２点確認できた。礫の重さの平均は251ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は50％を占める。

８号（第67図）

B-52区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平されていた。明確な掘り込みは確認できなかった。

礫は，約120㎝×100㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は45点で，その内訳は安山岩が20点，砂岩が23点，泥岩が２点であった。礫の重さの平均は113ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は55％を占める。被熱により少し黒変している礫が３点確認できた。

９号（第68図）

B-52区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。明確な掘り込みは確認できなかった。

礫は，約390㎝×260㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は190点で，その内訳は砂岩が106点，安山岩が79点，泥岩が５点であった。土器片も1点あった。礫の平均の重さは93ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は65％を占める。被熱破砕のために，角張っているものが多い。

10号（第69図）

B-51区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。明確な掘り込みは確認できなかった。礫は，約100㎝×80㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は44点で，その内訳は安山岩18点，砂岩25点であった。黒曜石も１点あった。礫の平均の重さは119ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は53％を占める。

11号（第69図）

B-51区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。明確な掘り込みは確認できなかった。礫は約100㎝×80㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は27点で，その内訳は砂岩が20点，安山岩が５点，泥岩が２点であった。礫の中には石器らしきものが１点含まれていた。礫の平均の重さは112ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は40％を占める。

12号（第69図）

A-50区で検出された。礫は約170㎝×140㎝の範囲に広がっており，掘り込みも確認できた。構成礫数は191点で，その内訳は砂岩が104点，安山岩が71点，泥岩が16点であった。礫の平均の重さは87ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は67％を占める。

13号（第70図）

B-52区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。明確な掘り込みは確認できなかった。礫は約290㎝×160㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は59点で，その内訳は砂岩31点，安山岩25点，泥岩３点であった。礫の平均の重さは72ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は76％を占める。

14号（第70図）

D・E-51区で検出された。掘り込みも確認できた。礫は，約130㎝×120㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は251点で，その内訳は，砂岩152点，安山岩80点，泥岩19点であった。礫の平均の重さは121ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は49％であった。

15号（第71図）

D・E-54区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。礫は，約120㎝×100㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は70点で，その内訳は，砂岩46点，安山岩20点，泥岩４点であった。礫の平均の重さは43ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は92％を占める。

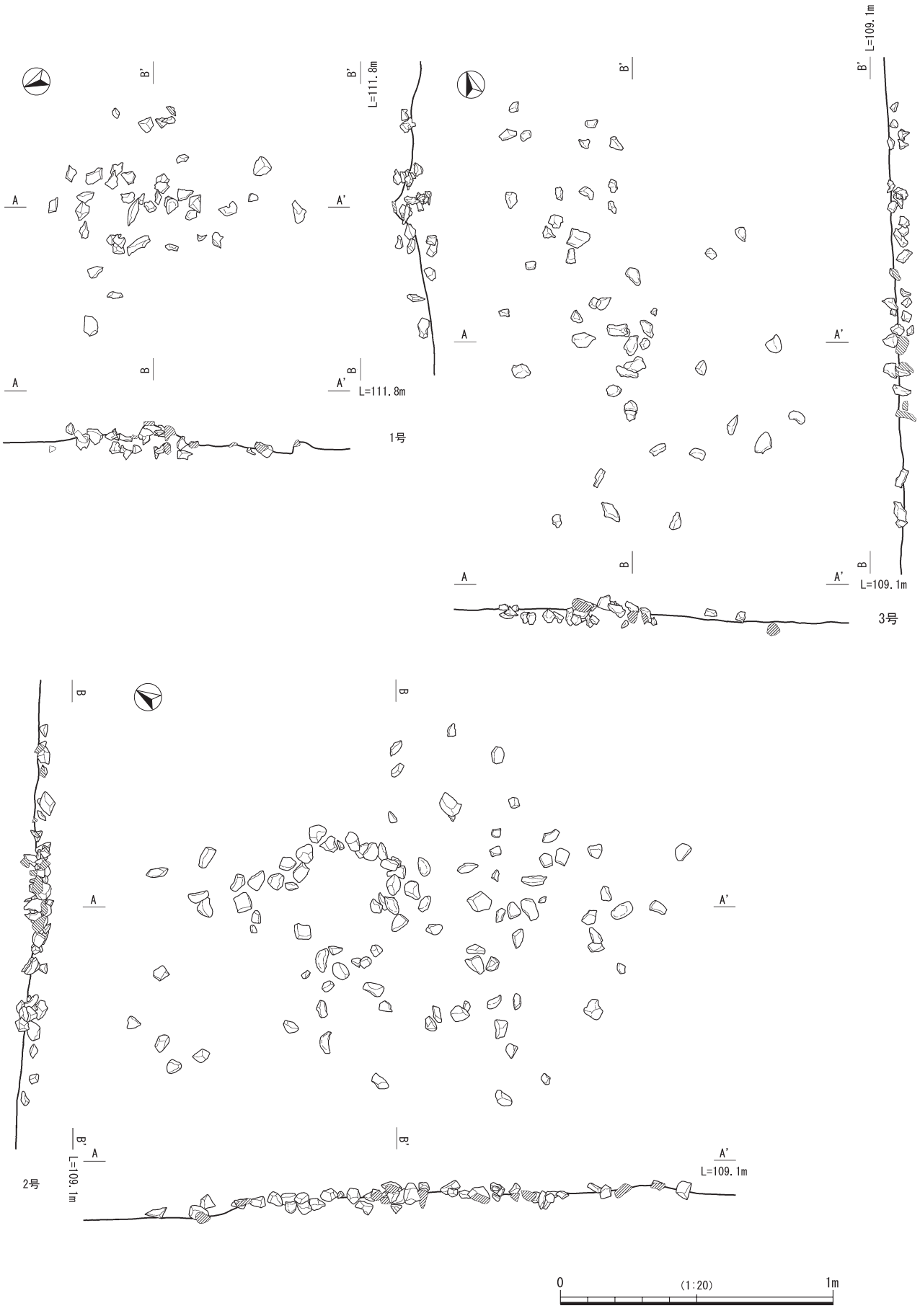
16号（第71図）

B-51区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。礫は，約70㎝×30㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は23点で，その内訳は，砂岩18点，安山岩５点であった。礫の平均の重さは112ｇであり，100ｇ以下の礫の割合は，56％を占める。（実測ポイントが未記録のため第64図には不掲載）

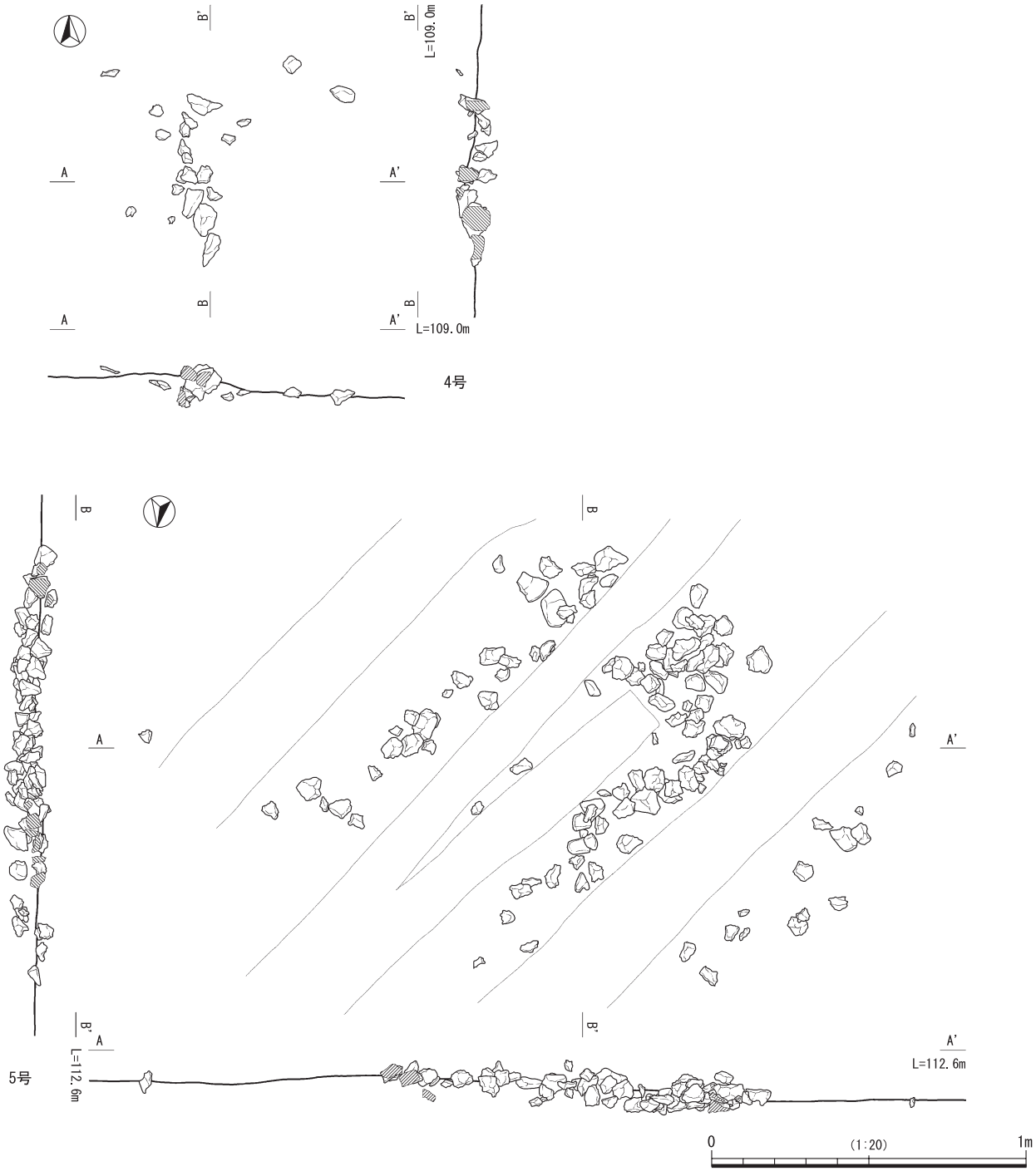
17号（第71図）

D・E－52区で検出された。畑作のトレンチャーにより削平を受けていた。掘り込みを確認できた。掘り込み内に入っていた埋土には，黒褐色土に直径２㎜～３㎜の炭化物が混ざっていた。掘り込みの推定ラインは約95㎝×80㎝であった。

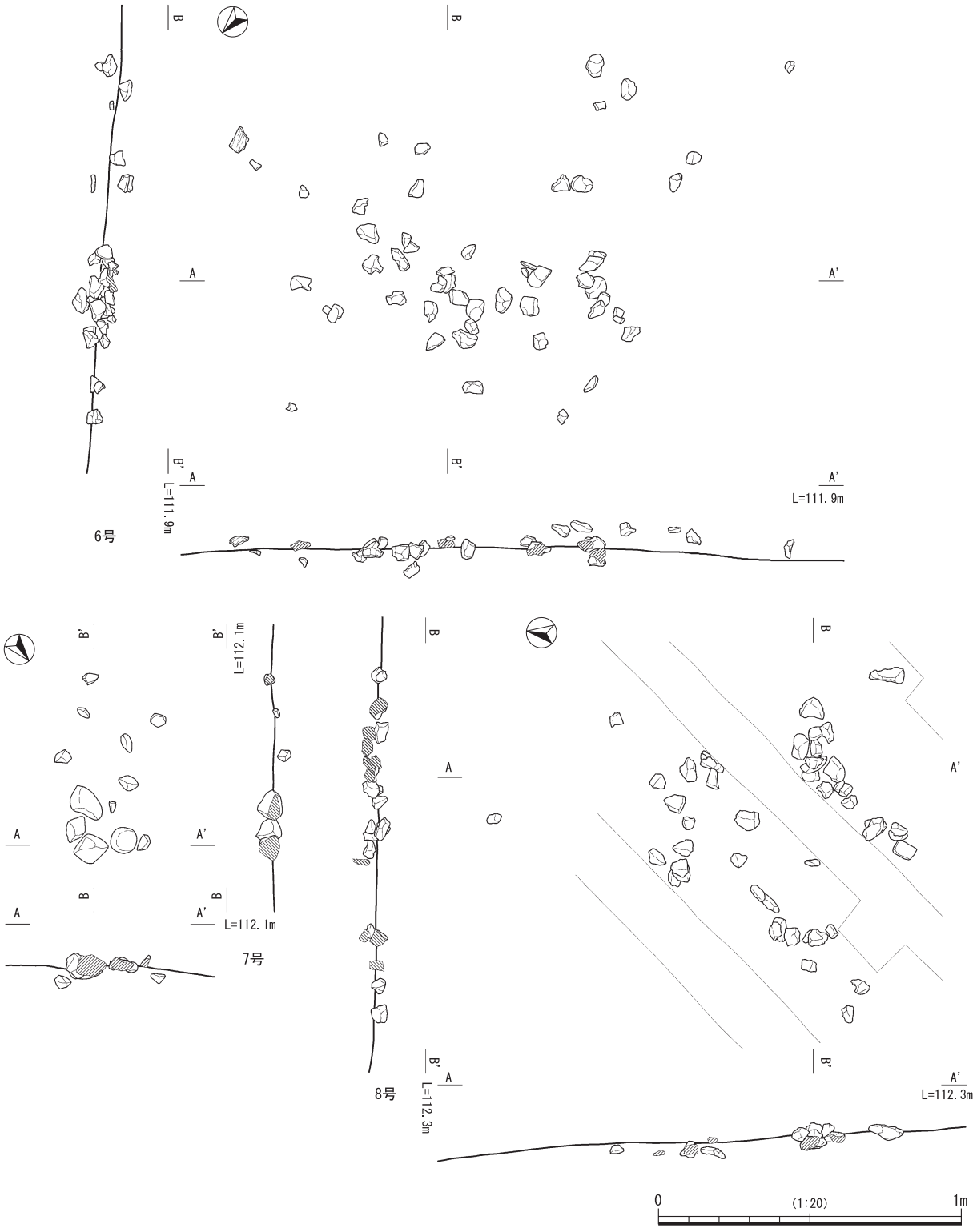
検出面より数㎝上から小礫が検出し始め，それらの礫を外してからの検出となった。礫は，約165㎝×100㎝の範囲に広がっていた。構成礫数は143点で，その内訳は，砂岩87点，安山岩34点，泥岩21点，花崗岩１点であった。礫の平均の重さは59ｇであった。礫は全体的に熱で破砕した為か，小片が多い。100ｇ以下の礫の割合は89％を占める。また，直径２㎜～３㎜の炭化物が全体的に混ざっていた。



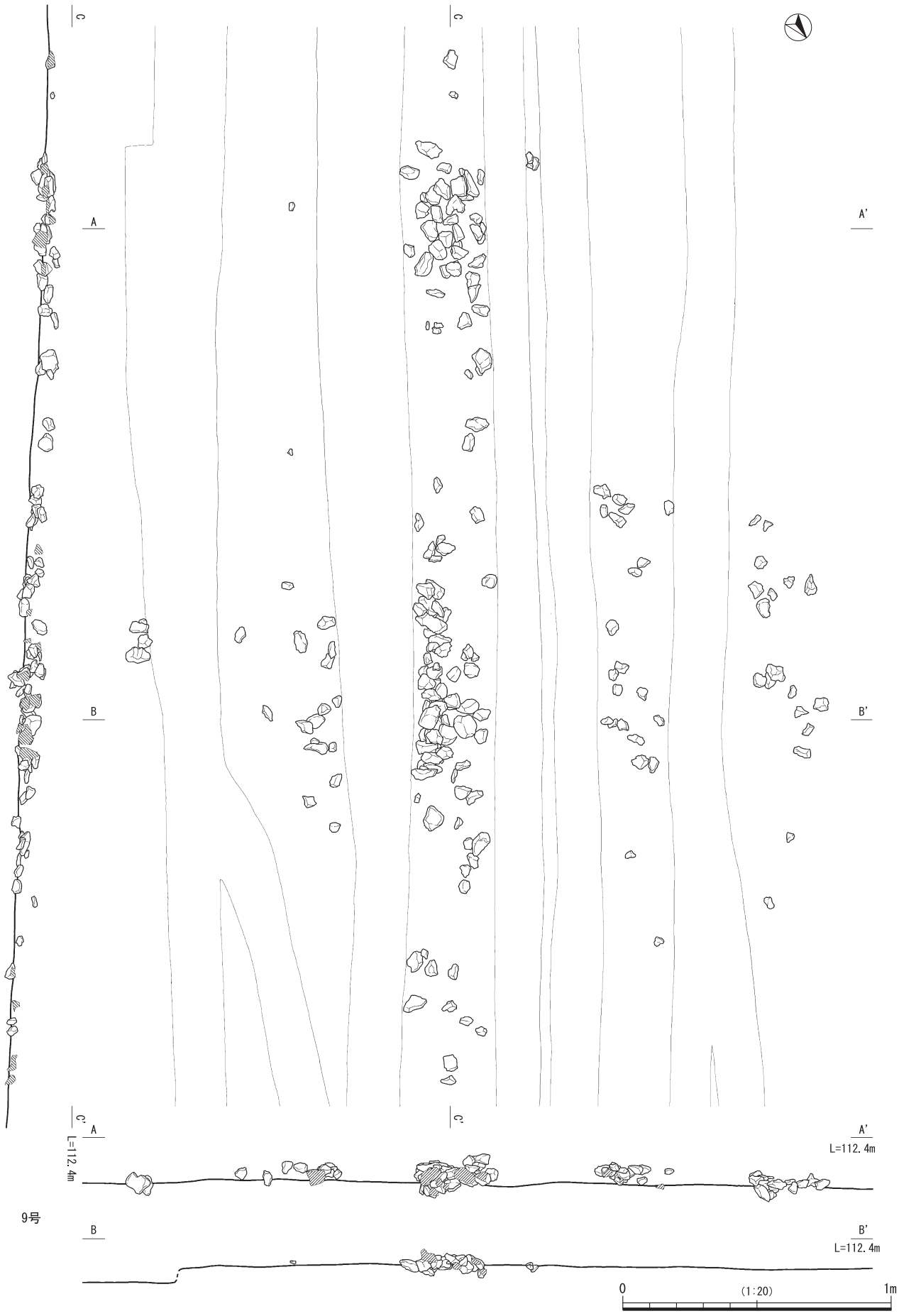
第 65 図　縄文時代早期集石 (1)



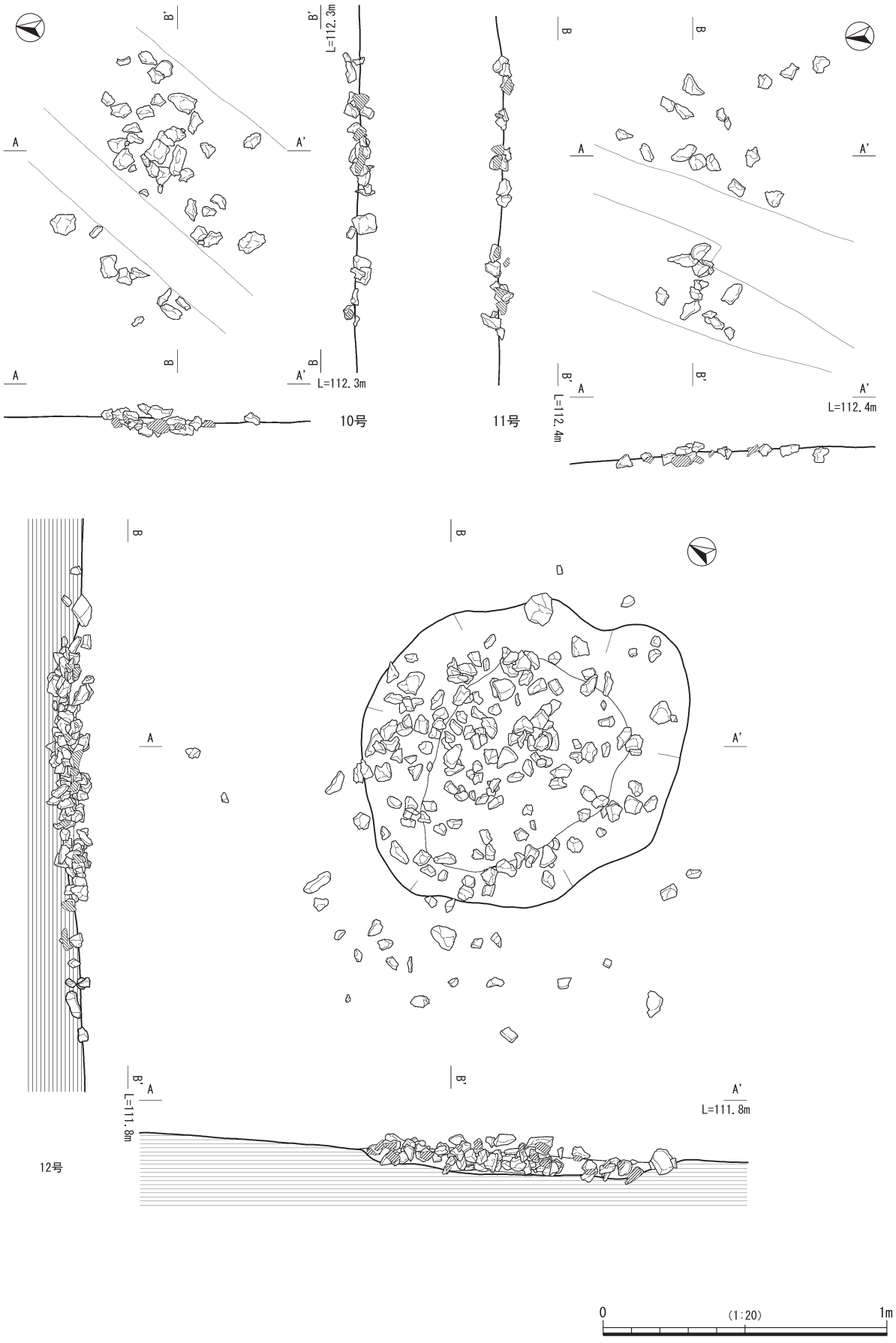
第 66 図　縄文時代早期集石 (2)



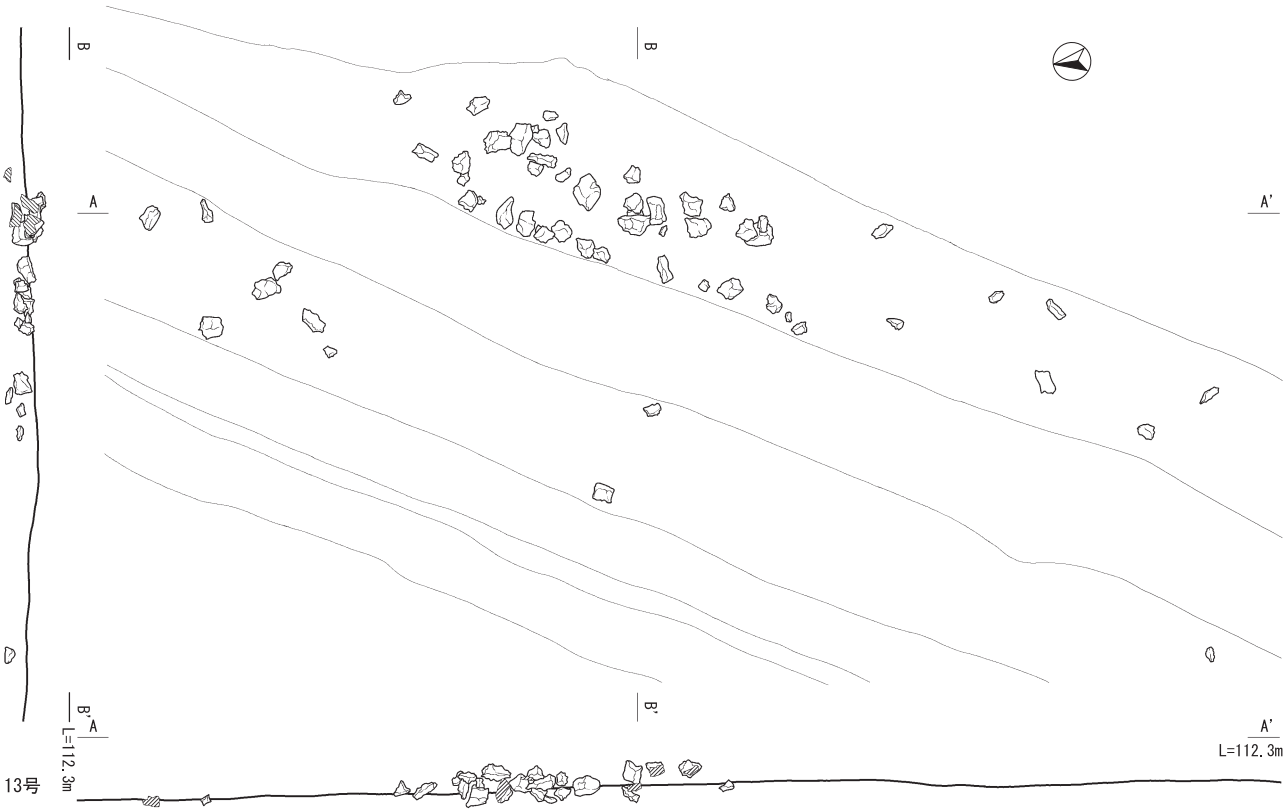
第 67 図　縄文時代早期集石 (3)

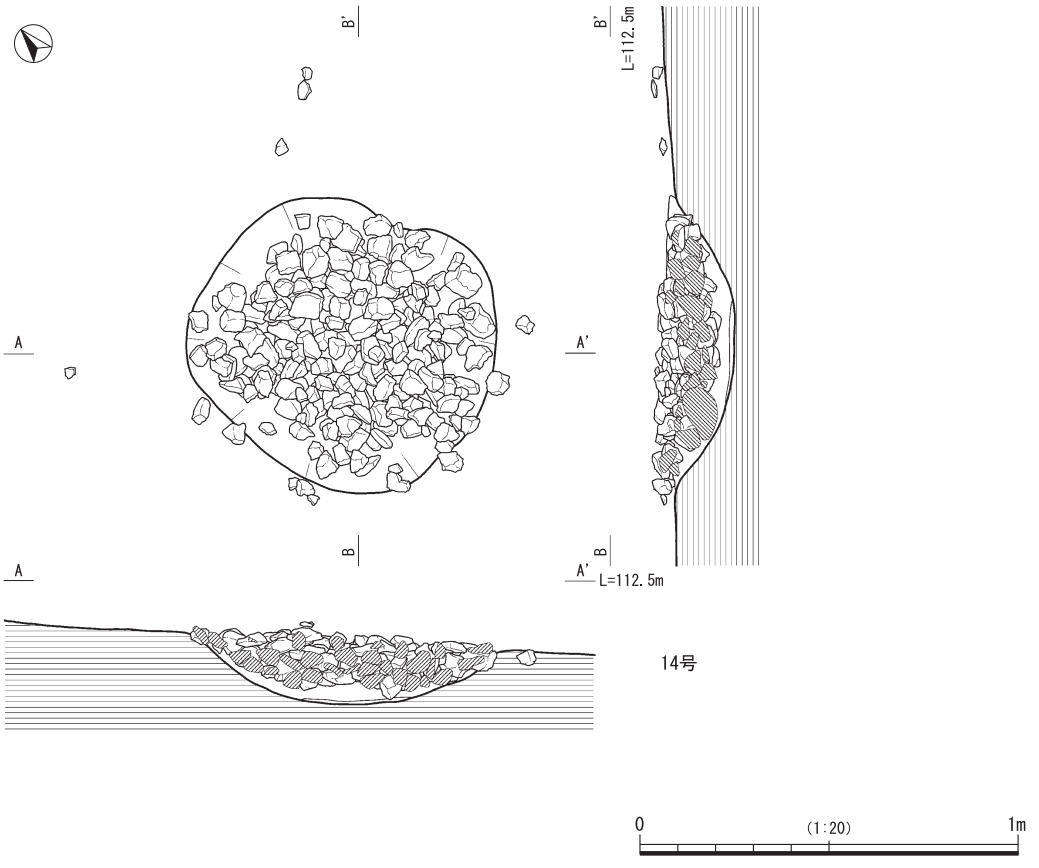


第 68 図　縄文時代早期集石 (4)

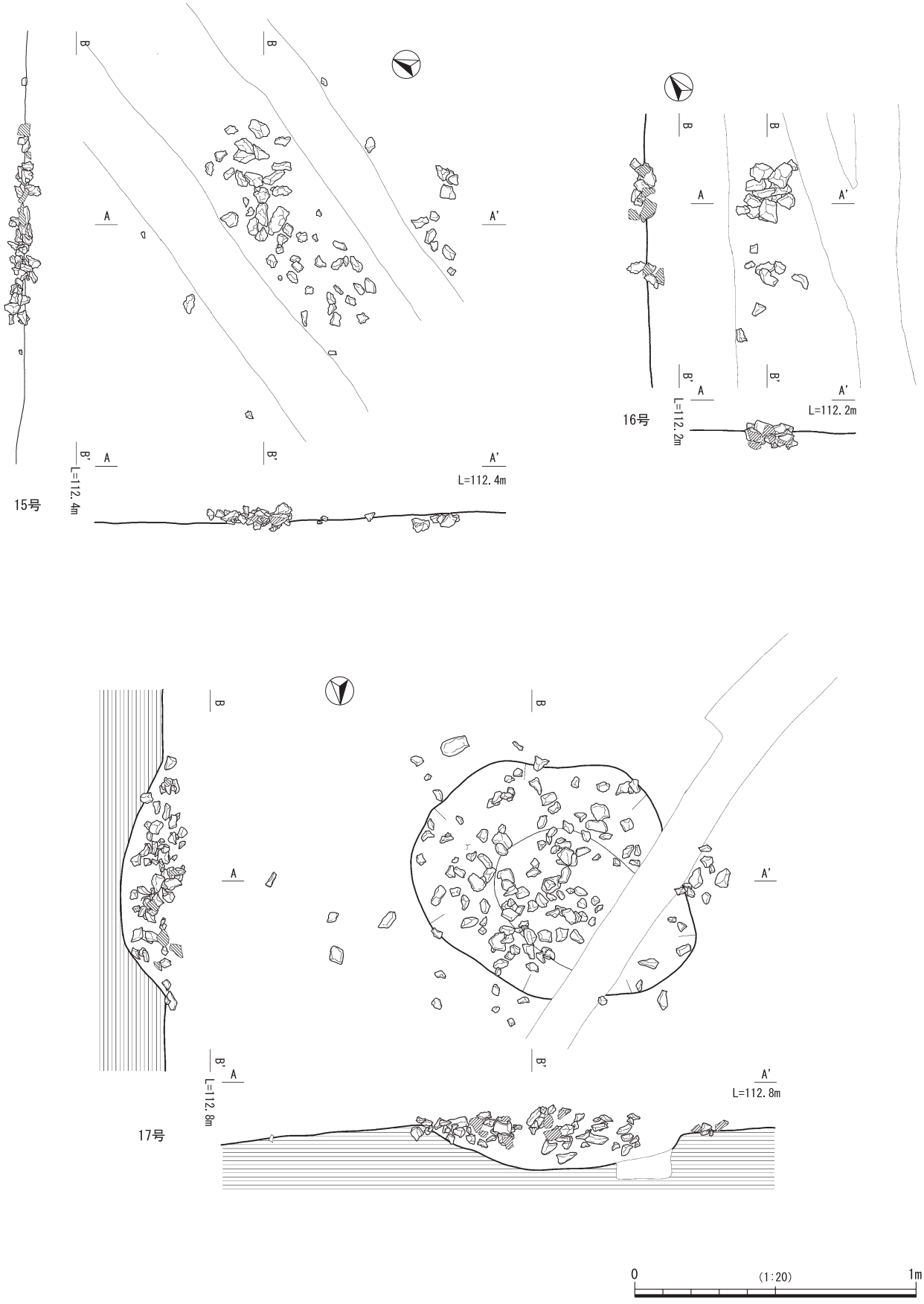


第 69 図　縄文時代早期集石 (5)





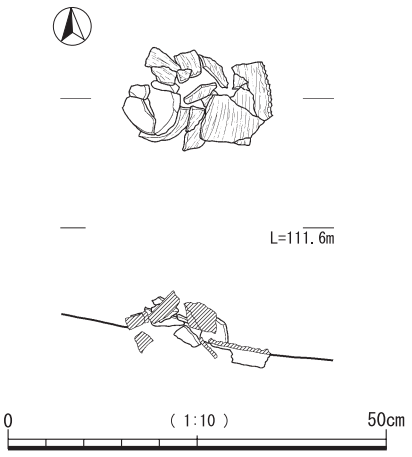
第 70 図　縄文時代早期集石 (6)



第 71 図　縄文時代早期集石 (7)

土器集中（第72・73図　1）

C-51区，Ⅶ層で個体が破砕した状態で口縁部と胴部，底部が出土した。復元により，1は口径15.4cm，器高18.1cm，底径8.8cmを測る。口唇部は刻みを施す。外反する口縁部には，貝殻腹縁部による刺突文を巡らす。口縁部から底部にかけて貝殻腹縁部による条痕文を施す。底部は胴部の厚さと比較するとやや厚い。



第 72 図　土器集中遺物出土状況図



第 73 図　土器集中出土遺物

表 15　縄文時代早期遺構内遺物観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
									外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
73	1	1-4 1-5 1-9 1-1 1-2 1-6 1-8 1-10 1-11	C-51	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－⑩	口縁部～底部	刻み，貝殻腹縁部刺突 押引，条痕 貝殻条痕文	ミガキ	ナデ	○			砂粒多	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2

（イ） 遺　物

土　器

Ⅰ類（第74図　２）

口唇部は丸みを帯び，胴部から口縁部は，ほぼ直線的に立ち上がる器形である。２は，口唇部に貝殻腹縁部による刺突文を施し，口縁部には貝殻腹縁部による貝殻条痕文を斜位に施す。胴部には貝殻条痕文を施している。

Ⅱ－１類（第74図　３～15）

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部がやや外反する器形である。口縁部に楔状の突帯が施され，胴部には押引文が施文される。

３～７は，口縁部である。口唇部にやや幅の広い刻みを施す。口縁部には，貝殻腹縁部による刺突が１段巡っている。その下には，貝殻腹縁部によるやや深い刺突文が１段巡る。更にその下部には貝殻腹縁部による楔形突帯を縦位に施す。４，５，７の胴部には，貝殻腹縁部による押引を横位に施す。口縁部は緩やかに外反する。

５は口縁部は緩やかに外反する。口唇部には，やや浅い刻みを施す。口縁部は，貝殻腹縁部による横位の刺突文を１条巡らせ，その下には，貝殻腹縁部による楔形突帯を縦位に施す。胴部は，押引と貝殻条痕文を施す。

６は，口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が１条巡らされている。その下には貼付の楔が縦位に施され，楔間にも貝殻腹縁部による縦位の刺突文が施されている。口縁部は，ほぼ垂直的に立ち上がる。胴部は摩耗が激しく施文や調整は不鮮明である。楔の部分に縦長の穿孔が施されている。

８～11は胴部である。貝殻腹縁部による横位の押引文を施してある。

12～15は胴部下半から底部にあたる。貝殻腹縁部による横位の押引文を施してある。15は底部立ち上がり部分に縦位の刻みが施されている。

Ⅱ－２類（第75図　16～27）

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部がやや外反する器形である。Ⅱ－１類と異なり，口縁部の楔状の突帯がなく，胴部には押引文と条痕文が混在して施文される。16は口唇部には刻みはなく，胴部から底部にかけては，貝殻腹縁部による押引や貝殻条痕文を施している。17は口唇部に刻みが施され，口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が３段巡りその下には押引文と条痕文が施文されている。18の口唇部は，不規則な間隔の刻みを施す。口縁部は貝殻腹縁部による横位の押引を施す。19～23は胴部から底部にあたる。押引文と条痕文による施文がなされ，底部立ち上がり部分には刻みが施されている。

24，25口唇部は丁寧に面取りされ，口縁上部には貝殻腹縁部による刺突文を１段巡らせ，その下に斜位の刺突文を施す。この刺突文の上下端部に半裁状の施文具で押引文を横位に巡らせ，胴部上部には浅い押引文がみとめられる。26，27は刺突文の下端部に半裁状の施文具で押引文を横位に巡らせ，胴部上部には浅い押引文がみとめられる。

Ⅲ類

口唇部に刻みが施され，口縁部以下に横位の貝殻条痕文が施文される土器群である。

Ⅲ－１類（第76～78図　28～69）

28，29は胎土，焼成から同一個体と考えられる。口唇部は深い刻みを施し，器面全体に横位の貝殻条痕文を施文後に，口縁部に楔を意識した刺突文を縦位に２段巡らせる。この刺突文は上を深く，下を浅くする傾向がみとめられる。30は口縁部に貝殻腹縁部による横位の刺突文が1段巡りその下部に斜位の刺突文が施文されている。31は口縁部である。口唇部に刻みが施され，口縁部には貝殻腹縁部による貝殻条痕文が横位に施されている。32は口縁部下部と胴部である。刻みと横位の条痕文による施文がなされている。

33～46は胴部である。33～40，42は横位の条痕文，41，43～46は斜位の条痕文が施文されている。

47～69は胴部から底部にあたる。斜位もしくは横位の貝殻条痕文が施されている。

Ⅲ－２類（第78・79図　70～83）

口唇部に刻みを施し，口縁部には貝殻腹縁部による横位の刺突文を１段もしくは数段巡らせ，その下に貝殻腹縁部による刺突文を縦位に巡らせる文様の土器群である。

70，71は，口唇部に刻み，口縁部に貝殻腹縁部による横位の刺突文を間隔を空けて３段巡らせ，その区画内に貝殻腹縁部による刺突文を縦位に１段巡らせている。71は，円形の穿孔で，外面からも内面からも穿孔を施しているが，外面からの方がやや大きい。口縁部は緩やかに外反する。72は口唇部に刻み，口縁部に貝殻腹縁部による刺突文が施文されている。

73～77は，口縁上部に貝殻腹縁部による横位の刺突文を２段ないし1段巡らせ，その下に貝殻腹縁部による刺突文を縦位に巡らせている。

78～82は，口唇部に刻みを施す。口縁部上部には貝殻腹縁部による横位の刺突文は無く，貝殻腹縁部による刺突文が縦位に施されている。78は下部には貝殻腹縁部による横位の刺突文を巡らせ，胴部は貝殻条痕文が横位に施される。

83は口唇部に刻み，口縁部に貝殻腹縁部による幅の狭い刺突文が縦位に２段巡り，胴部は貝殻条痕文がやや斜位に施される。

Ⅲ- ３類（第79図　84 ～ 90）

口唇部に刻みを施し，口縁部には貝殻腹縁部による押引文を縦位に施す。胴部は貝殻条痕文を横位に巡らせている土器群である。

84は口縁部は貝殻腹縁部による横位の刺突文は無く，貝ナデ調整後に貝殻腹縁部による縦位の押引文が２条巡らされている。口縁部上部に穿孔が２か所みとめられる。85は口縁部から底部に至る。口縁部に斜位と縦位の貝殻腹縁部による押引文を１条ずつ巡らせている。86 ～ 90は口唇部に刻み，口縁部に縦位の貝殻腹縁部による縦位の押引文，胴部には条痕文が施文されている。

Ⅲ- ４類（第80図　91 ～ 95）

口縁部に貝殻腹縁部による羽状の刺突文を横位に巡らせる文様の土器群である。

91 ～ 95は口縁部である。91は，羽状の刺突の上部に，貝殻腹縁部を横位に一段の刺突文を施し，胴部上部には斜位の貝殻腹縁部による刺突文と貝殻条痕文がみとめられる。また，外側と内側からの穿孔が見られるが，外側からの穿孔の方が内側からのそれよりも大きい。92の口縁部は，比較的細かい刺突文で，その下部は貝殻条痕文を施す。93は口縁部に斜位の貝殻腹縁部による刺突文と沈線が施文されている。94は貝殻腹縁部による横位の刺突文が１段巡り，その下に貝殻腹縁部による刺突文が羽状に施文されている。95は，口唇部に刻みを施す。口縁部は，貝殻腹縁部による横位の押引を１条巡らせ，その下部は同じく貝殻腹縁部による斜位の押引を施す。口縁部は外反する。

Ⅲ- ５類（第80図　96 ～ 101）

口唇部が丁寧に面取りされ，刻みが施されるものもある。器面全体に条痕文による調整がなされ，口縁部に貝殻腹縁部による横位の刺突文が３条巡らされている土器群である。

96は口縁部から底部，97 ～ 99は口縁部から胴部，100，101は口縁部である。胴部は摩耗により文様が不鮮明な部分がある。口唇部に刻みが，口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が３段施文されている。胴部には横位の条痕文が施文されている。

Ⅲ- ６類（第80図　102 ～ 105）

口縁部に横位の貝殻腹縁部による刺突文を１ないし２条巡らせ，その下に縦位の刺突文を巡らせる土器群である。

102 ～ 105は口縁部である。102は外面からの穿孔がみとめられる。胴部には斜位の貝殻条痕文が施文されている。

Ⅲ- ７類（第81図　106 ～ 116）

口縁部に横位の貝殻腹縁部による刺突文を数条巡らせ，胴部に条痕文と押引文の文様が混在する土器群でいる。口縁部は緩やかに外反している。

106は口縁部から底部である。106の口唇部は丁寧に面取りしている。胴部から底部にかけては，貝殻腹縁部による押引や貝殻条痕文を施す。107は，口唇部に刻みを施す。口縁部には，貝殻腹縁部による横位の刺突文を４条巡らせる。その下部には，深い貝殻条痕文を全体的に施し，部分的に押引文を施している。108は，貝殻腹縁部による流水文または，貝殻条痕文を施した後，口縁部上部から貝殻腹縁部を横位に刺突し，少し押引いたような文様を４段巡らせている。その下部は，貝殻腹縁部による流水文もしくは貝殻条痕文が施されている。口縁部は緩やかに外反する。109，110は口縁部に横位の刺突文を３段巡らせている。

111 ～ 116は胴部立ち上がり部分から底部にあたる。横位もしくは斜位の条痕文に底部立ち上がり部分には縦位の刻みを施している。

Ⅲ- ８類（第81図　117 ～ 120）

117は口唇部は丁寧に面取りし，口縁部に貝殻腹縁部による横位の刺突文を３段巡らせる。胴部には貝殻腹縁部による押引文が施されている。118は口唇部を面取りし，口縁部は貝殻腹縁部による押引文を２段巡らせ，貝殻腹縁部による刺突文を斜位に施している。

119，120は口唇部に刻みを施し，貝殻腹縁部による条痕文を施した後，１段目に貝殻腹縁部による横位の刺突文を１段巡らせる。次に，２段目に貝殻腹縁部による縦位の刺突文を１段巡らせる。その下部に１段目と同じ文様を施し，またその下部に，２段目と同じ文様を施している。口縁部は外反する。

Ⅲ- ９類（第82図　121 ～ 128）

口縁部に竹管状の施文具による文様を有する土器群である。

121は口唇部に刺突文を施している。器面を貝殻条痕文で施文した後，口縁部には竹管状の施文具の先端部を右方向から刺突している。胴部の条痕文はやや右下に下がっている。122，123は，口唇部に浅い刻みが施され，ナデ調整がなされた口縁部には貝殻腹縁部による刺突文を横位に巡らせ，その下部に半裁した施文具より刺突文を巡らせている。124，125は口唇部の刻みが深く施文され，条痕文が残る口縁部に半裁した施文具による刺突文が２段施されている。126は口唇部に浅い刻みが施され，ナデ調整された口縁部には半裁した施文具による刺突文が２段施文されている。胴部には条痕文が残る。127は貝殻腹縁部による刺突文の間に半裁した施文具による刺突文が施文されている。128は胴部である。条痕文の上

から半裁した施文具による刺突文が２段施されている。

Ⅲ-10類（第82図　129 ～ 136）

口縁部に貝殻腹縁部による横位の刺突文を２・３段巡らせる土器群である。129 ～ 136は口縁部である。129，130は貝殻腹縁部による刺突文の下部に口縁部直下に縦位の押引文が施される。131，132は貝殻腹縁部による刺突文の下部に微細な押引文がみとめられる。

Ⅲ-11類（第82・83図　137 ～ 143）

口縁部に貝殻腹縁部による鋸歯状の刺突文を施文する土器群である。

137は口縁部から胴部，138は口縁部，139は胴部である。137，138の口唇部は刻みを施す。口縁部は，鋸歯状に貝殻腹縁部による刺突文を施した後，これをはさんで上に1条，下に２条横位の貝殻腹縁部による刺突文を巡らせている。胴部は貝殻条痕文を施す。139も同じ文様が施される。

140は，口唇部に浅い刻みを施す。口縁部は貝殻腹縁部を横位に押引し，２条巡らせているその下部には，貝殻腹縁部を斜位に押引したような文様がみとめられる。141の口縁部は，貝殻腹縁部による横位の刺突文を１条巡らせる。その下部には楔を意識したV字状の貝殻腹縁部による刺突文を１条巡らせている。142，143は同一個体と考えらる。口唇部に刻みを施し，口縁部は沈線を巡らし，半裁状の施文具で刺突文している。

Ⅳ類（第83図　144 ～ 152）

胴部に沈線と刺突文の組み合わせによる施文がなされる土器群である。

144は，口縁部から底部である。口唇部はごく僅かしか残っていないが，刻みらしきものも窺える。口縁部は，貝殻腹縁部による刺突文を２条巡らせ，その下に，貝殻腹縁部による刺突文をやや間隔をとりながら縦位に施している。胴部から底部にかけては，縦位の貝殻条痕文である。口縁部から底部に至るまでほぼ直線的に立ち上がる器形を呈する。145 ～ 150は胴部である。

145は縦位の条痕文，146は横位の貝殻腹縁部による刺突文，147，148は横位の貝殻腹縁部による刺突文の区画内に斜位の刺突文を施している。149は太めの沈線の区画内に斜位の貝殻腹縁部による刺突文を施している。150は縦位の貝殻腹縁部による刺突文に横位の細かな刺突文を下半の一部に施している。151は底部立ち上がり部分である。２種類の貝殻腹縁部による刺突文を施している。152は器面が摩耗しているが，連点状の刺突文が全体に施されている。

Ⅴ類（第84図　153）

153は口唇部が丁寧に面取りされている。口縁部から胴部上には３・４条の沈線を鋸歯状に施文している。口縁部は端部が肥厚しやや内湾している。

Ⅵ類（第84図　154 ～ 164）

器面に押型文を施文する土器群である。点数が少ないため，文様の差違による細分は行わなかった。

154，155は口縁部から胴部，154は口唇部と口縁部外面はナデ調整による無文となるが，胴部外面と口縁部内面に文様帯を有する。156，157は胴部，158は底部である。楕円形の文様が施文されている。底径約9.6㎝で，外面のみ施文されている。角閃石や輝石を多量に含み，底部の外面付近にはヘラ等によるナデが見られる。

159 ～ 161，163，164は胴部である。162は口縁部から胴部である。159は波状，160 ～ 164は山形の押型文が施文されている。

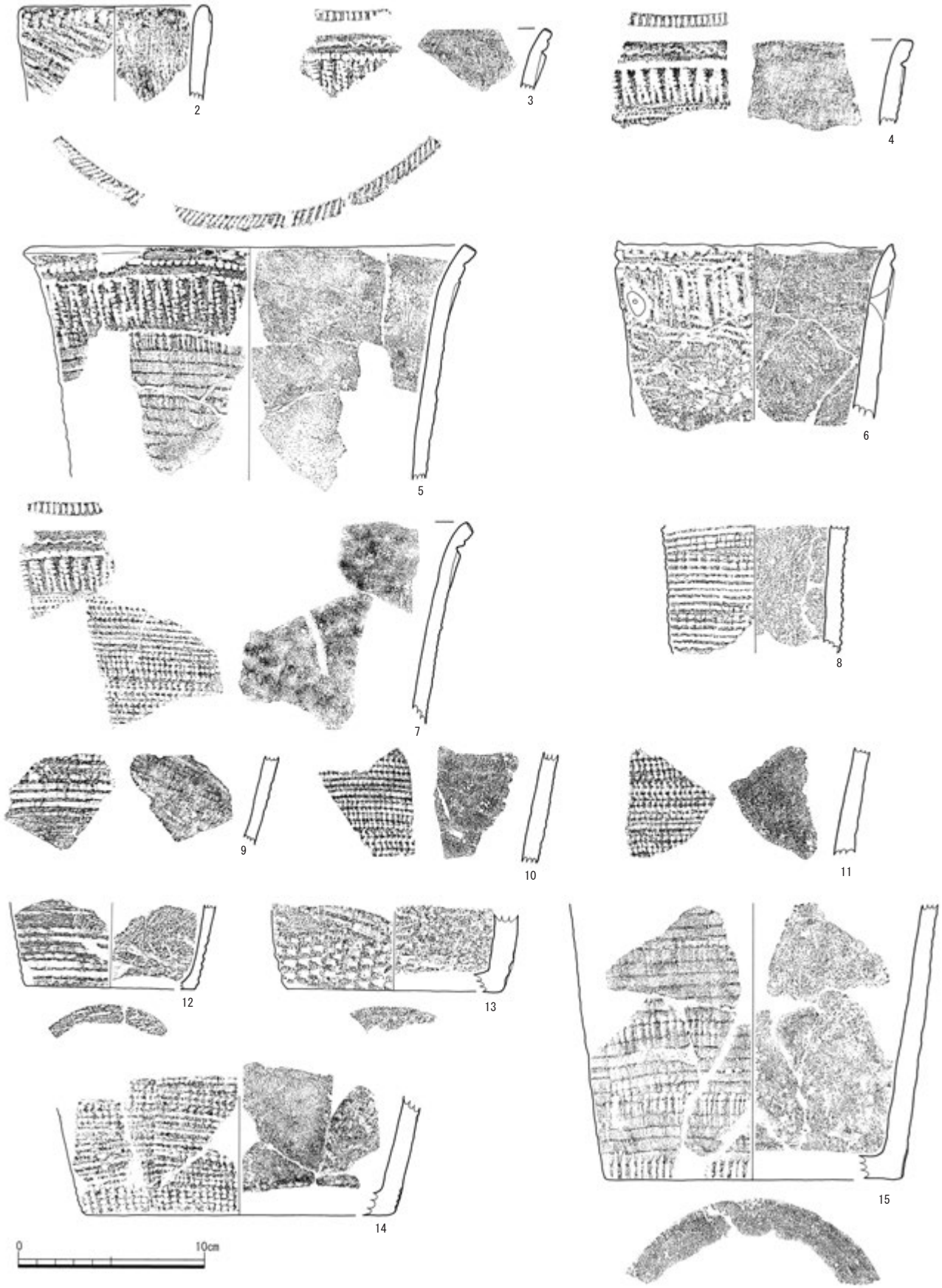
Ⅶ類（第85図　165 ～ 168）

平底の底部からやや丸みを帯びた胴部が立ち上がり，内湾した胴部から頸部の屈曲部を経て口縁部が外反する器形の土器群である。

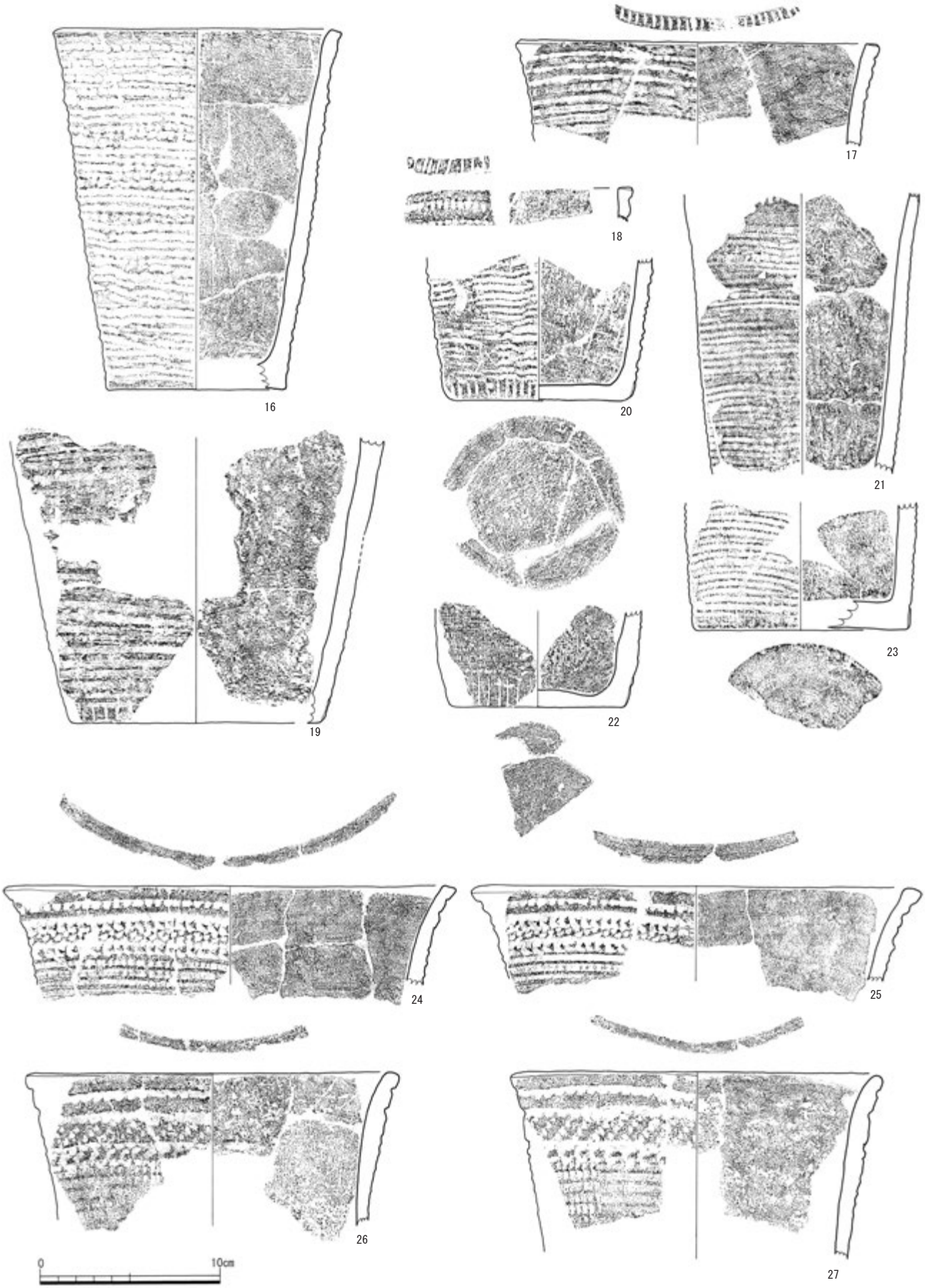
165 ～ 168は口縁部である。この４点は口縁部の形状が波状になる。165は短沈線，166は口縁部内面に頸部との明瞭な屈曲がみとめられる。ナデ調整の後，横位の沈線を巡らせている。167は口唇部に斜めの細かな刻み，口縁部には条痕文を施している。168は貝殻条痕文を地文とし，微隆起突帯を２段巡らせ，これに縦の浅い刻みを入れている。

その他の土器（第85図　169 ～ 175）

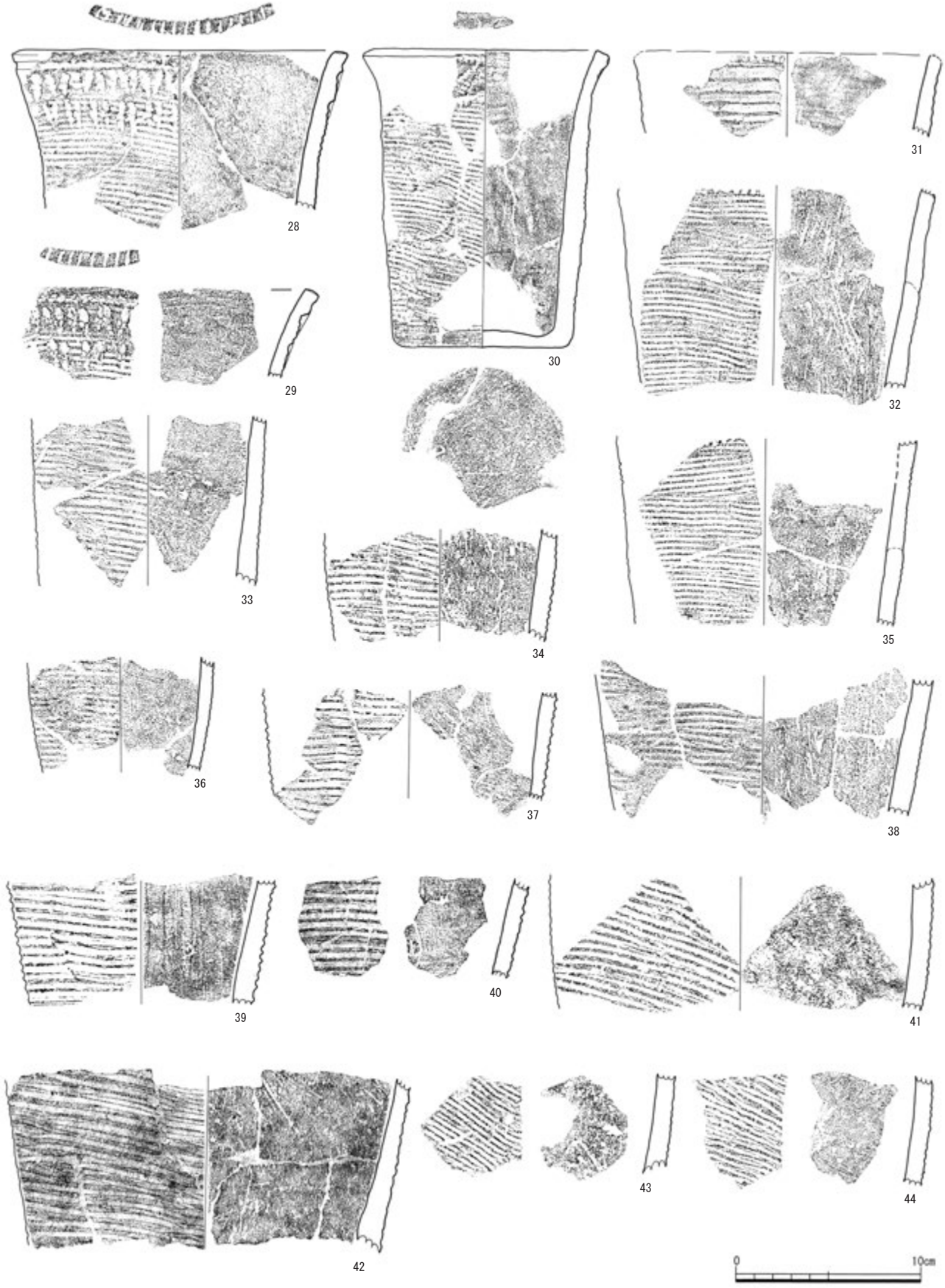
次の７点は前記の分類に相当しない土器としてまとめた。169 ～ 172は胴部である。沈線による文様がなされている。169は内面の剥落が激しい。173，174は胎土や色調などの状況から，同一個体と考えられる。173は，口唇部は無文で，やや内湾する。内面も外面も調整痕が目立つ。174は，平底で外側へ開きながら立ち上がっている。175は両面及び側面を丁寧にナデ調整がなされた外面に貝殻腹縁部による縦位の刺突文を施している。平坦に整形された粘土板か角筒形状の土器片に施文したと考えられる。



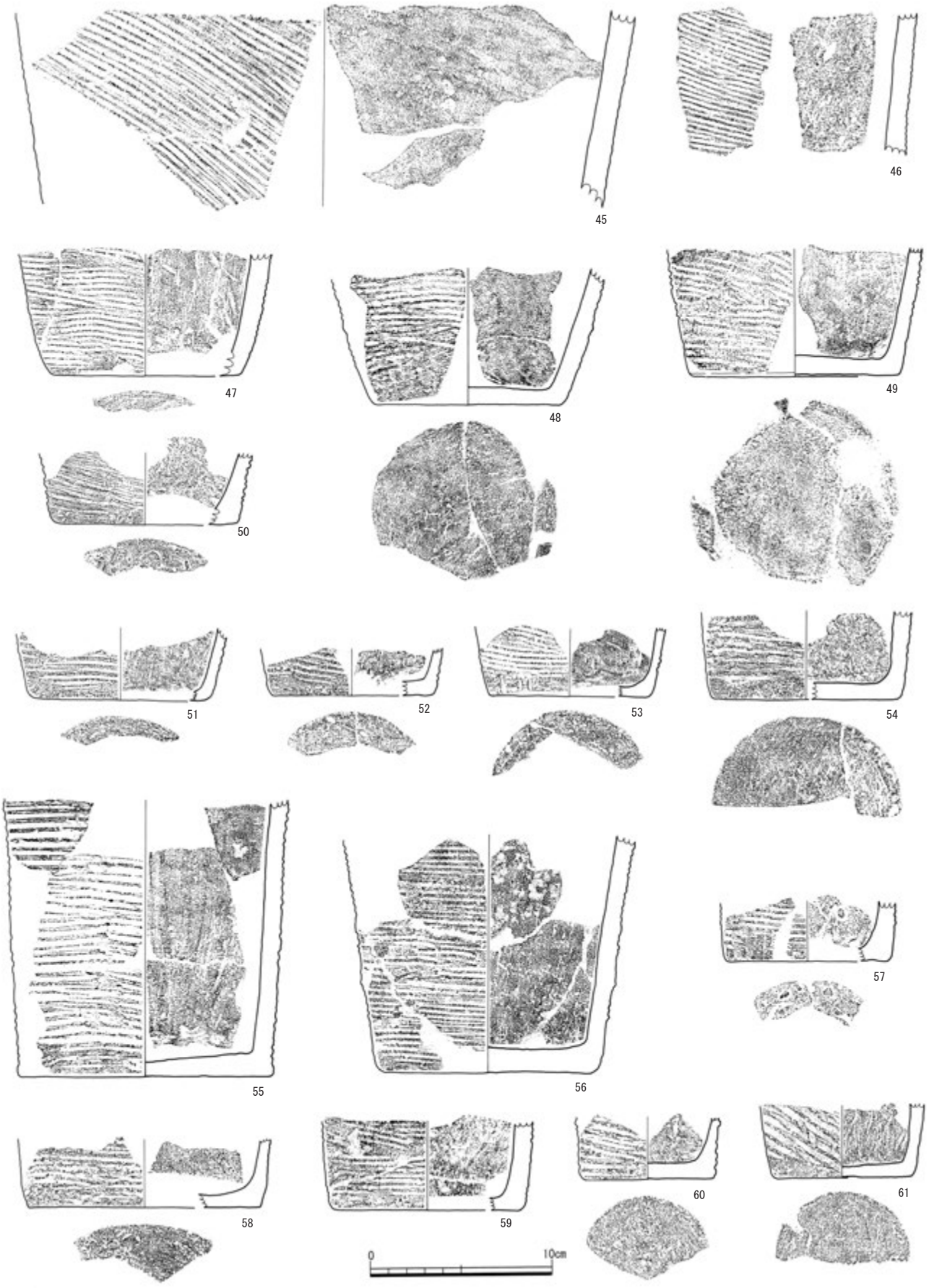
第 74 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (1)



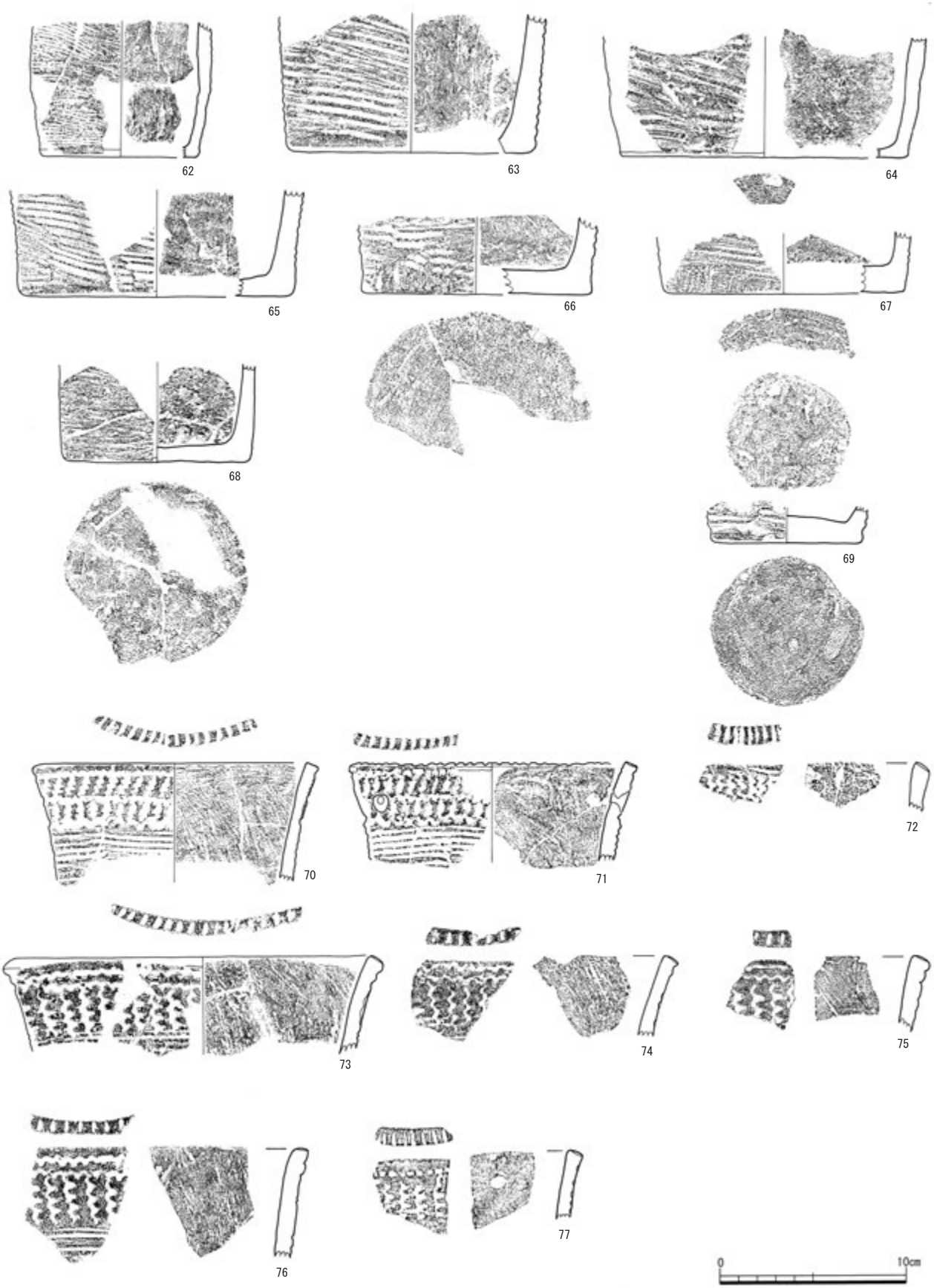
第 75 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (2)



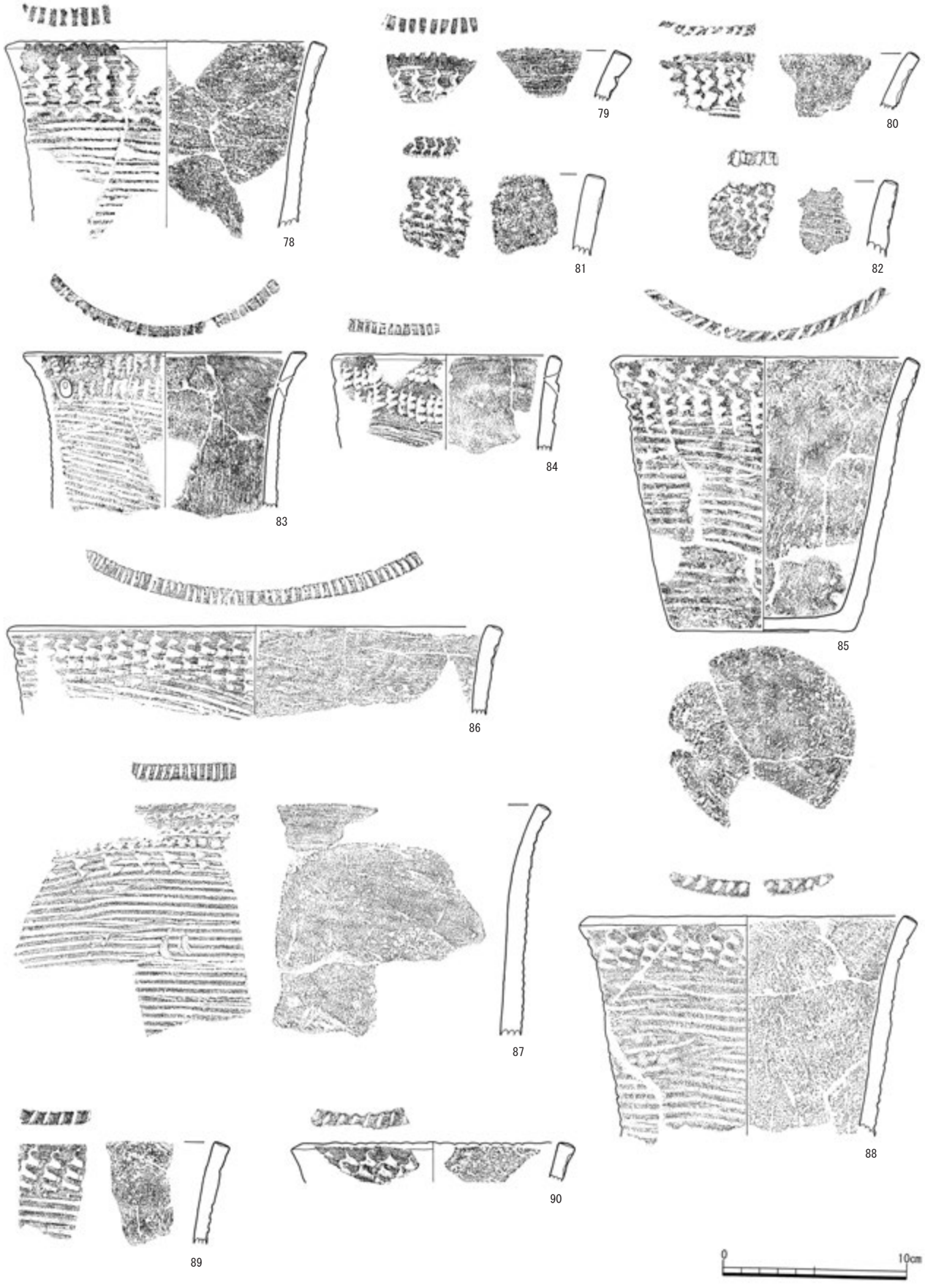
第 76 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (3)



第 77 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (4)



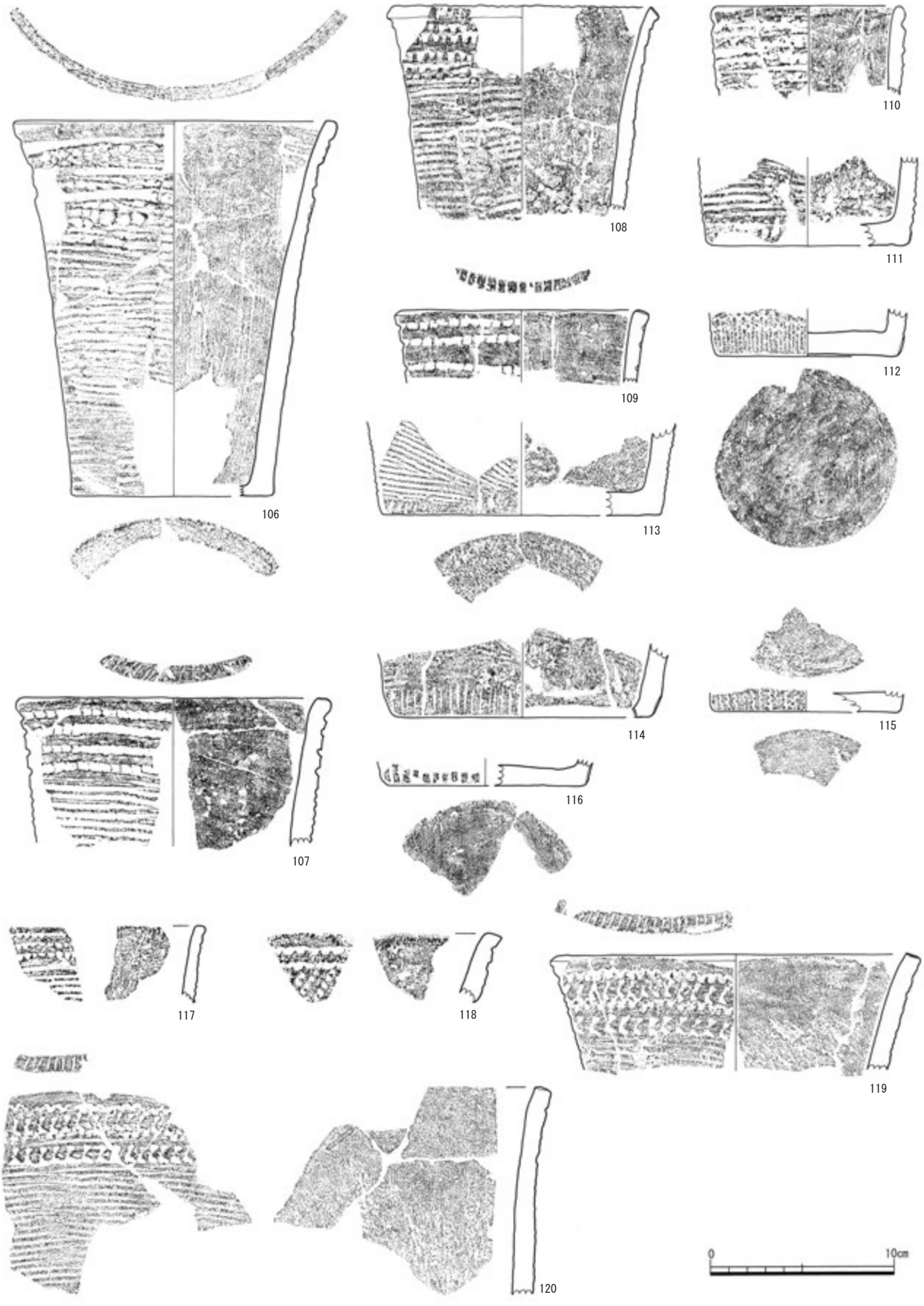
第 78 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (5)



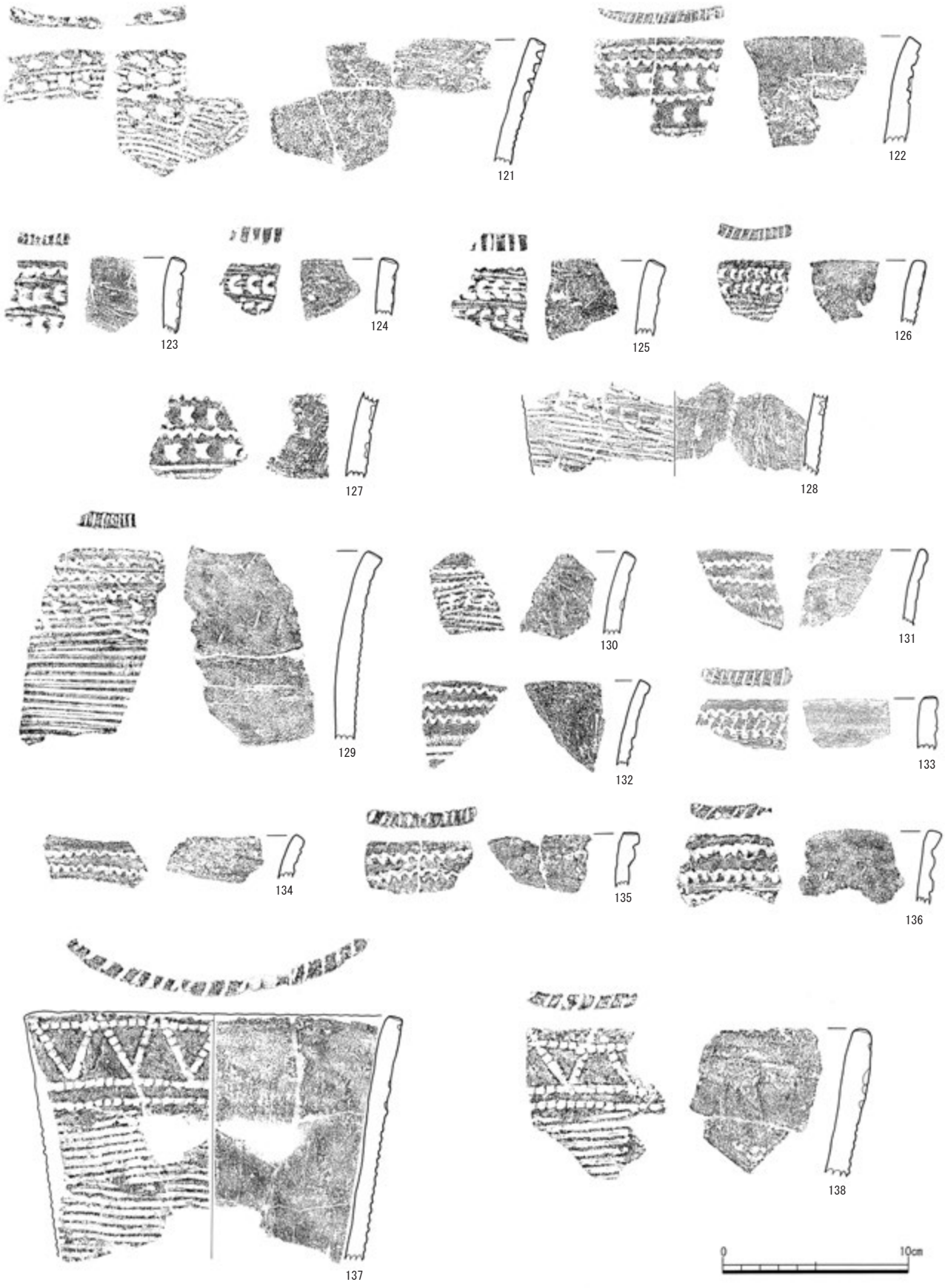
第 79 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (6)



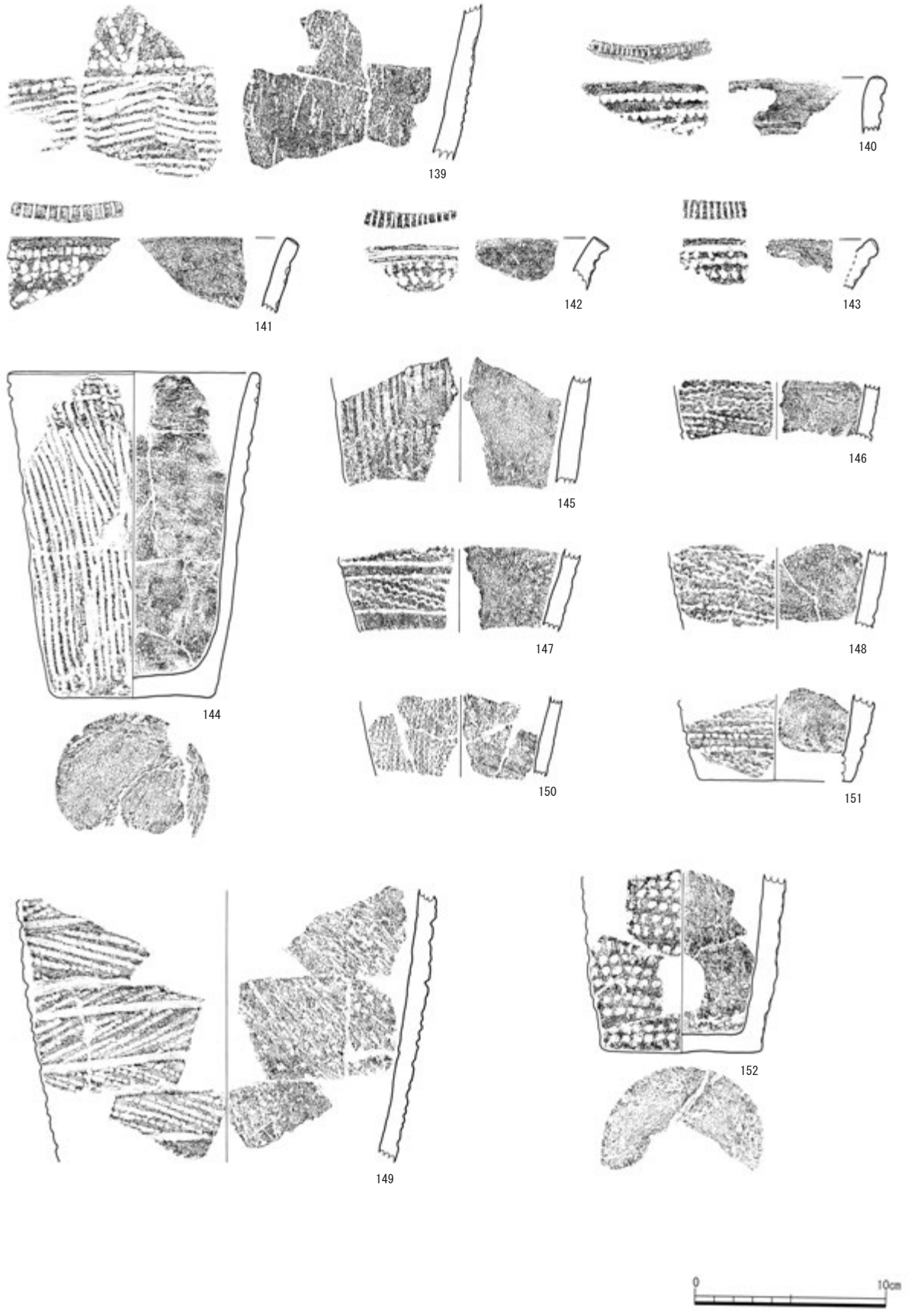
第 80 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (7)



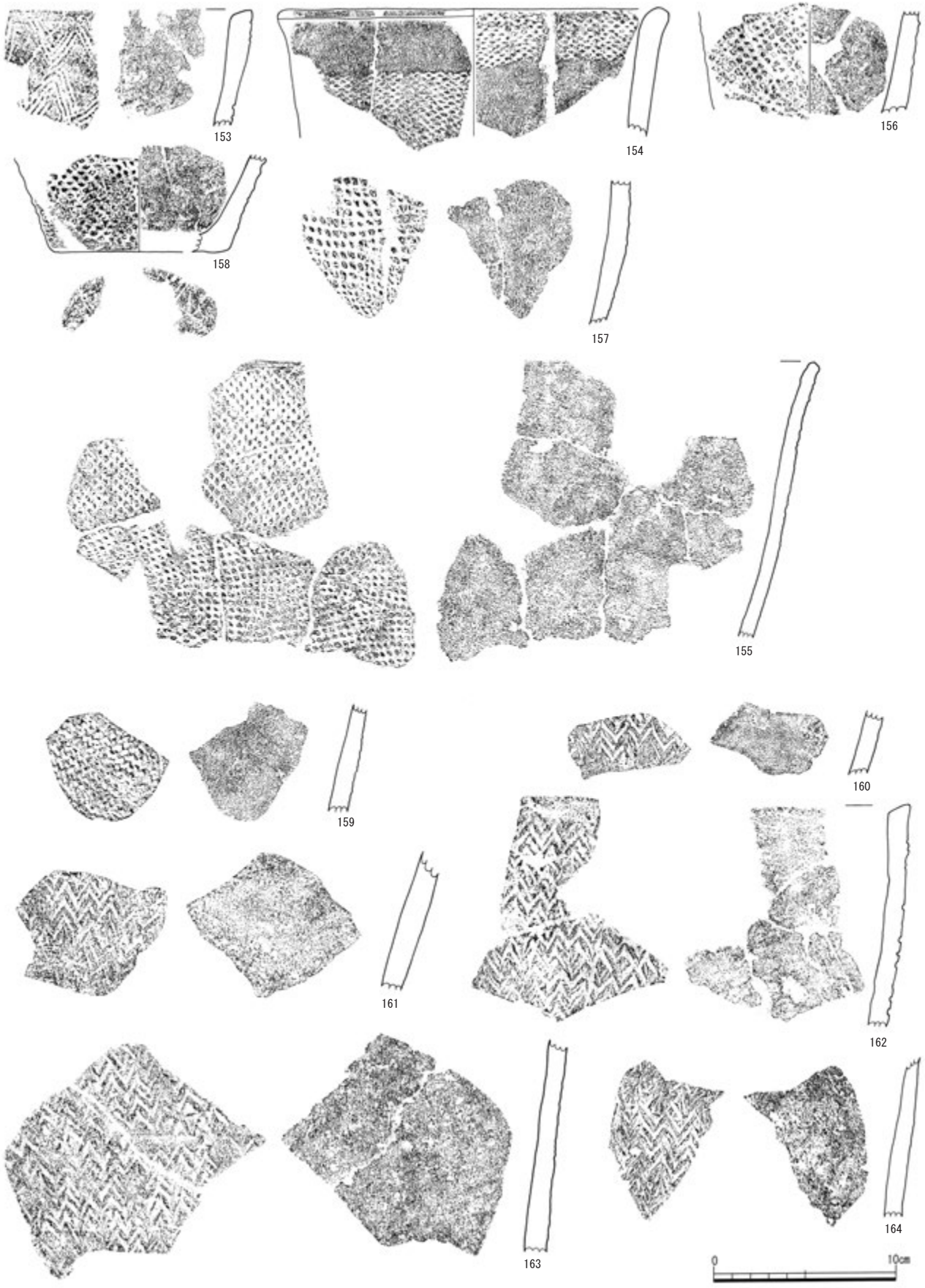
第 81 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (8)



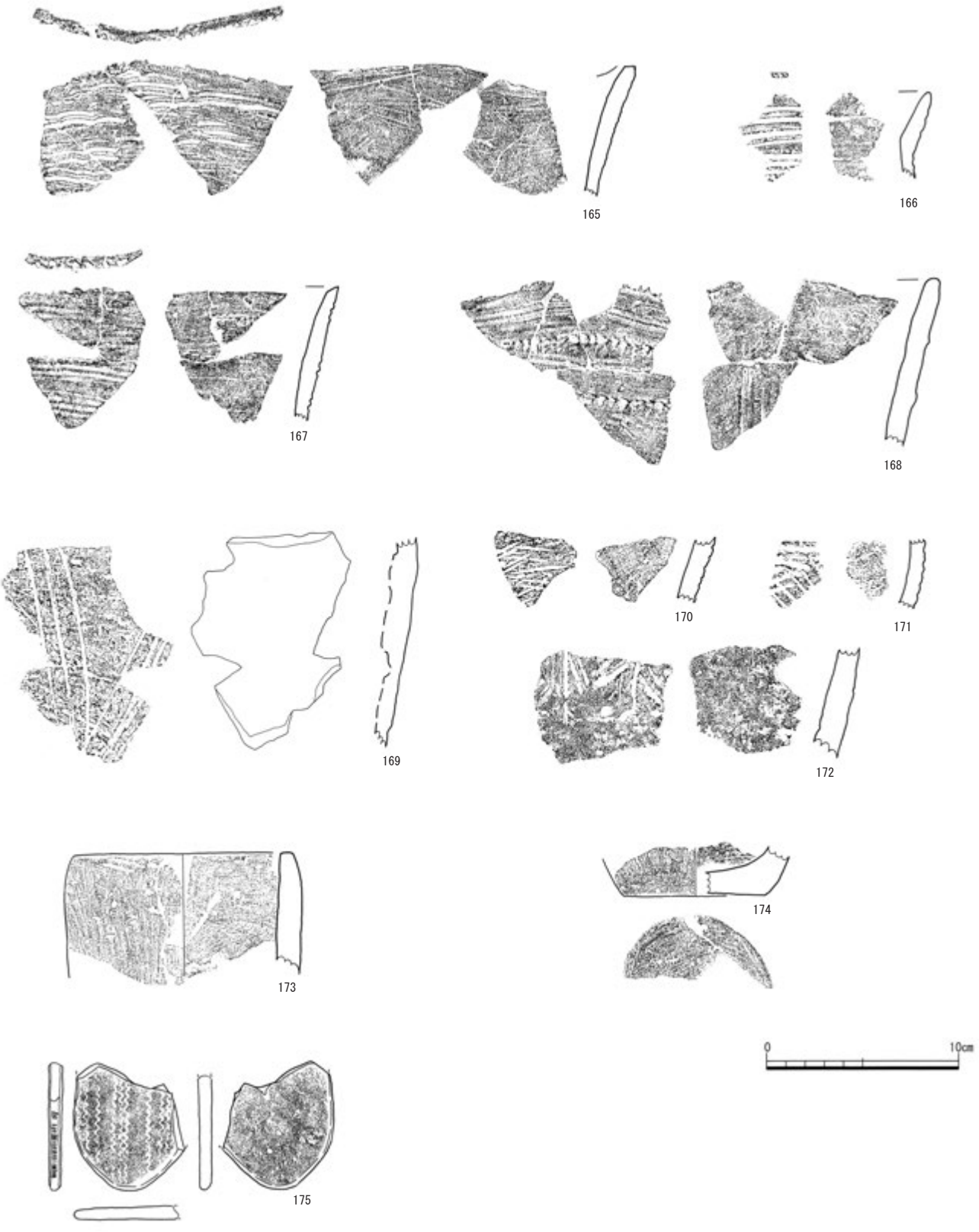
第 82 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (9)



第 83 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (10)



第 84 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (11)



第 85 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅶ類土器 (12)

表 16　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器観察表（1）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
									外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
74	2	26378	B-53	Ⅶ	深鉢	Ⅰ	口縁部	刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		黒褐 10YR3/2	灰黄褐 10YR5/2
		26384	B-53	Ⅶ												
	3	28996	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	口縁部	ｸｻﾋﾞ，貝殻腹縁部刺突，刻み	ナデ	ナデ	○	○	○		褐灰 10YR4/1	橙 7.5YR6/4
	4	28908	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	口縁部～胴部	ｸｻﾋﾞ，貝殻腹縁部刺突，刻み，押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		褐灰 10YR4/1	橙 7.5YR6/4
	5	21876	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	口縁部～胴部	クサビ，貝殻腹縁部刺突 押引	ナデ	ナデ	○	○		砂粒多	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2
		22100	D-48	Ⅶ												
		22994	D-49	Ⅶ												
		23134	D-49	Ⅶ												
		24637	F-48	Ⅵ												
		26310	C-53	Ⅶ												
		28940	D-50	Ⅶ												
		29075	D-50	Ⅶ												
	6	28673	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	口縁部～胴部	クサビ，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2
	7	24367	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	口縁部～胴部	クサビ，貝殻腹縁部刺突 刻み，押引文	ナデ	ナデ	○	○	○		褐灰 10YR4/1	橙 7.5YR6/4
		24831	F-49	Ⅶ												
		28684	D-50	Ⅶ												
	8	27225	C-53	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	胴部	貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4
		一括		横転												
	9	22283	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	胴部	貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい褐 7.5YR5/3	黒褐 7.5YR3/1
	10	21534	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	胴部	貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	灰褐 5YR4/2	にぶい赤褐 5YR5/4
	11	24381	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	胴部	貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	明赤褐 5YR5/6	灰黄褐 10YR5/2
	12	21462	D-49	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－1	胴部～底部	貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 5YR6/4	灰褐 7.5YR4/2
		28854	C-50	Ⅶ												
	13	20934	B-49	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－1	胴部～底部	貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/4
	14	21428	D-50	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－1	胴部～底部	貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/3
		21670	D-49	Ⅶ												
		28720	D-50	Ⅶ												
		21685	D-49	Ⅶ												
	15	21943	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－1	胴部～底部	貝殻条痕文，押引 刻み	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄褐 10YR5/3
		22545	D-49	Ⅶ												
		23736	D-49	Ⅶ												
		24069	F-48	Ⅵ												
		28718	D-50	Ⅶ												
75	16	23742	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－2	口縁部～底部	貝殻腹縁部刺突 貝殻条痕文 押引	ナデ	ナデ		○	○		にぶい橙 5YR6/4	にぶい赤褐 5YR4/3
		21511	D-49	Ⅶ												
		28864	C-50	Ⅶ												
		28844	C-50	Ⅶ												
		28865	C-50	Ⅶ												
		28059	C-50	Ⅵ												
		28375	D-51	Ⅶ												
		21909	D-49	Ⅶ												
		21671	D-49	Ⅶ												
		23733	D-49	Ⅶ												
		22773	D-49	Ⅶ												
		22743	D-49	Ⅶ												
		21686	D-49	Ⅶ												
		27934	C-50	Ⅵ												
		20995	D-49	Ⅵ												
		22981	D-49	Ⅶ												
		28707	C-50	Ⅶ												
		20953	C-49	Ⅵ												
		21003	D-49	Ⅵ												
		28895	D-51	Ⅶ												
		22570	D-48	Ⅶ												
	17	25106	F-48	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－2	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突， 貝殻条痕・押引	ナデ	ナデ	○	○		砂粒多	橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
		28642	D-50	Ⅶ												
	18	22053	C-48	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－2	口縁部	刻み，貝殻腹縁部押引	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄褐 5/3
	19	29014	C-51	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－2	胴部～底部	貝殻条痕文，押引	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	灰白 10YR7/1	褐灰 10YR5/1
		29829	D-50	Ⅶ												
	20	25927	B-53	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－2	胴部～底部	貝殻条痕文，押引	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	褐灰 7.5YR5/1
		25958	B-53	Ⅵ												
		25969	B-53	Ⅵ												
		26013	A-53	Ⅵ												
		26372	B-53	Ⅶ												
		26374	B-53	Ⅶ												
		26433	B-53	Ⅶ												
	21	22142	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－2	胴部	押引	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR6/2
		22430	C-48	Ⅶ												
		22431	C-48	Ⅶ												
		22682	C-48	Ⅶ												
	22	26328	C-53	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－2	胴部～底部	押引，短沈線	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR7/3	暗灰黄 2.5Y5/2
		26335	C-54	Ⅶ												
	23	21172	D-48	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－2	胴部～底部	貝殻条痕文，短沈線 押引	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/3
		21177	D-48	Ⅵ												
		22517	D-49	Ⅶ												
		22566	D-48	Ⅶ												
		22583	D-48	Ⅶ												
	24	21025	D-49	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－2	口縁部	貝殻腹縁部刺突，条痕， 押引	ナデ	ナデ	○	○			にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/4
		21159	D-48	Ⅵ												
		22182	C-49	Ⅶ												
		22238	D-49	Ⅶ												
		22254	D-49	Ⅶ												
	25	24479	F-48	Ⅵ	深鉢	Ⅱ－2	口縁部	貝殻腹縁部刺突，条痕，押引	ナデ	ナデ	○	○			にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/4
		24673	F-48	Ⅵ												
	26	23752	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－2	口縁部～胴部	貝殻腹縁部刺突，押引	ナデ	ナデ	○	○		白粒多	にぶい橙 7.5YR7/3	灰褐 7.5YR6/2
		23840	D-49	Ⅶ												
		24868	E-49	Ⅶ												
		25054	E-49	Ⅶ												
	27	24201	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅱ－2	口縁部～胴部	貝殻腹縁部刺突，押引	ナデ	ナデ	○	○		白粒多	灰黄 2.5Y6/2	黄褐 2.5Y5/4
		24359	F-50	Ⅶ												
		24376	F-49	Ⅶ												
76	28	22446	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4
		22685	C-48	Ⅶ												
	29	28995	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4
	30	23142	D-49	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－1	口縁部～底部	貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		26758	B-53	Ⅶ												
		26942	B-53	Ⅵ												
		27348	A-53	Ⅵ												
		29607	D-53	Ⅵ												
		29615	D-54	Ⅶ												
	31	34062	C-53	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	口縁部	刻み，条痕	ナデ	ナデ	○				にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR7/4
	32	27941	C-50	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－1	胴部	条痕，刺突	ナデ	ナデ	○	○	○		明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4
		28662	D-50	Ⅶ												
	33	22739	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/3	灰褐 7.5YR6/2
		28889	C-51	Ⅶ												
	34	26849	A-51	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－1	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4
		26868	A-51	Ⅶ												
		26926	B-52	Ⅶ												
	35	22498	C-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	胴部	条痕，刺突	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	灰褐 5YR5/2
		28880	C-50	Ⅶ												
	36	21589	B-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR6/2
		28278	D-50	Ⅵ												
	37	22012	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3
		23021	D-48	Ⅶ												
		23178	D-48	Ⅶ												
	38	22435	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－1	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐 5YR5/4	明赤褐 2.5YR5/6
		22813	D-49	Ⅶ												
		27644	B-51	Ⅵ												
		28903	D-50	Ⅶ												

表 17　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土				色	調
									外　面	内　面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外　面	内　面
76	39	24885	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR4/4
		28433	D-50	Ⅶ												
	40	22715	C-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR7/3	暗灰黄 2.5Y5/2
	41	22214	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		明赤褐 5YR5/6	黒褐 10YR3/1
	42	21901	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕文	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	橙 5YR6/6
		22419	C-48	Ⅶ												
		22663	E-48	Ⅶ												
		24604	D-49	Ⅶ												
		26225	D-52	Ⅶ												
		28152	B-50	Ⅶ												
		28396	D-50	Ⅶ												
	43	23103	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3
	44	28439	D-51	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR5/3
77	45	22496	C-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/3	橙 5YR6/6
		22497	C-49	Ⅶ												
	46	20996	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3
	47	23712	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4
	48	21015	D-49	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙１０YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		23003	D-49	Ⅶ												
		29086	C-50	Ⅶ												
	49	26620	B-52	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ，指押さえ	○		○		明赤褐 5YR5/6	にぶい黄橙 10YR5/4
		29352	C-54	Ⅵ												
		29649	C-54	Ⅵ												
		29654	C-54	Ⅵ												
		34101	C-54	Ⅶ												
	50	27952	B-51	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 7.5YR4/1
	51	21896	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		いぶい橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR5/2
	52	22111	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4
		22557	D-48	Ⅶ												
	53	21908	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR6/2
		21910	D-49	Ⅶ												
	54	22584	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR5/2
		28172	B-49	Ⅶ												
	55	22513	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR4/6
		23025	D-48	Ⅶ												
		25078	F-49	Ⅶ												
		28323	D-51	Ⅶ												
	56	25903	B-53	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR4/6
		25974	B-53	Ⅵ												
		26375	B-53	Ⅵ												
		26606	B-52	Ⅶ												
		28506	C-50	Ⅶ												
		29082	C-50	Ⅶ												
	57	25454	B-52	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR4/2
		27826	A-51	Ⅵ												
	58	23146	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい黄橙 10YR7/3
	59	22469	C-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	灰黄褐 10YR5/2
		26475	A-53	Ⅶ												
	60	27985	B-50	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻腹縁部による貝殻条痕	ナデ	ナデ	○		○		浅黄 2.5ＹＲ 7/4	にぶい褐 7.5YR6/3
	61	29027	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	黄灰 2.5Y4/1
		29036	C-50	Ⅶ												
78	62	21093	C-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙１０YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		22495	C-49	Ⅶ												
		24746	E-49	Ⅶ												
		28584	C-51	Ⅶ												
	63	24787	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR4/6
		24862	E-49	Ⅶ												
		25070	E-49	Ⅶ												
	64	28697	C-51	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	65	22281	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	灰黄褐 10YR6/2
		23839	D-49	Ⅶ												
	66	21969	D-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文，短沈線	ナデ	ナデ	○		○		淡赤橙 2.5YR7/4	にぶい橙 2.5YR6/4
		22191	C-49	Ⅶ												
	67	27033	B-52	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	胴部～底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 2.5YR6/4	明赤褐 2.5YR5/6
	68	21277	D-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－１	底部	条痕（摩耗）	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4
		23136	D-49	Ⅶ												
		25338	C-53	Ⅵ												
		26964	C-53	Ⅶ												
		26967	C-53	Ⅶ												
	69	28984	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－１	底部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/4
	70	20961	C-49	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突 条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		21539	D-49	Ⅶ												
		22244	D-49	Ⅶ												
		23008	D-49	Ⅶ												
		27657	C-50	Ⅵ												
		一括	D-49	Ⅶ												
	71	28843	C-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	72	28871	C-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	灰褐 7.5YR4/2	褐灰 7.5YR4/1
	73	25368	B-53	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	橙 5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
		26182	B-53	Ⅵ												
		26359	B-53	Ⅶ												
	74	22806	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/3
	75	23705	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい橙 5YR6/4	明赤褐 5YR5/6
	76	29040	C-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	灰赤 2.5YR5/2	にぶい赤褐 2.5YR5/3
	77	23139	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		灰褐 7.5YR6/2	橙 7.5YR6/6
79	78	22266	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/3
		22523	D-49	Ⅶ												
		22723	D-49	Ⅶ												
		22779	D-49	Ⅶ												
		23875	F-50	Ⅵ												
	79	23758	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR4/2
	80	24692	E-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	明褐灰 7.5YR7/2	明褐灰 7.5YR7/2
	81	21557	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR5/4
	82	28416	E-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/4
	83	22668	E-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－２	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4
		23657	E-48	Ⅶ												
		23682	E-48	Ⅶ												
		23686	E-48	Ⅶ												
		23775	E-48	Ⅶ												
		24282	E-48	Ⅶ												
		24298	E-48	Ⅶ												
		24299	E-48	Ⅶ												
		24866	E-49	Ⅶ												
		25229	E-49	Ⅶ												
	84	28477	C-51	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－３	口縁部	刻み，押引，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		22775	D-49	Ⅶ												
		28138	B-49	Ⅶ												
		28163	B-50	Ⅶ												

表 18　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器観察表（3）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土				色	調
									外　面	内　面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外　面	内　面
79	85	21317	E-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－３	口縁部～底部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕，押引	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR7/4	暗灰黄 2.5Y5/2
		21536	D-49	Ⅶ												
		21540	D-49	Ⅶ												
		21563	D-49	Ⅶ												
		22543	D-49	Ⅶ												
		22621	D-48	Ⅶ												
		22915	E-48	Ⅶ												
		23778	E-48	Ⅶ												
		24762	E-49	Ⅶ												
		24889	E-48	Ⅶ												
		28352	D-51	Ⅶ												
		28355	D-51	Ⅶ												
		28687	D-50	Ⅶ												
		28856	C-50	Ⅶ												
		28857	C-50	Ⅶ												
		28941	D-50	Ⅶ												
		29052	D-50	Ⅶ												
	86	22133	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－３	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕，押引	ナデ	ナデ	○		○		褐灰 5YR5/1	明赤褐 5YR5/6
		28440	D-51	Ⅶ												
		28565	D-50	Ⅶ												
		29042	C-49	Ⅶ												
	87	22248	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－３	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕，押引	ナデ	ナデ	○			黒粒多	橙 7.5YR6/6	浅黄橙 7.5YR8/4
		22249	D-49	Ⅶ												
		25067	E-49	Ⅶ												
	88	21971	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－３	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
		22563	D-48	Ⅶ												
		23020	D-48	Ⅶ												
		23708	D-48	Ⅶ												
	89	28930	D-50	Ⅶ	中	Ⅲ－３	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR5/3
	90	28934	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－３	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	黒褐 10YR3/1	
80	91	24873	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－４	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR6/3	暗灰 2.5Y5/2
		26277	C-53	Ⅶ												
	92	28612	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－４	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄橙 10YR7/4
		28715	D-50	Ⅶ												
	93	21168	D-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－４	口縁部	貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/3
		23745	D-49	Ⅶ												
	94	23658	E-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－４	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		褐灰 7.5YR5/1	明褐灰 7.5YR7/2
	95	34007	D-52	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－４	口縁部	刻み，押引，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/3	灰黄 2.5Y6/2
	96	22785	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－５	口縁部～底部	貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ		○			にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3
		23748	D-49	Ⅶ												
		28693	D-51	Ⅶ												
		23045	C-48	Ⅶ												
		22709	C-49	Ⅶ												
	97	24898	E-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－５	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○				にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		24899	E-49	Ⅶ												
		26698	C-52	Ⅶ												
		28520	D-50	Ⅶ												
	98	26629	B-52	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－５	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○				明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4
		26632	B-52	Ⅶ												
	99	23711	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－５	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○				にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄 2.5Y7/4
		29083	C-50	Ⅶ												
	100	23328	E-49	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－５	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○			砂粒多	橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4
	101	22072	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－５	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4
	102	22466	C-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－６	口縁部～胴部	貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	褐灰 7.5YR4/1
		28899	D-50	Ⅶ												
	103	21140	D-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－６	口縁部	貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4
		22539	D-49	Ⅶ												
		22789	D-48	Ⅶ												
		23026	D-48	Ⅶ												
	104	一括	E-51	横転	深鉢	Ⅲ－６	口縁部	貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	105	28478	C-51	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－６	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○	密	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4
81	106	23022	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－７	口縁部～底部	凹線，貝殻腹縁部刺突，貝殻条痕，押引	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 5YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		28850	C-50	Ⅶ												
		28848	C-50	Ⅶ												
		22211	C-48	Ⅶ												
		20958	C-49	Ⅵ												
		21184	C-49	Ⅵ												
		21879	D-49	Ⅵ												
		29152	D-50	Ⅶ												
		21128	C-48	Ⅵ												
		28849	C-50	Ⅶ												
		22505	D-48	Ⅶ												
		21002	D-49	Ⅵ												
		28645	D-50	Ⅶ												
		21661	D-49	Ⅵ												
		28719	D-50	Ⅶ												
		21055	D-49	Ⅵ												
		28925	D-50	Ⅶ												
		22529	D-49	Ⅶ												
		29053	D-50	Ⅶ												
		22719	D-49	Ⅶ												
		22783	D-49	Ⅶ												
		23001	D-49	Ⅶ												
		23037	D-48	Ⅶ												
		22697	D-49	Ⅶ												
		20968	C-49	Ⅵ												
		22578	D-48	Ⅶ												
		25056	E-49	Ⅶ												
		24607	D-49	Ⅶ												
		22665	E-48	Ⅶ												
		22509	D-48	Ⅶ												
		22736	D-49	Ⅶ												
		21035	D-49	Ⅵ												
	107	20796	E-52	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－７	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，貝殻条痕，押引	ナデ	ナデ	○	○			明橙 2.5YR5/6	橙 2.5YR6/6
		23097	E-49	Ⅶ												
		24742	E-49	Ⅶ												
	108	21149	D-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－７	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	橙 7/5YR6/6	暗灰黄 2.5Y4/2
		21166	D-48	Ⅵ												
		21170	D-48	Ⅵ												
		23179	D-48	Ⅶ												
		26936	B-53	Ⅶ												
	109	22318	E-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－７	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○	○			橙 5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4
		22680	D-48	Ⅶ												
	110	25104	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－７	口縁部	貝殻腹縁部刺突，刻み	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	明黄褐 10YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3
		26385	B-53	Ⅶ												
		一括	B-53	Ⅶ												
	111	22077	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－７	胴部～底部	貝殻条痕文，刻み	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	にぶい橙 5YR6/4
		28958	D-50	Ⅶ												
		29065	D-50	Ⅶ												
	112	23213	F-50	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－７	底部	貝殻腹縁部刺突・刻み	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 . 5YR6/4	にぶい橙 . 5YR6/4
	113	21524	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－７	胴部～底部	貝殻条痕文，刻み	ナデ	ナデ	○		○		いぶい橙 10YR7/4	いぶい橙 10YR6/4
		28909	D-50	Ⅶ												
	114	21605	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－７	胴部～底部	貝殻条痕文，短沈線，刻み	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 . 7.5YR6/4	にぶい橙 . 7.5YR6/4
		22820	C-49	Ⅶ												
		22035	C-48	Ⅶ												
	115	一括		横転	深鉢	Ⅲ－７	底部	貝殻腹縁部刺突，刻み	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4
	116	34848	D-52	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－７	底部	短沈線，刻み	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい橙 . 5YR6/4	にぶい赤褐 5YR6/4
		一括		表採												

表 19　縄文時代早期Ⅰ～Ⅶ類土器，その他の土器観察表（4）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
									外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
81	117	26170	C-53	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－８	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，押引	ナデ	ナデ	○	○		砂粒多	橙 5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	118	21612	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－８	口縁部	貝殻腹縁部押引・刺突	ナデ	ナデ	○	○			橙 5YR7/6	にぶい橙 7.5YR6/4
	119	21117	C-48	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－８	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突条痕	ナデ	ナデ	○			砂粒多	橙 2.5YR6/6	にぶい橙 2.5YR6/4
		29017	D-51	Ⅶ												
	120	22015	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－８	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突条痕	ナデ	ナデ	○			砂粒多	にぶい橙 5YR6/4	明赤褐 2.5YR5/6
		22555	D-48	Ⅵ												
		23010	D-49	Ⅶ												
		24978	E-48	Ⅶ												
82	121	23249	F-49	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－９	口縁部	刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6
		24385	F-49	Ⅶ												
		24775	F-49	Ⅶ												
		24852	F-49	Ⅶ												
	122	23848	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－９	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○			白粒多	黄褐 2.5Y5/3	にぶい黄 2.5Y6/3
		24716	E-48	Ⅶ												
	123	26109	B-53	Ⅵ	深鉢	Ⅲ－９	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕，押引	ナデ	ナデ	○	○		砂粒多	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR 6／4
	124	28607	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－９	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	125	24327	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－９	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	126	23829	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－９	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR7/3	灰褐 7.5YR6/2
	127	24970	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－９	胴部	貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	白粒多	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/3
	128	27014	B-52	Ⅶ	深鉢	Ⅲ－９	胴部	条痕，刺突	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/4
		27045	B-52	Ⅶ												
	129	22595	D-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○			黒褐多	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR6/6
		22616	D-48	Ⅶ												
	130	28521	C-51	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部	押引，刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○				橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4
	131	25117	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部	押引，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○				にぶい赤褐 5YR4/3	にぶい黄橙 10YR6/3
	132	24726	E-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部	貝殻腹縁部刺突，条痕，押引	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR6/4
	133	29165	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部	押引，刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○			砂粒多	にぶい褐 7.5YR5/3	明赤褐 5YR5/6
	134	25073	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部	貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○	○			暗褐 7.5YR3/3	灰褐 7.5YR5/2
	135	21935	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ		○			にぶい黄 2.5Y6/3	黄灰 2.5Y4/1
		29008	D-51	Ⅶ												
	136	27923	B-50	Ⅵ	深鉢	Ⅲ-10	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3
	137	21113	C-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-11	口縁部～胴部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	にぶい黄褐 10YR5/3	赤褐 5YR4/6
		21435	D-50	Ⅶ												
		22768	D-49	Ⅶ												
		28370	D-51	Ⅶ												
		28709	C-50	Ⅶ												
		28937	D-50	Ⅶ												
		34043	D-53	Ⅶ												
	138	21447	D-49	Ⅵ	深鉢	Ⅲ-11	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	にぶい黄褐 10YR5/3	赤褐 5YR4/6
		28679	D-50	Ⅶ												
83	139	23077	E-48	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-11	胴部	貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	にぶい黄褐 10YR5/3	赤褐 5YR4/6
		25113	E-49	Ⅶ												
		29825	C-53	Ⅶ												
	140	22811	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-11	口縁部	刻み，貝殻腹縁部押引・刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	白粒多	にぶい橙 5YR6/3	橙 5YR6/6
	141	23150	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-11	口縁部	刻み，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○	○			にぶい灰褐 7.5YR4/2	にぶい橙 7.5YR 6／4
	142	21881	D-49	Ⅵ	深鉢	Ⅲ-11	口縁部	刻み，沈線，貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○	○		白粒多	灰黄褐 10YR4/2	にぶい褐 7.5YR5/4
	143	28966	D-50	Ⅶ	深鉢	Ⅲ-11	口縁部	刻み，殻腹縁部刺突，沈線	ナデ	ナデ		○		砂粒多	にぶい褐 7.5YR5/4	褐灰 7.5YR4/1
	144	21507	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	口縁部～底部	刻み，貝殻腹縁部刺突，条痕	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	橙 5YR6/6	灰黄褐 10YR6/2
		22255	D-49	Ⅶ												
		22263	D-49	Ⅶ												
		22292	D-49	Ⅶ												
		22519	D-49	Ⅶ												
		22567	D-48	Ⅶ												
		22674	D-48	Ⅶ												
		22784	D-49	Ⅶ												
		28989	D-50	Ⅶ												
		29164	D-49	Ⅶ												
	145	26709	B-53	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻条痕文	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR6/3	灰黄褐 10YR5/2
	146	20985	D-49	Ⅵ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	147	24798	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	148	24140	E-50	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	149	21522	D-49	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁部刺突・沈線	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR6/4
		21615	D-48	Ⅶ												
		28469	C-51	Ⅵ												
		28587	C-51	Ⅶ												
		一括	D-50	横転												
	150	24401	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		灰褐 7.5YR4/2	褐 7.5YR4/3
	151	28692	D-51	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	底部	貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	152	22503	C-49	Ⅶ	深鉢	Ⅳ	胴部～底部	刺突文	ナデ	ナデ	○		○	砂粒多	灰褐 5YR6/2	褐灰 10YR4/1
		22580	D-48	Ⅶ												
		24832	F-49	Ⅶ												
		28257	C-50	Ⅵ												
		28406	E-50	Ⅶ												
84	153	28213	C-51	Ⅵ	深鉢	Ⅴ	口縁部～胴部	沈線	ナデ	ナデ	○	○	○		灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2
	154	24810	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅵ	口縁部～胴部	楕円・押型文	ナデ	ナデ	○				橙 5YR7/6	にぶい黄 2.5YR6/4
		24864	E-49	Ⅶ												
	155	25055	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅵ	口縁部～胴部	楕円・押型文	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/3	暗灰黄 2.5Y5/2
		25061	E-49	Ⅶ												
		21947	D-49	Ⅶ												
		23843	D-49	Ⅶ												
		22932	E-48	Ⅶ												
		24576	E-49	Ⅶ												
		28964	D-50	Ⅶ												
	156	27599	B-49	Ⅵ	深鉢	Ⅵ	胴部	楕円・押型文	ナデ	ナデ	○	○	○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4
		27603	B-50	Ⅵ												
		27916	B-50	Ⅵ												
	157	23858	F-50	Ⅶ	深鉢	Ⅵ	胴部	楕円・押型文	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR6/3
	158	27982	B-50	Ⅵ	深鉢	Ⅵ	胴部～底部	楕円・押型文	ナデ	ナデ	○	○	○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/4
		27983	B-50	Ⅵ												
		28129	B-49	Ⅶ												
	159	25901	B-53	Ⅵ	深鉢	Ⅵ	胴部	波状・押型文	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい赤褐 5YR5/3	灰黄褐 10YR4/2
	160	25460	B-52	Ⅵ	深鉢	Ⅵ	胴部	山形・押型文	ナデ	ナデ	○	○			灰黄 2.5YR6/2	暗灰黄 2.5YR5/2
	161	24291	F-49	Ⅶ	深鉢	Ⅵ	胴部	山形・押型文	ナデ	ナデ	○	○			にぶい黄 2.5YR6/4	にぶい黄 2.5YR6/3
	162	22355	E-48	Ⅶ	深鉢	Ⅵ	口縁部～胴部	山形・押型文	ナデ	ナデ	○	○			にぶい黄 2.5YR6/4	にぶい黄 2.5YR6/3
		22849	E-48	Ⅶ												
		24287	E-48	Ⅶ												
		25726	D-52	Ⅵ												
		25727	D-52	Ⅵ												
	163	24848	E-49	Ⅶ	深鉢	Ⅵ	胴部	山形・押型文	ナデ	ナデ	○	○			にぶい黄 2.5YR6/4	にぶい黄 2.5YR6/3
	164	26772	A-53	Ⅵ	深鉢	Ⅵ	胴部	山形・押型文	ナデ	ナデ	○	○			にぶい黄 2.5YR6/4	にぶい黄 2.5YR6/3
85	165	27140	A-51	Ⅶ	深鉢	Ⅶ	口縁部～胴部	沈線・波状文	ナデ	ナデ	○		○		黒褐 10YR3/1	にぶい黄橙 10YR6/3
		27141	A-51	Ⅶ												
	166	23202	E-50	Ⅵ	深鉢	Ⅶ	口縁部	刻み，沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	167	25657	C-52	Ⅵ	深鉢	Ⅶ	口縁部～胴部	沈線文	ナデ	ナデ	○		○		明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4
		25658	C-52	Ⅵ												
		25661	C-52	Ⅵ												
	168	25654	C-52	Ⅵ	深鉢	Ⅶ	口縁部～胴部	微隆起・突帯・条痕・刻み	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3
		25659	C-52	Ⅵ												
		26678	C-52	Ⅵ												
		26976	C-52	Ⅵ												
	169	22112	D-48	Ⅶ	深鉢	その他	胴部	沈線	ナデ		○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	橙 7.5YR6/6
		23029	D-48	Ⅶ												
	170	28239	D-50	Ⅵ	深鉢	その他	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	黄褐 2.5Y5/3
	171	29064	D-50	Ⅶ	深鉢	その他	底部付近？	条痕，沈線	ナデ	ナデ	○				にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	172	25676	B-53	Ⅵ	深鉢	その他	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2
	173	22434	C-48	Ⅶ	深鉢	その他	口縁部～胴部	ヘラ等によるナデ	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	褐灰 5YR4/1
	174	22581	D-48	Ⅶ	深鉢	その他	胴部～底部	ヘラ等によるナデ	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 7.5YR7/4
		29088	C-50	Ⅶ												
	175	26968	C-53	Ⅷ	角筒	その他		貝殻腹縁部刺突	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4

石　器

剥片石器

石　鏃（第86図　176 ～ 194）

176 ～ 179は基部が円基形，平基になる形状である。176，177，178は円基である。179は，剥離面を多く残している。形状が左右非対称である。身が厚く，礫面や主要剥離面を残しており，未製品の一部と考えられる。

180は，長幅比1:1の正三角形の小型鏃で，基部が僅かに弧状になる。181は，深い抉りが特徴的である。脚の部分は先端部が鋭角を呈する。先端部に欠損が見られる。182は，深い抉りがあり，先端部と脚に欠損がある。

183 ～ 188は基部の抉りが丸く深く，脚部先端が幅広く方形を呈する場合もある。

183は，脚部先端部が方形を呈する。片方の脚が欠損しているものの，抉りがみとめられる。184は，脚部の形状が左右非対称で右縁部中央よりやや下が角張っている。185は，片方の脚が欠損しているが，二等辺三角形状で，断面はレンズ状である。186は，刃部は直線的である。断面はレンズ状で，長幅比は1:3:1で，二等辺三角形状である。188は，両側縁が緩やかな弧状になり，脚部先端部は方形を呈する。断面はレンズ状である。長幅比は，1:2で二等辺三角形の形状である。

189は，安山岩製である。先端部は欠損しているが長軸比1:2の二等辺三角形を呈すると考えられる。刃部が緩やかな弧状になる。190は，基部と脚部に欠損が見られるが，横より縦が長い。小型な形状と両縁部の丸みのある形状である。断面は扇形を呈している。191は，欠損により基部の形状は不明である。鋸歯状の側縁が特徴的である。

192は，先端部基部共に欠損が見られる。早期に見られる槍先と考えられる尖頭器と考えられる。

193は，平基の磨製石鏃である。欠損があるものの長幅比はほぼ1:1である。短身広形と言われるもので，基部は少し丸みを帯びる。194は，磨製石鏃で，長身広形の形状になると考えられる。中央に稜を有する。

礫石器

磨製石斧（第87図　195 ～ 197）

195は，伐採斧で，刃部を欠損している。196の磨製石斧は，加工具で手斧的な使用が考えられるが，刃が鈍くなっており，よく使い込まれた印象である。

197は頁岩で，三角形状をなし，一側縁に使用痕があり，使用痕剥片と考えられる。

磨石・敲石類（第87・88図　198 ～ 208）

198は，先端部の片側に敲打痕が偏っており，ハンマーストーンの先端の可能性がある。199は磨・敲石で，平坦面に滑面，下面に敲打痕がある。全体が被熱し，煤が付着したためか黒くなっているところもある。200は磨石片で，被熱痕が見られる。201は表裏平坦面に擦痕があり，周縁が敲打される。202も磨石であるが，被熱し破砕したものと考えられる。203は粗粒でざらざらしている。平坦面に磨り面，全周に敲打痕が巡る。204は凹石で，両面の中央部に円形の凹みがある。擦痕もある。205は磨石で，表裏平坦面に擦痕がある。206は，磨･敲･凹石で，表面平坦部の中央が凹み，裏面は平坦面で擦痕が見られる。周縁には敲打痕が見られる。207は磨・敲石で，先端の敲打痕が顕著である。側面が全周に磨られている。208は磨石で被熱して，上半部を欠損している。

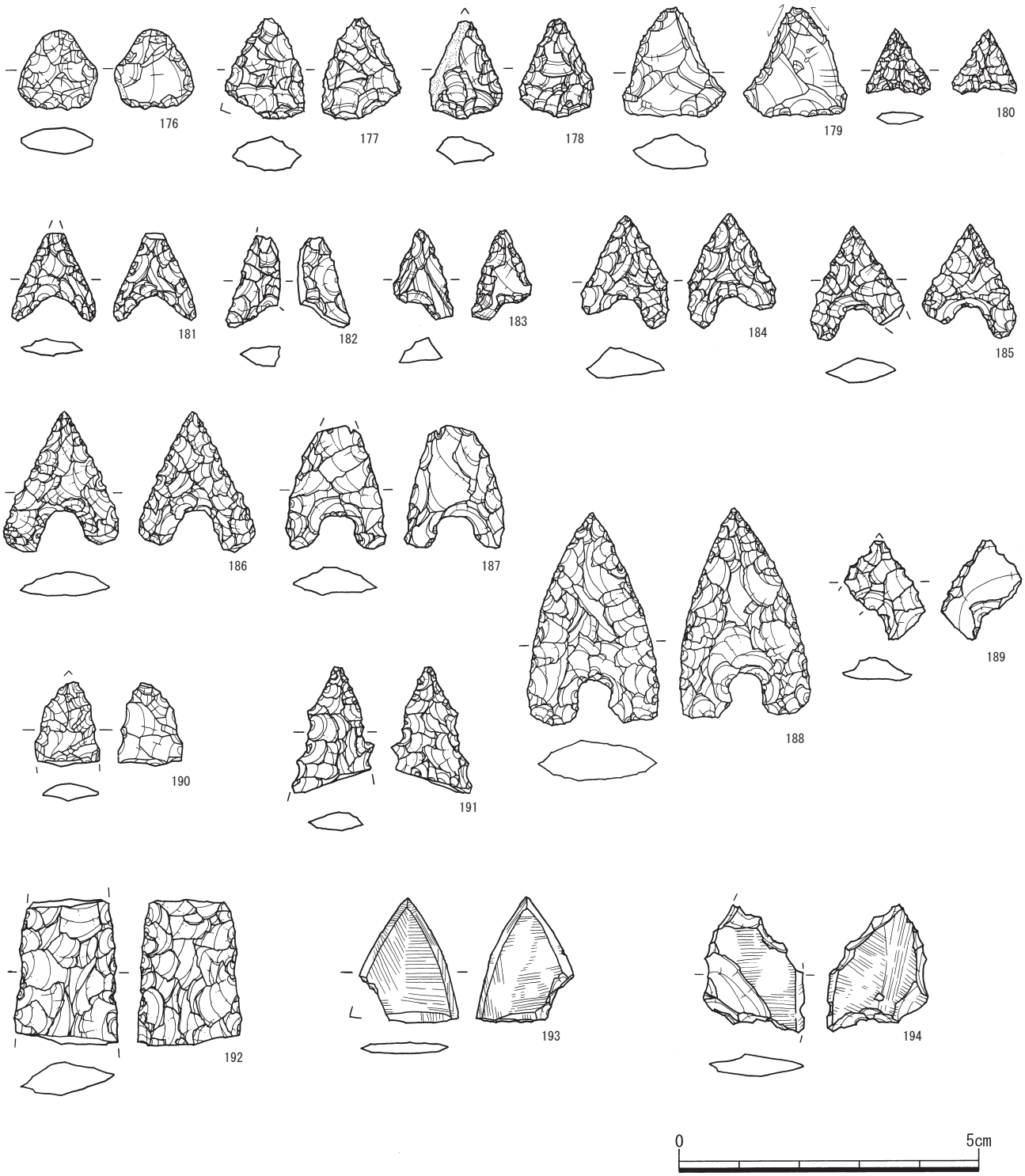
石　皿（第88 ～ 90図　209 ～ 228）

209は，表裏平坦面に擦痕があり，表面に細かな敲打痕が観察できる。台石もしくは石皿である。

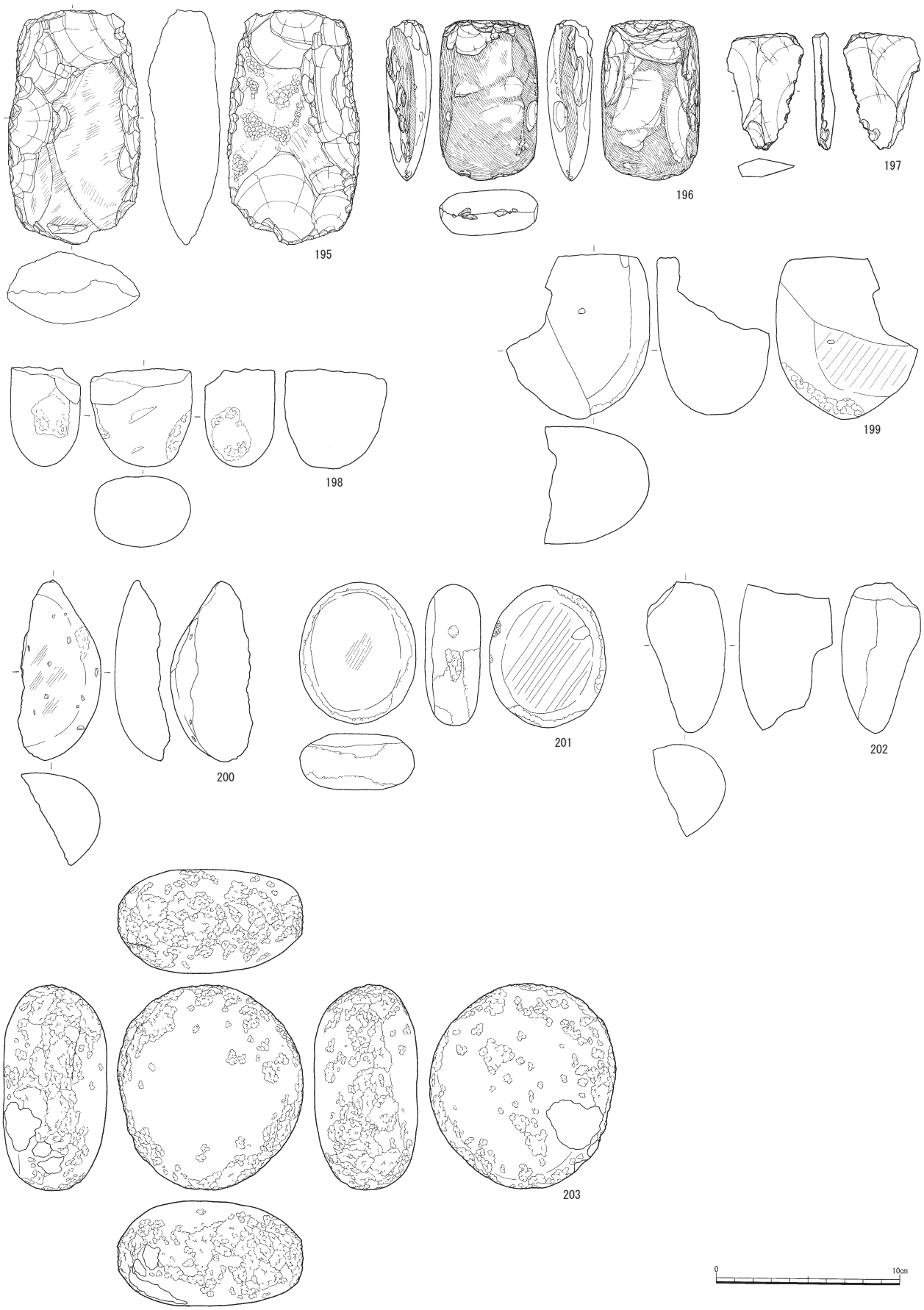
210 ～ 227は，全て板状の大きな石皿の破片である。

210は表裏面ともに平滑で，敲打痕もある。被熱による表面の剥離が見られる。211も表裏面が平滑である。212は表面は平滑であるが，裏面は熱による剥離面である。213 ～ 215は表裏ともにツルツルであるが，被熱している。216 ～ 220の裏面は被熱による剥離面である。221，222は表裏ともにツルツルであるが，表裏面で接合しており，熱による破砕状況がわかる。

223 ～ 227は表裏面ともに平滑面であるが，被熱している。228は，裏面が一部残って，あとは被熱による剥離面をなす。このようにおそらく石皿の個体はさほど多くなくても，破損後の再利用として集石構成礫として使用された。



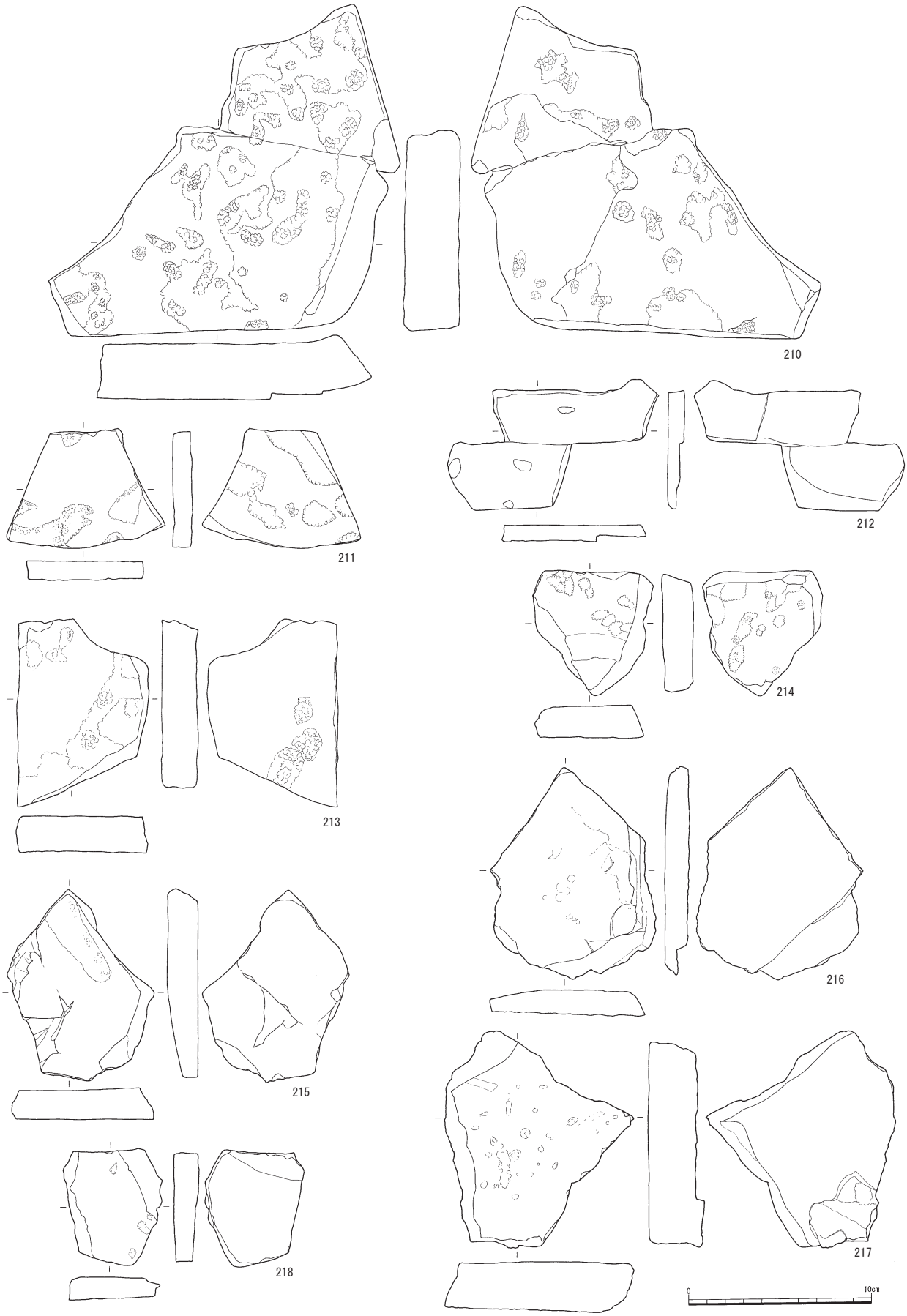
第 86 図　縄文時代早期　石器 (1)



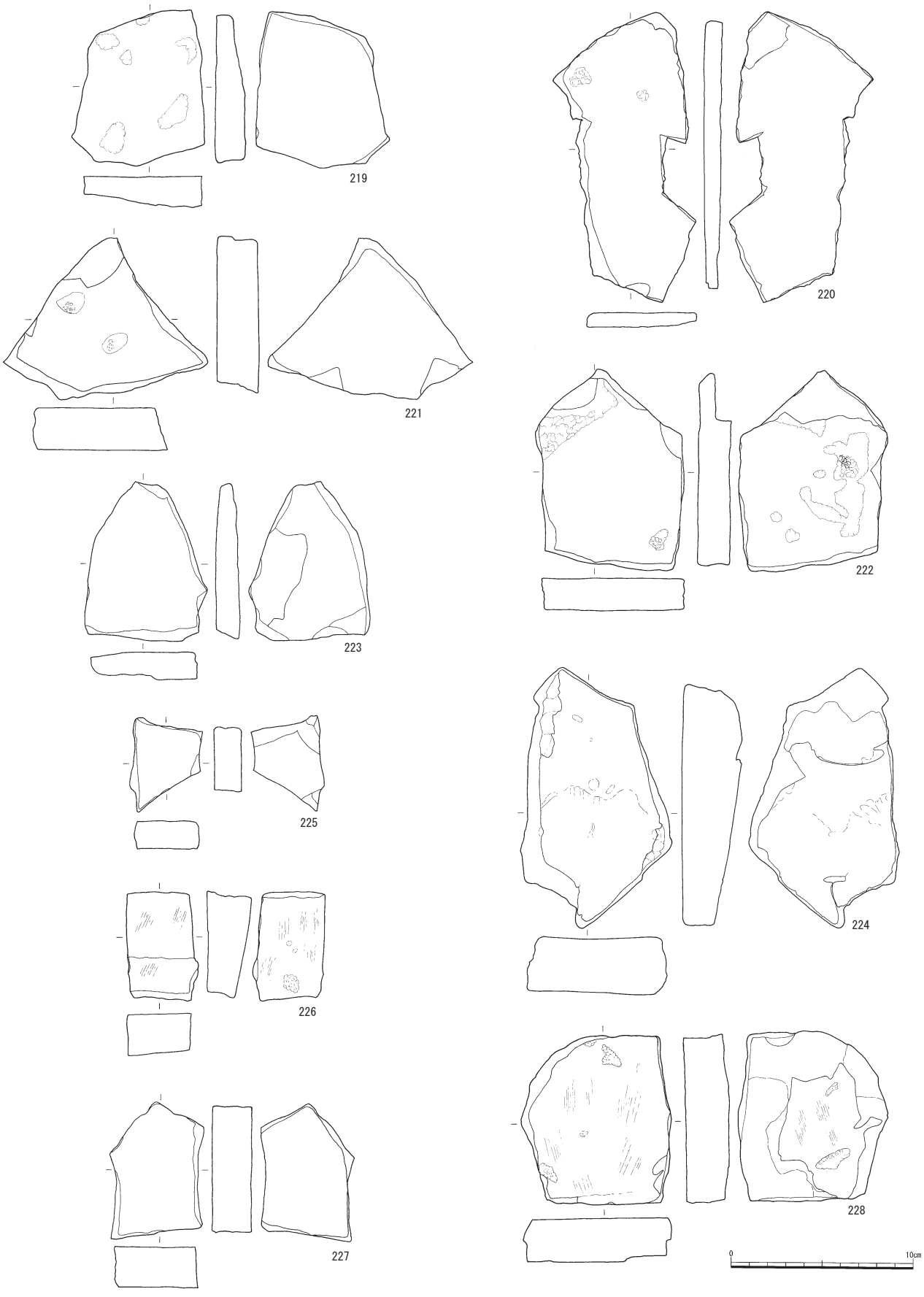
第 87 図　縄文時代早期　石器 (2)



第 88 図　縄文時代早期　石器 (3)



第 89 図　縄文時代早期　石器 (4)



第 90 図　縄文時代早期　石器 (5)

表 20　縄文時代早期出土石器観察表

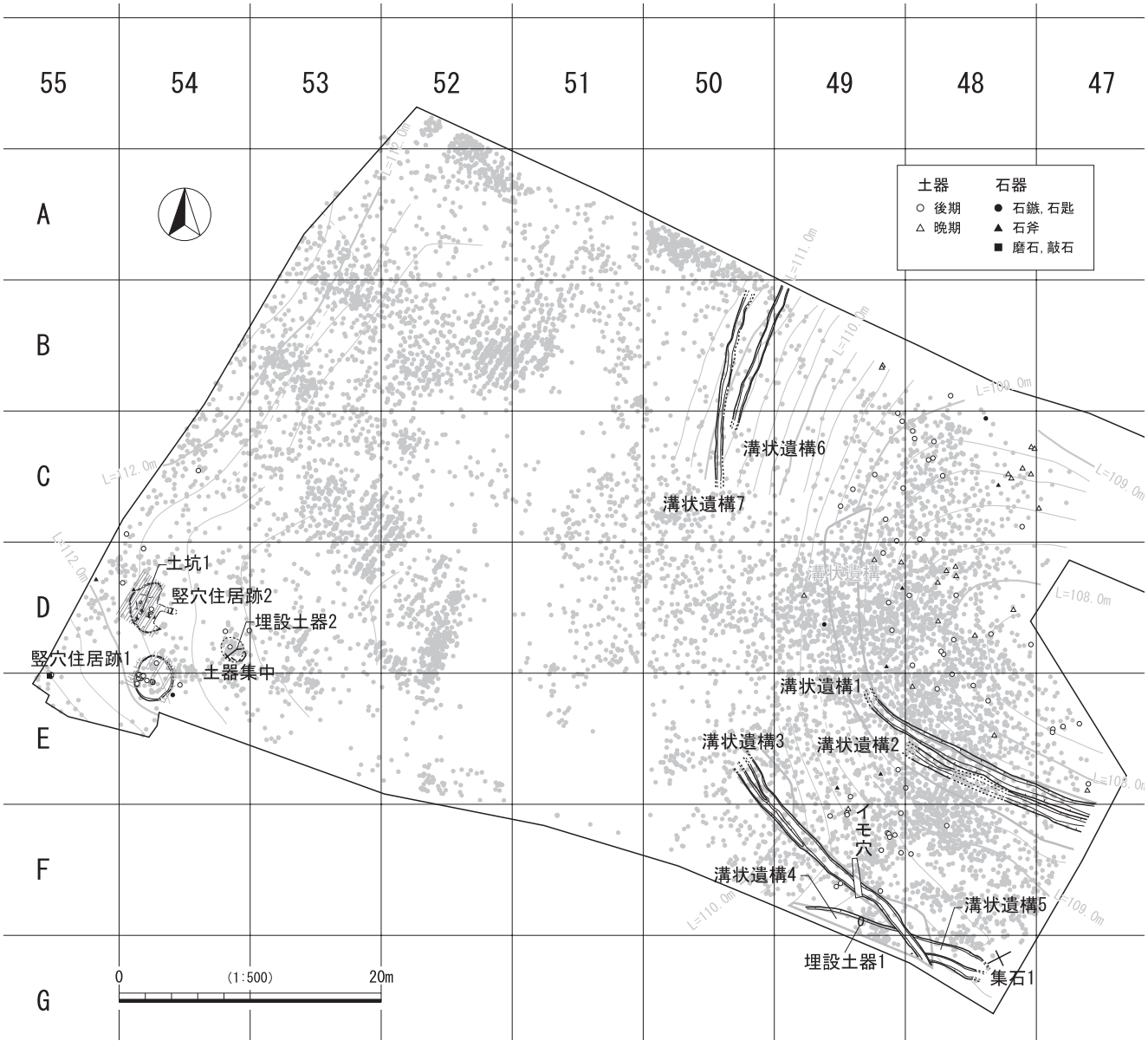
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
86	176	D-49	Ⅵ	21443	打製石鏃	黒曜石	1.3	1.3	0.4	0.74
	177	A-53	Ⅶ	26490	打製石鏃	黒曜石	1.65	1.3	0.55	1.01
	178	B-53	Ⅶ	26453	打製石鏃	黒曜石	1.65	1.2	0.45	0.8
	179	A-53	Ⅵ	26033	打製石鏃	黒曜石	1.8	1.7	0.6	1.25
	180	B-51	Ⅵ	27728	打製石鏃	黒曜石	1.1	1.1	0.2	0.19
	181	A-51	Ⅵ	26785	打製石鏃	頁岩	1.45	1.4	0.3	0.32
	182	A-50	Ⅵ	27784	打製石鏃	黒曜石	1.5	0.85	0.3	0.33
	183	E-52	Ⅶ	27845	打製石鏃	黒曜石	1.5	1.05	0.4	0.41
	184	B-53	Ⅵ	25936	打製石鏃	チャート	1.9	1.4	0.5	1.03
	185	A-51	Ⅶ	28185	打製石鏃	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.74
	186	A-53	Ⅶ	27549	打製石鏃	黒曜石	2.4	1.9	0.4	1.32
	187	F-50	Ⅵ	23195	打製石鏃	安山岩	2	1.7	0.5	1.33
	188	E-48	Ⅶ	22853	打製石鏃	チャート	3.5	2.2	0.7	3.9
	189	C-51	Ⅶ	28195	打製石鏃	安山岩	1.65	1.4	0.35	0.54
	190	B-51	Ⅵ	25285	打製石鏃	チャート	1.4	1.1	0.2	0.41
	191	D-52	Ⅶ	34781	打製石鏃	チャート	2.1	1.4	0.3	0.78
	192	B-51	Ⅵ	27637	尖頭器	チャート	2.45	1.8	0.55	2.98
	193	C-50	Ⅶ	28534	磨製石鏃	頁岩	2.1	1.65	0.2	0.7
	194	B-52	Ⅶ	27401	磨製石鏃	頁岩	2.3	1.7	0.3	1.37
87	195	B-52	Ⅵ	25531	磨製石斧	ホルンフェルス	12.7	17	3.9	415.01
	196	A-52	Ⅶ	27556	磨製石斧	ホルンフェルス	8.7	5.4	2.4	172
	197	B-53	Ⅵ	25371	磨製石斧	頁岩	6.2	4.1	1.1	22.42
	198	D-49	Ⅵ	21008	磨石・敲石	砂岩	5.4	5.5	3.8	146
	199	E-49	Ⅶ	24250	磨石・敲石	砂岩	8.8	7.8	6.3	390
	200	F-50	Ⅶ	24354	磨石片	砂岩	9.75	4	5.05	187
	201	A-53	Ⅵ	26068	磨石・敲石	砂岩	7.7	6.3	3	217
	202	B-52	Ⅶ	27048	磨石	砂岩	8.1	4.2	5.1	179
	203	D-50	Ⅵ	28284	磨石・敲石	砂岩	11.1	10.1	5.65	795
88	204	E-50	Ⅶ	28418	凹石	砂岩	5.1	8.8	4.85	295
	205	E-52	Ⅶ	29954	磨石	砂岩	7.8	6.6	4.9	320
	206	D-54	Ⅵ	29622	磨石・敲石・凹石	砂岩	12.6	9.5	5	863
	207	C-50	Ⅵ	34858	磨石・敲石	砂岩	8.5	6.8	5.8	406
	208	C-50	Ⅵ	34859	磨石	砂岩	10.7	10.6	6.9	843
	209	A-51	Ⅶ	27964	石皿もしくは台石	砂岩	20.5	13.1	6.1	2500
89	210	E-48	Ⅶ	22630	石皿	砂岩	17.5	17.3	3	1284
	211	D-49	Ⅶ	22242	石皿	頁岩	6.5	8.7	1.1	85
	212	D-49	Ⅶ	22246	石皿	頁岩	7	11.5	0.9	74
	213	C-49	Ⅶ	22499	石皿	砂岩	10	7.1	2	244
	214	D-49	Ⅶ	22748	石皿	泥岩	6.7	6.6	1.8	107
	215	E-49	Ⅶ	24880	石皿	頁岩	10.3	7.7	1.7	155
	216	D-49	Ⅶ	22537	石皿	頁岩	11.5	9.1	1.4	163
	217	F-50	Ⅶ	23864	石皿	頁岩	11.8	10.4	3.1	377
	218	E-49	Ⅶ	24800	石皿	頁岩	6.3	5.4	14.5	67
90	219	C-53	Ⅶ	26953	石皿	砂岩	12.4	13.3	1.7	140
	220	A-52	Ⅶ	27346	石皿	頁岩	16	7.85	1	138
	221	E-48	Ⅶ	22847	石皿	頁岩	8.8	11.2	2.3	249
	222	E-49	Ⅶ	24741, 24796	石皿	頁岩	10.8	8.1	1.8	240
	223	B-51	Ⅶ	27384	石皿	頁岩	8.6	6.8	1.5	113
	224	B-51	Ⅶ	28745	石皿	砂岩	14.15	8.3	3.3	462
	225	C-53	Ⅵ	29676	石皿	砂岩	5.3	3.8	1.5	42
	226	C-50	Ⅶ	28993, 29085	石皿	泥岩	6	4	2.4	97
	227	D-50	Ⅶ	28567	石皿	頁岩	7.4	5	2.2	144
	228	E-50	Ⅶ	28653	石皿	頁岩	9.2	8.3	2.5	321

イ　縄文時代後期・晩期

Ⅱ・Ⅲ層を主体に調査を行った。遺構は竪穴住居跡２軒，埋設土器遺構２基，集石１基，溝状遺構７条，硬化面等が検出され，遺物は出土している。遺物はC ～ E-48区を中心に土器・石器が出土している。

なお，石器に関しては後・晩期の判別が難しいため，全て後期の欄にまとめて記載した。

後期は，中岳Ⅱ式土器が主体となる。石器は石鏃に対して，石斧が多く出土し，晩期は，入佐式，黒川式，突帯文土器相当の時期を主体とする傾向が見られた。



第 91 図　縄文時代後・晩期の遺物検出・遺物出土状況図

（ア） 遺構

竪穴住居跡

１号（第93 ～ 95図　230 ～ 252）

D・E-54区で検出した。弥生時代の竪穴住居跡3号周囲を慎重に精査した結果，弥生時代の竪穴住居跡3号南西側２ｍ～３ｍの所に土器片が十数個出土する箇所を確認できた。プランがはっきりしなかったので，炭化物を確認できる箇所に爪楊枝を刺して大体のプランを推測した。略円形を呈したので，住居と認定し調査した。

形状と規模は長軸約3.2m，短軸約2.8mの略円形を基調とする。検出面から床面までの深さは最深部で約40㎝である。総床面積は約７㎡である。住居内からは中岳Ⅱ式と思われる土器片が多数出土した。住居の立ち上がりは，アカホヤが切れているのを目安に確認できた。それから，住居の中央部には41㎝×35㎝，検出面からの深さ20㎝の炉跡を検出した。

埋土③は直径1㎝ほどのオレンジパミスを少量と，直径２㎜～５㎜のオレンジパミスを多量に含む褐色土が中央に堆積し，それには，直径が２㎜～５㎜大の炭化物も多量に含まれ，長さが１㎝を超す炭化物も疎らに見られる。その下の②は斑点のような模様な層に直径が１㎜大のオレンジパミスを少量と直径が２㎜～５㎜大のオレンジパミスを多量に含んだ黄褐色土が堆積する。最下部の①には，直径が２㎜～３㎜大のオレンジパミスを疎らに含んだ褐色土が堆積する。炉跡の上部の層は，炉の影響を受け，強い黒色を帯びる。

遺構内遺物は土器20点，石器３点を図化した。230は口縁部から胴部で波状口縁を呈するものと思われる。胴部で屈曲し，口縁は大きく外反する。無紋である。口縁外部は斜方向の工具ナデであるが，ミガキ風である。胴部下半はミガキである。内面は表面が剥離しているが部分的に工具ナデが観察できる。

231，232は肥厚する口縁外部に１条の沈線が巡るものである。いずれもミガキによる調整が施されている。口唇部は平坦である。233は波状口縁かと思われる。234，235は沈線の上に強く凹線が施されている。231，234，235は内面を凹ませている。

236 ～ 238は断面四角形に肥厚させた口縁部で，ミガキ調整のみで文様がないものである。

239 ～ 243は胴部である。240は１条の沈線が巡る。239は１㎝程度の細かい沈線を縦方向に２列連続的に巡らすものである。241，242は屈曲部で，241は２条の沈線が巡る。243は胴部下半部分で内面はナデ調整である。244 ～ 247は底部である。246，247は尖底風であるが，わずかに平坦部をもつ。245は内面もミガキが観察される。244は平底で内外とも丁寧なミガキが施される。以上は中岳Ⅱ式に該当する土器群である。

１号は，弥生時代の竪穴住居跡3号の精査中に検出されたものである。弥生時代の竪穴住居跡３号でも中岳Ⅱ式該当の土器が出土しているが，これは1号に関連すると考えられるのでここで記載する。

248，249は同一個体と思われる。外反する口縁部で，端部は平坦で断面三角形の外面に２条の沈線が巡る。胴部付近にも２条の沈線が巡る。内外とも横方向の丁寧なミガキが施される。250は，先端部に欠損が見られる。側縁の下位が角張っており，五角形鏃に属する。251，252は打製石斧である。

２号（第96図　253 ～ 258）

Ⅲ～Ⅴ層D-54区で検出した。包含層掘削中，周囲より黒いしみ状の土坑1を検出した。精査の結果，土坑1，弥生時代の竪穴住居跡１号と切り合う形で2号を検出した。弥生時代の竪穴住居跡３号・１号に比べるとトレンチャーにより削平を受けた断面に遺物は少なかった。

形状と規模は長軸約3.5m，短軸約2.5mである。弥生時代の竪穴住居跡1号と切り合っているが，おそらく略円形を基調としている。住居内には，東南部に弥生時代の竪穴住居跡３号・１号と同様の炉跡と考えられるピットを検出した。ピットは約55㎝×50㎝，床面からの深さは約20㎝である。その他，ピットが2基検出されている。住居内からは，中岳Ⅱ式土器が床着で出土している。なお，土坑1に関しては，2号が使用されなくなり，ある程度埋まった段階で彫り込まれたものと考えている。

埋土は①はⅢ層の土がややくすんだ感じである。色調はオリーブ褐色土，φ２～５㎜大のオレンジパミスが密に混ざる。また炭化物も多く混ざる。②は①よりも色調がくすみは弱いが，Ⅲ層より暗色の黄褐色土である。①に比してオレンジパミスの量は少ないが全体に混ざる。炭化物は少量になる。③は①②に比してパミスの混入量が非常に少なく，少々粘性がある。色調は黄褐色土である。④はⅢ層の土が少し黒く変色した暗褐色土である。φ１～２㎜のオレンジパミスが全体に混ざる。炭化物は①より含む。⑤は褐色土にφ５～10㎜大のオレンジパミスがわずかに混ざるφ１～２㎜の炭化物も少量混ざる。　また，断面にあるように，住居の中心部はさらに黒っぽくなった土が滞積している。全体像としては，住居が切り合っていることや，トレンチャーによる削平があるために不明瞭な部分は多いが，レンズ状堆積をしており，住居が廃絶された後，自然に埋まっていったものと考えられる。

遺構内遺物は竪穴住居内から出土した土器や石器で番号を付け取り上げたものは，29点であり，土器４点，石器２点を図化した。

土器はいずれも中岳Ⅱ式相当の土器である。253は外反する口縁部で口唇はわずかに平坦で，鋭角的な印象である。外面に１条の沈線が巡り，その下は帯状に肥厚させている。内外とも横方向のミガキが施される。

254は口縁を断面楕円形に肥厚させる口縁部である。内

外とも横方向のミガキが施される。文様はない。

255は底部，256は胴部から底部である。わずかに平底を呈する。外面はミガキが施される。内面もミガキが観察されるが，煤が付着している。

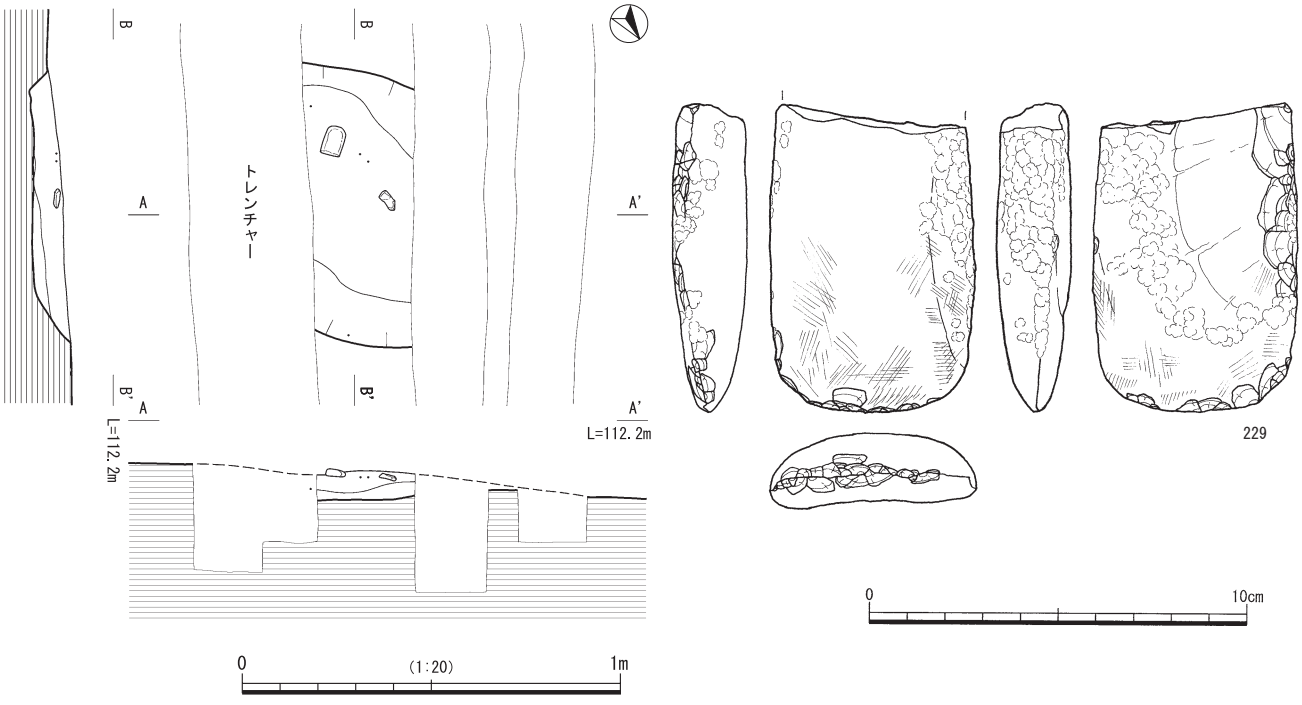
257は，脚部に欠損が見られるものの抉りがあり，脚が明確である。小型ではあるが，五角形鏃である。258は磨・敲石である。表裏平坦面に擦痕があり，敲打痕がわずかにある。

土坑１（第92図　229）

D-54区，Ⅳ層で検出された。Ⅲ層での遺構検出を何度か試みたが検出できず，弥生時代の竪穴住居跡3号・1号の調査終了後，重機によるⅢ～Ⅳ層の除去中に，暗褐色のプランを確認した。トレンチャーによる削平後の埋土を抜いて確認した結果，この土坑の下にも住居跡が検出された。２号が住居としての使用が終わり，埋没後に，土坑として一部が使用されたものと思われる。埋土は３～５㎜の炭化物が多く見られた。トレンチャーで削平されているが，埋土状況から，土坑として使用後に，自然に堆積していったと考えられる。

検出面でのプランから形状を検討した結果，長軸約70㎝，短軸27㎝になると考えられる。ただし，トレンチャーで削平されているため全体の形状は不明である。埋土中からは石器１点，チャート１点，土器３点が出土し，石器を１点図化した。

229は打製石斧片である。全体的に丁寧に研磨され，刃部は先端部が鋭角に整形されている。刃部，側縁部に使用による敲打痕が残る。



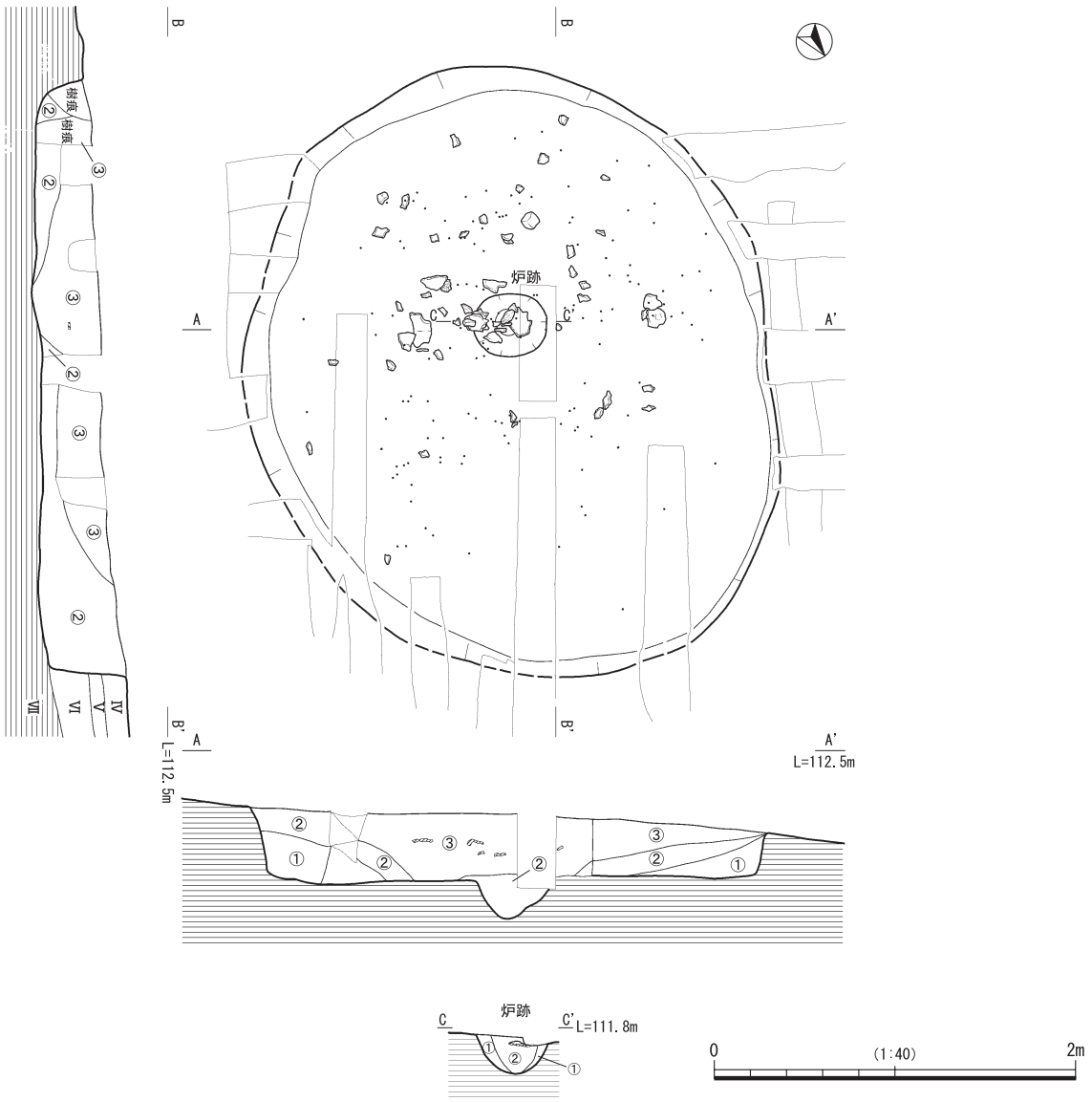
第 92 図　縄文時代後・晩期　土坑１遺構内遺物

表 21　縄文時代後期～晩期　遺構内遺物土器観察表

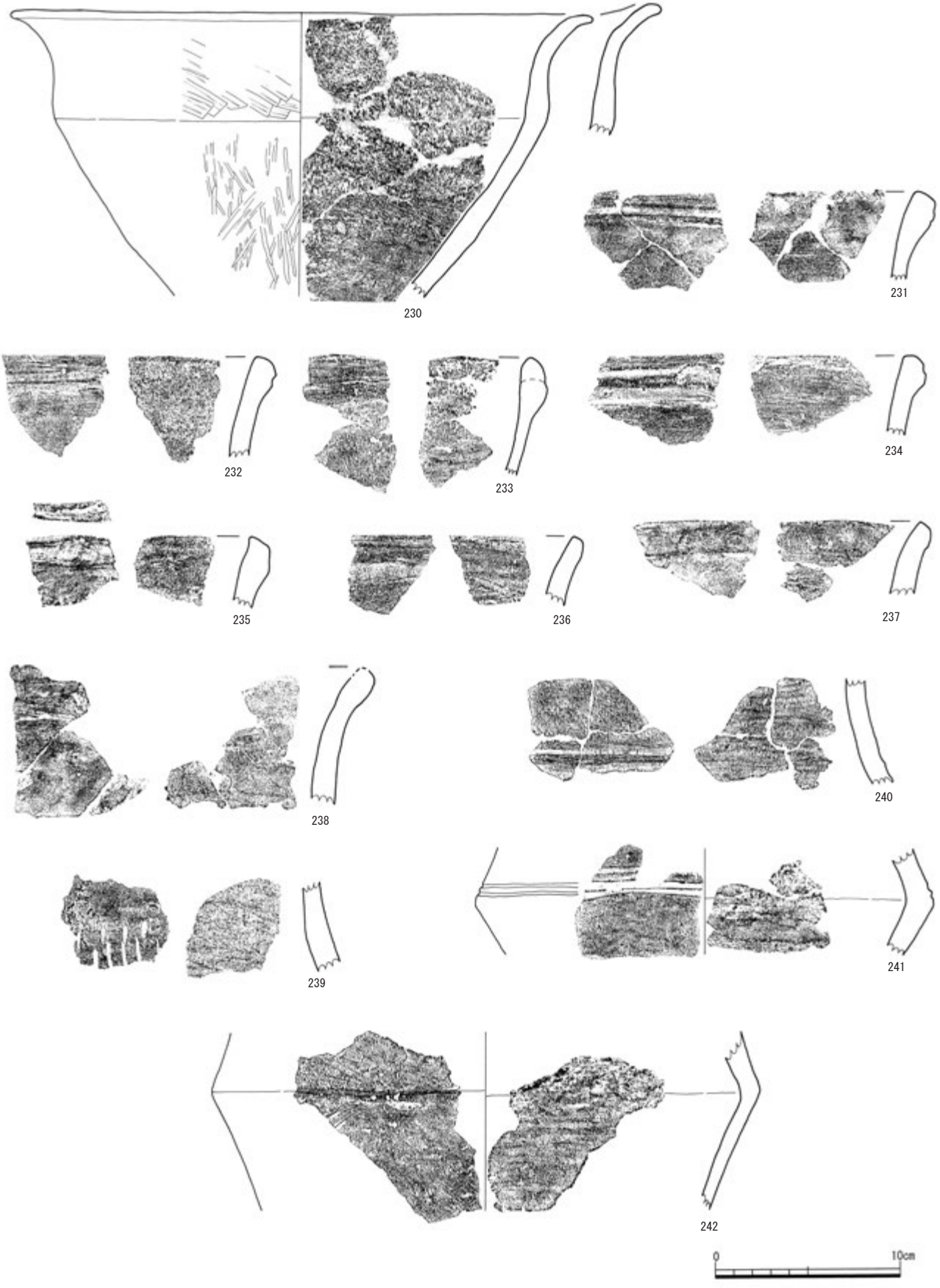
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
								外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
94	230	SI1-84	E-54	Ⅳ	深鉢	口縁部～胴部	ナデ条痕	ミガキ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	にぶい赤褐 5YR5/4
		SI1-202													
	231	SI1-88			深鉢	口縁部	凹線	ミガキ	ミガキ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR4/3
		SI1-91													
		SI1-199													
	232	SI1-184			深鉢	口縁部	凹線	ミガキ	ナデ	○		○		黒．5YR2/1	にぶい赤褐 5YR5/4
	233	SI1-136			深鉢	口縁部	凹線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR7/4
	234	SI1-178			深鉢	口縁部	凹線。刺突文	ナデ	ミガキ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 4/3
	235	SI1-81			深鉢	口縁部	浅い凹線，刺突文	ナデ	ナデ	○		○		橙 7.5YR7/6	褐灰 10YR4/1
	236	SI1-94			深鉢	口縁部	浅い凹線	ミガキ	ミガキ	○		○		黒褐 7.5YR3/1	黒 7.5YR2/1
	237	SI1-57			深鉢	口縁部	浅い凹線	ミガキ	ミガキ	○		○		黒褐 10YR3/1	にぶい褐 7.5Y5/3
	238	SI1-79			深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	オリーブ黒 5Y3/2
		SI1-80													
		一括													
	239	SI1-59			深鉢	胴部	沈線	ミガキ	ナデ	○		○		黒 7.5YR2/1	にぶい橙 5YR6/3
		SI1-89													
	240	SI1-141			深鉢	胴部	凹線，刺突文	ミガキ	ナデ	○		○		黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR5/2
		SI1-194													
		一括													
	241	SI1-29	D-54		深鉢	肩部	凹線	ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/3
	242	SI1-165	E-54		深鉢	胴部		ナデ	ナデ	○	○	○	白粒多	にぶい褐 7.5YR5/4	灰黄褐 10YR6/2
95	243	SI1-9	E-54		深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		灰褐 5YR4/2	にぶい褐 7.5YR5/3
		SI1-152	E-54												
	244	SI1-29	D-54		深鉢	底部		ミガキ	ミガキ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/3
		SI1-55	E-54												
		SI1-62	E-54												
	245	SI1-156	E-54		深鉢	底部		ミガキ	ミガキ	○		○		にぶい黄褐 10YR5/3	褐灰 10YR4/1
	246	SI1-145	D-54		深鉢	底部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	灰褐 7.5YR5/2
		SI1-151	D-54												
	247	SI1-68	E-54		深鉢	底部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4
		SI1-88	E-54												
		一括	E-54												
	248	SI1-8	D-54	Ⅲ下	深鉢	口縁部～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		SI1-21	D -53												
		SI1-50	D-54												
		SI1-134	D -53												
	249	SI1-68	D-54	Ⅲ下	深鉢	口縁部～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		SI1-95	D-54												
		SI1-96	D-54												
		SI1-143	D-54												
		22404	D-54	Ⅱ C											
		22405	D-54												
96	253	22	D-54	Ⅲ下	深鉢	口縁部～胴部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○	○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4
		23													
		24													
		25													
		32													
	254	4	D-54	Ⅲ下	深鉢	口縁部		ミガキ	ミガキ	○	○	○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	255	28	D-54	Ⅲ下	深鉢	底部	条痕	ミガキ	ミガキ	○		○		にぶい橙 5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3
	256	12	D-54	Ⅲ下	深鉢	胴部～底部		ミガキ	ミガキ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/3
		13												にぶい褐 7.5YR6/3	オリーブ黒 7.5Y3/1

表 22　縄文時代後期～晩期　遺構内遺物石器観察表

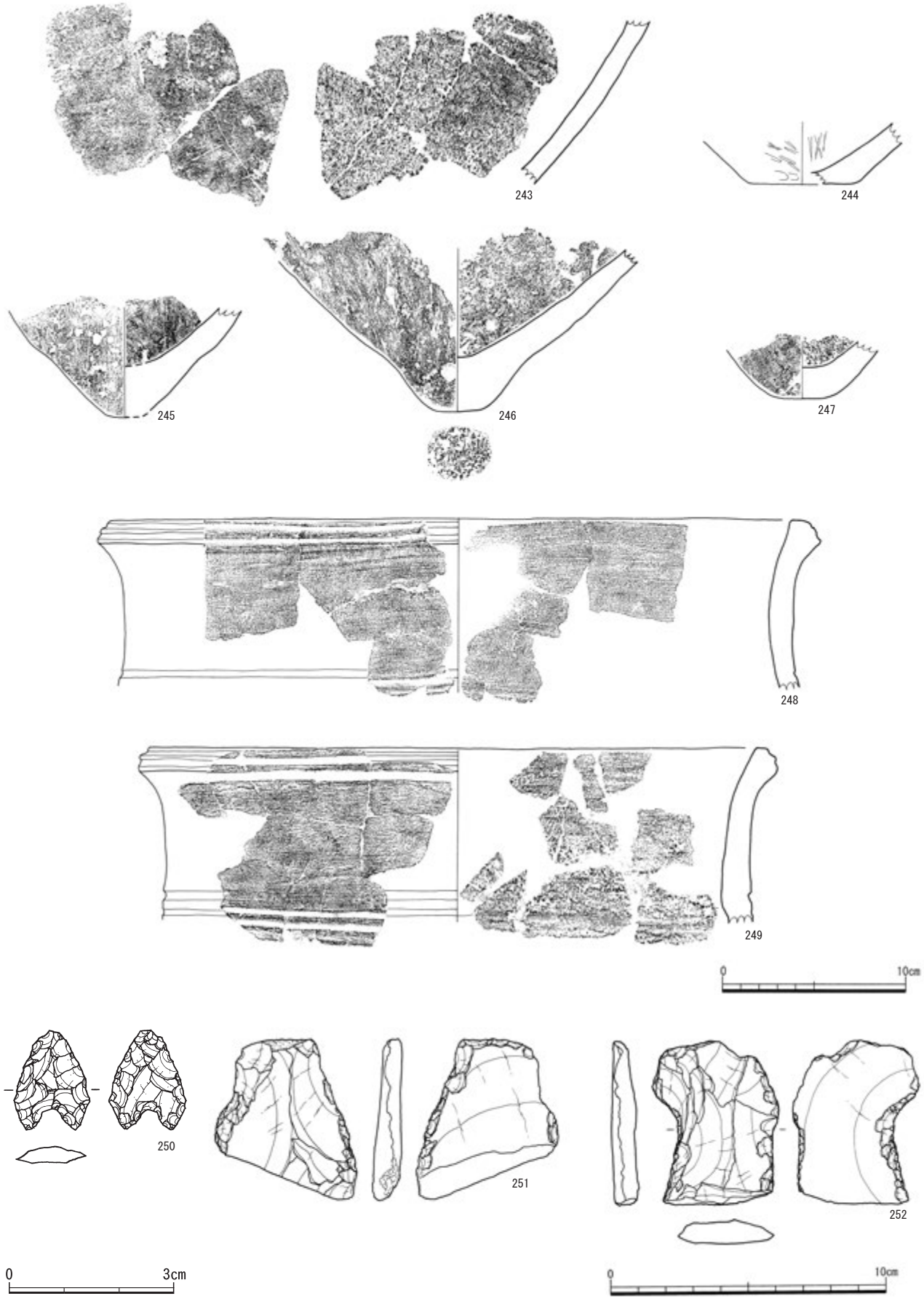
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
92	229	D-54	Ⅳ	土坑 1-1	打製石斧片	ホルンフェルス	8.2	5.5	2	140
95	250	D・E-54	Ⅳ	SI1-83	石鏃	頁岩	1.8	1.4	0.28	0.55
	251			SI1-187	打製石斧	頁岩	5.5	4.7	0.9	29.91
	252			SI1-72	打製石斧片	ホルンフェルス	6	4.6	1	30
96	257	D-54	Ⅲ～Ⅴ	SI2-34	石鏃	頁岩	1.3	0.9	0.2	0.18
	258			SI2-15	磨石	砂岩	5.4	4.3	2	65



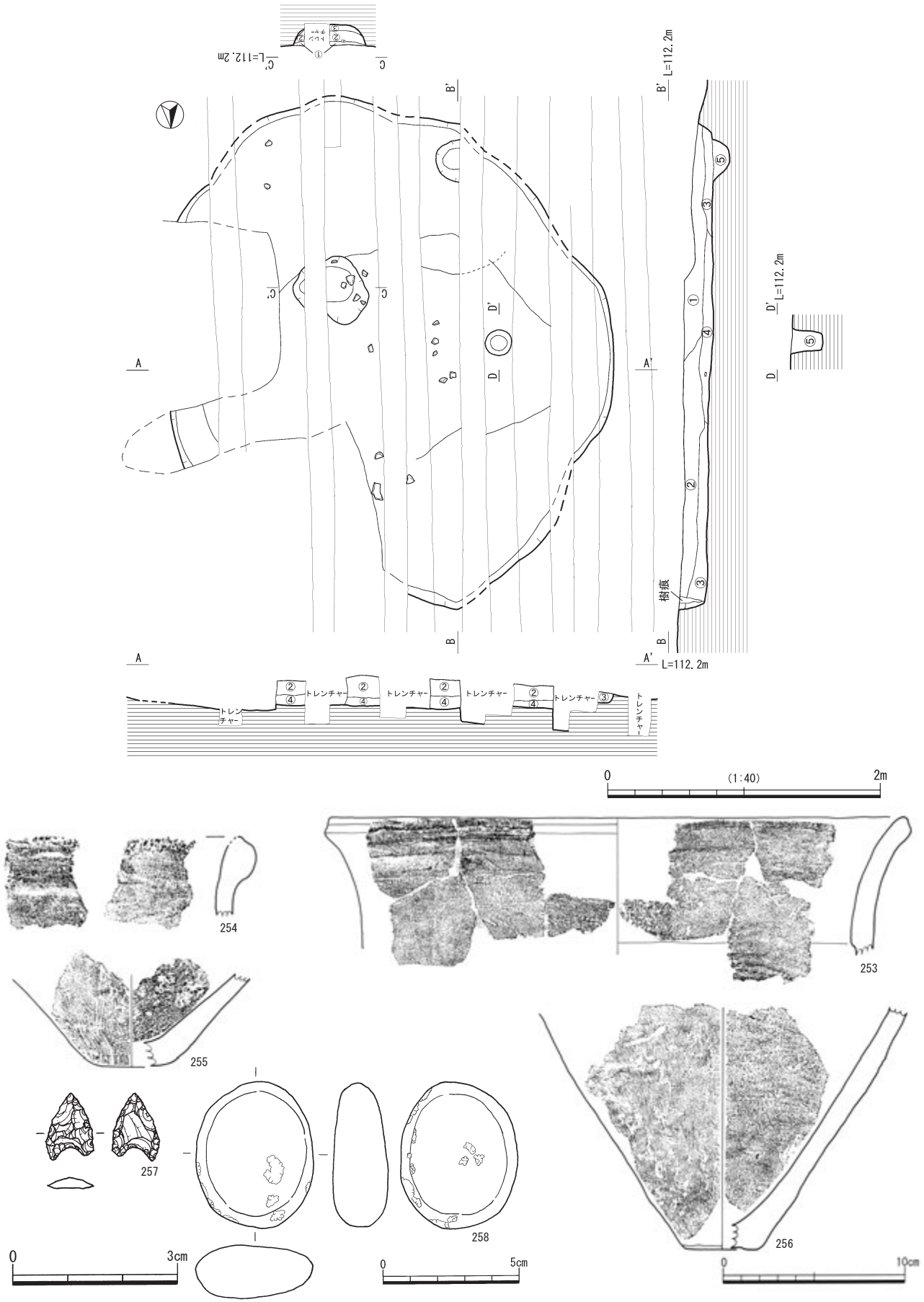
第 93 図　縄文時代後・晩期　竪穴住居跡 1



第 94 図　縄文時代後・晩期　竪穴住居跡 1 遺構内遺物（1）



第 95 図　縄文時代後・晩期　竪穴住居跡 1 遺構内遺物（2）



第 96 図　縄文時代後・晩期　竪穴住居跡２遺構内遺物

集　石

１号（第97図）

G-48区で検出された。やや上面から集石が形成されていたと考えられる。明確な掘り込みや炭化物は確認できなかった。礫は，約150㎝×90㎝の範囲に広がっている。礫の集中度は薄く，周辺での礫の検出も少量だったが，集石の下部と判断し，集石と認定した。

構成礫数は33点で，土器片も1点含まれた。礫の内訳は，砂岩が31点，安山岩が２点であった。礫の平均の重さは101ｇで，100ｇ以下の小さな礫が多く，その礫の割合は63％を占める。角張って見える石も，円礫であったものが被熱破砕したと考えらる。



第 97 図　縄文時代後・晩期　集石

溝状遺構

７条検出された。いずれの遺構も，埋土中からの出土遺物はなかった。

溝状遺構１・２号（第98図）

E-47 ～ 49，E・F-47区のⅢ層で検出された。検出された部分は，１号が長さ約20m，幅が約１m前後，２号が長さ約15m，幅が約0.5m前後で，南東方向に延びている。検出面からの深さは３～ 15㎝である。

溝状遺構３・５号（第99図）

E ～ G-48・49区のⅢ層で検出された。検出された部分は，３号が長さ約20m，幅が約0.５～１m前後，５号が長さ約４m，幅が約0.7m前後で，南東方向に延びている。検出面からの深さは，３号が10㎝前後，５号は断面は未実測である。

溝状遺構４号（第100図）

F･G-48･49区のⅢ層で検出された。検出された部分は，長さが約14m，幅が約1.7m前後で，南東方向に延びている。検出面からの深さは，10㎝前後である。

溝状遺構６・７号（第101図）

B・C-49・50区のⅢ層で検出された。検出された部分は，６号が長さ約11m，幅が約0.８～ 0.5m，７号が長さ約14m，幅が約0.９～ 1.2mで，南西方向に延びている。検出面からの深さは，６号が10 ～ 15㎝，７号は未実測である。Ⅲ層での検出ではあるが，Ⅱ層はほとんど残っておらず，場所によっては近年の耕作等によりⅢ層上面も削平を受けている。６号の埋土には白色パミスは見られず，７号よりも若干古く，近世とも考えられる。７号の埋土には白色パミスが多く含まれていたことから，近世以降とも考えられる。

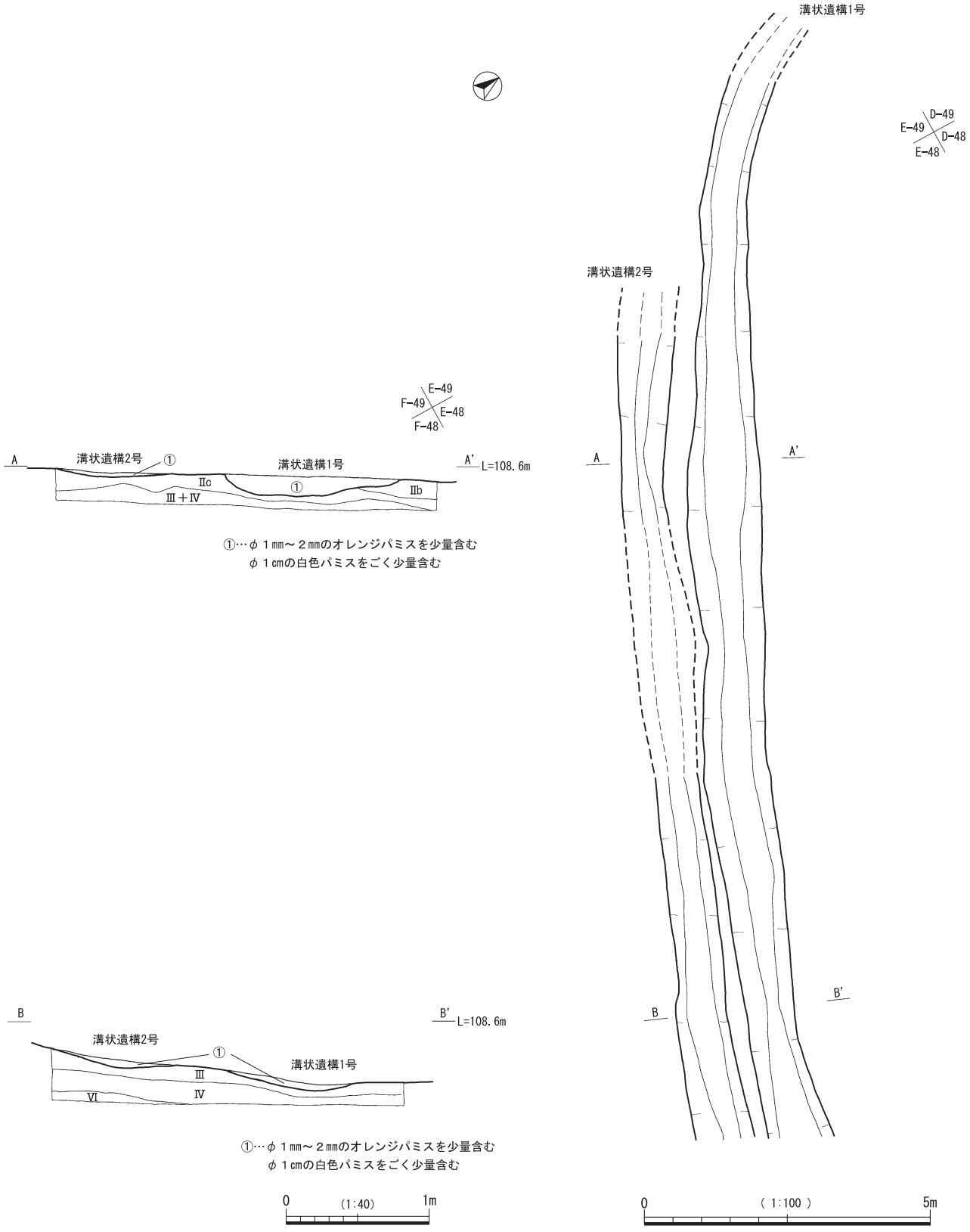
硬化面（第102図　259）

D-54区で検出された。土器片が集中していた箇所を精査していたところ，黒曜石の剥片が多数出土してきた。硬化面の中でも，特に黒色が強い部分のトレンチャーの跡の土を抜いてみると，黒色の部分が予想以上に広がることが断面から分かった。住居が，廃墟になったあとにこの場所で石鏃製作等が行われたのではないかと考えられる。259は硬化面至近の埋設土器遺構内で検出された土器で，底部付近である。わずかに平底をなし，外面は丁寧に磨かれる。内面には煤が付着している。

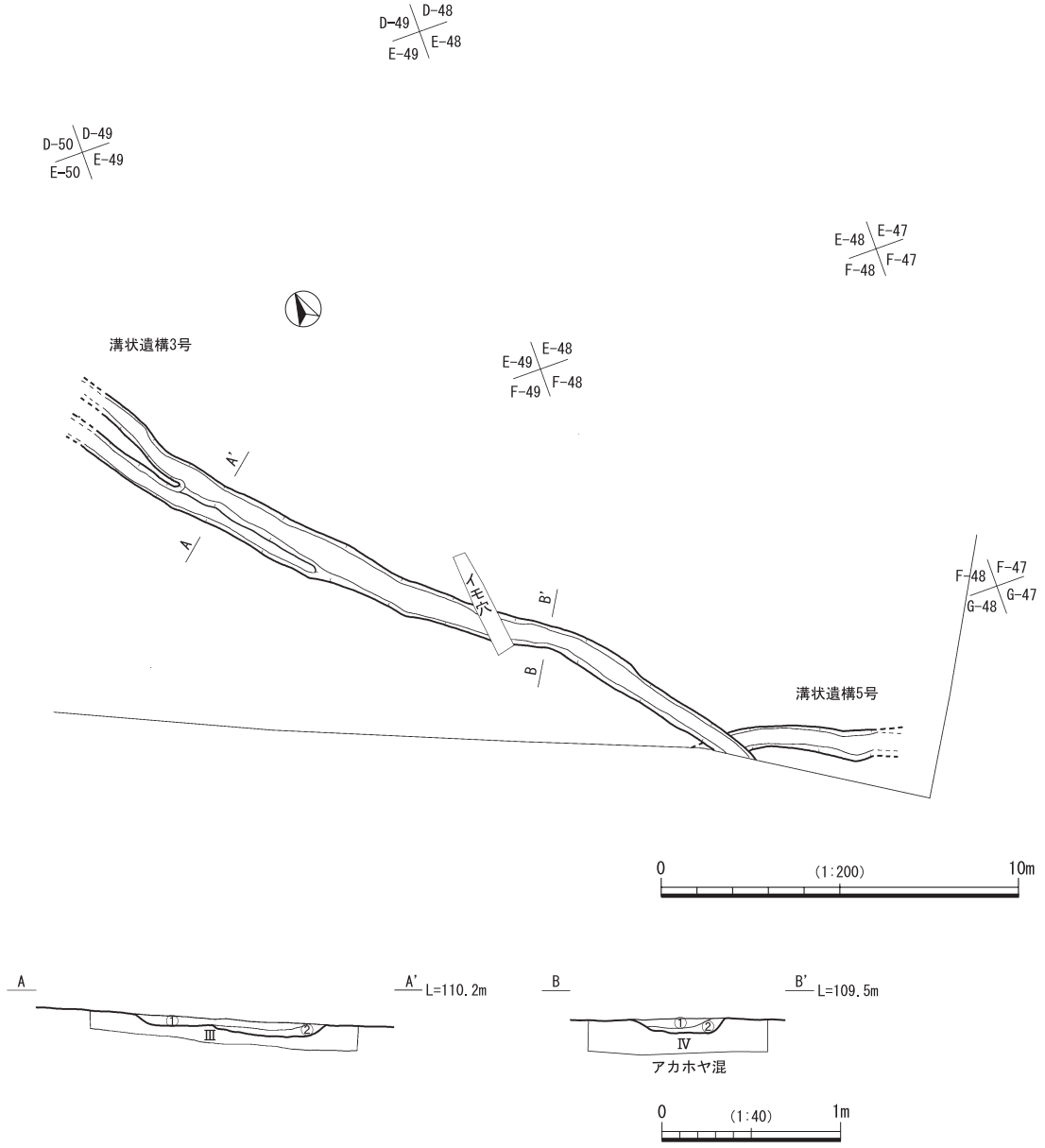
土器埋設遺構（第103図　260）

土器埋設遺構は，F-49区Ⅲ層下部からⅣ層で検出された。Ⅱ層からⅢ層上位は削平を受けていたことと，Ⅲ層以下の堆積が良好ではなかったため，検出が遅くなった感はある。明確な掘り方はつかめなかったため，平面図には床面（下部）は記していない。中岳Ⅱ式と思われる土器が正位で検出され，胴部以下が残存していたので，埋設土器として取り上げた。上の部分に関しては層の不安定さのため，検出が遅れたこともあり，付近の遺物として点上げ，もしくは一括遺物として取り上げた。

260は埋設土器遺構内で検出された土器で底部から胴部の屈曲部分まで残存していた。胴部の上部で屈曲し，２条の沈線が巡ると思われる。わずかに平底をなす。外面はミガキで内面は胴部の上部のみミガキが観察される。

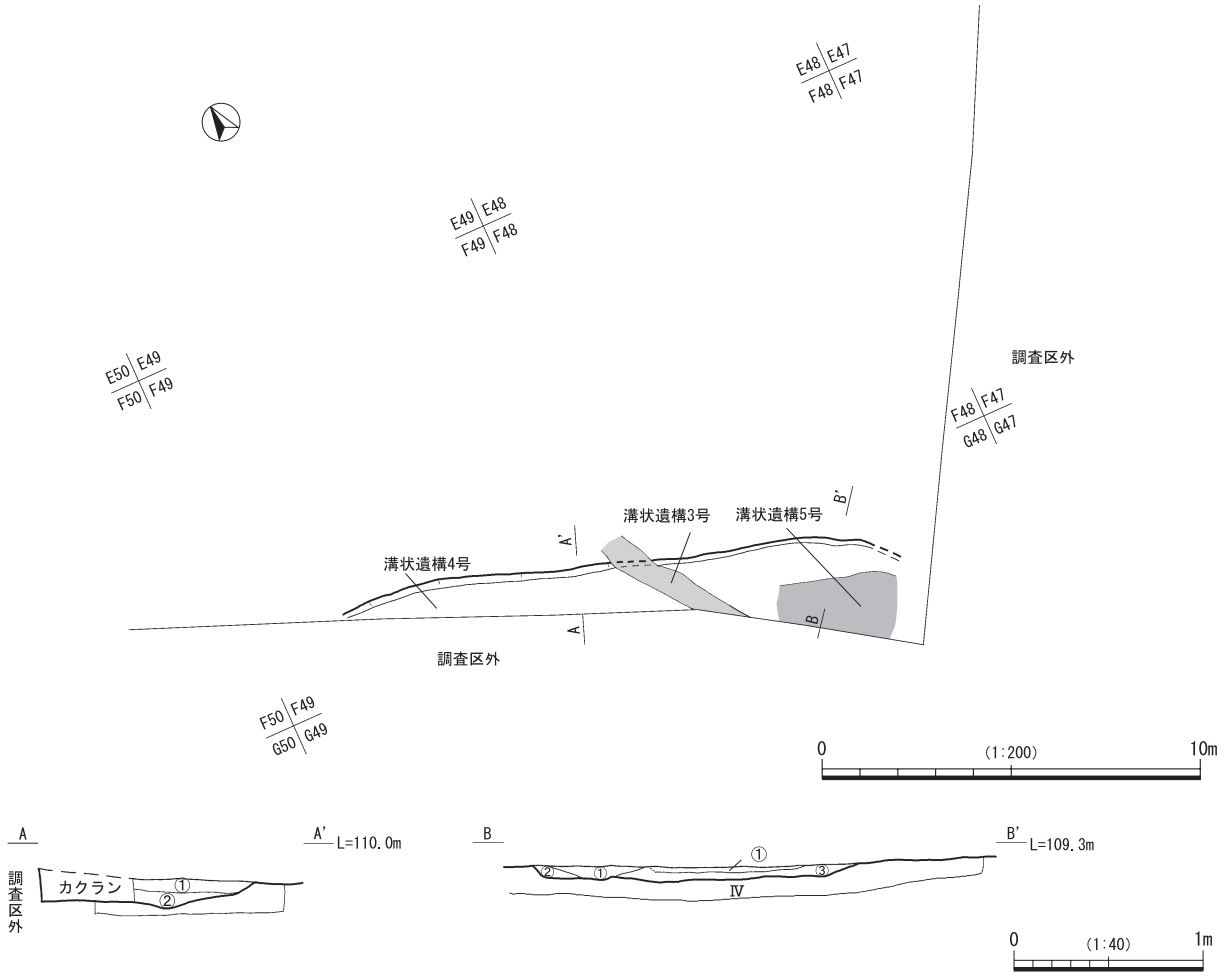


第 98 図　縄文時代後・晩期　溝状遺構 (1)



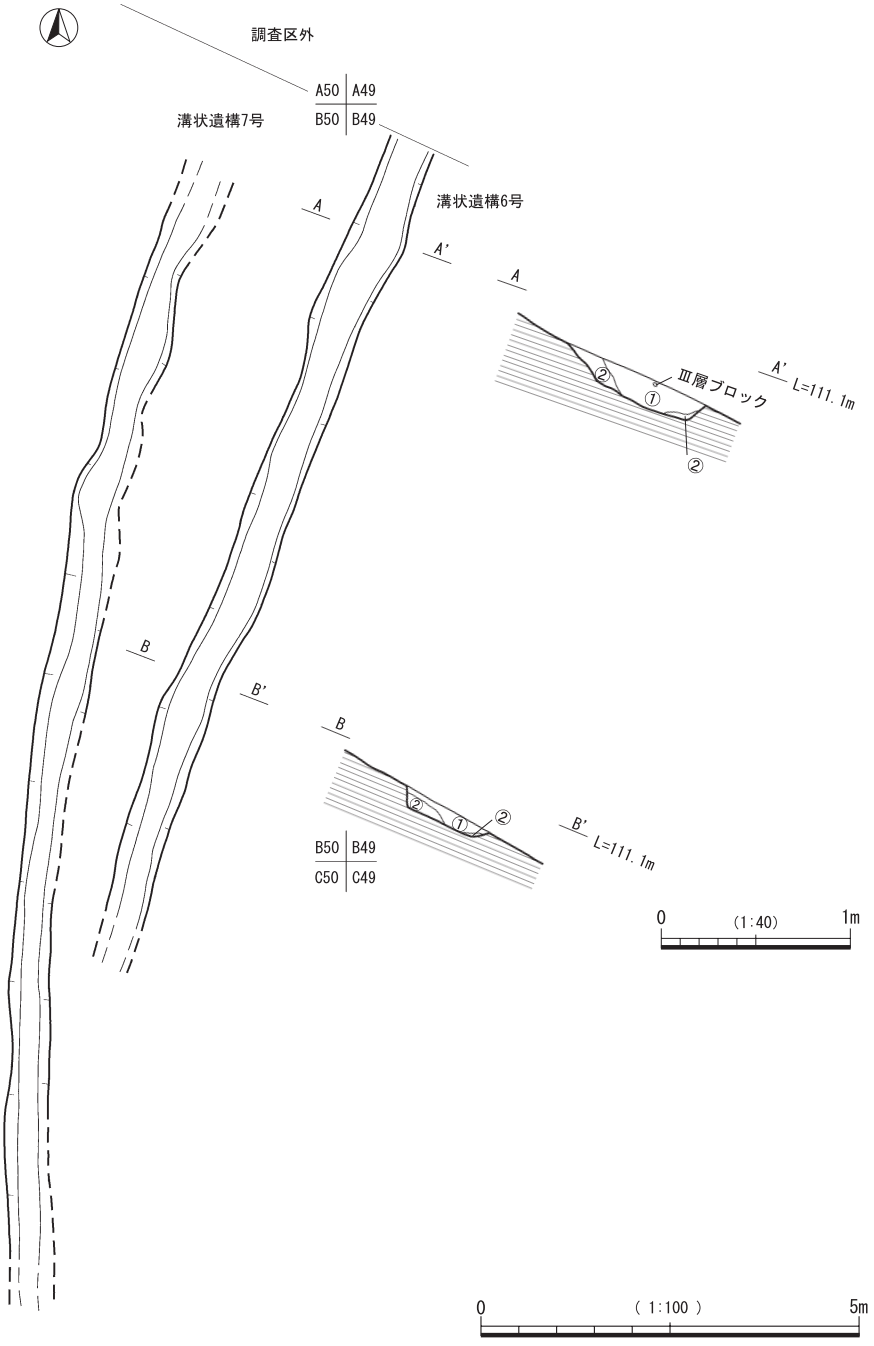
第 99 図　縄文時代後・晩期　溝状遺構 (2)

		色調	粘性	しまり	砂　　質
溝状遺構３ 断面 A-A'	①	黒色 7.5YR2/1	弱	弱	白色パミスとオレンジパミスφ１～ 3mm が全体に混ざる
	②	黒褐色 10YR2/3	弱	弱	黒色土にⅢ層の御池パミスがやや混ざる。①より，しまりが弱い
溝状遺構３ 断面 B-B'	①	黒色 7.5YR2/1	弱	弱	白色パミスとオレンジパミスφ１～ 3mm が全体に混ざる
	②	黒褐色 10YR2/3	弱	弱	黒色土にⅢ層の御池パミスがやや混ざる。①より，しまりが弱い



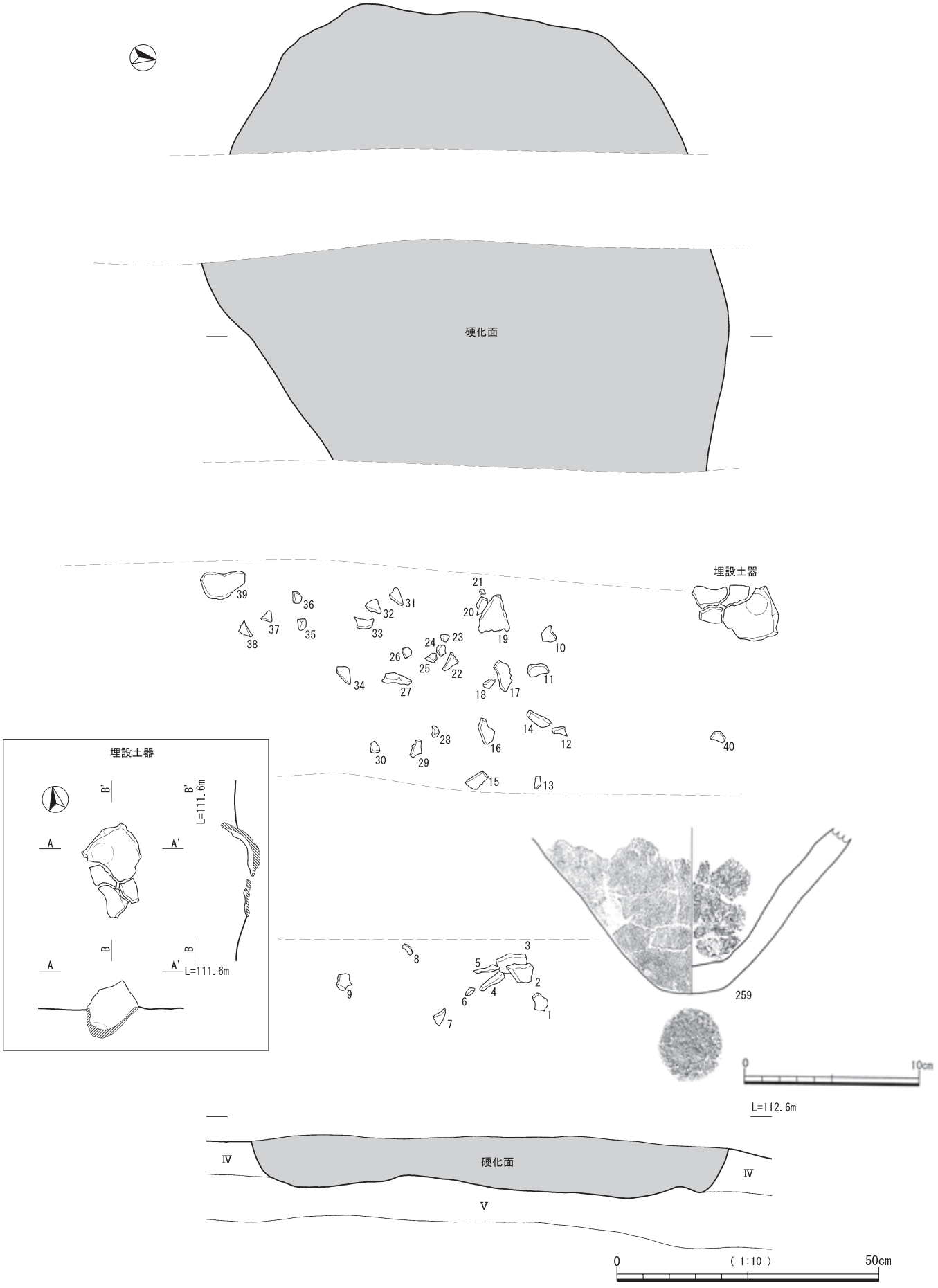
第 100 図　縄文時代後・晩期　溝状遺構 (3)

		色調	粘性	しまり	砂　　質
溝状遺構４ 断面 A-A'	①	黒色 7.5YR2/1	弱	弱	白色パミスとオレンジパミス（φ 1㎜）もわずかに混ざる
	②	暗褐色 10YR3/4	弱	弱	黒色土にオレンジブロックがまばらに混ざる（Ⅳ層相当）
溝状遺構４ 断面 B-B'	①	黒色 7.5YR2/1	弱	弱	白色パミスとオレンジパミス（φ 1㎜）もわずかに混ざる
	②	黒褐色 10YR2/3	弱	弱	黒色土にⅢ層の御池パミスがやや混ざる。①より，しまりが弱い
	③	暗褐色 10YR3/4	弱	弱	黒色土にオレンジブロックがまばらに混ざる（Ⅳ層相当）

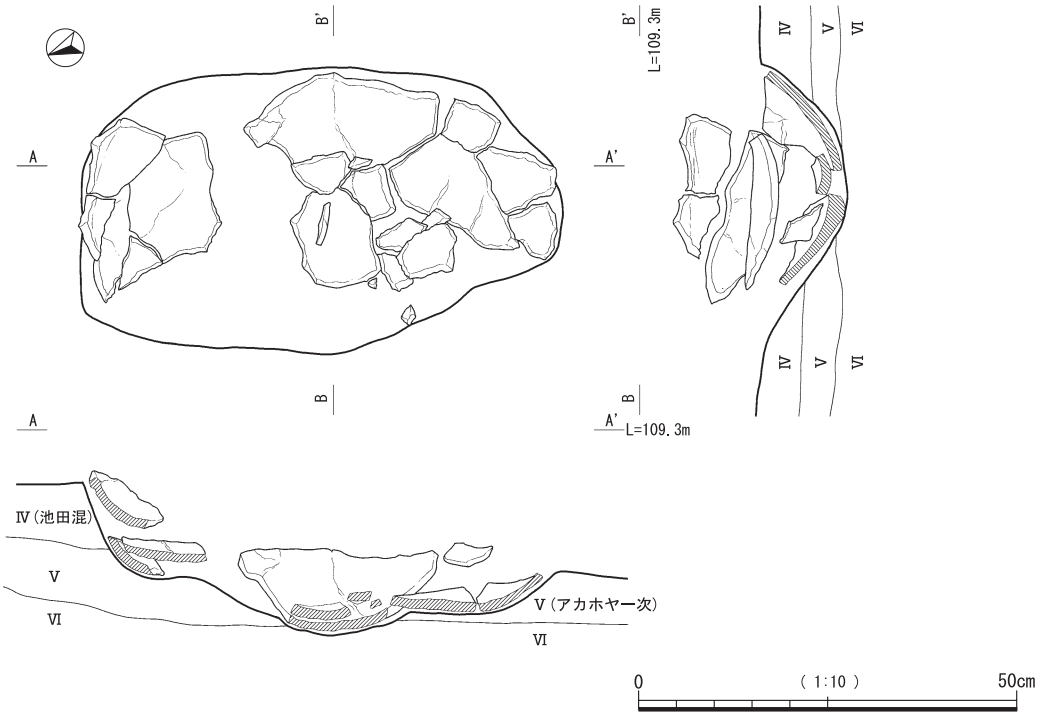


第 101 図　縄文時代後・晩期　溝状遺構 (4)

		色調	粘性	しまり	砂　　質
溝状遺構６ 断面 A-A', B-B'	①	黒色 10YR2/1	弱	なし	黒色土にφ 1 ～ 2㎜のオレンジパミスがわずかに混ざる
	②	黒色 10YR3/2	弱	なし	黒色土にφ 5 ～ 15㎜のⅢ層オレンジブロックが混ざる



第 102 図　硬化面，埋設土器





第 103 図　埋設土器遺構，埋設土器

表 23　縄文時代後期～晩期　埋設土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部　位	文　様	器面調整		胎　土				色	調
								外　面	内　面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外　面	内　面
102	259	SJ 2-1 SJ 2-2 SJ 2-3 SJ 2-4	D-54	Ⅲ	深鉢	胴部～底部		ミガキ	ナデ	○		○	○	にぶい橙 7.5YR6/4	灰褐 7.5YR6/2
103	260	SJ 1-2 SJ 1-5 SJ 1-6 SJ 1-7 SJ 1-8 SJ 1-9 SJ 1-10 SJ 1-11 SJ 1-12 SJ 1-13 SJ 1-14 SJ 1-15 SJ 1-16 SJ 1-17 SJ 1-18 20765 撹乱	F-49	Ⅳ	深鉢	肩部～底部	凹線	ミガキ	ナデ	○		○	○	にぶい褐 7.5YR5/3	灰褐 7.5YR5/2

（イ）縄文時代後期の遺物

土　器（第104 ～ 107図　261 ～ 343）

中岳Ⅱ式該当の土器群である。竪穴住居跡のあるD・E－54区や埋設土器検出箇所に集中して出土した。

261 ～ 270は口縁部で，口唇部が平坦で断面三角形の外面に２条の沈線を巡らし，内面を凹ませるものである。261は内面に幅１㎝程度のはっきりとした凹線が巡る。262，266は同一個体と思われる。表面にクラックが入る特徴がある。263，264も同一個体である。268，267は丁寧なミガキが施されている。269は比較的太い肥厚具合である。

271 ～ 277は肥厚した外面に２条の沈線が巡るが，内面には凹みが見られない。口唇部は丸みをもつものと275・276のように平坦なものがある。平坦な２点は明瞭なミガキが施されている。

278 ～ 281は外面に１条の沈線が巡るものである。278と279は同一個体で，口唇部は平坦で，内面を強い凹線が巡る。肥厚部は小さい。280と281は端部がやや尖り気味となる。沈線は不明瞭である。

282 ～ 286は口縁肥厚部外面に縦方向の刻みを施すものである。282は内湾気味の口縁で外面には横方向の沈線と半月状の凹線が見られる。283，284，285は内湾気味の口縁で口唇部が平坦である。285は口唇部にも部分的に刻みが見られる。

287 ～ 290は口縁部を肥厚させるが文様のないものである。

291 ～ 299は胴部の屈曲部付近で，沈線が２条巡るものである。291，299は丸みをもちつつ大きく屈曲するものである。

300は口縁部から胴部である。胴部で屈曲し，内湾気味に立ち上がり口縁でやや外反する。口縁端部を肥厚させ，外面に１条の沈線が巡る。屈曲した胴部の上に２条の沈線が巡る。外面の調整はミガキで内面はナデと思われる。

301 ～ 307は胴部に１条の沈線が巡るものであるが，割れた箇所によって本来は２条のものもあるかも知れない。301と307は同一個体でやや鋭い沈線である。304，305は丸みをもつ胴部である。丁寧なミガキ調整である。307は屈曲は目立たず，直線的に立ち上がると思われる。丁寧なミガキである。

306は端部が欠損しているが，口縁部と思われる。断面三角形で１条の沈線の下に，斜方向の刻みが施される。

308 ～ 315は胴部に刻みが巡るものである。308，309は２条の沈線の下にやや太めの刻みが巡る。310，311も２条の沈線が巡るが刻みは間隔が空いている。314は１条の沈線の下に刻みが巡る。312，313は沈線は見られないが，胴部最大径付近に刻みが巡るものである。刻みは棒状工具で刺すように施す。315は内外面ともに横方向のミガキが施されるもので，胴部最大径付近に縦方向の刻みが巡る。

316 ～ 332は胴部である。胴部最大径付近から口縁部に向かって内傾気味に立ち上がるものである。調整はミガキである。

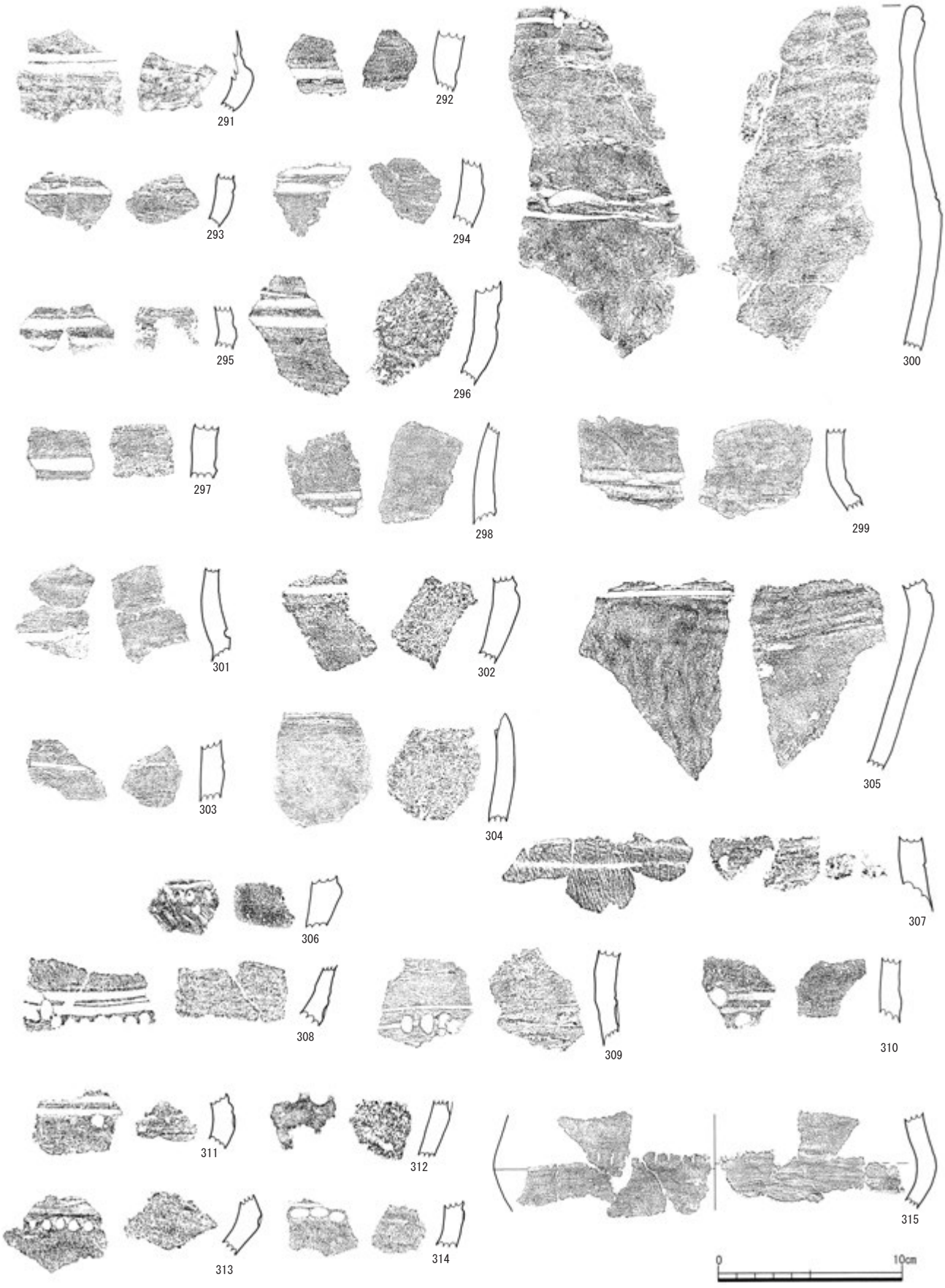
323 ～ 330は胴部最大径付近のものである。324は工具ナデ調整である。331には１条の沈線が見られる。325，326，329は同一個体である。

333 ～ 340は胴部下半である。外面は縦方向のミガキ調整が施されている。340は下方に剥離面が見られる。339，337，334は底部付近で内面に炭化物が付着している。

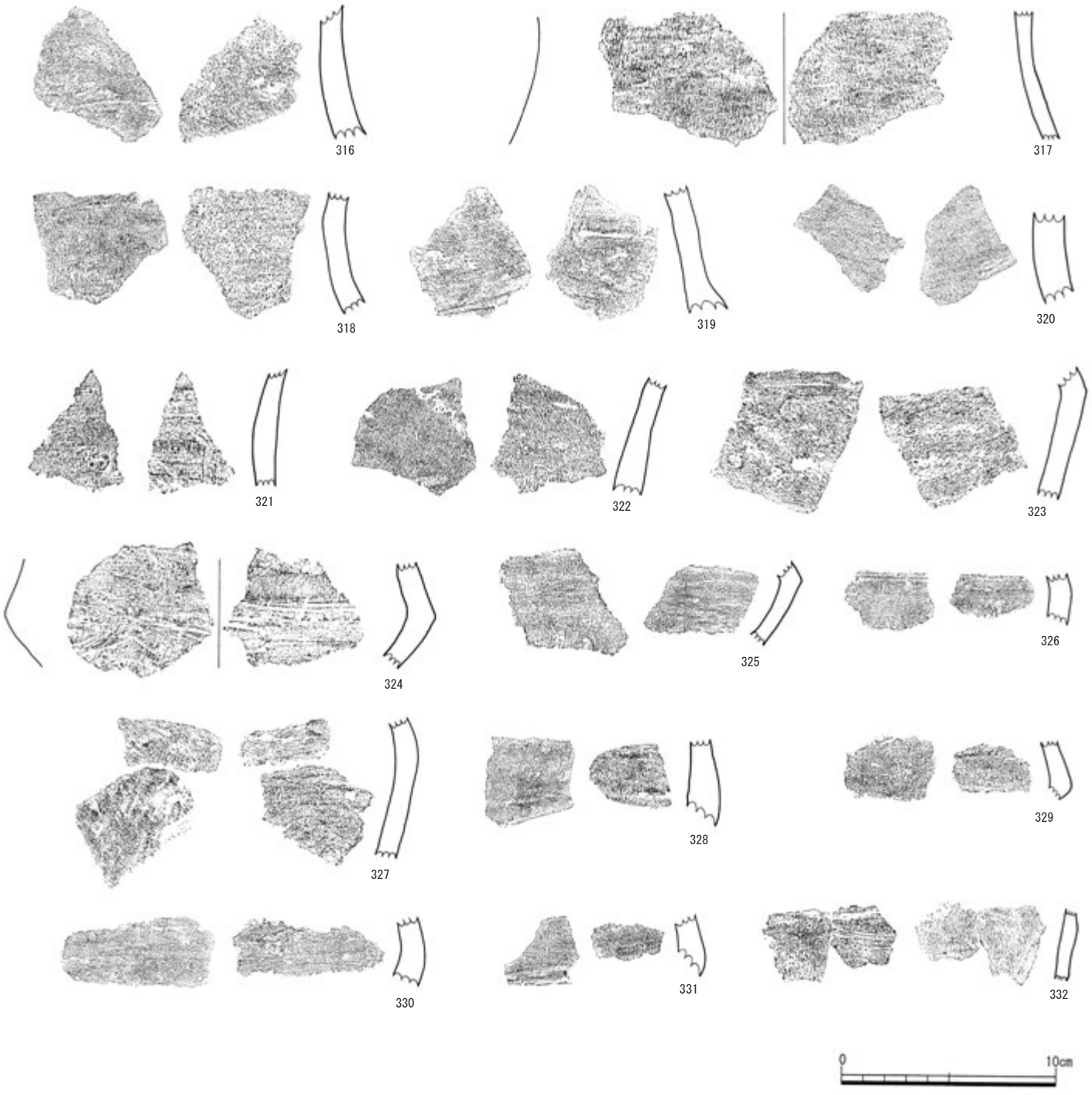
341，342，343は底部である。いずれもわずかに平底を呈する。外面はミガキである。341の内面には炭化物が付着する。



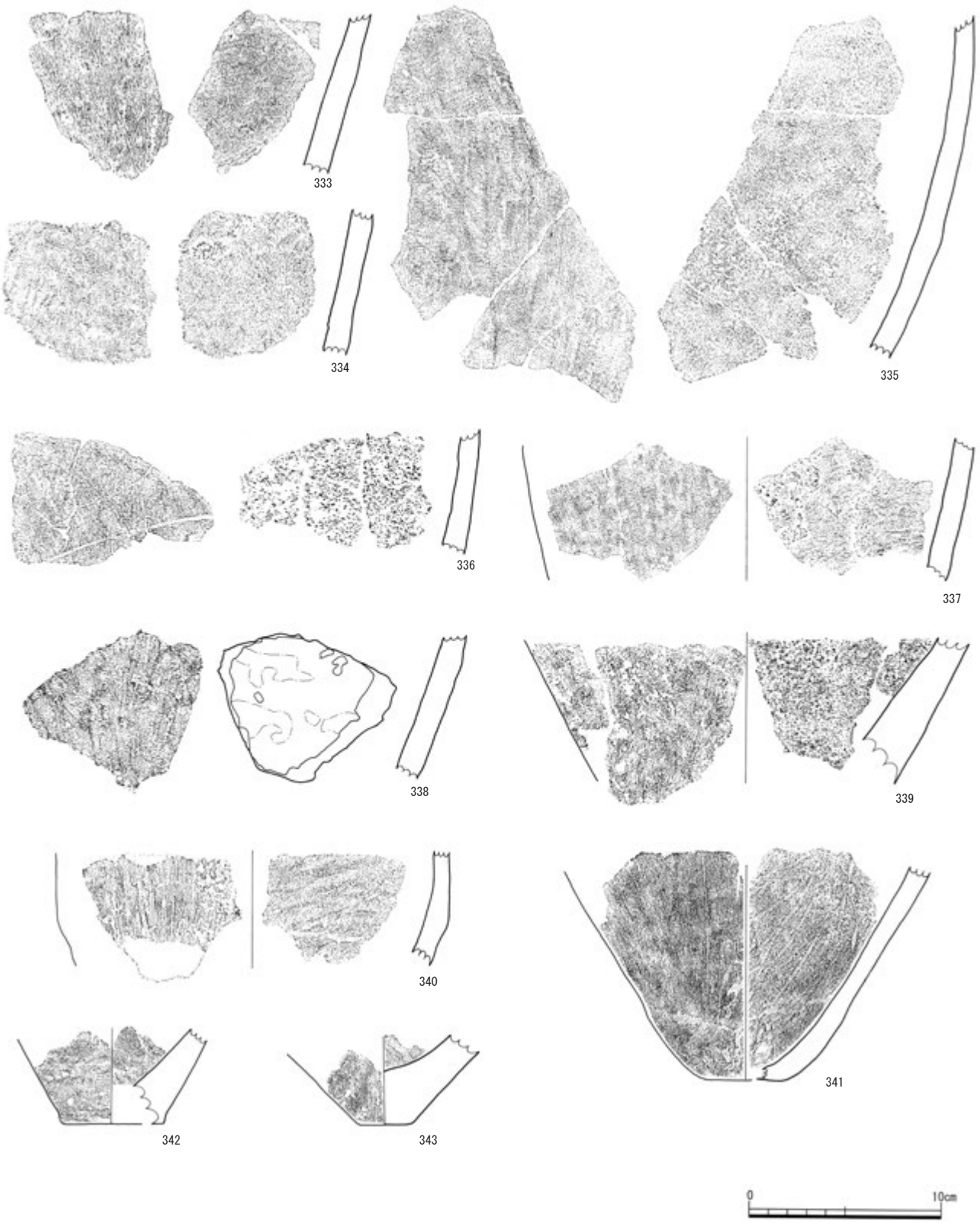
第 104 図　縄文時代後期　土器 (1)



第 105 図　縄文時代後期　土器 (2)



第 106 図　縄文時代後期　土器 (3)



第 107 図　縄文時代後期　土器 (4)

表 24　縄文時代後期土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
								外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
104	261	20202	E-48	Ⅱb	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		浅黄橙 10YR8/4	赤 5YR4/6
	262	20005 20249	F-49 D-48	Ⅱc Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		褐 10YR4/4	灰黄褐 10YR4/2
	263	20760	D-48	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/4
	264	20521	C-49	Ⅱb	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		橙 7.5YR6/6	褐灰 7.5YR4/1
	265	20791	F-49	Ⅱ	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR6/3	黄褐 10YR5/6
	266	20008	F-49	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR4/3
	267	20117	C-49	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		灰褐 7.5YR4/2	褐 7.5YR4/3
	268	一括	F-50		深鉢	口縁部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		暗褐 7.5YR3/4	黒褐 7.5YR3/2
	269	一括	E-49		深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/4
	270	一括	E-48	表採	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		黄褐 10YR5/6	黄橙 10YR7/4
	271	一括	B-49		深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 10YR7/4	黒褐 2.5Y3/1
	272	一括	F-49		深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	明黄褐 10YR7/6
	273	一括	C-49		深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	274	20063	D-49	Ⅱb	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		明褐 7.5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4
	275	27585	E-55	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4
	276	一括	C-47	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		黒褐 7.5YR3/1	にぶい褐 7.5YR5/4
	277	一括	F-49		深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		黒褐 10YR3/1	灰黄褐 10YR5/2
	278	20786	F-49	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		明黄褐 10YR7/6	にぶい黄橙 10YR6/4
	279	20022	F-49	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6
	280	一括	D-55	Ⅱ	深鉢	口縁部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		黒褐 7.5YR3/1	にぶい黄橙 7.5YR7/4
	281	21842	E-54	Ⅱc	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	赤褐 5YR4/6
	282	20480	C-48	Ⅱb	深鉢	口縁部	沈線，楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		褐 7.5YR 5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	283	20775	C-49	Ⅱb	深鉢	口縁部	凹線，楕円形の凹点刺突	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		黒褐 10YR3/1	黒 10YR2/1
	284	20467	C-48	Ⅱb	深鉢	口縁部	凹線，円形の凹点刺突	ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		黒 10YR2/1	にぶい赤褐 5YR4/4
	285	一括	F-49	Ⅱc	深鉢	口縁部	円や楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/8	赤褐 5YR4/8
	286	22374	D-54	Ⅱc	深鉢	口縁部	楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/4
	287	20001 20172	F-48 F-49	Ⅱc Ⅲc	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4
	288	20298	C-49	Ⅱb	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ後ミガキ	○		○		赤褐 5YR4/6	灰黄褐 10YR4/2
	289	一括	G-49	表採	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		橙 7.5YR6/6	にぶい褐 7.5YR5/4
	290	一括	C-54，55	Ⅱ	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	黒褐 7.5YR3/1
105	291	20542	D-48	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	灰黄褐 10YR4/2
	292	20534	C-49	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		黒 10YR2/1	明赤褐 5YR5/6
	293	20834	E-54	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		黒褐 7.5YR3/1	黒褐 10YR3/2
	294	20549	E-54	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	赤褐 5YR4/6
	295	20831	E-54	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい橙 7.5YR6/4
	296	一括	C-54	表採	深鉢	胴部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		灰褐 7.5YR4/2	にぶい赤褐 5YR4/4
	297	20507	B-48	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6
	298	20186	F-49	Ⅲc	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	黒 10YR2/1
	299	20071	D-49	Ⅱb	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	黒褐 10YR3/2
	300	20836 21841	E-54 E-54	Ⅱc Ⅱc	深鉢	口縁部～胴部	沈線	ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5R5/4
	301	20483 20484	C-48 C-48	Ⅱc Ⅱb	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	灰褐 10YR4/1
	302	20167	F-48	Ⅲc	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	黒褐 2.5Y3/1
	303	20776	C-49	Ⅱb	深鉢	胴部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4
	304	20848	C-54	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		赤褐 5YR4/6	にぶい褐 7.5YR5/4
	305	20589	D-54	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線	ミガキ	ナデ	○		○		赤褐 5YR4/6	褐 7.5YR4/3
	306	20089	D-48	Ⅱb		口縁部	沈線，刻み	ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	307	20435 一括	C-48 F-50	Ⅱc 表採	深鉢	胴部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		黒 10YR2/1	にぶい褐 7.5YR5/4
	308	20478 20621	C-48 C-48	Ⅱb Ⅱc	深鉢	胴部	凹線，楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 5YR5/6
	309	20772	F-49	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線，楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 5YR4/3
	310	一括	G-49	表採	深鉢	胴部	凹線，楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	黒 2.5YR2/1
	311	20032	E-47	Ⅱc	深鉢	胴部	凹線，楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/4
	312	20525	C-49	Ⅱc	深鉢	胴部	楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		黒褐 5YR2/1	にぶい赤褐 5YR4/3
	313	一括	C-54，55	Ⅱ	深鉢	胴部	楕円形の凹点刺突	ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		黒 7YR2/1	黒褐 10YR3/1
	314	20680	E-48	Ⅱc	深鉢	胴部	沈線，楕円形の凹点刺突	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4
	315	20827 20828 20830 20833 22368	E-54 E-54 E-54 E-54 E-54	Ⅱc Ⅱc Ⅱc Ⅱc Ⅱc	深鉢	胴部	刻み	ミガキ	ミガキ	○		○		にぶい赤褐 2.5YR4/4	にぶい褐 7.5YR5/4
106	316	20199	E-49	Ⅱb	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR6/3	黒褐 10YR3/1
	317	一括	G-49	表採	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	318	22372	D-54	Ⅱc	深鉢	頸部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/3
	319	一括	C-54	表採	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		にぶい赤褐 2.5YR4/4	にぶい赤褐 5YR5/4
	320	20537	C-49	Ⅱc	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		黒 10YR2/1	にぶい赤褐 5YR4/3
	321	一括	D-55	Ⅱ	深鉢	頸部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		黒 2.5YR2/1	明赤褐 5YR5/6
	322	27586	E-55	Ⅱc	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/3	にぶい褐 7.5YR5/4
	323	22367	E-54	Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4
	324	一括	C-51	表採	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい赤褐 5YR5/4
	325	20239	E-47	Ⅱb	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	黒褐 7.5YR3/1
	326	20546	D-49	Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR5/3
	327	20187 20188	F-49 F-49	Ⅱc Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい黄橙 10YR4/3
	328	20854	C-54	Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄褐 10YR5/3
	329	20759	E-48	Ⅱb	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	灰褐 7.5YR4/2
	330	20362	D-48	Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/3
	331	20635	D-48	Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		黒褐 7.5YR2/2	黒褐 10YR3/2
	332	20754 20756	D-48 D-48	Ⅱc Ⅱb	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4
107	333	20326	D-54	Ⅱc	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR4/4	黒褐 10YR3/1
	334	一括	F-48	表採	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	黒褐 5YR2/1
	335	20175 20173 20176	F-49 F-49 F-49	Ⅲc Ⅲc Ⅲc	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい黄褐 10YR5/3
	336	20814	D-54	Ⅱc	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/3
	337	一括	F-50	表採	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		明赤褐 2.5YR5/6	黒褐 10YR3/1
	338	22398	D-54	Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	黒 7.5YR2/1
	339	20663 20610	E-48 C-48	Ⅱc Ⅱc	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		橙 7.5YR6/6	黒 10YR2/1
	340	一括	G-49	表採	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	341	20701 20702 20703	E-47 E-47 E-47	Ⅱc Ⅱc Ⅱb	深鉢	胴部～底部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	黒 10YR2/1
	342	20657	E-48	Ⅱc	深鉢	底部		ミガキ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	黒褐 10YR3/1
	343	20155	D-54	Ⅲc	深鉢	底部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR4/4	暗灰黄 2.5R4/2

石　器

剥片石器

石　鏃(第108図　344 ～ 346)

344は，剥片形状を残し，欠損は見られるものの長幅比はほぼ1:1で，長さ幅とも15㎜以内の小型の石鏃で，抉りがなく未製品と考えられる。345は平基である。長幅比は0.78:1で長さが幅より短い。腹面中央に主要剥離面を残し，剥片形状を残す。346は，下位に角張った張出をもつ五角形鏃である。深い抉りが入り，脚部先端部が鋭角になる。

石　匙(第108図　347)

347は，光りの鈍い黒曜石の石匙である。刃部右側を欠損している。刃部に対して摘まみが大きい形状である。刃部は直線的に整形されている。

礫石器

石　斧(第108図　348 ～ 355)

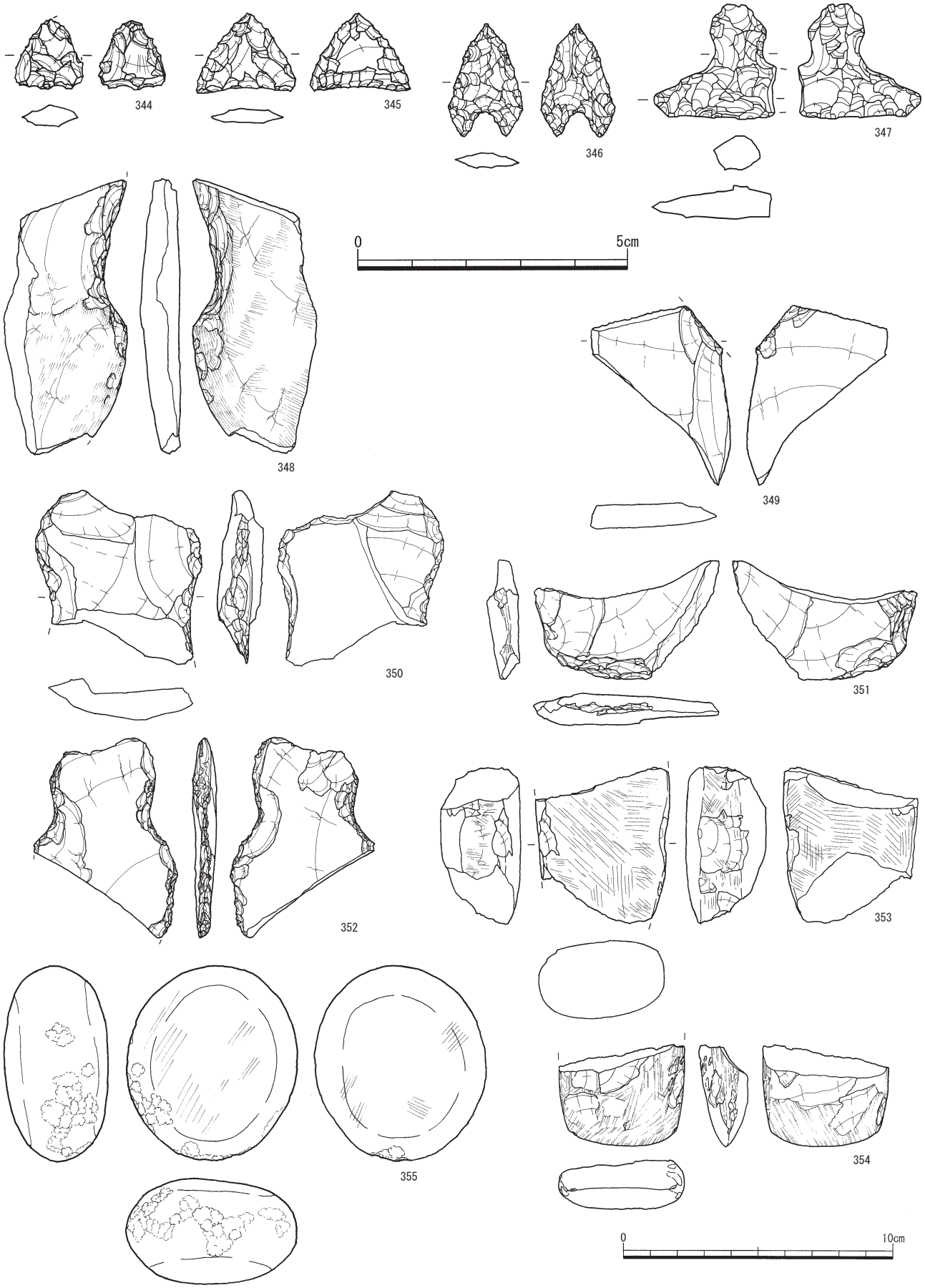
348 ～ 352は打製石斧である。348は抉り部から刃部にかけての部分で，摩耗痕がある。横剥ぎの素材剥片を使用している。349は側縁部の一部で，350は基部から抉り部にかけてのところである。351は刃部の一部の可能性があるが，製作・整形時の剥片の可能性が高い。352は刃部が欠損した打製石斧で,基部から抉り部がよく残る。横剥ぎの蔬菜剥片を使用している。

353，354は磨製石斧である。353は胴部で全面がよく研磨され，伐採斧の破損部である。354は刃部で，やはり伐採斧である。

355は磨・敲石である。表裏面平坦面に擦痕がみられ，下部に敲打痕が偏る。ハンマーストーンの可能性もある。

表 25　縄文時代後期～晩期石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（ｇ）
108	344	D-49	Ⅱ C	20080	打製石鏃	黒曜石	1.25	1.25	0.35	0.52
	345	D-54	表採	一括	石鏃	頁岩	1.4	1.8	0.25	0.6
	346	C-48	Ⅱ C	20501	打製石鏃	頁岩	2.1	1.4	0.3	0.61
	347	E-54	Ⅱ C	20124	石匙	黒曜石	2.1	2.2	0.6	2.16
	348	D-49	Ⅱ b	20054	打製石斧	頁岩	10.1	4.5	1.4	72.57
	349	E-49	Ⅱ b	20197	打製石斧	泥岩	5.1	4.8	0.9	32.12
	350	C-48	Ⅱ b	20454	打製石斧	頁岩	5.2	6.1	1.5	55.39
	351	D-55	Ⅱ c	22376	打製石斧	頁岩	3.3	6.4	1.2	29.85
	352	D-49	Ⅱ b	20067	打製石斧	ホルンフェルス	7.6	5.3	0.9	30
	353	E-49	Ⅱ c	20229	磨製石斧	砂岩	5.6	4.9	2.9	113.84
	354	D-54	Ⅱ c	20556	磨製石斧	頁岩	3.5	4.6	1.7	39.22
	355	E-55	Ⅱ c	27587	磨石・敲石	砂岩	7.2	6.4	3.9	245.11



第 108 図　縄文時代後期　石器

（ウ）縄文時代晩期の遺物

土　器（第109図　356 ～ 376）

入佐式，黒川式，突帯文相当の土器である。C・D・E－48区に集中して出土した。

356 ～ 359は浅鉢である。356は胴部との屈曲部分がわずかに残り，口唇部は段を付け肥厚させる。外面には１条の沈線が巡る。357，358は大きく開く口縁部である。端部を鈎状に肥厚させ，端部には沈線が巡る。359と361は胴部から口縁部でこれも口縁が大きく開く器形である。

360は胴部が丸みをもち口縁で外反する器形と思われる。

362は胴部に突帯文を施す。丁寧なミガキが施される浅鉢である。

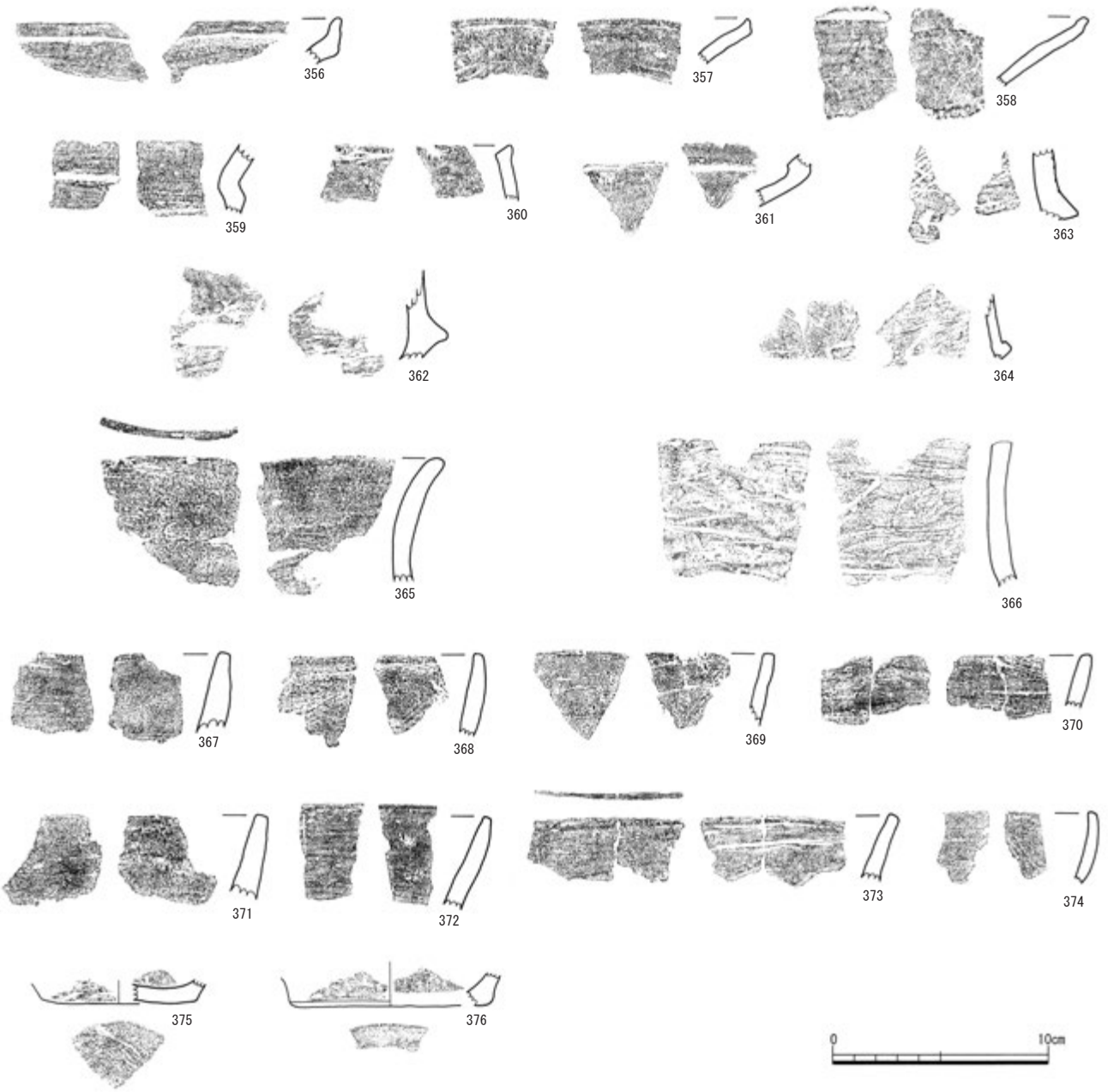
363，364は胴部から口縁部で斜方向の沈線が施される。胴部に刻目突帯文が見られる。

365 ～ 374は深鉢または鉢の口縁部である。365は外反するもので，横方向のミガキが見られる。366は内傾するものである。これも横方向のミガキが見られる。

367 ～ 373は直線的な口縁でミガキまたは工具ナデが施されるものである。

374は丸みをもつ口縁部でこれも丁寧なミガキ調整である。

375，376は底部で，わずかに突出するように見える平底である。ナデ調整が施される。



第 109 図　縄文時代晩期　土器

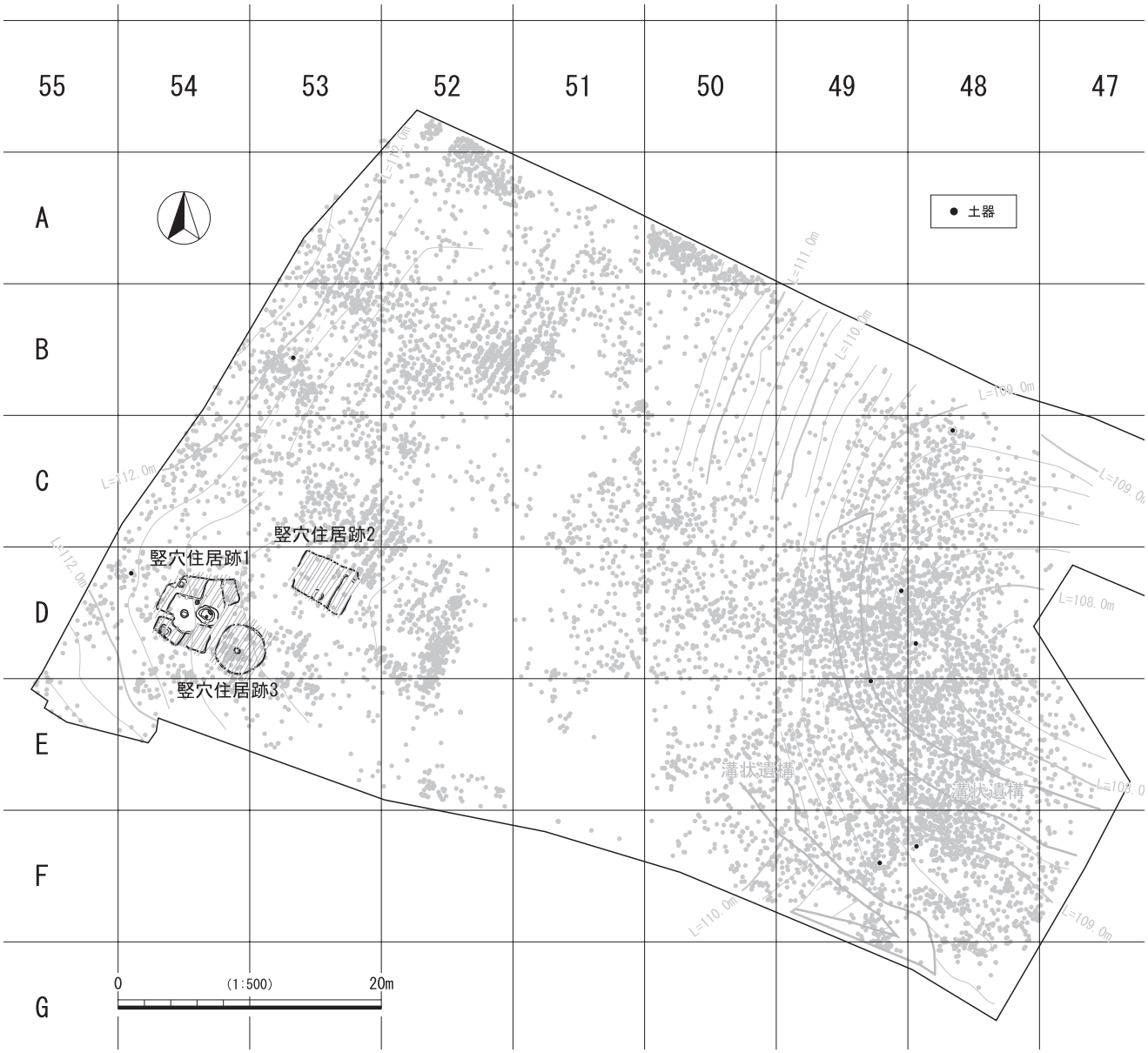
表 26　縄文時代晩期土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
								外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
	356	一括	D-55	Ⅱ	浅鉢	口縁部	沈線	ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/1
	357	20069	D-49	Ⅱb	浅鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR7/3	褐灰 10YR4/1
	358	20648	E-48	Ⅱc	浅鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6
	359	20640	D-48	Ⅱc	浅鉢	肩部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		黒褐 10YR3/2	黒褐 10YR3/2
	360	20436	C-47	Ⅱb	深鉢	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR6/6
	361	20031	E-47	Ⅱc	浅鉢	肩部	沈線	ナデ	ナデ	○		○		明赤褐 5YR5/6	暗黄灰 2.5Y4/2
	362	20458	C-48	Ⅱb	浅鉢	胴部	突帯	ミガキ	ナデ	○		○		黒褐 2.5Y3/1	灰 7.5Y5/1
		20459	C-48	Ⅱb											
	363	一括	B-49	表採	深鉢	胴部	沈線，刻目突帯	ナデ	ナデ	○		○		灰黄 2.5Y6/2	灰オリーブ 5Y6/2
	364	20455	C-48	Ⅱb	深鉢	胴部	刻目，突帯・沈線	ナデ	ナデ	○		○		灰黄 2.5Y6/2	灰黄 2.5Y7/2
		20456	C-48	Ⅱb											
	365	20432	D-48	Ⅱc	深鉢	口縁部		ミガキ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4
		20431	D-48	Ⅱc											
	366	20265	D-48	Ⅱb	深鉢	胴部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y6/1
		一括	E-48	表採											
	367	一括	B-49	表採	深鉢	口縁部		ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		黒 7.5YR2/1	褐 7.5YR4/6
	368	20677	E-48	Ⅱc	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		黒褐 10YR3/1	褐 7.5YR4/4
	369	20632	D-48	Ⅱc	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		黒 7.5YR2/1	灰褐 7.5YR4/2
	370	20090	D-48	Ⅱb	深鉢	口縁部		ナデ後ミガキ	ナデ	○		○		黒 5YR3/1	赤褐 5YR4/4
		20724	D-48	Ⅱb											
	371	20076	D-49	Ⅱc	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい赤褐 5YR4/3	黒褐 2.5Y3/1
	372	20540	D-49	Ⅱc	深鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		灰褐 7.5YR6/2	にぶい橙 7.5YR7/3
	373	20510	B-49	Ⅱc	深鉢	口縁部		ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		黒褐 7.5YR3/1	黒褐 10YR3/1
		20509	B-49	Ⅱc											
	374	20189	F-49	Ⅲ	深鉢	口縁部		ナデ後ミガキ	ナデ後ミガキ	○		○		黒 10YR3/1	黄褐 10YR4/3
	375	20457	C-48	Ⅱb	深鉢	底部		ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4
	376	20437	C-48	Ⅱb	深鉢	底部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄橙 10YR5/4	明赤褐 10YR7/6

ウ　弥生時代

Ⅱ・Ⅲ層を主体に調査を行った。遺構はD-53・54区にて竪穴住居跡３軒を検出した。遺構内遺物の年代から，これらの住居の時期は中期のものと考えられる。

遺物は遺構内遺物も含めて，土器・石器が出土している。包含層遺物の年代も遺構内遺物の時期と一致することから，本遺跡の弥生時代の主体は中期と考えられる。



第 110 図　弥生時代　遺構配置・遺物出土状況図

（ア）遺　構

竪穴住居

１号（第111図～ 114図 377 ～ 396）

1号は，D-54区に位置する。検出面はⅢ層である。検出位置を含む調査区は，試掘調査によってⅡ層～Ⅲ層上面まで削平を受けていたことが判明した。削平の度合いを確認するために下層確認トレンチを設定し掘削していったところ検出した。精査の結果，周辺の土層と土色が違うことから遺構の可能性があると考え，拡張して調査をすることにした。

形状は，長軸6.6m，短軸4.8mである。畑作用のトレンチャーで削平されており残存部の形状が不完全な状態であるが，張り出しを持つ花弁形竪穴住居（日向間仕切り住居）である。間仕切りされた空間はベッド状遺構であり，床面との比高差は約10㎝～ 30㎝前後である。総床面積は，約40.2㎡である。検出面から床面までの深さは，最深部で約67㎝である。住居内からは４基のピットが検出された。ピット２は柱穴の可能性がある。ピット３は樹根等により撹乱されていた。その他，山ノ口式土器や凹石等の石器が出土した。山ノ口式土器には煤が付着していた。また，住居周りのピットを探したが，検出できなかった。

埋土状況は，レンズ状堆積をしていることから，住居としての機能を失った後に，自然に埋まっていったものと考えられる。1号の北東部約10mには，ほぼ同時期と考えられる方形の2号がある。

埋土は，①は直径が１㎜～２㎜大のオレンジパミスがわずかに混ざった黒褐色土が堆積し，②は直径２㎜～５㎜のオレンジパミスが全体的に混ざった黒褐色土，③は黒褐色土に直径２㎜～ 10㎜大のⅢ層相当のオレンジパミス及びブロックが混ざった暗褐色土，④は暗褐色土にⅢ層相当のオレンジパミス直径３㎜～ 10㎜が多く混ざる黄褐色土，⑤は暗褐色土にⅢ層相当の直径５㎜～ 20㎜が全体的に混ざるにぶい黄褐色土，⑥は暗褐色土にⅣ層相当の直径10㎜～ 30㎜大のオレンジブロックを多く含む褐色土，⑦は直径10㎜～ 20㎜のオレンジパミスを含む黒褐色土が堆積していた。これは，貼床と考えられる。

共伴遺物として住居内の土器や石器等，番号を付け取り上げたものは215点であり，土器10点，石器10点を図化した。

377 ～ 386は弥生時代中期土器（山ノ口Ⅱ式相当）である。377 ～ 382は甕で上面は僅かに凹み，口唇部は浅く凹ませM字状になり，口縁部内面端部を強いヨコナデで胴部内面との境の稜（端部）を明瞭にする特徴がみられる。377は口縁から突帯部はヨコナデ，胴部下位は縦方向のハケメで器面調整している。煤は口縁部下位に多く，部分的に胴部に付着している。384，378は胎土がやや灰白色を呈し，角閃石を含んでいる。384は，口縁部下位の突帯と口縁部間厚く煤が付着している。381は表面の摩滅が著しい。383 ～ 386は壺である。383は口縁部内面に突起をつけ，口縁部がややT字形を呈す。器面調整は内外面ともに強いヨコナデである。385は長頸壺の頸部である。内外面ともに縦方向のミガキで器面調整をし，内面には絞り痕がみられる。386は底部で，内面にはヘラ状の工具痕を思われる痕跡が多く確認できる。胎土には，石英・黒雲母のほか，φ１㎜大の赤色鉱物を多く含む。

387は磨製石斧の刃部破損品で，伐採斧の刃部である。388は磨石で，固くホルンヘルス化した石材で，全体をよく研磨していて，擦痕が顕著である。ペットストーンの可能性もある。389は上下に細かな敲打痕があり，ハンマーストーンと考えられる。390は，磨・凹石で，表裏平坦面の中央部に敲打による凹みがある。側縁の端部に敲打痕があり，ハンマーとしても使用された可能性がある。391は磨・敲・凹石で，表裏平坦部の中央部はよく敲打され，表面に３か所，裏面に２か所の凹みがある。周縁もほぼ全周敲打されている。392は磨石，393は砥石である。

394はトレンチャー内からの出土で混入の可能性が高い。深い抉りがあり，明確な脚を有する。先端部と脚部には欠損が見られる。断面はレンズ状である。

395は磨製石鏃である。欠損はあるものの長幅比はほぼ1:1である。浅い抉りを有する。ほぼ扁平に擦られており，側縁に沿って刃部の稜はあるが，平坦面には明確な稜がない。表裏面に斜め横方向に擦痕がみられる。

396は，欠損のため詳細は不明だが，先端の角度から長さが幅よりも短くなる形状の石鏃の未製品か，裏面の剥離からは別の石器の可能性がある。

２号（第115・116図　397 ～ 402）

2号は，D-53区に位置する。検出面はⅢ層中位～下位である。1号の検出後に，周辺区域を重機による表土剥ぎを行った。その際，Ⅲ層中に円形を呈する不明瞭な黒褐色土が確認された。ただし，この平面プランを形成する黒褐色土は，Ⅱ層～Ⅲ層中位まで，耕作もしくは土地改良等と考えられる削平を受けていたため残存部分を調査した。

形状は，長軸4.6m，短軸3.3mの略方形である。検出面から床面までの深さは約30㎝。床面は約５㎝～ 10㎝程度の貼床が貼ってあり，固くしまっていた。総床面積は，約16.6㎡である。

住居内からは，凹石と思われる石器，敲石が出土した。また，土器は，山ノ口式土器が出土した。住居の東側が一段高くベッド状になっており，中心部に向かって緩やかに下がっていく。住居内からは，南側に土坑を１基検出した。柱穴痕を精査したが，明確なものは確認できなかった。

埋土は，①はⅡｂ層の黒色土に直径が２㎜～５㎜大のオレンジパミスが全体的に堆積し，②はⅡｂ層の黒色土に直径が２㎜～ 10㎜大のオレンジパミスがやや多めに全体的に混ざった暗褐色土，③はⅡｂ・Ⅱｃ層の土に直径が10㎜～ 20㎜大のオレンジブロックが多く入った鈍い黄褐色土，④はⅡｂ・Ⅱｃ層の土に直径が20㎜前後のオレンジブロックが入り，固くしまっている暗褐色土が堆積していた。これは貼り床と考えられる。

共伴遺物として住居内の土器や石器等，番号を付け取り上げたものは37点であり，土器２点，石器４点を図化した。

397は縄文晩期の浅鉢もしくは弥生時代前期～中期の小型の鉢もしくは壺の口縁部と考えられる。内外面ともに丁寧なミガキで器面調整されている。398は弥生時代中期（入来Ⅱ式～山ノ口Ⅱ式相当）の甕の胴部である。煤が厚く付着する。胎土は黒雲母とφ0.5㎜大の白色鉱物を多く含む。

399は磨石である。400は敲石である。全体的に敲打痕がみられる。401は表面中心部に，402は表面に敲打痕，裏面に擦痕がみられることから敲台と考えられる。

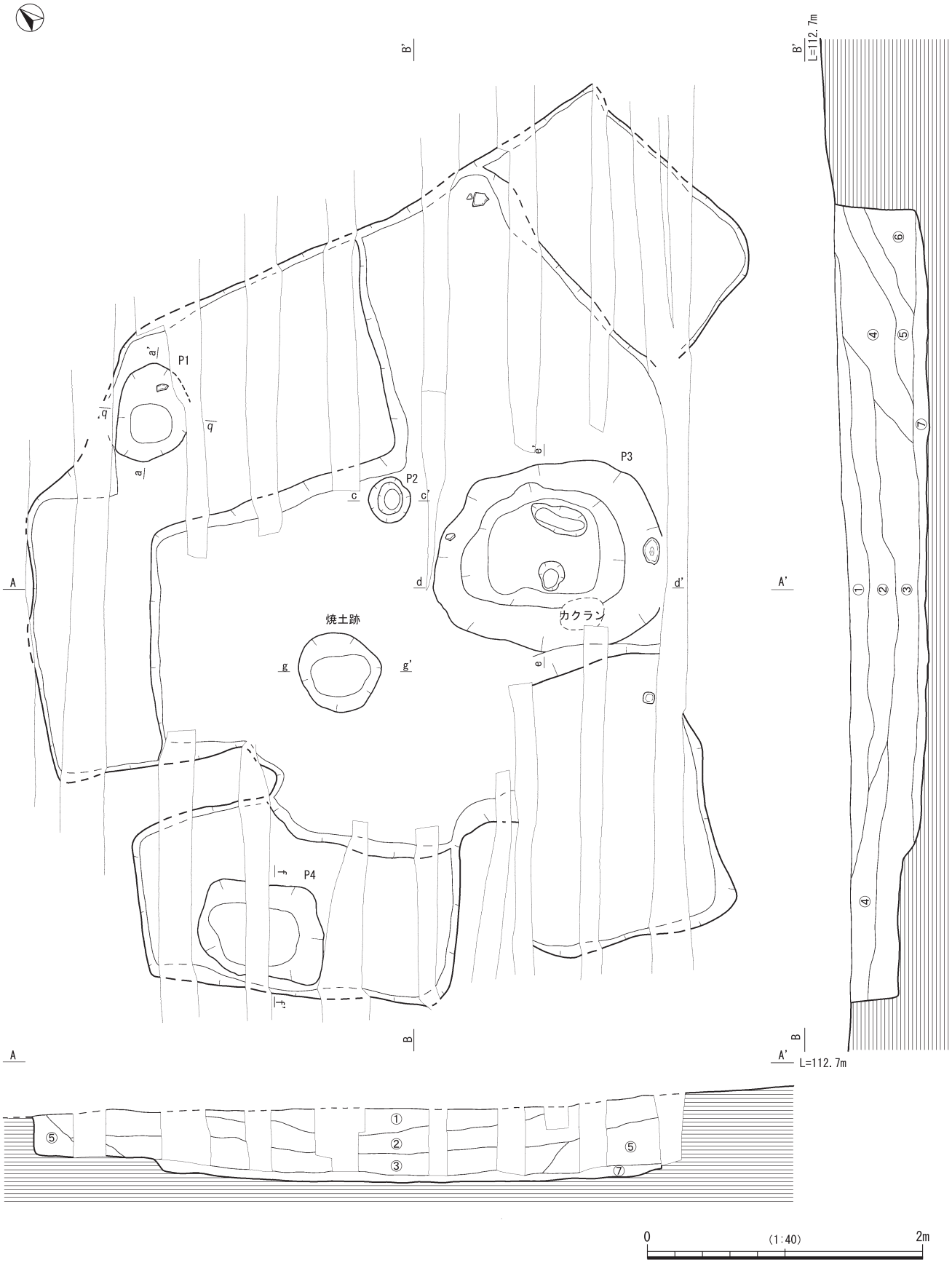
３号（第117図　403 ～ 406）

D-53・54区に位置する。検出面は，Ⅲ層下部である。1号の東側１～２ｍ離れた地点，Ⅲ層で土器が集中して出土していた。土器を実測し，取り上げ，精査すると，硬化面や黒曜石のチップを多数確認できた。地表面が水分を含んでくると，円形のやや黒い部分が現れてきた。プランは明確ではなかったが，黒曜石のチップに加え，小さめの炭化物も確認できため，これを遺構と考え精査した。

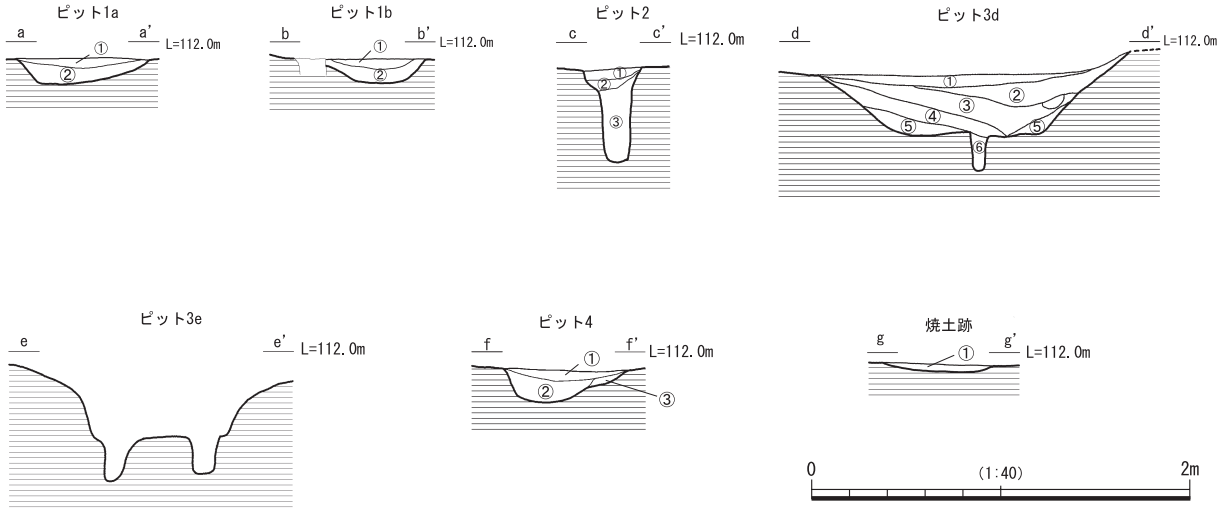
形状は，長軸3.8m，短軸3.7mの略円形を基調とする。検出面から床面までの深さは，最深部で約15㎝である。総床面積は約9.07㎡である。全体的にアカホヤの上部にやや暗めの固い層を確認できた。埋土の掘り下げを進めていくと，住居内から土器片が十数個出土した。また，住居内の中央部付近に，47㎝×37㎝，床面からの深さ17㎝の炉跡を検出した。

埋土は，①は１㎜大のオレンジパミスと炭化物を少量含む暗褐色土，②は直径が１㎜～５㎜大のオレンジパミスや炭化物や黒曜石チャートのチップを多量に含んだ褐色土，③は直径が１㎜大のオレンジパミスと炭化物を少量含んだ黄褐色土，④は直径が１㎜～５㎜の炭化物とチップを多量に含んだにぶい黄褐色土，⑤-Aは長さ１㎜～８㎜大の炭化物とチップと直径１㎜～５㎜のオレンジパミスを多量に含んだ黒褐色土，⑤-Bは直径１㎜大のオレンジパミスを極少量含む黄褐色土である。

共伴遺物として竪穴住居内から出土した土器や石器で番号を付け取り上げたものは，148点であり，４点を図化した。403は二次加工剥片で，石鏃の未製品または破損品の可能性もある。404は長さ，幅共に15㎜以内と小さいが，抉りは明確である。405は石鏃の破損品で，復元すれば長幅比は1:1に近くなりそうである。この２点の石鏃は，頁岩と黒曜石という違いはあるが，形状としては酷似している。406は右側の側縁は緩やかに湾曲している。一方，左側の側縁は中位よりやや下で角張っている。縄文時代後晩期の遺物の混入の可能性が高い。



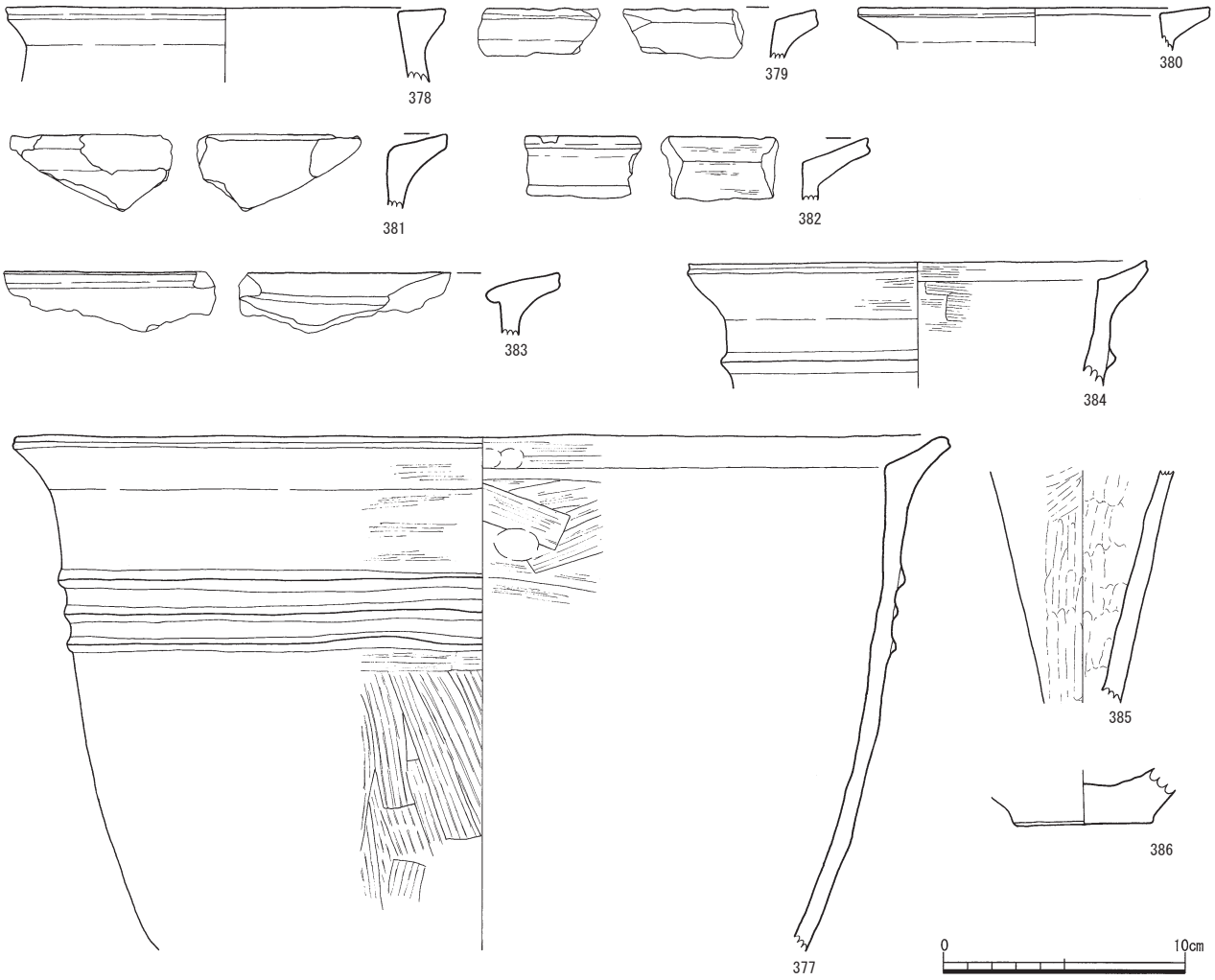
第 111 図　弥生時代　竪穴住居跡 1



第 112 図　竪穴住居跡１ピット１～４，焼土跡

表 27　竪穴住居跡１ピット１～４　焼土跡観察表

		色調	粘性	しまり	砂　　質
ピット１	①	黒褐色 10YR ２/ ３	弱	強	黒色土にφ１～５㎜大のオレンジパミスがわずかに混ざる
	②	暗褐色 7.5YR ３/ ４	弱	中	暗褐色土にφ 10 ～ 30 ㎜のオレンジブロックが全体的に多く混ざる
ピット２	①	黒褐色 10YR ２/ ３	弱	やや強	黒褐色土にφ２～５㎜のオレンジパミスがわずかに混ざる
	②	褐色 10YR ４/ ６	なし	強	オレンジパミスの量が①より少なく，しまりが弱い
	③	暗褐色 10YR ３/ ４	弱	強	暗褐色土にφ１～２㎜のオレンジパミスがまれに混ざる。②よりしまりがない
ピット３	①	黒色 10YR ２/ ３	弱	やや強	砂質土。パミスをほとんど含まない黒色土
	②	黄褐色 10YR ５/ ６	弱	強	黒褐色土にφ 10 ～ 20 ㎜大のオレンジパミス入りブロックが全体的に混ざる
	③	にぶい黄褐色 10YR ４/ ３	中	弱	黄褐色土にφ 20 ㎜大のオレンジパミスを含むブロックが混ざる
	④	暗褐色 10YR ３/ ３	弱	中	φ２～５㎜のオレンジパミスが混ざる
	⑤	腐植土 10YR ４/ ４	弱	なし	記載なし
	⑥	記載なし	記載なし	記載なし	記載なし
ピット４	①	黒褐色 10YR ３/ ３	弱	強	黒褐色土にφ 10 ～ 20 ㎜大のオレンジパミス入りブロックが全体的に混ざる
	②	暗褐色 10YR ３/ ４	弱	中	暗褐色土にφ 20 ～ 30 ㎜大のオレンジパミス入りブロックを多く含む
	③	黄褐色 10YR ５/ ６	中	中	暗褐色土にⅥ層相当の土が混ざる。φ 10 ㎜大のオレンジパミスがわずかに混ざる
焼土跡	①	暗褐色 710YR ３/ ３	なし	弱	φ１㎜程のパミス粒をまばらに含む。フカフカしており竹根を多く含む

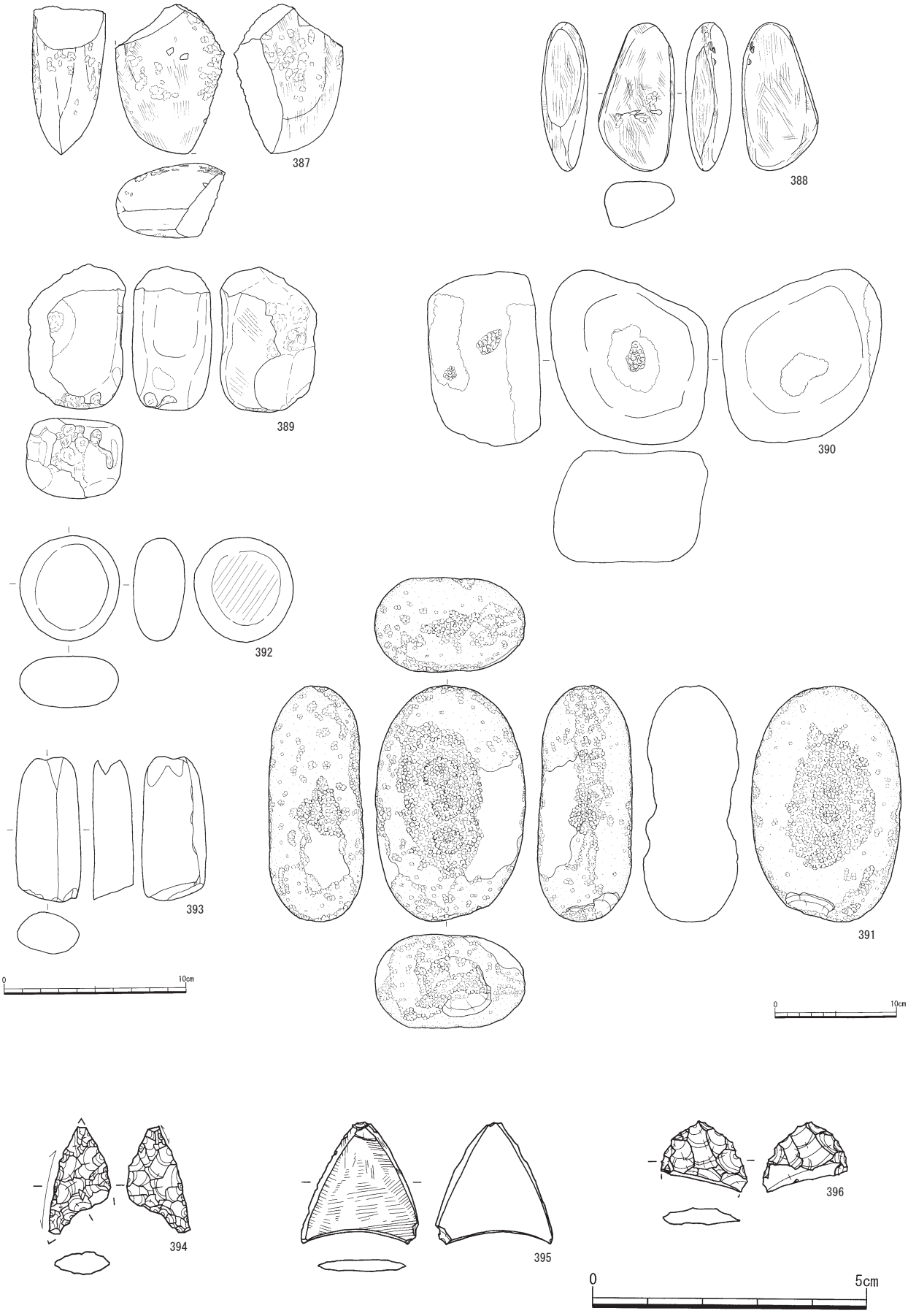


第 113 図　弥生時代　竪穴住居跡１　遺構内遺物 (1)

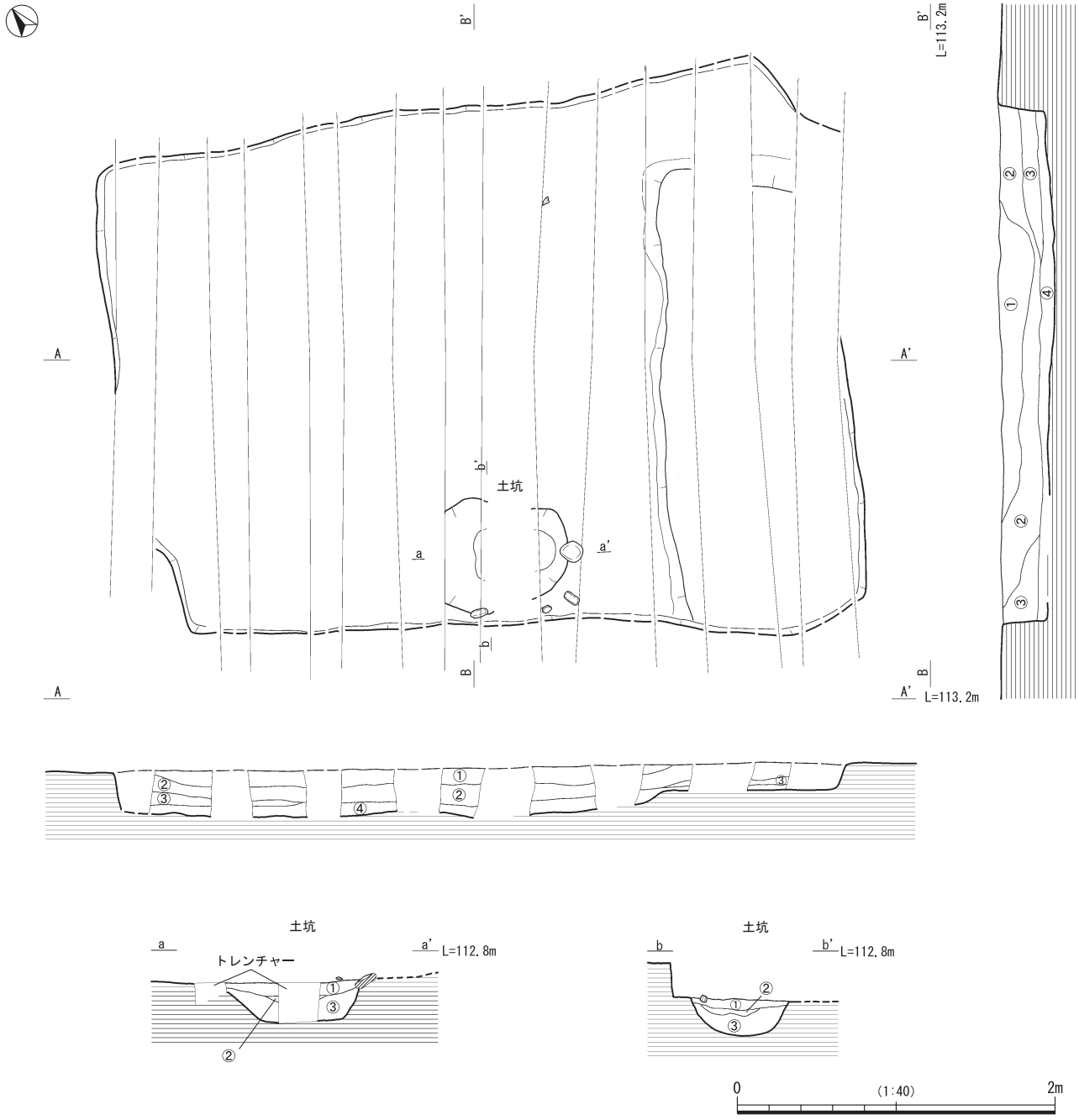
表 28　弥生時代竪穴住居跡１遺構内遺物観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
								外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
113	377	SI1-184 SI1-194 SI1-195	D-54 D-54 D-54	Ⅲ	甕	口縁部～胴部	沈線，突帯	ナデ ハケメ	ナデ	○	○			黒褐 10YR3/2	明黄褐 10YR7/6
	378	SI1-21	D-54	Ⅲ	甕	口縁部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい黄 2.5Y6/3	黄灰 2.5Y4/1
	379	SI1-31	D-54	Ⅲ	甕	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○				灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄橙 10YR7/4
	380	SI1-117	D-54	Ⅲ	甕	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○	○			黒 10YR2/1	にぶい黄褐 10YR5/3
	381	一括	D-54	Ⅲ	甕	口縁部		ナデ	ナデ	○				浅黄橙 10YR8/3	浅黄 2.5Y7/4
	382	SI1-80	D-54	Ⅲ	甕	口縁部	沈線	ナデ	ナデ	○	○			褐 7.5YR4/2	橙 7.5YR6/6
	383	SI1-162	D-54	Ⅲ	壺	口縁部	凹線	ナデ	ナデ	○	○			明褐 7.5YR5/6	明褐 7.5YR5/6
	384	SI1-199	D-54	Ⅲ	壺	口縁部	凹線，突帯	ナデ	ナデ	○				にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR6/3
	385	SI1-80	D-54	Ⅲ	壺	頸部		ミガキ	ミガキ	○	○			にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4
	385	SI1-91	D-54	Ⅲ											
	386	SI1-220	D-54	Ⅲ	壺	底部		ナデ	ナデ	○	○			にぶい赤褐 5YR4/3	褐灰 10YR4/1

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)
114	387	D-54	Ⅲ	SI1-190	磨製石斧片	安山岩	8.1	6	4	228
	388			SI1-95	磨石	ホルンフェルス	8.1	4.2	2.5	118
	389			SI1-19	ハンマーストーン	砂岩	7.9	5.2	4.4	283
	390			SI1-121	磨石・凹石	砂岩	9.3	8.6	6.1	822
	391			SI1-189	磨石・敲石・凹石	砂岩	19.25	12.35	7.8	2686
	392			SI1-126	磨石	砂岩	5.7	5.5	2.8	116
	393			SI1-208 SI1-228	砥石	砂岩	7.9	3.6	2.2	94
	394			トレンチャー内	石鏃	黒曜石	1.5	1	0.4	0.58
	395			SI1-146	磨製石鏃	頁岩	2.2	2.15	0.2	1.23
	396			SI1-130	石鏃の未製品か	黒曜石	1.25	1.55	0.25	0.48



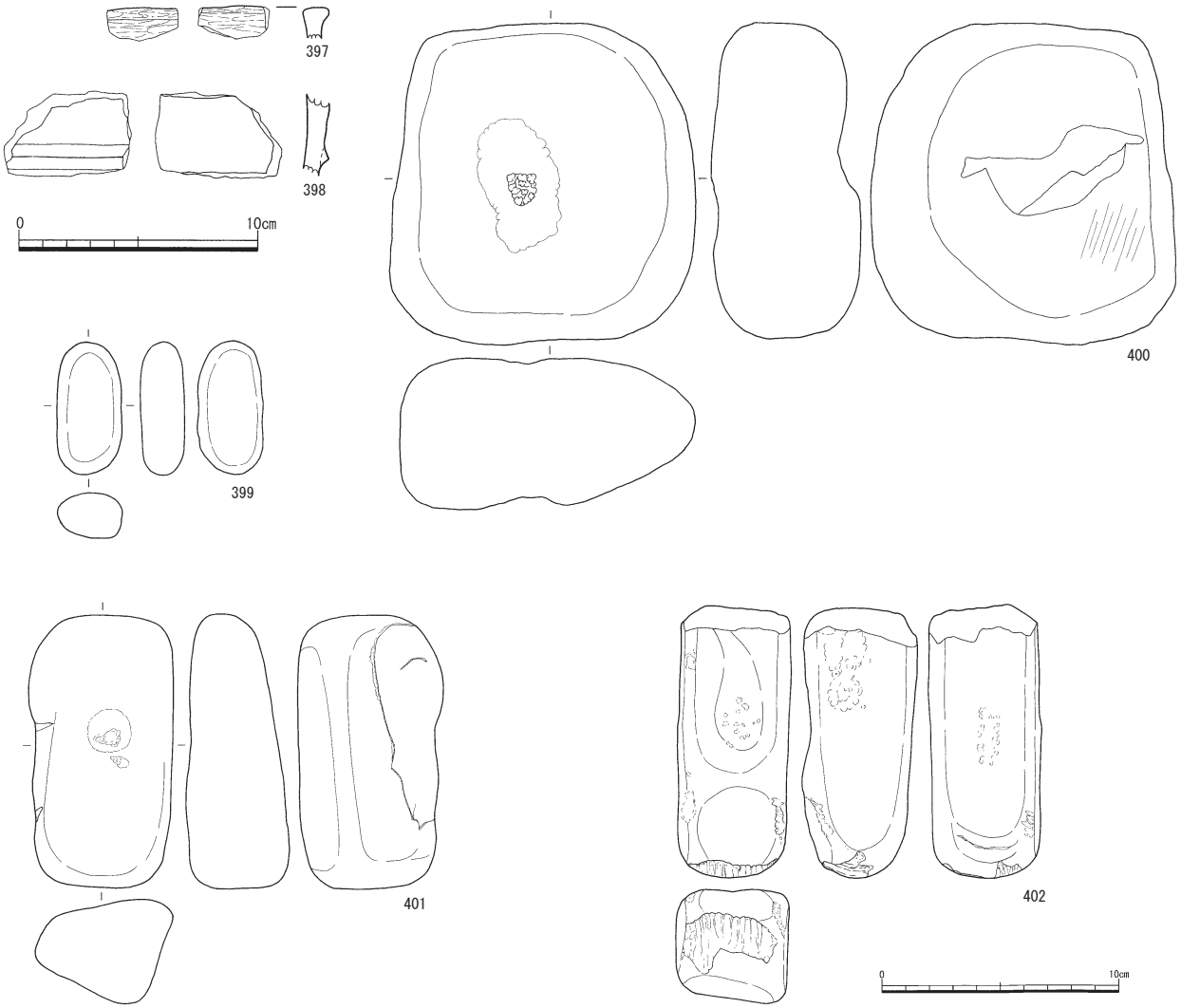
第 114 図　弥生時代　竪穴住居跡 1　遺構内遺物 (2)



第 115 図　弥生時代　竪穴住居跡２

表 29　弥生時代竪穴住居跡２土坑観察表

		色調	粘性	しまり	砂　　質
土坑	①	褐色 10YR ４/ ４	弱	強	暗褐色土にφ２～３㎜のオレンジパミスが多く入る
	②	暗褐色 10YR ３/ ３	弱	中	黒褐色土にφ５～ 10 ㎜前後のオレンジパミスを含むブロックがまばらに混ざる
	③	褐色 10YR ４/ ６	中	中	暗褐色土にφ 10 ～ 20 ㎜大のオレンジブロックがまばらに入る

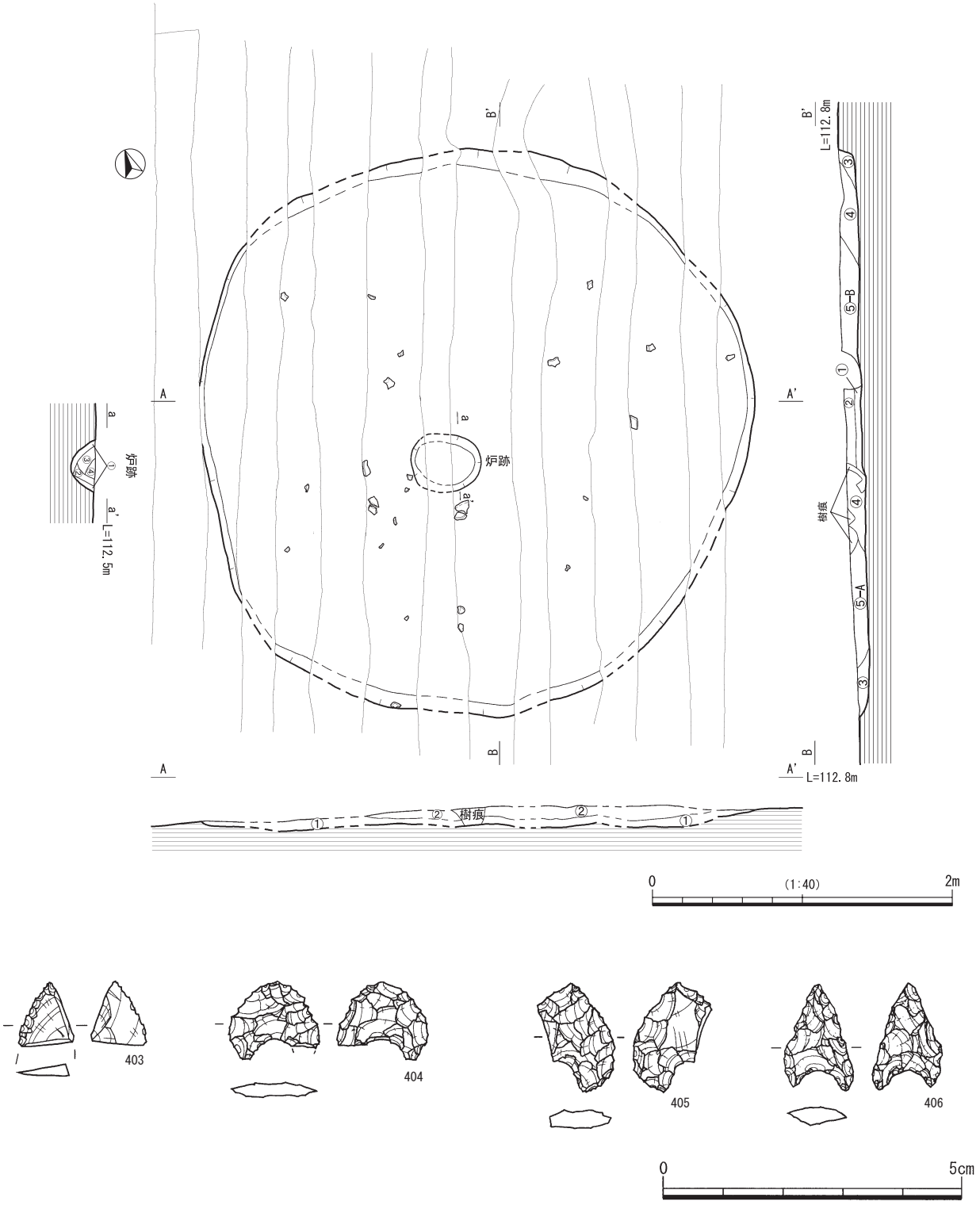


第 116 図　弥生時代　竪穴住居跡２遺構内遺物

表 30　弥生時代竪穴住居跡２遺構内遺物観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部位	文様	器面調整		胎土				色調	
								外面	内面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外面	内面
116	397	SI2-15	D-53	Ⅲ中～下位	浅鉢，壺	口縁部		ミガキ	ミガキ		○	○		にぶい黄褐 10YR4/3	にぶい黄褐 10YR4/3
	398	SI2-18	D-53		甕	胴部		ナデ	ナデ	○	○			黄灰褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR4/3

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
116	399	D-53	Ⅲ	SI2-12	磨石	砂岩	5.5	2.7	1.9	42
	400			SI2-41	敲石	砂岩	13.4	12.7	6.3	1831
	401			SI2-39	敲石	砂岩	11.4	6.1	4.4	478
	402			SI2-44	敲石	砂岩	11.4	4.75	4.85	451



第 117 図　弥生時代　竪穴住居跡３　遺構内遺物

表 31　弥生時代竪穴住居跡３遺構内遺物観察表

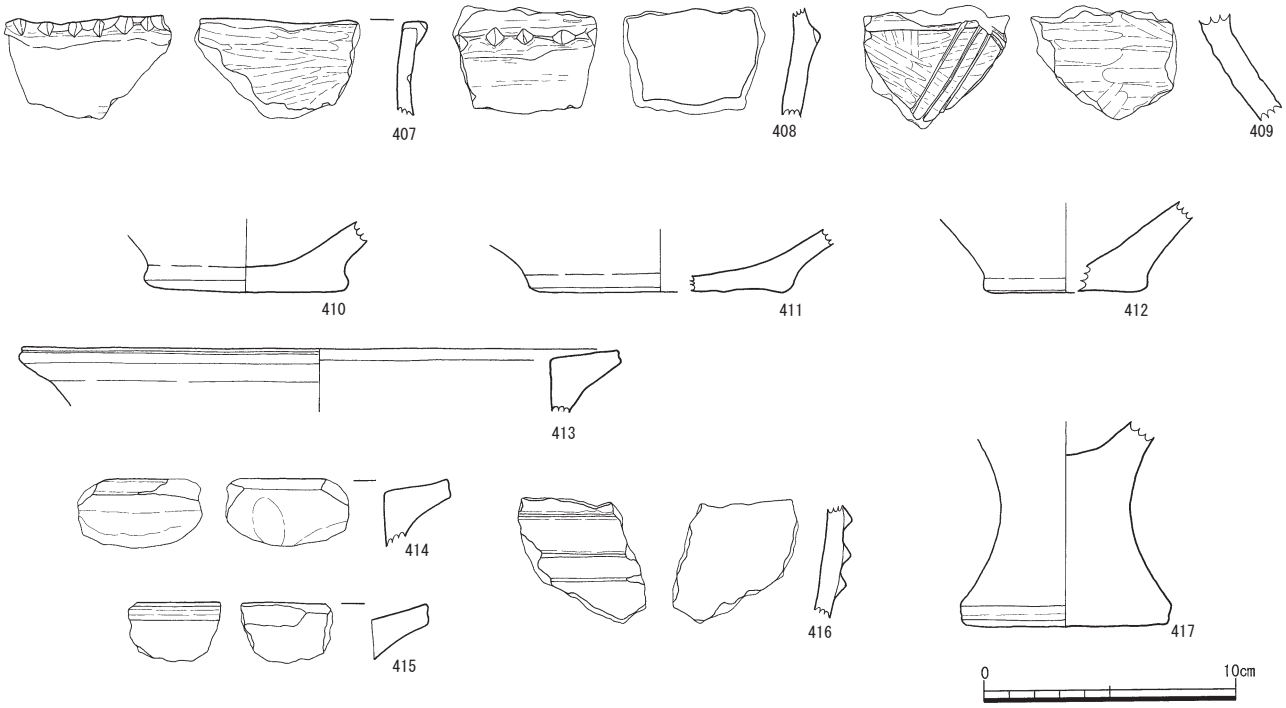
挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
117	403	D-54	Ⅲ	SI3-123	石鏃	黒曜石	1	0.9	0.2	0.14
	404			SI3-145	石鏃	頁岩	1.3	1.5	0.25	0.47
	405			SI3-124	石鏃	黒曜石	1.8	1.3	0.3	0.55
	406			SI3-142	石鏃	頁岩	1.8	1.2	0.3	0.42

（イ）遺　物

土　器（第118図　407 ～ 417）

407 ～ 411は，弥生時代早・前期土器である。407，408は刻目突帯文の甕である。407は口縁部の突帯の貼り付け痕を明瞭に残し，歪みが強い。内外面ともにミガキで調整している。408は胴部の屈曲部で直接刻目をつける。409は壺である。409は肩部で突帯下に細沈線で山形文がつく。内外面は強い横方向のミガキで器面調整される。410，411，412は壺の底部である。410，411は円盤状の貼付の底部であり，器面調整は内外面ともにナデである。412は前期末～中期初頭の範疇に入る可能性がある。

413 ～ 417は，弥生時代中期（山ノ口Ⅱ式相当）の甕である。口縁部がやや立ち上がり外斜し，口唇部は僅かに凹む。413は胎土に金雲母が目立つ。416は胴部であり，三条突帯で強いヨコナデで成形している。417は底部で充実脚台である。端部を口縁部同様僅かに凹ませる。胎土にはφ2㎜の石英や金雲母を多く含む。



第 118 図　弥生時代土器

表 32　弥生時代土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部　位	文　様	器面調整		胎　土				色	調
								外　面	内　面	石英・長石	雲母	角閃石・輝石	その他	外　面	内　面
118	407	20017	F-49	Ⅱc	甕	口縁部	刻目突帯	ミガキ	ミガキ	○		○		橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/3
	408	20492	C-48	Ⅱb	甕	胴部	刻目突帯	ミガキ	ミガキ	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	橙 5YR6/6
	409	20003	F-48	Ⅱc	壺	肩部	沈線	ミガキ	ミガキ	○		○		にぶい黄 2.5Y6/4	にぶい黄 2.5Y6/3
	410	20052	E-49	Ⅱc	壺	底部		ナデ	ナデ	○		○		橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4
		20085	D-48	Ⅱb											
	411	20293	D-49	Ⅱb	壺	底部		ナデ	ナデ	○		○		にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3
	412	一括	B-51	Ⅱc	壺	底部		ナデ	ナデ	○		○		赤褐 5YR4/6	明赤褐 5YR5/6
	413	一括	G-49	表採	甕	口縁部	凹線	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4
	414	20144	D-54	Ⅱb	甕	口縁部		ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3
	415	25150	B-53	Ⅱc	甕	口縁部	凹線	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい黄 2.5Y6/3	暗灰黄 2.5Y5/2
	416	一括	C-54	表採	甕	胴部	三角突帯	ナデ	ナデ	○	○	○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	417	一括	E-49	表採	甕	底部	無文	ナデ	ナデ	○	○	○	砂粒多	浅黄橙 7.5YR8/6	にぶい褐 7.5YR5/4

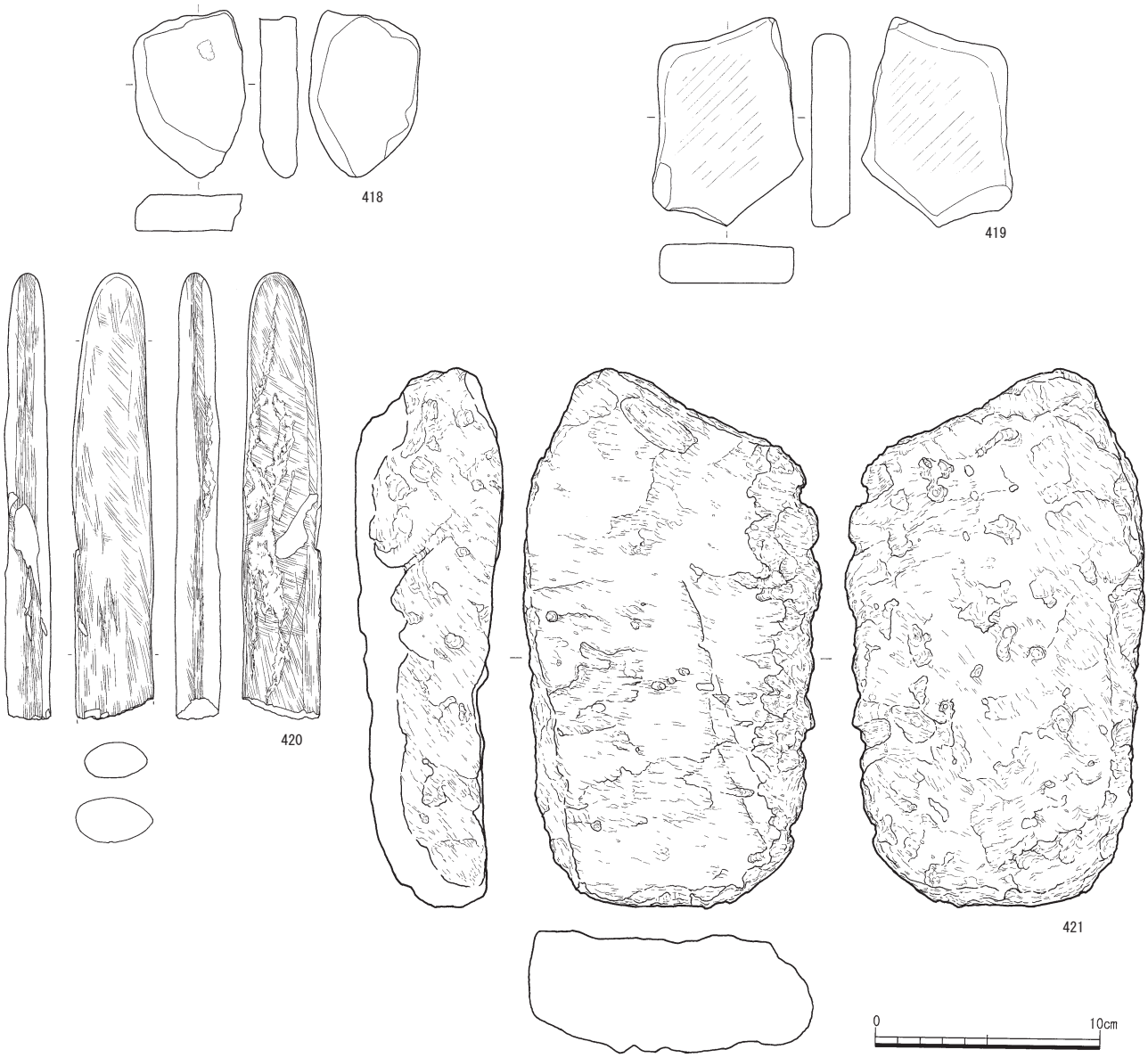
（ウ）表採・攪乱層出土の石器(第119図　418 ～ 421)

418は砂岩の板状の石皿の破片で両面が平滑である。

419は横転内から出土で，板状の礫の表裏面に擦痕がみられる。

420は緑色片岩で全体が研磨され擦痕が顕著であり，石剣の上部であると考えられる。遺跡の形成年代からは，縄文時代後晩期の可能性が最も高いと考えられる。

421は軽石製品で，面取を行ったものと考えられる。



第 119 図　表採・攪乱層出土の石器

表 33　表採，攪乱層出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
61	418	C-51	表採一括	石皿	砂岩	7.4	5.1	1.6	87
	419	E-49	横転	石皿	砂岩	8.5	6.5	1.75	180
	420	不明	撹乱	石剣	緑色片岩	19.9	3.4	2	239
	421	C-52	表採一括	軽石製品	軽石	23.9	13.5	6.5	510

第４章　調査区２　自然科学分析
放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安昭炫・佐藤正教
廣田正史・山形秀樹・小林紘一
Zaur Lomtatidze・竹原弘展

１．はじめに

下原遺跡より検出された試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

２．試料と方法

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。SI1-377（PLD-30874）は，竪穴住居跡１号より出土した土器の口縁部外面に付着する炭化物である。

試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

３．結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

以下，2σ暦年代範囲を基に結果を整理する。なお，同一試料の安定同位体比分析では，概ね陸産物由来とみられる値が得られており，今回の試料について，海洋リザーバー効果は考慮しなくてよい（詳細は別項参照）。

測定の結果，175-47 cal BC(95.4%)と，紀元前２世紀前半から紀元前１世紀中頃の値を示した。これは，藤尾(2009）によると，弥生時代中期に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第４巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：9-54，雄山閣.

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M.,

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30874	遺物番号：SI1-377 遺構：竪穴住居跡１号	種類：土器付着炭化物 部位：口縁部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N）

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
PLD-30874 SI1-377	-26.51 ± 0.18	2090 ± 22	2090 ± 20	162-130 cal BC (26.4%) 120- 89 cal BC (26.6%) 76- 57 cal BC (15.2%)	175-47 cal BC (95.4%)

Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

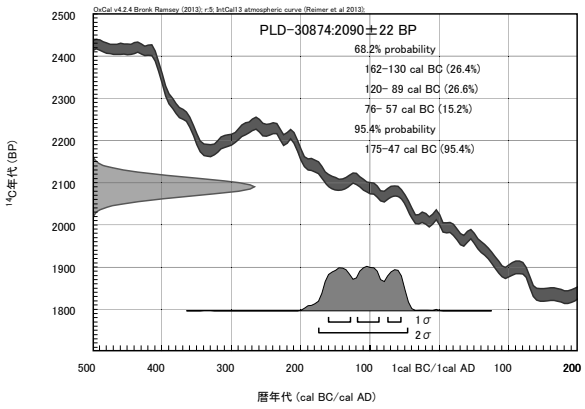


図１　暦年較正結果

炭素・窒素安定同位体比分析

山形秀樹・竹原弘展（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鹿児島県に位置する下原遺跡より出土した土器の付着炭化物の起源物質を推定するために，炭素と窒素の安定同位体比を測定した。また，炭素含有量と窒素含有量を測定して試料のC/N比を求めた。なお，同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２．試料および方法

試料は，竪穴住居跡１号から出土した土器(SI1-377)の口縁部外面より採取した付着炭化物の1点であり，試料番号として放射性炭素年代測定の測定番号を用いている。測定を実施するにあたり，各試料に対して，酸・アルカリ・酸洗浄（HCl:1.2N，NaOH:1.0N）を施して試料以外の不純物を除去した後，測定を行った。炭素含有量および窒素含有量の測定には，EA（ガス化前処理装置）であるFlash EA1112（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは，アセトニトリル（キシダ化学製）を使用した。

また，炭素安定同位体比（$\delta^{13}C_{PDB}$）および窒素安定同位体比（$\delta^{15}N_{Air}$）の測定には，質量分析計DELTA plus Advantage（Thermo Fisher Scientific社製）を用いた。スタンダードは，炭素安定同位体比にはIAEA Sucrose(ANU)，窒素安定同位体比にはIAEA N1を使用した。

測定は，次の手順で行った。スズコンテナに封入した試料を，超高純度酸素と共に，EA内の燃焼炉に落とし，スズの酸化熱を利用して高温で試料を燃焼，ガス化させ，酸化触媒で完全酸化させる。次に還元カラムで窒素酸化物を還元し，水を過塩素酸マグネシウムでトラップ後，分離カラムでCO_2とN_2を分離し，TCDでそれぞれ検出・定量を行う。この時の炉および分離カラムの温度は，燃焼炉温度1000℃，還元炉温度680℃，分離カラム温度45℃である。分離したCO_2およびN_2はそのままHeキャリアガスと共にインターフェースを通して質量分析計に導入し，安定同位体比を測定した。

得られた炭素含有量と窒素含有量に基づいてC/N比を算出した。

３．結果

表1に，試料情報と炭素安定同位体比，窒素安定同位体比，炭素含有量，窒素含有量，C/N比を示す。図１には炭素安定同位体比と窒素安定同位体比の関係，図２には炭素安定同位体比とC/N比の関係を示した。

図１において，土器(SI1-377)の口縁部外面より採取した付着炭化物はC_3植物・草食動物上方の炭素安定同位体比がやや低く窒素安定同位体比がやや高い位置にプロットされた。

図２において，土器(SI1-377)の口縁部外面より採取した付着炭化物は土壌（黒色土）の位置かつC_3植物・草食動物のそばにプロットされた。

４．考察

土器(SI1-377)の口縁部外面より採取した付着炭化物は，図１でC_3植物・草食動物上方の炭素安定同位体比がやや低く窒素安定同位体比がやや高い位置に，図２で土壌（黒色土）に相当する位置にプロットされた。由来物質が特定できないが，概ね陸産物に由来する炭化物と推定される。

参考文献

赤澤　威・南川雅男（1989）炭素・窒素同位体比に基づく古代人の食生活の復元．田中　琢･佐原　眞編「新しい研究法は考古学になにをもたらしたか」：132-143，クバプロ．

坂本　稔（2007）安定同位体比に基づく土器付着物の分析．国立歴史民俗博物館研究報告，137，305-315.

米田　穣（2008）丸根遺跡出土土器付着炭化物の同位体分析．豊田市郷土資料館編「丸根遺跡・丸根城跡」：261-263，豊田市教育委員会.

Yoneda, M., M. Hirota, M. Uchida, A. Tanaka, Y. Shibata, M. Morita, and T. Akazawa (2002) Radiocarbon and stable isotope analyses on the Earliest Jomon skeletons from the Tochibara rockshelter, Nagano, Japan. Radiocarbon 44(2), 549-557.

表１　結果一覧表

試料番号	試料情報	$\delta^{13}C_{PDB}$ (‰)	$\delta^{15}N_{Air}$ (‰)	炭素含有量 (%)	窒素含有量 (%)	C/N 比
PLD-30874	遺構：竪穴住居跡１号 遺物 No.SI1-377 種類：土器付着炭化物 備考：口縁部外面	-26.6	14.4	67.2	3.67	21.4

吉田邦夫・宮崎ゆみ子（2007）煮炊きして出来た炭化物の同位体分析による土器付着炭化物の由来についての研究. 平成16-18年度科学研究補助金基礎研究B(課題番号16300290)研究報告書研究代表者西田泰民「日本における稲作以前の主食植物の研究」, 85-95.
吉田邦夫・西田泰民（2009）考古科学が探る火炎土器. 新潟県立歴史博物館編「火焔土器の国　新潟」: 87-99, 新潟日報事業社.

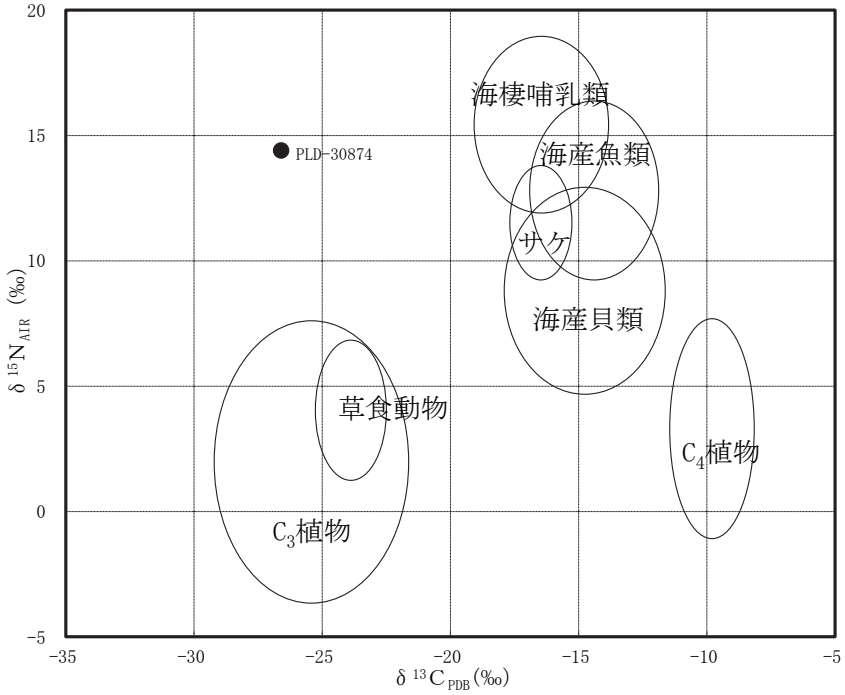


図 1　炭素・窒素安定同位体比（吉田・西田（2009）に基づいて作製）

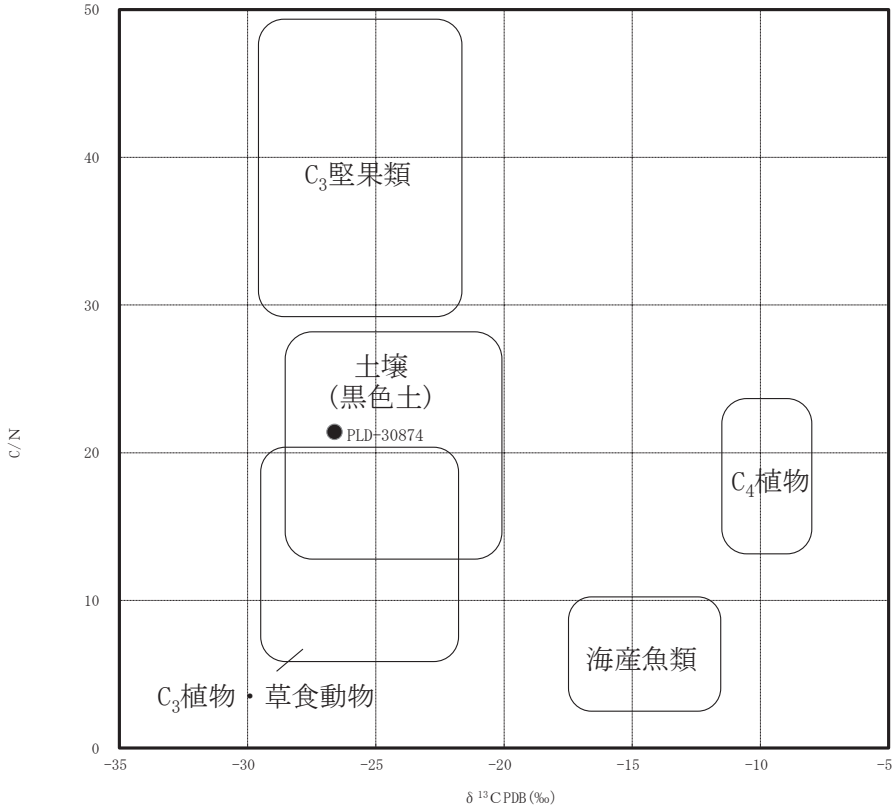


図 2　炭素安定同位体比と C/N 比の関係（吉田・西田（2009）に基づいて作製）

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安　昭炫・佐藤正教・廣田正史
山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・黒沼保子

１．はじめに

鹿児島県志布志市に所在する下原遺跡から出土した試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお，同一試料を用いて樹種同定と種実同定も行われている（樹種同定，種実同定の項参照）。

２．試料と方法

試料は，縄文時代後晩期と推測される竪穴住居跡，SI1，SI2と，弥生時代と推測される竪穴住居跡SI1とSI2，SI3から出土した炭化材と炭化種実，合計６点である。SI1の試料はスダジイの炭化材（試料No.1：PLD-33218）とイネ炭化種子（試料No.6：PLD-33223），SI2の試料は不明炭化種子（試料No.2：PLD-33219），SI3の試料はコナラ属アカガシ亜属の炭化材（試料No.3：PLD-33220),SI1の試料はコナラ属アカガシ亜属の炭化材（試料No.4:PLD-33221），SI2の試料はスダジイの炭化材（試料No.5：PLD-33222）である。なお，炭化材はいずれも最終形成年輪が残存しておらず，部位不明であった。

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

３．結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代，暦年較正結果を，図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した14C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して，より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正には0xCal14.2（較正曲線データ：

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33218	遺構：SI1　弥生時代 位置：埋土内 試料No.1	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外，部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33219	遺構：SI2　弥生時代 位置：南西部床上埋土 試料No.2″	種類：炭化種実（不明） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33220	遺構：SI3　弥生時代 位置：炉 試料No.3	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外，部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33221	遺構：SI1　縄文時代後晩期 位置：炉 試料No.4	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属 試料の性状：最終形成年輪以外，部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33222	遺構：SI2　縄文時代後晩期 位置：Pit 試料No.5	種類：炭化材（スダジイ） 試料の性状：最終形成年輪以外，部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33223	遺構：SI1　弥生時代 位置：南東部 試料No.6	種類：炭化種実（イネ種子） 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）

IntCal13）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

以下，各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して，遺構ごとに結果を整理する。なお，縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林（2008）と宮地（2008），弥生時代の暦年代については藤尾（2009）を参照した。

SI1は，炭化材（試料No.1：PLD-33218）は204-87 cal BC（90.2%）および79-56 cal BC（5.2%），炭化種実（試料No.6：PLD-33223）は201-87 cal BC（89.5%）および79-56 cal BC（5.9%）であった。どちらも弥生時代中期中葉～後葉の暦年代に相当する。

SI2　出土の炭化種実（試料No.2：PLD-33219）は，165-38 cal BC（94.2%）および9-3 cal BC（1.2%）であった。これは弥生時代中期中葉～後葉の暦年代に相当する。

SI3　出土の炭化材（試料No.3：PLD-33220）は，1413-1284 cal BC（95.4%）であった。これは，縄文時代後期後葉の暦年代に相当する。

SI1　出土の炭化材（試料No.4：PLD-33221）は，1393-1336 cal BC（39.3%），1323-1257 cal BC（50.5%），1251-1231 cal BC（5.6%）であった。これは，縄文時代後期後葉～晩期前葉の暦年代に相当する。

SI2　出土の炭化材（試料No.5：PLD-33222）は，1425-1369 cal BC（45.9%）および1361-1299 cal BC（49.5%）であった。これは，縄文時代後期後葉の暦年代に相当する。

調査所見によれば，SI3とSI1，SI2は縄文時代後晩期，SI1とSI2は弥生時代と推測されており，各試料の年代測定結果は，推定時期に対して整合的であった。

なお，種実試料の場合，測定結果は種実の結実年代を示す。SI1出土のイネ炭化種子（試料No.6：PLD-33223）とSI2出土の不明炭化種実（試料No.2：PLD-33219）は種実の結実年代を示している。一方，木材試料の場合は，最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが，内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料では，SI1出土の炭化材（試料No.1：PLD-33218）とSI3出土の炭化材（試料No.3：PLD-33220），SI1出土の炭化材（試料No.4：PLD-33221），SI2出土の炭化材（試料No.5：PLD-33222）が最終形成年輪を欠く部位不明の炭化材であり，年代測定の結果が古木効果の影響を受け，木材が枯死もしくは伐採された年代よりもやや古い年代を示している可能性がある。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：9-54，雄山閣．

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉　康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2　歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－」：257-269，同成社．

宮地聡一郎（2008）黒色磨研土器．小林達雄編「総覧縄文土器」：790-797，アム・プロモーション．

表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	δ ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-33218 SI1（試料 No.1）	-28.37 ± 0.11	2122 ± 21	2120 ± 20	195-149 cal BC（41.6%） 142-112 cal BC（26.6%）	204-87 cal BC（90.2%） 79-56 cal BC（ 5.2%）
PLD-33219 SI2（試料 No.2）	-23.88 ± 0.18	2064 ± 18	2065 ± 20	104- 44 cal BC（68.2%）	165-38 cal BC（94.2%） 9- 3 cal BC（ 1.2%）
PLD-33220 SI3（試料 No.3）	-26.81 ± 0.23	3082 ± 22	3080 ± 20	1401-1374 cal BC（22.1%） 1355-1302 cal BC（46.1%）	1413-1284 cal BC（95.4%）
PLD-33221 SI1（試料 No.4）	-25.76 ± 0.21	3046 ± 19	3045 ± 20	1376-1346 cal BC（27.8%） 1304-1265 cal BC（40.4%）	1393-1336 cal BC（39.3%） 1323-1257 cal BC（50.5%） 1251-1231 cal BC（ 5.6%）
PLD-33222 SI2（試料 No.5）	-25.77 ± 0.12	3100 ± 19	3100 ± 20	1412-1385 cal BC（32.8%） 1340-1311 cal BC（35.4%）	1425-1369 cal BC（45.9%） 1361-1299 cal BC（49.5%）
PLD-33223 SI1（試料 No.6）	-24.87 ± 0.11	2118 ± 20	2120 ± 20	183-111 cal BC（68.2%）	201-87 cal BC（89.5%） 79-56 cal BC（ 5.9%）

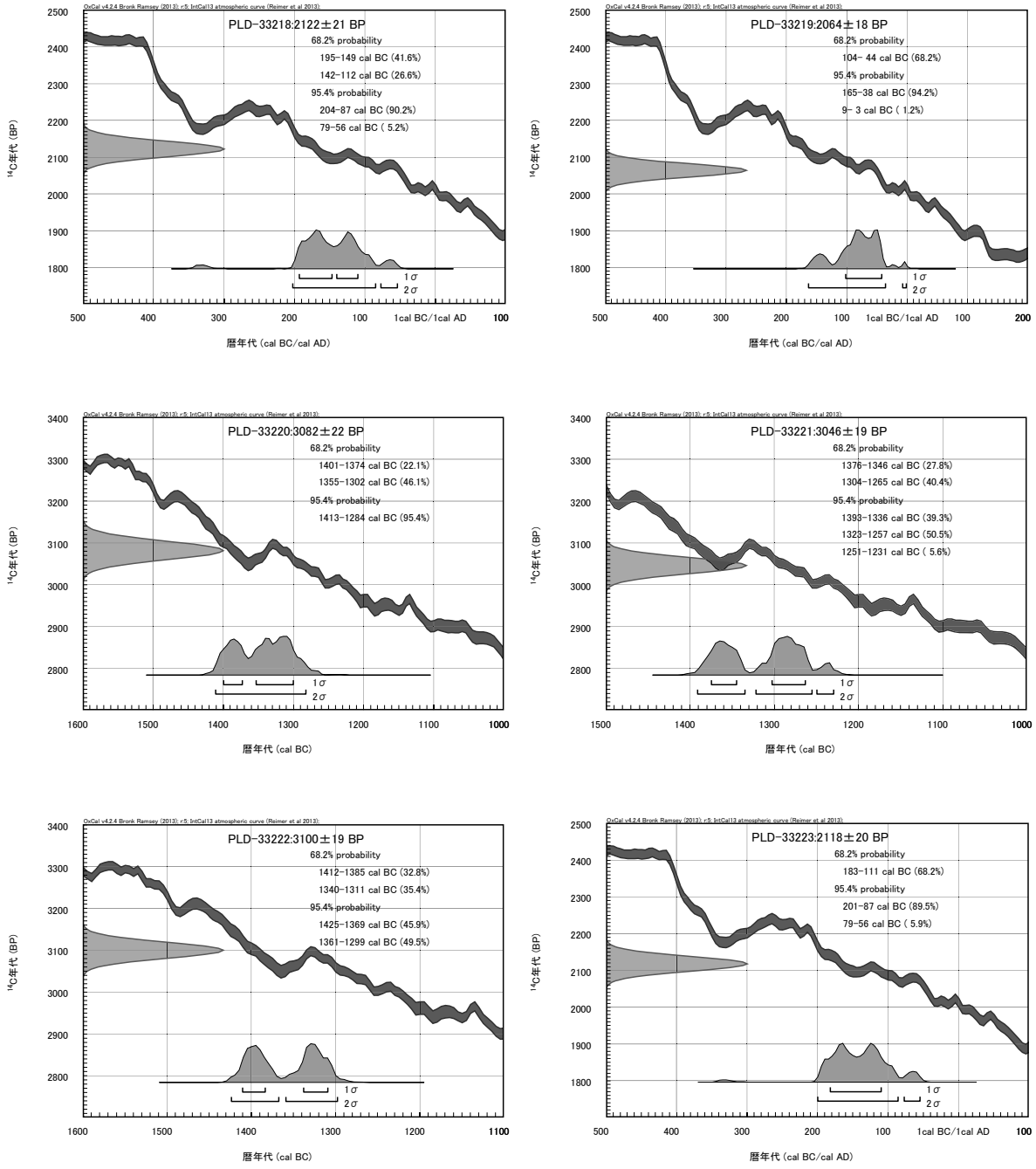


図１　暦年較正結果

中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会．

Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

下原遺跡から出土した炭化種実

佐々木由香・バンダリ スダルシャン
米田恭子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鹿児島県志布志市に所在する下原遺跡は，菱田川と安楽川に挟まれた標高約100mの尾根上に立地する，旧石器時代から近代の遺跡である。ここでは,炭化種実を同定し，食用などに利用された植物を検討する。なお，同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(別項参照)。

２．試料と方法

試料は，鹿児島県立埋蔵文化財センターによって肉眼採取された炭化種実２点である。試料は，竪穴住居跡であるSI1の南東部から採取された試料No.6とSI2の南西部床上埋土から採取された試料No.2である。放射性炭素年代測定の結果，２点ともに弥生時代中期の年代が得られた（放射性炭素年代測定の項参照)。

同定可能な分類群の抽出・計数・同定は，肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は，完形または一部が破損していても1個体とみなせるものは完形として数え，１個体に満たないものは破片とした。また，試料No.2については，形状から炭化鱗茎の可能性があると判断したため，一部を手術用のメスで剥がし，カーボンテープで試料台に固定した。その後イオンスパッタにて金コーティングを施し，走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製VE-9800）で細胞形態の観察および写真撮影を行った。試料は，鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

３．結果

同定した結果，炭化種実では草本植物のイネ炭化種子（頴果）１分類群が得られた。残存状態が悪いため同定可能な部位が残存していなかった一群を，不明炭化種実とした。このほかに，炭化した不明炭化鱗茎？が１分類群得られた（表１)。

表１　下原遺跡から出土した炭化種実（括弧内は破片数）

	試料 No.	6	2
	遺構	SI1	SI2
	採取位置	南東部	南西部床上埋土
	時期	弥生時代中期	弥生時代中期
分類群	採取方法	肉眼採取	肉眼採取
イネ	炭化種子	1	
不明	炭化鱗茎？		1
同定不能	炭化種実		(8)

SI2南西部床上埋土：不明炭化鱗茎？が１点と同定不能炭化種実が８点得られた。

SI1南東部：イネ炭化種子（頴果）が１点得られた。

次に，得られた炭化種実の記載を行い，図版に写真を示して同定の根拠とする。なお，分類群の学名は，米倉・梶田（2003-）に準拠し，APGⅢリストの順とした。

(1)　イネ　*Oryza sativa* L.　炭化種子（頴果）イネ科

上面観は両凸レンズ形，側面観は下部の残存がやや悪いが，長楕円形。片端の一端にある胚が欠けている。両面に縦方向の２本の浅い溝がある。長さ4.2mm，幅2.8mm。

(2)不明　Unknown　炭化鱗茎？

破片で全体形状は不明だが，上面観は円形と推定される。全長の約2/3の大きな円形の着点があり，突出する。中央部は円形状に窪み，縁に沿った列点がある。着点より上部の構造は不明であるが，表面は平滑で，表皮はある程度の厚みがある。残存長5.0mm，残存幅7.6mm。着点の直径は2.0mm，全体の半径は5.5mmで，直径は11.0mm程度と推定される。走査型電子顕微鏡による観察の結果，鱗片？に見られる葉肉細胞や表皮細胞の形状は不明瞭で，細胞形態からは鱗茎類かの判断は困難であった。

4．考察

弥生時代中期の間仕切り型の竪穴住居跡（SI1）から出土した炭化種実を検討したところ，栽培植物のイネが得られた。SI2からは炭化鱗茎？が得られたが，細胞構造からは鱗茎かどうかも不明瞭であった。

佐藤敏也は,炭化米の粒長と粒幅を計測し,長幅比（粒長／粒幅）を米粒の形態を示す指標に，長幅積（粒長×粒幅）を米粒の大きさを示す指標とした（佐藤，1971)。松本豪は，粒型を長幅比から長粒（2.0以上)，短粒（2.0～1.4)，円粒（1.4以下）に3分類し，さらにそれぞれ値によって「長，中，短」を設定した（松本，1994)。同様に,大きさは長幅積から極大（20以上),大（16-20),中（12-16)，小（8-12)，極小（8以下）の5段階を設定した。今回の下原遺跡のイネの長幅比は1.5で短短粒型,長幅積は11.8で小型であった。松本（1994）は，弥生時代のイネの長幅比は1.4～2.0の範囲で，短粒型が大部分を占めるとしている。下原遺跡は短粒型に該当しており，松本（1994）が示す傾向に対して整合的であった。同様に粒の大きさでみると，弥生時代中期についての具体的な指摘はないものの，後期には短粒型の中型が多い傾向が指摘されているが，今回の下原遺跡ではやや小さい小型であった。しかし，検討した点数は1点のみで,状態も良くないため，追加試料があれば再検討に期待したい。

今後，土壌中に含まれる炭化種実もあわせて検討すれば，当時の植物利用についてより詳細な検討が可能になると考えられる。

引用文献

松本　豪（1994）日本の稲作遺跡と古代米に関する研究. 大阪府立大学紀要，46，135-194.

佐藤敏也（1971）日本の古代米. 346p，雄山閣.

米倉浩司・梶田　忠（2003-）BG Plants 和名－学名インデックス（YList)，http://ylist.info

下原遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鹿児島県志布志市に所在する下原遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお，同一試料について放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２．試料と方法

試料は，縄文時代後晩期の竪穴住居跡，SI1，SI2と，弥生時代の竪穴住居跡SI1，SI3から出土した炭化材各1点の，合計4点である。

樹種同定に先立ち，肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と，残存年輪数および残存径の計測を行った。その後，カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し，直径１cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後，イオンスパッタで金コーティングを施し，走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

３．結果

樹種同定の結果，広葉樹のスダジイとコナラ属アカガシ亜属（以下，アカガシ亜属）の２分類群が確認された。縄文時代後晩期の竪穴住居跡では，SI1でアカガシ亜属，SI2でスダジイが確認された。弥生時代の竪穴住居跡，SI1の炭化材はスダジイ，SI3はアカガシであった。結果の一覧を表1に示す。

以下に，同定根拠となった木材組織の特徴を記載し，走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1)　スダジイ　*Castanopsis sieboldii (Makino) Hatus. ex* T. Yamaz. *et* Mashiba　ブナ科　図版1　1a-1c(No.1)，2a-2c（No.5）

環孔性の放射孔材で，年輪のはじめの道管は単独でやや大きいが，接線方向に連続しない。晩材部では徐々に径を減じた小型で薄壁の小道管が集団をなして火炎状に配列する。道管の穿孔は単一である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。放射組織は単列同性である。

スダジイは，福島県と新潟県佐渡以南の暖帯に生育する常緑高木である。材はやや重硬で，割裂性や耐朽性は中庸だが，狂いが出やすい。

(2)　コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版1　3a-3c（No.3），4a-4c（No.4）

円形でやや大型の道管が，単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で，単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で，アカガシやシラカシ，ツクバネガシ，アラカシなど８種がある。イチイガシ以外は木材組織による識別が困難なため，イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は，きわめて堅硬および強靭で，水湿に強い。

４．考察

縄文時代後晩期の竪穴住居跡SI1と弥生時代のSI3から出土した炭化材は，炉から出土しているため，燃料材と考えられる。アカガシ亜属の材は重硬で，燃料材としては火持ちが良い。

縄文時代後晩期の竪穴住居跡SI2のピットから出土した炭化材はスダジイであった。また，弥生時代の竪穴住居跡SI1の埋土内から出土した炭化材もスダジイであった。スダジイの材は，比較的重硬である。どちらの試料も用途は不明であるが，建築部材や燃料材などの可能性が考えられる。

参考文献

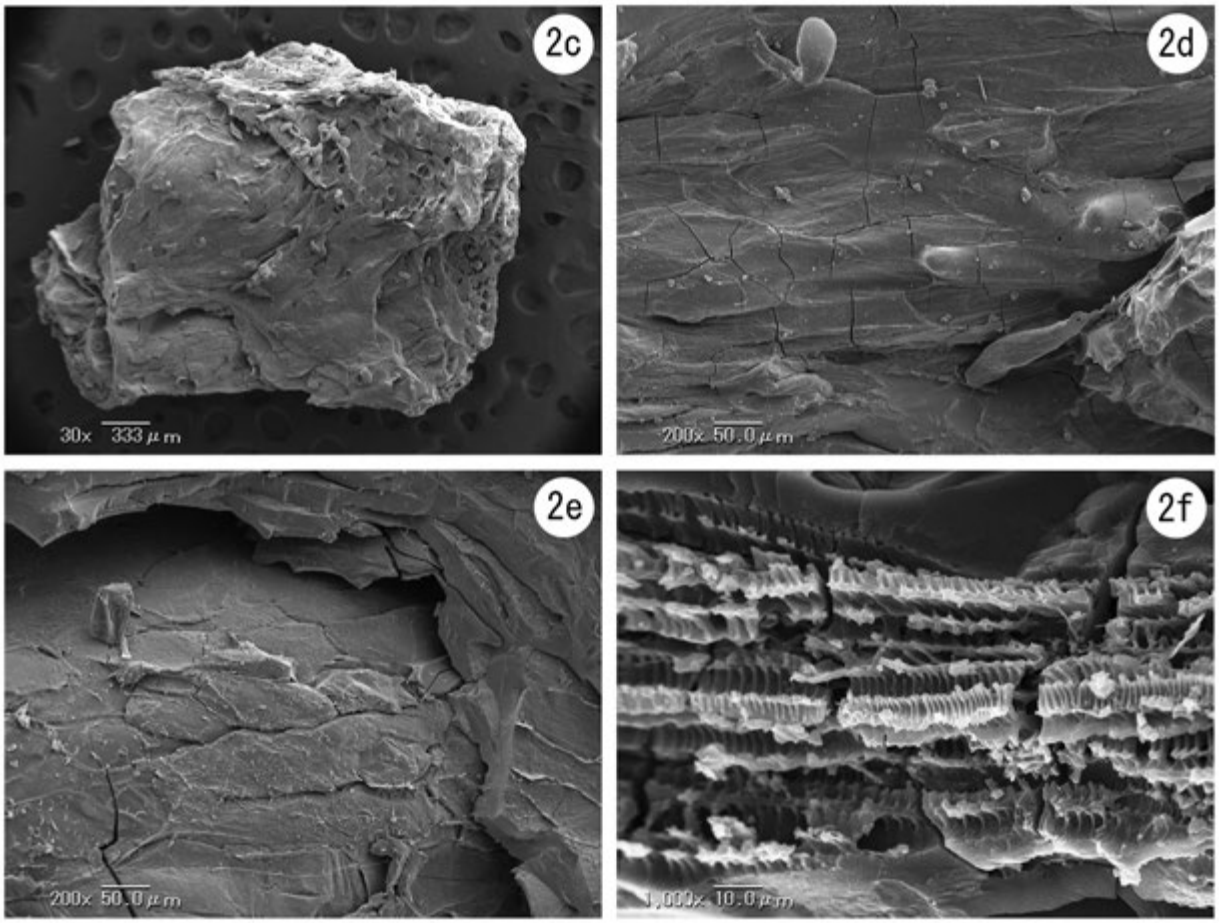
平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂(2011)　日本有用樹木誌．238p，海青社．

表１　樹種同定結果一覧

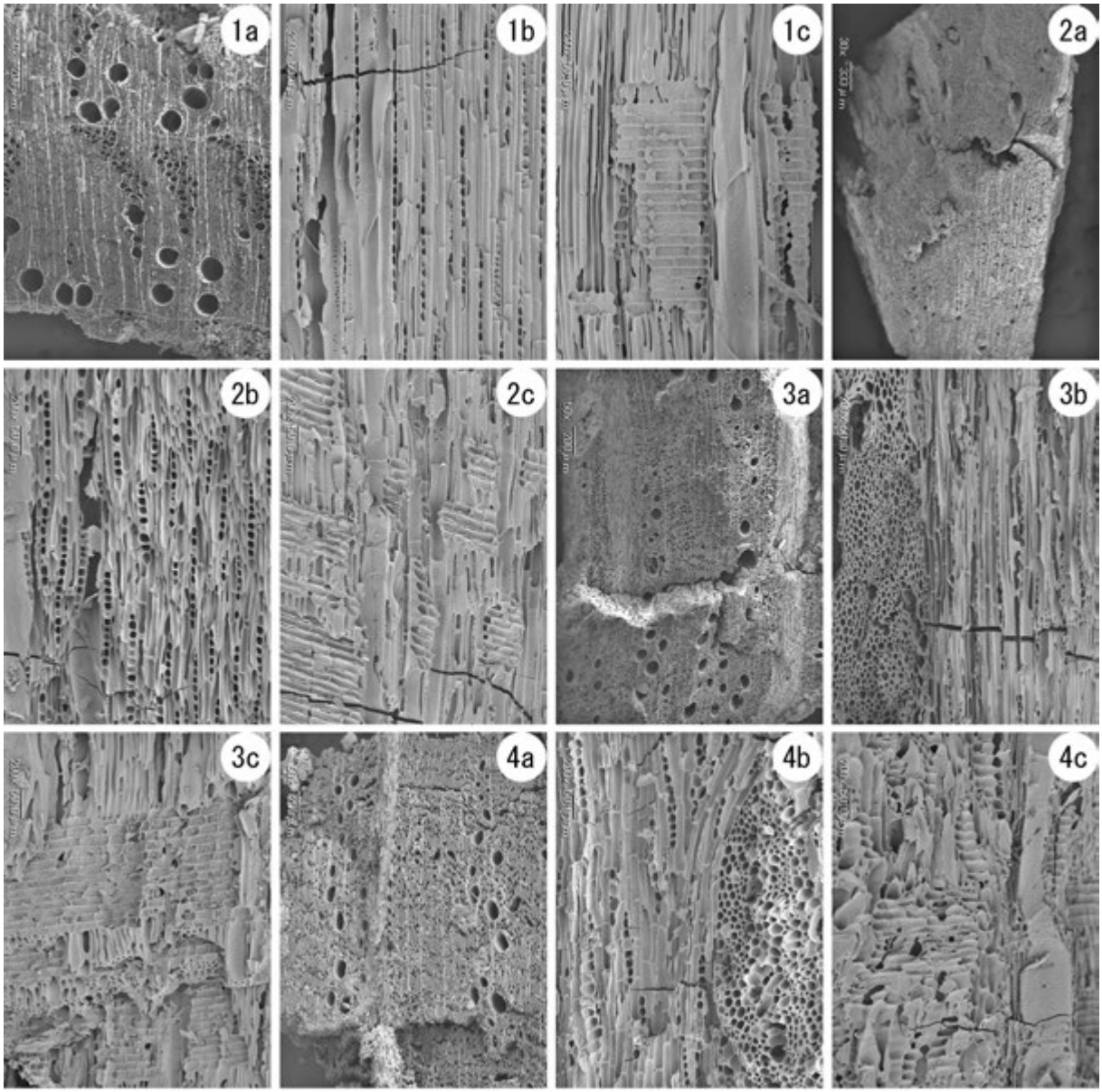
試料 No.	遺構・位置	樹種	形状	サイズ	年代測定番号
1	SI1 埋土内	スダジイ	破片	1.5 × 1.2 × 4 cm	PLD-33218
3	SI3 炉	コナラ属アカガシ亜属	破片	＜5 mm	PLD-33220
4	SI1 炉	コナラ属アカガシ亜属	破片	0.7 × 0.5 × 1.5 cm（他＜1.5 cm角破片）	PLD-33221
5	SI2 ピット	スダジイ	破片	1 × 0.5 × 1 cm（他＜1.5 cm角破片）	PLD-33222





図版１　下原遺跡から出土した炭化種実の顕微鏡写真

１．イネ炭化種子（SI1 南東部，No.6，PLD-33223），２．不明炭化鱗茎？（SI2 南西部床上埋土，No.2，PLD-33219），2c ～ 2f，不明炭化鱗茎？の走査型電子顕微鏡写真



図版１　下原遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. スダジイ（No.1），2a-2c. スダジイ（No.5），3a-3c. コナラ属アカガシ亜属（No.3），4a-4c. コナラ属アカガシ亜属（No.4）
a：横断面，b：接線断面，c：放射断面

放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ
伊藤　茂・安　昭炫・佐藤正教・廣田正史
山形秀樹・小林紘一・Zaur Lomtatidze・黒沼保子

１．はじめに

鹿児島県志布志市に所在する下原遺跡から出土した試料について，加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお，同一試料について樹種同定も行われている（樹種同定の項参照）。

２．試料と方法

試料は，炭化材３点と，土器付着炭化物4点の，合計７点である。炭化材は，土坑SK1-⑥出土の試料No.1（PLD-33301）と，集石2出土の試料No.2（PLD-33302），SJ2出土の試料No.3（PLD-33303）で，いずれも最終形成年輪が残存しておらず部位不明であった。土器付着炭化物は，SMH2-埋2出土の土器の底部内面に付着していた炭化物（試料No.4：PLD-33304），SMH2-SI1-167出土の土器の胴部外面に付着していた炭化物（試料No.5：PLD-33305），SMH2-SI1-4出土の土器の胴部？内面に付着していた炭化物（試料No.6：PLD-33306），SMH2-SI2-13出土の土器の底部内面に付着していた炭化物（試料No.7：PLD-33307）である。調査所見によれば,SI1は弥生時代，SK1とSJ2，SI1，SI2は縄文時代後晩期，SS2は縄文時代早期の遺構と推測されている。

測定試料の情報，調製データは表１のとおりである。試料は調製後，加速器質量分析計（パレオ・ラボ，コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた^{14}C濃度について同位体分別効果の補正を行った後，^{14}C年代，暦年代を算出した。

３．結果

表２に，同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ^{13}C），同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲，慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した^{14}C年代，暦年較正結果を，図１に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下１桁を丸めていない値であり，今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。^{14}C年代（yrBP）の算出には，^{14}Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また，付記した^{14}C年代誤差（±1σ）は，測定の統計誤差，標準偏差等に基づいて算出され，試料の^{14}C年代がその^{14}C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお，暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは，大気中の^{14}C濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}C年代に対し，過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の^{14}C濃度の変動，および半減期の違い（^{14}Cの半減期5730±40年）を較正して，

表１　測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-33301	遺構：SK1-⑥ 試料 No.1	種類：炭化材（クスノキ科） 試料の性状：最終形成年輪以外，部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33302	遺構：SS2 試料 No.2	種類：炭化材（コナラ属アカガシ亜属） 試料の性状：最終形成年輪以外，部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33303	遺構：SJ2　埋設土器 試料 No.3	種類：炭化材（サカキ） 試料の性状：最終形成年輪以外，部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33304	遺構：SMH2-埋2 硬化面埋設土器259 試料 No.4	種類：土器付着物・内面（おこげ） 部位：底部 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33305	遺構：SMH2-SI1-167 試料 No.5	種類：土器付着物・外面（煤類） 部位：胴部 状態：dry″	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：0.1N，塩酸：1.2N）
PLD-33306	遺構：SMH2-SI1-4 試料 No.6	種類：土器付着物・内面（おこげ） 部位：胴部？ 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：1.0N，塩酸：1.2N）
PLD-33307	遺構：SMH2-SI2-13 試料 No.7	種類：土器付着物・内面（おこげ） 部位：底部 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N，水酸化ナトリウム：0.1N，塩酸：1.2N）

より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C年代の暦年較正にはOxCal4.2（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお，1σ暦年代範囲は，OxCalの確率法を使用して算出された^{14}C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり，同様に2σ暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は，その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は^{14}C年代の確率分布を示し，二重曲線は暦年較正曲線を示す。

４．考察

以下,各試料の暦年較正結果のうち2σ暦年代範囲（確率95.4%）に着目して,遺構ごとに結果を整理する。なお,縄文時代の土器編年と暦年代の対応関係については小林（2008）と宮地（2008），弥生時代の暦年代については藤尾（2009）を参照した。

SK1-⑥出土の炭化材（試料No.1：PLD-33301）は，1411-1286 cal BC（95.4%）であった。これは，縄文時代後期後葉に相当する。SK1の推定時期は縄文時代後期であり，測定結果は推定時期に対して整合的である。

SS2出土の炭化材（試料No.2：PLD-33302）は，1441-1379 cal BC（75.9%）および1342-1308 cal BC（19.5%）であった。これは，縄文時代後期後葉に相当する。SS2の推定時期は縄文時代早期であり，測定結果は推定時期よりも新しい年代であった。

SJ2出土の炭化材（試料No.3：PLD-33303），1396-1259 cal BC（94.2%）および1242-1235 cal BC（1.2%）であった。これは縄文時代後期後葉～晩期前葉に相当する。SJ2の推定時期は縄文時代後期であり，測定結果は推定時期に対して整合的である。

SMH2-埋2出土の土器の内面に付着していた炭化物（試料No.4：PLD-33304）は，1391-1337 cal BC（37.0%）および1322-1229 cal BC（58.4%）であった。これは，縄文時代後期後葉に相当する。

SMH2-SI1-167出土の土器の外面に付着していた炭化物（試料No.5：PLD-33305），166-46 cal BC（95.4%）であった。これは弥生時代中期中葉～後葉に相当する。

SMH2-SI1-4出土の土器の内面に付着していた炭化物（試料No.6：PLD-33306）は，1386-1340 cal BC（19.4%）および1310-1212 cal BC（76.0%）であった。これは，縄文時代後期後葉～晩期前葉に相当する。

SMH2-SI2-13出土の土器の内面に付着していた炭化物（試料No.7：PLD-33307）は，1391-1337 cal BC（35.9%）および1321-1228 cal BC（59.5%）であった。これは，縄文時代後期後葉～晩期前葉に相当する。

参考文献

Bronk Ramsey, C.（2009）Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.

藤尾慎一郎（2009）弥生時代の実年代．西本豊弘編「新弥生時代のはじまり第4巻　弥生農耕のはじまりとその年代」：9-54，雄山閣．

小林謙一（2008）縄文時代の暦年代．小杉　康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学２　歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－」：257-269，同成社．

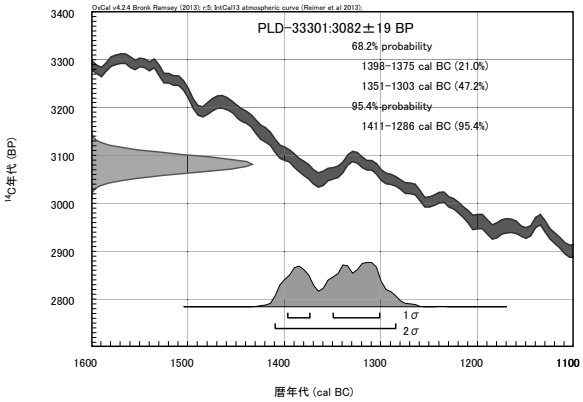
宮地聡一郎（2008）黒色磨研土器．小林達雄編「総覧縄文土器」：790-797，アム・プロモーション．

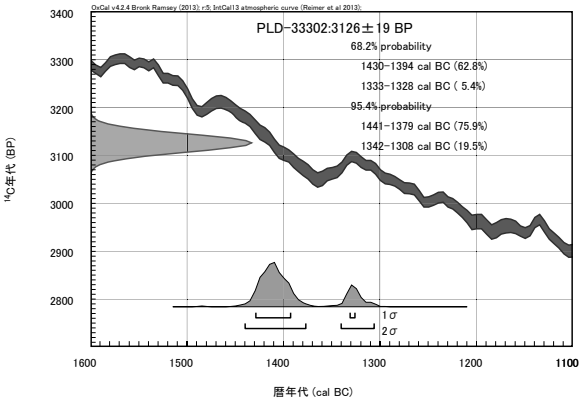
中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎．日本先史時代の^{14}C年代編集委員会編「日本先史時代の^{14}C年代」：3-20，日本第四紀学会．

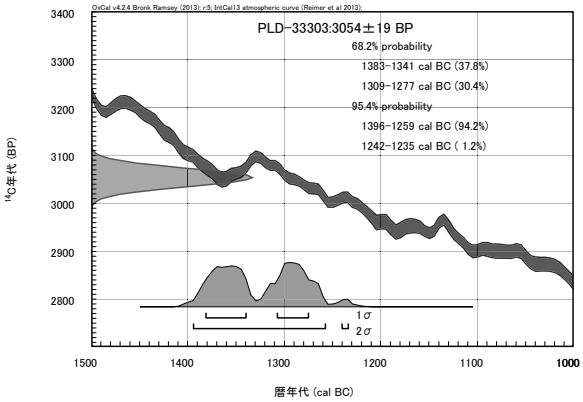
Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck,

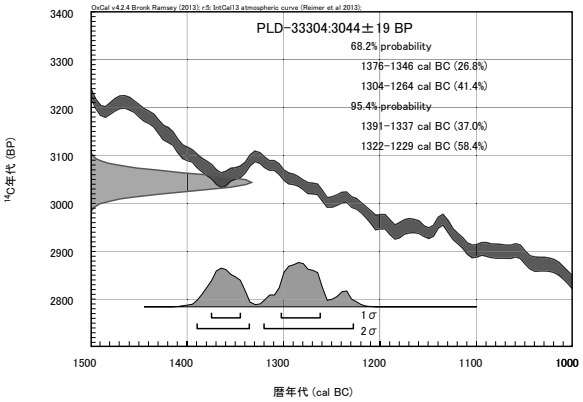
表２　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

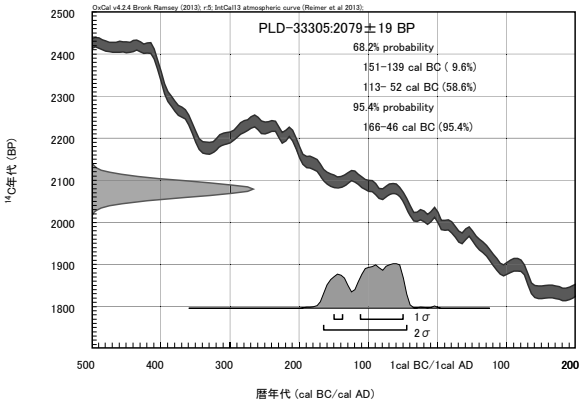
測定番号	δ ^{13}C（‰）	暦年較正用年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代（yrBP ± 1 σ）	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
PLD-33301 SK1-⑥	-27.10 ± 0.11	3082 ± 19	3080 ± 20	1398-1375 cal BC (21.0%) 1351-1303 cal BC (47.2%)	1411-1286 cal BC (95.4%)
PLD-33302 SS2	-28.65 ± 0.11	3126 ± 19	3125 ± 20	1430-1394 cal BC (62.8%) 1333-1328 cal BC (5.4%)	1441-1379 cal BC (75.9%) 1342-1308 cal BC (19.5%)
PLD-33303 SJ2	-29.67 ± 0.12	3054 ± 19	3055 ± 20	1383-1341 cal BC (37.8%) 1309-1277 cal BC (30.4%)	1396-1259 cal BC (94.2%) 1242-1235 cal BC (1.2%)
PLD-33304 SMH2-埋2	-25.49 ± 0.12	3044 ± 19	3045 ± 20	1376-1346 cal BC (26.8%) 1304-1264 cal BC (41.4%)	1391-1337 cal BC (37.0%) 1322-1229 cal BC (58.4%)
PLD-33305 SMH2-SI1-167	-27.24 ± 0.20	2079 ± 19	2080 ± 20	151-139 cal BC (9.6%) 113- 52 cal BC (58.6%)	166-46 cal BC (95.4%)
PLD-33306 SMH2-SI1-226	-25.30 ± 0.11	3026 ± 21	3025 ± 20	1369-1361 cal BC (5.2%) 1296-1228 cal BC (63.0%)	1386-1340 cal BC (19.4%) 1310-1212 cal BC (76.0%)
PLD-33307 SMH2-SI2-13	-25.75 ± 0.16	3043 ± 19	3045 ± 20	1376-1346 cal BC (26.1%) 1304-1263 cal BC (42.1%)	1391-1337 cal BC (35.9%) 1321-1228 cal BC (59.5%)

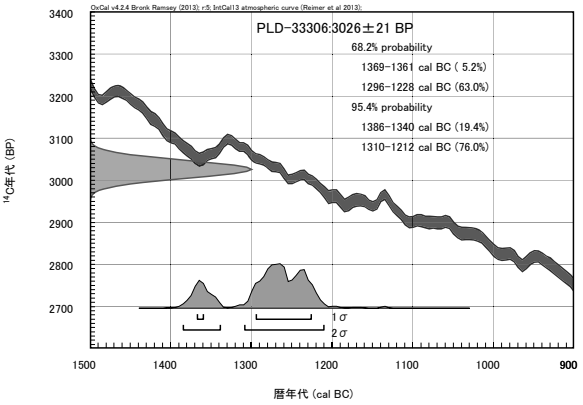


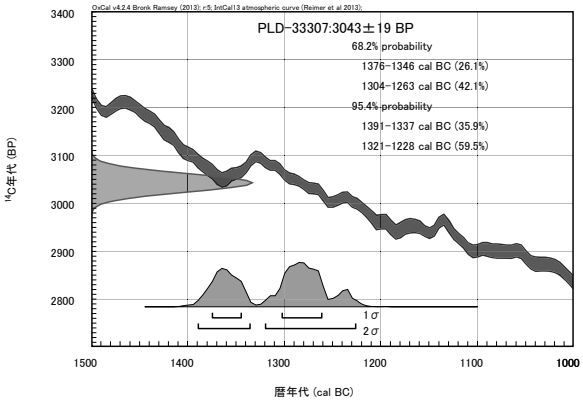






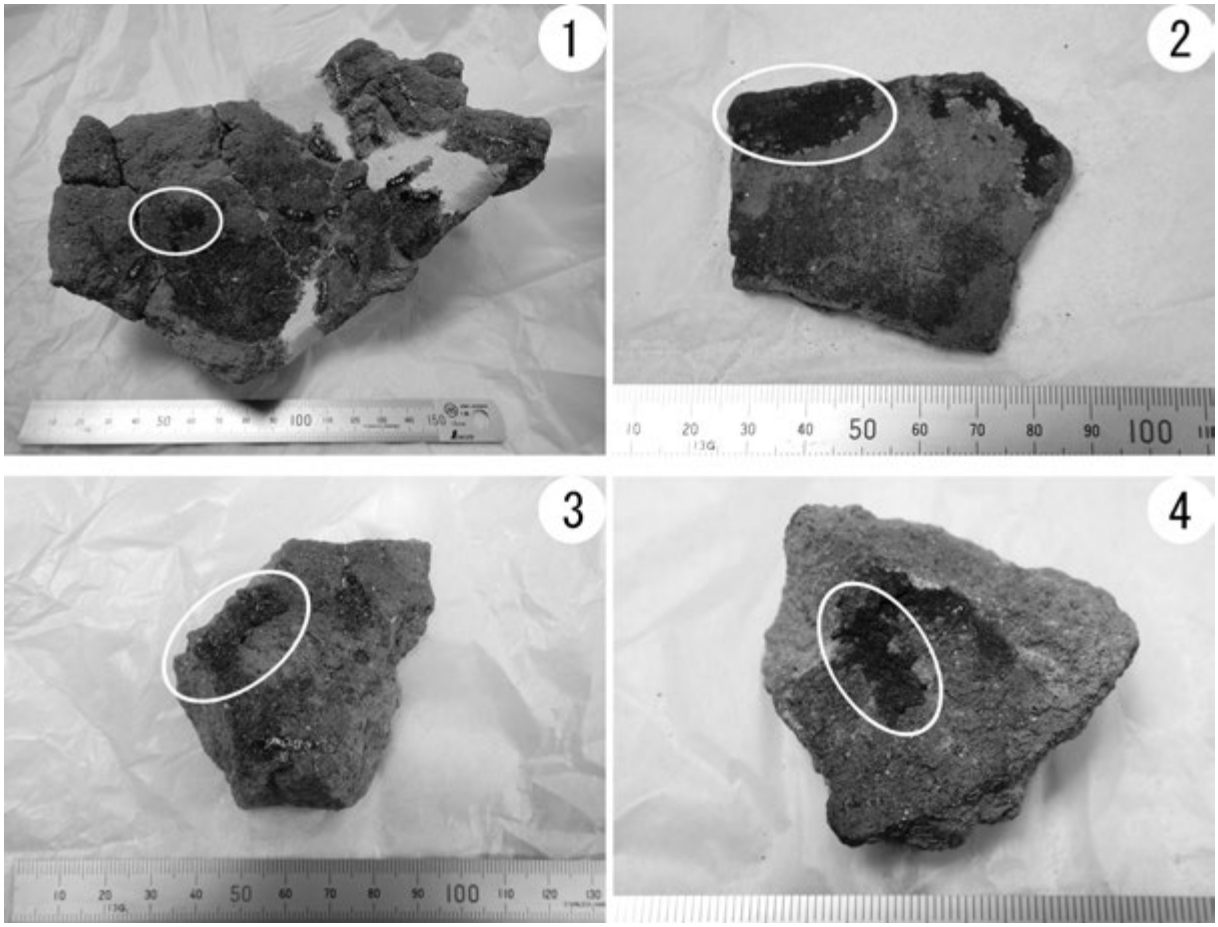






C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Haflidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

図１　暦年較正結果



図版１　土器付着炭化物の試料採取箇所

１．試料 No.4：SMH2- 埋 2 出土土器の底部内面付着炭化物（〇印箇所を採取）
２．試料 No.5：SMH2-SI1-167 出土土器の胴部外面付着炭化物（〇印箇所を採取）
３．試料 No.6：SMH2-SI1-4 出土土器の胴部？内面付着炭化物（〇印箇所を採取）
４．試料 No.7：SMH2-SI2-13 出土土器の胴部内面付着炭化物（〇印箇所を採取）

下原遺跡出土炭化材の樹種同定

黒沼保子（パレオ・ラボ）

１．はじめに

鹿児島県志布志市に所在する下原遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお，同一試料について放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

２．試料と方法

試料は，土坑SK1と，集石土坑SS2，遺構外のSJ2から出土した炭化材が各１点の，合計3点である。調査所見から，SK1とSJ2は縄文時代後期と推測されており，放射性炭素年代測定も整合的な結果であった。SS2は縄文時代早期と推測されていたが，放射性炭素年代測定では縄文時代後期後葉の暦年代範囲を示していた（放射性炭素年代測定の項参照）。

樹種同定に先立ち，肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と，残存年輪数および残存径の計測を行った。その後，カミソリまたは手で３断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し，直径１cmの真鍮製試料台に試料を両面テープで固定した。その後，イオンスパッタで金コーティングを施し，走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

３．結果

樹種同定の結果，広葉樹のクスノキ科とコナラ属アカガシ亜属（以下，アカガシ亜属），サカキの３分類群が確認された。試料の形状は，すべて破片であった。結果の一覧を表１に示す。

以下に，同定根拠となった木材組織の特徴を記載し，走査型電子顕微鏡写真を図版に示す。

(1)　クスノキ科　Lauraceae　図版１　1a-1c（No.1）

やや小型の道管が，単独ないし２～４個複合してまばらに分布する散孔材である。軸方向柔組織は周囲状～翼状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は異性で，１～３列幅である。

クスノキ科は，熱帯から温帯に分布する常緑または落葉の高木もしくは低木である。ニッケイ属やタブノキ属，クロモジ属など８属がある。

(2)　コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図版1　2a-2c（No.2）

円形でやや大型の道管が，単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は単一である。放射組織は同性で，単列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で，アカガシやシラカシ，ツクバネガシ，アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織による識別が困難なため，イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は，きわめて堅硬および強靱で，水湿に強い。

(3)　サカキ　Cleyera japonica Thunb.　モッコク科　図版１　3a-3c（No.3）

小径で角張った道管が，ほぼ単独で均等に分布する散孔材である。道管の穿孔は30段程度の階段状である。放射組織は異性で，ほぼ１列である。

サカキは亜熱帯から暖帯に分布する常緑の小高木である。材は硬く強靱で，割裂は困難である。

４．考察

土坑SK1ではクスノキ科，SS2ではアカガシ亜属，SJ2ではサカキが確認された。いずれも形状は破片で，元の用途は不明であるが，燃料材などの可能性が考えられる。

クスノキ科とアカガシ亜属，サカキはいずれも常緑広葉樹林帯に分布する樹木であり，遺跡周辺に生育していた植物が利用されたと考えられる。

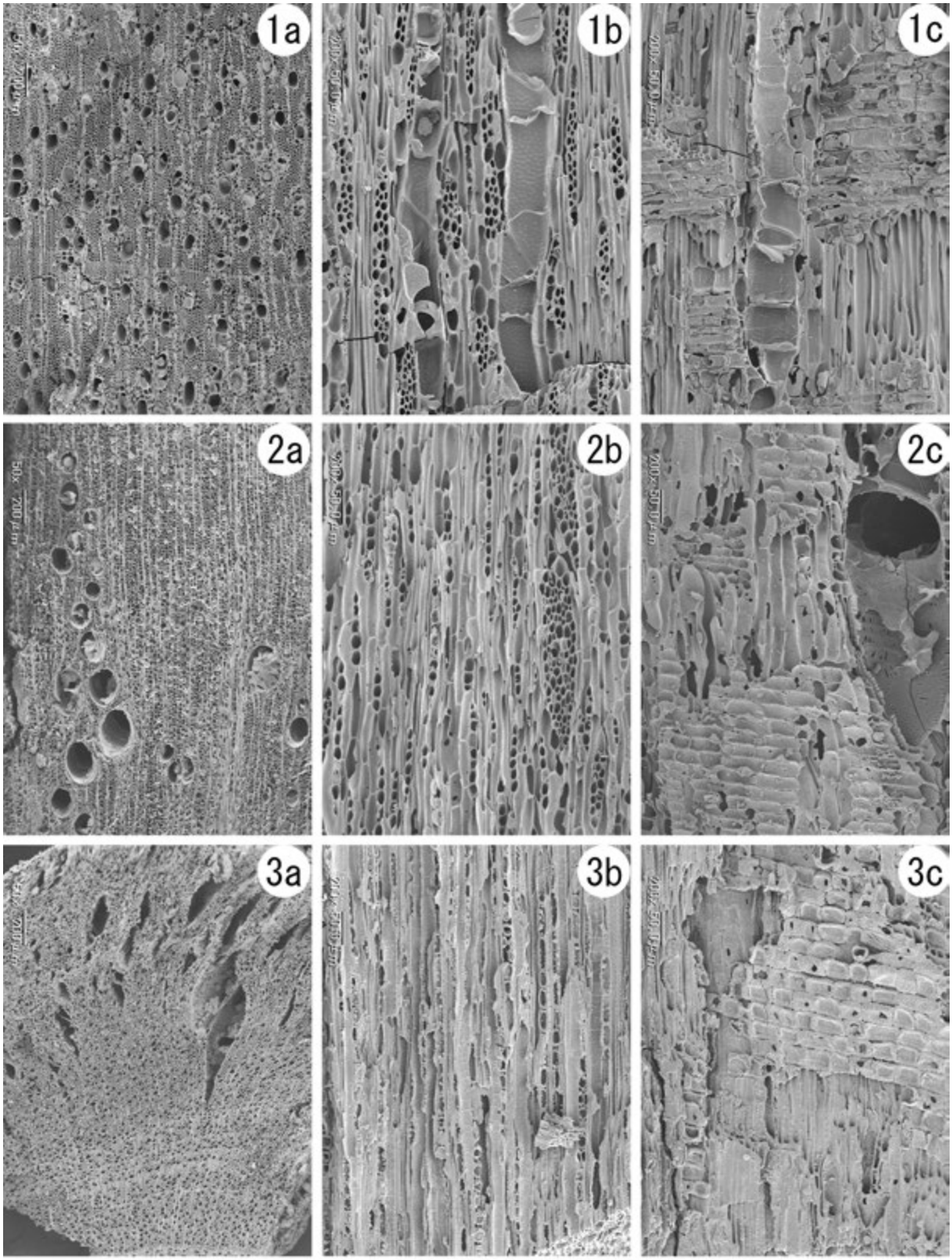
参考文献

平井信二（1996）木の大百科．394p，朝倉書店．

伊東隆夫・佐野雄三・安部　久・内海泰弘・山口和穂(2011) 日本有用樹木誌．238p，海青社．

表１　樹種同定結果

試料 No.	遺構名	樹種	形状	年代測定番号
No.1	SK1-⑥	クスノキ科	破片	PLD-33301
No.2	SS2	コナラ属アカガシ亜属	破片	PLD-33302
No.3	SJ2	サカキ	破片	PLD-33303



図版１　下原遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クスノキ科（No.1），2a-2c. コナラ属アカガシ亜属（No.2），3a-3c. サカキ（No.3）
a：横断面，b：接線断面，c：放射断面

下原遺跡の黒曜石の産地同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

志布志市に所在する下原遺跡は，いわゆるシラス(鹿児島県地質図編集委員会,1990)からなる台地上に位置する。台地上面の標高は約100mとされ，周辺は開析が進んでいる。発掘調査では，旧石器時代や縄文時代の遺物・遺構が確認されている。このうち今回は黒曜石製品の石材産地に関する情報を得ることを目的として，蛍光X線分析装置による測定を行った。

１．試料

分析に供された試料は，下原遺跡から出土した石器遺物14点である。各試料の詳細は結果とともに記す。なお，分析の結果，試料中には黒曜石ではないものが数点含まれる。この点については後述する。

２．分析方法

(1)　エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（EDX）による測定

本分析の特徴は，試料の非破壊による測定が可能であり，かつ多元素を同時に分析できることが利点として挙げられる。一方，非破壊分析である以上，測定は試料表面のみが対象となることから，表面が汚れた試料や風化してしまっている試料については試料の洗浄あるいは測定面の選択が必要となる。本分析では試料が貴重な遺物であることから，汚れが少なく，風化が進んでいない面を選択して測定を行っている。ただし，表面の風化，汚れが目立つ場合は，メラミンスポンジを用いて洗浄したあと分析を実施している。

本分析で使用した装置は，セイコーインスツルメンツ製エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（SEA2120L）であり，Ｘ線管球はロジウム（Rh），検出器はSi（Li）半導体検出器である。測定条件は，励起電圧50kV，管電流自動設定（μA），測定時間600秒，コリメータ（照射径）φ10.0mm，フィルターなし，測定室雰囲気は真空である。測定元素は，Al（アルミニウム），Si（ケイ素），K（カリウム），Ca（カルシウム），Ti（チタン），Mn（マンガン），Fe（鉄），Rb（ルビジウム），Sr（ストロンチウム），Y（イットリウム），Zr（ジルコニウム）の11元素であり，測定試料全てにおいてマイラー膜（PE,2.5μm；ケンプレックス製CatNo107）を介して元素Ｘ線強度（cps）を測定した。

(2)　産地推定方法

産地推定は，望月（2004など）による方法に従い，測定結果（元素Ｘ線強度（cps））から，５つの判別指標値を求める。５つの判別指標値は，Rb分率{Rb×100/（Rb＋Sr＋Y＋Zr）}，Sr分　率{Sr×100/（ Rb＋Sr＋Y＋Zr）}，Zr分率{Zr×100/（ Rb＋Sr＋Y＋Zr）}，Mn×100/Fe，Log（Fe/K）である。

一方，産地推定に必要な原産地の資料に関しては，望月（2004）で用いられている原産地試料の分析データーを使い，原産地判定用資料を作成する。今回産地推定に用いた黒曜石原産地を図1に示す。

原産地試料のデーターを，Rb分率とMn×100/Fe，Sr分率とLog（Fe/K）についてグラフ化する。また，グラフを元に作成した二次元正規密度分布，ならびに判別指標値から作成した多次元密度分布の結果から，原産地を元にした判別群を設定する。その名称ならびに判別群と原産地との関係を表1に示す。

Rb分率とMn×100/Fe，Sr分率とLog（Fe/K）のグラフ中に，各判別群の重心より２σ(約95%)の範囲を示す楕円を書く(原産地試料の各分析データーは図が煩雑になるため割愛する)。これに，遺跡出土試料の分析結果を重ね合わせることにより,産地推定の指標の一つとなる。

一方，各判別群の５つの判別指標値について，それぞれの基本統計量(平均値や分散，共分散など)を求める。この値をもとに，遺跡出土試料と各判別群とのマハラノビス平方距離を計算する。マハラノビス平方距離による判別は，先に述べた５つの判別指標値を使う方法(望月,2004など)と，基本的にZr分率を除くグラフに使った4つの判別指標値を使うが，群間の判別が難しい場合にZr分率を加える方法(明治大学古文化財研究所,2009,2011，明治大学文学部，2014a,b)がある。今回は，４成分，５成分双方の結果を掲載する。測定試料と各判別群全てについて，４成分，５成分のマハラノビス平方距離を求め，測定試料に近いものから３判別群を表に示す。これらについてカイ二乗検定を行い，99.5%の範囲に入った場合を「True」，入らなかった場合を「False」とする。

３．結果および考察

各試料の詳細および元素Ｘ線強度（cps）および判別指標値を表２に示す。また，Rb分率とMn×100/Fe，Sr分率－Log（Fe/K）について，原産地試料の重心から２σ(95%)の範囲を記したグラフに，各試料の結果を重ね合わせた図を，図２，３に記す。表３には，測定試料に近いものから３原産地分のマハラノビス平方距離を示し，これらについてカイ二乗検定を行なった結果を示す。

表１　黒曜石原産地試料一覧

大分類	中分類	判別群	記号	該当する原産地
信州	霧ヶ峰	男女倉１群	男女１	ぶどう沢，牧ヶ沢，高松沢，本沢下
信州	霧ヶ峰	男女倉２群	男女２	ぶどう沢，牧ヶ沢
信州	霧ヶ峰	男女倉３群	男女３	ぶどう沢，牧ヶ沢，高松沢，本沢下
信州	霧ヶ峰	鷹山系	鷹　山	星糞峠，鷹山
信州	霧ヶ峰	西霧ヶ峰系	星ヶ塔	星ヶ塔，星ヶ台
信州	霧ヶ峰	和田峠１群	和田１	古峠，土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠２群	和田２	丁子御領，芙蓉パーライト，鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠３群	和田３	小深沢，芙蓉パーライト，新和田トンネル，土屋橋北，土屋橋東，18 地点，24 地点，26 地点，丁子御領，鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠４群	和田４	小深沢，芙蓉パーライト，新和田トンネル，土屋橋北，土屋橋西，土屋橋東，18 地点，24 地点，26 地点，丁子御領，鷲ヶ峰
信州	霧ヶ峰	和田峠５群	和田５	24 地点，25 地点，26 地点，小深沢
信州	霧ヶ峰	和田峠６群	和田６	小深沢，芙蓉パーライト，24 地点，25 地点，26 地点，土屋橋西，土屋橋東
信州	霧ヶ峰	和田峠７群	和田７	東餅屋，芙蓉パーライト，古峠，丁子御領，鷲ヶ峰，土屋橋北
信州	霧ヶ峰	和田峠８群	和田８	25 地点，26 地点，土屋橋東
信州	北八ヶ岳	横岳系双子池	双子池	双子池
信州	北八ヶ岳	横岳系亀甲池	亀甲池	亀甲池　擂鉢池
信州	北八ヶ岳	冷山・麦草系	麦草系	冷山，麦草峠，双子池，渋ノ湯，八ヶ岳 7，八ヶ岳 9，長門美しの森
信州	北八ヶ岳	中ツ原	中ツ原	中ツ原（遺跡試料）
東海・北陸	岐阜	下呂市	下　呂	湯ヶ峰
中国・四国	隠岐	久見	久　見	久見
中国・四国	隠岐	岬地区	岬地区	隠岐岬
中国・四国	隠岐	箕浦系	箕浦系	箕浦，加茂赤土，岸浜
九州	有田	腰岳	腰　岳	腰岳
九州	伊佐地区	大口	大　口	五女木，猩猩，日東
九州	伊佐地区	桑木津留	桑　木	桑木津留
九州	三船	三船	三　船	三船
九州	串木野東	上牛鼻系	上牛鼻	樋脇上牛鼻
九州	串木野東	上牛鼻系	平木場	平木場
九州	西小国	西小国	西小国	西小国
九州	大崎半島	大崎半島	大　崎	大崎半島
九州	姫島	姫島	姫　島	姫島
九州	佐世保	針尾１群	針尾１	針尾中町，針尾古里，針尾田ノ上
九州	佐世保	針尾２群	針尾２	針尾中町，針尾田ノ上，針尾古里，針尾通信塔
九州	佐世保	針尾３群	針尾３	針尾古里，針尾田ノ上
九州	佐世保	針尾４群	針尾４	針尾田ノ上，針尾通信塔，針尾古里
九州	佐世保	針尾５群	針尾５	針尾田ノ上，針尾通信塔
九州	佐世保	針尾６群	針尾６	針尾田ノ上
九州	佐世保	針尾７群	針尾７	針尾中町，針尾田ノ上
九州	佐世保	針尾８群	針尾８	針尾中町
九州	佐世保	針尾・淀姫１群	淀姫１	針尾土器田，，針尾古里，針尾大崎，針尾通信塔，淀姫
九州	佐世保	針尾・淀姫２群	淀姫２	針尾通信塔，淀姫
九州	大根占	大根占	大根占	大根占
九州	球磨	白浜	白　浜	白浜
九州	北松浦地区	北松浦１群	松浦１	大崎免，岳崎免，松浦牟田
九州	北松浦地区	北松浦２群	松浦２	大崎免，岳崎免
九州	北松浦地区	北松浦３群	松浦３	大崎免，岳崎免，松浦牟田

表 2. スペクトル強度と判別指標値

No.	注記	強度 (cps)											判別指標					岩石名
		Al	Si	K	Ca	Ti	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb 分率	Sr 分率	Zr 分率	Mn*100/Fe	log(Fe/K)	
1	D-54 区 SI1-135	62.299	500.109	65.358	20.081	1.001	5.884	125.720	18.134	4.596	6.336	10.464	45.87	11.63	26.47	4.68	0.284	黒曜石
2	D-54 区 SI1-207	25.477	689.842	5.200	3.338	1.550	4.955	54.762	0.729	1.850	0.270	1.329	–	–	–	–	–	チャート
3	D-53 区 SI2-31	65.585	521.975	74.233	28.003	4.522	7.316	107.188	15.606	5.750	6.752	13.896	37.15	13.69	33.08	6.83	0.160	黒曜石
4	D-53･54 区 SI3-57	81.767	673.214	86.251	29.487	1.560	7.543	164.818	18.447	4.290	6.560	9.069	48.08	11.18	23.64	4.58	0.281	黒曜石
5	D-53･54 区 SI3-107	53.812	458.674	41.751	25.890	4.989	6.594	110.921	11.312	13.193	5.607	18.293	23.37	27.26	37.79	5.94	0.424	黒曜石
6	D-53･54 区 SI3-111	27.538	810.203	9.683	4.343	4.227	5.694	85.218	2.180	3.549	1.805	2.701	–	–	–	–	–	チャート
7	D-53･54 区 SI3-147	67.237	470.959	51.780	16.823	1.455	11.586	135.886	9.084	7.465	2.629	3.999	39.19	32.21	17.25	8.53	0.419	黒曜石
8	D･E-54 区 SI1-86	26.198	679.377	4.229	2.352	1.990	3.964	36.471	0.003	2.107	0.851	1.490	–	–	–	–	–	チャート
9	D･E-54 区 SI1-111	21.111	765.764	4.577	2.174	1.176	3.246	15.589	0.000	2.901	0.235	0.339	–	–	–	–	–	玉髄
10	D･E-54 区 SI1-127	58.407	478.615	61.023	19.452	1.327	5.379	119.429	18.006	4.826	7.188	10.049	44.94	12.04	25.08	4.50	0.292	黒曜石
11	A-53 区 25999	57.391	475.898	60.756	22.865	4.234	5.433	97.957	16.963	10.726	6.222	12.368	36.65	23.18	26.72	5.55	0.207	黒曜石
12	D-50 区 28722	60.384	530.041	67.015	20.726	4.470	7.236	107.923	17.350	6.486	7.736	15.235	37.07	13.86	32.55	6.70	0.207	黒曜石
13	D-54 区 20323	21.754	649.442	5.908	1.666	1.977	3.654	60.303	1.053	2.381	0.933	1.398	–	–	–	–	–	チャート
14	F-48 区 24222	61.336	505.846	65.039	19.741	1.278	6.274	125.892	18.479	4.425	7.200	9.856	46.24	11.07	24.66	4.98	0.287	黒曜石

表 3. 黒曜石判定結果

No.	4 成分									5 成分								
	第 1 候補			第 2 候補			第 3 候補			第 1 候補			第 2 候補			第 3 候補		
	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定	原産地	距離	判定
1	松浦 1	0.9	TRUE	腰岳	2.1	TRUE	針尾 1	2.6	TRUE	松浦 1	4.1	TRUE	針尾 1	5.1	TRUE	腰岳	5.7	TRUE
3	男女 3	12.6	TRUE	和田 8	13.4	TRUE	桑　木	48.5	(第 4)	男女 3	15.6	FALSE	和田 8	29.1	FALSE	桑木	74.2	(第 4)
4	腰　岳	3.0	TRUE	松浦 1	3.2	TRUE	針尾 1	5.4	TRUE	松浦 1	3.3	TRUE	腰　岳	4.3	TRUE	針尾 1	5.4	TRUE
5	三　船	8.6	TRUE	大根占	39.2	FALSE	西小国	136.4	FALSE	三　船	9.5	TRUE	大根占	39.6	FALSE	西小国	138.3	FALSE
7	姫　島	11.7	TRUE	三　船	347.9	FALSE	大根占	348.5	FALSE	姫　島	12.4	TRUE	三　船	446.2	FALSE	大根占	467.0	FALSE
10	松浦 1	1.8	TRUE	針尾 1	3.9	TRUE	腰　岳	8.3	TRUE	松浦 1	2.9	TRUE	針尾 1	5.0	TRUE	腰岳	8.7	TRUE
11	麦草系	125.0	FALSE	双子池	140.4	FALSE	男女 3	201.0	FALSE	麦草系	128.4	FALSE	男女 3	201.1	FALSE	針尾 1	216.4	FALSE
12	桑　木	10.1	TRUE	和田 8	27.8	FALSE	男女 3	32.1	FALSE	桑　木	16.7	FALSE	男女 3	43.1	FALSE	和田 8	45.2	FALSE
14	松浦 1	4.5	TRUE	腰　岳	5.6	TRUE	針尾 1	8.8	TRUE	松浦 1	4.7	TRUE	腰　岳	6.4	TRUE	針尾 1	9.0	TRUE

距離：マハラノビス平方距離　判定はχ二乗検定 (3σ) の結果
No.3 の第 3 候補に書かれている「桑木」は第 4 候補

図２，３をみてわかるように，北松浦地区の北松浦1群，有田地区の腰岳，佐世保地区の針尾１群は互いに組成が近く，確率を示す楕円がほとんど重なっている。このため，表３に示すように，北松浦１群，腰岳，針尾１群は，順序の差はあるものの統計学的には「True」となる。他のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を用いて産地推定を行っている報文の原産地データや判別基準をみても，「北松浦」，「腰岳」，「針尾島」の原石の値は近接もしくは，重なっているものが多い(杉原,2011;片多，2015など)。したがって，これらの３つの産地を判別することは現時点では難しいので，「北松浦１群-腰岳-針尾１群」として判定する。該当試料は，D-54区 SI1-135(No.1)，D-53･54区 SI3-57(No.4)，D･E-54区 SI1-127(No.10)，F-48区 24222(No.14)である。なお，北松浦や針尾島の黒曜石は，小規模な産地や質の悪い黒曜石しか産出しない地点もあるため，産地判定の際に地点を絞って，各産地のばらつき(楕円)を小さくしている報文もある。しかし今回は，小規模な黒曜石産地の原石も対象としているため，ばらつきが大きくなり大きな括りとなる。一見分解能が悪いようにみえるが，このような考えに基づいて行っていることを理解されたい。

D-53･54区 SI3-107(No.5)は三船系に，D-53･54区 SI3-147(No.7)は姫島系に，D-50区 28722(No.12)は桑木津留系にあたる。また，D-53区 SI2-31(No.3)は計算上

信州系となるが，地理的条件や判定図を考慮すると，第４候補となる桑木津留系と考えた方が妥当である。A-53区 25999(No.11)は，化学分析では産地不明であるが，乳白色で微細な斑点を有する特徴から，肉眼的には姫島産の黒曜石に似る。

また，肉眼観察の結果，D-54区 SI1-207(No.2)，D-53･54区 SI3-111(No.6)，D･E-54区 SI1-86(No.8)，D-54区 20323(No.13)はチャート，D･E-54区 SI1-111(No.9)は玉髄であり，黒曜石ではない。これらは蛍光X線分析の結果でもケイ素が高く，黒曜石ではないことがわかる。明治大学によって実施された黒曜石産地推定結果(明治大学古文化財研究所,2009,2011，明治大学文学部,2014a,b，金成,2014)によると，南九州の遺跡から産出した黒曜石の産地は，伊佐地区や三船地区など南九州由来の黒曜石に混じって，佐世保系や腰岳など北九州産の黒曜石も見つかっており，今回の結果と類似する。

引用文献

鹿児島県地質図編集委員会,1990,鹿児島県地質図　縮尺10万分の1.鹿児島県.

片多雅樹，2015，判別図法を用いた黒曜石の産地推定～原産地データーの蓄積～.長崎県埋蔵文化財センター研究紀要,5,35-39

金成太郎,2014,黒曜石遺物の原産地推定結果(2010～2013度未公開分).資源環境と人類,4,99-104.

明治大学古文化財研究所,2009,蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定　-基礎データー集1-.明治大学古文化財研究所,294p.

明治大学古文化財研究所,2011,蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定　-基礎データー集2-.明治大学古文化財研究所,294p.

明治大学文学部,2014a,蛍光X線分析装置による黒曜石製遺物の原産地推定　-基礎データー集3-,杉原重夫編,森義勝監修,明治大学文学部,170p.

明治大学文学部,2014b,日本における黒曜石の産状と理化学分析-資料集-,75,杉原重夫編,森　義勝監修,明治大学文学部,170p.

望月明彦,2004,第5節　和野Ⅰ遺跡出土黒曜石製石鏃の石材原産地分析,岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書452集　和野Ⅰ遺跡発掘調査報告書,476-480.

杉原重夫，2011，九州腰岳，平沢良遺跡・鈴桶遺跡出土黒曜石製遺物の原産地推定．駿台史学，142，111－137.



図１　黒曜石産地一覧（薄字は今回原産地として対象としていない地点）

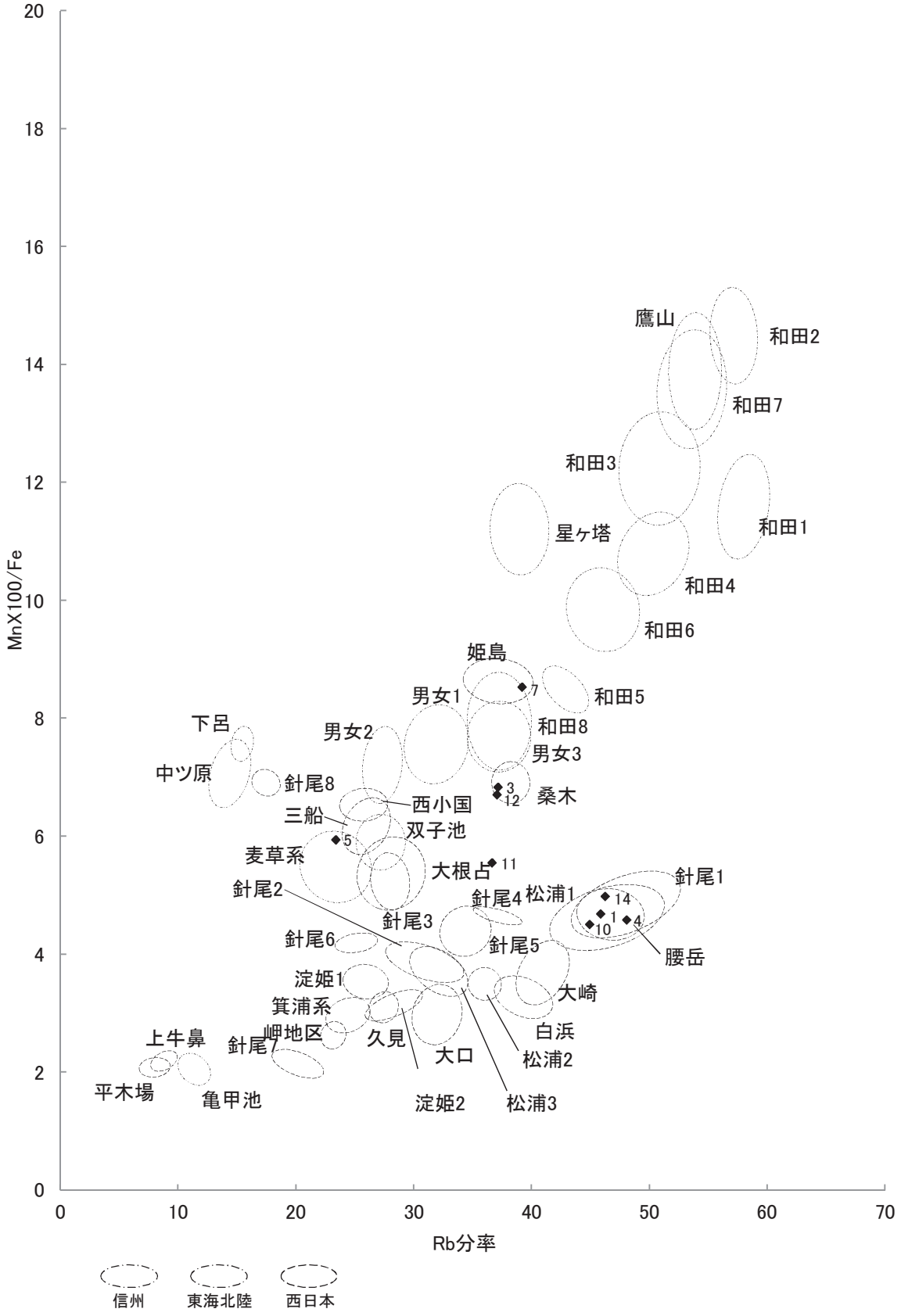


図２　黒曜石産地推定結果（1）

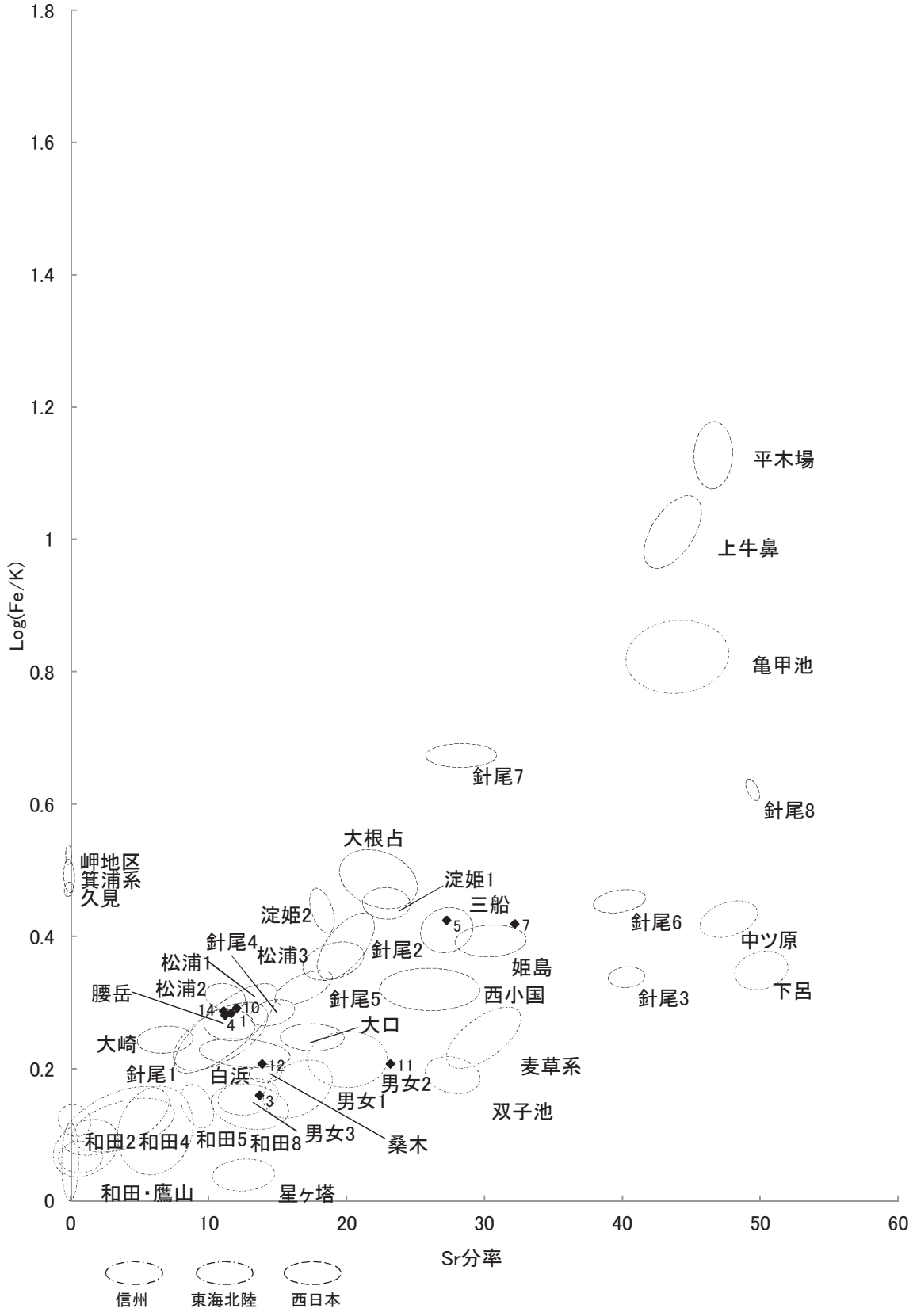


図３　黒曜石産地推定結果 (2)

第５章　調査区３　発掘調査の方法と成果

１　出土遺物の分類

下原遺跡調査区３では，縄文時代早期・前期末中期・後期･晩期，弥生時代を中心に遺物が出土した。そこで，当該時期の遺物を，遺構内遺物も含めて時期別に分類して表記することとした。

なお，縄文時代後・晩期は同一層になり，出土状況に大差が見られないことから，遺物の時期区分が困難な面があった。このため土器は型式により後・晩期の時期を区分してあるが，石器に関しては後期の章にまとめて掲載した。

縄文時代早期の土器は数種の型式に及んでいるため，Ⅰ～Ⅵ類に区分して掲載し，これに準じて説明，観察表を作成した。この類別の特徴は下記のとおりである。

縄文時代前期末～後期の遺物に関しては数量が少ないため，型式による分類はせず，時期別に章を設け，口縁部から底部に至る部位順に実測図を掲載し，これに順じて説明，観察表を作成した。

晩期は，精製と粗製による区分を行い，口縁部から底部に至る部位順に実測図を掲載し，これに順じて説明，観察表を作成した。

石器は，早期・後期ともに石鏃２点のみを掲載したので形状による分類は行っていない。打製石斧については縄文時代後晩期においては形状によってまとめた。その他の石器は点数が少量のため分類せずに器種別に一括した。

弥生時代の遺物は出土点数が少ないため，各時代での分類を行わず一括して掲載した。

時期毎の土器分類は次頁の通りである。

(1)　土　　器

縄文時代

早　期

Ⅰ類＝吉田式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，口縁部に横位の明瞭な貝殻腹縁部による刺突文を巡らせ，胴部には貝殻腹縁部による押引文を施す。

Ⅱ類＝倉園B式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，胴部に貝殻腹縁部による横位の条痕文を巡らせている。

Ⅲ類＝石坂式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，胴部に貝殻腹縁部による綾杉状の条痕文を巡らせている。

Ⅳ類＝下剥峯式

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり，口縁部に至る円筒形土器である。

文様は，貝殻腹縁部による刺突文が鋸歯状に施文されている。

Ⅴ類＝塞ノ神A式

口縁部が頸部を境にラッパ状に外反し，胴部ややふくらみをもつ。文様は，頸部以下に沈線で区画した内部に網目状撚糸文が施文されるタイプである。

Ⅵ類＝貝殻条痕文土器

直線的な胴部から口縁部に至る形状で縄文早期末に位置づけられる土器群である。

前　期

野久尾式

近年，志布志市で出土事例がある前期末～中期と土器型式である。器形は，平底の底部からやや丸みを帯びて立ち上がり頸部でしまり，口縁部が内湾する。

後　期

中岳式

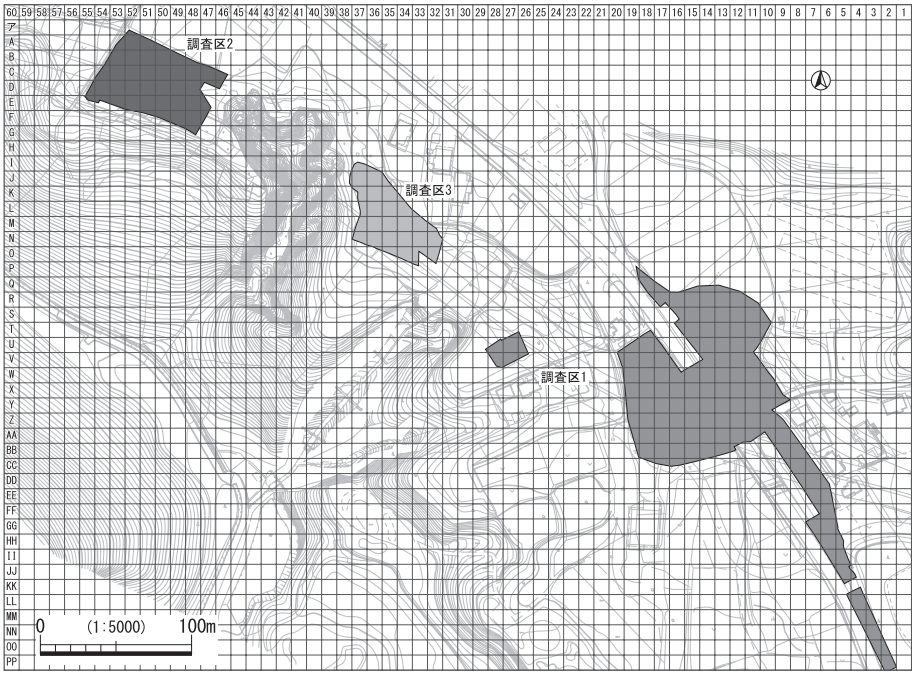
平底もしくは尖底の底部からやや丸みを帯びて立ち上がり，胴部最大径部で屈曲し頸部から口縁部にかけて外反する器形である。胴部最大径部に沈線や凹点による施文がみられるものや，無文のものがある。

(2)　石　　器

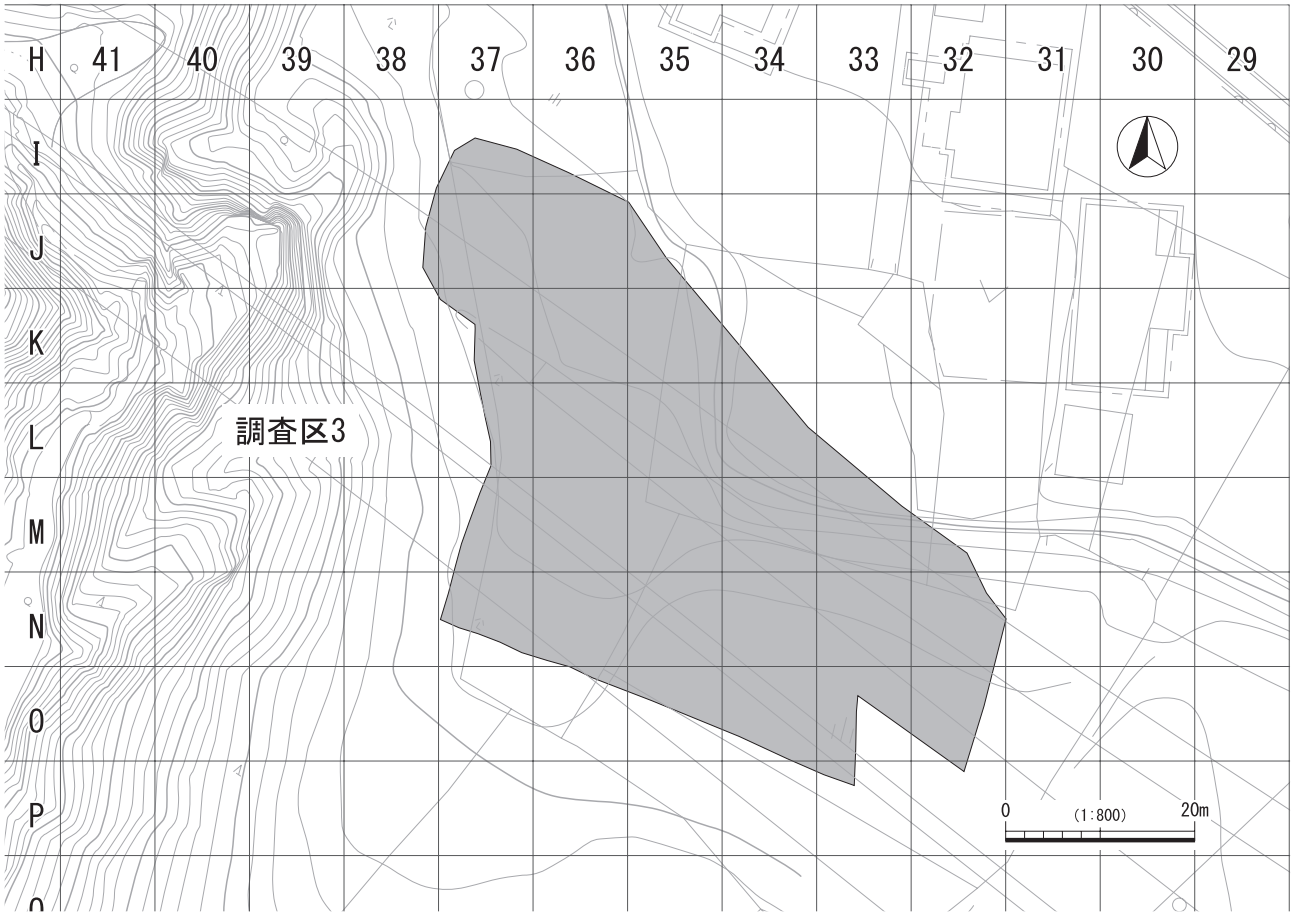
縄文時代　後・晩期

打製石斧は以下の特徴にまとめ，４種にわけて掲載した。

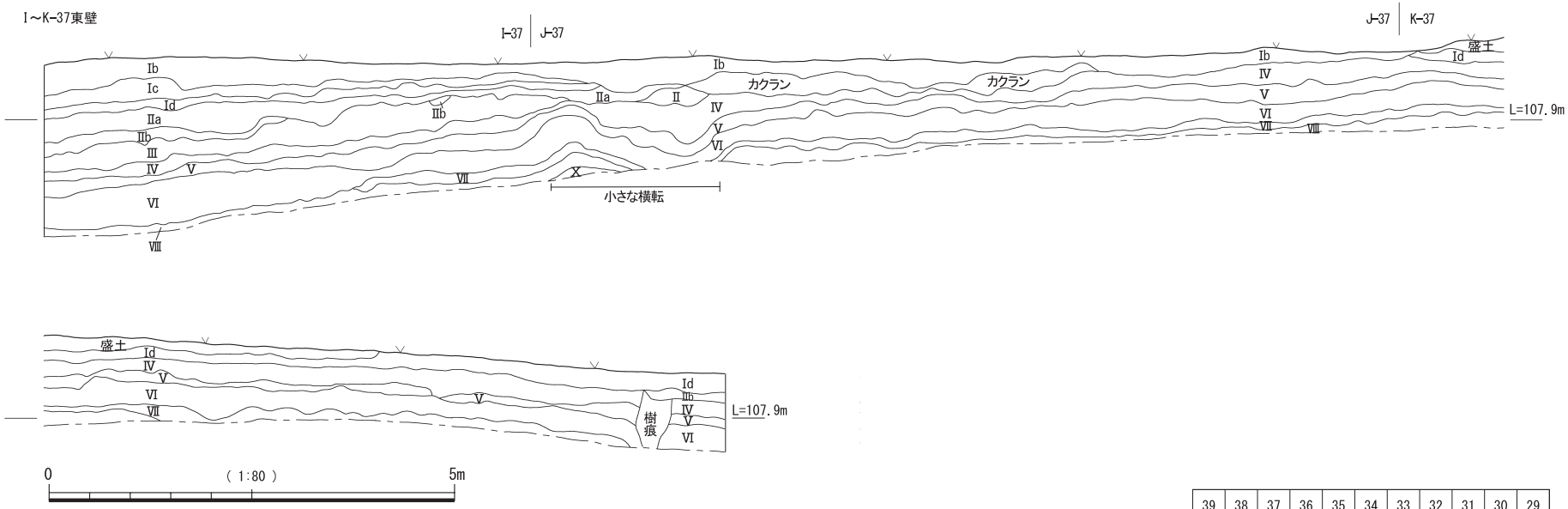
・有肩で基部に比して刃部がひろい形状
・基部に抉りがなく直線的で刃部は非対称で尖頭状の鋭角的な刃部を有する形状
・先端部がやや幅広になる刃部を有する形状
・刃部の先端部の幅が狭くなる形状

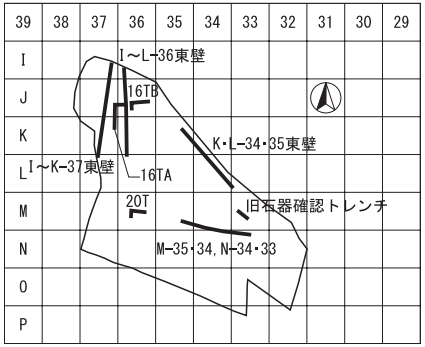


第 120 図　下原遺跡調査区３　位置図

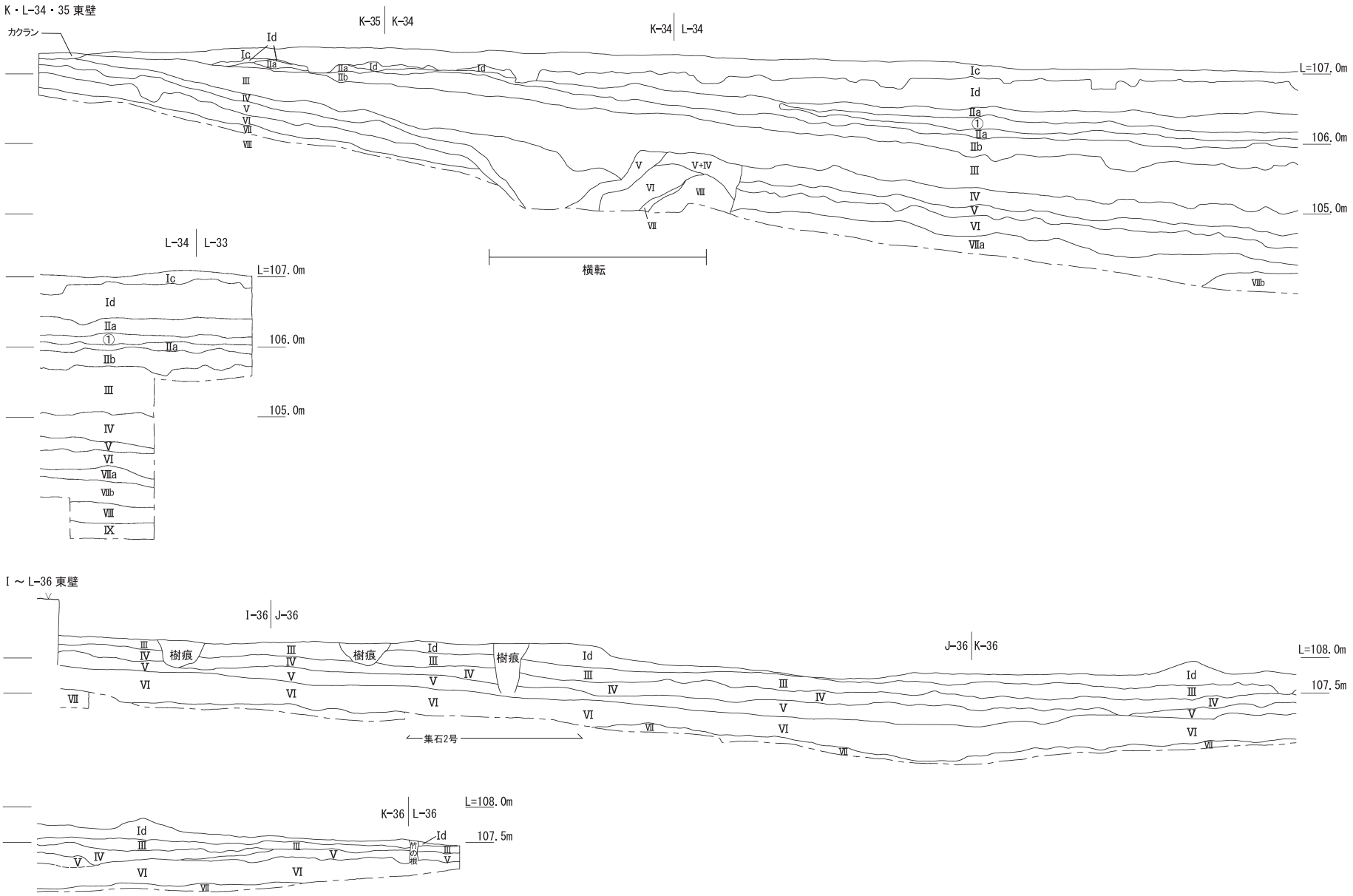


第 121 図　下原遺跡調査区３　調査範囲図

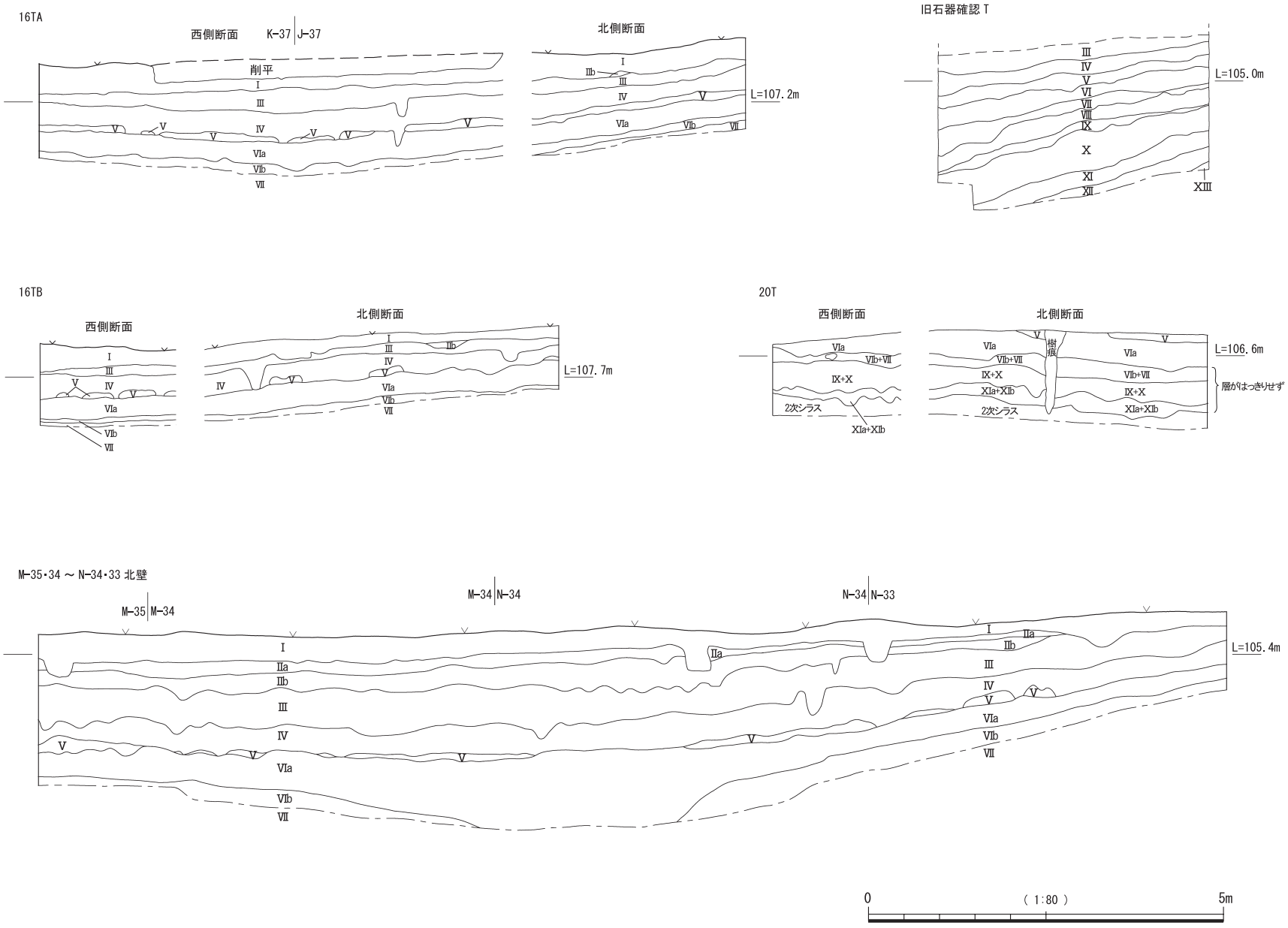




第 122 図　土層断面図 (1)



第123図　土層断面図（2）



第 124 図　土層断面図 (3)

２　発掘調査の成果

(1)　調査の概要

確認調査の結果，Ⅱｂ・Ⅲ層と，Ⅴ層（アカホヤ火山灰）とⅧ層（薩摩火山灰　P14:桜島起源）に挟まれたⅥ・Ⅶ層において包含層が確認された。

本調査では，Ⅰ層は旧耕作土のため重機により掘削し，Ⅱ・Ⅲ層は人力で掘り下げ，Ⅲ層（御池火山灰に相当）～Ⅴ層（アカホヤ火山灰に相当）を重機により掘削したのち，包含層であるⅥ層・Ⅶ層を人力で掘り下げた。

その結果，出土した遺物により，Ⅱ・Ⅲ層は弥生時代～縄文晩期・後期，Ⅵ・Ⅶ層は早期の包含層とした。

出土遺物は，トランシットで取り上げた。遺構は，検出状況の記録写真を個々に撮影した後，各遺構の主軸にあわせてベルトを設定し，実測を行った。

各時代・時期の遺構・遺物は各項にて詳述する。

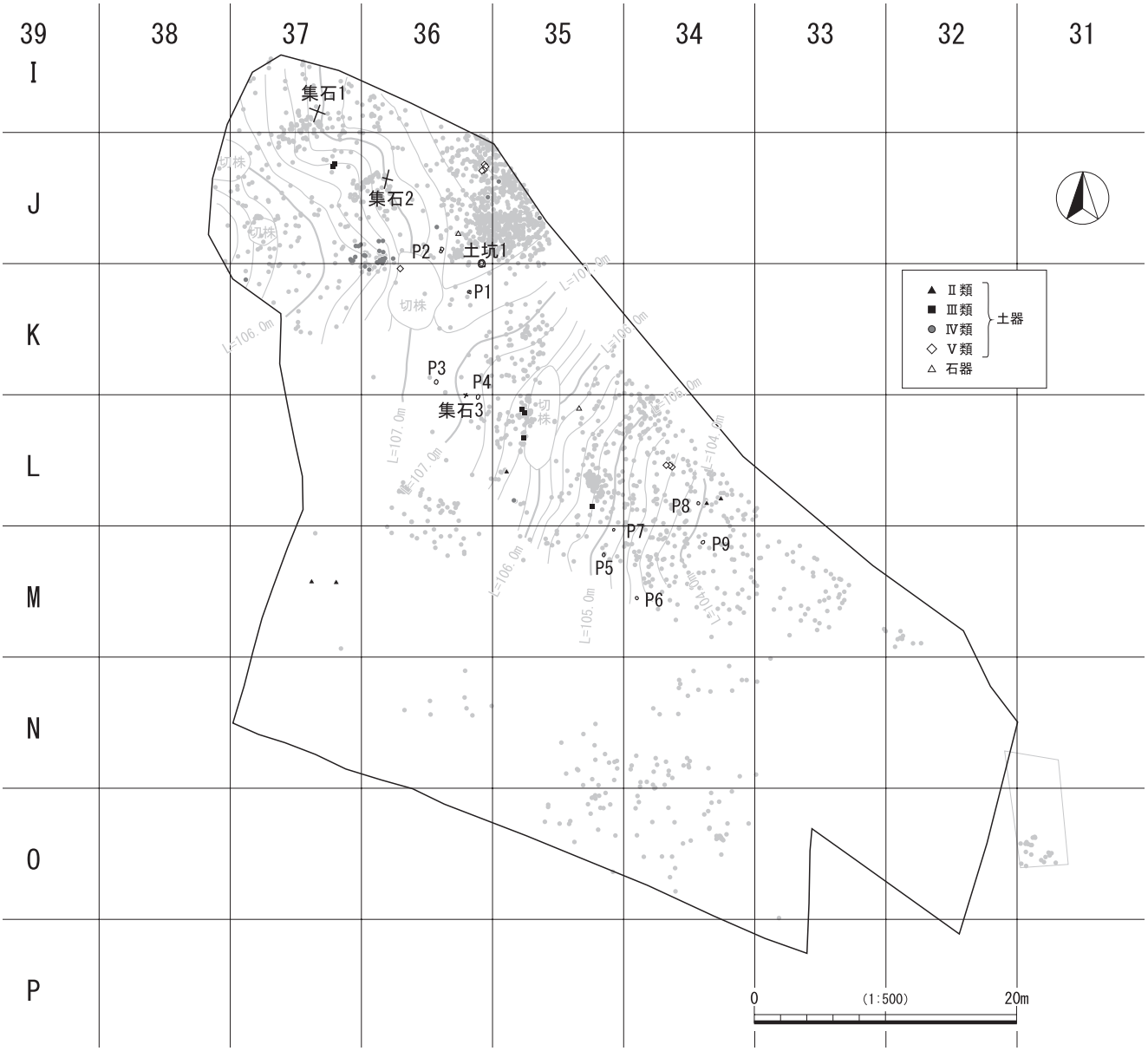
(2)　調査の成果

ア　縄文時代早期

(ア)　調査の概要

当該時期の遺構・遺物は主にⅥ・Ⅶ層から出土している。遺構は，調査区Ⅰ～M－34～37区での検出が多く，集石３基，ピット９基，土坑１基を検出した。

遺物はⅠ～Ｌ－34～37区で多く出土した。土器は円筒形土器を中心にⅠ～Ⅵ類に分類した。特に土器は分類別に出土地点の差違がみられた。Ⅲ類はＪ～Ｌ－35～36区，Ⅳ類はＪ・Ｋ－36・37区，Ⅴ類はＪ－36，Ｌ－34区に出土地点が集中する傾向がみられた。石器は少量ではあるが，打製石鏃・磨石・敲石が出土し，Ｊ～Ｌ－35～37区のⅥ層に集中する傾向がみられた。



第 125 図　縄文時代早期の遺構配置・遺物出土状況図

（イ）遺　構

集　石

集石１号（第126図），遺構内遺物（第127図　１・２）

Ｉ－37区，Ⅵ層下部で検出した。検出地点は台地の縁辺部でやや斜めに傾斜していた。検出された礫のレベル差に大きな差違はみられなかった。掘り込みはみられず，集石２号と比べ10㎝未満の小さめの角礫が多かった。

集石２号とは７～８ｍしか離れていない。石器が２点共伴していた。１は石皿で表裏両面に磨痕による摩耗がみられる。破損後に破損した一面が敲打され，擦られている。２は敲石で，周縁部に敲打痕がみられる。石材はいずれも砂岩である。

集石２号（第128図）

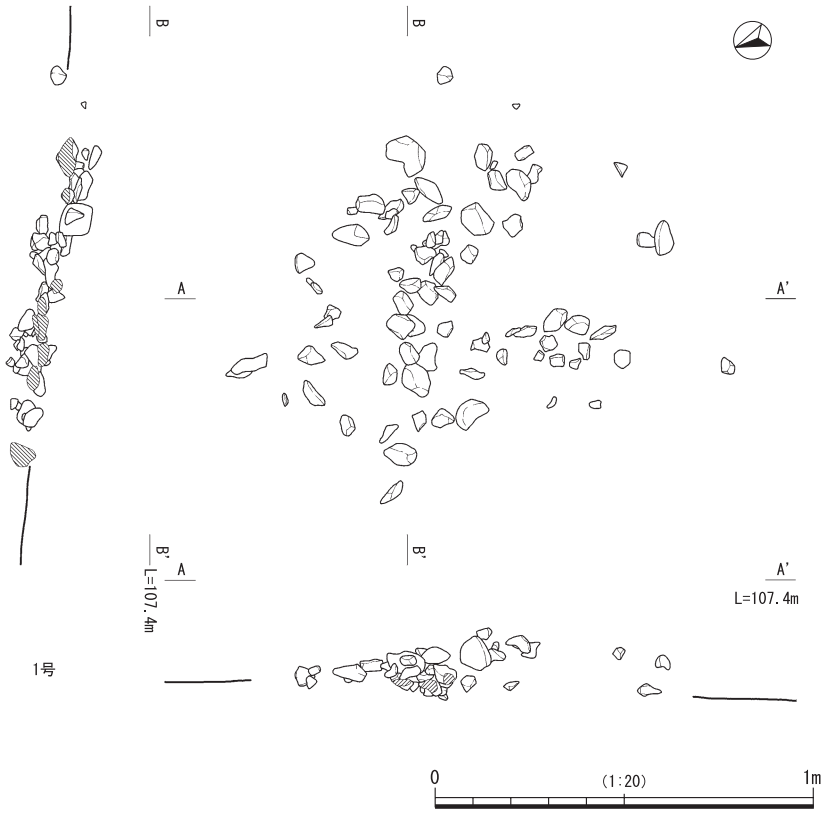
Ｊ－36区，Ⅶ層上面で検出した。検出地点は傾斜地で，現況は植林による切り株が残存していた。精査のため除去した切り株の下部からも集石を構成する礫が検出された。上下の礫は重なりがみられたが掘り込みは確認されなかった。

礫の大半は角がとれた円礫で，10 ～ 15㎝の礫に10㎝未満の礫が混在した状況であった。大半が赤色化してひびが入っている。炭化物や煤はみられなかった。

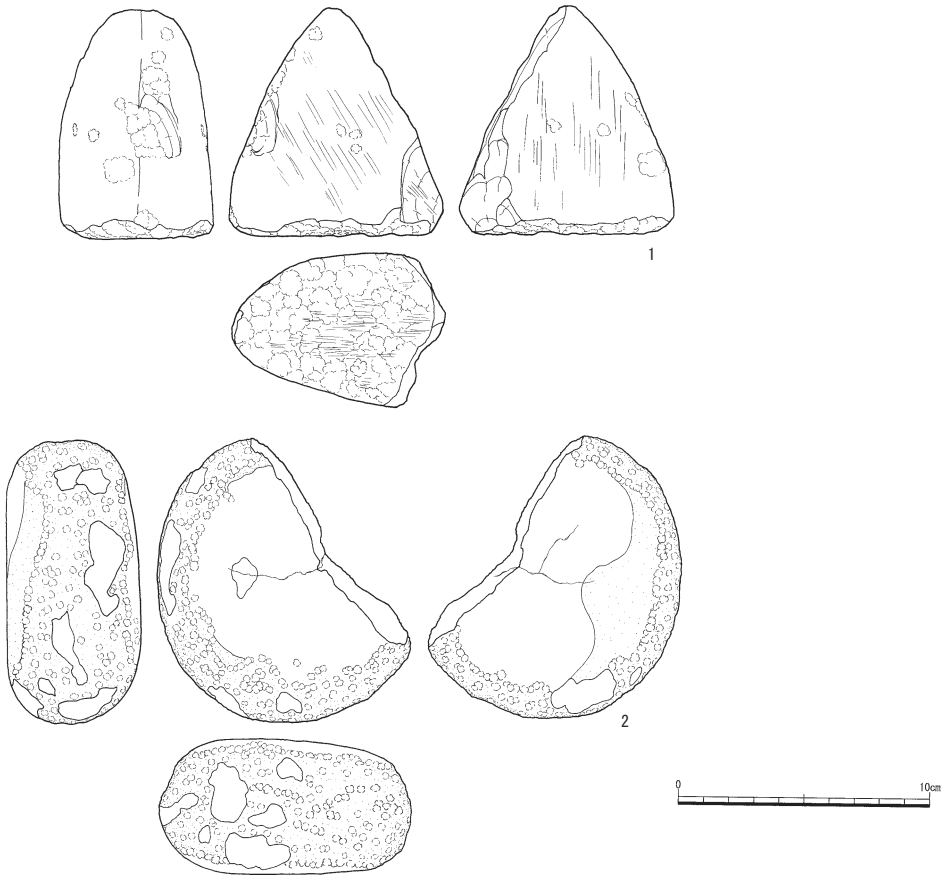
集石３号（第128図）

Ｋ・Ｌ－36区，Ⅵ層で検出した。この層の集石では，最も舌状台地の縁辺部に近い。掘り込みは確認されなかった。集石１・２号とほぼ同じレベルで検出されている。礫の間隔は比較的狭くまとまってはいるが，構成する礫数は14個と少なく，10㎝以内のものである。

レベルで検出された。検出区は，Ⅱ類土器やⅢ類土器の出土範囲であるＬ－34 ～ 36区に近いので，この時期の土器と共伴していたことも考えられる。



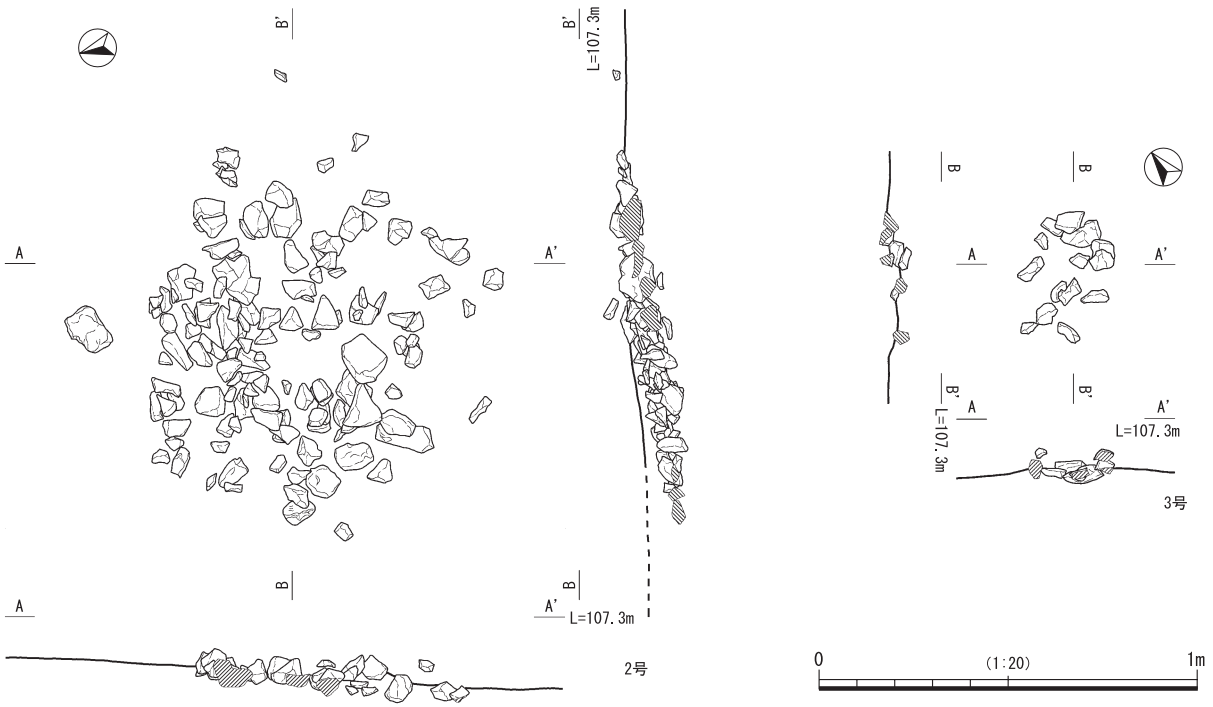
第 126 図　縄文時代早期　集石１



第 127 図　集石１遺構内遺物

表34　集石１出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	器　種	石　材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
127	1	I-37	集石１　18	石皿	砂岩	9	8.5	6.1	453
	2	I-35	集石１　26	敲石	砂岩	11.15	10.1	5.3	703



第 128 図　縄文時代早期　集石２・３

ピット（第129・130図　ピット１～９）

Ⅵ層で９基検出された。K・M―34 ～ 36区に集中していたが，各ピットの関連性はみられず，用途は不明である。以下に検出区別にその特徴と平･断面図を記載した。

１は，長軸27cm，短軸16cmで平面プランは異形である。掘り込みは非常に浅く，埋土②もフカフカしている。周辺のピットとの並列関係がみられず用途は不明である。

２は，長軸43cm，短軸20cmで，平面プランは瓢箪形である。他のピットに比べて埋土はしっかりしている。埋土②はブリッジ状で硬い。２基のピットが切り合っている。断面は浅く不定形であり，用途は不明である。

３は，長軸34cm，短軸26cmで平面プランは楕円形である。

４は，長軸36cm，短軸26cmで平面プランは長楕円形である。共に浅い不整形の掘り込みに火山灰由来のパミスが混ざる。用途は不明である。周辺で他のピットは検出されていない。

５は，長軸28cm，短軸22cmで平面プランは楕円形である。

６は，長軸24cm，短軸22cmである。

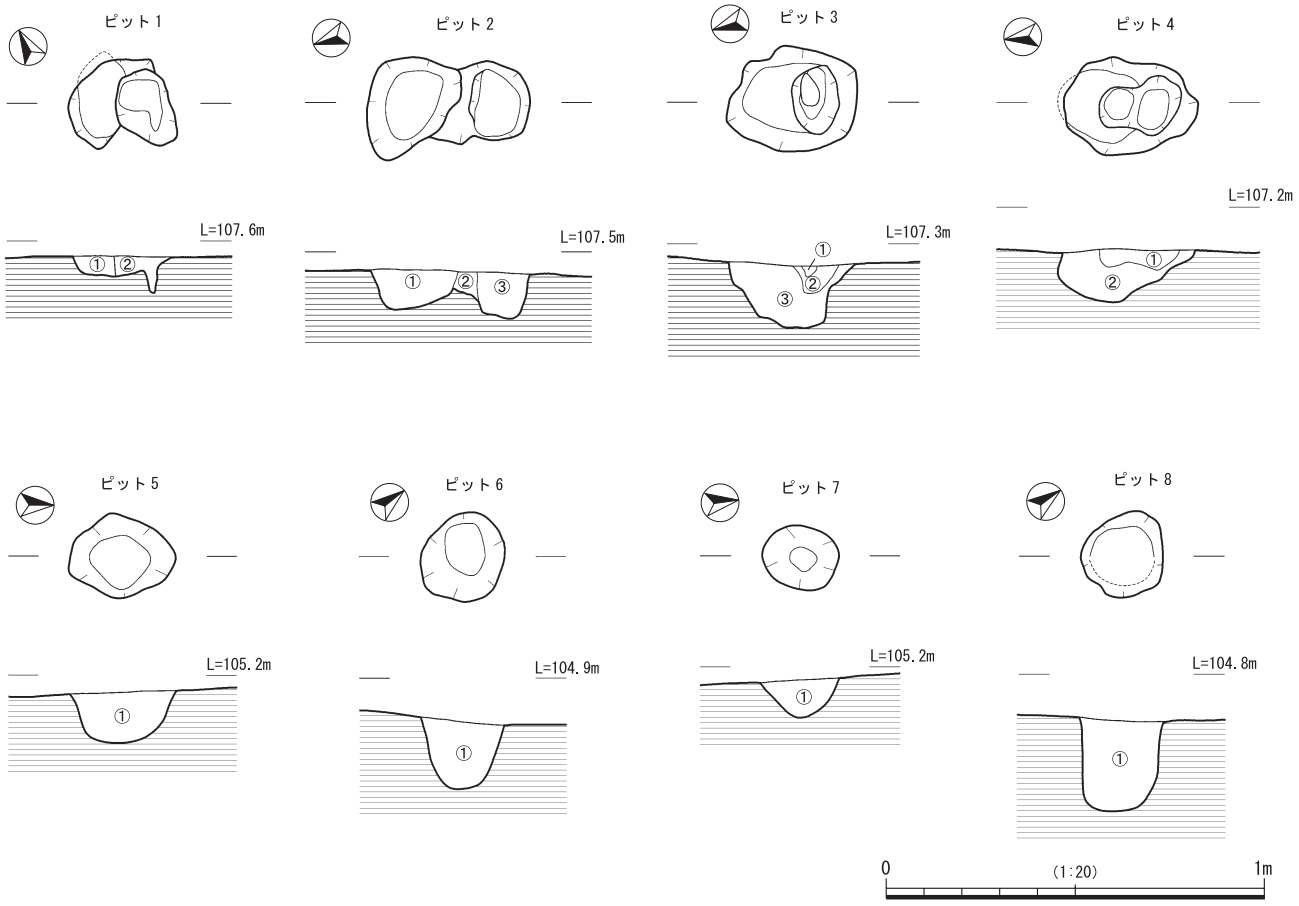
７は，長軸21cm，短軸17cmである。平面プランは円形で断面はいずれも浅い円錐形である。検出時の３基の輪郭はやや明瞭さに欠け，配置にも規則性はみられなかった。周辺に他の遺構はなく，単独のピットとみなした。

８は，長軸23cm，短軸22cmで平面プランが円形で断面がバケツ型である。調査時に断面を精査するため半裁をしたが，最深部の確認が困難だった。そのため箱掘りによる調査に変更したので底部は推定線で示してある。埋土は単一である。

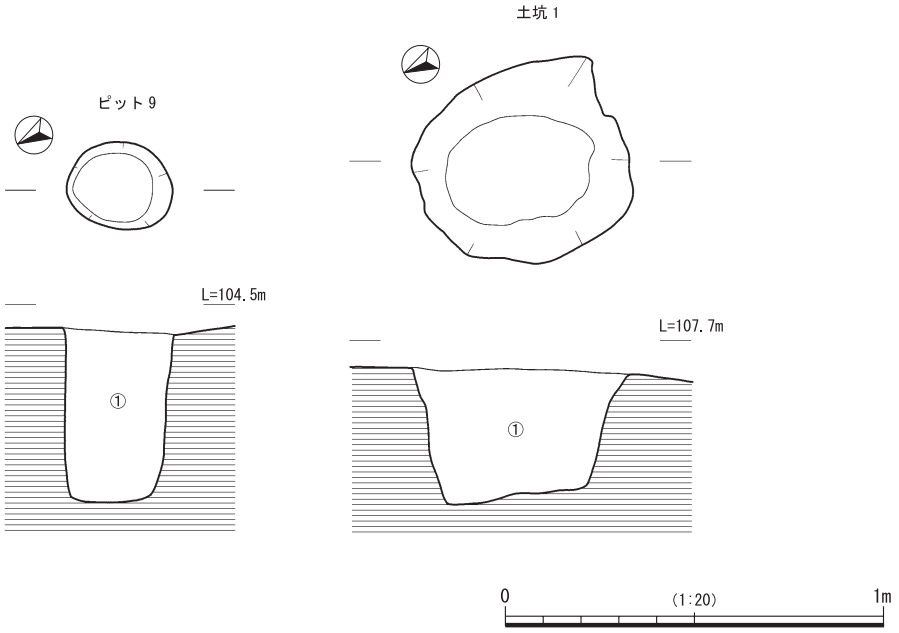
９は，長軸28cm，短軸23cmで平面プランが円形で断面が円柱形である。他のピットと比較して深さがあり，埋土は少しやわらかかった。

土坑１（第130図）

長軸58cm，短軸54cmで平面プランは楕円形，断面は逆台形を呈する。検出時点ではピットとしていたが，精査のため半裁を行ったところ底部が広がり，平面径と底面径の比率が小さいことから土坑と認定した。



第 129 図　縄文時代早期　ピット (1)



第 130 図　縄文時代早期　ピット (2)・土坑１

表35　ピット・土坑１　埋土観察表

		色調	粘性	しまり	砂　　質
ピット１	①	黒褐 10YR ２/ ２	弱	やや強	φ３㎜程度のオレンジパミス粒がまばらに混ざる Ⅵ層と混ざりマーブル状になる
	②	褐色 10YR ４/ ４	なし	なし	パミス（Ⅲ～Ⅴ層中）に①が混ざる。やわらかく指でも掘れる
ピット２	①	暗褐 10YR ３/ ４	弱	やや強	黄色のパミスをブロック状に含む。φ５㎜大の軽石やオレンジパミスを多量に含む。掘りやすい感触
	②	褐色 10YR ４/ ６	なし	強	パミスの塊が多い。パミスの粒子はほとんど含まない
	③	暗褐 10YR ３/ ３	弱	強	パミスブロックと黒色土がマーブル状に混ざる。 軽石の粒もわずかに混ざる
ピット３	①	黒色 10YR ２/ １	弱	やや強	砂質土。パミスをほとんど含まない黒色土
	②	褐色 10YR ４/ ６	なし	弱	パミス主体。φ５㎝程の硬質ブロックが入ることもある。色調はアカホヤに類似。大粒のオレンジパミスは含まず
	③	黒色 7.5YR ２/ １	弱	やや強	砂質土。φ３㎜程のオレンジパミスをまばらに含む黒色土。①より黒味が弱く，パミス粒を含む
ピット４	①	褐色 7.5YR ４/ ６	なし	なし	Ⅲ～Ⅴの火山灰層。φ２㎜程のオレンジパミス粒を多量に含む。指で掘れる程やわらかい
	②	黒褐 10YR ２/ ２	やや強い	強	φ３～５㎜程のパミス粒をわずかに含む。Ⅱ層よりもやや明るく褐色がかっている
ピット５	①	暗褐 10YR ３/ ４	弱	やや強	パミス由来の褐色砂質土。φ１㎝大，２～３㎜のオレンジパミス粒を多く含む
ピット６	①	褐色 10YR ４/ ６	弱	強	火山灰パミスを含む砂質土。φ２～３㎜程のオレンジパミスをまばらに含む。下層ほどパミス粒少ない
ピット７	①	暗褐 10YR ３/ ４	弱	やや強	火山灰パミスを含む砂質土。φ３～５㎜程のオレンジパミスを多く含む。φ１㎝程度の軽石が数個混入する。他のピットに比べ埋土への火山灰量が少なめな印象
ピット８	①	褐色 10YR ４/ ６	弱	強	広範囲にφ２㎜程のオレンジパミスを含む。
ピット９	①	暗褐 10YR ３/ ４	なし	なし	５㎜大の褐色のパミスをごく少量含む
土坑１	①	暗褐 10YR ３/ ３	なし	弱	φ１㎜程度のパミスをまばらに含む。フカフカしており竹根を多く含む。
		暗褐 10YR ３/ ４	弱	強	上記の埋土にブロックで混在する。パミスのブロックを多く含む。 色調は埋土本体より明るいが，しまりの強さが全く違う

（ウ）遺　物

土　器

既知の研究に基づく土器型式を基本に，器形や文様，施文形態によりⅠ～Ⅵ類に分類した。

Ⅰ類土器（第131図　３・４）

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり口縁部に至る円筒形土器である。３は底部から胴部にあたる。横位の貝殻腹縁による押引文が施文されている。4は底部から胴部の立ち上がり部分に貝殻条痕による施文が縦位になされ，胴部には貝殻腹縁部による刺突文が施文されている。摩耗と剥落により部分的に文様が不鮮明である。

Ⅱ類土器（第131図　５～９）

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり口縁部に至る円筒形土器である。５，６は口縁部である。口唇部は平らに面取りされている。口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が横位に施文されている。７は胴部である。上部には口縁部から続く貝殻腹縁部による刺突文が施文され，下部には貝殻条痕文が施文されている。８は胴部である。貝殻条痕文により施文されている。９は底部から胴部にあたる。底面は丁寧に成型され胴部には貝殻条痕文により施文されている。

Ⅲ類土器（第132図　10・11）

10は口縁部から胴部である。口唇内部は欠損しているが，口唇端部は平らに面取りされていた痕跡が残る。口縁部には貝殻腹縁部による刺突文が横位に１条施され，胴部には貝殻条痕文により施文されている。11は胴部である。貝殻条痕により施文されている。

Ⅳ類土器（第132図　12～17）

平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり口唇部に至る円筒形土器である。12，13，14，15は胴部である。貝殻腹縁部による縦位の刺突文が鋸歯状に施文されている。

16は底部から胴部である。16は底部に至るまで貝殻腹縁部による縦位の刺突文が鋸歯状に施文されている。17は胴部である。横位の沈線による区画内に貝殻腹縁部による斜位の羽状文を施文している。

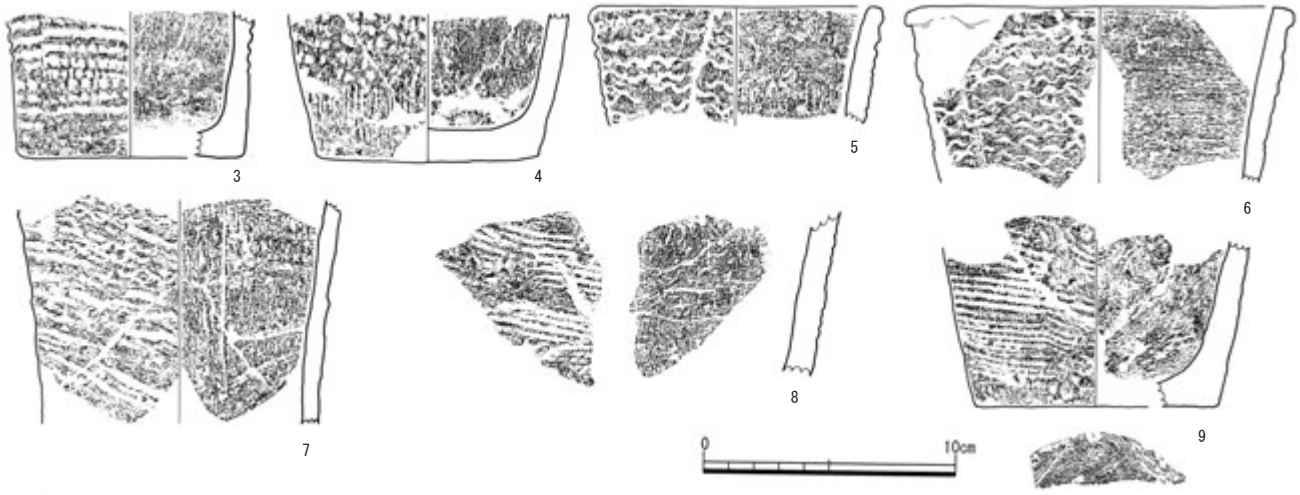
Ⅴ類土器（第132図　18～29）

口縁部が頸部を境に外反し，ややふくらみをもつ胴部に，区画された撚糸文が施文される深鉢形土器である。

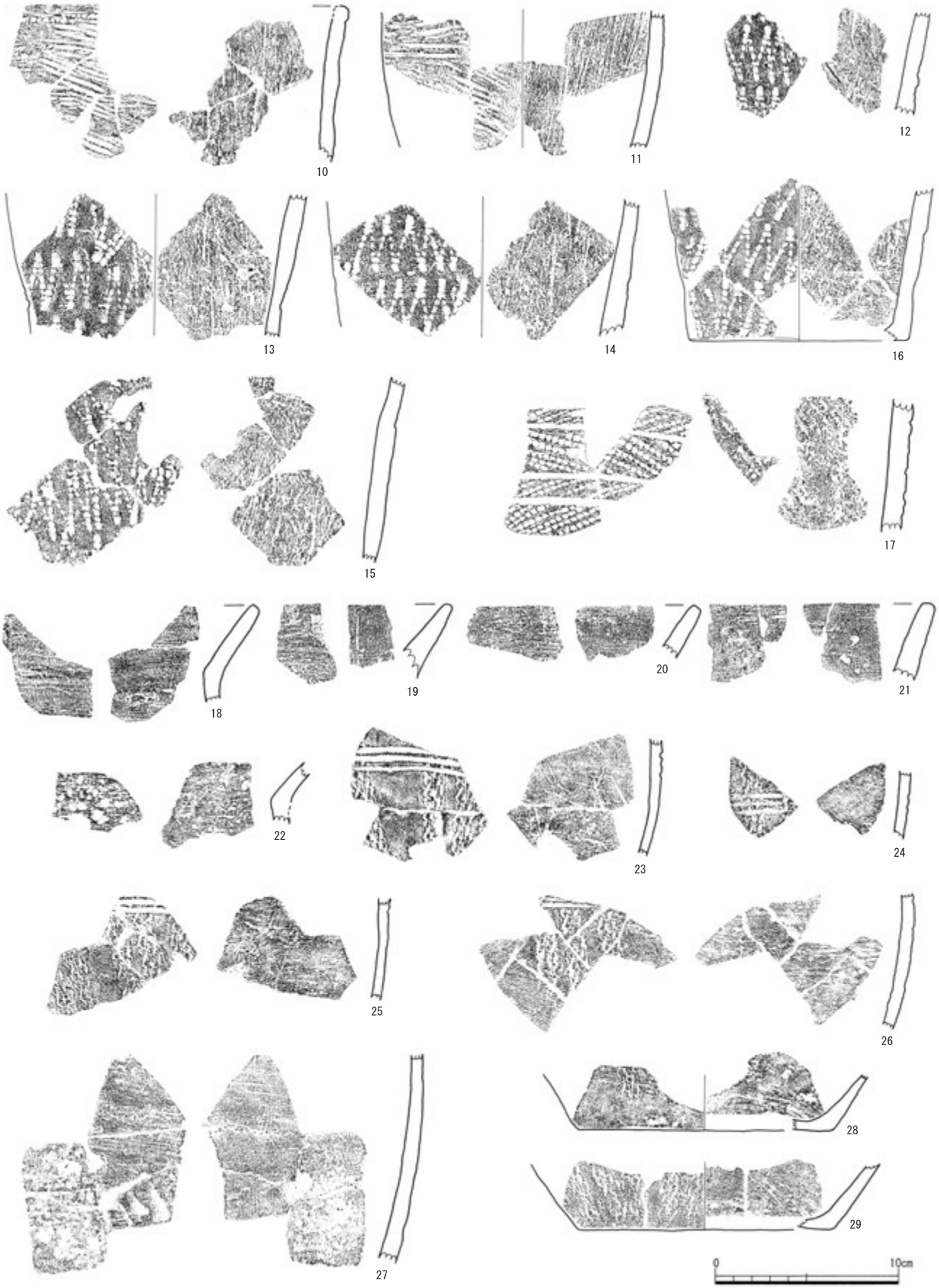
18は口縁部から頸部にあたる。内面の屈曲部分に明瞭な稜が残る。19，20，21は外反する口縁部である。22は頸部の屈曲部分である。文様はなく，ナデ調整がなされている。23，24，25，26は胴部である。横位の沈線が巡る区画内に撚糸文が縦位に施文されている。27は胴部である。内外面とも文様はみられず，外面には条痕調整後にナデ調整が行われたことがうかがえる。28，29は底部である。中央部分は薄く成型されている。磨耗により不鮮明ではあるが縦位の撚糸文が施文されている。

Ⅵ類土器（第133図　30～33）

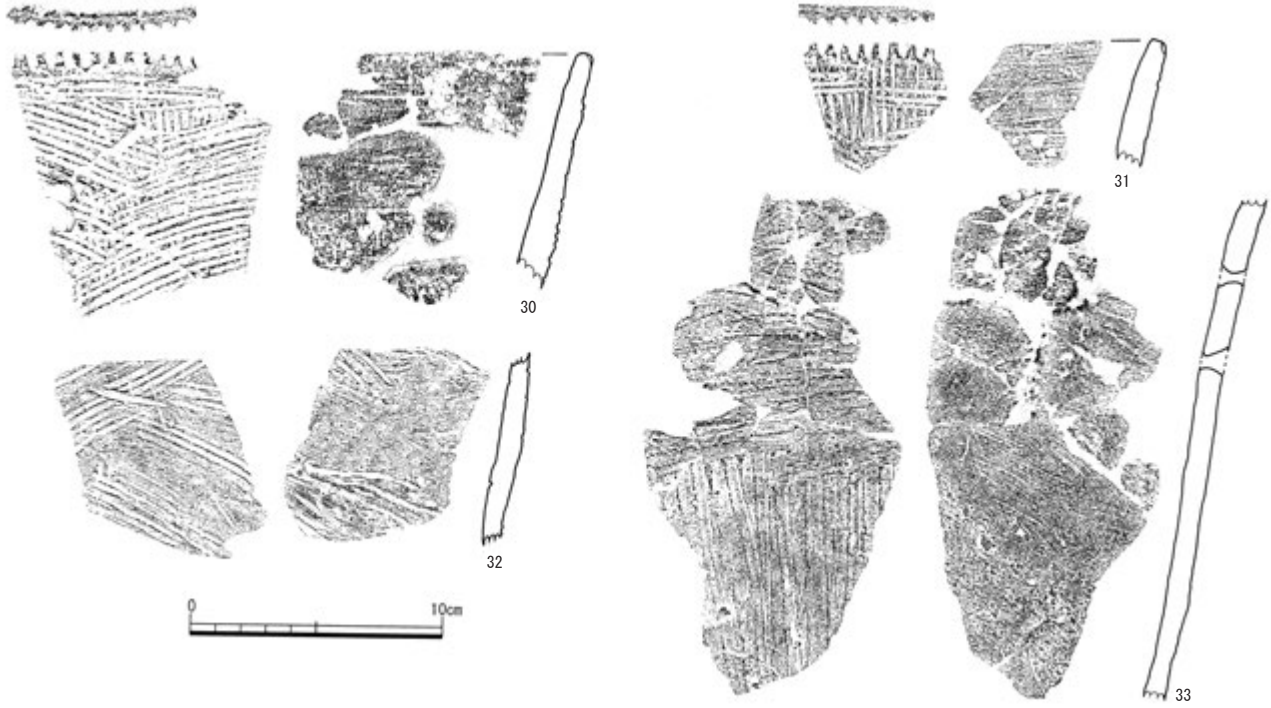
平底の底部から直線的に胴部が立ち上がり口縁部に至る円筒形土器である。30，31は口縁部である。口唇端部は平らに面取りされている。口唇部外面はヘラ状工具による刻みが縦位に施文され，以下は綾杉状に貝殻条痕文が施文されている。32は胴部である。上半は貝殻条痕文が横位に施文され，以下は綾杉状に貝殻条痕文が施文される。内面には貝殻条痕文による器面調整が残る。33は貝殻条痕文による器面調整が残る。外面からの補修痕が１か所みられる。



第 131 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器 (1)



第 132 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器 (2)



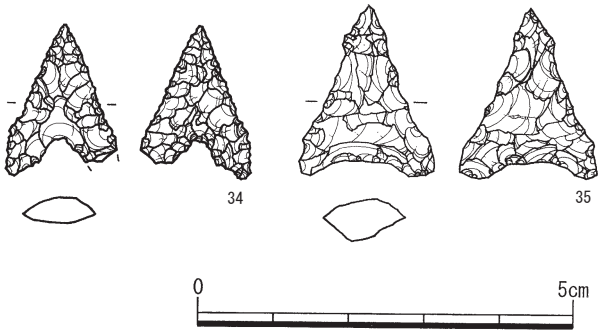
第 133 図　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器 (3)

表36　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器観察表 (1)

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
131	3	32063	M－34	Ⅵ	深鉢	Ⅰ	胴部～底部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/4
	4	32064	M－34	Ⅵ	深鉢	Ⅰ	胴部～底部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕・ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 5YR6/6	橙 5YR6/6
		32069	L－34	Ⅵ													
	5	31650	L－34	Ⅵ	深鉢	Ⅱ	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4
		32037	L－35	Ⅵ													
	6	32020	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅱ	口縁部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3
	7	32035	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅱ	胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕・ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3
	8	32046	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅱ	胴部	貝殻条痕	条痕	ナデ	○	○		○		橙 5YR6/6	黄褐 2.5Y5/3
	9	9266	M－37	Ⅵ	深鉢	Ⅱ	胴部～底部	貝殻条痕	条痕	ナデ	○	○		○		橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4
		9269	M－37	Ⅵ													
132	10	31651	L－34	Ⅵ	深鉢	Ⅲ	口縁部～胴部	貝殻腹縁刺突・条痕	条痕	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3
	11	32040	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅲ	胴部	貝殻条痕	条痕	ナデ	○	○		○		にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR4/2
		31987	L－35	Ⅵ													
	12	32076	L－34	Ⅵ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/4
	13	31982	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/4
	14	32018	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○		○		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/4
	15	32081	L－34	Ⅵ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/4
		32038	L－35	Ⅵ													
	16	31981	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅳ	胴部～底部	貝殻腹縁刺突	ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR7/4
		30533	L－35	Ⅵ													
		32017	L－35	Ⅵ													
		32039	L－35	Ⅵ													
		31736	L－35	Ⅵ													
	17	31897	J－37	Ⅵ	深鉢	Ⅳ	胴部	貝殻腹縁刺突・沈線	ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい褐 7.5YR5/4	明赤褐 5YR5/6
		31896	J－37	Ⅵ													
	18	31676	J－35	Ⅵ	深鉢	Ⅴ	口縁部～頸部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	19	30963	J－35	Ⅵ	深鉢	Ⅴ	口縁部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	20	31128	J－36	Ⅵ	深鉢	Ⅴ	口縁部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	21	31930	L－35	Ⅵ	深鉢	Ⅴ	口縁部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		褐 7.5YR4/3	にぶい褐 7.5YR5/4
	22	9010	J－36	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	口縁部～頸部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	23	8985	K－37	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	胴部	沈線・撚糸文	ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	橙 7.5YR7/6
		9061	K－37	Ⅵa													
		9102	K－37	Ⅵa													
	24	9107	K－37	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	胴部	沈線・撚糸文	ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	25	8971	K－37	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	胴部	沈線・撚糸文	ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい橙 7.5YR6/4
		8944	K－37	Ⅵa													
		9058	K－37	Ⅵa													
		8957	K－37	Ⅵa													
		8958	K－37	Ⅵa													

石　器（第134図　34・35）

Ⅰ～Ｌ－35～37区，Ⅶ層で出土した２点を図化した。34，35は打製石鏃である。34は側辺部が直線的である。基部に抉りがあり，脚部端部は鋭角に調整されている。丁寧な調整がなされている。石材は黒曜石である。35は基部の抉りは浅く弧状を呈する。石材は黒曜石である。



第 134 図　縄文時代早期　石器

表37　縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器観察表（2）

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
132	26	8960	K－37	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	胴部	沈線・撚糸文	ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4
		8951	K－37	Ⅵa													
		8952	K－37	Ⅵa													
		8959	K－37	Ⅵa													
		8992	K－37	Ⅵa													
		9100	K－37	Ⅵa													
	27	9064	K－37	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/4
		8978	K－37	Ⅵa上													
		9113	K－37	Ⅵa													
		8987	K－37	Ⅵa													
		8993	K－37	Ⅵa													
	28	8940	K－37	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	底部	撚糸文	ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
	29	8982	K－37	Ⅵa	深鉢	Ⅴ	底部	撚糸文	ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		8981	K－37	Ⅵa													
		8983	K－37	Ⅵa													
		8964	K－37	Ⅵa													
		9068	K－37	Ⅵa													
		31921	K－37	Ⅵa													
		31402	J－37	Ⅵa													
		31988	J－36	Ⅵa													
133	30	30975	J－36	Ⅵ上	深鉢	Ⅵ	口縁部	刻目・貝殻条痕	条痕	ナデ		○			○	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3
		31248	J－36	Ⅵ上													
		30976	J－36	Ⅵ上													
		30974	J－36	Ⅵ上													
	31	31990	K－36	Ⅵ	深鉢	Ⅵ	口縁部	刻目・貝殻条痕	条痕	ナデ		○			○	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3
	32	一括	L－36	Ⅴ下	深鉢	Ⅵ	胴部	貝殻条痕	条痕	条痕・ナデ	○	○		○		にぶい黄褐 10YR4/3	にぶい黄褐 10YR5/3
	33	31657	L－34	Ⅵ	深鉢	Ⅵ	胴部	貝殻条痕	条痕	ナデ	○	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4, 灰黄褐 10YR4/2
		31659	L－34	Ⅵ													
		31658	L－34	Ⅵ													

表38　縄文時代早期　石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
134	34	9077	K-36	Ⅵa	打製石鏃	黒曜石	2	1.4	0.3	0.58
	35	31664	L-35	Ⅵ	打製石鏃	黒曜石	2.23	1.84	0.52	1.41

イ　縄文時代前期末～中期

（ア）調査の概要

L・M－34・35区，Ⅱb～Ⅲ層で土器片が数点出土した。遺物量も少なく，共伴する遺構はみられなかった。

（イ）遺　物

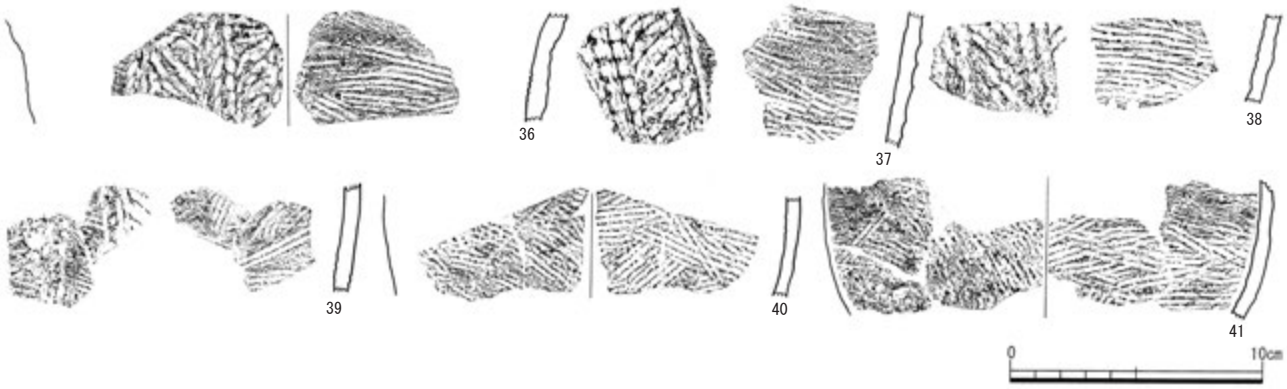
土　器（第135図　36～41）

前期末の野久尾式（志布志市）に相当する。36～40は胴部にあたる。36，37，38は，外面に微隆帯を羽状に施し，その後縦に2条の微隆帯で区画をしている。

内面は貝殻条痕文による調整がなされている。

39は，外面に微隆帯を羽状に施し，その後縦に1条の微隆帯で区画をしている。微隆帯を施さない部分と内面には，貝殻条痕文による調整後にナデ調整を行っている。

40は内外面ともに貝殻条痕文による調整がなされている。41は縄文後期検出の土器集中域から出土したが，包含層出土の40と同型式であることから当該時期に記載した。内外面ともに貝殻条痕文による調整がなされている。



第135図　縄文時代前期末～中期の土器

表39　縄文時代前期～中期土器観察表

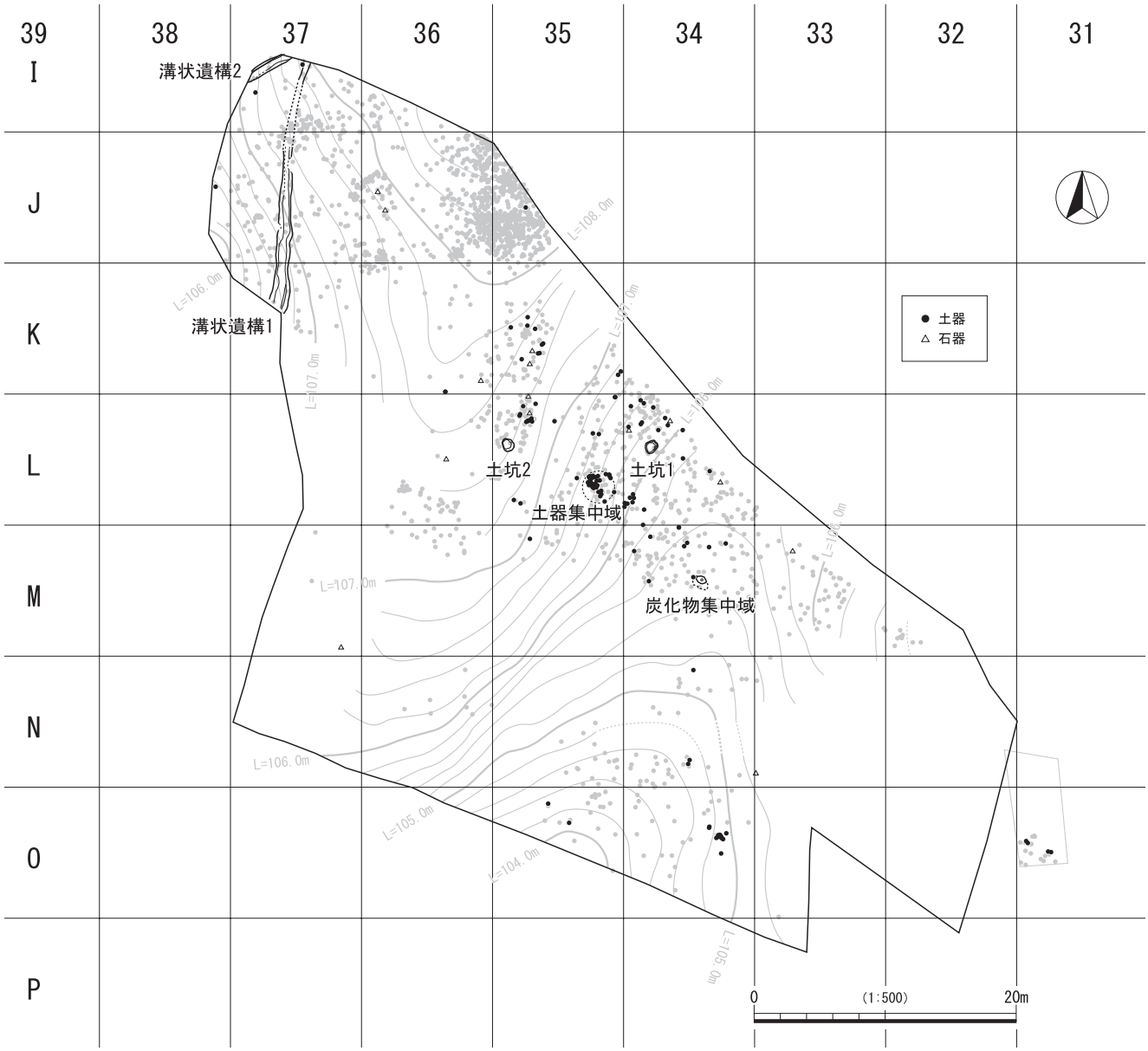
挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色	調
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	緋石	雲母	外　面	内　面
135	36	31938	M－34	Ⅲ	深鉢	野久尾	胴部	微隆帯	ナデ	貝殻条痕	○	○		○		にぶい黄褐 10YR4/3	黒褐 2.5Y3/2
	37	30302	L－35	Ⅱb	深鉢	野久尾	胴部	微隆帯	ナデ	貝殻条痕	○	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4
	38	31938	M－34	Ⅲ	深鉢	野久尾	胴部	微隆帯	ナデ	貝殻条痕	○	○		○		黒褐 10YR3/1	黒褐 2.5Y3/2
	39	30276	L－35	Ⅱb	深鉢	野久尾	胴部	微隆帯	ナデ	貝殻条痕	○	○	○	○		黒褐 10YR3/1	黒褐 2.5Y3/2
		30291	L－35	Ⅱb													
	40	30299	L－35	Ⅱb	深鉢	野久尾	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○	○	○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		30534	L－35	Ⅱb													
	41	30375	遺構内後期遺構	Ⅱb	深鉢	野久尾	胴部	貝殻条痕	貝殻条痕	貝殻条痕	○	○		○		橙 7.5YR6/6	黒褐 2.5Y3/2

ウ　縄文時代後期

（ア）調査の概要

Ⅰ～0区，Ⅱ～Ⅲ層を中心に遺構・遺物の検出・出土がみられた。遺構は溝状遺構2基，炭化物集中域１基，土器を含む土器集中域１基，および土坑2基である。

遺物は，土器が中岳式を主体とする。石器は打製石斧の比率が高いことが特徴的である。遺物出土区域は0-34，K・L-35区に集中する傾向がみられ，土坑等の遺構検出位置と近接している。このことから比較的狭小なエリアでの小規模な集団の活動が想定される。



第 136 図　縄文時代後期の遺構配置・遺物出土状況図

（イ）遺　構

Ⅱｂ・Ⅲ層を主体に，溝状遺構２，炭化物集中域１，土器集中域１，土坑２基が検出された。

溝状遺構１・２（第137図）

１は，Ｉ～Ｋ－37区，Ⅱｂ層下部からⅢ層へ移行するレベルで検出された。北側は切り株や，平成27年度確認調査時の１トレンチによって削平されている。北側は上部が削平されており残存状況が悪い。このため，溝状の形状が不明瞭のため，埋土の観察は残存状況の良い近接した２地点で行った。

断面Ａの埋土①はⅡa層で，縄文時代後・晩期～弥生時代にあたる。検出面周辺のⅡｂ層から中岳Ⅱ式が出土しているため，当該時期の後半の遺構とした。

断面Ｂの埋土①はⅡa層になる。土質は混合物がほとんどなく，色調が10YR1.7/1の黒色土である。

遺物は床面付近で１点出土しているが胴部片のため時期決定の資料としては不十分であった。硬化面は確認できなかった。

２は，Ｉ－37区，Ⅲ層で検出された。調査区の範囲外間際での検出のため部分的でしかないが溝状遺構１の北端部分と交差もしくは切り合う状況が予測される。遺構の延伸が想定される調査範囲外の西側は谷となっている。硬化面は確認できなかった。

土器集中域（第138図，42～45）

Ｌ－35区のやや傾斜のある地点で検出した。この遺構の検出面よりも上位から集中して土器が出土していたが，傾斜により遺構周辺部に流出した遺物もあると考えられる。

埋土は単一で，色調は10YR2/2黒褐色である。土質は粘性としまりがある。南西側に炭化物の集中が２か所みられ，床面での採取もあった。形状はまばらであるがⅢ層と思われる埋土がブロック状に混在していた。

遺構内遺物は以下のとおりである。45は，口縁部から肩部にあたる。外面はミガキ調整がなされ，内面は丁寧なナデ調整がなされている。口縁部下半から胴部にかけての屈曲部に明瞭な稜が確認できる。42，43，44は，胴部である。内外面ともナデ調整がなされている。縄文後期の中岳式土器に相当すると考えられる。礫と黒曜石も共伴していたが，周辺遺物の出土はまばらであった。

炭化物集中域（第139図）

Ｍ－34区，Ⅲ層で検出した。Ⅲ層を10cm程度掘り下げたところで検出した。Ⅲ層中には炭化物が散見されているが，この地点は地形が窪んでいたために，炭化物が溜まったと考えられる。明確な掘り込みはなく，図中の破線は５㎜～１cm大の炭化物が散在していた範囲を示すものである。最も集中しているのは図中の北側にあたる実線部分で１cm以上の炭化物がやや多く混ざっていた。

この中心部には特に大きめの炭が集中しており，分析資料とした。その結果は（後述の分析資料参照）。南側は１～５cmの炭化物がまばらに散らばっていた。

土坑１（第140図）

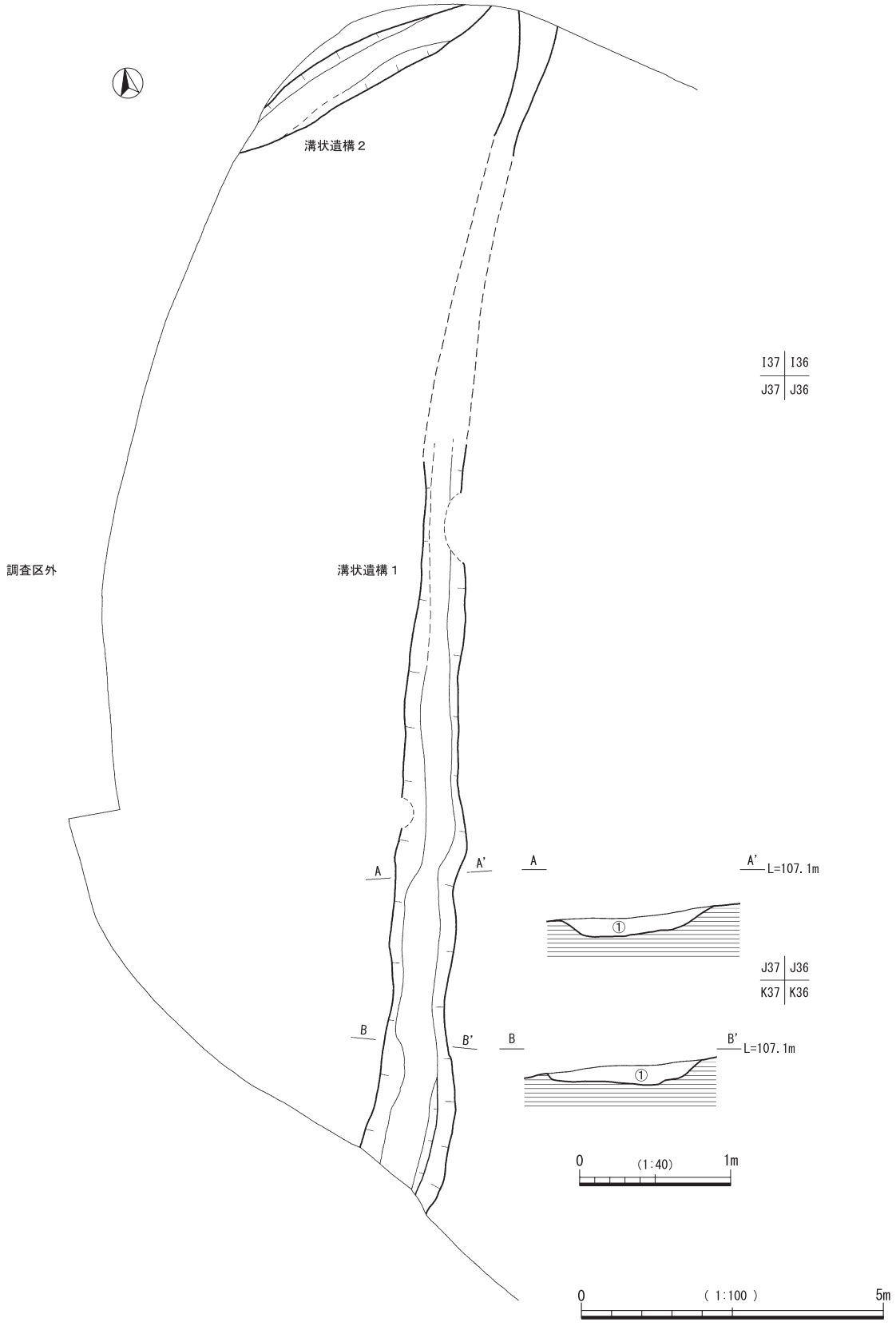
Ｌ－34区，Ⅱｂ層で検出した。長軸110cm，短軸90cmで検出時の平面プランは楕円形である。掘り込み部分は浅く，底部は凹凸のある形状・深さも不定形なため樹痕とも思われる。

埋土①はⅡｂ層である。土質はシルト質で②よりしまりがあるが粘質は弱い。橙色の１㎜程度の火山灰をごく少量まばらに含んでいた。色調は7.5YR1.7/1黒色である。埋土②はⅡa層である。土質は粘質のあるシルト層でややしまりがある。１～２㎜程度のパミスをごく少量含む。色調は10YR1.7/１黒色である。埋土内に遺物はなかった。

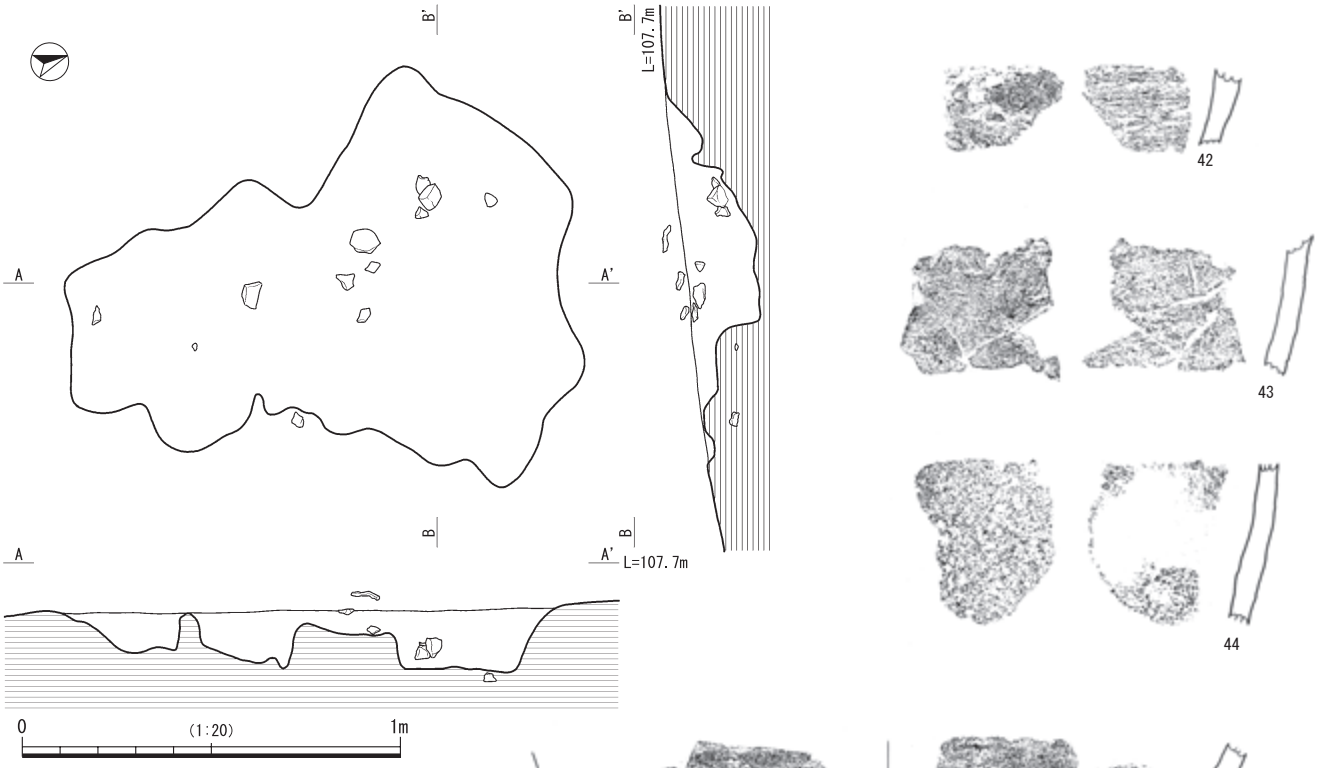
土坑２（第140図）

Ｌ－35区，Ⅱb層で検出された。長軸98cm，短軸86cmで検出時の平面プランは楕円形で掘り込み部分は浅い。底部は凹凸がある。遺構内遺物は被熱した礫が１点のみなので詳細な時期決定は難しい。

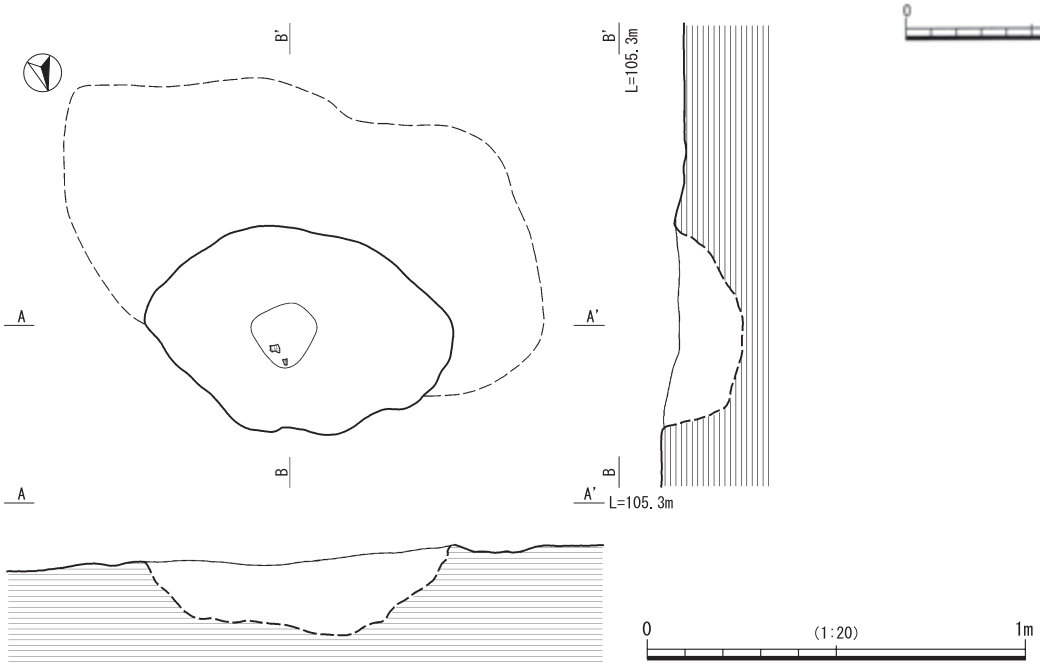
埋土①はⅡa層で竹根が多く絡んでいる。土質は検出面付近がわずかにＩｄ層の軽石ブロックを含んでいるがほとんど不純物を含まない黒色土である。色調は10YR1.7/１黒色である。②は①に火山灰層（10YR4/6褐色）がブロック状に混ざる。しまり，粘性ともに弱い。



第 137 図　溝状遺構１・２



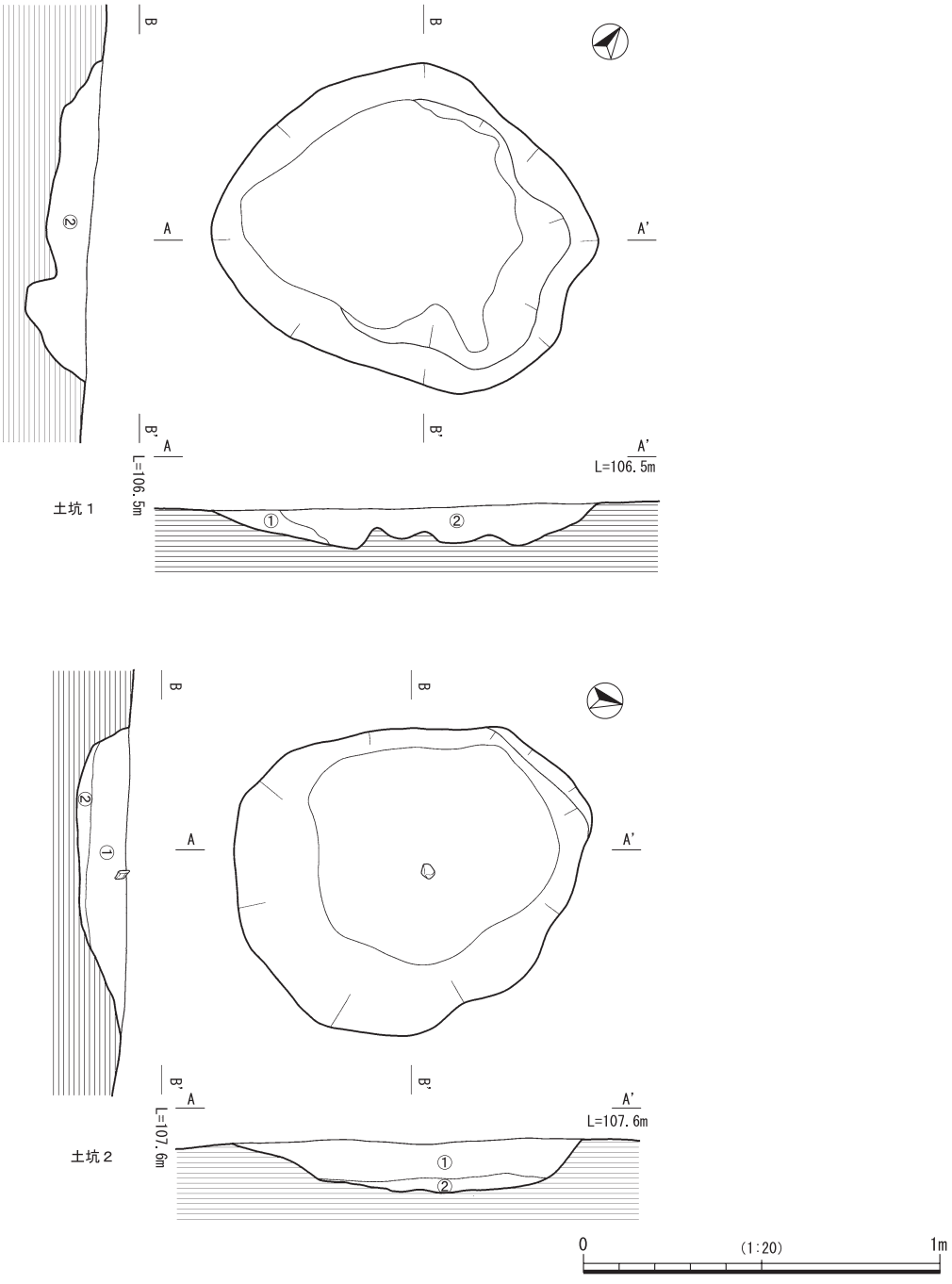
第138図　土器集中域　土器集中域内出土遺物



第 139 図　炭化物集中域

表40　縄文時代後期　土器集中域 (SJ) 出土遺物観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	分類	器種	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
138	42	SJ4-9	L-35	Ⅱa・Ⅱb	晩期	深鉢	胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		黒褐 7.5YR3/1	黒褐 10YR3/2
	43	SJ4-12	L-35	Ⅱa・Ⅱb	晩期	深鉢	胴部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		褐 7.5YR4/3	にぶい赤褐 5YR4/4
	44	SJ4-8	L-35	Ⅱb	晩期	深鉢	胴部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/4
	45	30202	L-35	Ⅱb	中岳	深鉢	口縁部～底部		ミガキ	ナデ	○	○		○		褐 7.5YR4/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		30021															
		30203															
		30305															
		30729															



第 140 図　縄文時代後期　土坑１・２

（ウ）遺　物

土　器（第141・142図　46 ～ 64）

46，50は口縁部から胴部である。口唇部は一部破損し，胴部屈曲部に凹線を施している。46は口唇部に凹線２条と楕円形の凹点，胴部最大径にあたる屈曲部には凹線２条と三日月の凹点を施している。50は口唇部に１条，胴部に2条の凹線を巡らしている。46に比べて胴部最大径部分の張りが弱い。

47，48は肥厚する口唇部に凹線を２条巡らしている。49は胴部屈曲部に凹線と三日月の凹点を施している。外面は丁寧なミガキ調整がなされている。

51，52は口縁部から頸部である。51は口唇部が丁寧に面取りされている。内面に頸部の稜がみられる。

52は口縁部で，外面は貝殻条痕文による調整の後，ナデ調整を行ったことが確認できる。

53は口縁下部から頸部を経て胴部にかけての部分である。頸部内面に稜がみられる。

外面調整はミガキとナデが併用されているが内面はナデ調整である。

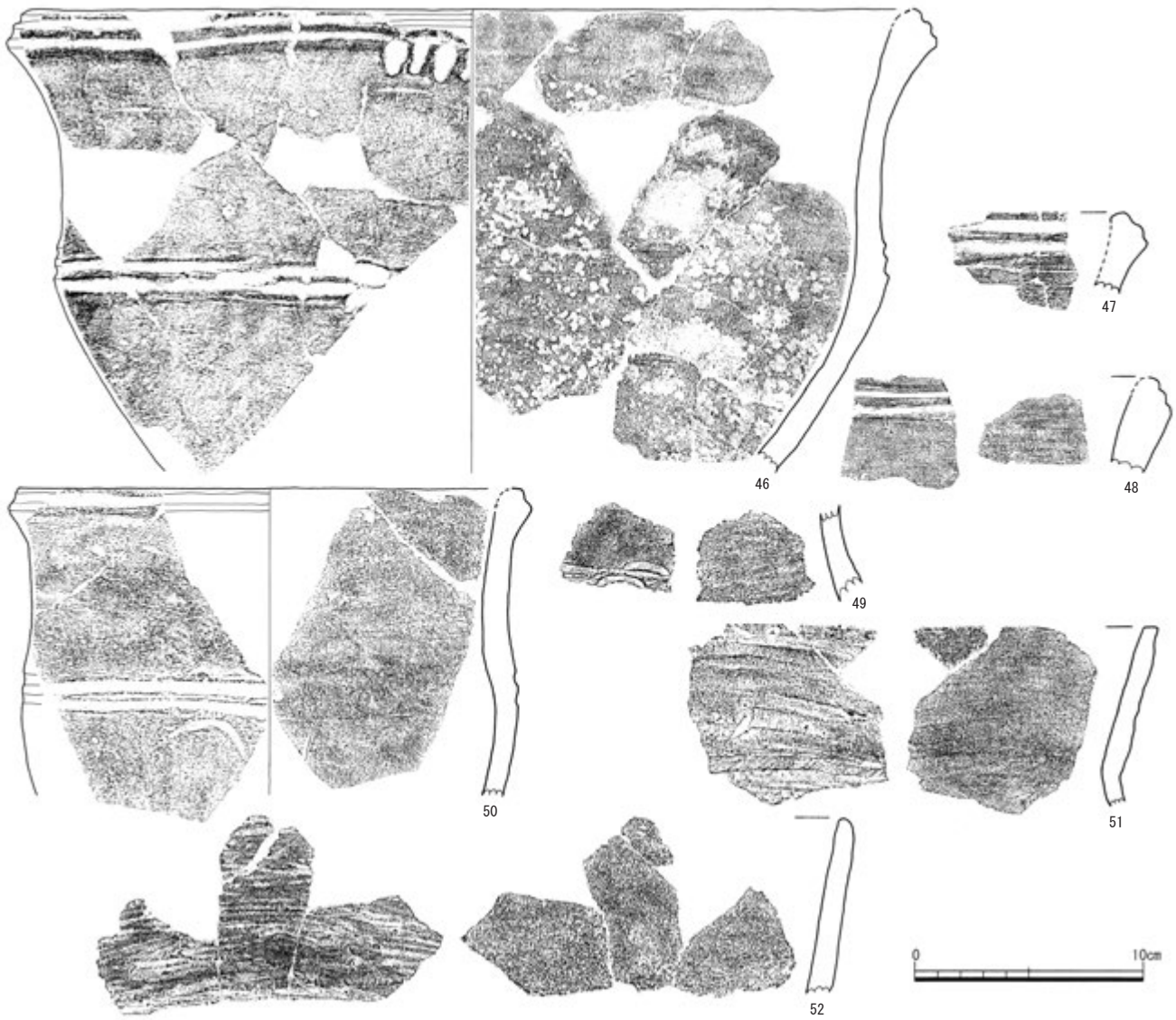
54は頸部から胴部にかけての部分である。頸部内面には明瞭な稜がみられる。55は頸部から胴部にあたる。内面になだらかな稜がみられる。

56，57は胴部である。57の外面は貝殻条痕文による調整がなされている。

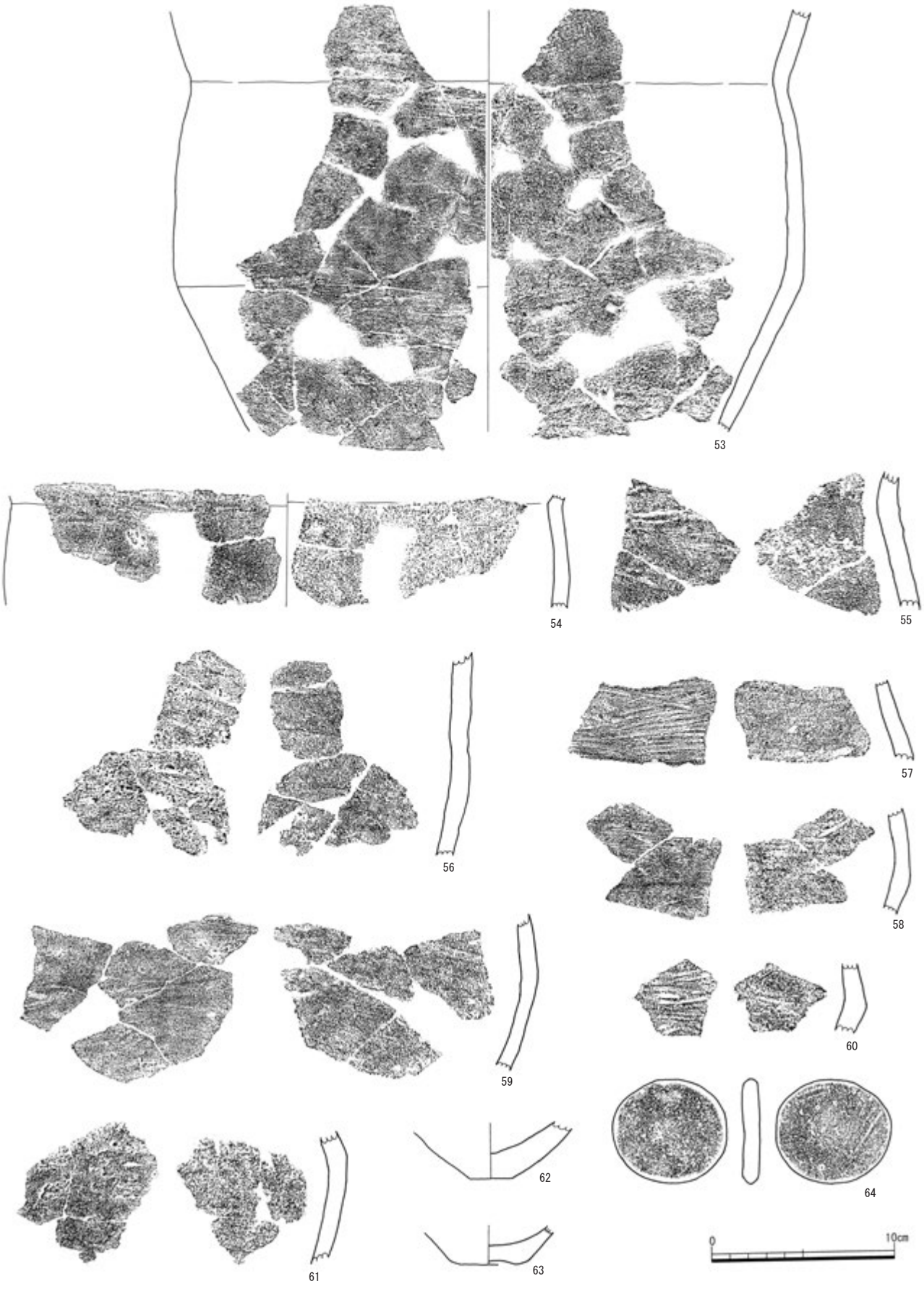
58 ～ 61は胴部屈曲部である。62，63は浅鉢形土器の底部である。62は平底であるが，63は外面がやや窪んだ上底状になる。

円盤状土製品

64は胎土の土質や色調，わずかに内湾した形状から中岳Ⅱ式土器の胴部片と思われる。全体の形状を楕円形に加工し，縁辺部は丸みを帯びた状態に面取りしている。外面には条痕がわずかに確認できるが，内面はナデ調整の痕跡がみとめられる。



第 141 図　縄文時代後期　土器 (1)



第 142 図　縄文時代後期　土器 (2)

石　器

打製石鏃（第143図　65・66）

２点図化した。いずれも縦長の長幅比をもつ。65は，二等辺三角形状を呈する。基部は弧状に浅い抉りが入り，脚部尖端は鋭角的だがやや丸みを帯びる。先端部と脚部先端が欠損している。

66は，やや軟質な頁岩で縦横の比率が倍以上有り，非常に縦長な形状である。両側縁部は鋸歯縁加工による調整がなされている。表裏面に研磨による擦痕がみられる。先端部は非常に鋭角である。基部は弧状に浅い抉りが入り，脚部尖端はやや丸みを帯びる。

打製石斧（第143・144図　67 ～ 75）

９点図化した。完形品は少なく，欠損品が大半を占めている。67は刃部の欠損品である。使用による摩耗がみられる。刃部と側縁部に研磨がみられる。68は有肩で基部に比して刃部が広い形状である。刃部は使用による摩耗で丸みを帯びる。69はこのタイプの基部欠損品と考えられる。70は基部に抉りがなく直線的で，刃部は非対称で尖頭状の鋭角的な刃部を有する。71，72は先端部がやや幅広になる刃部の欠損品である。

73は胴部から刃部にあたる欠損品で，刃部の先端部の幅が狭くなる形状と考えられる。

74は直線的な形状で側縁部にそれぞれ剝離痕と敲打痕，裏面と刃部には擦痕がみとめられる。75は直線的な刃部の欠損部である。

67，70，72，73，74，75は縦長剥片を素材剥片とする。他の地点とは素材獲得に違いが見られる。

磨製石斧（第145図　76）

76は加工斧で，断面形が凸レンズ形となる扁平な形状である。刃部はやや弧状で研磨がみとめられる。

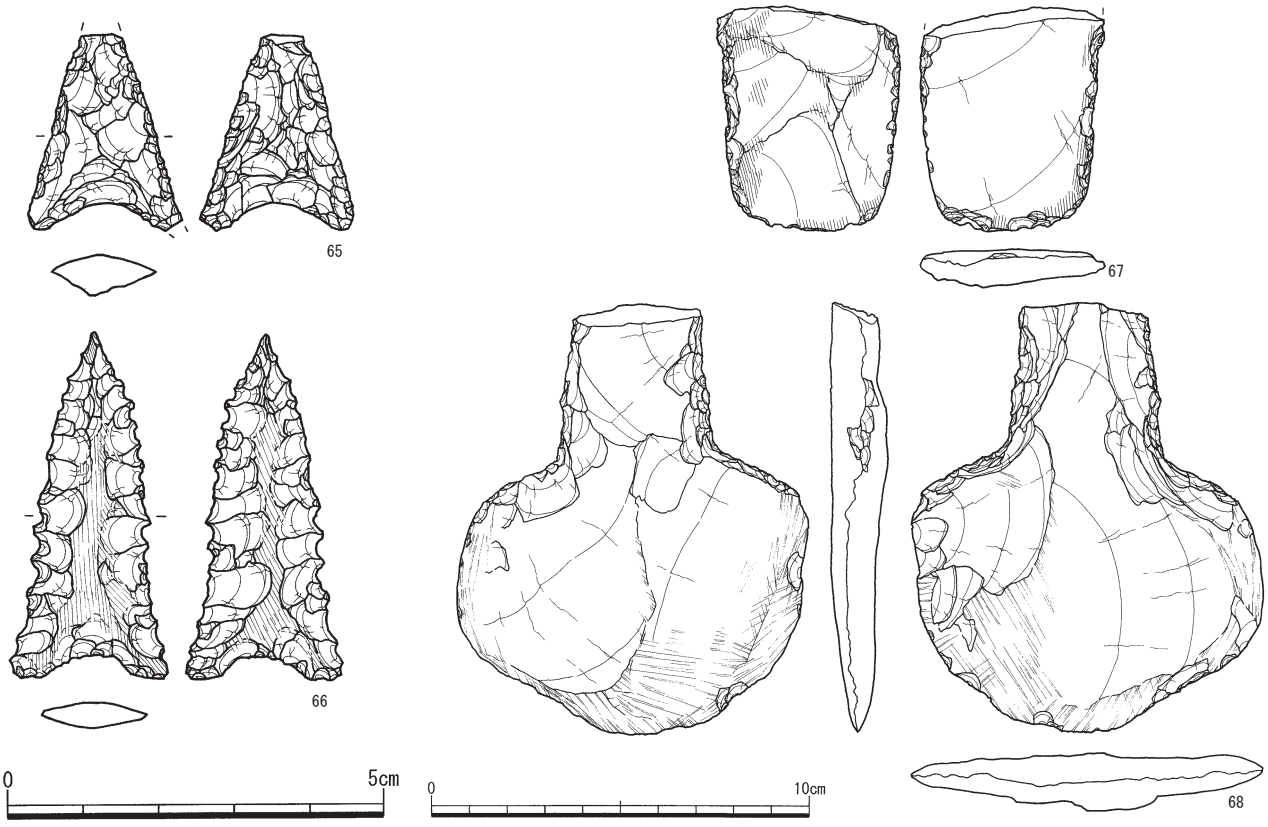
磨石・敲石（第145図　77 ～ 80）

77は表裏面に擦痕，側縁部に敲打痕がみとめられるので，磨り石と敲石の両方の使用が考えられる。

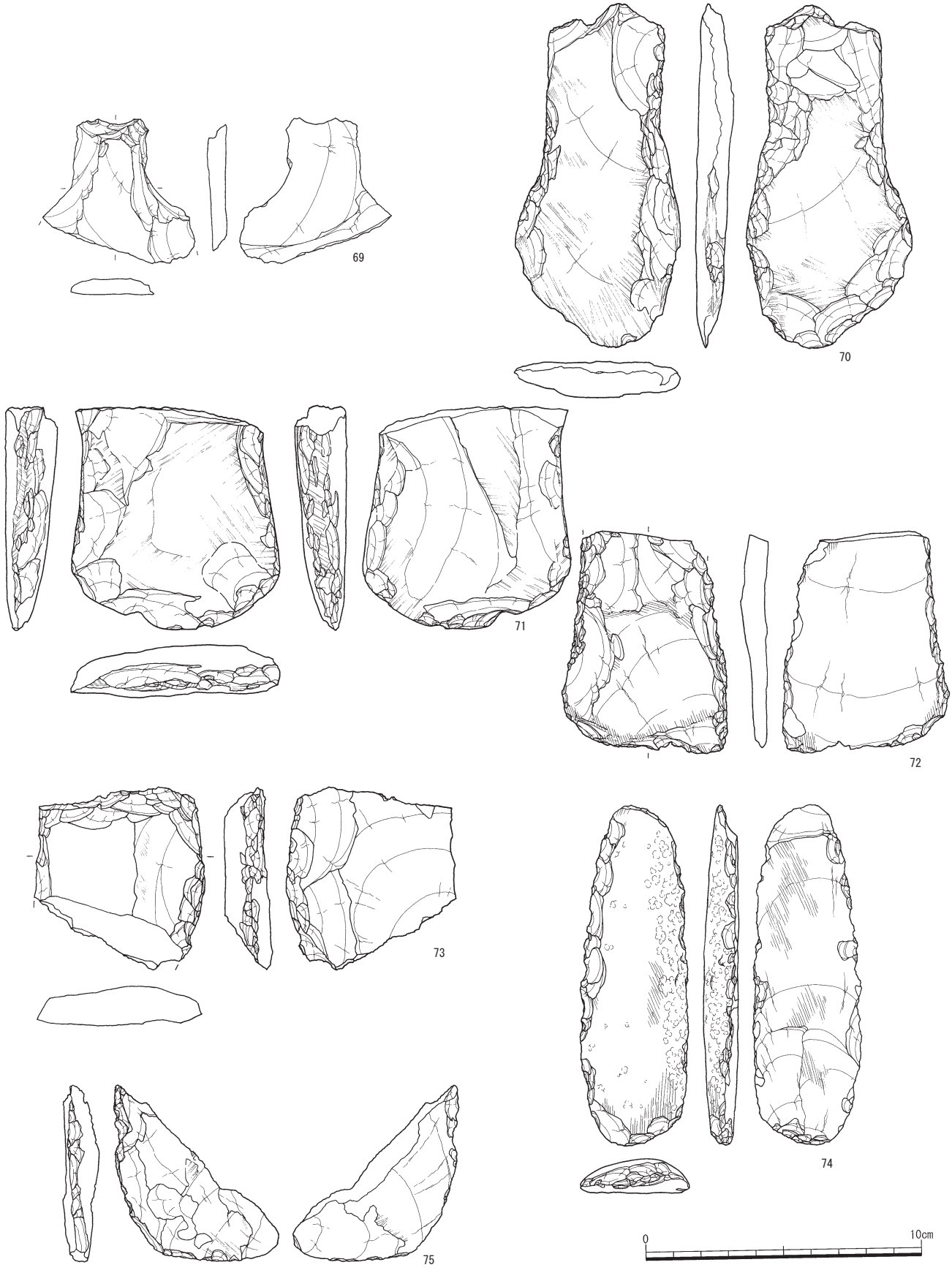
78，79は側縁部全体に敲打痕がみられ，一部敲打による欠損部もみとめられる。80は縦長の棒状の形状で，表面は滑らかだが，先端部に敲打痕がみとめられる。

軽石製品（第145図　81）

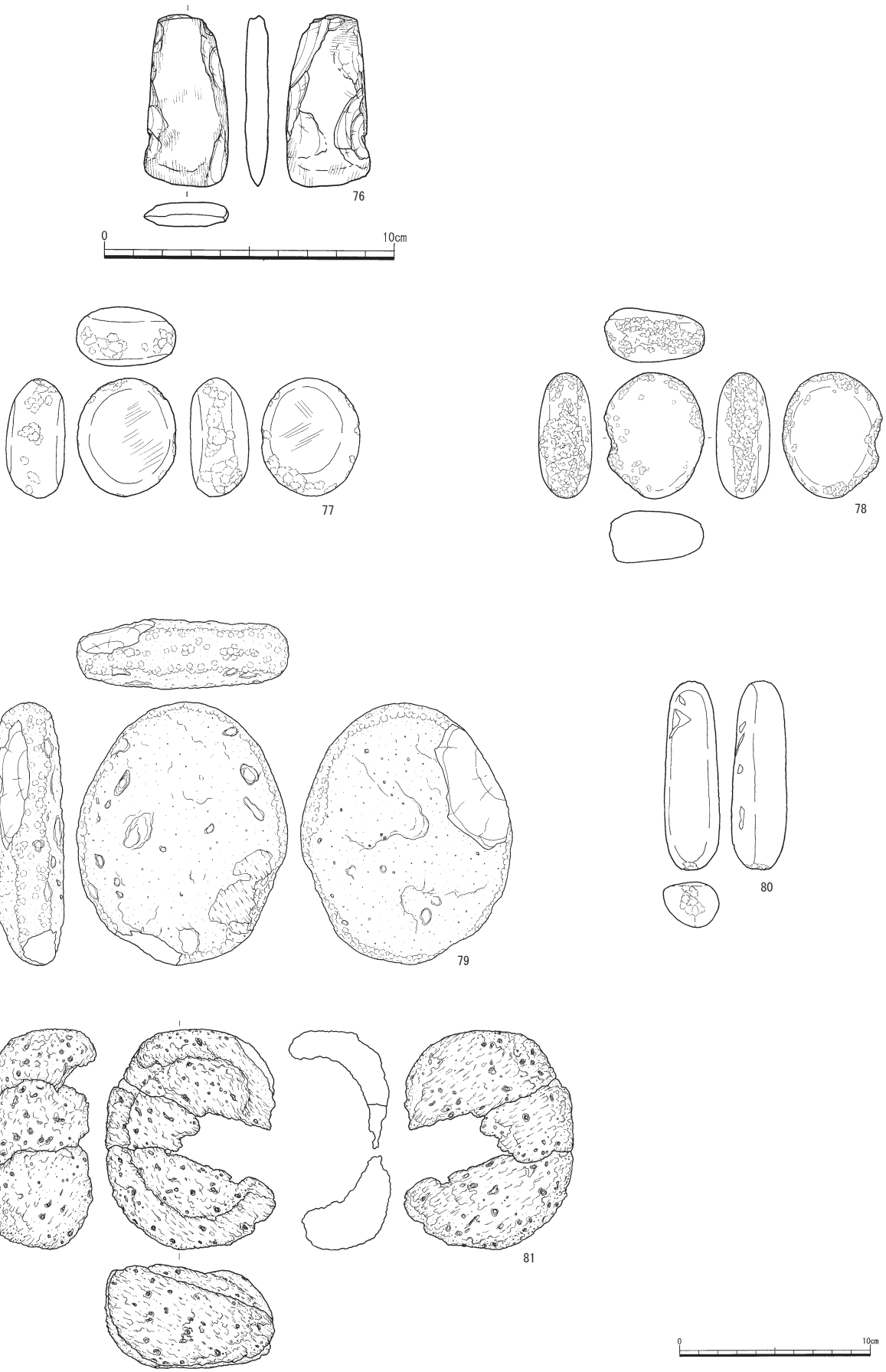
81は軽石製の皿である。楕円形の形状の中心部を加工している。器壁の立ち上がりは垂直に近く，薄く丁寧に削りあげている。非常に脆弱なつくりのため，日常的な使用には不向きと考えられる。



第 143 図　縄文時代後期　石器 (1)



第 144 図　縄文時代後期　石器 (2)



第 145 図　縄文時代後期　石器 (3)

表41　縄文時代後期　土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部位	文様	器面調整 外面	器面調整 内面	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃石	胎土 輝石	胎土 雲母	色調 外面	色調 内面
141	46	9172	O－34	Ⅲ	浅鉢	中岳	口縁部～胴部	沈線・三日月・楕円	ミガキ	ミガキ・ナデ	○	○	○	○		黒 7.5YR2/1	褐 7.5YR4/3
		9161	O－34	Ⅲ													
		9162	O－34	Ⅲ													
		9163	O－34	Ⅲ													
		9164	O－34	Ⅲ													
		9165	O－34	Ⅲ													
		9166	O－34	Ⅲ													
		9167	O－34	Ⅲ													
		9168	O－34	Ⅲ													
		9169	O－34	Ⅲ													
		9170	O－34	Ⅲ													
		9173	O－34	Ⅲ													
		9174	O－34	Ⅲ													
		9175	O－34	Ⅲ													
	47	12467	N－34	Ⅱb	深鉢	中岳	口縁部	沈線	ミガキ	ナデ	○	○		○		黒褐 7.5YR3/1	明赤褐 5YR5/6
	48	30750	M－34	Ⅲ上	深鉢	中岳	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○		○		明赤褐 5YR5/6 明	褐 7.5YR4/4
	49	12884	O－32	一括	深鉢	中岳	胴部	沈線・三日月文	ミガキ	ナデ	○	○		○		黒 7.5YR2/1	褐 7.5YR4/3
	50	12874	O－32	一括	深鉢	中岳	口縁部～胴部	沈線	ナデ	ナデ	○	○		○		灰黄褐 10YR4/2	黒褐 10YR3/2
		12875	O－32	一括													
	51	30057	K－35	Ⅱa	深鉢	中岳	口縁部		ケズリ	ケズリ・ナデ	○	○		○		黒褐 10YR3/1	黒褐 10YR3/1
		30525	K－35	Ⅱb													
	52	30198	L－34	Ⅱb	深鉢	中岳	口縁部～頸部		条痕・ナデ	ナデ	○	○		○		黒褐 10YR3/2	にぶい黄褐 10YR5/3
		30644	K－35	Ⅱb													
		30645	K－35	Ⅱb													
142	53	30704	L－35	Ⅱb	深鉢	中岳	口縁下部～胴部		ミガキ・ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4
		30300	L－35	Ⅱb													
		30319	L－35	Ⅱb													
		30320	L－35	Ⅱb													
		30326	L－35	Ⅱb													
		30543	L－35	Ⅱb													
		30700	L－35	Ⅱb													
		30703	L－35	Ⅱb													
		30708	L－35	Ⅱb													
		30710	L－35	Ⅱb													
		30712	L－35	Ⅱb													
		30713	L－35	Ⅱb													
		30714	L－35	Ⅱb													
		30722	L－35	Ⅱb													
		30544	L－35	Ⅱb													
	54	30329	L－35	Ⅱb	深鉢	中岳	胴部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 7.5YR5/4
		30330	L－35	Ⅱb													
		30331	L－35	Ⅱb													
		30549	L－35	Ⅱb													
		30662	L－35	Ⅱb													
	55	30494	L－35	Ⅱb	深鉢	中岳	頸部～胴部		ナデ	ナデ	○	○		○	○	黒褐 7.5YR3/2	褐 7.5YR4/3
		30102	L－35	Ⅱa													
	56	30516	K－35	Ⅱb	深鉢	中岳	胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/4
		12450	O－35	Ⅱb													
		30447	M－35	Ⅱb													
		30467	J－37	Ⅱb													
		30515	K－35	Ⅱb													
	57	30614	L－34	Ⅱb	深鉢	中岳	胴部		条痕	ナデ	○	○	○	○		にぶい赤褐 5YR4/3	褐 7.5YR4/3
	58	30513	K－35	Ⅱb	深鉢	中岳	胴部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい赤褐 5YR4/3	にぶい黄褐 10YR5/4
		30514	K－35	Ⅱb													
	59	30492	L－35	Ⅱb	深鉢	中岳	胴部		ナデ	ナデ	○	○		○	○	にぶい赤褐 5YR4/6	にぶい褐 7.5YR5/4
		30101	L－35	Ⅱa													
		30493	L－35	Ⅱb													
		30573	L－35	Ⅱb													
		30541	L－35	Ⅱb													
	60	30280	M－35	Ⅱb	深鉢	中岳	胴部		条痕・ナデ	ナデ	○	○		○		褐 7.5YR4/3	にぶい黄褐 10YR5/4
	61	30576	K－36	Ⅱb	深鉢	中岳	胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい赤褐 5YR4/3	褐 7.5YR4/3
		30532	L－36	Ⅱb													
	62	9127	N－34	Ⅱ	浅鉢	中岳	底部		ミガキ	ナデ	○	○		○		にぶい赤褐 5YR4/4	にぶい赤褐 5YR5/4
		9128	N－34	Ⅱ													
	63	9181	O－35	Ⅱb	浅鉢	中岳	底部		ナデ	ナデ	○	○		○		橙 5YR6/6	黒褐 2.5Y3/2
	64	31001	L－34	Ⅱb	深鉢	中岳	円盤状土製品		条痕	ナデ	○	○		○		明赤褐 5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4

表42　縄文時代後期　石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
143	65	9178	O-34	Ⅲ	打製石鏃	安山岩	2.6	1.8	0.5	1.59
	66	9229	L-36	Ⅲ	打製石鏃	黒曜石	4.6	1.9	0.3	2.37
	67	30074	K-35	Ⅱa	打製石斧	安山岩	5.9	4.8	0.9	31
	68	30092	K-36	Ⅱa	打製石斧	安山岩	11.4	9.35	1.55	155
144	69	30205	L-34	Ⅱb	打製石斧	安山岩	5.3	5.3	0.5	16
	70	30752	M-33	Ⅲ上	打製石斧	安山岩	12.5	6	1.35	117
	71	一括	K-37	Ⅰd	打製石斧	安山岩	8.1	7.6	1.9	155
	72	一括	I-37	Ⅰd	打製石斧	安山岩	7.7	5.9	0.8	56
	73	30471	J-35	Ⅱb	打製石斧	安山岩	6.6	6.05	1.6	84
	74	30179	J-36	Ⅱa	打製石斧	安山岩	12.3	3.8	1.2	83
	75	30598	L-34	Ⅱb	打製石斧	安山岩	6.45	6	1.3	30
145	76	9287	N-37	Ⅱb	磨製石斧	安山岩	5.9	2.9	0.8	20.28
	77	30497	L-35	Ⅱb	磨石・敲石	砂岩	6.2	5.1	3.1	133
	78	30618	L-34	Ⅱb	敲石	砂岩	6.6	5.1	2.8	123
	79	30070	K-35	Ⅱa	敲石	凝灰岩	13.6	11.1	3.7	494
	80	一括	K-37	Ⅱb	敲石	砂岩	9.8	2.9	2.4	100
	81	30507	K-35	Ⅱb	軽石碗？	軽石	11.5	8.9	5.5	68

エ　縄文時代晩期

（ア）調査の概要

Ｊ～Ｍ－34・35区での出土が多く，浅鉢型土器の比率が高い傾向が認められた。

（イ）遺　物

土　器（第146～148図　82～112）

82，83，84は口縁部である。内側に肥厚した口唇部に沈線を１条巡らせている。85，86は玉縁状の口唇部の外側に沈線を１条巡らせている。87，88は浅鉢型土器である。87は口縁部から胴部にあたる。やや丸みを帯びて立ち上がった胴部が最大径部分で内湾し，外反して口縁部に至る。内面には明瞭な稜が形成されている。内外面とも丁寧なミガキ調整がなされている。

88は87と同じ形状の胴部屈曲部にあたる。内外面とも丁寧なミガキ仕上げがなされている。89は浅鉢型土器の口縁部である。やや内湾気味になる口縁下部には沈線が１条確認できる。

90は口縁部である。口唇部は鋭角的になる。91は口縁部下部で断面形が三角形状の低めの突帯が巡っている。92は頸部である。内外面の屈曲部は曲線的である。

93は口唇部を平らに面取りし，肥厚する口縁部には沈線を鋸歯状に施文している。94の外面は貝殻条痕文による調整がなされている。口唇部にも貝殻条痕文による調整痕が残る。

95は肥厚した口縁部に２条の凹線を巡らせ，下方の凹線には楕円形の凹点が横位に施文されている。口唇部は平らに面取りされ，口縁部内面には明瞭な段がみられる。

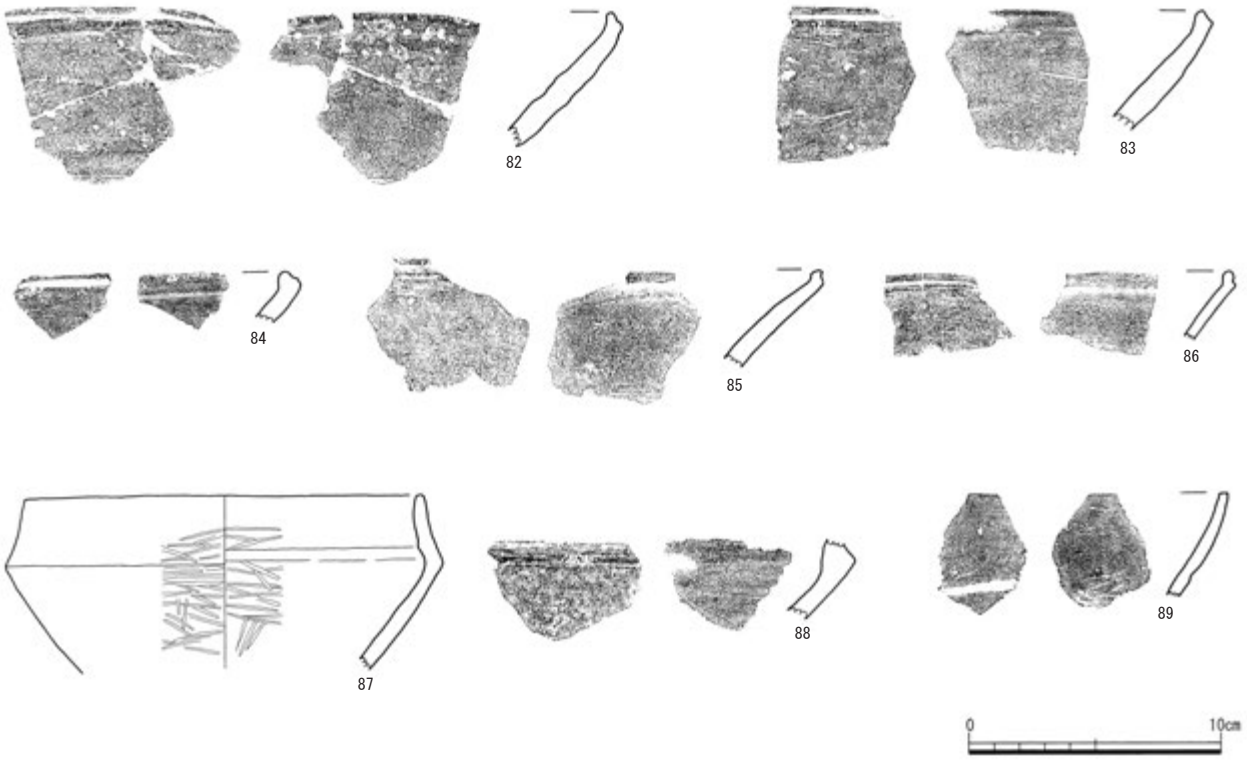
96は口縁部に断面形が三角形状を呈する突帯を１条巡らしている。突帯は頂部が平らに面取りされている。内外面全体に煤が付着している。

97は，やや丸みを帯びて立ち上がった胴部が最大径部分で内湾し，頸部で外側に屈曲して直線的な口縁部を形成している。頸部の内面には稜が形成されている。98は胴部最大径付近から頸部の屈曲部にかけての部分である。頸部内面には稜が形成される。99は胴部最大径部分である。

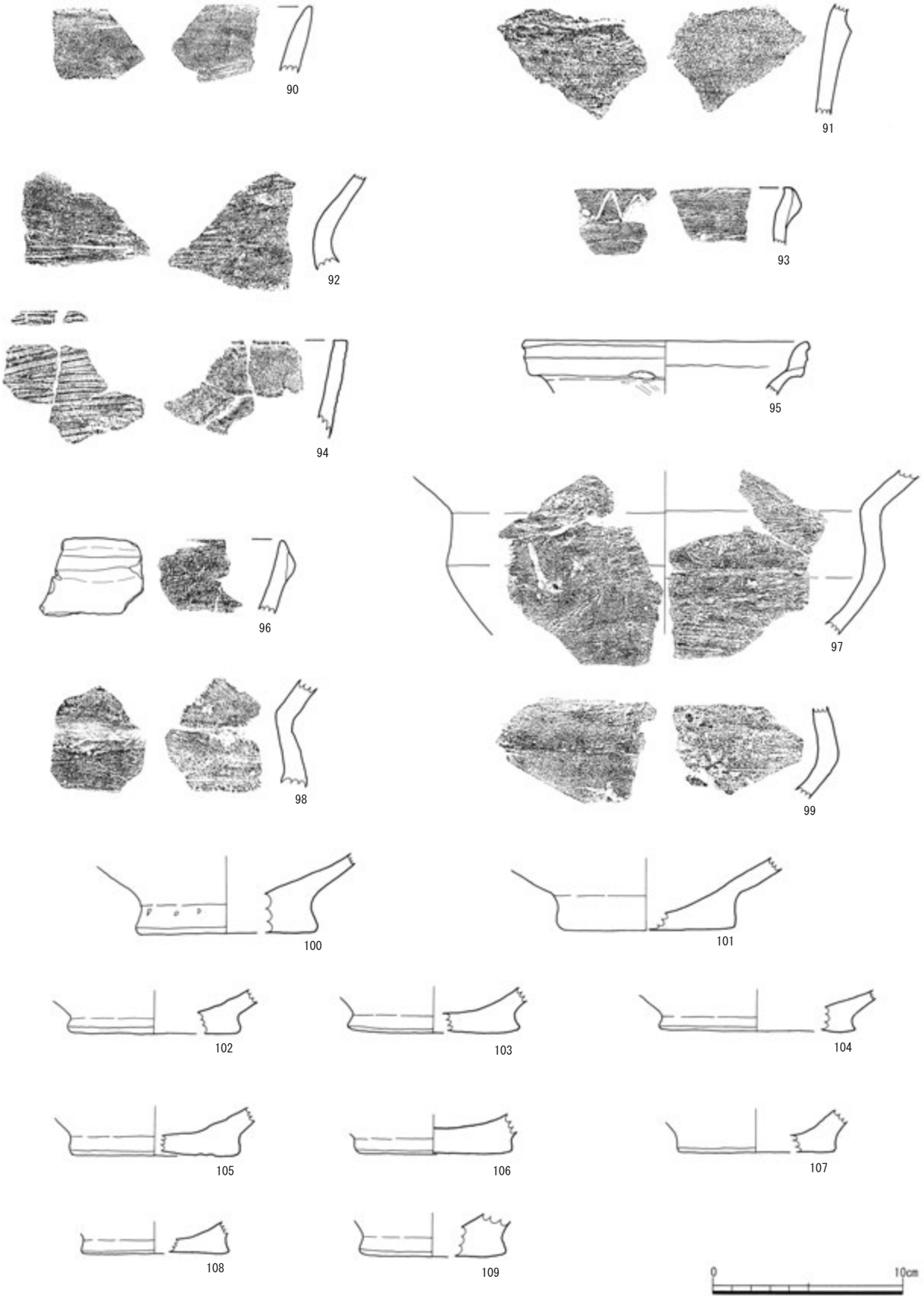
100～108は浅鉢形土器の底部である。100は内側に窪んで立ち上がった胴部が外向きに直線的に開く。101は垂直に立ち上がった胴部から外向きに直線的な胴部が開いていく。102～108は立ち上がりが短く，外側に直線的に開いていく。

109は立ち上がりが短いが，前述の底部に比較すると胴部の立ち上がり角度が鋭角なので深鉢形の形状を呈すると考えられる。

110，111，112は浅鉢形土器である。底部径が小さく，胴部が内湾するボウル状の形状を呈する。110は外面からの穿孔が１か所ある。

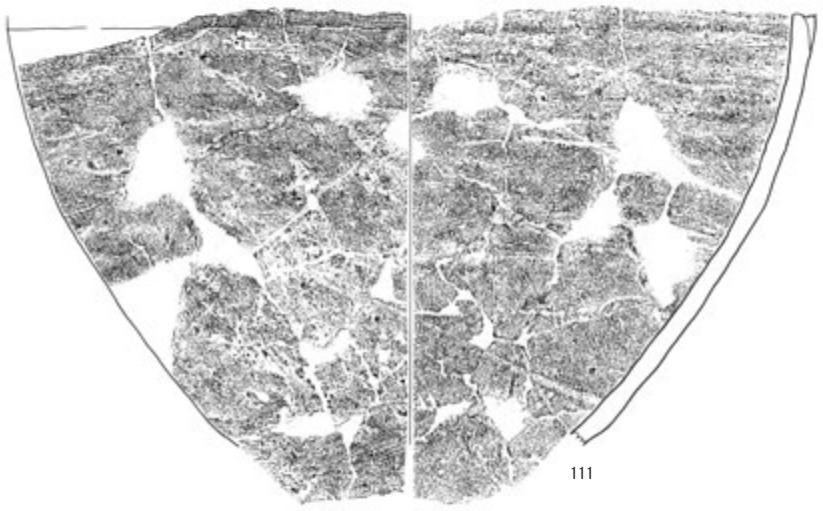


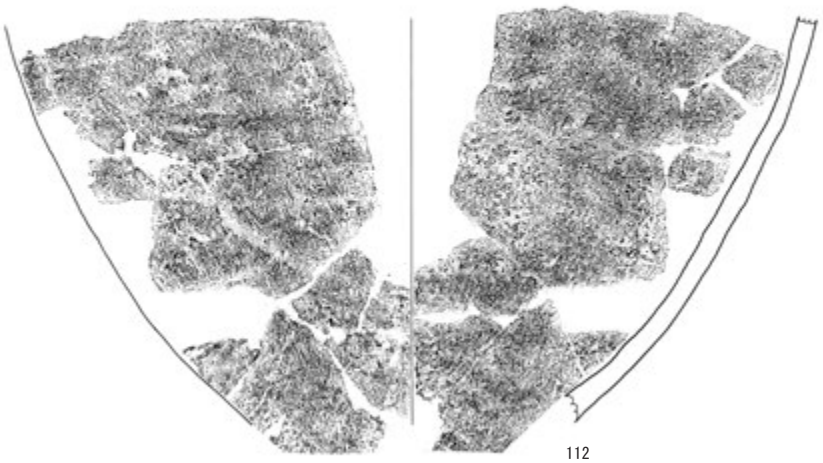
第146図　縄文時代晩期　土器（1）



第 147 図　縄文時代晩期　土器 (2)









第 148 図　縄文時代晩期　土器 (3)

表43　縄文時代晩期　土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
								外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
146	82	30004	L-35	Ⅱa	浅鉢	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○		○		赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6
		30108	L-35	Ⅱa												
		30488	L-35	Ⅱb												
	83	30639	L-34	Ⅱb	浅鉢	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○		にぶい赤褐 5YR4/4	黒褐 5YR2/1
	84	30112	L-35	Ⅱa	浅鉢	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○		○		褐 7.5YR4/3	黒褐 7.5YR2/2
	85	30651	J-35	Ⅱb	浅鉢	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○	○	○		黒褐 2.5Y3/1	黒褐 5YR2/1
	86	30509	L-35	Ⅱb	浅鉢	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○				黒褐 2.5Y3/2	にぶい黄褐 10YR5/3
	87	30748	M-34	Ⅲ上	浅鉢	口縁部～胴部		ミガキ	ミガキ	○	○	○	○		橙 7.5YR6/6	にぶい黄橙 10YR6/4
		30550	M-34	Ⅱb												
		30391	M-34	Ⅱb												
		30664	M-34	Ⅱb												
		一括	L-34	Ⅲ上												
	88	30656	L-35	Ⅱb	浅鉢	胴部		ミガキ	ミガキ	○	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	黒褐 10YR3/1
	89	30602	L-34	Ⅱb	浅鉢	口縁部	沈線	ミガキ	ミガキ	○	○		○		灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3
147	90	30741	M-34	Ⅲ上	浅鉢	口縁部		ミガキ	ミガキ	○	○		○		にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6
	91	30060	K-35	Ⅱa	深鉢	胴部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		暗褐 7.5YR3/3	灰黄褐 10YR4/2
	92	30749	M-34	Ⅲ上	深鉢	頸部		ナデ	ナデ	○	○		○	○	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR5/3
	93	12885	O-32	一括	深鉢	口縁部	鋸歯文	ミガキ	ミガキ	○	○		○	○	褐 7.5YR4/4	灰黄褐 10YR4/2
	94	30189	L-35	Ⅱb	深鉢	口縁部		条痕	ナデ	○	○	○	○		褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3
		30339	L-35	Ⅱb												
		30512	K-35	Ⅱb												
		一括	L-35	Ⅱb												
	95	30264	L-35	Ⅱb	浅鉢	口縁部	凹線	ミガキ	ナデ	○	○		○		にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3
	96	30263	L-35	Ⅱb	浅鉢	口縁部	突帯	ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4
	97	32047	L-35	Ⅱa	浅鉢	頸部～胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	98	32047	L-35	Ⅱa	浅鉢	頸部～胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	99	32085	L-35	Ⅱa	浅鉢	頸部～胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4
	100	30103	L-35	Ⅱa	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		赤褐 5YR4/6	暗褐 7.5YR3/2
	101	30617	L-34	Ⅱb	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		橙 5YR6/6	黄褐 2.5Y5/3
		30619	L-34	Ⅱb												
	102	30610	L-34	Ⅱb	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい黄橙 10YR6/3
	103	30204	L-34	Ⅱb	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		赤褐 2.5Y4/6	黒褐 2.5Y3/2
	104	30410	M-34	Ⅱb	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○		○		黒褐 10YR3/1	黒褐 2.5Y3/1
	105	30641	L-34	Ⅲ上	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○	○	○		にぶい黄褐 10YR4/3	にぶい黄褐 10YR5/3
	106	30166	I-37	Ⅱa	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○		○		赤褐 5YR4/6	暗黄灰 2.5Y4/2
	107	30546	L-35	Ⅱb	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○		○		橙 7.5YR6/6	にぶい黄褐 10YR5/3
	108	一括	K-37	Ⅰd	浅鉢	底部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい赤褐 5YR5/4
	109	30171	I-37	Ⅱa	深鉢	底部		ナデ	ナデ	○			○		にぶい黄橙 10YR7/4	暗黄灰 2.5Y5/2
148	110	30008	L-35	Ⅱb	深鉢	胴部		ナデ	ナデ	○	○		○	○	明赤褐 5YR5/6	黒褐 10YR3/1
		30013	L-35	Ⅱb												
		30309	L-35	Ⅱb												
		30310	L-35	Ⅱb												
		30311	L-35	Ⅱb												
		30313	L-35	Ⅱb												
		30535	L-35	Ⅱb												
		30537	L-35	Ⅱb												
		30715	L-35	Ⅱb												
		30716	L-35	Ⅱb												
		一括	L-35	Ⅱb												
	111	30297	L-35	Ⅱb	深鉢	胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		明赤褐 5YR5/6	黒褐 10YR3/1
		30298	L-35	Ⅱb												
		30303	L-35	Ⅱb												
		30304	L-35	Ⅱb												
		30307	L-35	Ⅱb												
		30308	L-35	Ⅱb												
		30322	L-35	Ⅱb												
		30352	L-34	Ⅱb												
		30353	L-34	Ⅱb												
		30354	L-34	Ⅱb												
		30356	L-34	Ⅱb												
		30360	L-35	Ⅱb												
		30378	L-34	Ⅱb												
		30536	L-35	Ⅱb												
		30537	L-35	Ⅱb												
		30714	L-35	Ⅱb												
		30716	L-35	Ⅱb												
		30723	L-35	Ⅱb												
		30725	L-35	Ⅱb												
		30727	L-35	Ⅱb												
		一括	L-34	Ⅱb												
	112	30625	L-34	Ⅱb	深鉢	胴部		ミガキ	ナデ	○	○		○		明赤褐 5YR5/6	黒褐 10YR3/1
		30626	L-34	Ⅱb												
		30376	L-34	Ⅱb												
		30630	L-34	Ⅱb												
		30357	L-34	Ⅱb												
		30351	L-34	Ⅱb												
		30358	L-34	Ⅱb												
		一括	L-34	Ⅱb												
		30306	L-35	Ⅱb												
		30706	L-35	Ⅱb												
		30538	L-35	Ⅱb												
		30312	L-35	Ⅱb												
		30537	L-35	Ⅱb												
		30715	L-35	Ⅱb												
		30398	M-34	Ⅱb												
		30033	M-34	Ⅱb												
		一括	M-35	Ⅱa												
		一括	M-35	Ⅱb												
		30061	K-35	Ⅱa												

オ　弥生時代

（ア）調査の概要

主な遺構として，竪穴住居跡が２軒，高床式建物跡１軒が検出された。形状は正方形，多角形である。竪穴状住居跡は遺構内にピットや土坑，焼土，遺物を伴っていた。包含層遺物の主要な出土区は34 ～ 37区である。土器は弥生時代中期末～後期の範疇に入るもので甕・壺を主体とする。石器は，磨製石鏃，石匙，石皿，敲石，磨石，砥石である。以上の遺構・遺物から生活が想定できる状況が考えられる。

（イ）遺　構

竪穴住居跡１（第150図，第151図　113 ～ 115）

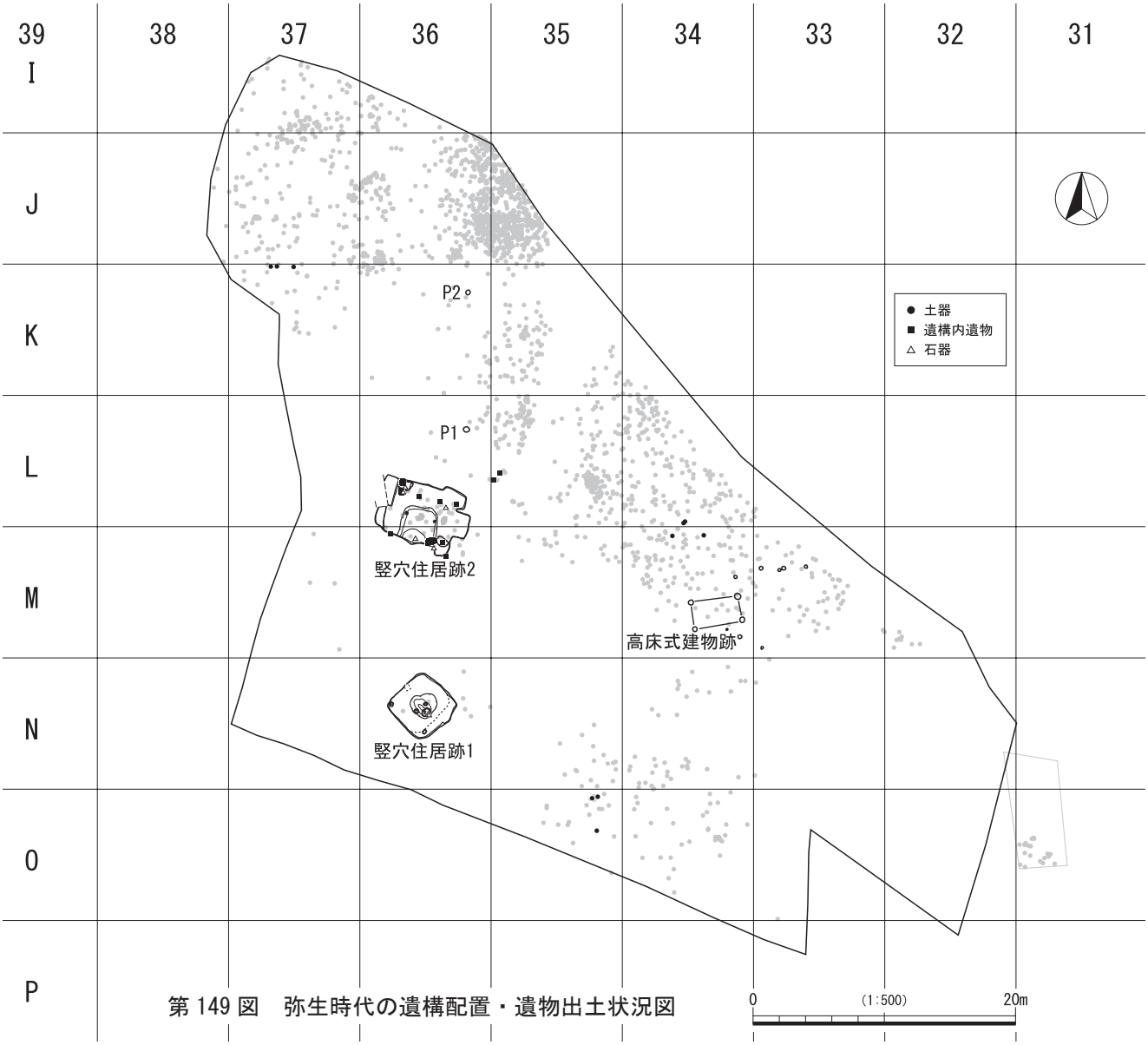
N－36区，Ⅲ層で検出した。平面プランは長軸４m15cm，短軸４m５cm，検出面からの最深部は40cmのほぼ正方形である。中心部に楕円状の掘り込みがあると考えられる。中心部に４基，南側に２基のピットが確認できた。中心部の４基は棟持ち柱としたが，Ｐ１・３は本遺構と関連のないピットとした。全体的に検出されたピットの掘り込みは浅い。

貼り床面も検出されたが（挿図中の破線内），東端部では検出されなかった。その理由として，遺構自体が東側に傾斜しているために，この部分の貼り床が消失してしまったと考えた。南側で土器片と磨・凹石，石錘が出土している。竪穴住居跡１に共伴する遺構内遺物は以下のとおりである。113は弥生時代早・前期相当の屈曲甕である。口縁部直下に粘土紐を貼付する。胎土には角閃石が目立つ。114は磨･凹石で，表裏平坦面は平滑であり，表面の中央部には敲打による凹みがある。115は石錘で，上部と側面には溝状の抉りがみとめられる。抉りは擦り切りにより施される。

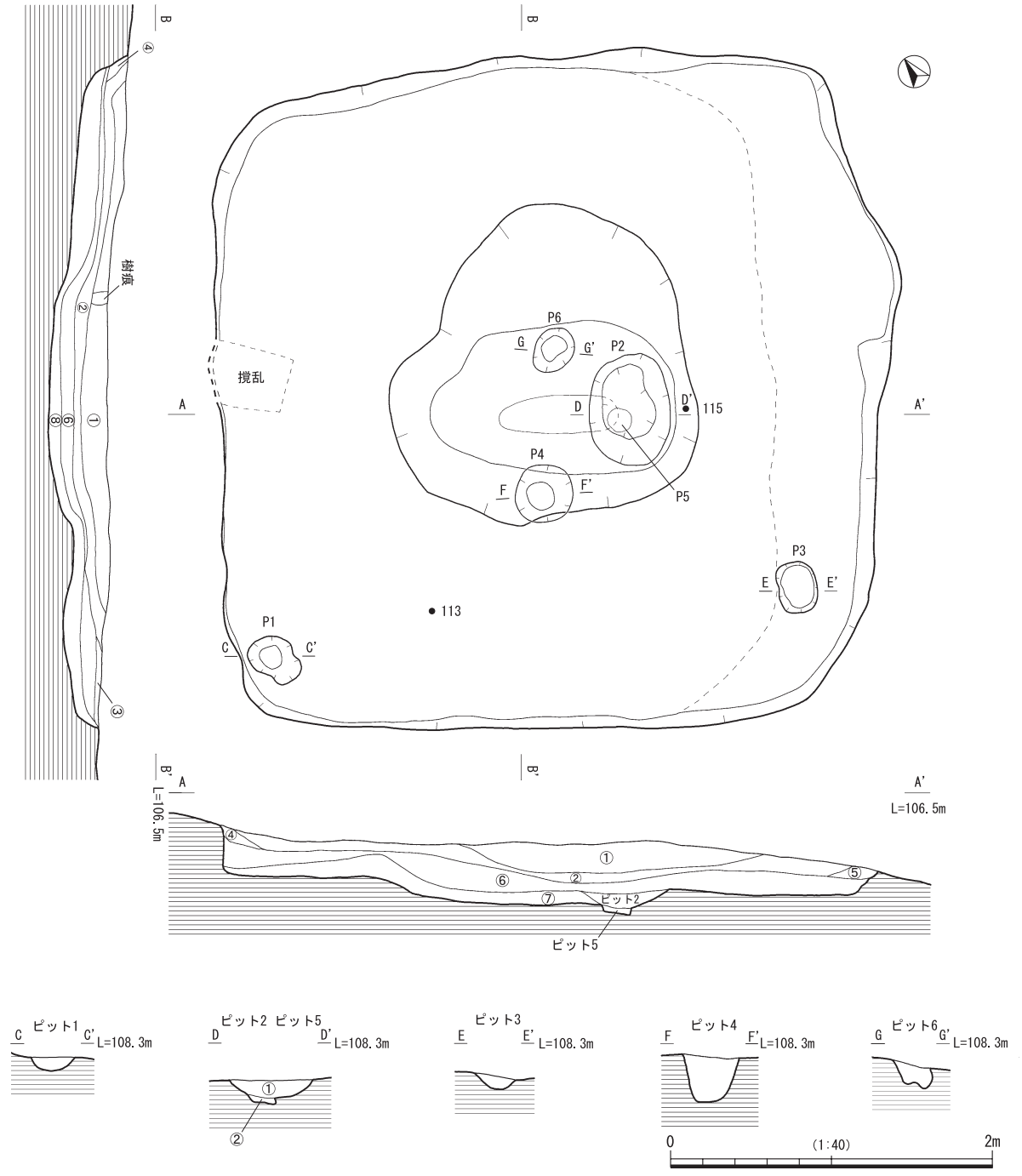
竪穴住居跡２（第152 ～ 156図　116 ～ 134）

L・M－36区で検出された。平面プランは，検出部分の長軸が７m，短軸が4.7mの東西に長い多角形を呈する。西側には硬化面を伴う部分があり，人の出入りが行われた痕跡と考えられる。

掘り込み部分は３段で構成される。中心部の掘り込み面が１段目で中心部に向かってスロープ状に傾斜していた。



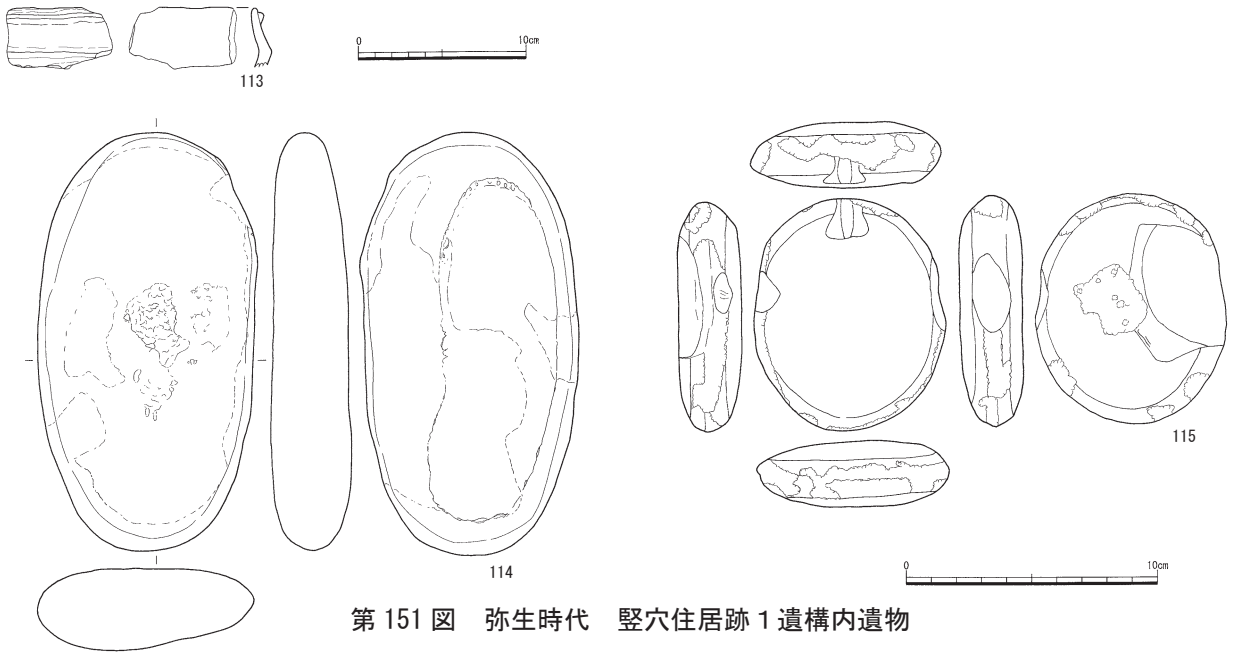
第 149 図　弥生時代の遺構配置・遺物出土状況図



第 150 図　弥生時代　竪穴住居跡 1

表44　弥生時代　竪穴住居跡 1　埋土観察表

竪穴住居跡　1	埋　土	①	黒色土。1㎜程度のオレンジパミスがわずかに点在している。粘性なし。ややしまりがある
		②	暗褐色土。粘性なし。ややしまりあり。1㎜程度の白パミスをまばらに含む
		③	明黄褐色土。粘性なし。ややしまりあり
		④	灰赤色土。粘性なし。ややしまりあり。2㎝大のオレンジブロックを含む
		⑤	黒褐色土。①より明るい色調。粘性・しまりともにややあり
		⑥	褐灰色土。2㎜～1㎝のオレンジパミスをまだらに含む。粘性なし。しまりあり
		⑦	灰黄褐色土に黒色や黄橙色の土が混ざり，1～2㎜大の黄橙のパミスをまだらに含む。粘性なし。しまり強い
		⑧	褐灰色土。⑥より明るい。粘性なし。しまり強い
	ピット1		褐灰色土と明褐色土が混ざり，しまりあり
	ピット2	①	褐灰色土と灰黄褐色土が混ざり，しまりあり
	ピット3		褐灰色土と黄橙色土が混ざり，しまりややあり
	ピット4		暗灰黄色土。2～5㎜大のオレンジパミスをまだらに含む。粘性ややあり。しまり弱い
	ピット5	②	にぶい黄褐色。粘性ややあり。しまり弱い
	ピット6		にぶい黄褐色。粘性ややあり。しまり弱い



第 151 図　弥生時代　竪穴住居跡１遺構内遺物

表45　弥生時代　竪穴住居跡１(SI1)　出土（土器）観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	分類	器種	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
151	113	9948	N-36	埋土	早期～前期	屈曲壺	口縁部		ナデ	ナデ	○		○	○		浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/３

表46　弥生時代　竪穴住居跡１　出土（石器）観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
151	114	N-36	—	磨石	砂岩	16.6	8.4	3.2	722
	115	N-36	9947	石錘	砂岩	8.1	7.6	2.55	212

その上面に２段目，さらに１段上がる状態で張り出し部分をもつ形状である。

本遺構からは焼土が３基，土坑が２基検出された。最下段の焼土３は掘り込み面を掘り下げていく過程で検出された。焼土１・２は貼り床上面に相当する地点で確認された。焼土３からは敲石と軽石が１点出土している。

土坑１は明確な掘り込みはみられなかった。土坑２は平面プランが楕円形で,断面形もすり鉢状を呈している。土器片と軽石が１点ずつ共伴して出土している。埋土は底部にいくほど黒色と黄橙のブロックが小さくなるが単一のものとして捉えた。しまりの度合いは部分的に弱いところがあった。土坑内にて，土器が破砕した状態で出土した。また土坑１の隣接地点で１個体を構成すると考えられる無文の土器片が出土している。その他,土器片,礫石器・剥片石器が共伴していた。これらのことから一定期間の生活が営まれた住居とした。

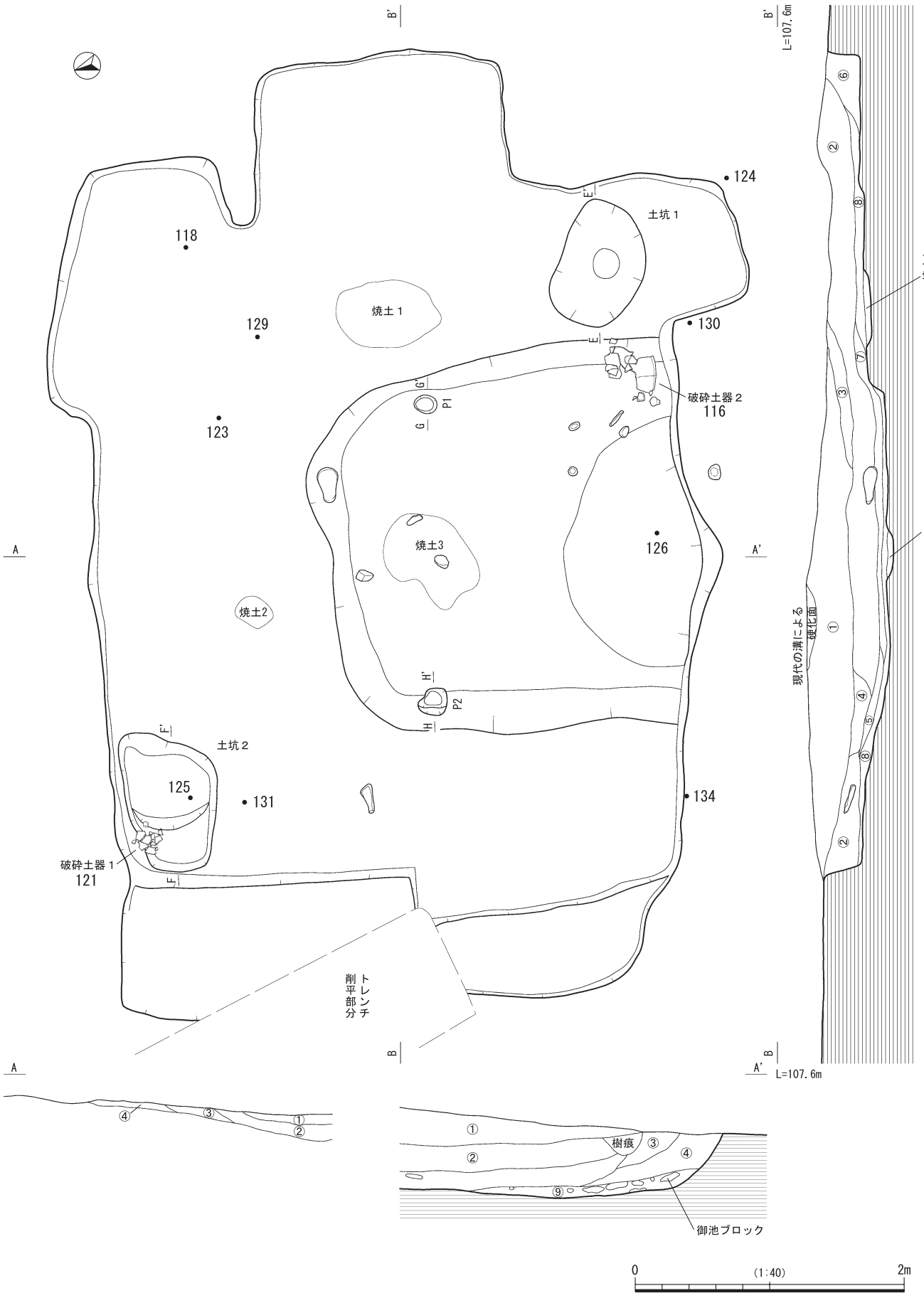
竪穴住居跡２に共伴する遺構内遺物は以下のとおりである。116 ～ 124は弥生時代中期末～後期の範疇に入る土器である。

116，122は甕である。116は，竪穴住居跡２の南部の土坑１付近で，破砕した状態で出土した。口縁部端部が僅かに凹み，口縁部は大きく外反する。口縁部付近は強いヨコナデ，胴部から底部は縦・斜方向のハケメ後ナデで器面調整されている,底部は少し中空状になっており,端部は丸く仕上げている。胴部上半には全面に煤の付着がみられる。122は甕の底部である。充実脚台で，内面・断面には煤が付着している。117，118は小型鉢である。117は外面縦方向にナデで仕上げており，内面には粘土紐接合痕が明瞭に残る。118は外面に段を有し，口縁端部は平坦に形成している。

119，120，121，123，124は壺である。119，120は口縁部である。119は口縁下部に小さな突帯をもち，胎土には金雲母を多量に含む。121は胴部で，外面は部分的に黒塗りで，ミガキ調整されている。123，124は底部である。123は外面がミガキで，内面はナデで調整される。

胎土には金雲母が目立つ。124は底部の円盤貼り付け痕は明瞭に残る。胎土には0.５～１㎝台の茶褐色角礫を多く含み，他と比較して胎土が粗い。

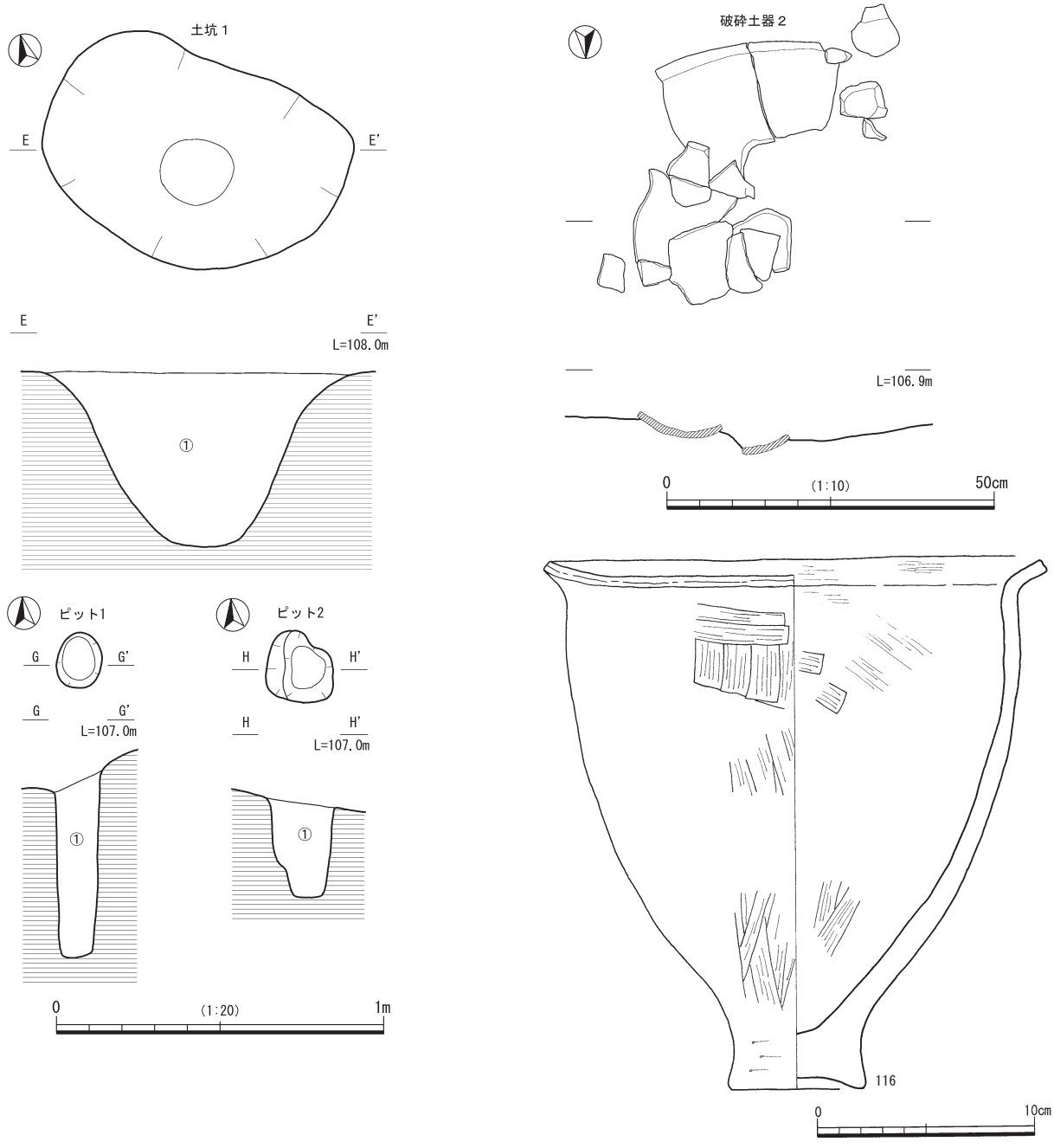
125は磨製石鏃である。石材は頁岩である。表裏両面に研磨がなされている。特に両側縁部は丁寧に研磨されている。126は石匙である。石材は玉随である。摘部が中心軸より右寄りで，刃部は直線的である。127，128，129は敲石である。石材は砂岩である。128は先端部及び一方向の側面に敲打痕があり，ハンマーストーンの可能性がある。130，132は磨石である。石材は砂岩である。131，133は石皿である。133は表裏面とも中央部が凹み敲打痕がある。その周囲は摩耗により表面が滑らかである。131は欠損品である。表裏面とも摩耗により表面が滑らかである。石材はいずれも砂岩である。134は砥石である。表裏面，側面は使用により非常に滑らかさがある。上・下端部は敲打による摩滅がみられる。



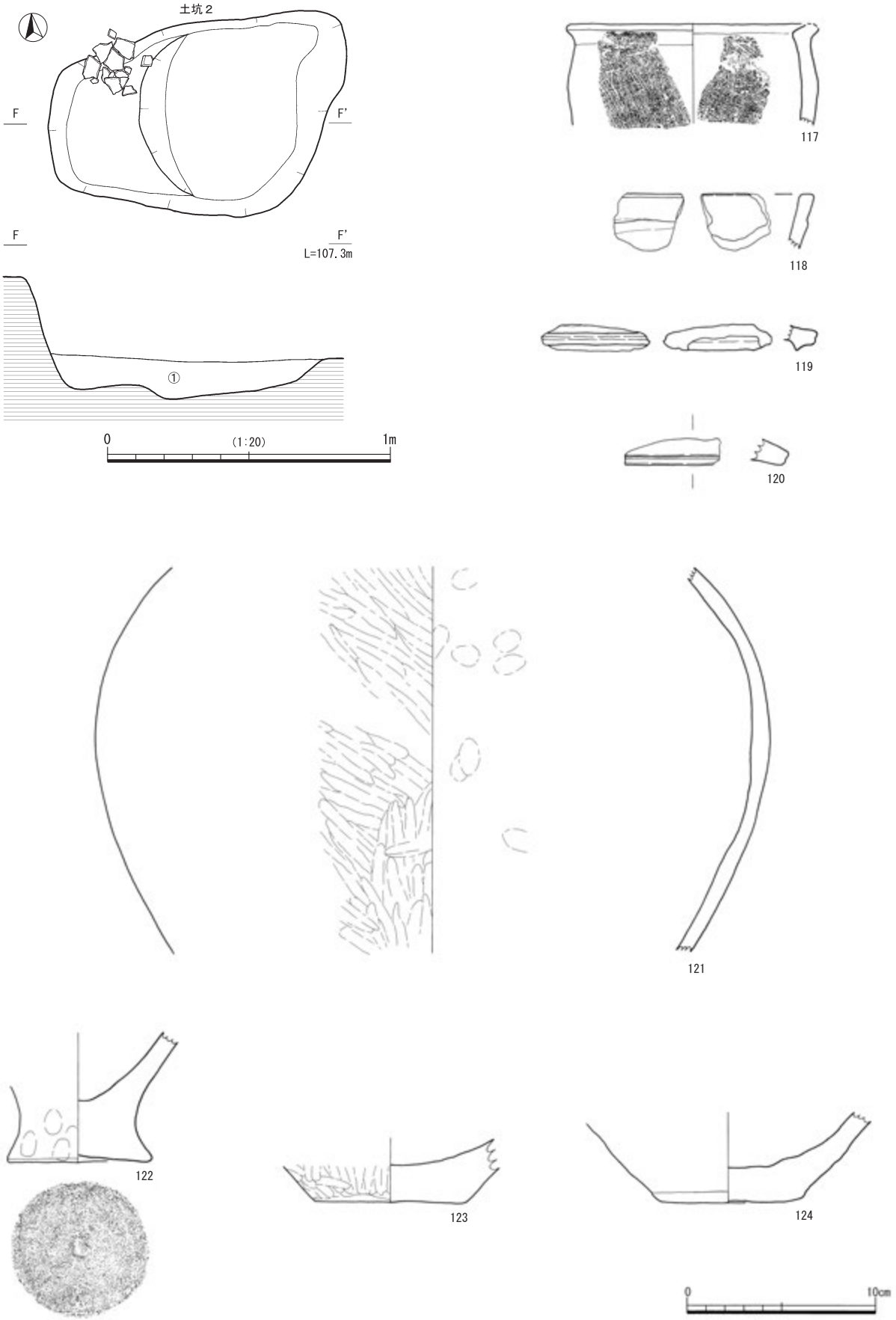
第 152 図　弥生時代　竪穴住居跡２

表47　弥生時代　竪穴住居跡２　埋土観察表

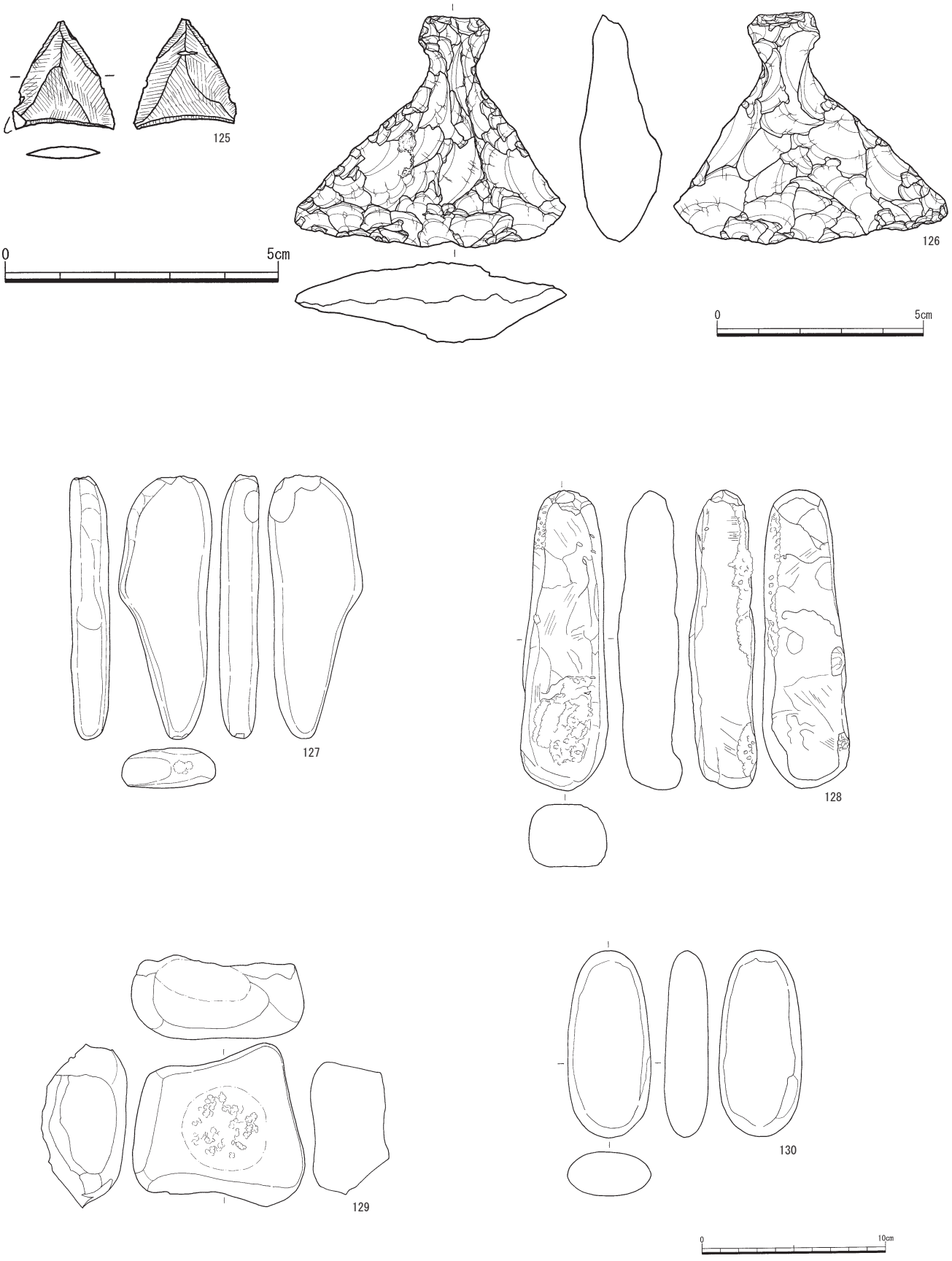
竪穴住居跡　２	埋　土	①	黒色土。やわらかい
		②	褐色土。黄色パミス多い。硬い
		③	褐色土
		④	暗褐色土
		⑤	黄褐色土
		⑥	褐色土
		⑦	褐色土。黄色パミス多い。硬い。掘り込み面の下場に相当する
		⑧	にぶい褐色土
		⑨	黒褐色土。御池パミスのブロックが混在する
	土坑１		オリーブ褐色土。５㎜～10㎝大の黒色ブロックと１～５㎝大の黄橙色ブロックをまだらに含む
	土坑２		黒褐色土。アカホヤブロックと黒褐色土（Ⅳ層相当）の混在した土
	ピット１		暗褐色土。
	ピット２		暗褐色土。ピット１より，やや黒色の度合いが強い



第153図　弥生時代　竪穴住居跡２内　土坑１　ピット１・２出土遺物



第 154 図　弥生時代　竪穴住居跡２　土坑２　出土遺物 (1)



第 155 図　弥生時代　竪穴住居跡２出土遺物 (2)



第 156 図　弥生時代　竪穴住居跡２出土遺物 (3)

表48　弥生時代　竪穴住居跡２　出土（土器）観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	分類	器種	部位	文様	器面調整		胎土					色調	
									外面	内面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外面	内面
153	116	1～18	M-36			甕	口縁部～底部		ヘラナデ	ナデ	○		○			にぶい黄橙 10YR6/3	灰黄褐 10YR6/2
	117	110	L-36			小型鉢	口縁部		ヘラナデ	ナデ	○				○	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR5/4
	118	9304	L-36	埋土		小型鉢	口縁部		ナデ	ナデ	○		○			橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR6/6
	119	SH-2	L,M-36			壺	二又状口縁部		ミガキ	ミガキ		○			○	にぶい褐 7.5Y5/4	にぶい褐 7.5Y5/4
	120	9248	M-36	Ⅱb		壺	口縁部		ミガキ	ミガキ						にぶい褐 7.5Y5/4	にぶい褐 7.5Y5/4
154	121	12	L-36 SI２内土坑１		中期末～後期	壺	胴部		ミガキ	ナデ					○	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい黄橙 10YR6/4
		9															
		8															
		1															
		13															
		10															
		14															
		7															
		5															
		4															
		6															
		12865	L-36	SI2床面													
		12869															
		12003		Ⅲ													
		12016															
		12004															
		3	SI２内土坑１														
		2															
	122	3	SI2内土坑2			甕	底部		ナデ・指押え	ナデ	○	○				にぶい黄 2.5Y6/3	淡黄 2.5Y8/4
		9235	M-36	Ⅱb													
		9234	M-36	Ⅱb													
	123	11600	L-36			壺	底部		ミガキ	ナデ	○	○			○	灰褐 7.5YR5/2	にぶい黄橙 10YR6/4
	124	11998	M-36			壺	底部		ナデ・指押え	ナデ	○	○				にぶい黄橙 10YR7/4	浅黄橙 10YR8/4

表49　弥生時代　竪穴住居跡２　出土（石器）観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	取上番号	器種	石材	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）
155	125	L-36	12007	磨製石鏃	頁岩	2	1.8	0.2	0.9
	126	M-36	12861	石匙	チャート	5.5	6.5	1.9	38
	127	L・M-36	—	敲石	砂岩	14.2	4.8	2.15	200
	128	L・M-36	—	敲石	砂岩	16.2	4.7	3.3	333
	129	L-36	12011	敲石	砂岩	9.5	8.8	4.6	478
	130	M-36	9295	磨石	砂岩	10.05	4.5	2.4	164
156	131	L-36	12005	石皿	砂岩	12.5	5.1	4.5	367
	132	L・M-36	—	磨石	砂岩	8.1	7.9	2	177
	133	L・M-36	—	石皿	砂岩	21.9	15.5	5.9	3036
	134	M-36	—	砥石	砂岩	20.8	8.3	6.5	1341

高床式建物（第157図）

谷部にあたるM－34区，Ⅲ層上面で検出された。P－１～４の検出で１×１間の配列となる，短軸がほぼ南北になっていることや，短軸と長軸の比率が1.5倍になることから，本遺構を高床建物の規格に準ずるものと考えた。

その場合，長軸となるP－1・3，P－2・4間に中柱の存在を想定し，検出を試行した。ピット検出面の上層にあたるⅡ層は黒色土で埋土の見極めが困難な層であるため，その様相をつかむことができなかった。

また中柱はピットの掘り込みが浅い事例が多く，検出面のⅢ層上面でも確認できなかった。

ピットは谷部で検出されているため４基とも非常に深く平均深度は80.5cmである。最深部はⅣ・Ⅴ層に達している。ピット２のみ埋土が異なっていたため調査時に単独で半裁した。そのため，実際の掘立柱建物の軸と異なるラインでの実測となった。建物を構成する各ピットの仕様と埋土は観察表にまとめた。

ピット（第158図）

２基のピットの検出面であるⅢ層は，本遺跡における縄文後晩期と弥生時代の包含層となる。時期の確定においては，共伴遺物がないことと，実際の掘り込み面上面が削平を受けていたことも考えられるため，該当層の上位にあたる弥生時代の遺構として本項に記載した。

ピット１

L-36区，Ⅲ層で検出された。長軸50cm，短軸42cm，平面プランは楕円形で，掘り込み最深部が丸みを帯びた形状である。半裁中にⅢ層が見つかり斜めに入っていく様子だったので樹痕も想定したが，箱掘りによる精査の結果，Ⅲ層のブロックが入っていただけなのでピットと判断した。

ピット２

K-36区，Ⅲ層で検出された。長軸37cm，短軸34cm，平面プランは楕円形で，掘り込みは最深部が丸みを帯びた形状である。埋土中の遺物及び並列関係にあるピットはない。

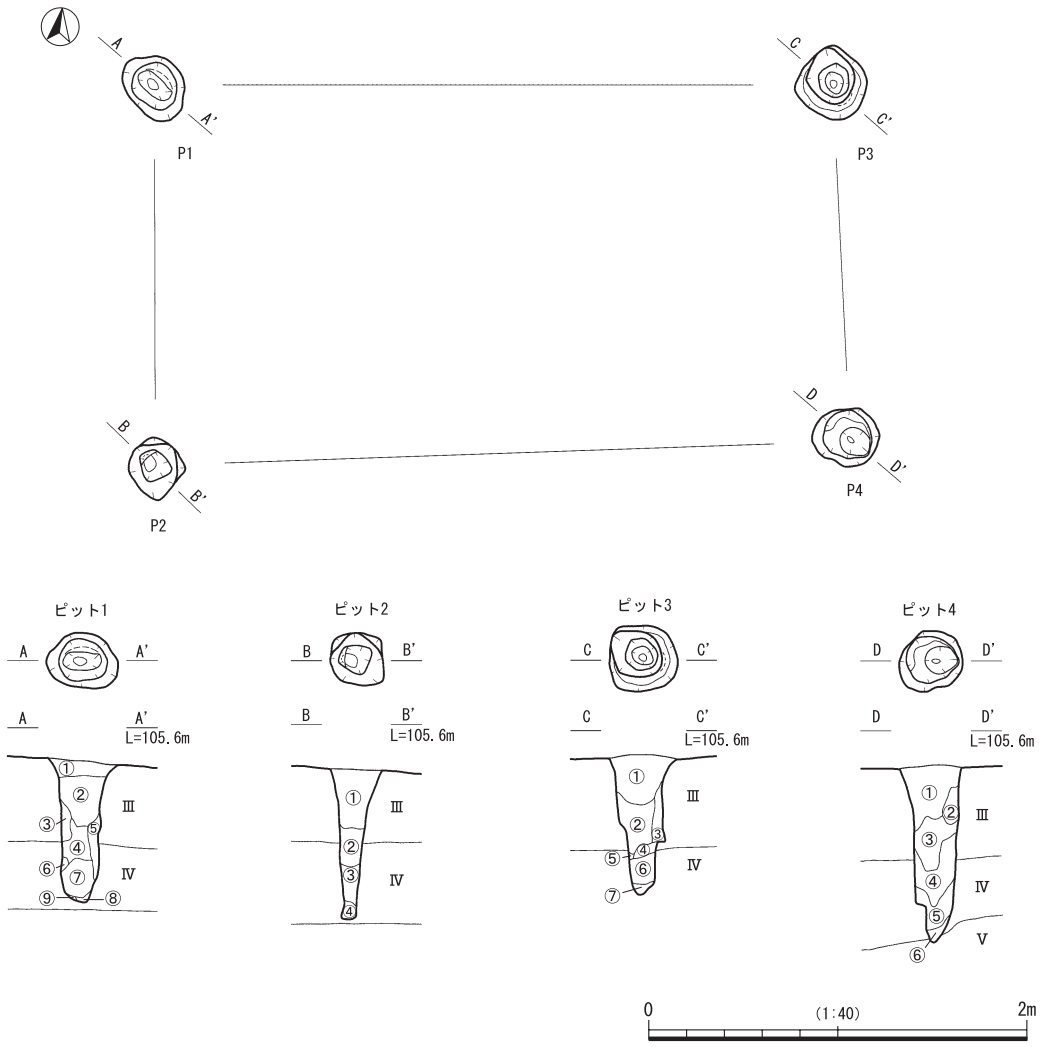
（ウ）遺　物

土　器（第159図　135～138）

遺構内遺物以外の，J～M-34・37区，Ⅱa・b層出土の遺物を４点図化した。

135は口縁部から胴部である口縁部端部は僅かに凹み，口縁部は外反する形状である。136は胴部と口縁部の境で屈曲し，口縁部は直線的に外反している。口縁内部には明瞭な稜が形成される。

137は頸部で絞まり，口縁部端部は僅かに凹み，口縁部が大きく外反する形状である。138は甕もしくは高坏の中空の脚部にあたる。



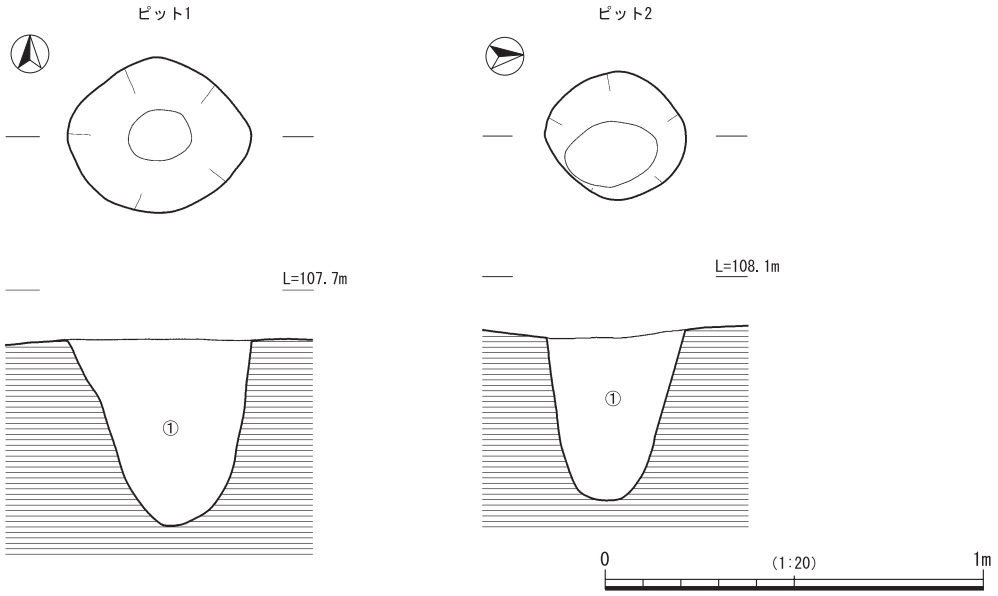
第 157 図　弥生時代　高床式建物跡

表50　弥生時代　高床式建物跡観察表

1間	梁間柱間 (cm)	梁間間 (cm)	2間	桁行柱間 (cm)	桁行間 (cm)	主軸方位	ピット番号	深さ (cm)	長径 (cm)	短径 (cm)	ピット掘り方	埋土色調	床面積 (㎡)	備　　考
P1-P2	210	165	P1-P3	360	320		1	79	28	28	楕円	黒色	740	P2 のみ検出面の埋土色が異なる
P3-P4	185	154	P2-P4	370	330		2	75	39	29	楕円	黒褐色		
							3	74	37	35	楕円	黒褐色		
							4	94	34	30	楕円	黒褐色		
	197.5	197.5		365	365	平　均		80.5	34.5	30.5				

表51　弥生時代　高床式建物跡ピット埋土観察表

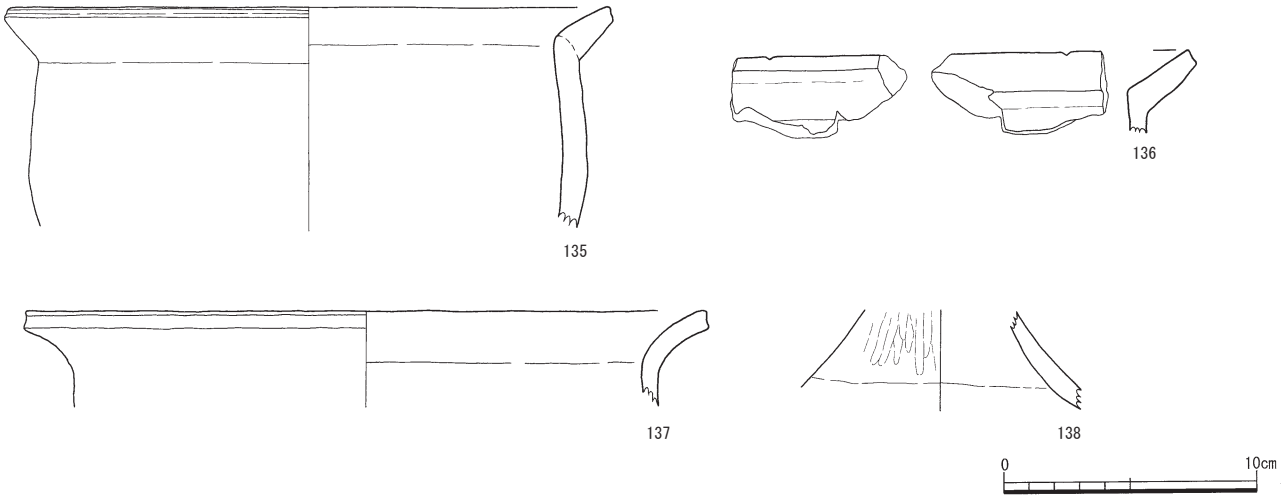
ピット番号	埋土番号	観　　察　　所　　見
ピット１	①	黒褐色土 10YR2/3。粘性・しまり弱い。御池のオレンジパミスブロックをまばらに含む。Ⅱｂ層がやや暗くなった色調
	②	黒褐色土 10YR2/2。粘性・しまり弱い。①に比べてパミスがブロック状にわずかに入る
	③	褐色土 10YR4/6。パミスと黒土の混ざった土（主は②）。触れるとぼろぼろ崩れるほど柔らかい。粘性・しまりなし
	④	黒褐色土 10YR3/2。Ⅲ層より黒色土の割合が高い。Ⅲ層と同様に触れると落ちるような柔らかい土質。粘性・しまりなし
	⑤	褐色土 10YR4/4。パミス中に黒色土（御池もしくは池田？）が混ざる。粘性弱い。しまり強い
	⑥	黄褐色土 10YR5/6。パミスにわずかに黒色土が混ざっている。粘性弱い。しまり強い
	⑦	黒色土 10YR1.7/1。パミスの粒子をわずかに含むがほぼ黒土で形成される。Ⅱｂ層に類似する。粘性やや強い。しまり強い
	⑧	黒色土 10YR1.7/1。⑦と同様だが，よりパミスの量が多い。粘性やや強い。しまり強い
	⑨	黒褐色土 10YR2/2。⑧よりさらにパミスの量が多い。御池のようなオレンジパミスの粒子がまばらに入る。粘性弱い。しまり強い
ピット２	①	黒色土 10YR1.7/1。黒色土にわずかにパミスの粒子を含む。御池か？粘性・しまりやや強い
	②	黒褐色土 10YR2/2。①よりパミスの粒子が多く，φ５～10㎜の軽石もまばらに混ざる。全体的に柔らかくフカフカしている。粘性やや強い。しまり弱い
	③	暗褐色土 10YR2/3。パミスの占める割合が高いのか全体的に色調が明るい。Φ２㎝大のパミスブロックがまばらに入る。粘性弱い・しまりやや強い
	④	黒褐色土 10YR2/2。オレンジのパミス粒（φ５㎜大）がわずかに入る黒色土。粘性やや強い。しまり強い
ピット３	①	黒褐色土 10YR2/2。オレンジのパミス粒（φ５㎜大）をわずかに含む。黒色の中に２・３割パミスが混ざる。御池由来か？粘性弱い。しまり強い
	②	黒褐色土 7.5YR2/2。Ⅰ層に比べパミスブロックが大きい（φ１～1.5cm）。そのため①よりも茶色がかっている。粘性弱い。しまり強い
	③	褐色土 10YR4/4。黄色パミスにわずかに黒色土が混ざっている。粘性なし。しまりやや強い
	④	褐色土 10YR4/4。③とほぼ同質だが，黄色パミスの割合が多い。粘性なし。しまり強い
	⑤	黒褐色土 10YR2/2。④に②が混ざったもの。②よりもパミスブロックが多く含まれる。粘性弱い・しまり強い
	⑥	黒色土 10YR1.7/1。Ⅱ層に類似。Φ１㎝ほどのパミスブロックを含む。④と不連続な堆積をしている。粘性やや強い・しまり弱い
	⑦	黒褐色土 10YR2/3。⑥よりもパミスブロックが多く含まれる。粘性・しまりやや強い
ピット４	①	黒褐色土 10YR2/2。パミスブロックを多く含む。(50%程度) オレンジの粒子が多く御池か池田の可能性あり。黒色埋土は②に類似。粘性・しまりやや強い
	②	黄褐色土 10YR5/6。ほぼパミスの層に黒色がわずかに入る御池に近いオレンジの粒子を多く含む。粘性・しまり弱い
	③	黒色土 10YR1.7/1。パミスをほとんど含まずフカフカした黒色土。柔らかいためか根が多く入り込んでいる。粘性ややあり・しまり弱い
	④	黒褐色土 10YR2/3。①に近いが含まれるパミスブロックの量が少ない（30%程度）。粘性・しまりやや強い
	⑤	暗褐色土 10YR3/3。大粒のパミスを含むφ５㎜の軽石粒がまばらに入る池田か？粘性・しまり強い
	⑥	黒褐色土 10YR2/2。⑤に類似するが黒色度が強い。粘性・しまり強い



第 158 図　弥生時代　ピット１・２

表52　弥生時代　ピット埋土観察表

		色調	粘性	しまり	砂　　質
ピット１	①	黒色 7.5YR1.7/ １	あり	やや強	２～３㎜大のⅢ層の火山灰がまばらに入る。ピット２と同質の埋土と考えられる
ピット２	①	黒色 7.5YR1.7/ １	なし	あり	１㎝程度Ⅲ層相当の土がブロック状に混ざる



第 159 図　弥生時代　土器

表53　弥生時代　土器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	分類	部　位	文　様	器面調整		胎　土					色　調	
									外　面	内　面	石英	長石	角閃石	輝石	雲母	外　面	内　面
159	135	9210	０－35	Ⅱａ	壺	中期～後期	口縁部～胴部		ナデ	ナデ	○	○		○		浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4
		9212	０－35	Ⅱａ													
		9192	０－35	Ⅱａ													
	136	30140	Ｊ－37	Ⅱａ	甕	中期～後期	口縁部		ナデ	ナデ	○	○		○	○	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/3
		一括	Ｋ－37	Ⅱａ													
	137	30231	Ｌ－34	Ⅱｂ	甕	中期～後期	口縁部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4
		30232	Ｌ－34	Ⅱｂ													
		30234	Ｍ－34	Ⅱｂ													
		30392	Ｍ－34	Ⅱｂ													
		一括	Ｌ－34	Ⅱａ													
	138	30451	Ｋ－37	Ⅱｂ	甕・高杯？	中期～後期	脚部		ナデ	ナデ	○	○		○		にぶい黄橙 10YR6/4	橙 7.5YR6/6
		30473	Ｋ－37	Ⅱｂ													

カ　近世

帯状硬化面１・２（第160図）

Ｊ・Ｋ・Ｌ－36区，Ⅱa層で検出した。１はＩｄ層が硬化していた。Ｉｄ層はP １より下位の層であることや，少量ではあるが硬化面直上から陶磁器が出土していることから，本遺構の時期を近世から近代とした。

１と平行して1.1m離れた地点で２を検出した。

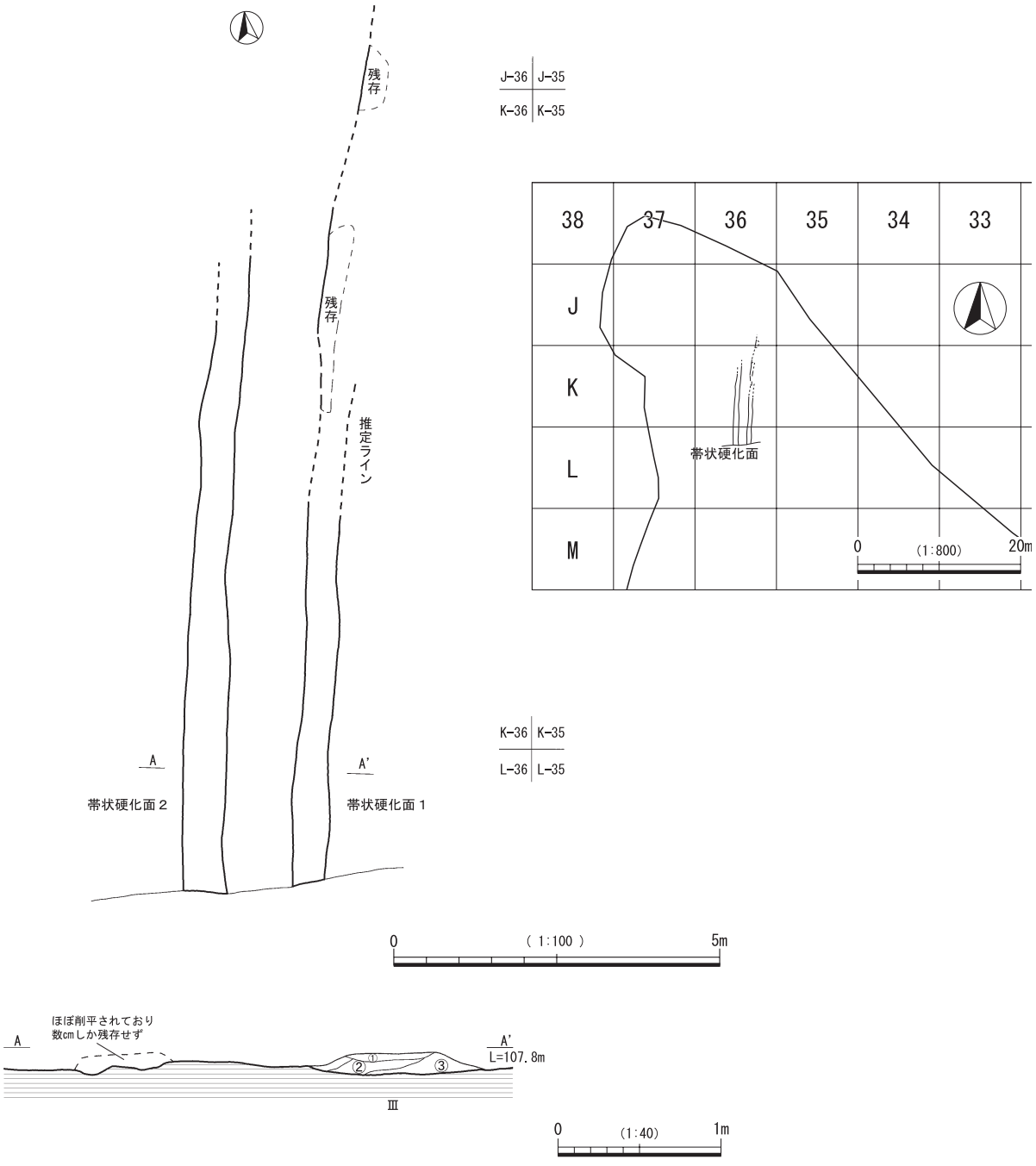
２は硬化面の厚さが数センチしか残存していなかった。硬化面をはずしたところ，１・２の断面Ａ－Ａ’において「轍状」の２列のくぼみが３mほどの区間内で検出された。

１・２は，1.1mの等間隔に平行していることや２で轍が検出されたことから，２輪もしくは４輪の乗り物が通行したことが考えれる。

埋土は１で３分層となった。①は土質がＩｄ層に相当し，５㎜～２cm大の白色軽石粒を多量に含み，かなり硬くしまっており掘削用具の刃が立たない。

色調は7.5YR7/1の黒色土である。②は，Ⅲ～Ⅴ層の火山灰が帯状のブロックで巻き上げられたものと考えられる。ややしまりが強い。色調は7.5YR1.4/4の褐色である。

③はⅡa層と同質だが①の硬化面の影響でやや硬くしまっている。この付近ではⅡa・b層の残存状況が悪いが，硬化面下部のみが残ったと考えられる。色調は7.5YR7/1の黒色土である。



第 160 図　近世　帯状硬化面位置図

第６章　調査区３　自然科学分析

下原遺跡調査区③におけるテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

志布志市に所在する下原遺跡は，非溶結の流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩いわゆるシラス(鹿児島県地質図編集委員会,1990)からなる台地上に位置する。台地上面の標高は約100mとされ，周辺は開析が進んでいる。発掘調査では，旧石器時代や縄文時代の遺物・遺構が確認されている。

本報告では，調査区を埋積する火山灰土層中に含まれる火山砕屑物，特に斑晶鉱物と火山ガラスを抽出し，その鉱物組成や形態の特徴，さらには屈折率を捉えることによって，それらの火山砕屑物の由来するテフラを同定し，各層位の形成年代に関わる資料を作成する。

１．試料

調査区の土層断面は，発掘調査所見により上位よりⅠ層からⅤ層まで分層されている。これらのうち，Ⅲ層は霧島火山の御池テフラ(Kr-M:町田・新井,2003)の降灰層準，Ⅳ層は池田湖テフラ(Ik:町田・新井,2003)の降灰層準，Ⅴ層は鬼界アカホヤテフラ(K-Ah:町田・新井,1978)の堆積層とされている。

試料は，L-34区のⅡb層から採取された1点(No.1)とI-37区のⅠ層，Ⅲ層，Ⅳ層からそれぞれ採取された３点(No.２～4)の計４点の火山灰土である。

No.1の外観は，黒色土を呈し，肉眼では特に軽石等の砕屑物は認められない。No.2は黒色土中に灰色を呈する径0.5～1.0mmほどの軽石が多く含まれ，No.3は黄褐色土中に径0.5～1.0mm程度の黄色軽石が多く含まれる。No.4も黄褐色土中に径0.5～2.0mm程度の黄色軽石が多量含まれる。

２．分析方法

試料は，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。

水洗後に乾燥させた後，篩別して，得られた粒径1/4mm1/8mmの砂分を,ポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を，偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型，中間型，軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象とする。屈折率の測定は，古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いる。

３．結果

(1)　テフラ組成分析

分析結果を表１，第１図に示す。各試料の重鉱物組成は，互いに類似しており，斜方輝石が最も多く，次いで不透明鉱物，単斜輝石の順に多い。また，No.2以外の３点の試料には微量または極めて微量の角閃石が含まれ，No.1とNo.2には極めて微量のカンラン石が含まれる。

火山ガラス比は，いずれの試料もバブル型火山ガラスと軽石型火山ガラスとが混在し，No.1とNo.2では軽石型の方がやや多く，No.3とNo.4ではバブル型の方が多い。

なお，分析処理により得られた粒径1/4mm以上の砂分について，実体顕微鏡による観察を行ったところ，Ⅰ層の試料であるNo.2には多量の軽石と微量のスコリアが確認された。軽石は，最大径約3.0mm，灰褐色を呈し，発泡は良好からやや良好である。スコリアは，最大径約1.5mm，黒色を呈し，発泡は不良である。

(2)　屈折率測定

1）火山ガラス(第２図)

No.1の火山ガラスは,n1.509-1.514のレンジを示すが,モードはn1.510-1.513と比較的広い。No.2の火山ガラスは，n1.498-1.500の低屈折率のレンジ，n1.511-1.515の中程度の屈折率のレンジ，n1.518-1.525の高屈折率のレンジとに分かれる。No.3とNo.4の火山ガラスはともに,主体はn1.508-1.514のレンジでn1.510-1.512のモードを示すが，微量のn1.498-1.499の低屈折率の火山ガラスも混在する。

2)斜方輝石(第３図)

４点の試料ともに低屈折率のレンジと高屈折率のレンジとに明瞭に分かれる。低屈折率のレンジは，下限はγ1.707であり，上限は試料によってγ1.712～1.716までの幅がある。高屈折率のレンジは，下限は試料によってγ1.725～1.728までの幅があり，上限はγ1.732または1.733である。

４．考察

Ⅱb層とされたNo.1で検出された火山ガラスは，その屈折率と層位からK-Ahに由来する火山ガラスと桜島のテ

フラに由来する火山ガラスとが混在していると考えられる。このことは，斜方輝石の低屈折率のレンジの値からも支持される。なお，火山ガラスでは捉えられていないが，斜方輝石における高屈折率のものは，遺跡の立地する基盤のシラスに由来する斜方輝石である。

Ⅰ層とされたNo.2では，火山ガラスの屈折率から少なくとも３つの異なるテフラの由来が考えられる。低屈折率の火山ガラスは，シラスに由来するものであり，中程度の火山ガラスはK-Ahおよび桜島のテフラに由来すると考えられる。高屈折率の火山ガラスは，姶良カルデラをはじめとする九州南部のカルデラの噴出物や桜島の噴出物および霧島火山などの九州南部周辺の火山噴出物の記載(町田・新井,2003)には認めることはできないことと，No.2の砂分中に多量の軽石が認められたことから，軽石質テフラの細粒部に相当する火山ガラスである可能性が高い。No.2の重鉱物組成にカンラン石が含まれることと砂分中に軽石と混じってスコリアも認められることさらにはⅠ層という層位と周辺域におけるテフラの産状を考慮すると，軽石質テフラは開聞岳を給源とするテフラである可能性が高いと考えられる。

開聞岳のテフラは多くがスコリアを主体とするが，藤野・小林(1997)による開聞岳のテフラの記載によれば，AD874年(貞観16年)噴火のテフラであるKm12aには４つのメンバーがあり，最も規模の大きなスコリア層であるKm12a4の下位に発泡のよい黄褐色軽石からなるKm12a3があるとの記述が認められる。現時点では，No.2の軽石質テフラは，このKm12a3に対比される可能性があると考えることができる。おそらく開聞岳の貞観噴火時のKm12a3のメンバー噴出時の風向き等により，本遺跡の位置がたまたま分布軸上にあったために他の場所に比べて多くの軽石が降下堆積したのかもしれない。今後も周辺域における開聞岳テフラの産状を確認し，比較検討する必要があると考えられる。なお,No.2の斜方輝石の屈折率では，No.1と同様のK-Ah由来のものとシラス由来のものとが認識されるが，開聞岳のテフラ由来と考えられる斜方輝石は識別できない。

Ⅲ層の試料であるNo.3の火山ガラスは，その屈折率により，No.1と同様にK-Ahに由来する火山ガラスが多くを占めると考えられる。微量の低屈折率の火山ガラスはシラス由来のものである。発掘調査所見では，Ⅲ層はKr-Mの降灰層準とされているが，火山ガラスも斜方輝石もその屈折率のレンジはK-Ahのそれらと重なることから，今回の分析ではKr-Mの識別をすることは難しい。ただし，No.3の重鉱物組成において角閃石が微量ながらも含まれることは，Kr-Mの降灰を示唆している可能性があると考えられる。また，シラス由来と考えられる高屈折率の斜方輝石の中にKr-M由来の斜方輝石が混在している可能性はある。

Ⅳ層のNo.4の火山ガラスもその屈折率からは，No.3と同様にK-Ahに由来する火山ガラスを主体とし，微量のシラス由来の火山ガラスが混在する状況が窺える。発掘調査所見ではⅣ層はIkの降灰層準とされているが，町田・新井(2003)による記載では，Ikの火山ガラスの屈折率はn1.502付近，斜方輝石の屈折率はγ1.712-1.716とされており，それに相当する火山ガラスおよび斜方輝石は今回のNo.4には認めることができなかった。

引用文献

藤野直樹・小林哲夫,1997,開聞岳火山の噴火史.火山,42,195-211.

古澤　明,1995,火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.

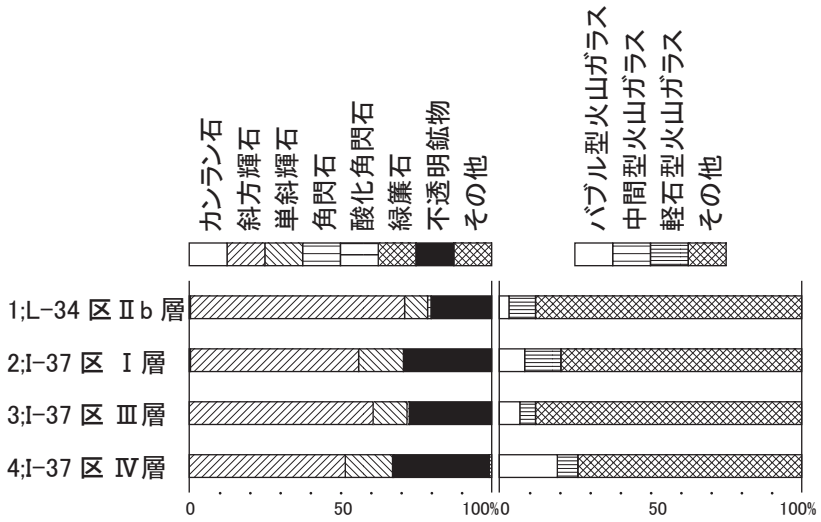
鹿児島県地質図編集委員会,1990,鹿児島県地質図　縮尺10万分の1.鹿児島県.

町田　洋・新井房夫,1978,南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰.第四紀研究,17,143-163.

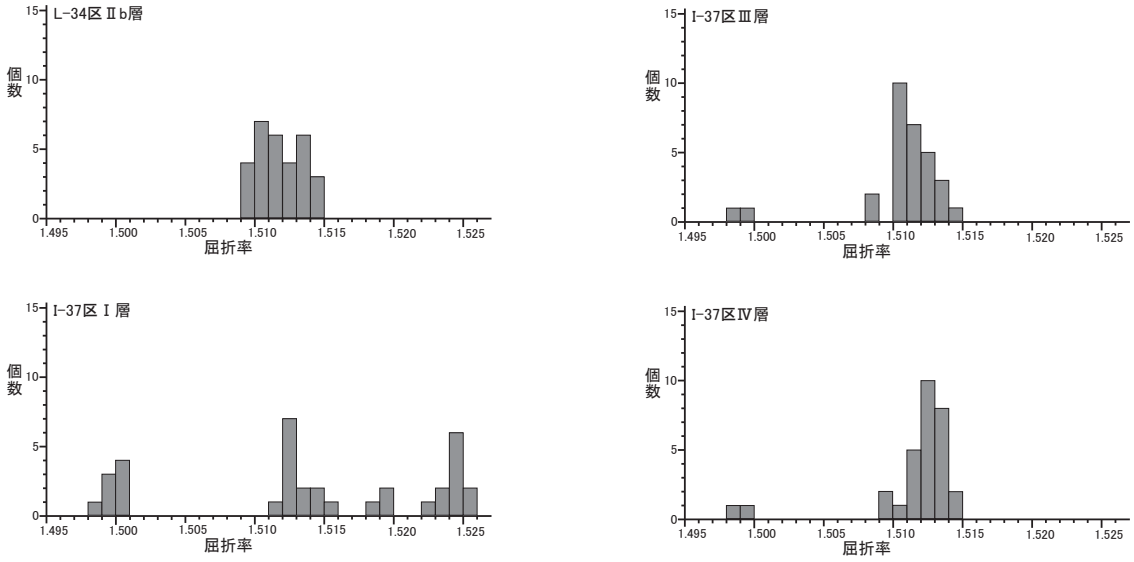
町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

表 1.　テフラ組成分析結果

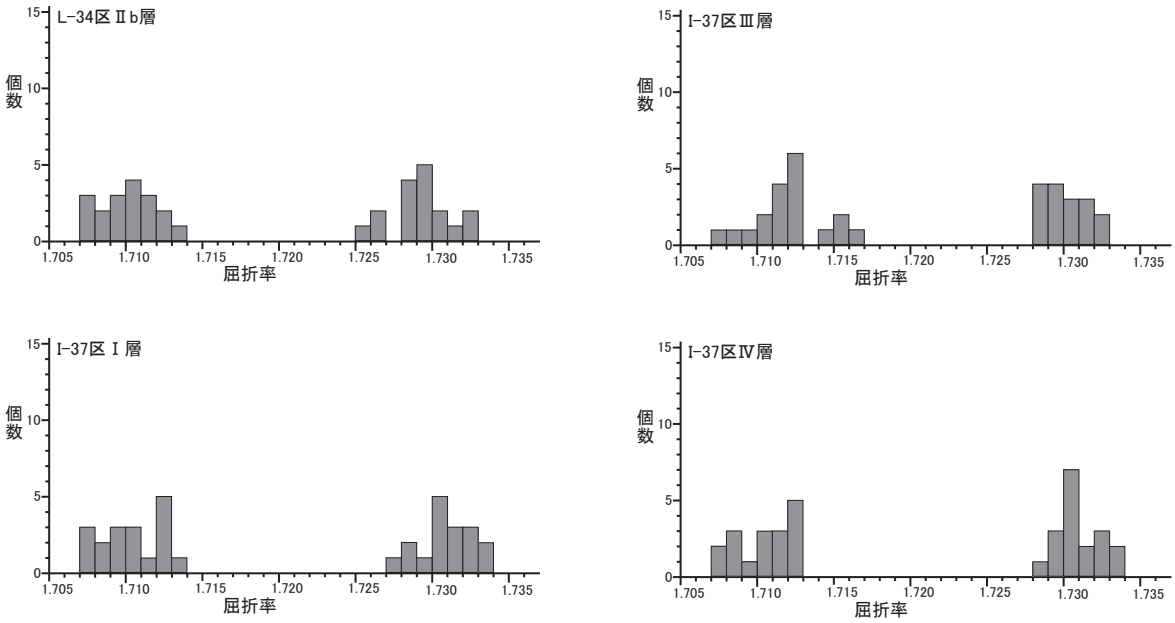
試料番号	地区名	層位	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	L-34 区	Ⅱｂ層	1	177	19	3	0	0	50	0	250	8	0	22	220	250
2	I-37 区	Ⅰ層	1	139	37	0	0	0	73	0	250	21	0	30	199	250
3	I-37 区	Ⅲ層	0	152	28	2	0	0	68	0	250	17	0	13	220	250
4	I-37 区	Ⅳ層	0	129	39	1	0	0	79	2	250	48	0	17	185	250



第１図　重鉱物組成および火山ガラス比

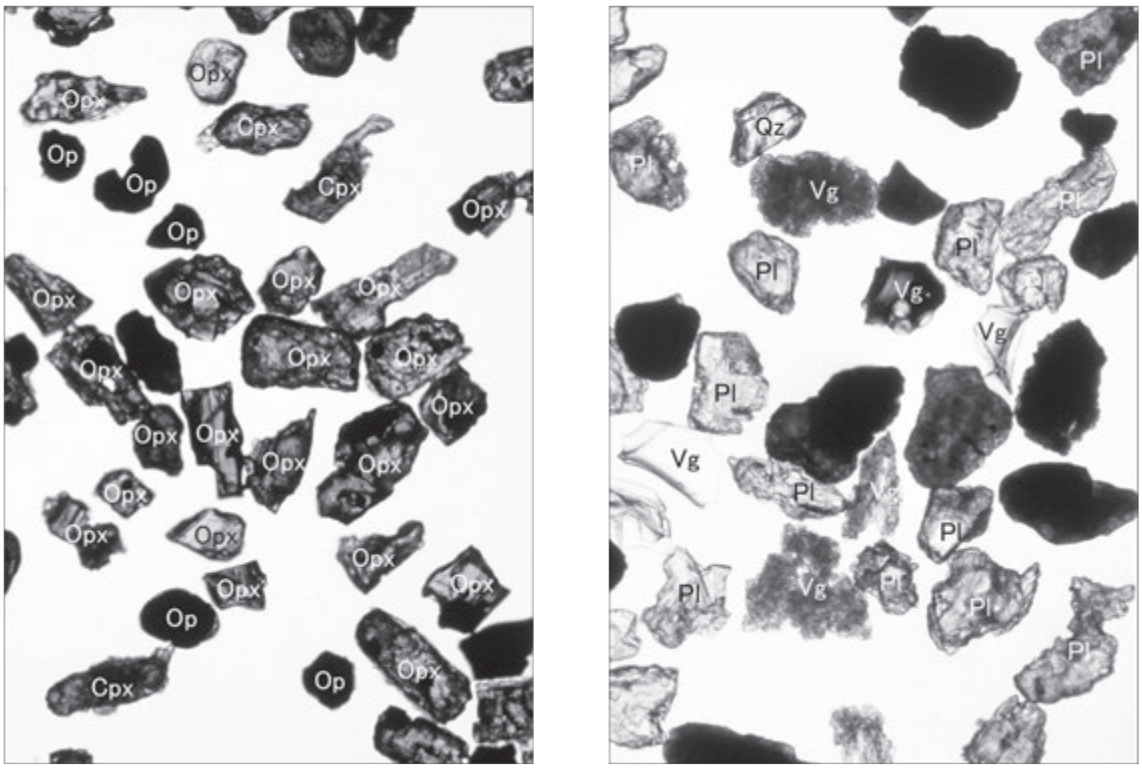


第２図　火山ガラス屈折率測定結果



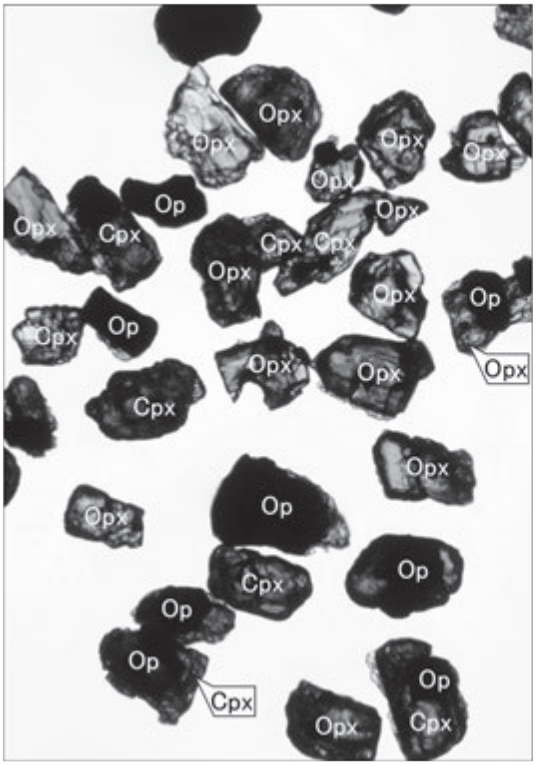
第３図　斜方輝石の屈折率測定結果

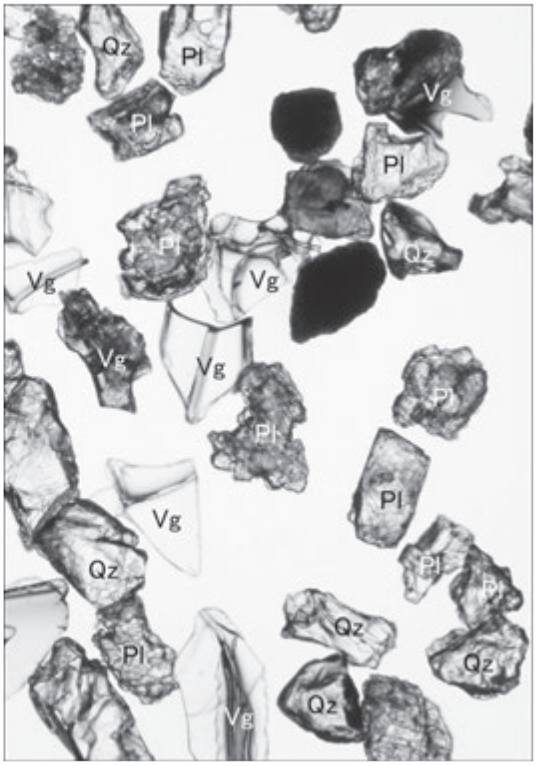
図版1　重鉱物･火山ガラス



１．重鉱物（L-34 区Ⅱ b 層；１）　　２．火山ガラス（L-34 区Ⅱ b 層；１）

第４図　重鉱物・火山ガラス (1)

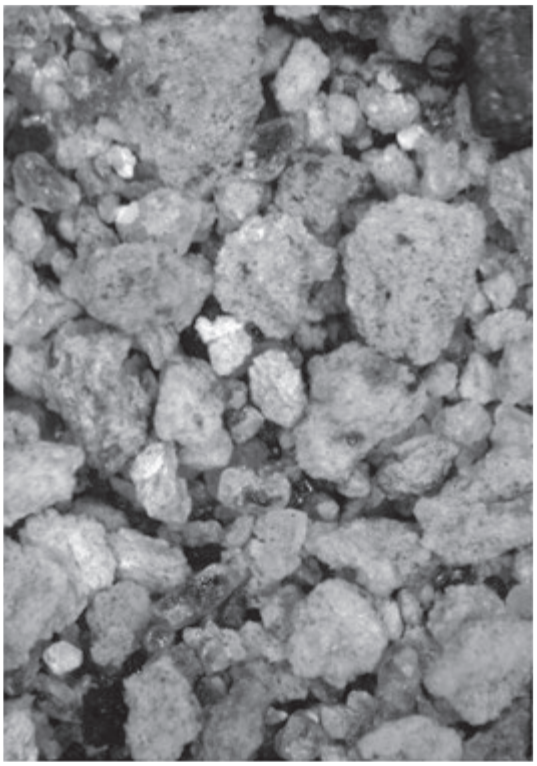




３．重鉱物（Ｉ -37 区Ⅳ層；４）　　４．火山ガラス（Ｉ -37 区Ⅳ層；４）

Opx：斜方輝石．Cpx：単斜輝石．Op：不透明鉱物．Vg 火山ガラス．Qz：石英．Pl：斜長石．

第５図　重鉱物・火山ガラス (2)



１．軽石（Ｉ -37 区Ｉ層；２）

第６図　テフラ

第７章　総　　括

総　　括

「下原遺跡」は，谷に区切られた台地状に所在する３つの調査区からなる遺跡の名称であるが，立地の観点から，各調査区は独立した遺跡として調査を行った。

本報告書もこれに準じて編集されているので，本稿もこのことを踏まえて各調査区をひとつの遺跡と捉えて記述していく。なお，名称は報告書の記載のとおり「調査区」を用いる。

１　遺跡概観

⑴　調査区１

調査区中最大の面積である。北西から南東に敷設されている県道に沿った縦長の調査区である。

文化層は，後期旧石器時代末から弥生時代，近世・近代を含んでいる。旧石器時代の遺構・遺物は全調査区中唯一調査区１のみの検出・出土である。

旧石器時代では，遺物の使用石材から，素材の流通，縄文時代早期では，各時期の土器様相が伺える。

近世・近代の調査では，県道に並行する様相の大型道路状遺構を含む道跡，長短様々な硬化面，溝状遺構が検出された。

⑵　調査区２

本遺跡の北端に位置する。面積は調査区３と同等であるが，遺物の分量は全調査区中最多である。

特に縄文時代早期の遺物が多く，近年，東九州自動車道関連の遺跡調査がすすむ大隅半島で出土する「倉園Ｂ式」とされる土器が中心を成している。

また，「花弁型住居」と称される住居跡など一定期間の生活様相が考えられる遺構が検出されていることも特徴のひとつである。

⑶　調査区３

各調査区の中では最も狭小な台地の付け根に位置する。総遺物量は少量であるが，志布志市周辺で出土例が報告されている縄文時代前期末に相当する「野久尾式」とされる土器が少量ながら出土していることが，他の調査区とは異なる。

２　遺　構

⑴　調査区１

全調査区中，唯一旧石器時代の遺構として礫群３基を検出している。

縄文時代早期で竪穴住居跡３軒と集石17基，土坑９基が近接して検出されている。Ⅳ類土器（石坂式）が共伴しているので，当該時期には一定期間の生活様相がみられたと考えられる。

弥生時代は掘立柱建物跡を２軒検出した。遺物は弥生時代早期～中期のものであるが，全体的に少量であることと，遺構検出層のⅡ・Ⅲ層が色調による識別が困難なため中心をなす時期の確定には至らなかった。

⑵　調査区２

縄文時代早期が遺物量は最多であるが，住居跡は検出されなかった。集石17基と膨大な被熱破砕礫の検出が報告されている。これらのことから縄文時代早期の居住区は，後述の時期・時代とは異なるエリアになると考えられる。

縄文時代後期は竪穴住居跡２軒，集石１基，溝状遺構７条，硬化面等，弥生時代でも竪穴住居跡３軒を検出しており，当該時期に一定の生活が想定される。溝状遺構埋土から遺物の出土はみられなかったが，周辺の同じレベルで中岳Ⅱ式が出土していることから同時期のものと考えられる。

弥生時代は，共伴する遺物から中期が主体と考えられる。

⑶　調査区３

縄文時代早期の遺物量が最多であるが住居跡がなく，集石３基，ピット９基，土坑１基のみの検出である。これらの遺構と同じレベルで石坂式土器が出土しているので，同時期のものと考えられる。これらのことから，一定期間のキャンプサイトとも考えられる。これは縄文時代早期以外の時期にも共通した様相である。

縄文時代後期は，溝状遺構と同じ検出レベルで中岳Ⅱ式が出土しており，同時期のものと考えられる。

一転して弥生時代になると，竪穴住居跡が２軒，高床式建物跡１軒が検出され，生活の様相が確認された。

形状は正方形，多角形である。竪穴状住居跡は遺構内にピットや土坑，焼土，遺物を伴っている。共伴遺物は弥生時代中期末～後期の範疇に入るもので甕・壺を主体とし，石器は，磨製石鏃，敲石，磨石，砥石である。生活様相が想定できる遺構・遺物である。

３　遺　物

⑴　土　器

調査区１～３に共通していることは，縄文時代早期の遺物が豊富で各調査区の中心を成していることである。

特に早期前半の土器群が多く，この構成を俯瞰することで各調査区の時期差が確認できる良好な資料となっている。

縄文時代早期の文化層は，調査区１・２は前平式，調査区３は，吉田式の段階から確認できる。各分類の遺物量は，調査区１では石坂式，調査区２・３において倉園B式の出土量が最も多い。特に，調査区２においてはこの傾向が顕著である。

このことから下原遺跡の縄文時代早期における倉園B式の時期は調査区２，石坂式の時期は調査区1が中心と

なると考えられる。

遺物の編年では，調査区２で倉園B式をはさんで，前平式から石坂式に至る胴部の条痕文の施文状況が，横位から斜め，綾杉状へと移行する様相をうかがうことができる。

縄文時代前期～中期の土器は，調査区１・３で曽畑式，凹線文が施文されるもの，野久尾式等が数点出土している。

また，縄文時代後期は本遺跡からも比較的近い曽於市末吉町中岳洞穴を標識遺跡とする中岳Ⅱ式の口縁端部や胴部最大径部に沈線を施すタイプが多く出土していることが，全調査区に共通している。

縄文時代晩期は，各調査区とも遺物量は少量だが入佐式，黒川式，突帯文相当の土器が出土している。調査区１からは，外面に連点文が見られ，孔列文土器の可能性がある土器が１点出土している。

弥生時代は，早期～中期の遺物が調査区１～３に共通して出土している。調査区２ではこの中期の山ノ口式土器の甕，壺が住居跡遺構に共伴しており，遺構の年代判断に有効な資料となった。

⑵　石　器

旧石器時代は調査区１のみから細石刃文化の遺物が検出しているが，Ｘ層から出土している硬質頁岩の石核は，剥出される剥片の大きさから，小型のナイフ型石器の石核の可能性もある。細石刃文化期では，桑木津留産の黒曜石の細石核と同じ透明の石材の細石刃が散布しており，また同系統の黒曜石と同じ不透明の石材の細石刃が散布している。これ以外は残核がないが，調整剥片があり，他の細石核の存在も予測できる。細石刃には使用されたものが多くあることから，この場で差し替えられたものと考えられる。細石刃を補給した。細石核からは固定具の可能性を示すものがある。

いずれにしても，キャンプサイト的な遺跡であったことが伺われる。石斧が伴っており，伐採地であった可能性もある。限られた範囲内での土地利用であった。

縄文時代早期になると，伐採斧，加工斧が卓越する。伐採斧は破損品も多く，木材の加工等の場所でもあったであろう。

調査区２では，磨石や敲石，石皿の破損品で，被熱したものや，それで損じたものが多く見られた。集石に石皿の破損品が混入し，集石の構成礫として使用されていることは，ある程度長期間のベースキャンプ地であったとも考えられる。集石が多く形成されることからも伺われる。

縄文時代後晩期になると，打製石斧が多くなり，土掘具であることから，開地した環境が考えられる。破損品が多いことからも使用され廃棄されたものと判断できる。打製石斧であるが，調査区１，調査区２ではおもに横剥ぎの剥片が素材として使われているが，調査区３では縦剥ぎの剥片を素材として使用している。谷を隔てて，時期差か打製石斧を使用した集団差の可能性がある。

石鏃は，土器の割に少ない印象である。調査区２の基部の抉りが丸く深く，脚部先端が幅広く，方形を呈する場合もある石鏃は，押型文土器～塞ノ神式土器に伴うものと考えられる。後晩期の石鏃には，一般に抉りのない石鏃も数は増すが，本遺跡の場合は整形段階で廃棄の可能性が高いと考えた。

磨製石鏃は，縄文時代早期のものと，縄文時代後晩期と弥生時代で出土している。本県では，形状がよく似ているが，縄文時代では草創期～早期と後晩期に磨製石鏃が出土し，弥生時代にも出土する。縄文時代のものは長身細形と短身広形がある。また弥生時代には金属器写しで磨製石鏃が作られたものとされ，やや大ぶりなものが多いのが特徴である。さらに述べると，縄文時代後晩期のものは稜があるものが多い。

調査区１では縄文時代後晩期の包含層から出土し，調査区２では縄文時代早期の包含層からと，弥生時代の住居跡から出土し，調査区３では，縄文時代後晩期の包含層から長身の一部磨製石鏃が出土し，弥生時代の住居跡から出土している。

それぞれの時代で存在するものであるので，混入と考える必要はない。

弥生時代の磨製石鏃は，寸の短い三角形鏃で，初期鉄鏃の写しの可能性がある。

縄文時代早期の打ち欠き石錘は，散見されるが，有溝のものは珍しい。

採集品であるが，石剣は注意を要する。大隅半島の石剣，石刀は，東九州自動車道建設に伴う発掘調査で類例が増加しており，下原遺跡の石剣は，永吉天神段遺跡から出土した縄文時代前期と考えられる石剣が形状としては類似している。この形状のものは全国的には後期にもみられる

量的には少ない石器ではあっても，遺跡の性格や，当時の住環境の有益な情報となり，全体の位置づけの中で，それぞれの時代の文化史を語ってくれることとなる。

写　真　図　版













①礫群１　②礫群２　③土層断面
④竪穴住居跡１検出状況　⑤埋土断面　⑥完掘状況

図版2













①竪穴住居跡２検出状況　②埋土断面　③完掘状況
④竪穴住居跡３検出状況　⑤埋土断面　⑥完掘状況



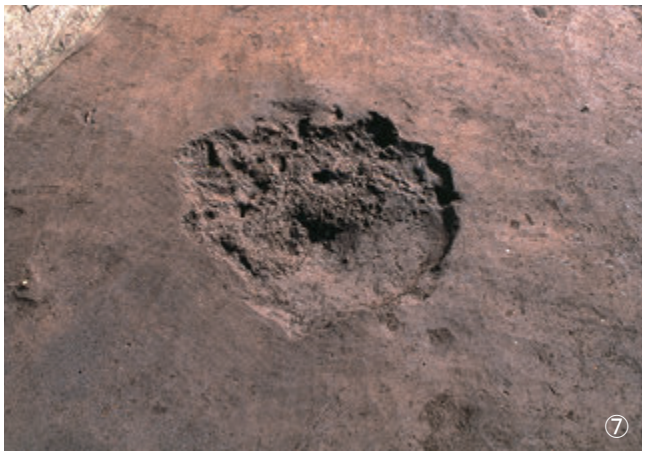












①②埋設土器検出状況　③集石１　④集石２
⑤集石３　⑥集石４　⑦集石４完掘状況

図版4











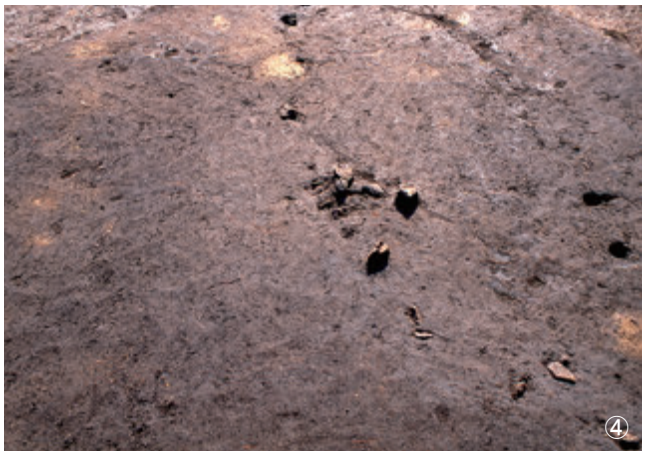


①集石５　②集石６　③集石６完掘状況
④集石７　⑤集石７断面　⑥集石７完掘状況

















①集石８　②集石８完掘状況　③集石９　④集石 10
⑤集石11　⑥集石 11 完掘状況　⑦集石 12　⑧集石 12 完掘状況

図版6











①集石 13　②集石 15　③集石 14
④集石 16　⑤集石 17

















①土坑１　②土坑１完掘状況　③土坑５　④土坑５埋土断面
⑤土坑５内出土土器　⑥土坑５完掘状況　⑦掘立柱建物跡１完掘状況
⑧掘立柱建物跡２完掘状況

図版8











①道跡断面検出作業　②～④道跡断面はぎ取り作業
⑤大型道路状遺構・道路状遺構


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23


33
32
25
29
28
31
26
27
30
24

旧石器時代　石器

図版10


119


146


42


84


38

縄文時代早期　Ⅳ・Ⅴ類土器
（左下：Ⅳ－１類，左上・右上：Ⅳ－３類，右中・右下：Ⅴ類）



縄文時代早期　Ⅰ類土器

図版12



縄文時代早期　Ⅰ～Ⅲ類土器



縄文時代早期　Ⅳ－１～Ⅳ－３類土器

図版14



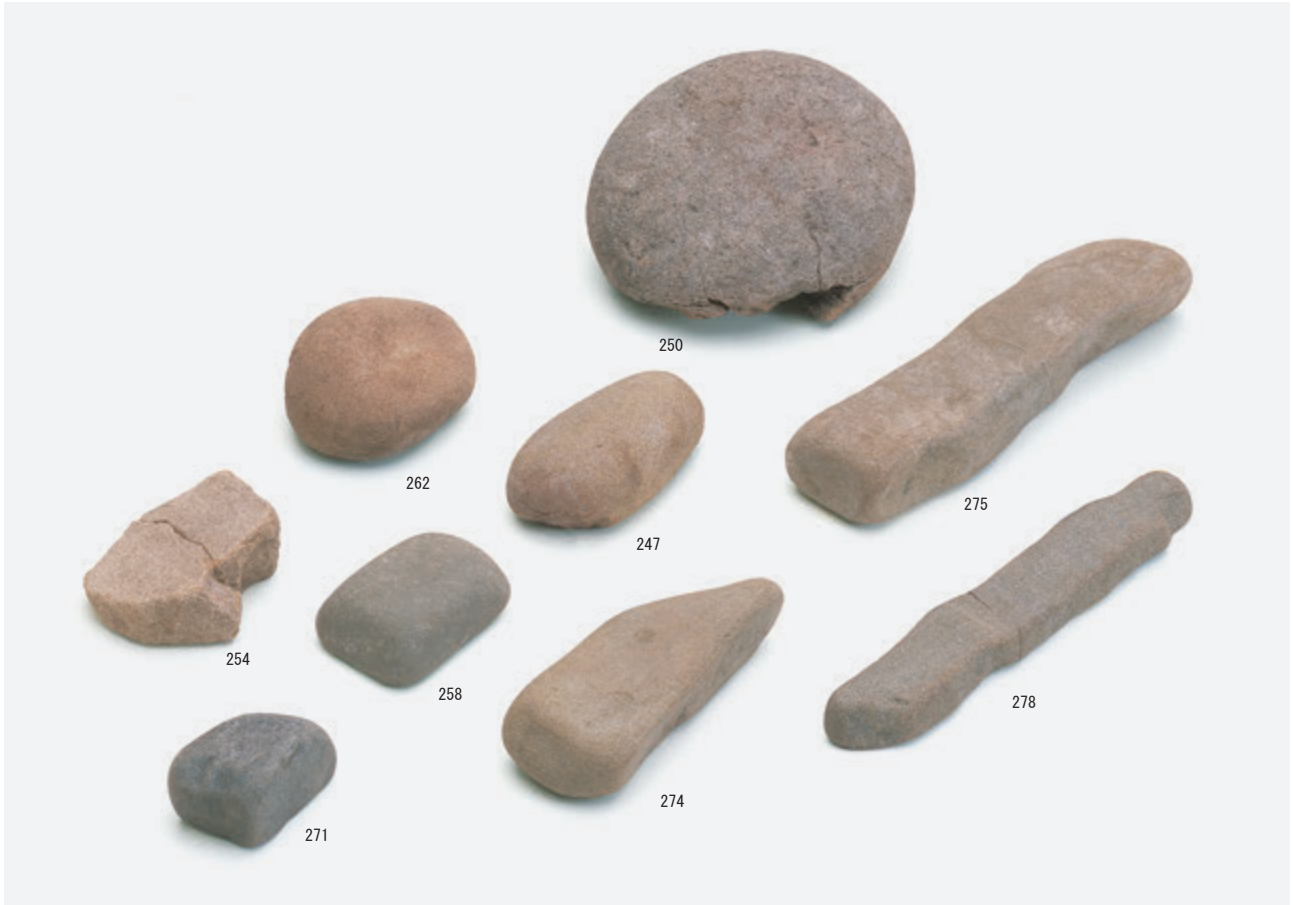
縄文時代早期　Ⅳ－４・５類土器



縄文時代早期　Ⅴ類土器，その他の土器

図版16





縄文時代早期　石器


281


282


283


284


285

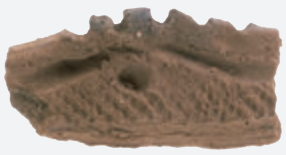

286


287


288

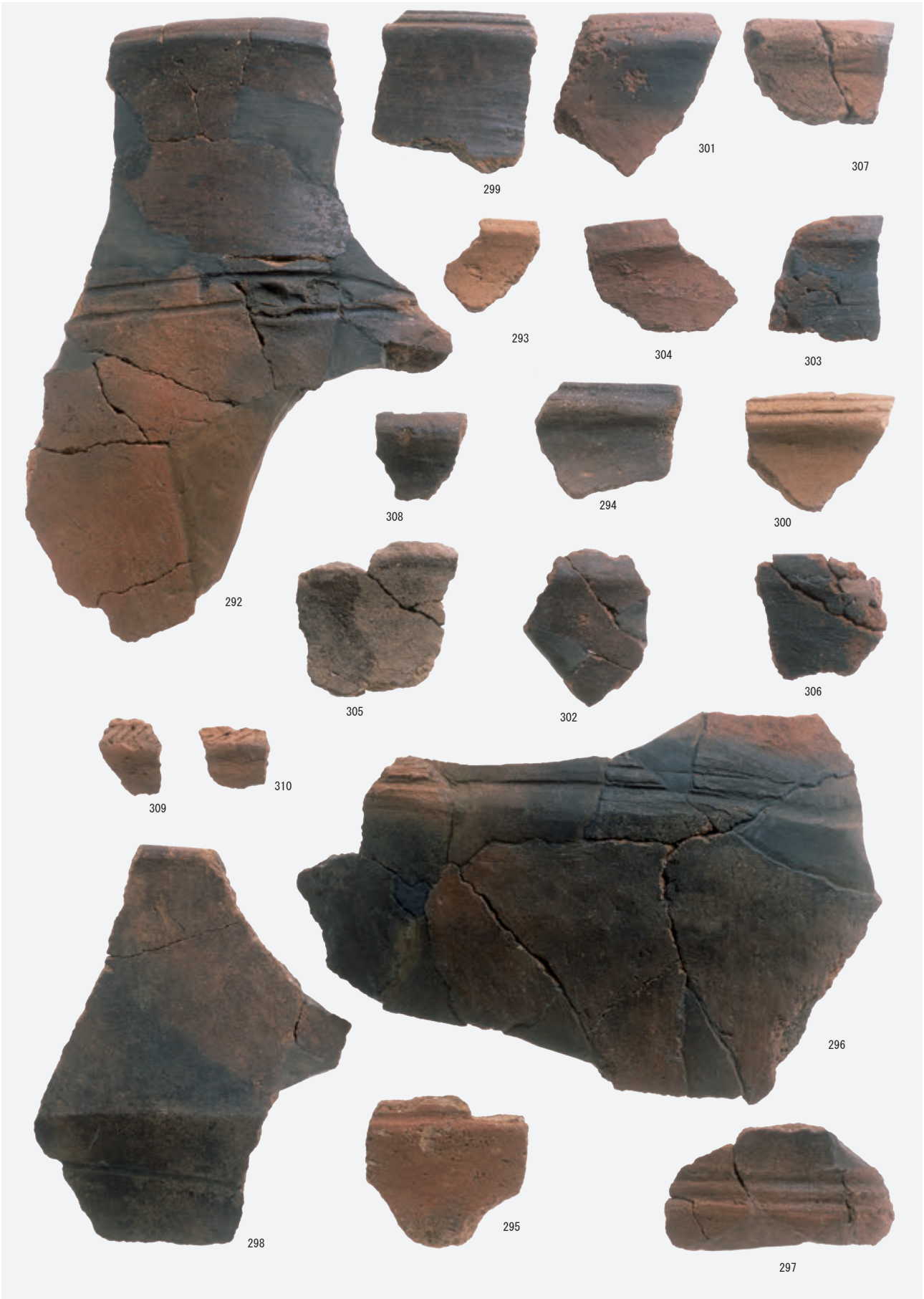

289


291


290

上：縄文時代前期　土器
左：縄文時代中期　土器　右：縄文時代後期　土器

図版18



縄文時代後期　土器

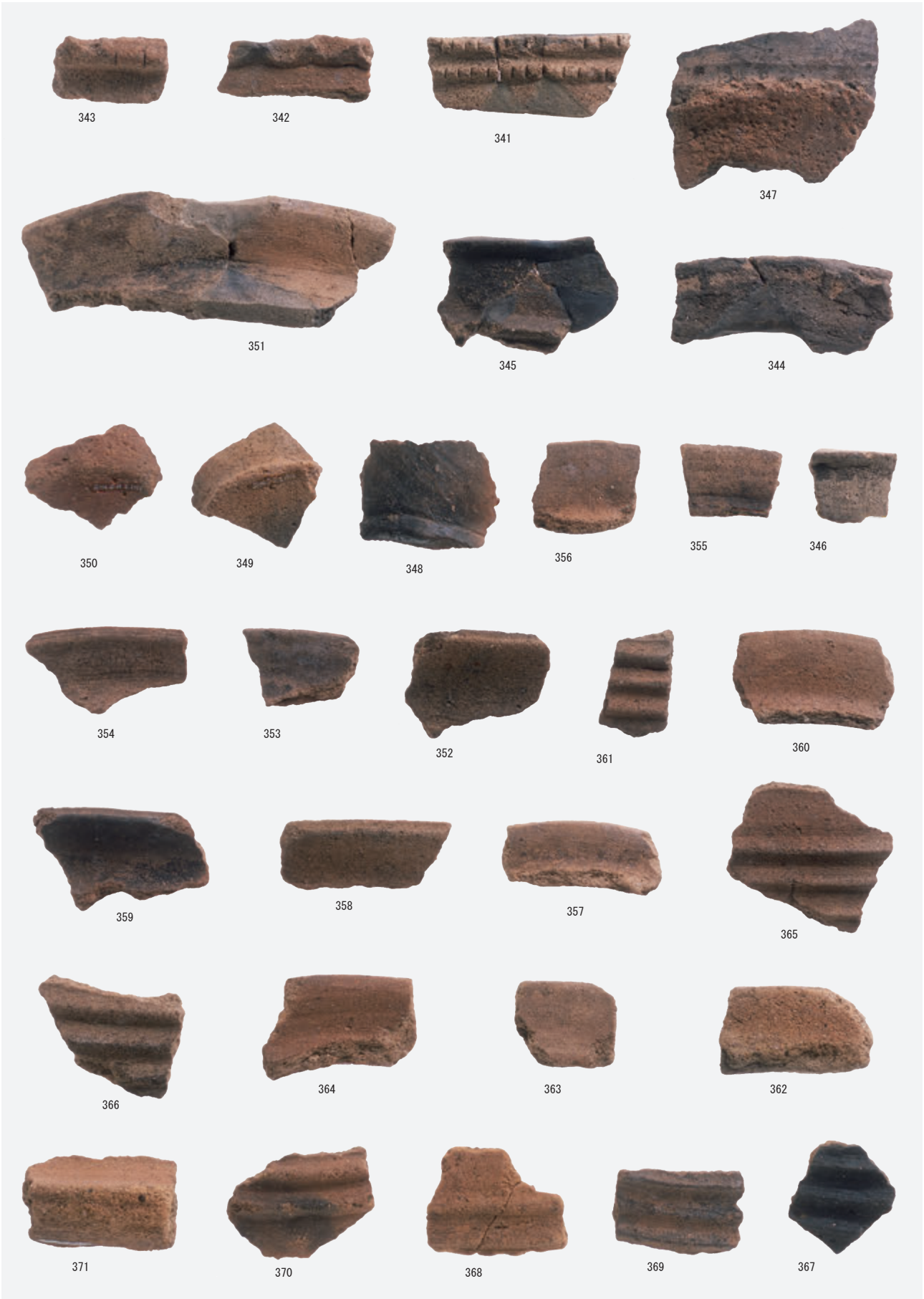


縄文時代晩期　土器

図版20



縄文時代後・晩期　石器


343
342
341
347
351
345
344
350
349
348
356
355
346
354
353
352
361
360
359
358
357
365
366
364
363
362
371
370
368
369
367

弥生時代　土器

図版22（調査区2）

















①集石１　②集石２　③集石３　④集石４　⑤集石５　⑥集石６　⑦集石７　⑧集石８



①集石９　②集石 10　③集石 11　④集石 13　⑤集石 12

図版24









①集石 15　②集石 16　③集石 17　④集石 14















①～③土器集中検出状況　④竪穴住居跡１検出状況
⑤⑥竪穴住居跡１内炉跡　⑦竪穴住居跡１完掘状況

図版26



①⑤竪穴住居跡２検出，完掘状況
②③④竪穴住居跡２ピット













①集石１　②土器埋設遺構　③土坑検出状況　④土坑完掘状況
⑤溝状遺構３～５検出状況　⑥溝状遺構３～５完掘状況

図版28









①竪穴住居跡１，２検出状況　②竪穴住居跡１検出状況
③竪穴住居跡１埋土断面　④竪穴住居跡１完掘状況



縄文時代早期　Ⅰ・Ⅱ－１類土器

図版30



縄文時代早期　Ⅱ－２・３類土器

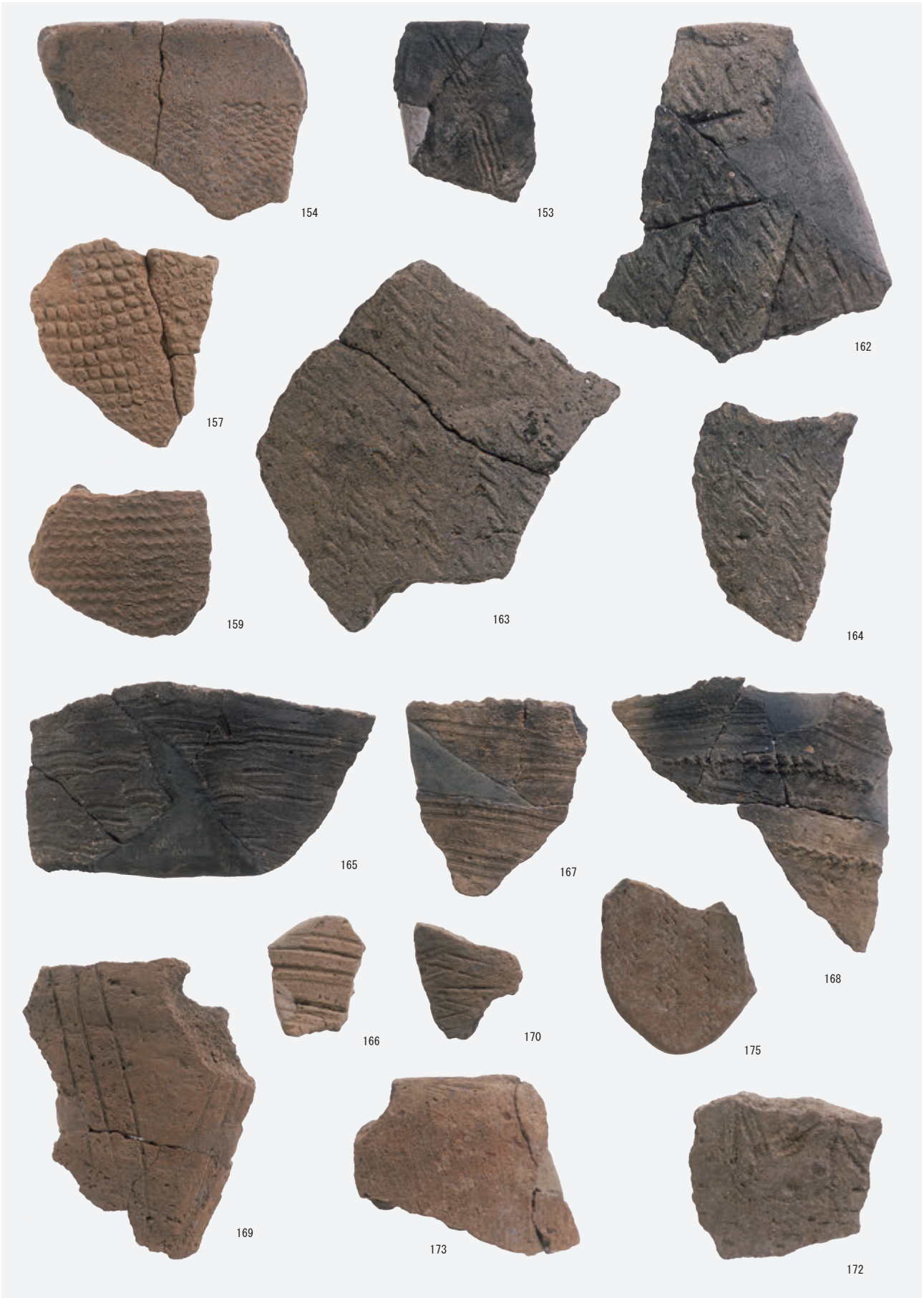


縄文時代早期　Ⅲ－４～９類土器

図版32



縄文時代早期　Ⅲ－11，Ⅳ類土器



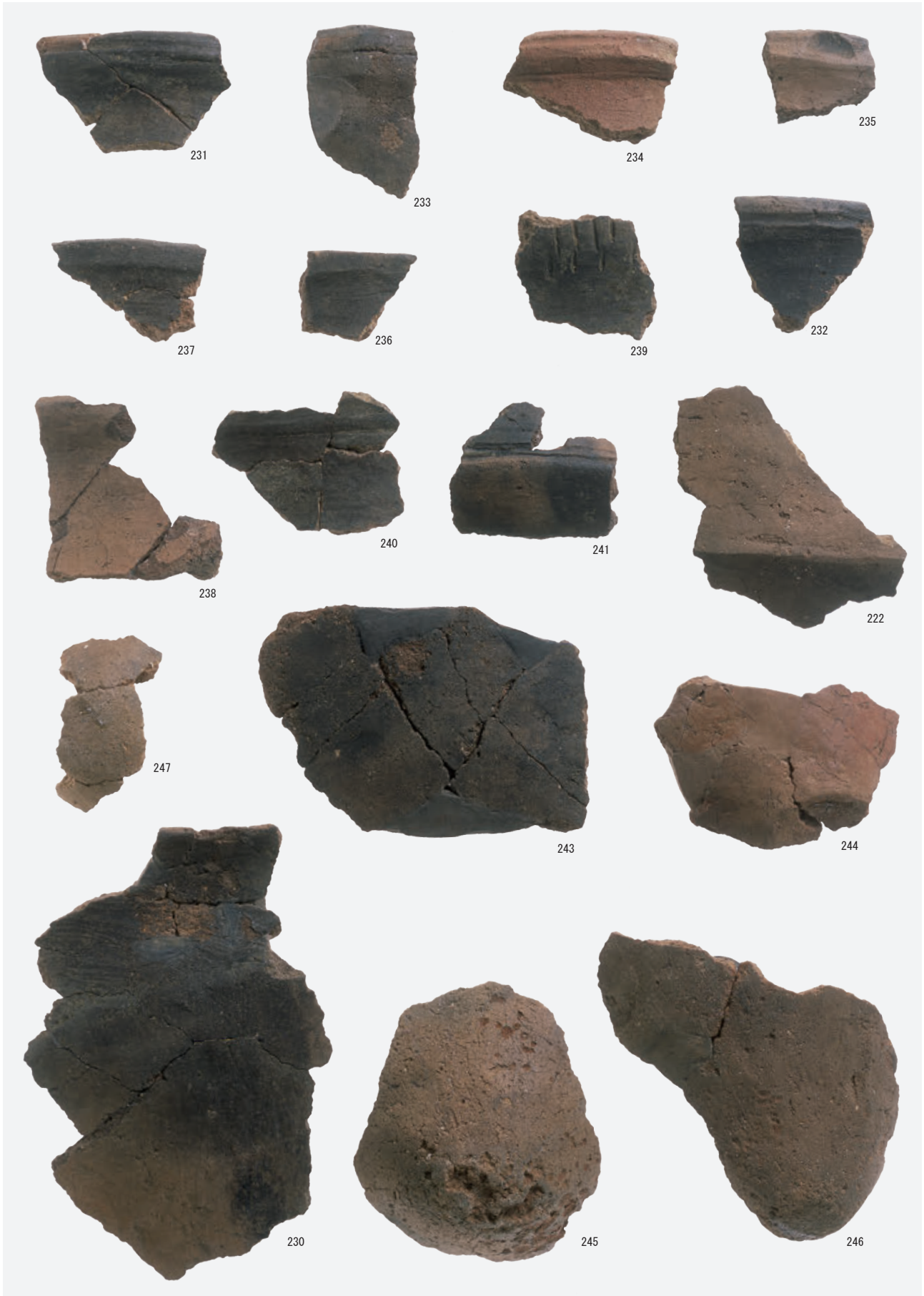
縄文時代早期　Ⅴ～Ⅶ類，その他の土器

図版34





縄文時代早期　石器



縄文時代後期　竪穴住居跡１　遺構内遺物

図版36



縄文時代後期　竪穴住居跡２　遺構内遺物









上：縄文時代後期　石器
下：縄文時代後期　遺構内遺物石器（左：竪穴住居跡１，中：竪穴住居跡２，右：土坑１）

図版38



縄文時代後期　土器


356
358
360
361
357
364
363
362
359
367
365
366
368
369
370
371
372
373
374
375
376

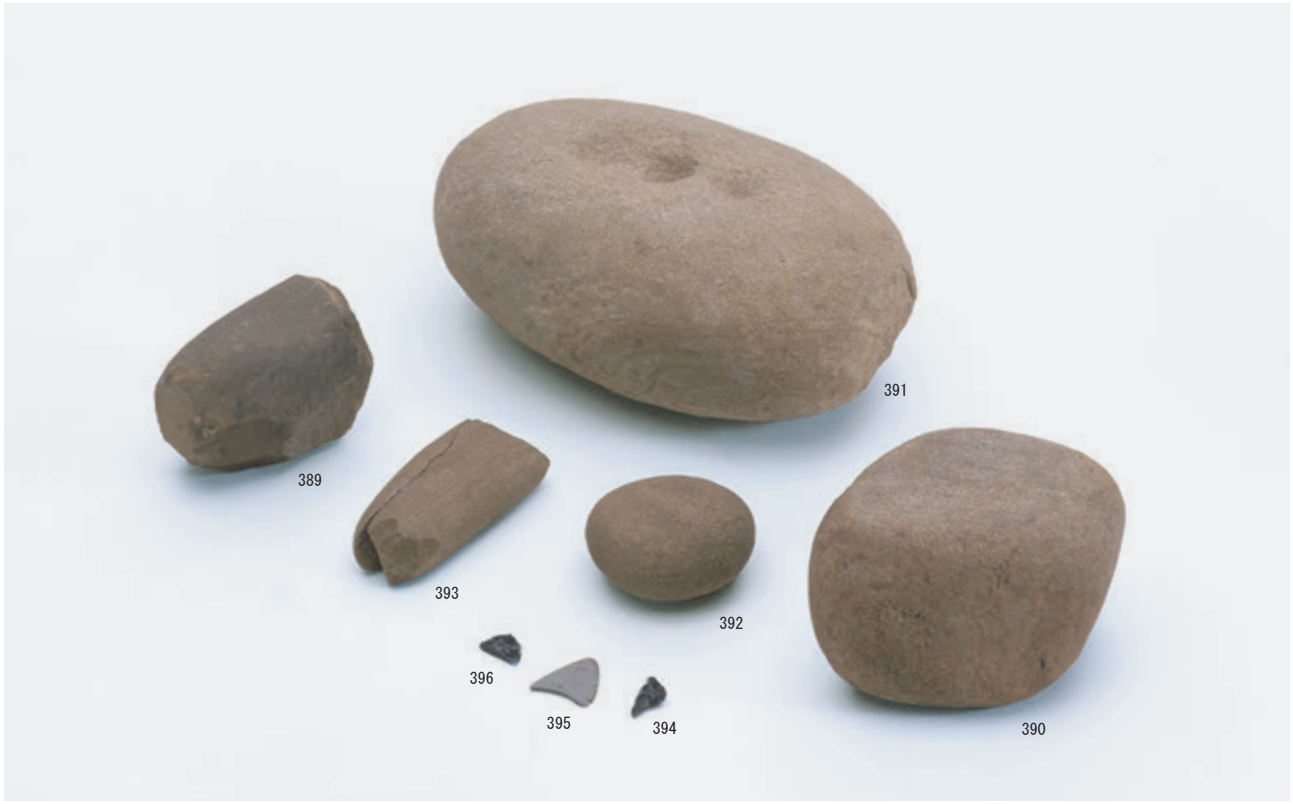
縄文時代晩期　土器

図版40



弥生時代遺構内遺物　土器







弥生時代遺構内遺物　石器

図版42





弥生時代　土器，表採石器











①集石１　②集石３　③集石２　④溝状遺構１検出状況　⑤溝状遺構１完掘状況

図版44













①Ⅲ層遺物出土状況　②土器集中遺構　③土器集中遺構完掘状況
④竪穴住居跡１埋土断面　⑤竪穴住居跡１検出状況　⑥竪穴住居跡１完掘状況











①竪穴住居跡２検出状況　②竪穴住居跡２及び硬化面切り合い
③竪穴住居跡２埋土断面　④竪穴住居跡２貼床検出状況　⑤竪穴住居跡２完掘状況

図版46





①高床式建物完掘状況　②帯状硬化面検出状況



縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器（1）

図版48



縄文時代早期　Ⅰ～Ⅵ類土器 (2)





上：縄文時代早期　石器
下：縄文時代前期末～中期末　土器

図版50





縄文時代後期　遺構内遺物



縄文時代後期　土器

図版52



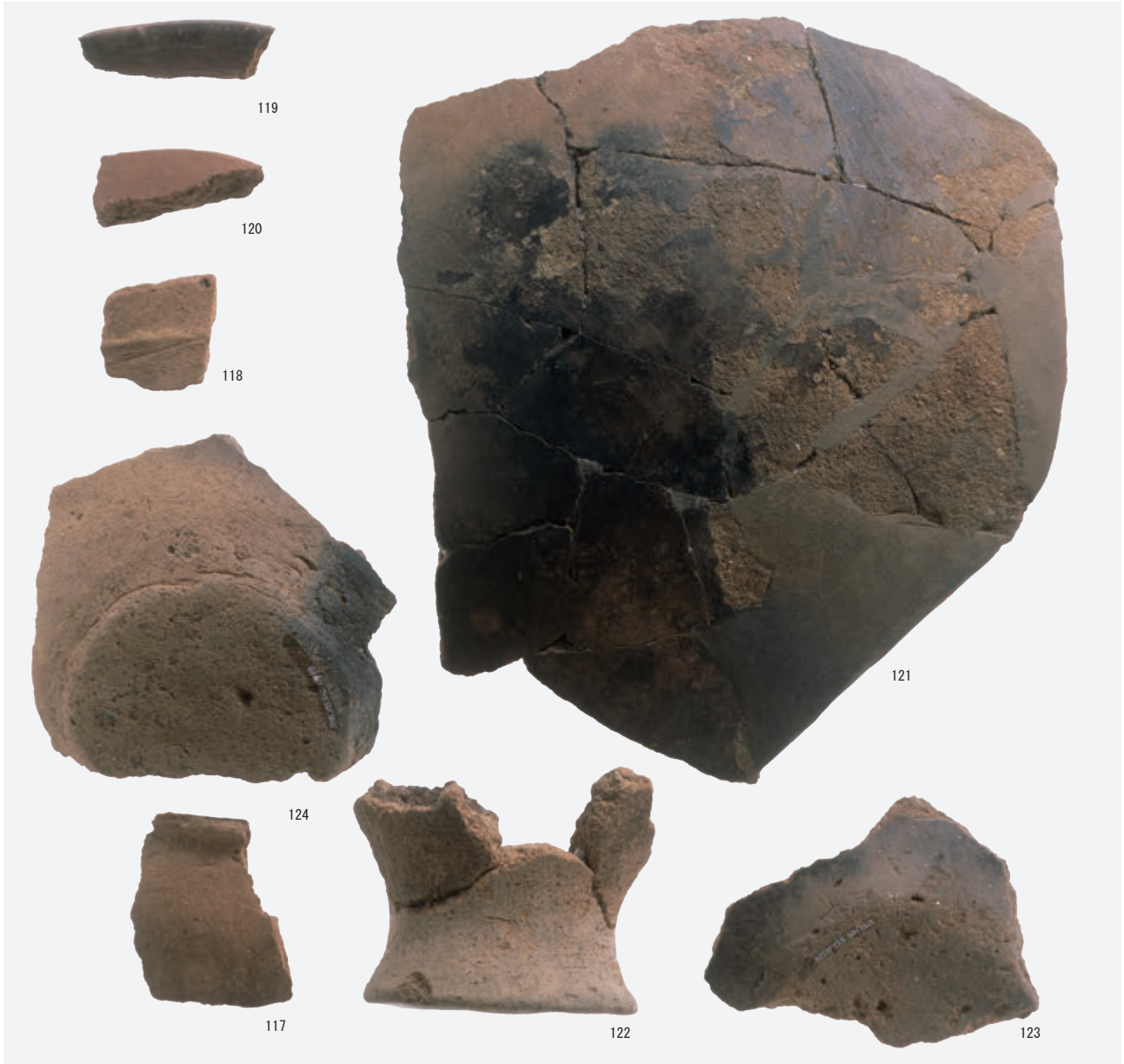
縄文時代後期　石器



縄文時代晩期　土器

図版54





弥生時代　遺構内遺物（1）（上：竪穴住居跡１，下：竪穴住居跡２）



弥生時代　遺構内遺物 (2)

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(198)
主要地方道志布志福山線（有明志布志道路）道路改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

下 原 遺 跡

発行年月日　2019年３月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811

印　刷　株式会社　国分新生社印刷
〒899-4301　鹿児島県霧島市国分重久620-1
TEL 0995-45-4880　FAX 0995-45-6979